

# ソルジャーアート・オンライン

織姫ミグル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自称ソルジャーのクラウドは、突如やってきた神羅の使いによって依頼を頼まれる。

依頼を引き受け、仮想空間に飛び込むクラウドだったが

.....

目次

第2章	A L O 編	第22章	第21章	第20章	第19章	第18章	第17章	第16章	第15章	第14章	第13章	第12章	第11章	第10章	第9章	第8章	第7章	第6章	第5章	第4章	第3章	第2章	第1章	
	第1章																							
438	421	395	384	364	349	331	308	282	262	242	222	207	184	161	138	110	90	64	56	31	15	8	1	

第2章	GGO編	第24章	第23章	第22章	第21章	第20章	第19章	第18章	第17章	第16章	第15章	第14章	第13章	第12章	第11章	第10章	第9章	第8章	番外編	第7章	第6章	第5章	第4章	第3章
937	925	888	866	846	827	815	798	773	752	726	705	685	670	648	631	600	583	570	552	536	518	500	483	455

第5章  
第4章  
第3章

970 961 949

## 第1章

解析結果を説明させていただきます。

つい最近、想定以上の反応をミッドガルネットワークから検知。解析の結果、仮想空間に未知の空間が発生した模様。神羅の独自の解析機器でも踏み込むことが不可能な領域であるため、これ以上の解析結果は出ません。これにより、極めて危険なものであると判断します。未知の障害はミッドガル全体にどのような影響が出るか現段階では不明。危険度の高い障害であるが故に全てのシステムがやられてしまう可能性が生じます。調査のために、二年前に設計した携帯型のVRバトルシミュレーターにて誰かを仮想空間にて調査に向かわせることを推奨。

なお、極めて危険な調査になる可能性を考慮し、精神力が極めて高いものを向かわせることを推奨。

なお、この障害が第三者によるもののかは判明しておりません。

なお、こちらが候補に挙げるのは一名のみ。

未知の障害がなんなのかわからない以上、ダイブしたものの精神がやられる可能性は否定できません。

いざという時に備え、長期プロジェクトとして登録し、そして交戦準備を怠らないようお願いいたします。

◇◇◇◇◇

「クラウドさん!!」

「？」

少年の姿は大きく変わらない。

だが、会うのは久しぶりだ。

名前はチャドリーという。金と茶色が混じったような、色の強い金髪。白い肌の奥には、脈ではなく電極線の青色が浮いていた。全体的

に華奢な印象で、見た目は若い。眼鏡をかけ、白衣を着て、独特な口調で子供らしさを感じさせない喋り方が特徴的だった。

今、その少年が二年ぶりに、自称ソルジャー様の前に現れた。

「お久しぶりですクラウドさん！」

「チャドリー？」

左右非対称の服装に、腰にあるあらゆる武器。

そして明らかに目立つ金髪のチョコボ頭ではなくツンツン頭をした青年。

クラウド・ストライフの前に、9歳くらいの少年の姿をした懐かしい奴が現れた。

そんなクラウドの前に現れたチャドリーはにつこりとしながら話しかけてくる。

「あれから随分と日が経ちますが、お変わりないようで何よりです」

「ああ、お前も変わってないな」

「皮肉を検知。ですが僕は前に説明した通りサイボーグですので仕方がありません」

「で、俺に何の用だ？」

「クラウドさんから少々不満げな感情を検知。僕がこうして現れたことに不可解さがあると見受けられます」

当たり前だ。

今の今まで神羅とミッドガルが崩壊してからというもの、行方がわからなくなっていた存在が、何故よりもよって向こうから顔を出す？

クラウドはいくつかの可能性を考え、その中から一番合理的なものを選んだ。

「ルーフアウスか？」

「さすがはクラウドさんです！ 自ら依頼主を当てるとは話が早いです！」

チャドリーは首を縦に振った。

「明確な意思表示をしているくせに、その動きがプログラムされているものなのか、それとも本当にあのマッドサイエンティストが作成したAIなのか全く掴めない。」

「」

クラウドはわずかに黙り、自分が口にした可能性をなかったことにしたかった。

しかし。

「その代理人がそうだと言ってしまったている。だが、だとしても何の用なのだろうか。何故このタイミングであいつが残したものが現れるのだろうか。」

「あなたにしか頼めないからです」

「何も言っていないぞ」

「顔色ひとつで何を考えているのか、僕には簡単に解析できます。僕に嘘といったものは通用しないので、よく取り調べに呼ばれたりすることもありません」

「」

「話を戻します。あなたに一定の価値を認め、何でも屋としてのクラウドさんに依頼をお願いしにやって来ました」

チャドリーはそう言った。

「まるでクラウドの裏仕事を始めから知っているかのような気軽さで。」

「俺は今デリバリーサービスという宅配の仕事しかやっていないぞ。」



依頼を頼むなら他のやつどこに行け」

「しかし、これはクラウドさんにしか頼めません。かつて、『英雄』と呼ばれた彼を唯一打ち負かしたあなたにしか」

「まともでない。」

「しかし何かを隠しているような素振りもない。」

「他のやつどこに行かなかったのは、クラウド以外には価値を見出せなかったからか。それとも、いまの発言の中にある機密ワードが関わっているというのか。」

「」

「どうするか。」

「クラウドは僅かに眉を上げる。」

「するとチャドリーがこっちの都合なんて御構い無しに勝手に話し始める。」

「今回の依頼内容は、調査です。つい最近ネット障害が起きているのをご存知ですか？ 携帯が通じづらくなっているはず。その原因を調査した結果、神羅が開発したネットワークに未知の仮想空間が発生したという事が判明しました」

「ネットに空間？」

「疑問を検知。確かに、意味不明な表現です。ですが言葉通り、ネットワークに穴が空いてしまっております。譬えると、前にマテリア開発の際にクラウドさんに協力していただいたVRバトルシミュレータ、あれみたいなものだと言明します」

「ああ、あれか」

「あれに似た。いえ、あれとは比べ物にならないくらいの膨大なデータで構築された仮想空間が、ネットワークに紛れ込んでしまっているのです。故に、プログラムにバグが起き、障害が生じています」

「それで、俺はどうして欲しいんだ？」

「そこにVRバトルシミュレータのシステムを応用し、空間をつなげることで意識をその空間に転送させ、何が起きているのかの調査を依頼したいのです」

「機械的な話し方でありながらも、洒落や冗談といった感じで言っているように見えなかった。」

「何故俺なんだ？」

「クラウドさんは、あの『英雄』を倒した実績があります。そして、貴方はこの星を救ったという救世主でもあります。その功績は大きいです。故に、貴方に白羽の矢が立ちました」

「」

「何より、今回の依頼にはその『英雄』の残留物が関わっている可能性があります」

「あいつはもう死んだんだ。その証拠は？」

「その空間から、『彼』の意識と思われるものを検知致しました。神羅が所有するソルジャーのデータと一致したので、可能性は高いと思われれます」

「何とも荒唐無稽な話だったが、クラウドは笑い飛ばせなかった。むしろ。」

「仮想空間をただ調査しろと言われた方が何倍もマシだった。」

「とはいえ、まだ可能性の段階ですので正確かは判断しかねますがどうでしょうか？」

「チャドリーは言った。」

「興味本位で貴方に近づいたわけではありません。何より、貴方を選んだのは社長でもありません、僕の独断で貴方に頼みに来ました。数々の候補の中から、貴方が適任だと思ったからです」

「!」

「真偽もまだわかっておりませんが、“彼”のデータがその空間から検出された以上見過ごすわけにはいきません。僕も引き続き解析を進めますが、僕一人では到底不可能です。どうかご協力をお願い致します」

その言葉に、クラウドは揺らいだ。

なんてご都合的な展開だ。説明不足な上に情報が全くない。そんな状況でわけもわからぬ空間に足を運べというのか。

はつきり言って話にならない。

しかし、読めない。

何かの歯車を取り除かれたせいで、普段の思考が一切回らない。“あいつ”の単語が出てから常に引っかけかかって思考が止められてしまう。そんな感じだった。

動かないクラウドに、チャドリ―はさらに言う。

「そして、貴方に頼むのはもう一つの理由があります」

「？」

「今回の件で検知された空間には、大量の人間のデータを検出しました。その人たちの数は約一万人ほど。そのうちの何人かが急に消えてしまったんです。まるで命が燃え尽きたかのように」

自分たちの問題のくせにまるで、そいつらを救いたくないか？ と  
言いたげだった。

「僕自身、イレギュラーな現象が発生するたびに、それをリカバリーするためにどんな場所でも赴く覚悟でいますが、今回は僕一人では不可能です。小さな亀裂は少しずつ広がり始めています。このままでは、僕たちが予想もしない事態が発生するかもしれません」

嫌な予感がする。

聞いてはいけない気がする。

しかし、チャドリーは続ける。

まるで、そうなること事態ありえないのに、

「あらゆる機械には『魔睨』が使用されていました。それはネットワークも例外ではありません。新しいネットワークを開発するまでは旧式を現在使用しておりますが、正直僕自身もあり得ないと思っておりますし、どう考えても納得がいきませんが、ネットワーク構築にも魔睨が使われており、それが原因でライフストリームに溶け込んだ彼の意識がそこに紛れ込んでしまったとしたら」

その単語でもう十分だった。

馬鹿馬鹿しいが危険因子によって全ての優先事項が塗り替えられ、クラウドの行動は決定した。

## 第2章

夜明け前のひと時。

ティファが何故目を覚ましたのかは本人にもわからなかった。彼女は優れたバーテンダーであり、格闘家でもある。その訓練の成果は人の気配を掴むことにも長けている。電気もつけずに寝室を抜けると、店の入り口が不自然に開いていた。

警戒し部屋中を調べると、わかった事は二つ。

彼が帰って来た事。そして、もういなくなっていた事。ティファの顔色が変わるが、そこで彼女は新たな痕跡を見つける。

小さなメモ。

急ぎで書いたため、文字は不安定な線で書かれた短い文章。ティファは誰が書いたのかすぐに思い当たった。文章の詳しい意味まで探ろうだなんて思わなかった。

端的に説明すると、そこにはこう書かれていた。

しばらく旅に出る、と



『管理権限、掌握』

『アバターセット、完了』

『フルダイブまで  
1  
2  
3』

『クリア、リンクスタート』

◇◇◇◇◇

閉じた瞼を透かして届いた朧な光がきつと消えた。

視神経からの入力がキャンセルされ、真の暗闇が包みこんでくる。視界には何も確保されない。だが徐々に目の前が鮮やかに弾け、現れたロゴは忙しなく形を変え始める。

視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚。

脳から送られる感覚は全て身体からネットワークに流れ、あらゆる次元が重なって行く。意識はすでに体を離れ、未知の空間へと侵入して行く。各種の感覚テストが一つ一つ実施されOKマーク増えいき、全てがオンラインになったことを表すかのように、目の前を光が包んだ。

フォーカスの遠近が揺らぎ、ようやく景色に近いものが脳に投影される。

( )

ここはどこなのか、クラウドにはわからなかった。

あるいは、その視覚情報を脳というか機械が処理できていないのか。目に映った光景よりも、鼻や肌と言った表面的な感覚の方がしつくりと来た。

と、その時だった。

ザザツ

耳につんざく様なノイズに顔を顰め、耳を押さえる。すると空間に綻びが生じた。

0と1で構成されていた空間が別のものに変化して行く。

一言で言えば、“教会”。

ボロボロに崩れた教会は、見覚えがあった。

ここは

部屋の照明などではなく、うつすらと蝋燭が明かりを灯しているだけであつた。

そんな暗がりの中を見渡すと、誰かの気配があつた。クラウドは思わず振り返つた。

振り返つて、そこで名を呟いた。

「h n b o i d r 天 i k w ?」

(!?)

自分の放つた言葉がブレた。

眉をひそめるクラウドだったが、言葉を発したことに違和感を抱いて怪訝そうに喉に手をやり、声の調子を確認める。

するとそいつは、そんなクラウドを見て、

「ふむ まさか、この世界に自ら入ってくる者が現れるとは驚いたが、

『意味』を表現できないのか」

「!？」

「興味深い。意外な展開に私も驚いているよ」

喜怒哀楽どれを抱いているのかわからない。

いやむしろ、全ての感情を合わせた結果、あんなつたのかもしれない。謎のローブには顔がなく脚もない。

まるで幽霊の様に浮遊し、手には手袋を嵌めているが、手首がなく、まるで透明人間が服を着た様な奇妙な姿だった。

「それについてはこちらでなんとかするとしよう、君の優秀なアドバ

「イザーに代わってバグを修正してやる」

謎のローブは淡々と語っているが、その口調や声の強弱からクラウドという存在に驚いている様だ。

クラウドからすれば違和感だらけだ。人の形をしたものが、人の言葉を放つことに、これほどまで違和感を覚えた事はない。

「だが、すまないが君を参加させるためには外部からの通信は遮断させてもらうよ。この世界を、より良くするためにね」

「!？」

「抵抗しようとしても無駄だ。君は今アバター設定中の身であり、動かせるのは必要なコマンドを入力する為だけのものだ。それに君はまだ正式サービスのチュートリアル中だ。残念ながらイベントが終了しなければ、自由に動くことは出来ない」

それは告げる。

「何より、関係のないものの参加を許可することなど本来あつてはならないんだ。君はどうやら、正式にこのソフトを購入したわけではな

いようだからね」

「d h g d e u d 何 j i i o o f o p f y g s し j e g !？」  
「バグがひどいな、異物が混入した結果か。まあ、修正すればいいだけだ。それよりも君に一つ問いたい。君は何故、いやそもそもどこからこの『ソードアート・オンライン』にログインした？ 君から『ナヴギア』の反応が検知されないんだが、どうやってここに侵入したと言つても話せないのでは意味がないな。そのことについてはまた別の機会に取っておくでしょう」

「!？」

「何より君の存在が、この世界をより良くしてくれそうだ。アバターのデータだけはいじらないことにしよう。本当の君といつか話すためにね」





敵対行動のきつかけにもなる発言。

今わかった、こいつは敵だ。そして、おそらく今回の騒動の元凶。ここで死ねば現実でも死ぬという単語が妙に引つかかるが、嘘を言っている雰囲気ではない。

クラウドは行動の指針を選択し、改めて目の前のやつを正面から睨みつける。

「では最後に、私からの些細なプレゼントだ。受け取り給え」  
「？」

目の前に野球ボール程の光の球体が現れ、それを手に取ると球体の光が飛び散り、中から「手鏡」が現れた。

手鏡には、いつもの自分が写っている。

これがどうしたと問おうとした瞬間、クラウドの全身を白い光が包み込んだ。ほんの二、三秒、その短時間で光は消え、何が起こったのかと思ふと手鏡に視線送る。

そこにあつたのは、『二年前の自分』。

元ソルジャーだと認識していた頃の姿。『Ist』のソルジャー服に身を包み、背中には尊敬できる親友から受け継いだあの『バスターソード』があつた。

「なるほど、それが君の本当の姿か」

「！」

「プレイヤー名《cloud》ふむ、いい名だ」

するとそいつは、まるで矮小で浅ましい人間の精神を追い詰めることこそが、この世界で唯一楽しめる娯楽であるかのようにニッコリと笑みを見せ、最後にこう言った。

「それではこの世界を存分に楽しんでくれ。勇敢に挑み、そして君が  
この世界に何をもたらすのか、最終目標であるこの城の頂きへ辿り着  
く事ができるのか、期待している。健闘を祈るよ。クラウド。君」

### 第3章

鉄と石で作られた城。

この城の名前などはどうでもいい、ここはただの作られた世界だ。面積などもどうでもいい、広いとでも言えば説明はつく。外周は高い壁で覆われており、このような茫漠とした広さのフロアが何階層のも積み重なっており、百層ほどあるという。人口と言っているのかわからないが、ここには一万近くの間人たちがいたらしい。

住んでいたと表現しないのは、それは彼らがこの住人ではないからだ。

彼らは別の世界の住人だ。ここはコンピュータによって作られた電脳世界であり、ただの空想の世界だ。彼らはそこにVR機器を使って意識をここに転送し、作られた体でここに留まっている。

そのVR機器の名が、『ナーヴギア』。

この世界にやってくるための必須アイテム。形はVRバトルシミュレータよりも大きく、頭から顔まですっぽりと覆うヘッドギアに近い構造をしている。彼らにとってはそれはゲームハード。この世界、というよりは彼らの本当の世界では最新機器らしい。前時代では平面のモニタ装置と、手で握るコントローラーという二つのマンマシン・インターフェースを必要とした旧ハードであったが、そのナーヴギアはインターフェース一つのみ。VRバトルシミュレータよりも大きい故に、その内側には無数の信号素子が埋め込まれ、それらが発生させる多重電界によってギアは人間たちの脳そのものと直接接続し、電脳世界に脳の視覚野や聴覚野などといった五感を感じることが出来る。首の部分から神経の電気信号を遮断し読み取って、機械側から電機子号を脳に与えることで人間たちはこの世界にやって来れる。

【SAO】と呼ばれるソフト同梱版で12万ほどする高値であるが、それでもなお発売当時多くのゲームファンが殺到するほどこの世界では人気であった。

だが同時に、この世界ではその機械が足枷になる。

延髄付近で肉体から脳への神経パルスをブロックするとともに、ナーヴギアが作り出した五感情報を電磁パルスによって脳へと送り込むことで仮想世界へのフルダイブを行う故に、定格以上の電磁パルスを流し込めば、人間の脳は焼かれてしまう。

本来はそんなことは起きないのだが、ここではそれが許されてしまう。この世界を設定した、『茅場晶彦』という設計者はこの世界をリリースした直後、どういうわけかこの世界にゲームプレイヤーを閉じ込め、クリアするまで永久に出られないようにした。

ログアウトしようにもログアウトするための機能は権限者によって機能しなくなり、ナーヴギアを第三者によって外してのログアウトも不可能になった。ナーヴギアのヘッドギアは顎下で固定アームでロックして装着されるため、外すにはロックを解除しなければならなくなる。

故にそのロックを解除した瞬間、不正に解除されたということでも破壊されてしまい、暴走したナーヴギアは制御不能になり高出力の電磁パルスを発生させることで着用者の脳を破壊し殺害する設計にされていた。電源の切断を想定して大容量のバッテリーが搭載されているために電磁波の発振の阻止はきわめて困難であるとのこと。

外部からナーヴギアを外す、回線または電源切断から一定時間経過、そしてゲーム内でアバターのHPが全損した場合、その条件は満たされてナーヴギア使用者の脳は破壊される。

つまり、ここは娯楽のために作られた世界から、死と隣り合わせのデスゲームと化してしまった。

内部にはいくつかの都市と多くの街や村に森や海などのフィールドが存在する。その全てのフィールドに、命を刈り取るための怪物どもがうろついている。一応安全地帯もあるようだが、その外に出れば即デスゲームは始まる。

そんなふざけたゲームを終わらせるには、このゲームの最終目標である『城の頂上を目指す』こと。それによってゲームはクリアされ、皆

はここから解放される。何層もあるフィールドを突破して上へ上へと登ればいいだけという簡単なルールだが、このゲーム自体が簡単に作られていない。

突破するには迷宮区画に存在するフィールドのボスを倒さなければならぬが、そのボスがハードに作られている。まず、攻略法がわからない上に、たった一人では倒せないレベルに作られている。一撃一撃が重く、何より体力がバカ高い。故に、多くのチームを結成して挑むように作られているとのこと。

一度突破して上層にたどり着けばそこ下層の格フロアを繋ぐ『転移門』が連結されるため誰もが自由に移動できるようになるが、あいにくまだここは一階層。まだ始まったばかりのようであった。

敵は慣れれば簡単に倒せるようになるが、死という恐怖によって皆挑むことを恐れてしまっている。ダメージは偽物だが、この世界では本物となる。ダメージを受け続け、自分のHPがゼロになれば確実に死がやってくる、まさに死にゲーである。

最前線が進むにつれて危険度は上がり、死も近くなる。それがこのゲームのシステム。

「理解できたか？」

「」

情報収集は基本ではあるが、その情報が許容範囲を越えれば誰でもオーバーヒートする。脳を焼かれてはいないが、感覚的には脳が黒焦げしている気分だ。

「しかし、流石のオネーサンもびつくりしたヨ。まだ一階層どころか誰も次の街に行っていないのに、始まりの街の真ん中にある転移門からいきなり人が現れるんだもんナ」

目の前にいる、なんというかネズミをイメージしたような女性がそう告げる。

そう、ここに来た時は大変であった。  
あの時のことは思い出したいくない。まるで、「救世主」がやってきたみたいに思われた時のことを。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「！」

クラウドはそこで目を覚ました。

自分が一体どこにいるのか、前後の記憶を把握できない状態のままが続く。

青の輝きが身を包んでいたが次第に薄れ、風景が夕暮れの大きな広間に変わった。

広大な石畳に、周囲を囲む街路樹。瀟洒な街並みにどこか故郷のニブルヘイムを思い起こされる。ニブルヘイムを大きく発展させた感じだろうか、もう少し故郷の土地が広げればきつとこんな形になっていただろう。

見慣れたような風景ではあるものの、見覚えはない。ここは具体的にどこなのか分からないが、住宅街にある大通りなのだろうか。自分が立っているのはその中心にある石でできた舞台のような場所。周りを見渡すと、色とりどりの装備を着た男女・といっても圧倒的に男性の比率が多く、皆酷い表情であり、困惑し立ち尽くしたり、膝を抱えてその場に蹲ったりしている。

「チャドリー？」

耳に指を当てて今回の事件のサポート役であるチャドリーに連絡を取ってみる。

が、返答なし。

何度も呼びかけるも、チャドリーの声は聞こえてこない。

何人もの人々が膝を崩して散らばる中、どうも異様な雰囲気は鼻に

つく。

頭上を見て絶望するもの、泣き崩れるもの、奇行に走っているもの、中々カオスな状況だった。

こんな混乱状態の中でただ一人放り出されたクラウドはマジで不安でいっぱいだった。

はつきりしない。自信が持てない。

壊れたものたちがいる中にただ一人だけポツンといる、この状況だって現実味がない。さっきまでのあのロープの話と、今ここにいる自分。一体どつちが現実なのかと尋ねられたら何も答えられない。

(ここがチャドリーの言っていた空間なのか?)

どちらにせよ、単独行動を強いられてしまった以上、調査どころの話ではない。前後の記憶が曖昧で、これでは戦果を得ることなど期待できない。

と、その時だった。

「お、おいっ!!」

「あいつ、今あそこから出て来たよな?」

「まだ誰も他の転移門を見つけてないよな?」

「ということは、外部のやつか? ニュースで大事になってるのは明らかなのに、自らログインして来たってことか?」

「じ、じゃあ助けが来たってことなのか!」

「そ、そうだ! きつとそうに違いない!! 救援者だ、救援者が送り込まれて来たんだ!!」

クラウドの顔に、嫌な汗が浮かぶ。

一人の男性がこちらを向いた瞬間、皆がこちらを見て来た。恐る恐るといった感じで誰なのか皆憶測を立てると、まともに考えられないのか一人がクラウドを外部から救援のために送り込まれて来たのだ



という憶測を立てると連鎖的に皆がクラウドのことを外部からの救援者だと勘違いして、全員が一斉にこちらに押し寄せて来た。

「なああんた！ 救援に来たんだろ!? そうなんだろ!？」

「た、頼む!! 俺を帰してくれ!! ここから出してくれえ!!」

「俺には家族が、家族がいるんだ!!」

「こんなところで死にたくない!! お願い！ 家に帰して!!」  
(!?)

理解が追いつかなかった。

まるで泣きついてくる子供のように、クラウドに迫って来た。状況が読み込めないクラウドはどういうことなのかわかっていない。なぜ皆自分を救援者だのと思ったのかさえも理解できなかった。

疑問なんて考える余地もない。  
なのに。

このままでは安易な方向に流れてしまう事に、クラウドは猛烈な拒否感情を抱く。そうなることを恐れたクラウドがとった行動は単純だった。

救いの手を求めてくる手を振り払い、この混沌に満ちた包囲網を突破する事にした。

「おい待ってくれ!! どこに行くんだ!？」

「頼む家に帰してくれ!!」

「死にたくない!! 死にたくないのツ!!」

得体の知れない奴らから転げ回るように逃げ、人混みをかき分けて外へ飛び出す。どうやらここは大広間らしいのだが、正確な位置はやっぱり分からない。

ほうほうのていで包囲網を突破するものの、彼らはクラウドの後を追いかけてくる。もしくは包囲網に参加せずにクラウドの前に偶然いた人から救いを求められ、さらに逃げては救いを求められ、さらに

さらに逃げては救いをと、いったことを繰り返すも、ソルジャーとしての身体能力は仮想空間でも健在のようで、簡単に抜けることができる。

彼らに事情を説明している暇はない。

こうしている今も、*「あいつ」*の手がかりが失われるかもしれないのだ。その手がかりすら何も掴めていない状況だ。なんのヒントもないクラウドに彼らを救うことなど不可能。

時には身を隠してやり過ぎたりなどをするが、表通りを走り回ってこちらを見つかけようと必死になっている。クラウドは近くの路地に身を隠し、壁を押し付けて様子を窺っていた。

ついでに言うと、クラウドはこう見えてコミュ障だ。故に、こんなにも注目を浴びて今追いかけられるなんて経験はそんなにない。まだ、神羅兵に追われている方が何かと緊張が吹っ切れてマシな気がして来た。つまり何が言いたいのかと言うと、ちよつと泣きそうだった。

「なんで繋がらないっ!？」

クラウドは頭が痛くなるほど指を頭に押し付ける。

人差し指を何度も押し当てて声をかけるが、こんな悲惨すぎる状況の中に放り込んだチャドリーはいつまで経っても出てくれない。

「くっ!」

そもそも、クラウドはここのことなど何一つ知らない。

そこで何を調査すればいいのか、何をすればいいのか、と言うかそもそもとして一体どこがどういふところなのか一切わかっていない。これで、調査をしろと言われても、ましてや助けを求められても限界がある。

搜索範囲もわからない。原因を突き止めるためのやり方もわからない。

諦めて帰ろうにも帰る事もできない。帰り方がわからない上に、現在追いかけてられている。人目を忍んで慎重に移動する必要はあるが、何故そんな配慮をしなくてはならないのか。

面倒事に巻き込まれた。正確には引き受けたのだが、こんな事になるなら断っておけばよかった。

“あいつ”を永遠に消すなんて馬鹿なことを考えなければよかった。

ともかく、とにかく捕まらないことが大前提。あとはとにかく手がかりになりそうなものを探して回る、というのが基本的な方針となりそうだ。

(何をやるにしても、まずはこの地図か。ここがどこなのかわからない以上、指針も決められないな)

とはいえ下手に動けない。

物陰から出れば冷静さが欠如した奴らと鉢合わせして救いを求められる。

しかし、こんなところでいつまでも足を止められているわけにはいかない。

ので、クラウドは決断する。捕まるわけにはいかない以上、家の上を狙うしかない。そこなら彼らも追ってはこれまい。その上で、まずは階段に向かう。飛んで登れたら楽だろうが、そんな目立つ動きは避けたい。その上で、まずは登れそうな場所を探す。ならば早いところから動こう。いつまでも同じところには留まらない。

そう思った。

その直後のことだった。

「オイ!!」

「ッ!?!」

まるで行く手を遮るように、クラウドの目の前から声をかけられ

た。

具体的な年齢は知らないが、中学生か？ 背は低く、肌の色はやや白く、金髪にネズミというか猫みたいなきが頬から飛び出ている。なんだか昔話の絵本に出て来そうなやつが、目の前にいる。

しかし、まずい事になった。

見た目は華奢だが、見つかったという事実は覆らない。

ここで騒ぎが起きて足止めされれば、ほかのやつらが大量に押し寄せてくる。

「っ!!」

ゴクリと喉を鳴らす。

このまま強行突破するか、あるいは別のコースを探すか。迷う。

だがそうこうしている間にそいつは近づいてくる。

クラウドは自然と身構えた。尊敬できる親友から受け継いだ『バスターソード』に手を伸ばす。声、あるいは騒音。そういった騒ぎを起こすトリガーが引かれる可能性を考慮して、相手を警戒する。

が、

「ヤメとけ。ここは安全圏だから武器を抜いても相手にダメージは負わせられないゾ」

「？」

その声に、クラウドは猛烈な違和感を覚えた。

声色とか声量から察するに、彼女からは敵意がなかった。まあ、独特なイントネーションに妙な艶がある故に信用できるかは別問題だが。ボイスチェンジャーで無理に子供の声を作っているというか。

だがそいつは、そんな疑問に思っているクラウドに恐れる事なく近寄り、真剣ながらも面白いやつ見つけ！ てな瞳を向けてこう告げた。

「状況がよくわかってないんだロ？ 説明してやりたいがここじゃダメだ。人気のないところで詳しく説明してやるからオネーサンにいてきな！」



「てなわけで、ここがどういふところなのかわかってくれたかな？」

「ああ」

メール文で説明してくれた方が楽に理解できたのにな、というほど話が長くなってしまったが説明するところだ。

ついさつき、このゲームの新事実が、このゲームの作った本人直々に明かされた。

それが、クラウドがああ石舞台に立つほんの数秒前の事だった。このゲームの設計者の説明が終わった直後に現れたので、皆理性を失っていたのでまともには考えられず、クラウドのことが外部からの救援者にしか見えなかったらしい。

クラウドが立っていた場所は他の所にワープするための門だったらしい。転移するための道具はあるものの、最初の方では高価で誰も買う事が出来ないし、そのクラウドが立っていた『転移門』と云うワープポイントだって、このゲームはまだ始まったばかりで転移門がある街になど、たった数時間で辿り着ける筈はない。ならば転移できる者は外からの救援しかない、ここに居る者たちはそんな僅かな可能性に縋る程心が弱っていたようだ。

彼らには悪いが、クラウドだって困っているのだ。

助けて欲しいのはこちらの方だ。右も左も分からないやつに助けを求める事自体がお門違いってもんよ。しかし、彼らがクラウドのことを救世主だのという目で見ているのも無理はないと、目の前の鼠鬣女は言う。

「お前のその装備じや当然だよ。だって明らかに初期装備にしては変わりすぎてるしな。あいつらの目の色が変わるのも無理もないゾ」

だとすると困った事になる。

どこへ行ったって彼はお尋ね者になる。別に悪いことをしたわけではないが、彼らからすればクラウドは二つの姿に捉えられる。

一つは救世主。

絶望の最中にやって来た事によって、外部からの応援として見られて彼らは救いを求めてやってくるだろう。

もう一つは、スパイ。

まだはつきりと明言できるわけではないが、おそらくあの中の何人かはクラウド見て不審に思うもの達が少なからずいるだろう。初期装備が他のみんなと違うというだけではない、彼のログインして来たタイミングもある。説明が終わった直後、クラウドが転移門から出て来た事で、応援と思うものもいれば、スパイだと思うものもいるだろう。

真偽は定かではないが、今頃はもう噂になっているはずだ。クラウドに救いを求めるもの、チーターもしくは内通者として見られて、二つのグループから狙われる可能性が高い。

「だからオネーサンが提示できる案は二つ。このままみんなが冷静さを取り戻し、噂が落ち着くまで身を潜めるか。もしくは、堂々と出て行ってみんなと一緒にフィールド上のモンスターを狩って経験値稼ぎをするかだな」

「」

「あ、隠れるってんならいい場所を紹介するけどどうダ？　ちなみに、ただ身を潜めるのはあんまりオススメしないゾ？」

「？　なんでだ？」

「ここではレベルがものを言うんだ。別に隠れるのは勝手だが、差を埋められた他のプレイヤー達がお前を狙ってくるかもしれないからな。まあ、プレイヤーがプレイヤーを攻撃すればもちろんデメリット

は発生するが、そんなことを気にしないやつだっている。何よりみんな今までもじやない、何してくるかかわからない以上、身を守るためにも隠れながら経験値を稼ぐって方がオススメかな」

「なんか知らないうちに案が一つ増えたナ。どうするかはお前次第だが、状況的に考えれば一番最後のをオススメするかナ。隠れる場所も提供するし、なんならいい経験稼ぎの場所も紹介するゾ」

「どういうつもりだ？」

「ん？」

「何で今日会って間もない奴にそこまでしてくれる？」

その問いに、鼠髭女は一度くるりと眼球を回してから改めてクラウドを見直して、

「簡単なことだヨ。お前のことが気に入ったからだ。いきなり現れた奴がこの先どう活躍するのか、オネーサンは楽しみで仕方なくてナ」

「」

「オレっちはそうだったものには目がなくてナ。価値のある情報は時には武器にもなる、だからお前と関われば何かいい情報が入ってくるかもしれないと思ったから誰よりも先に話しかけたんだ！」

嘘、といったものは感じなかった。

声からしても、純粹にクラウドのことが気になったように思える。まるで舌の上でキャンディを転がすようにいつてくる奴に、クラウドはいよいよ怪訝そうな顔になる。

だが、選択肢は限られている気がする。

どの選択肢を取ってもあまりいい展開にはならないとは思うが、その中でもっとも最善な選択肢を選ぶのがベストだろう。

「わかった、頼む」

「オ！ 信用してくれるのか!？」

「選択肢が限られているから仕方なくだ。俺はここについて何もわかっていない。なら、いいサポートがいれば動きやすくなる」

「なら、オイラとしばらく組むか？ 組むといっても常に一緒に行動するんじやなくて、不定期に情報交換するくらいの仲って感じになると思うけどナ。オレっちも情報収集するために動かないといけないからナ」

「そうか。なんでもいいが、何かわかったら俺にも教えてくれ。情報が武器になるならいろんなことを知っておきたい」

「ああ、言い忘れてたけど情報だってタダじゃないんだよナア？」

「情報が欲しんなら、それ相応の対価が必要となるんだけどナア？」

「いくらだ？」

「ざっと百万コル。なんてのは冗談ダ。流石にビギナーから金を取るような真似はあんましたくないしナ。まだ始まったばかりだし、それについてはツケで払ってくればいいヨ。とりあえず、今日はもう遅いし宿屋まで案内するヨ。明日、ここでの戦い方を教えてやる」

「なんかやけにすんなり話が進んでいる事に、逆に不気味さを感じるクラウドだったが、これもやはり、いちいち突つかかっている場合ではない。

とにかく早く元の世界に帰りたい。今日明日で帰れるなんてそんな甘っちょろい考えは持っていないが、一分一秒でも早く帰りたいという気持ちは変わらない。なんとしてもこの馬鹿げた空間から抜け出す。そのついでに調査をする。そういう過程で進めていけばいいと思った。

なんとかいい指導者も雇えた。

しかし、こいつの正体がわからない。本当に信用してもいいものか、という疑いの目を向けているとその視線を感じ取ったのか、彼女はニヤっと口を歪めて。



「そういえば自己紹介がまだだったよナ。名前はもう見えているとは思うが、口で紹介するヨ」

そうやって自分の頭上に指をさす動作をする。そこには《Argo》と書かれており、被っていたフードを脱いで、元からその性格なのかそれとも作っているのかわからないが、ちよつとお姉さんポジションっぽく上から目線でクラウドの頭上に表示されているプレイヤー名を見た後、優しい調子の声でこう告げた。

「ジョブシステムとかないけど、『情報屋』っていう職業をこれからやる予定の『アルゴ』ダ！ よろしくなクラウド!!」

◇◇◇◇◇◇◇◇

少年は剣を振るう。

現実世界では一度も真剣なんてもったことはないが、仮想の世界では彼は誰よりも一足先に握っていた。

仮想空間で作られた偽物とはいえ、彼は先にこのゲームをプレイしていた。故に、誰よりも剣術には詳しかった。

「せいやっ!!」

己の足元にある地面を爆発的に蹴り上げ、目の前の敵へと突っ込んで行く。

現実世界では本来ありえなかった。ただ地面を蹴っただけで粉塵が舞い上がることなど、それこそ優秀なスポーツ選手しかできない芸当だろう。それを彼は莫大に舞い上げた。あつという間に距離を詰め、イノシシのようなモンスターを鈍色に光る剣尖が突き抜ける。

「はぁ　はぁ」

無理やり息を吸い込んで、肩で息をしているのを見ると、彼は長い時間狩り続けて経験値を得ていたのだと見える。氣息を整えようとするも、この世界では酸素というものはない。ただ単に現実世界の体が意識だけの自分を応援するために呼吸を繰り返しているだけだ。

しかし、それだけでも意味がある。

攻撃に勢いをつけるための喝と言えればよいか。AIで作られた敵を斬殺するために、彼は掛け声と共に剣を斬り払う。

「はあっ!!」

ライトエフェクトを纏った剣はモンスターの腹を抉って血液の代わりに光芒が飛び散る。

「まだ...まだだッ!!」

一体倒しても彼の剣は止まらない。

一体倒せばもう一体の方へ行き、何度も何度もHPを0にして行く。

だが、仮想とはいえ限界はある。

さつきも言ったが、本物の体だって呼吸はする。自分の偽物の体と本物の体では、本物の体が優先される。呼吸がさらに乱れれば、本物の体は休憩しろという信号を意識に送り込む。それにより、偽物の体には『疲れ』という感覚が生じる。それは電脳世界でプログラムされた薬なんかでは治せない。心拍数は限界に近い、ここらが潮時だ。

「はあ...はあ...くそっ!!」

初日でもっと稼ぐはずだったが、もうこれまでだ。

目標まで行かなかった事に腹を立て、思わず舌打ちする。

「諦めないぞ」

誰に向けた言葉だったのかはわからないが、少年は思わず呟く。  
人としての動きの限界を超えることが可能なこの世界で、彼はさらなる力を求める。

覚悟するように呟き、彼はゆっくりと歩き始めた。

歯をくいしばる。

前を見る。

ここで死ぬわけにはいかない。だから、彼はどんな苦難が待ち構えていようと、諦めることはない。

## 第4章

武器というのはこの世界では重要になってくる。

一応武器は支給されたり購入できたりもするが、どれもこれも初期装備よりはそんなに高くはない。10上がった程度だ。

だが最近の噂によれば、このフロアで一番使える武器が手に入るクエストがあるんだとか。最初にそれを入手したのがこのゲームの先行体験者であるβテストの者達。彼らは正式リリース前にこのゲームを遊んでいるため、正式版から始めたプレイヤーよりも詳しい。だから、経験値稼ぎ場所も知ってるし、素材集めの場も知っている。

そんな奴らをよく思わない奴もいるとのこと。

強い武器を誰よりも先に入手し、経験値場所を独占し、素材も独り占めしていると思われたからだ。そのあと正式版プレイヤーたちが後からそれを手にいれるという。確かにそれだけを聞くと皆納得がいかないだろう。強い武器を手に入れて、それで狩場を独占してしまえば誰よりも先に強くなる。そんなの納得がいかない。生きて帰るためにも、みんなで協力したほうがいいというのに。β版プレイヤーが先に突っ走っている。

ただ、こうも思う。

βテストのプレイヤー達は、正式版の者たちを引っ張っている。先に攻略し、どうすればいい武器が手に入るのかや、いい狩場を先に見つけて教えている。初心者が簡単に死なないように、先行プレイヤーが先に毒味をしている感じだろうか。

だから、今はもうその強い武器の入手方法も公表されているし、狩場も共有されている。

今は強い武器を入手するためにみんなそのクエストをやっているのだが、

「相変わらずその装備のまんまなんだな。もったいい装備が欲しいと思わないのか？」

「興味ないね」

見た目は大きく変わらない。でも中身はかなり変わっている。レベルは先行プレイヤーに負けず劣らずの強さまで上り詰め、今では最前線でもついていけるぐらいまで強くなっていた。

ただクラウドは多少居心地の悪さを感じているようだった。理由は、常に隠れていることだろう。彼はいまだにゲーム内で噂になっている。今では大分治まってきたみたいだが、『外部からの救援』というものもあれば、『ゲーム開発者が送り込んできた刺客』などと噂されている。

ただ、その姿のことについては疎らだ。

時には、大柄な男。時には、弱々しそうな少年。時には、女性。などというように、容姿についてはあまりわかっていないみたいである。詳しく見られなかったから性別まで不明というのは少々強引な気もするが。

これでもし、金髪のツンツン頭で大剣背負ってるという具体的な噂が流れていたら即特定されていた。それに比べたらマシだろう。

アルゴは木に背を押し付けているクラウドに言う。

「にしても、お前が今回の攻略について興味を持つなんて驚いたヨ。いきなりフロアボスの特徴と居場所を教えろって言うんだもんナ。でも、だったらなんで攻略会議の場に出席しない？ 個別で情報手に入れようとするなんて、ほかのみんなが聞いたら絶対ブチギレるゾ。もうそんなにお前のことは噂されてないみたいだし、参加しても誰も気にしないと思うガ？ なんか参加したくない理由でもあんの力？」

「別に、ただあまりあいづらと一緒に居たくない。それだけだ」

「良い歳してなに子供みたいなこと言ってるんだヨ。真面目に攻略する気あるの力？」

「前にも言ったが、俺はこれからもソロで行く。仲間なんて作るだけで足枷になる。頼れるにしろ助け合うにしろ、仲間を気遣って失うなんてことはあってはならないからな」

「オイオイ」

「アルゴは呆れたように告げる。」

「現実世界でも一応仲間はいたんだロ？　なのになんでここでは作ろうとしないんだ？　まるで、失うのが怖いみたいな口ぶりだガ。」

「まあ、ここで現実のことを詮索するのはNGだ。そこは聞かないことにするヨ。でも、お前はそれで良いの力？　このままじゃ一生誰とも仲良くできないと思うけど、ここではソロでやるのも限度がある。このフロアボスだって一人で倒せるように設定されていない。登れば登るほど敵も強くなって、最終階層なんて全プレイヤーが挑んでも勝てるかわからないほどなんだゾ？」

「ああ、わかってる」

「ま、とりあえず金はもらったんだ。情報は渡すヨ」

すると、アルゴは手帳をパラパラとめくり、

「今日の昼にツールバーナで攻略会議が開催されたばっかだからまだ一般にはそこまで公表されていないけど、場所は——」

それを聞きながらクラウドは調子が狂ったように空を眺めていた。

こんな綺麗な夜空でも、所詮偽物。自分はもう偽物なんかでは満足しない。本当の自分で本当の世界を生きる。そう決めたのだ。口下手な自分、精神面が弱い自分、それらすべてを受け入れて生きようと思った矢先に偽物の世界に閉じ込められるなんてふざけてやがる。

そう言うのはもううんざりだ。

調査だとか、依頼だとかそういうのはもう今は後回しだ。このクソみたいなゲームを攻略していけばそのうち元凶も現れ、そしてお目当のやつもきつとあっちから姿を現す。追いかけるんじゃない、ただ待っているのだ。姿を現すその時を。

その思いを胸に抱き、アルゴの情報を聞いていた。

「——で、ここまでが現段階でわかっていることだ」  
「そうか」

「一応言っておくが、一人で挑もうなんて馬鹿げたこと考えるなヨ？  
このボスはβ版と同じボスだが、正式版で何か変更されている可能性がある。β版と同じであるとは限らない以上、この情報だってあてにならないんだからナ？」

「わかってる」

クラウドは即答する。

しかしそこには何の説得力もなかった。真面目くさった顔で答えているクラウドの顔を見て、アルゴは思わず笑ってしまった。

「そっか、わかってきているならオネーサンは安心だな」

アルゴは笑みを崩さずに言う。

「本音としちや、帰りたいていうよりみんなの安否が気になるって感じか？ 素直なところ、お前は顔も本当の名前も知らないヤツのために戦える人間なんだナ」

「何の話だ？」

「いやいや別に何でもないヨ。ただ心温まるボランティア精神たつぷりのシーンをぶち壊すようで悪いんだが、もう一度言っておくゾ。一人で挑もうなんて馬鹿な真似するなヨ？ そして、絶対に死に急ぐような真似だけはするナ」

先程とは打って変わって真剣な表情になる。

割と冗談抜きでの声色にクラウドも数秒黙るが、顔色一つ変えずにいつもと変わらないように、ただ「ああ」と簡単な返事だけをし、その場を去って行った。

もうすぐ夜明けだ。宿屋に戻って次の狩に備えなければならない時間。

だが彼の行き先は別の場所。

史上最強と言われた英雄を打ち破った彼に怖いものなんかなかった。設定をも凌駕する異物は異物のアバターを借りて、今度も顔も知らないヤツのためにもう一度立ち上がる。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

もう何回ここで昼を経験したんだろうか。時を遡ったとしても、この違和感は拭えない。

早いものでもう一ヶ月。

だが、この一ヶ月で二千人ものプレイヤーが死んだ。

この世界から本当に出られないとようやく理解したプレイヤーたちは絶望し、奇行に走るものたちが最初に死んだ。彼らは理解してしまつたが故に、自我を失つてしまつた。

嘘だ、ただの夢だなどのほざく者は身を投げ出して自害したりした。死ねば現実でも死ぬなんて信用していかないものも身を投げて口グアウトしようと試みた。彼らからすれば、これはただの悪い夢。ゲームオーバーになればログアウトされて家族と感動の対面ができるなんて思つたんだろう。漫画や映画みたいに、実はゲームオーバーになつても死ぬことはありませんでしたなんて展開を想像していただろう。

死んだものがどうなつたかは、ここにいる住民たちには知る由もない。死ねばわかるが、わざわざ自ら身を滅ぼすなんて真似誰がしたがる？ それなら普通に攻略した方がいい。それが、現段階で一番最適な考えだと言えるだろう。

それに、結局外部からの問題解決はなかった。いや、それらしいものはあつた。少年はその場にいたわけではないので知らないが、少年がそこから去つた後広場ではある変化があつた。



GMの説明後、転移門に一人のプレイヤーがこの地に降り立ったらしい。

姿はもちろん知らないし、何で閉じ込められると既にニュースで報道されているにも関わらずログインしてきたのかも知らない。目的がわからない以上、彼はそいつのことを救援者とは受け取らなかった。スパイである可能性の方に一票。

そもそも、もう警察や政府などといったお偉いさん方がログインしないように呼びかけている中で、ログインしてくるなんておかしいと思えない。救援者だとしても、初心者がどうやって救うというんだ？

チートを使って攻略する？ そんなのこのゲームの開発者である「あいつ」が許すはずもない。となれば、別の目的があると考えるのが妥当だろう。それが何なのかわからない以上、そしてどんなヤツなのかわからない以上、軽々とは信用できない。

ともあれ、今は目の前の攻略に集中だ。

今いるのは四十四人。それが今回の攻略に集ったプレイヤーの総数だった。

少々少ない、というのが素直な感想。しかし、これでも多い方なのかもしれない。デスゲームに参加させられて前向きに攻略しようなんて考える輩はおそらく全体の三割程度。全滅する可能性だってあるのに、勇敢に挑む奴は少ないだろう。しかも、ほとんどが男性だ。見たところでは女性プレイヤーは、広場の反対側にいる『鼠のアルゴ』だけだった。しかし彼女は参加はしないだろう。情報屋としてのネタ探し、そんなところか。

しかし、ここにいるのだろうか？ 姿は知らないが、その命知らずのログインプレイヤーはここに参加しているのだろうか。皆騒いでいないことから恐らくは参加していないのだと思われるが、もし本当に救援に来たのなら参加するはずだが、やはりそいつは開発者側の人間か？

と考えていたが、パン、パンと手を叩く音と共に、よく通る叫び声

が広場に響き渡る。

「はーい!! それじゃあそろそろ始めさせてもらいまーす!!」

ここ一帯を集中させるような掛け声。長身の各所には強化を怠っていない装備を身につけ、片手剣使いの男性だった。現実世界ではあり得ないが、鮮やかな青に染められた髪が特徴的だった。おそらく髪染めアイテムを使ったんだろうが、まだここではそれは購入することはできない。となれば、ドロップアイテムで染めたと考えられる。つまり、それだけモンスターとは戦って来ていると見える。

手練れのように見せるための演出か、それとも単なるファッションかはわからないが、少なくとも簡単に死ぬようなやつではなさそうだ。

そんな男性が爽やかな笑顔を浮かべると、360度全方向に聞こえるように全反射する声で言った。

「今日は俺の呼びかけに応じてくれてありがとう! じゃあまずは簡単な自己紹介から。俺の名は『ディアベル』、職業は気持ち的にナイトやってます!」

彼のその言葉に、広場にいる一団がどっと吹き出し、

「ははははっ! ジョブシステムなんてねーだろー!」

「本当は勇者って言いてーんだろー!」

「いいぞいいぞー!!」

などという明るい声が交錯した。

ディアベルの放った冗談は煮詰まった空気をすぐに変え、口笛や拍手で彼を称えている。

職なんてものはないので、どんな職名を名乗ろうとそれは個人の自由だ。だが、彼のその堂々たる姿はまさにナイトと言っていないだろ

う。

(確かに、彼ならこの場を引っ張るにはふさわしいな)

少年は脳内で彼のことを思い出していた。

接点は一切ないが、少年は一方的に彼のことを知っている。彼は街中でも呼びかけたり、他のプレイヤーに支援物資を配ったりなどしていたはずだ。そんな彼が今回の指揮をとる。その役割にぴったりであり、少年も異論はなかった。

将来、彼がこのゲームのクリアに導いた者として称えられるのかもしれないなどと少年は考えた。

「さて、こうして最前線で活躍しているトッププレイヤー諸君には集まってくれたことに感謝する。そして、もう言わずもがなわかっているとは思いますが、今日集まってもらったのは他でもない——」

彼の演説は先ほどとは打って変わって真剣になる。

本日のメインイベント、これを言うために俺は今日ここに来たんだと言うように勢いよく右手を上げ、このフロアの彼方にある巨塔。

第一層迷宮区と思われる場所に指差して告げる。

「昨日、俺たちのパーティーがああ塔の最上階で、ボスの部屋を発見した！」

「！！！！」

「つまり、明日か、遅くとも明後日にはついに挑むことになるわけだ。この第一層のボスに！！そして、ゲームクリアの第一歩に！！」

彼の演説は唐突だった。

もちろん、みんな予想はしていたはずだ。しかしそれでもついにボス部屋を見つけたという報告となると、誰もがざわめいた。実際、この場に自らの意思でやって来た少年も驚いていた。

迷宮区は二十階まであり、まだ誰も最深部まで潜っていない。ほとんどのプレイヤーがそこまで行き着いていることすら知らなかった。彼のパーティが誰よりも先に最前線で戦ってくれたことにより、ボスの部屋までたどり着いた。その功績は大きい。危険を顧みずに挑んで行く彼の度胸は本当に素晴らしいと思う。

「二ヶ月だ」

「「「！」「」」」

「二ヶ月、それだけの期間があれば何ができただろう。現実世界ではどんな変化が起きたんだろう。一日経つたびに俺は思い出す。本来の俺たちは現実世界で何が出来ただろうかってな。一ヶ月もかかったんだ、クリアまでの一歩を見つけ出すために。長かった、気が遠くなる感覚までやって来たよ」

彼の言葉は震えていた。

悔しさか、感動か、あるいは両方か。

「そしてついに！俺たちはクリアまでの第一歩を踏み出す時がやって来たんだ！！このデスゲームを終わらせるために、いつか大切な人と会おうために、俺たちは戦って来たんだ。はじまりの街でまだ絶望してしまっている人たちに、俺たちは希望を与えなければならぬ。生きて帰る、絶対にクリアする、その希望のメッセージを伝えなければならぬ！！このフロアボスを倒すことでそれが証明される。今この場に集まってくれたトッププレイヤー諸君には、その協力を頼みたい！！俺に力を貸してくれ！生きるために、生き残るために、全員で力を合わせて挑もう！！全員で帰るんだ、元の世界へ！！」

その言葉を聞いて、皆は再び喝采した。

この場にいる全員が彼の演説に感動し、周りにいる全員の拍手が彼を包んでいた。非の打ち所もない。いや、非なんてものすらない。街で怯えているみんなを救うための義務の押し付けなんて誰も思わな

い。むしろ、その役割を与えてくれたことに感謝している。最前線にいる自分たちへの激励は、皆をまとめるのに十分だった。

「OK！ それじゃあ早速だけど、攻略会議を始めさせてもらおうと思う！ まずは6人の『パーティー』を組んでみてくれ！」

（え!?）

その言葉だけは少年にとって聞きたくなかった。

彼は今までソロとしてやって来た。ついでに言えば今まで誰とも話してなかった故に、人との接し方すら忘れかけていた。

皆がチームパーティーを組んでいる中、彼だけは誰とも組めていない。なんだろう、ぼっち特有の苦しみをここでこのタイミングで味わうことになるうとは。覚悟はしていたがそれでもやっば辛いわ。

と、そんなバカなことを考えている暇はない。流石にここではチームに入らなければ除け者にされる。皆がもう6人パーティーを結成している中、まだ空きがある場所を探して目を全方向へと飛ばす。

「あ」

と、ある人物が目に入って来た。

痩せ型、やや小柄か。頭から腰近くまで覆うフード付きケープを羽織っているためか、顔は見えない。そのせいか、誰も彼女を誘おうとはしなかった。不気味なやつ、近づきづらいというイメージがあるためであろう。

しかし、他の面子はもうパーティーを組んでしまっている。残りはいいっしょかないない。ならばと思い、少年はそいつの元へと近づいて行く。

「な、なあ？」

「!?」

声をかけた瞬間、そいつの肩が小さく動いた。

声をかけられるとは思わなかったんだろう、かけられる準備すらしてなかったので驚いてしまっていた。

「何？」

「あ、えっと、まだ誰とも組んでないなら俺と組まないか？」

「私が？ あなたと？」

「アブレてるの俺たちだけみたいだし、あんたが良ければ俺と組まないか？」

「アブレてなんかない。周りがみんなお仲間同士だったから遠慮しただけ」

「でも実際残りはもう俺たちだけみたいだし、レイドは八パーティーだけだからそうしないと入れなくなる」

「」

沈黙。

それだけが二人の間を包む。一応、少年の方はこれでも勇気を出して声をかけたのだ。それがこの結果になってしまつて少々困惑している。

だが、数秒後には顔は向けずにそいつは頭をわずかに縦に揺らして、

「いいわ」

「ほんとか!？」

「ええ、一時的にだけど。そつちから申請してくれるなら受けてあげなくもないわ」

「そつちか、ありがとう」

内心嬉しかった少年。

初めての自分からのコミュニケーションでペアを組めたことが少々嬉しかった。

わかったとだけ言い、視界に表示されているカラーカーソルに触れてパーティー申請を出した。声と口調が女の子っぽかったことからわかってはいたが、彼女は慣れてない上に素っ気ない仕草でOKを押した。

すると視界には、やや小さい二つ目のHPゲージが表示される。その下の名前にあたる欄。短いアルファベットの羅列をじっと見つめる。

《A s u n a》

不思議な名前であった。

「よおーし！ そろそろ組み終わったかなー？」

ちようどいいタイミングだった。

ディアベルが全体の雰囲気を見計らい、パーティーが組めたかどうかを周囲に確認する

「じゃあ！ これから」

「ちよつと待ってんかー！」  
「？」

そんな時、酷く鋭いような男の声が滑り込んで来た。

そんな関西弁の男の叫びに歓声はピタリと止まり、その声の発せられた方向へ全員が振り向いた。

「ほっ、ふっ、よっ、てっ、せやっ、でえい！ よつと！ ふう」

会議場の階段を一段一段声を出しながら飛び降り、茶髪のとげとげとしたサボテン頭の男がディアベルの少し斜め前に降り立った。

するとそいつは、ディアベルとは異なって美声とは程遠い濁声で

唸って、

「ワイは『キバオウ』ってモンや。ボスと戦う前に、一つ言わせてもらいたいことがある。こん中に！　今まで死んでいった二千人に詫び入れなアカンやつらがおるはずや!!」

唐突な乱入をした上に、急に訳のわからないことを言い出す男。そんなやつに全員が怪訝そうな顔になる。

盛大に鼻を鳴らし、鋭く光る目で広場に居る全員を睥睨している。攻略会議の場は一瞬で混乱の空気に包まれ、誰もがそいつを異物感のあるような奴として認識していた。

「キバオウさん、君の言う『ヤツら』とはつまり、元『βテスター』達の人のこと・かな?」

キバオウの言葉に対し腕組みをしたディアベルが発言し、その疑問の解を問う。

「そや！　決まってるやないか！　β上がりのヤツらは、このゲームが始まったその日にビギナーを見捨てて消えよつたやないか！　ヤツらは美味い狩場やら、ボロいクエストを1人占めして、自分らだけポンポン強なって、その後もずーっと知らんぷりや!!」

途端、低く騒めいていた広場の声が止んだ。キバオウの言いたいことに全員が理解し、誰も何も言おうとはしなかった。

言えばあいつを更に刺激するだけ。しかも、何か言えば即そいつは奴の言う『βテスター』の疑いを持たれてしまう。そう思ったのだから。

「しかもや!!　あの『茅場晶彦』の演説が終わった途端に現れた『救援プレイヤー』も、救援者と噂されとつたくせに広場から逃げてみる



なを見捨ておった!! それだけやなく、それ以降全然姿を現さんらしいやないか!! そんなただの臆病者と変わらへん!! どんなやつかは知らんがこん中におけるはずやで! β上がりのヤツらと、その変な期待だけさせといて結局は何もしてへん臆病者プレイヤーが! そいつらに土下座さして、溜め込んだ金やアイテムを吐き出してもらわな、パーティーメンバーとして命は預けられんし預かれん!」

好き放題言いやがって、と何人が思っただろうか。

少なくとも『βテスト』である奴は思っただろう。本当に『βテスト』が独占したと思っっているのだろうか。『βテスト』だって死んだものはいる。確かめたわけではないが、少なくとも少年はそう思っていた。

何より、自分が今この場に立てていることに疑問を思わないんだろうか。本当に、自分の力だけで今まで生き残ってこれたとも? 否。断じて否である。

自分達だけの力で生き残れたと思っっているのなら、そいつは自惚れた愚か者だ。このゲームの難易度はそこのゲームよりも高い。何より、βテストと化してしまった事でそのレベルはさらに引き上げられた。

だから、このゲームの先行プレイヤーたちが先駆けしてどこが安全か、どう攻略すればいいかを誰よりも先に確認したのだ。彼らが誰よりも先に動いてくれたから、今多くの人たちが生き残っている。死んでしまったものもいるが、彼らの知識と経験が多くの人を救ったのだ。正しく言うなら、死者数を抑えたって言えばいいのか?

だが少なくとも、何人かは救っていたんだ。

それをあいつは自分達の力だけで生き残ったと思っっている。

実際、攻略法を教えただけでは抑えることはできない。あくまで、攻略法を教えたただけ。その先は個人の力次第だ。だからキバオウのような奴が出てくるのも当然っちゃ当然だ。攻略法があつたとしても、受け方によつては全然役に立たない代物にもなる。単にそいつの実力不足とも言えるが、そこは個人の問題だ。どうにもならない。

「発言いいか？」

その時だった。

この異様な空気の中で動くものがいた。

大きい男。両手用の斧が軽そうに見えるほど屈強な大男。褐色肌のスキンヘッドな男はキバオウの前まで行き、キバオウは少々たじろいでいた。

「俺の名前は『エギル』だ。さつきから話を聞いている限りだと、あなたはこう言いたいんだな。元『βテスター』が面倒を見なかったから新規プレイヤーがたくさん死んでしまった。その責任を取って謝罪と賠償しろと、そういうことが言いたいんだな？」

「そ、そうや！ あいつらが見捨てへんかったら死なずに済んだ奴が今もここにおったんや!! ちゃんと情報やらアイテムやらを分け合ってくれたら、今頃みんなここに、いや、もつと早く攻略できてたにちがいないんや!!」

暴論だ。

その中にはお前の言う元『βテスター』たちも含まれているというのに、それを知らないからそんなことを言ってしまうのだろう。哀れな奴だ。

少年はもちろん叫びたかった。だが抑えた。吊るし上げられるのが怖いから？ だと思っ。

が、それ以上にここで何か言ったら余計に場が悪くなるだけだと思っただけだ。あいつは刺激されればされるほど突っかかってくるようなタイプの人だ。ここで何か言えば魔女狩りとかが起きてしまう。あいつは俺たちを見捨てた元『βテスター』、だから倒してしまおうなんて考える奴が出てくる可能性がある。

しかし。

しかし、だ。

「キバオウさん。あなたの言うことも少しはわかる。わかるが」  
「な、なんや?」

「金やアイテムはともかく、情報はあったと思うぞ」

彼の発言が場の流れを大きく変えた。もちろんいい方へと。

すると、エギルと名乗った大男はレザーアーマーの腰につけた大型ポーチから羊皮紙を閉じた簡易的な本を取り出した。

それを取り出すと、広場の上から見ているアルゴが僅かに口角をあげた。

「このガイドブック、あんだだつて貰ってるだろう?」

「も、もちろんや」

「これは、俺が新しい村や町に着くと必ず道具屋に置いてあった。しかも無料でだ。あんだこう思わなかったか? 情報が早い上に、なんでも無料でこんなものがどの道具屋にも置かれているのかってな」  
「せやからそれがなんや!? 早かったら何やつちゆうんや!」

まだわからないのか、そう言うようにエギルはキバオウの目を見つめて、

「こいつに載っているモンスターやマップのデータを情報に提供したのは、あなたの言う『βテスト』たちしかないということだ」  
「!?!」

その言葉に、キバオウだけでなく全員がざわめいた。

「いいか、情報はあったんだ。なのにたくさんのプレイヤーが命を落とした。その理由は、おそらく彼らがベテランのMMOプレイヤーだったからだと考えている。このゲームを今までやってきたゲームと同じようなものだと思うってしまったことが原因で、彼らは甘く挑ん

.....  
でしまった。すぐにレベルアップしてクリアできるなんて考えを抱いてしまったんだろう。だからこそ、そうならないように情報が早く出回ったんだ。一々死んだのは誰のせいなのかとか追求している場合ではないだろう。考えるべきことは、これからどうするか、どう攻略すべきか、未来のことを考えて進むべきだと俺は思うんだがな」

「それに、あんたの言うその『救援プレイヤー』だって生きることには死のほずだ。他人に構う余裕すらないのかもしれない。何より、救援者だって言うのも俺たちの勝手な決めつけだ。そいつだって色々事情があるだろう。ログインするのに時間がかかった、ログアウトできなくなるというニュースを見ずにログインしてしまったとかな。納得できないかもしれないが、考えられる可能性はいくらだってある。そんなやつに俺たちの勝手な希望を押し付けるなんて失礼だと思わないか？」

「.....」  
彼は一切揺らがなかった。

終始堂々として、キバオウに意見を述べていた。噛み付く隙すらも与えず、反論する隙も与えず、誰かがエギルを元『βテスター』だと疑うことすら許さず、彼はずっと堂々としていた。

「キバオウさん」

「!?!」

と、背後にいたディアベルが声をかける。

「君の言うことも理解できる。俺だって何度も死にかけた。でも、彼の言うとおり今は前を見て進むべきだ。ここで唾み合ってもクリアは目指せない。それどころか、全滅だってあり得る。攻略が失敗したんじやなんの意味もない。みんな協力して帰るのが、俺たちの目標だろ？」

「ッ!!」

何も反論しなかった。

彼は責めたわけではない。ただキバオウにも協力して欲しかっただけだった。乱れていた空気は自然と調和して行き、全員がその場の雰囲気収まって行くのを感じて安堵の表情を浮かべている。

「みんなも思うところはあろうけど、今だけは第一層突破のために協力して欲しい。どうしても元『βテスト』が嫌だという人は抜けてくれたって構わない、残念ではあるけどね。このゲームはチームワークが何より重要だと思っている。だからこそ、俺はみんなと一緒に戦いたい。みんなと一緒に帰るために!!」

全ての人に聞こえるような声で言った。

その言葉に、異論はなかった。キバオウも鼻を鳴らしたただけでそれ以上は何も言わずに、大人しく席へと引込んで行った。

「よしーじゃあ再開していいかな?」

ディアベルが問いかけると会場の皆が頷くなどして各々が了解のリアクションを示す。

「街の道具屋で配布されていた最新版のガイドブックによると、第一層のボスの名前は『イルファンク・ザ・コボルド・ロード』というモンスターだ。それと、『ルイン・コボルド・センチネル』という取り巻きモンスターがいることも事前に判明している」

つまり、だ。

彼らは大胆なことにボスのいる部屋に足を踏み入れたということだ。その次の日にプレイヤーを招集し報告するとは、行動力が過ぎる。

「ボスの武器は斧とバックラー、四段あるHPゲージの最後の1段のゲージが赤くなると、曲刀カテゴリの『タルワール』という武器に持ち替え、攻撃のパターンが変わる。ということだ!」

そこまでの情報はβ版と同様。

しかも、だ。

その情報はまんまアルゴが書いた攻略本そのままの情報だった。今無料で販売されているということから、まだ持っていないものもこの後露天商に行って購入し、明日に備えて熟読することだろう。判明したばかりのボスが本に載っている以上、全員がそれを読み込めば犠牲者なしでクリアできる可能性もあるということだ。

「...どうだろうナ」

しかし、本人はそう思わなかったらしい。

正式版でのリリースで変更されている可能性が捨てきれないのだろう。影でその話だけを聞いて憶測を立てるが、誰にもそれを言うこととはない。確かでない以上、余計な情報は不要。審議もわからない情報を増やせば混乱するだけだ。一応あとでこの攻略のリーダーには油断だけはするなど伝えておくが、できれば考えすぎであってほしい。

「みんな、今はこの情報に感謝しよう!! これで犠牲者なしの攻略も夢じゃない!!」

融和性を表すセリフを皆に投げかけるディアベルは、なおもチームの戦力と士気を高めてしまっている。よっ! ナイト様!! ていう声まで飛び交っている。ならばもう、あとは彼らに託すしかない。

健闘を祈ろう。

それだけだ。

「攻略会議は以上だ！ 最後にアイテム分配についてだが、金は全員で自動的に均等に割る。経験値はモンスターを倒したパーティーの物。アイテムはゲットした人の物とする。異論はないかな？」

全員が頷く。

「暗黙のルール設定が適用されることに、誰も文句は言わない。

それよりも、全員が一つの思いを胸に秘めていた。

いつかこの世界を出し抜く。

絶対に勝てないはずのゲームにだって勝利する。

そして、仲間たちに再び自由を与えなければならぬ。

それだけが、彼らの最終目標であり、それ以外はそこまで重要視はしていない。攻略のための必需アイテムとして見れば誰もが欲しがるものだが、それはあくまでついでのような感覚。最重要を頭に置けばゲームクリアが最優先。

全員がそれを目指し、明日に備えるのだった。



第一歩を踏み出す日がやってきた。

とりあえず、ボス部屋まで誰も死者が出なかった。それだけでも上出来だ。大群で挑むボスレイドであれば、雑魚など恐るるに足りない。たとえここまで来るのが初めてなやつであろうと協力すれば怖くはない。

だが、少年はいまだに緊張している。

これが普通のゲームだったらクリアできるかな？ ぐらいの心配で終わってただろう。だが、今は本物の命をかけたデスゲームの真っ最中。これから挑む最初のボスは、どのゲームのボスよりも殺傷力を秘めた強敵だ。それをこれから相手するともなると緊張する。

「ねえ、ちよつといい？」

「うん？」

すると、隣にいた少年のペアであるプレイヤー、*「アスナ」*が身を寄せると声を低めて囁いた。

「こんな時に何事だ？　とも思ったが、彼女の口から出るのは拍子抜けするものだった。」

「あなた、名前は？」

「へ？」

「名前はって聞いているの。聞くの忘れてたから、聞くなら今しかないと思って」

「」

唾然としてしまっていた。

「こんな時に名前？　とも思って驚いてしまったのもあるが、今更かとも思った。」

なにせ、名前なんていつでも表示されているだろう。プレイヤーの上に常にあるというのに、今まで知らなかったのかと。それを聞いただけで緊張は吹き飛び、思わず吹いてしまっていた。

そして、大扉を前にして、少年はペアになった女性プレイヤーアスナに自分の名前を告げる。

「俺は、*「キリト」*だ。改めてよろしくな、アスナ」

「キリト」

少年の名前だけを呟いて、アスナは頷いた。

そして、大扉に向き直るアスナの横顔を、彼は見つめていた。

「なんでだろうな、こんな時に名乗るなんて、まるで死亡フラグが立ってしまったんじゃないかと不安にもなるが、もう引き返せない。相手がいる部屋の前で引き返すなんてしたくない。」

一つの決意を胸に秘め、キリトも覚悟を決めて大扉に向き直る。





その直後に、パリイン!! とアバターを超える巨体のモンスターの体が青いガラスの欠片へと変えて四散させた。

「な!?!」

「なんやと!?!」

「!?!」

意味がわからなかった。

わからなかったが、これまでモンスターを倒してきたから、それが何を意味するのかについてはすぐにわかった。

「Congratulations!」

という勝利を讃えるテキストが現れた。

そう、クリアしたのだ。まだ誰も攻撃を加えていないというのに、クリアされたのだ。

全員が今の状況に何が起きたのか分析できない。起こったことはわかっているのに、それができなかった。

よくよく思い返してみれば、先ほどの咆哮とは違った気がする。悲鳴、そっちの方が正しいか。HPを全て残さず削り切り、まるで断末魔のような叫びを上げたのだ。

でも一体なぜ、こっちはまだ何もしていないというのに。

と、皆が疑問に思った時だった。

「あ」

と、キリトの隣にいるアスナが声を溢した。

皆がアスナを見るも、アスナはその視線に気づかない。ただ一点に視線を固定してしまっている。

その視線を追いかけるように、全員が目線をそちらに向けた。

誰かが立っていた。

右手に持っていた大剣を、ブンブンと回して背中におさめた。

おさめた瞬間、そいつの肩は力が抜けたように手を下げ、腰に手を当てていた。

異様だった。

単純なプレイヤーだとは皆認識しなかった。

ツンツンとした金髪に、大きな剣を背に担いでいる男に、皆が啞然としている。

言葉で説明しようとしても、できない。できなかった。真っ白に染まった思考ではなにも考えられない。全員の脳がこんなことがあったとしか表現できない。目で見ているものを理解できないことに、強い違和感を覚える。

するとそいつは、一度だけこちらを見た。体は動かさず、首だけを動かして。

横顔しか見えなかった。が、そこからでもわかる異様さに、皆が言葉詰まらせている。

そしてそいつは、何も言わずに歩き出した。次の階層に繋がっている大扉へと。

「ちよ、ちよお待てやお前!!」

キバオウが叫んだ。

しかし彼の足は止まらない。

それどころか、バン!! という爆音が響く。

そう思った時には彼の姿はいつの間にか大扉まで距離を詰め、その

ままその中心に手をかけてその中へと消えてしまっていた。

あまりの速度に、電脳世界で作られた肉眼では追いかけることもできず、処理が追いつかなかった。

全員が呆然と誰もいなくなった前方を眺めていた。

生き残った。

0と1で構成された床とコンクリートも砕け、爆撃直後のような惨状の中で全員がそう思うも、嬉しさはなかった。明確に決着できたかどうかも曖昧な結末に、誰も納得しなかった。

どう判断すればいいのかもわからないまま、キリトはただそいつの姿を頭の中で思い返す。

（…救援プレイヤー？）

男が先程までここで何をやっていたのかは想像できるが、何をどうしたらたった一人でここまでできるのか。それすらも処理速度のせいとかと疑うほど思考が回らず、ただ男が消えていった扉を眺めるだけで終わってしまった。

## 第5章

キリトたちがボスに挑もうとするちよつと前。

朝早くから何匹も湧いて出てくるモンスターをたつた一人で片付けている男がいた。どんな形式で作られたかは知らないが、中は意外と綺麗に作られていた。最前線らしく完璧に人気がなく、怪物しかない冷たい迷宮区の最深部に、そいつは立っていた。

「……こだな」

大扉を目にした瞬間、彼は何のためらいもなく開けて入って行く。奥に向かって伸びる長方形の広場。左右の幅は二十メートル程の距離。暗闇が支配する部屋の中であったが、ぼつと音が鳴って粗雑な松明が連鎖的に奥へと明かりを灯していく。

その中に佇むデカイ影。巨大な玉座に座す化物。

ただ鮮烈に君臨する一人の剣士と、化物。

この馬鹿げた暴虐ゲームを終わらせるために立ち上がったクラウド、誰の侵入も許さないと手に持つデカイ武器を不気味に光らせて玉座から立ち上がる化物。

彼は握り潰すように、『バスターソード』に手を伸ばす。  
そして、

「ッ!!」

「ッ!!」

二人の眼光が正面から衝突した。

それが戦闘開始の合図。

異界の剣士と、仮想空間の化物の戦いが、ここに幕を開けた。



世界を揺るがすほどの音が仮想空間に響き渡る。

それは爆音や衝撃波なんかの領域ではない。その先を行くものだ。処理速度は追いつくかわからない。人間が稼働できる範囲をはるかに超えた動きに、世界を保つための処理は悲鳴を上げる。

衝撃波の余波は、仮想空間を揺るがす爆風となっている。

だが、さすがは世界中が認めた仮想世界だ。ちよつとやそつとでは世界は崩れない。一応演出のために、化物が振り下ろした得物が床を根根ぎぶつた斬った瞬間地面は膨れ上がり、アバターの足が攻撃のために力を込めて床を蹴った瞬間、威力を逃がしきれなかった床は悲惨な姿へと変貌する。

クラウドと第一層のボス。

0と1で埋め尽くされた空間、二人の得物の激突だけが、この部屋を支配していた。

「はあああああッ!!」

裂帛の気合いと共に放たれたのは、本当に予めプログラムされていた剣術だったのだろうか？ 空間に放たれたのは鋭い三本の爪。翠玉に光る鉤爪は『イルフアング・ザ・コボルド・ロード』に向かって行く。何人にも止めることはなく、うじゃうじゃと湧いてくる雑魚敵を蹴散らして最終目標であるボスへと向かって行く。

「グオオオオオッ!!」

しかし、コボルド・ロードは巨大な斧で弾き返す。続けて、バツクラを構えながら残りの爪を防いだ。

クラウドは知る。こいつに組み込まれたAIはそこらの雑魚とは違うと。そう簡単には倒されないという意思の現れか。AIは人間

の思考を超える速度で次の一手を考える。クラウドが次の剣術を繰り出そうとすればそれに対応し、斬撃を放てば即座に防御に変えていく。

両者の間では莫大な戦闘が繰り広げられている中で、音速を超える肉弾戦の最中に「読み合い」という頭脳戦が並列して展開される。

『AI』VS『人間』が繰り広げる頭脳戦なんて聞いたことはないが、実際に今この場で繰り広げている。普通ならAIが勝ちそうな文章だが、それを凌駕する奴が今回の相手だ。

ガガガガギギギギツ!!!

と、互いに武器をぶつけて火花を散らしながら行われる戦いは、一般的に見れば異様な戦い。本来であれば、こんな光景はあり得ない。絶対にプレイヤーは死んでしまうからだ。一人で攻略するように作られてはいないため、普通なら一人で挑んだ愚か者は開始数秒で死んでいただろう。

だが、クラウドは現実世界で本当に経験している。こういった化物なんて、何体も相手にしている。

彼がコボルド・ロードを凌駕する要素は『経験』というものだ。

普通なら味わうことのない化物退治。それを彼は経験しているといることが、この世界ではチートとなる。彼は化物専門に戦ってきているため、どうすれば体力のペースを考えてこいつをうまく倒すかなんてことはすぐに思いつく。

しかも、この世界ではレベル上げというものがある。それを加えれば、実質彼は無敵に近い。大げさだと判断するものもあるだろう、だが実際彼の身体能力は現実世界よりも飛躍的に向上している。

何より彼は、『ソルジャー』としての力が備わっている。その時点で普通の人間とは違うのだ。アバターは平等な力でゲームを開始するなんて説明されても、彼の動きを見て同じことが言えるだろうか。

『ソルジャー』という、極めて異様な力を見ても。

「ふッ!!」

「グオオオオオッ!!」

五メートル強もの鉄塊の斧を木の枝のように振り回すコボルド・ロードに、軽々と振り回していたバスターソードが激突する。

何回ぶつかっても、両者の武器は怯まない。爆音を何回も響かせ、幾度も両者の武器がどちらが強いかと張り合うようにぶつかり合う。と、その時だった。

ガキンッ!! という切断音が響く。

死闘を繰り広げる中で、いつどちらかの武器が壊れてもおかしくない中、ついにその瞬間はやってきた。

この世界にも、武器の耐久値というものがある。何回も使い続けられ、もちろん刃こぼれだつて再現される。それだけこの世界を現実にな近づけたかつたんだらう。

そして、壊れたのはアバターの持つ武器ではない。

ボスの持つ、プレイヤーには扱えないモンスター専用の武器だった。

「ッ!?!」

コボルド・ロードは驚いたような表情を見せる。

プログラムされていたとはいえ、ここまで細かく表現されると流石にこちらだつて思わず目を見開いてしまう。

すると、コボルド・ロードは壊れた武器を捨てて、捨てられた武器はガラス片になって世界から消え去った。

そして、腰にあった武器へと手を伸ばす。鍛えられ、研ぎ澄まされた『刀』。アルゴから聞いていた情報と違うが、何の問題もない。むしろ



ろ、別のところに問題があった。あの刀を見るだけで思い出す、思い出の奥底に封じ込めていた嫌な奴の姿が。

その姿を思い出して、クラウドは思わず奥歯を噛みしめる。嫌がらせにも思えたその武器に、クラウドはムカついたように目を細める。

と、動きがあった。

コボルド・ロードが武器に光を纏わせていた。纏わせてるんじゃない、溜めているのか。

それだけでもわかる、これからくるのは最大の一撃だと。

次の瞬間には、予想通りの一撃がやってきた。

床を揺るがせるほどに一步足を踏み出して、横殴りに放たれた斬撃は水平な線を描いてクラウドに迫ってくる。だが、彼にとってはそれは普通の攻撃に等しい。連撃速度をあげて放たれる斬撃にクラウドは、バスターソードで弾き飛ばし、時には受け流し、あるいは首を振って避けて凌いでいる。

「」

この程度かと、つまらなそうに目を細める。

この程度の攻撃、「あいつ」に比べたら全然遅い。単なるプレイヤ―なら致命傷だろうが、彼にはただの重い一撃にしかならない。当たらなければどうということもないし、弾き返せば普通に対処できる。

バスターソードの耐久値も大概だが、彼のそもそもの身体能力がこの世界では異常な異質物。

だがもういい、これ以上は付き合う義理はない。

さつさと終わらせるために、クラウドはミシィツ!! とバスター



直撃したその衝撃で粉塵が舞い上がり、一刀両断されたコボルド・ロードはジジジと体を何重にもブレて震えている。

巨体は悲鳴にも似た咆哮をあげ、その巨体は不意に力を失い、後方へとよろめく。壊れていく仮想体の中でまだかろうじて形を保っているコボルド・ロードの前に立っているクラウドはバスターソードを片手で持ち、肩で担ぎ上げると、コボルド・ロードが内側からパキッ!! と破片のようなものを噴き出した。

絶叫をひとしきり叫んだボスは天井を見上げ、虚空を眺めていた。逃れ得ぬ苦しみの中で、圧倒的な斬撃を喰らって形を保てなくなつたのか、そのままコボルド・ロードは中心からはるかに膨大な爆発を引き起こし、データの残骸がガラス片となって四方八方へと飛び散つた。

粉塵とガラス片が混じり合い、空中には「Congratulations!」という祝福のカーテンが降ろされる。

そのすぐ下で、ついさつきまでコボルド・ロードが立っていた場所には太く直線的な文字が浮かび上がっていた。

粉塵とガラス片が舞う中で発生したカーテンのすぐ下で揺らぐ巨大な文字。

その文字の正体は、

凶



ボスの消滅を確認すると、クラウドはバスターソードを弄ぶようにくるくると回して背中に収める。何か目の前にモニターが表示されたが、クラウドは興味を示すことなくそのモニターは閉じられた。

『二元ソルジャー』を自称していただけあって、化物を凌駕する資質を兼ね備えた怪物の一撃。

と、その時。

ふと、背中から複数の気配を感じ取った。

だが、彼は首だけを向けてそつちを確認する。

見えただけでも数十人。遅れてやってきたプレイヤーにクラウドは興味も示さずに歩いて行く。次のステージに進むためだ。

後ろから怒号にも似た叫びが聞こえてきたが、その声に構うこともなく進んで行く。なんかこちらに近づいてきている足音も聞こえてきたため、捕獲される前にクラウドはソルジャーとしての身体能力を使って次のステージに繋がる大扉の前へと跳躍する。

詳しいことも確かめようともせず、クラウドは複数のプレイヤーに背を向ける。

ここで足止めを食うわけにはいかないのだ。どうやって倒したかの、なんで一人で挑んだなどという質問の嵐を予想したクラウドは、そんな面倒事に巻き込まれる前に大扉を開けて次のステップへと誰よりも先に突き進む。

彼のやるべきことはただ一つ。

この馬鹿げたお遊びに巻き込んだ首謀者を引っ張り出し、王手のかかった盤をひっくり返して、このゲームを終わらせることのみ。

## 第6章

どの世界にも抜け穴がある。

人目をかいくぐって汚職に手を染めるものはたくさんいる。こんなところに閉じ込められれば、誰だってまともな思考を失う。

故に、あらゆるところでは他のプレイヤーに危害を加えるという事件が多発している。

「がっ」

「ぐおッ!？」

深夜のフィールドで、呻き声と何かが壊れる音が炸裂していた。

森と森。

どこに目をやっても木だらけ。こんなところにいれば絶対迷うと思うが、そこは勘でなんとかなる。

その中で七人くらいのフードをかぶっている連中が息を巻いている。さらに視線を下に向ければ、地面には三人ほどの人間が腕を失くして倒れていた。

七人のフードアバターの手にはジャックナイフの短剣やレイピア、どれも殺傷力抜群の得物が握られている。

七人はその得物を手にし、たった一人の人間を取り囲んでいた。

彼らの目は皆血走っており、それでも取り囲まれているたった一人の人間は動じない。むしろ取り囲んでいる凶器持ちの七人なんて眼中にないかのように、手に持っている大剣を地面に突き刺して杖代わりにしている。

彼はツンツン、ツンツンといった髪が目立つ印象で、それ以上に第一階層をたった一人で突破した謎のプレイヤーだというイメージを見る者へ凶悪に叩きつける。

七人の頭上ではオレンジ色のカーソルが浮かんでいる。それが何を意味するのか、ここに来てもう大分経ったクラウドにだってわかっている。だからこそ腹が立つ。こんな空想の世界でも、悪事に手を染める輩がいるということに。

「おらあつ!!」

という背後からの絶叫。

クラウドを取り囲む凶人達の一人がレイピアを片手に、彼の背中へと突っ込む。

だがクラウドは振り向きもしない。視線すら送らない。

その無防備で強靱な肉体に、凶人は体ごと突っ込むような形で全体重を乗せたレイピアの先端を突き入れる。

あの第一階層での出来事で、彼を見る目は大きく変わった。

救済者だという肩書きは昔からある、スパイというのも健在。そして、新たに『チーター』やら『ビーター』なる不名誉な肩書きまでもが追加された。

あの戦いの後、彼の噂はものすごい速度で広がり、『大剣を背負ったツンツン頭のプレイヤーがたった一人で攻略した』という噂が流れてから、彼を勇者のように讃える者、さらに疑心の目を向ける者、そしてイカサマで勝ったチートプレイヤーとして見る者という風に別れた。

新たに追加されたチーターという不名誉な肩書きはゲームシステムを超えたからという理由らしい。実際は彼の現実世界での身体能力をここでも扱えたからあのボスに勝てたというだけなのだが、一般的に見ればシステムに何か細工して強くなったと見られるのが普通なのかもしれない。

そして、だ。

たった一人でボスを倒した。

これが一番の原因なのだが、たった一人でボスを倒せるなんてありえないし、そんな奴が初心者な訳がない。だからあいつも元βテストターに違いないと誰かが言ったことでその説が拡大していき、βテストターのチーターだから『ビーター』なんて名前が出回っているんだそうな。

別になんて呼ばれようと彼は気にしないし、そいつらの勝手だがこれだけは言いたい。センスがなさすぎる。

だが、さつきも言ったが彼はただ現実世界での身体能力をここでも使っただけだ。

ボギン!! と骨が折れたような音が聞こえて来た。ここは仮想空間のためアバターの骨が折れただけで現実世界の実際の骨が折れたわけではないが、物理攻撃の痛覚はもちろんプレイヤーに与えられる。

「ゴフツ!?!」

と、頬を殴られたことで吹き飛ばされたオレンジプレイヤー。

そのまま木に激突して気を失った。痛覚は現実よりはまだ抑えられているが、一定以上の痛みを感じれば脳は許容量を超えて一次的にシャツトダウンされる。ここで気を失うってどんな感じなんだろうか、寝るときと一緒でアバターが一次的に機能を停止させるだけなのか。吹き飛ばされて背中から強く木に激突した光景はまさに滑稽だった。

仲間が倒されたことで誘爆するように、残りの六人が一斉に襲いかかる。しかし、本当に勝てる、『殺せる』と思っただけ挑むものは何人いるのか。

彼らの目は確かに血走っていた。だが、それは度を越した緊張や不安、恐怖や焦燥によるものだったのかもしれない。

あの一戦を境に、クラウドは一躍有名人となった。

さっきの三つのグループで、褒め称える奴は圧倒的に少ない。よくて二割ほどだ。他三割はスパイ、残りの五割がチートプレイヤーだと思っている。故に、妬むもの、恨むもの、恐れるもの、そして襲撃するものまで出て来た。

襲撃者の動機はこの世に残しておくわけにはいかないとか、そんな正義感溢れるような理由じゃない。単なる娯楽。それだけであつた。

人を殺めることこそがこの世界での唯一の娯楽。ここで死ねば現実でも死ぬなんていう証拠はどこにもない。ならば殺してしまつても構わないと、そう考えているような凶人がよく現れるようになった。

こいつらはその一員。腕に棺なのかよくわからないが変な烙印を刻んでいる奴ら。彼らがクラウドを襲う理由もただの娯楽。皆がチーター、チーターばかり言うので、ならば殺してしまつても問題ないと思つたのだろう。

しかし、彼らの目の前にいるやつは音速を超えて戦う『ソルジャー』。挑むだけで無謀な戦いになることを知らない。

「」  
クラウドは興味なさそうにして対処した。

剣はもう必要ない。脅しのために三人ほどのオレンジプレイヤーのアバターの腕を斬ってみたが、こいつらが怯むことはなかった。それに拳でぶん殴れば相手を沈めるには十分なのだから、わざわざ耐久値を減らしてまで武器を使う必要などない。

次々と雄たけびを上げて振るわれるナイフやレイピアに、クラウドは丸腰で挑んでいく。バスターソードは地面へと刺し、まず一番近いやつから順番に沈めていく。

仮想空間でいくら鍛えたとしても、所詮は人間の体。ソルジャーの



身体能力でいとも簡単に貫ける。脆い体に鋭い一撃を入れ、続いて背後にいるやつには裏拳で横薙ぎに吹き飛ばす。

背後から武器で迫ってくるものは、一旦しゃがんで回避し、鋭い蹴りを鳩尾に差し込む。

そして、ここで彼らはようやく気づく。

初撃を放ち、それが失敗した時点でこいつには勝てないということに。

凶人達の骨が碎ける音が連続していく。

骨は折れていない。いないが気絶はする。一定以上のダメージを受けると意識を停止させるようにプログラムされてるのか、クラウドが一撃を入れるだけで彼らは意識を手放した。

本来なら、クラウドは襲われなかった。

わざわざ、襲われるように無防備な姿を晒さなければ、こうはならなかった。

● そうしないといけないからやった。

● それだけだった。

◇◇◇◇◇

● 小さな家だった。

● 正確には、繁華街の一部。アパートの一部屋。

● 仕事場としても使っているなら、居住スペースはさらに狭いはずだ。あるいは、『何でも屋』という役職では仕事とプライベートの区別がなく、自分の周りに常に仕事がないと逆に気が休まらない人間なのだろうか。

「聞いてるのかクラウド？」

「ああ」

と、レジカウンターに肘をついて退屈そうな顔をしていた二十代の男性店主、クラウドはカウンターに広げられた羊皮紙から顔を上げた。アパートなのにレジカウンターがなんであるんだとか、細かいツツコミは無しだ。ネット空間で作られた古い紙は何やら一人に光が放たれているのだが、クラウドは気にしている様子はない。

くっだらなそうな表情のクラウドは、頬杖をついたままこの羊皮紙を持ってきた女性に向かってこう言った。

「それで？」

「いやだからこいつらの捕獲をお願いしたいと、そういう依頼が何件もいるんなところに配られてるんだヨ。『犯罪者ギルド』のメンバーをナ」

「犯罪者ギルド。」

盗みや傷害、殺人といったシステム上の犯罪を行ったプレイヤーたちのギルド。プレイヤーに危害を加えれば通常緑色のカーソルがオレンジへと変わる。それ故、犯罪者をオレンジプレイヤーと呼び、その集団はオレンジギルドと呼称されている。

「そんなやつらの捕獲。」

「報酬は？」

「」

アルゴは指を二本立てる。

「他をあたってくれ」

「イヤイヤ、ここは『何でも屋』クラウドとしての腕の見せ所だ口？  
それにこれ受領してくれないとオネーサン困っちゃウ」

「」

「オイラの商売は信用で成り立ってるんだヨ。お前もわかるだ口？  
この仕事だつて縁がないとできないんだからさ、ナ？ クラウド？」

「誰が依頼を持ってきているのか、そして誰がお前の噂を抑えてやっただけナ？」

アルゴはカウンターに置かれた羊皮紙を人差し指でカツカツと叩く。クラウドはそんなアルゴを睨むが、アルゴはやはり気に留めない。

早いもので、あれから大分時が経った。

第一層を乗り越えてからというものの、かなりのスピードで次の階層、次の階層へと登って行っていた。

それもこれも、次々と『ギルド』が出来上がったおかげだ。

強いプレイヤーが築いた集いはほとんど強いものを引き入れ、あつという間に強い団体がいくつも出来上がった。そのおかげで攻略も楽に進んだ。強いもののレクチャーによって弱かったものも強くなり、強いもののサポートによって攻略はいつもより簡単に進んだ。

故に、一年近い期間の間でもう半分も進んだ。今は第五十六層ぐらいか。

それと同時にクラウドの噂も次第に収まりつつあったのだが、あくまで収まっただけで忘れ去られたわけではない。一層突破後、クラウドはあらゆる人物から狙われ、クラウドは再び行動を控えるようになった。

あれ以降、クラウドは攻略に参加していない。ずっと雑魚を狩り続けていた。

攻略は、第一階層でみんなを導こうとしていたディアベルが築き上げたギルドと、『血盟騎士団』というギルドの、二つの大手ギルドが主に攻略のために動いている。

たまに、参加しないかと誘われる時もあるが、例外なく断っている。そんなのは依頼の対象外。引き受ける依頼は、『用心棒』や『素材集め』、そして『討伐』といったものに絞っている。

自分はただの傭兵。それ以上でもそれ以下でもない。

『ボス攻略』はどれほど報酬額を増やされようと引き受けるつもりは

ない。あんな人から注目されるような真似二度としたくない。ほんつとう、アルゴの忠告を聞いておけばよかったと後で後悔した。

ボスを倒してさっさとゲームクリアを目指すというつもりで挑んだが、逆にそれが足枷になってしまった。たった一人で挑んでしまったことでプレイヤー全体から注目対象になり、自由に動けなくなってしまう。表を歩けば声をかけられ、救援者だと讃える者もいれば、詰問してくるものまでいた。そういった奴らは簡単にふりほどけたが、しつこすぎるのでクラウドはしばらく身を潜める事にした。

また身を潜める事になろうとは思わなかった。噂が次第に収まり、皆から忘れられるのを待つばかりであったが、意外と長い時間がかかってしまった。二十階層ぐらいから、みんなあんまり噂しなくなつた。それまではいつ攻略に現れるんだろうと、迷宮区前やボス部屋前で待ち構えているプレイヤーが続出した。

なんならクラウドを探し回る者まで現れた。

クラウドができることはただ一つ。隠れること、ただそれだけだった。

一応、噂が収まったのはそれだけが理由じゃない。アルゴが裏で手を回してくれたのだ。何をしたのか聞いてみたら多額の金額を要求されたので聞かないでおいた。しかし、その代わりにアルゴが欲しがっている素材や情報の入手の約束をさせられた。

忠告を聞かなかった罰、とのことらしい。

実際何も言い返せなかったので、クラウドは渋々了承。

その代わり、こちらも条件を出した。『何でも屋として店を出す予定なので、もし依頼があつたら持つてきてほしい』と。そうしないとここで金は得られない。クエストをやるうにも、他のプレイヤーに見つかりでもすれば面倒だ。だからアルゴには仲介役として動いてもらい、依頼を持つてきてもらっている。もちろん、クラウドの名前は出さずに。情報屋アルゴとしての信頼度は高く、そんな情報屋が勧める何でも屋ならさらに信頼できるという噂が飛び交い、よくクラウドの元へと依頼が来る。

だが、誰がその依頼を引き受けてくれるのかについては誰にもわか

らない。それは、何でも屋が条件を飲み快く引き受けてくれてからの話。クラウドが引き受けるといったら面会ができる。そういうシステムを勝手に作って商売している。ちなみに引き受ける際は、クラウドの名前は出さないのと、誰が引き受けたか口外しないという誓約書を書かせているとのこと。

そんなこんなで現在、クラウドはアルゴが持ってきた依頼を確認しているようだが、報酬金額に納得していないようである。

「オイラとしてもこの金額はどうかなとも思っただけだし、それがあいつの全財産なんだヨ」

「全財産？」

「依頼をされる時な、そいつ泣きながら頼んできてサ。依頼主には婚約者がいたみたいでナ。本当なら一週間前には結婚式を挙げる予定だったそうダ。なのに、オレンジプレイヤーに殺されてしまった。婚約者の男性はオイラに泣きながら訴えたヨ。必ず見つけて捕まえてくれてナ。殺してくれじゃなくて、捕まえてくれって」

「それで、全財産を払ってまで捕まえてくれって言ってきたんだがどうすル？」

良心に問いかけるようにアルゴは言った。

その一言で、クラウドの目は変わった。今まで壁にかけていたバスターソードを手に取り、やれやれといった感じのため息を吐きながら背中におさめた。

「オ！ 引き受けてくれるのか!?!」

クラウドはぱいっと顔を横に向ける。

そのまま外に出ようとするクラウドだったが、アルゴがそれを止める。

すると、何かを手渡してきた。

『転移結晶』

それを受け取った瞬間、クラウドは悟った。なぜ報酬金がそんなに少ないのかを。

クラウドはそれをストレージにしまい、アルゴにどんなやつか、どこに行けばいいかという情報だけ聞くと、そのまま店から出ていった。

◇◇◇◇◇

そういう経緯でこの森に来たわけだが、あくまでクラウドは報酬目当てだ。

もう一度言う、報酬が目当てだ。

決して、依頼主に同情したといった理由からここに来たわけではない。断じて。

さて、と。彼は仕事を終えるために依頼主から預かった転移結晶を取り出す。

地面に転がった凶人どもを一箇所に集めると、転移結晶を使用する。行き先はどこなのかは聞いてないが、おそらくこのゲームの牢獄だろう。そこに入ればプレイヤーは二度と出てこれない。そこから出てきた奴の話なんて全く聞かない。つまりはこのゲームが終わるまでそこに閉じ込められるということだろう。ある意味辛い。持久戦が求められる拷問に果たして彼らが耐えられるのだろうか。

そんなことはクラウドにはどうでもよかった。

脱出したという噂も聞かないことから、恐らくはアバターの力ではどうにもならないほど強固にプログラムされているのだろう。

そこらへんはしっかりしているようだ。

そして、転移結晶によって凶人たちは何処かへと飛ばされた。それを確認すると、クラウドは帰路へとつくために立ち上がる。

「」  
クラウドは自分の腕を見つめる。

あれから、結構変わったと自分でも思う。ここに来る前の自分を思い返してみる。

まだ自分が元ソルジャーだと思い込んでいたあの頃を。人のために何かをするなんて、あの時は全然思わなかった。報酬が貰えればいいとしか考えていなかった。なのに、今では誰かを思うたびに気持ちが落ち着かなくなっている。黙っていられない、じっとしていられない、そんな感覚。

（笑えるな）

彼は切り取られた夜空を見上げると、遙か後方——森の奥から少女らしき声が聞こえてきた。

「？」

深夜だからか、その声は森の中でよく反響した。

甲高い、悲しみに満ちた叫び。

「」

それを感じ取った瞬間、クラウドは帰路だった道から外れ、その声がある方へと駆け出した。

◇  
◇  
◇  
◇

「？」

キリトは木の影に隠れていた。

夜間であるため当たり前のことなのだが、光が一切届かない森の中で恐ろしいほどの沈黙が満たされる。

絶望的な間。あまりのストレスに脳の構造が崩れるかと思った。

しかし、木の陰に隠れて息を殺しているキリトは、そこで異変に気がついた。

（あいつらは？）

先ほどまで、彼も凶人共に襲われていた。

襲われていたというか、引きつけていた。

彼も依頼を引き受けた一人。といっても、依頼人は全く別人であるが。

こういった依頼は、何件も出回っている。クエスト中のパーティーが主に狙われ、クエストクリア後に襲うといった手口がよく増えている。クエスト報酬が目当てなのだろう。面倒なクエストを代わりに受けてもらって、達成した瞬間に襲ってアイテムをかつさらう。そういった汚い手口が何件も起きている。

中でも最悪なのは、アイテムだけでなく、命まで取るということ。

死角を捉え、無防備になったところを狙って襲ってくる。

クエストを達成して喜びに満ちた時、人はその達成感から一瞬無気力になる。その一瞬の隙を狙って、完全に油断しきったところで襲撃しアイテムと命を奪う。

それが奴らにとつての娯楽、ストレス発散なのだ。

よく、ゲームでNPCに攻撃できるゲームがある。現実世界ではそんなことをすれば犯罪だが、ゲームのような作られた世界ではその行為は許される。なにせ、架空の世界なので現実の法律は通用しないから。

しかし、その一線を越えると人はゲームと現実との判断ができなくなる。

やりすぎると現実までもゲームだと錯覚してしまい、超えてはなら



ない領域を踏み越えてしまい、判断能力が曖昧になっていく。そして、最終的には歯止めが効かなくなってゲームと同じことを現実でも行ってしまう。

この世界でもそれと似たようなことが起きている。何よりここは今やもう一つの現実となつている。それ故に、ゲームと現実の区別がさらにつきにくくなっている。デスゲームと化してから皆まともな思考が持てなくなり、狂人と化す人が続出。

これこそがまともな思考、この世界ではなんでもあり、現実世界で人が死んでるとは限らない、それが奴らの思考回路。

頭のネジが外れた者たちの結末はまさに世紀末。止めることなどもはや不可能。そういう奴らは現実に戻っても手に負えなくなる。ある意味彼らも被害者ではあるが、同情はできない。

ここでの裁き方は様々だ。一番手っ取り早いのはそいつらと同じように対処することだが、それは人道と倫理に反しているが故に実行できるものはいないだろう。だから、『転移結晶』を使って牢獄へと飛ばすことで奴らを裁くというのがこの世界では一番人道的と言える。

裁判はいらない。どの世界でも手をかけるとするのは犯罪に値する。なので問答無用で牢獄行き。

というわけでキリトは何か適当に高難易度のクエストを受けてクリアし、ここで奴らが出てくるのを待っていたのだが、人気が全くないことに気づいた。

先ほどまで索敵スキルで人の気配を複数感じ取っていたのだが、今はそれが全くない。

いつまで経っても奴らは襲つてこない。

確かにキリトの後を尾行してきたはずだ。大雑把とはいえ、位置も確認しているはずだ。ろくな対策もしていないとあいつらは思っているはずなのに、攻撃力にスキルを振って殺傷力で固めた集団が、わざわざ警戒して様子を見ているはずがない。

(どういう状況だ?)

安易に動くことは危険だという心と、早く動かないとチャンスを失うかもしれないという心が交錯する。

「」  
さらにそのまま三十秒経過したが、目立った物音はない。

「」  
標的を見失ったから諦めた？  
別の獲物を見つけたから変更した？

色々可能性は考えられるが、できれば前者であって欲しい。後者であつた場合、自分よりも弱いやつに目をつけたということ。それはつまり、そいつは今危険な目に遭っている可能性が高いということ。それだけはずいぶん。そう思っているのに下手に動けない。来るかもわからない時を待つ。索敵スキルに集中するように目を瞑る。そして、動きがあつた。

「」  
近くで動きがあつたわけではない。でも遠くもない。  
中間地点から、甲高い女の子の声が届いてきた。  
キリトのいる場所からそう遠くないところからで、おそらく場所は森の奥。  
どこにいるかも分からないが、その女の子が放った声の感情からして、悲鳴。

「ッ!!」  
木の陰から飛び出すキリト。

依頼については後回しだ、今はその声の主の搜索に当たる。感じ取った声質からして、かなり危険な状態であることは明らかだ。そんな状況に陥っているやつを黙って見捨てるほど冷たい人間ではない。正義感溢れる少年は悲鳴をあげた少女を救助すべく、これより迅速に少女の居場所の特定を開始する。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「ピナ！ ピナアアアアアアアアッ!!」

少女は叫んだ。

地面に横たわる自分の大切な友達を呼びかけるも、その友達は反応しない。

「お願いだよ。私を独りにしないでよ。ピナア」

少女の頬に雫が伝う。

訳あってこの森に来たのだが、一緒に組んでいたパーティーとの意見の食い違いから口論へと発展し、場が収まりそうになかったので少女は一方的にそこから抜け出した。それがいけなかった。この森は本当に迷いやすく、どこへいっても同じ景色にしか見えない。どう帰ればわからないまま進んでいたら、このフロアのモンスターとエンカウト。

少女ならば対処できた。正確には、少女と一緒にいた『ドラゴン』なら。

少女は、ここでは珍しい『ビーストテイマー』だった。システム上でイベントがごく稀に起き、好戦的なモンスターがプレイヤーに友好的な興味を示してくれれば仲間になってくれる。いわば、使い魔のよくな存在。

その使い魔である『ピナ』と呼ばれた小型のドラゴンの命がモンスターからの猛攻によって一気にライフを削られ、少女の手の中で砕け

散った。

「あ、あ、ああ」

ピナに止めを刺し、一人になった少女を三体で取り囲むのはこの迷いの森では最強クラスの猿人モンスター『ドラंकエイプ』。少女はHPゲージが既に危険域に達しているにも関わらず、ピナを失った悲しみと自分を襲う恐怖に怯えたからか、動き出す事が出来ない。

ドラंकエイプが使用するのは低レベルのメイススキルで、一撃の威力はそこそこ大きいものの攻撃スピードも連続技の段数も大したことはない。

だが、今の少女にはそれは致命傷。

一回当たれば即死亡。彼女の大切なものが失われた悲しみから来る喪失感思考を停止させている。何よりこの状況を打破するためには打開策がない以上、これ以上の抵抗は無駄。ならばもういいだろうと目をつぶった瞬間、

ザシユツ!!

閃光が瞬いた。

東洋伝統の居合斬りのように、背中に収められている抜きにくい剣を抜いて直接斬撃を喰らわせた。

「大丈夫か!？」

「え?」

目の前に降り立ったのは黒髪の少年。

ロングコートのような防具を身につけ、片手剣を構えて顔だけ少女に向けて話しかける。

「え?」

少女は呆然とする。

諦めかけていた自分の前に降り立った少年にどう反応していいのかわからない。だがモンスターの前に立ち塞がった瞬間、彼の全身からは強烈な威圧感が放出されていた。しかし敵意は感じない。瞳は険しくしているものの、穏やかな雰囲気をかすかに宿している。

「グオオオオオオッ!!」

「退がってろッ!!」

「ッ!」

残りの奴らが襲い来る。

脅威はまだ去っていない。

黒髪の少年キリトは少女を一旦下がらせ、これまでと違ってわかりやすい斬撃を喰らわせた。

直撃、直撃、直撃の連続。

当たり判定がある刃部分で何度も猿人の肉を削ぐ。気合いに満ちた声を放ちながら繰り出す攻撃は一撃一撃が重い。横薙ぎ、振り下ろし、様々な角度から剣を振るう少年の表情には焦りが無い。

低威力になる体制から高威力になる体制へと連続で構え、剣士としての技術を生かしつつAIの敵の行動パターンを分析して、戦術を組み立てる。ほとんどキリトのターンだった。反撃しようにもそれを超える速度でキリトはダメージを与える。反応の遅れたドラクエイプは次々とHPが削られていき、最終的にはその場でポリゴンと成り果てた。

勝利は決した。圧倒的な速度と剣術を振るうその腕で。

「」

無駄がなく洗練された剣術で圧倒する少年の姿に言葉を失う少女。  
少年は右手に握った片手剣を背中の鞘に収め、後ろで膝をついてい

る少女に声をかける。

「すまなかった」

「え？」

「君の友達、助けられなかった」

唐突な台詞に困惑するも、少年は視線を少女の手の平辺りまで視線を下ろす。少女も追いかけるように視線を自分の手の平へと持つて行くと、それを見た瞬間に少女の全身から力が抜けた。

そこにあつたのは、『水色の羽根』。

それが何を意味するのか、少女は先ほどあつた出来事を思い出して顔を深く俯かせる。

嗚咽を漏らしながら何度もその羽根に向かって名前を呼ぶ少女。

そんな少女にキリトは歩み寄ると、少女の前で跪き、

「でも泣くのはまだ早い」

「え？」

一見して意味不明な台詞だが、冗談とかで言っているような雰囲気ではない。

「その羽根さ、アイテム名とか設定されてるか？」

「? はい、確認してみます」

そう言われて少女は恐る恐る手を伸ばし、右手の人差し指で羽根の表面部分をクリックするように押した。すると、羽根の前に小さなウインドウが表示される。

そこには、重量と説明、そしてアイテム名が記載されていた。

「ピナの心」

それを見た瞬間、少女はまた涙を浮かべる。  
溜まりに溜まった悲しみが崩壊しそうなその寸前、それを一緒に見ていたキリトが慌てるように告げる。

「あーあーあー！ ま、待った待った！ ソイツが残ってるならまだ蘇生出来るから！」  
「え!？」

少年の口から出てきた言葉に、思わず少女は半ば口を開けたまま顔を上げた。

少年の目を見る。

そこには一切の曇りもなく、一切の偽りもなかった。

「つい最近判明したことだからまだ全体に知られていないんだけど、四十七階層の南に『思い出の丘』っていうフィールドダンジョンがあるんだ」

「『思い出の丘』？」

「名前の割に難易度が高いんだけど、そのてっぺんに咲く花が使い魔専用の蘇生アイテムらし——」

「ほ、ほんとですかッ!？」

少年の言葉を遮ると共に、少女は腰を浮かせて叫んでいた。

希望の光が差し込んできた少女にとってその情報は一番価値のあるものだった。

「でも、四十七層」

今いるフロアよりもさらに上。

ここは三十五階層。そこで少女は苦戦していた。つまり、この階層が少女にとって攻略可能な範囲の限界値。

その事実が、少女を再び悄然とさせる。

「キリトは腕を組んで何かを考え、困ったように頭を掻いていた。」

「俺が行ってもいいんだけど、使い魔をなくした本人が行かないとその蘇生アイテムは手に入れないみたいなんだよな」

「いえ。情報だけでもとってもありがたいです。頑張つてレベルを上げてから、いつか行ってみようと思います」

「いや、そうもいかないんだ」

「？」

「蘇生できるのは倒されてから三日じゃないと駄目なんだ。それを過ぎると、アイテム名が『心』から『形見』に変化して」

「そんなッ!？」

どこまで絶望させれば気がすむんだ。

このゲームは元からだが基本的にプレイヤーに優しくない。他のRPGゲームと違って適正レベルの基準が測れないのがこのゲームの特徴だ。少女のレベルは現在44。王道でいけば適正レベルは各層と同じという設定だったろう。

しかしここではそれ以上のレベルを求められる。

デスゲームと化してしまったことで安全マージンの基準を考えるのと十くらい上回らなければ攻略は難しい。四十七層を攻略する場合は最低でも55ほどのレベルが必要。たった三日でその差を埋められない。

その事実が再び少女を絶望のどん底に落とす。

あと三日で、この羽は形見へと変化する。自分の愚かさが招いた結果、大切なものを失ってしまった。

涙がついに零れる。

と、その時だった。



「だからさ——」  
「え？」

と、優しそうな少年の声が少女の鼓膜を震わせる。  
付け加えるように告げられた言葉に少女は呆然としていると、少女の目の前に新たなウインドウが表示される。

よく見ると、手元で少年が何か操作していた。

表示されたウインドウに目を通すと、そこにあっただのは二つの装備。

アーマーとダガー。

一つも見ることがない装備であったが、彼女の戦闘スタイルに当てはまった装備。

それが少女の前に表示されて戸惑っていると、キリトがぶつきらばうに説明する。

「この装備で大分底上げできる。俺も一緒に同行すれば多分なんとかなると思う」

「え？」

首を傾げる少女は、怪訝そうな表情でキリトのことを見る。

当然っちゃ当然だった。今日会ったばかりのやつにそこまでされる筋合いはない。ありがたい申し出だとしても、彼になんのメリットがあるというのか。何を企んでいるのかわからない以上、簡単には信用できない。

この世界では、他人を簡単に信用してはいけない。それが常識と なっている中で申し出に不可解さを感じた少女は、恐る恐るキリトに尋ねた。

「どうしてそこまでしてくれるんですか？」

「

返答に困ったように頭を掻くキリト。

視界が不安定に揺れ、何かを言おうとするとすぐ閉じる。

まるで恥ずかしがっているように見えた。

わずかに緊張している少年の目には、相変わらず偽りは無い。だが眉が不審げに動く。

すると少年は片手で自分の目を覆い隠し、少女に視線を合わせないようにしながら言った。一応、念を押しながら。

「笑わないって約束するなら言う」

「笑いません」

即答。

それでも少年は言いづらそうに口をもごもごとさせながら口先だけに届く距離の声音で呟いた。

「君が妹に似ているから」

沈黙が生まれた。

なんとも予想外の回答に間の抜けた表情をしてしまった。だが、少女は次第にわなわなと口を震わせ、耐えられなくなったのか思わず吹き出してしまった。その湧き出てくる衝動を抑えるように慌てて口を塞ぐが、堪えることができない。

笑わない約束は？ と、うんざりした顔で肩を落とし、いじけるように視線を逸らした。

見れば、間近にある彼女の顔は大層笑っていたが、その目だけは安堵のような雰囲気醸し出していた。

ひとしきり笑うと、笑いを呑み込むようにしてぺこりと頭を下げて礼を言う。

そして少女は大切な友達の心を抱きしめるようにして少年の顔を見ようと顔をあげた時、

「グオオオオオオッ!!」

「!？」

今まで全く気づけなかった。

悪寒に襲われ驚きとともにキリトは後ろに首を動かすと、ちょうどキリトの真後ろにドラクエイプが新たにリポップされた。

「!？」

キリトが気づいた時にはもう遅く、モンスターはプログラムされた動作を実行していた。プレイヤーを視認した瞬間に振るわれる棍棒は、こちらの動揺や警戒などお構いなしといった調子でキリトに迫る。

彼は剣へ手を伸ばす。

この間合いで間に合うかどうか、手が届くかどうかの保証はない。

それでも腕を伸ばす。

片方は少女へ、片方は剣へと。

直後、

ズバアッ!!

と、閃光が瞬いた。

「ッ!？ 伏せろッ!!」

「!？」

咄嗟に剣を抜く動作から少女を庇う動作に切り替えて、少女を抱きしめてそのまま身を屈めたキリトの真上を、何かが突き抜けた。

その瞬間、

「グオオオオオオッ  
!!!??」

ドラックエイプは絶叫した。

見えない一撃が目の前のドラックエイプを通過したのだ。

死角からの攻撃、攻撃が当たったのはちょうど上半身と下半身の境界面。くの字にへし折れるように斬られたドラックエイプは、そのまま二つになって飛んで行った。あまりの速度に、砲弾のように木に激突してバラバラに散らばる。

それだけじゃない。

ちやうど二人の真後ろを見ると、切断された木々達が斜めに傾いてそのまま地面へと倒れこんだ。

それと同時に理解した。

衝撃波が自分たちの真上を通過して、そのままドラックエイプだけでなく木々までも切断したのだと。

「最後まで気を抜くな」

「ッ!?!」

血の気が引いた二人の耳に、低い男の声が聞こえた。

眩くように聞こえた声。

とっさにそちらに視線を向けた二人は、森の奥から歩いて来る一人の男を見つけた。

彼は。

「俺の後ろに隠れてろ」

「っ!!」

抱きかかえたまま倒れていた状態から立ち上がると、キリトは少女を守るように前に立つ。

彼女が自分の後ろに隠れるのを確認しつつ、

（あいつはッ!!）

キリトは齒噛みしたが、そいつは止まることなく二人に近づく。近づきながら、二度、三度ほど大剣を振り回して背中に収めた。靴も、それを支えるベルトもないのに背中にびったりくっついた大剣に違和感を覚えるが、ここはゲームなので仕様だろうと判断する。

だが、わからない部分もある。

目の前にいる男は、かなり距離があつたにも関わらずドラクエイプに斬撃を喰らわせた。ゲームシステム上そんな技はないはずだが、彼はやった。

空気を引き裂いて攻撃を当てる技は実装されていないはずだが。

「っ!!」

少女は目の前から歩いてくる男から発せられる強烈な威圧感に本能的な恐怖を覚え、思わずキリトの服を掴む。

「」

一方でキリトはやや緊張感の欠けた表情でそいつを見つめていた。そして即座に気付く。

前方から歩いてくる男は照らしきれぬ闇の向こうから声をかける。

「どこで話そうと勝手だ。でもここは一応モンスターが常に歩き回っている場所、交戦準備を怠らないよう常に気を配っておけ」

あくまで光源は淡い月の光のみ。光が届きにくい森の中で夜を払うほど強い光が追加されたわけではない。ただ、その男が薄闇の向こうからこちらに近づいてきただけ。ただそれだけのはずなのに、まるで闇の方から遠ざかるように感じれた。

ツンツンとした金髪に、整った顔立ち。衣装は第一層の頃から全く変わっていない。屈強な体つきだが、見ようによっては華奢にも見え

る。

「お前は」

知らない顔ではない。

かつて一度——一年ほど前、まだこのゲームに閉じ込められたばかりの頃、キリトはこの男と会っている。会ったというよりかは、見たという感じで一方的に知っているだけなのだが。少しの緊張感もなく近づいてくる男の白い肌もツンツンとした金髪も、全てが鋭い刃に見える。

皆があれだけ策を練って、力を合わせて挑んで、皆で搦もうとした初勝利をたった一人で手に入れた男。

初期装備にしては変わりすぎている装備を使って、第一層のボスをたった一人で打ち倒した男。

「救援プレイヤー」

「出来れば名前で呼んでくれ。他人が勝手につけた肩書きで呼ばれるのは好きじゃない」

男は言った。

とても流暢な日本語で、自らの名を名乗った。

「俺はクラウド。ただの傭兵だ」

ようやく二人の剣士が邂逅した。

今度こそ、目と目を合わせて声が互いに届く距離で。

## 第7章

少女の年頃は十三、十四のように見えた。

名前は「シリカ」というらしい。

全体的に華奢で髪を横に二つまとめて幼い印象を見せており、黄色い装備を着込んで短剣を使うというのが特徴的だった。何となく猫というかちよつと小動物のような印象を持った。

少女は少年と、そしてクラウドと同じ空間にいる。同じ宿屋でそれぞれ食事を取っている。

無論、クラウドは本当はこんな展開を望んだわけではない。

なんか肩書きで呼ばれたからそれが不快で名前を名乗ってみたら、  
どういうわけかこうなったのだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

なんか変なところに巻き込まれてしまったらしい。

依頼が終わったんでアルゴに報告しにくくためにフィールドから抜けようとしたところ、二人も一緒についてきた。ここを抜けるのは大変なのに、わざわざ自分の後をついてくるのが不思議に思ったクラウドはフィールドを移動するための転移結晶を持っていないのか尋ねてみようととも思ったが、やっぱり詮索しないことにした。

正直どうでもいい、自分に危害を加えてこなければこつちも何も聞かないし何もしない。

と、そんなこんなで三十五層にまで戻ってきたのだが、

「シリカちゃん!!」

「!?」

「随分遅かったんだね? 心配したよ、ロザリアさんのパーティー抜けたんだった?」

「あ、あの」

「じゃあさじやあさ！ 今度俺たちとパーティー組もうよ！ 好きなところ連れてつてあげるから！」

「い、いや、その、あの、」

帰って来た途端に一体自分は何を見ているんだろうか。

自分たちよりもはるかに年下の女の子にナンパしている男どもをクラウドは呆れた目で見つめていた。

だがナンパにしてはどうも顔見知りといった感じだ。どうやらシリカは顔が広いようで多くのプレイヤーとパーティーを組んだことがあると見受けられる。

だが、男どものやり方がどう見てもナンパにしか見えない。前のパーティーから抜けて現在はフリーとなつているのを逸早く聞いている辺り、なんとなくだがこいつらはシリカを前から追っかけているのだろうと勝手に思った。

急な勧誘に戸惑いを隠せていないシリカはまた恐る恐るといった感じで、

「あ、あの、お話はとてもありがとうございますですが、もうこの人達とパーティーを組むことになつたので、

「え？」

聞き間違いだろうか。

なんか「人達」という複数系のような単語が聞こえてきたのだが。

「えっと、パーティーってこいつらと？」

「はい、もうこの人達とパーティーを組んでしまつているので、だから、すみません」

そう言つてシリカは隣にいるキリトだけでなく、後ろにいるクラウドにまで視線を送ってくる。

受け答えが嫌味にならないように言葉を慎重に選ばうとしている



が咄嗟の状況だったのでまともな返答が思い浮かばず、一生懸命に頭を下げながら目の前にいる男達の誘いを断った。

「こんな奴らと？」

「マジかよシリカちゃん」

不満と嫉妬に満ちた声色で男どもはクラウド達を睨む。

取り囲むプレイヤー達の心情はなんとなく察しはしたが、それ以上にクラウドは困惑していた。

初耳だった。

いつ自分はパーティーを組んだんだと、別のところばかり気にしていた。

だが男達はそんなことは構わずさつきからずつとこちらを睨んできていた。キリトの方も同様。男達は二人のつま先から頭のとっぺんまで細かく見てくる。

体格と装備一式。

キリトに対しては嘲笑を注ぐような視線を向けて鼻で笑っていた。確かにクラウドと比べると彼の体格は細く見える。外見だけを見ればあんまり強そうには見えない。

対してクラウドの方はどうかというと、装備の方に奴らは注目を置いていた。剣はどこにも売っていない非売品の大剣に見えるのでそこだけは認めているようだが、その代わり防具の方に奴らは注目している。

腕が露出していて肩当ても片方にしかなく、どう見ても防御力に欠けている。

「おこ」

すると、男どもの一人がキリトに向かって不満げな声で告げる。

「どこの誰だか知らねえが、抜け駆けはやめろよ。俺たちはずっと前

からシリカちゃんに声かけてんだぜ？」

「いや、そう言われても成り行きで。」

シリカと同様受け答えに困っているのか、あんまり言い返さなかった。

あまりにもシリカとパーティーを組むことに不満があるのだろうか、キリトに対して変な因縁をつけてきていた。

「なあ、あんた」

「！」

と、もう一人の小柄な男がクラウドにも因縁つけるかのように前に出てきて、身長差から顔を覗き込むように睨んで口を開いた。

「あんた、上手いことやったな。どうやってシリカちゃんに取り入ったのかは大体わかるが、あんたじゃ荷が重すぎると思うぜ。その役目変わってくれよ」

「！」

面倒だな、とクラウドは眉をひそめる。

正直、そんな台詞を聞いただけでこいつらの力量なんてたかが知れてる。

素直にそんな三下染みた台詞を吐く奴がいるなんてとクラウドは呆れていた。あまりにも自分の実力をわかってなさすぎる上に相手の実力も碌に測れない。そんな奴と組んだら逆にシリカに迷惑がかかると思うが、何を言っても自分の意見が正しいという断言調を多用してでも反論してきそうだ。

故に、そのことについては何も言うまい。

一応こいつらはクラウドのことは知らないご様子だ。救援プレイヤーだのチーターだのビーターだのと呼ばずに、ただあんたとよくある二人称を使っていることからこいつらの情報収集力も視野の狭さ

も察せれる。だからこそ、相手の実力も測れない愚か者だと第三者から認識されてしまう。

そんなやつに何か言ったらしつこく食いついてくるだけだし、そんな面倒なことだけは避けなければならぬ。

だから相手がなんと言おうとそういうくくだらない煽りには一切気にせず、普通に無視をしましょう。

「あんたには無理だ」

「ああ!？」

無理でした。

不快げな口調で眉間にシワを寄せているのを見ると、意外と彼は煽り耐性がそんなにないのかもしれない。直球で不快感をさらけ出す奴もどうかと思うが、実力に至っては確かにクラウドの方が上なのはまず間違いない。わけのわかんない状況の中めんどくさい奴らに絡まれた、なぜこんなことに巻き込まれなければならないのか、なんでいきなり変な因縁をつけられなければならないのかと、不満だらけの状況の中では流石のクラウドもこめかみに青筋を立てるようだ。

冷静な顔をしているものの、どこかムスツとしているように見える。

「とうかなんでそんなにもこんな小さな女の子に執着するのか。一、二歳ならともかく、明らかに歳が離れすぎているのにこんなにも食いついてくるなんて、なんとというか理解ができなかった。」

「ついでに言うと、男の方も煽り耐性がなかった。クラウドが冷たく言い放つと、男は狂犬みたいに歯を強く噛み締めている。」

「そして身長差もあってかクラウドは顎をあげて睥睨し、男は奥歯を食いしばりながら睨んでいる。キリトの方はそうでもないみたいだが、クラウドの方は険悪な雰囲気が発生している。」

「それを見たシリカは男たちに向かって、」

「あ、あの！ 私から頼んだんです!!」

「!?!」

「せつかくお誘いいただいたのに申し訳ないですが、もうこの二人とパーティーを組んでるので!! その、すみませんッ!!」

自棄にも似た謝罪。

一瞬言葉を詰まらせたが、誠心誠意に頭を深く下げて精一杯断りの言葉を告げた。それだけを言うとしリカは乱暴にキリトの袖を、そしてクラウドの腕を引っ張って逃げるようにそこから立ち去って行く。クラウドはいきなりの行動に戸惑ってつい「お、おい!?!」なんて言葉を漏らしてしまったが、シリカは構わず連れて行く。

「うう。シリカちゃん」

「次こそは」

そんな様子を、男どもは未練がましく見送った。

遠ざかって行くシリカの背をしつこく見ているが、シリカの方は一刻も早くこんな状況から抜け出したかったんだろう。結構な早足で男どもから遠ざかって行く。それからわかる通り、多分シリカはこいつらのことを腫物扱いしていると見える。

おそらく、次も断られるだろう。あんまりしつこいと人から嫌われるということを改めて理解したクラウドとキリトであった。

と、しばらく歩いていると、プレイヤー達の姿が一切見えないところまでやって来ていた。

それを確認するとようやくシリカは掴んでいた手を離し、安堵を浮かべたように重たく息を吐き出した。緊張していたというのものもあるだろう、ホツと肩の力を抜いた途端に二人の方に振り返って、かと思えば顔を真っ赤にさせて両手をバタバタと振りながら、

「す、すみません! お二人に迷惑をかけちゃって!!」

「いや、俺は別に大丈夫だけど」

「あ、あの! 本当に、本当にすみませんでした! あなたの同意もな

「しに勝手にパーティーを組んだなんて言ってしまったッ!!」

キリトの方はまるで気にしていないように笑みを見せているが、クラウドの方は少々不服そうな表情であった。望んでもいない状況に勝手に巻き込まれた挙句に変な因縁つけられてしまったて大変不満のようである。

一方、シリカはシリカで良い言い訳が思いつかないのかクラウドにとにかく頭を下げている。

小声早口で言い訳らしいものを連続させているが、別に彼女が悪いわけではないことはクラウドにだってわかっている。あの状況をどうにかして切り抜けようとしてもいい方法が思い浮かばなかったんだろう。だからキリトとクラウドにも協力してもらったといったところか。

まあ、結果的に面倒な場から抜け出せたのだからそれでもう良しとしよう。

「もう終わったことだ。別にいい」

「あ、ありがとうございます」

「そう言われてシリカはホツとしたような表情を浮かべる。

「それにしてもすごいなシリカさんは。みんなから人気があるんだね」

「シリカでいいですよ。そんなことないです。きっとみんな私をマスコット代わりに誘っているだけなんです」

キリトの言葉に謙遜な言葉を述べているが、どこか弱々しかった。

「でも、だからでしようね。いい気になって、『ビーストテイマー』になつたからって調子に乗っちゃって。だから、あんなことに」

止まらない後悔の言葉。

別に今そんなことを思いたいワケではないのに、自然と涙が溢れる。頬を伝うのではなく涙袋の上を通って真下に落ちていき、そのまま涙がつい口に入ってなんかしょっぱい味がした。この世界では涙すらも味が再現されているのか。

いらぬことをするものだ。そこまで再現しなくてもいいのに、その再現の高さが悲しみを増幅させる。自分は今泣いている、悲しい気持ちになつてしていると自覚させられ、その自覚さがさらにプレイヤーに感情を与える。

鬱陶しい機能に、シリカはまた自然と涙を浮かべていた。

「大丈夫」

「？」

と、落ち着いた声がシリカの耳に入ってくる。

シリカはその声に反応するようにキリトの顔を見つめると、彼は優しい瞳でシリカを見つめながら微笑んでいた。

「絶対生き返らせてみせるさ、心配ないよ」

「はー」

その言葉でシリカは救われた気がした。

心が軽くなった、希望が見出せた。不思議と彼の言葉には一切の偽りも感じられなかったのだ、この人の言うことなら信じられるかと思えたのだ。

よく考えれば、そこまで心配するようなことではなかった。

足りないレベルを補うための装備を一式譲ってもらい、それに加えて最前線で戦っているプレイヤーがサポートしてくれる。ならばそこに不安感を抱く要素があるのだろうか。正直そんなイメージが湧かない。

彼の言葉には偽りはない。ならばきつと大丈夫、絶対生き返らせられるとシリカは思えたのだ。

「」

そんな様子を、クラウドは黙って見ていた。

彼女に何があったのか、一体どういう状況なのかはクラウドは知らない。ただ単に、二人が襲われそうになっていたところを救っただけ。その前後の出来事など彼は興味もなかったし、干渉する気もなかった。依頼が無ければ他者に関与することはない。それはプレイヤールのプライバシーの侵害にあたる。

勝手に手を出せばその人に迷惑をかけることになる。クラウドはそう考えていた。

正式な依頼が無ければ、自分の出る幕はない。

あの気分が悪い状況から抜け出すことに利用されたものの、金を取るつもりは全くない。自分もさっさと抜け出したかったし、結果的に抜け出せたから別にもうそのことについては気にする必要はない。というわけで、いつまでもここに留まる必要はない。

「俺はこれで帰らせてもらう」

それだけを言うと、クラウドは背を向けた。

いつまでもここにいるわけにはいかない。こんな所にては、自分のことを知っているやつらにまた変な因縁をつけられそうだ。そんな面倒事に巻き込まれる前に、さっさと退散する。

その時だった。

「ま、待ってください!! 待ってください!! ばッ!!」

さっすきの少女だった。

だが大声で呼びかけて来る少女に、クラウドは振り返ろうともせず

突き進む。面倒事に巻き込まれるのはもう嫌だという意思の現れか、なんか声が聞こえてきた瞬間にクラウドの足の速度が上がった気がする。

「っ!!」

そんなクラウドを行かせないように、シリカは一瞬恐るべき速度でクラウドを抜かした。

残像がその場に数秒残るほどの速度。その身体能力にクラウドは呆気を取られ、立ち去ることを忘れてその場で立ち止まった。

文字通りの瞬間移動をした事で体力を消耗したのか、肩で息をしながらも両手を広げて通らせないようにしている。

「お、お礼をさせてください」

「いらない」

それだけを言っただけでクラウドは横を通り過ぎようとする。

が、

ビュンツ!! と、クラウドの行く手を塞ぐように横にズレた。

「こ、この先にある宿に美味しいチーズケーキがあるんです。それを召し上がってからも——」

「いらない」

金の無駄遣いはしない主義なんですよ、と言うかのように即答し、クラウドはシリカの横をまた過ぎようとする。

が、またしてもビュンツ!! と、クラウドの行く手を塞ぐように横にズレた。

「た、助けてくれたお礼にご馳走しますから、どうかお話だけでも——」



「いらない」

相も変わらずの返答だけしてまた横を通り過ぎようとする。

だが、シリカも退かない。通り過ぎようとするのならばまた行く手を阻むだけ。阻まれるのならまた横を通り過ぎようとするればいいだけ。そして通り過ぎようとするのであれば、またまた行く手を塞げばいい。行く手を塞がれたならまた別方向から通り過ぎればいい。

そしてそして、通り過ぎようとするれば——を、何度も繰り返す事で二人の体は何重にもブレるといふ奇妙な現象が発生していた。横を通らせないようにシリカは行く手を阻み、何としても抜けようとクラウドは的を絞らせないように高速で横に動いて隙を見つけたら抜けようとする。シリカもそれについて行くように反復横跳びを繰り返すことで、二人が何人もいるような錯覚が先ほどから呆然と見ているキリトの目に映っていた。

「ハアハアっ!!」

しばらくそのやり取りを繰り返していたが、シリカの体力が限界に近いことを悟ったのか、クラウドは動きを止める。クラウドは疲れを見せず汗ひとつ流さずにシリカのその様子を見ていたが、別の意味で汗を流していた。

しつこすぎる。

一体なぜそうまでしてお礼をしたいのか、クラウドには全く理解できない。お礼はいらないと云っているのに引き下がらずに何度も食いついて来るシリカに思わず呆れというか、なんか何とも言えない感情を抱く。

「お礼を、させてください」

と、息切れの中でシリカはそう告げた。

そうまでされてしまつては、クラウドは何も言えなかつた。どうすれば良いのかわかつているはずなのに、その言葉が出てこない。断りを入れてもそれを拒絶して何度も申し出を入れて来る少女に、クラウドは頭を抱えている。

なんかまた面倒なことになつてしまった、と。

目の辺りを押さえて悩んでいる最中、またひとつ面倒な事が投じられた。

「あゝらゝ？ シリカじゃない」  
「!?」

後ろから声が聞こえてきた。

目を見開いて呆然としているシリカを見たクラウドは、何事だと思つてそちらに振り返る。

宿の隣。

そこに立つ道具屋からぞろぞろと四、五人の集団が出てきて、その中で一番偉そうな槍使いの女性がこちらに近づいてきていた。

「!」

クラウドはそれを見て、何かに気づく。

だが、顔には出さずにそのまま何事もなさそうな表情でこちらにやつて来る女性を見ていた。

「へゝ？ 森から脱出出来たんだ？ 良かったわね？」  
「ロ、ロザリアさん」

今一番会いたくないやつに会つたような顔をするシリカ。

真つ赤な髪をした女性の名はロザリアというらしい。女性はシリカを見た瞬間に口を歪めて気色悪い嗤いを浮かべていたのを見ると、おそらくあまりいい間柄ではないようだ。

ロザリアはシリカを見下すようにして、

「でも今更帰ってきてても遅いわよ。ついさっきアイテムの分配は終わっちゃったから」

「別に、要らないと言ったはずです」

「ふくんそう。それにしても——」

早く会話を切り上げたかったシリカはただ口を閉じてしまう。

一刻も早くこいつから離れたいのに、そう簡単に解放させる気はないのかロザリアは会話を途切れさせないように言葉を続ける。

嗤って、わざとらしくシリカを追い詰めるように、

「あら？ あのとカゲどくしちやったの？」

「ッ!!」

シリカは強く唇をかんだ。それこそ血が出るくらい。仮想空間だから出血することはないので気付かれにくいのが、嫌なところをついたという達成感をロザリアに与えるには十分だった。

使い魔となったモンスターは格納することも、誰かに預けることもできない。使い魔は主人からは離れないものなのに、それがいない。だからこそ、ロザリアは敢えてそんな質問をしたのだ。わかっているのにわざとらしく、シリカの心を抉るように言う。

「あく、もしかしてえ——」

「ピナは死にました。でも!」

ロザリアが言う前に先に結論を述べるシリカは、ロザリアを睨みつけ、

「ピナは絶対に生き返らせます!」

「へえ。ってことは『思い出の丘』に行く気なんだ？ でもアンタのレ

ベルで攻略できるの？」

「ッ」

強気で言ったシリカに対して、ロザリアはなんとも思わずただ口笛を吹いてまたわざとらしくシリカに嫌な質問を投げかける。

ロザリアが言うのももつともな見解なので何も言い返せなくなってしまうシリカ。一応、キリトから底上げする装備を貰って同伴することになっているが、そんなことをこんなやつには言えない。言ったらまた嫌味を言われる。自分じゃ無理だから他人に頼るんだ、変わらないなみみたいな言葉を並べてくるに違いない。

「で？ あんたは何？ さつきからずっとこっち見てきてるけど」

と、今度は隣にいたクラウドに矛先が移った。

クラウドがロザリアのことを観察していたことに気づかれ、気になったロザリアは薄く嗤ってこちらを見てきていた。

そんなロザリアにクラウドは、

「パーティーメンバーだ。一時的なものだけだな」

「!?」

「あそこは難易度も低い。俺たちだけでも簡単に攻略できる」

「へえ」

思いもよらない言葉にシリカは驚愕の表情を見せる。

ロザリアはそんなことを言うクラウドを値踏み視線で舐め回すように観察し、また口の端を歪ませて嘲笑を注ぐように、

「アンタもその子に垂らし込まれた口？ 見たところ確かに強そうだけど はあ!? アンタまさかその装備、初期のヤツじゃないでしょうね!?! なに？ ステ振りだけで満足してんの!?! 難易度低いとは言

うけど、そんなんで行くとか自殺しに行くのと同じよ!? あっはっはっは！ 久しぶりに面白い冗談だわ〜！」

初期装備だなんていつ言ったか、そんなことはどうでもいいがこうも嘲笑うように接して来るプレイヤーにクラウドは一瞬嫌悪感を抱く。確かにこの装備は初期から身につけており、そんな装備にステ振りだけで終わっているやつなんてもういないだろう。みんな強い装備を手に入れてさらに強化しているはずだ。

しかし、ここまでウザさにステ振りしたやつも珍しい。

是非ともその鬼太郎分けにして片目を隠しているその顔に一発拳をぶち込みたいところだが、そんな煽りでは彼はビクともしない。

「あからさまにわざとらしい態度をするような奴は相手にならない。クラウドは格下を相手にしない主義だ。」

「だからこそ、彼は冷静にただ一言だけ返す。」

「今にわかる」

「は？」

意味深な言葉だけを残して、クラウドはロザリアの横を通り過ぎて宿の方へと向かって行く。

本来帰るべきルートを外れて戻って行くクラウドにシリカも一瞬言葉を失っていたが、その後をついて行くようにシリカも宿屋へと足を向けた。クラウドに並ぶように歩きながら、シリカはクラウドのこのを観察する。

よく見たら、クラウドの装備はあまり見たことがない。どこの装備屋にも売ってなさそうな防具に武器。初期装備なのかもわからないほど見たことがない格好をしている。

それなのに、何故ロザリアはこの装備を初期装備と言ったんだろうか。疑問だけが頭に浮かぶものの、シリカはロザリアの戯言だと勝手に結論づけて、先に宿屋の前に立っていたキリト共に入って行く。

「フツま、精々頑張つてね」

そんな三人の背を見て、ロザリアは不気味に嗤っていた。その笑みの裏に何が隠れているのか、その真相を知る者はいない。少なくとも今のうちは。

◇◇◇◇◇

「なんで、あんな意地悪なことを言うんだらう」

三人は宿屋のレストランで食事を取っていた。

小洒落たバーのような内装であんまりこういう場所に来ない者達であれば落ち着かないだろうが、どの宿屋のレストランもこんな感じでもうこのゲームをしているものなら何の違和感も感じなかった。クラウドだけはカウンター席で食事をとり、グラスに入ったワインを飲んでいゝ。その横に並ぶ無人の席、その奥にはバーカウンター。その近くにあるやたら小さなテーブルに、キリトとシリカは座っていた。

向かい合う形でそれぞれ食事を取っていたが、唐突にシリカが悲しそうに先ほどの女性プレイヤーに対しての話題を振ってきた。

それに対してキリトは、

「どんなゲームでも、キャラクターに身をやつすと人格が変わるプレイヤーは多いんだ。君は、MMOはここが初めてか？」

「はい、初めてです」

「だったらもう見てきたと思う。善人になる奴や悪人になる奴。それをロールプレイって従来は言ってたんだけど、ここはそうじゃない」

そう言うときリトは先ほどよりも声のトーンを落として、表情を陰しくさせて説明する。

「異常な状態になってみんなまともな考えが出来ないんだろうな。プレイヤー全員が協力し合えばクリアだって出来るかもしれないけど、中にはゲームをクリアするためにやってきたわけじゃない連中だっている」

「？」

「ゲームをやる目的は人それぞれだ。単純にゲームをクリアして楽しむ奴もいれば、収集要素を楽しんで難関な依頼をこなして達成感を得るためにプレイする奴だっている。でも、中にはそんな奴らの邪魔をするためにプレイする奴だっている」

「!?」

「現実世界でのストレス発散に一番有効なのは何だと思う？」

「えっと、やっぱりゲームとかそういう娯楽とかですか？」

「そうだな、娯楽によって人は不満を吐き出せる。だけど、それだけじゃ足りない奴だっている」

「というど？」

「ゲームってのは普段の日常とは違った刺激を味わえるものだ。ファンタジーな世界を冒険したり、モンスターを倒したりといったな。そんな刺激を別の方向で楽しむ奴らがいる。『破壊』といった刺激をな。積み重ねてきたものを破壊して他人の不幸を喜ぶ奴、必死に集めてきたものを奪う奴。そして他のプレイヤーを殺して快楽を得るといった奴が沢山いる」

シリカは思わず恐怖感を抱いた。

話を聞くにつれてシリカの顔は青ざめて行き、今自分のいる場所ではそんな恐ろしいことが行われていると思うと体が勝手に震える。

キリトは自分で話をしていて、そんな風になっていることに対して悲しそうにしている。

「現実世界での不満だけでなく、ここに閉じ込められたことによってそいつらの感情のコントロールは効かなくなっている。だから、悪事を働くことに何の躊躇いもない。それに加えて、ここはゲー

ムだ。現実の法律や常識は適用外と思っっている奴が山ほどいる」

「だから俺は、そんな奴らの考えを認めたくない。そんな奴らは現実世界でも腐った奴らなんだと思う」

そんな奴らが今もこのゲームを穢していると思うと腹が立つ。そう言うかのように吐き捨て、怒りを抱くように顔を顰める。

「キリトさん」

「俺だつてとても人のことは言えた義理じゃない。人助けなんて出来た試しがないし、仲間を見捨てたことだつて」

シリカは黙つて彼の話を聞いていた。

彼の抱えているものは、きつと自分には理解できないほど重いものなんだろう。優しい言葉をかけようにも、その言葉が見つからない。下手なことを言えば余計に彼を追い詰めさせてしまうだけ。

だからシリカの取った行動は単純だった。

彼の両手を優しく握つてあげる、ただそれだけであった。

「キリトさんは、いい人です」

「シリカ？」

「だって、私を助けてくれたじゃないですか」

不思議とその言葉に惹かれてしまった。

シリカのその言葉を聞いて、安堵したのか力んでいた力が徐々に抜けて行き、しかめていた表情も穏やかになっていく。

「ハハハッ、俺が慰められちゃったな」

思わず笑みが零れる。



それを見た途端、シリカは自分の内側で何か熱いものが込み上げてくるのを感じた。胸を圧迫するかのような、それでいて心臓の鼓動がビートアップしていき、顔がどんどん熱くなっていく。

「あ・えつと」

それに気づいたシリカは慌ててキリトの手を放してしまい、そのまま両手を自分の胸に持つてきて力強く押さえた。

「ど、どうしたんだシリカ？」

「な、何でもありません!! そ、そんなことよりもクラウドさん!! こっちに来て一緒に話しませんか!?!」

と、誤魔化すようにクラウドに話題を振る。

さつきからこつちの話に一切介入せず黙ってワインを飲んでいるクラウドも巻き込むようにして何とか誤魔化そうとしているみたいだが、そう言うわけにはいかなかった。

「つてあれ? クラウドさんは?」

「え?」

そう言われてキリトもクラウドがいたであろうカウンターに視線を持つていく。

カウンターの手前にある十人以上が座れる席には誰もいなかった。奥ではNPCがプログラム通りに皿洗いをし、何事もなかったかのよう片付けていた。それを終わるとカウンターの奥の棚に陳列しているボトルを整理し出す。

そう、いつもと変わらない風景だけがそこにはあった。

「ま、まさかあいつっ!?」

「あ、キリトさんこれ」

逃げたか!? と思ったキリトだったがシリカが急に声をかける。

キリトの顔色が変わるが、カウンター席に近づいて行って『何か』を見つけたシリカはそれを手に取る。

小さなペーパーナプキンだった。

本来、口や手が汚れた時に使うそれには文字が刻まれていた。小さなペーパーナプキンに上手く収まるように端的に小さな文字で、そして誰が書いたのかもとてもわかりやすい文章でこう記述されていた。

明日の朝、四十七層の転移門前で待っている、と。

## 第8章

花は嫌いかどうかと聞かれたら、今は好きな方と答えるだろう。

特に黄色い花。名前は確か「ササユリ」だったか。

正確な名前は知らないが、その花の花言葉は「再会」。  
彼女からもらった初めての花。

色鮮やかで、あの廃れた街では珍しく咲いていた花。土地が枯れて  
いる中で綺麗に咲き誇っていた花はとても美しく、見た者の心を清ら  
かにしてくれた。

クラウドもその一人だった。

ほとんどのものに対して興味がない彼が見惚れてしまうほどの花。

あの時、「彼女」に出会って花をくれなかったら一生花に対して興  
味が湧いていなかったろう。あの引つ込み思案で人見知りでコミュ  
障陰キヤな自分があるそこまで変わったのは、彼女のおかげと言っても  
良いかもしれない。それくらいの影響力を彼女は持っていた。

今となってはいい思い出。いや、忘れてはいけない思い出。

一生、あの時のことは忘れない。

「あいつら」の分まで生きるために。

もう二度と忘れない。

◇◇◇◇◇

『それ』はどこかを歩いていた。

腰まである長い髪の色は不自然な色。この世界ではそうでもない  
か？

要は、現実的な色ではなかった。

長い髪で整った顔立ちであるため女性のように見えるが体格から  
して違うだろう。明確な姿はよくわからなかったが明らかに不自然  
な見た目をしているそれは、どう考えても異常だった。しかし、それ  
の姿は人の目を引く。スタイルの優れた姿であることよりも、もつと

不自然な現象が注目を浴びる要因となる。

ノイズだ。

ひっそりと咲く小さな花のようにその場を歩くそれは、その輪郭を時々歪ませる。風に流される霧のように、受信状況の悪いテレビのように、ザザザと耳障りな音を立てて、グニャグニャとシルエットを崩してまた元に戻る。

ノイズがまた揺れたと思った時には、その姿は明確な形へと変貌した。

特徴を簡単に言えば、銀色に輝いていた。

胸元が開いている装備に身を包んだそれは尚も歩く。場所はどこか、具体的な特徴物がそこらに置いてない限り特定は難しい場所。

だが、そこには他にプレイヤーがいた。

通常のプレイヤーとは違って、オレンジ色の菱形を頭の上に浮かばせているプレイヤー達は急な出来事に困惑していた。

しかし、動揺はしていない。

通常なら大騒ぎになりそうな光景だが、周囲にいるプレイヤーの反応は『注目を浴びる』程度のものでしかない。

そこにいるやつらはこの世界では異端者、もしくは異常者か。それに加え、ここは仮想世界。通常の思考回路を持っていない連中からすれば、大抵の不自然な状況でさえも拒絶することなく受け入れられる。

バグか何かだと。

「おいおいなんだあ？ なんなんだこりゃあ？」

そう言っつて、それに向かって歩いてきたのはフードを被ったプレイヤーだった。全員がフードを被っているが、そいつの頬には入れ墨のようなものが入れられているため他の奴らよりも偉そうだった。どんな状況でも楽しむのが彼らのモットーであるため、彼らはニヤニヤと気色の悪い笑みを浮かべながらそれに近づいて行く。

その存在をただのイベントとして受け入れて、取り囲むようにし

てそれぞれ配置に着く。

「まったく。こんなわけのわかんないイベントまで用意してるとは、随分と手の込んだことしやがるな開発者は」

そいつらの目はそれを捉えていない。

ただのイベントとして受け入れているというよりかは、「獲物」として見ているように見える。つまり、そこらにいる通常プレイヤーと同じように扱っている。

この世界での彼らは脅威。故に、彼らに怖いものなどない。

だからだろうか、目の前にいるそれをただの獲物として見てしまっていた。

得物を持てば自分たちは無敵だと思っているのか、それぞれが得意とする得物を取り出して弄ぶように揺らしている。挑発にも見えるそれは、長髪で整った顔立ちをしているそれに対して煽りを入れている。

自信満々、やる気満々といった感じで矛先をそれに向けている。

それは幸運なのか。

または不運なのか。

どう捉えるかは、その人達次第。

『』

それは小さく笑う。

歪ませて、哀れみを交えながらも愉快そうな視線で彼らを見ていた。

笑って。

嗤って。

咲って。

自分よりも背の低い連中を見つめて、にっこりと。



辺り一面にどこまでも続いている色とりどりの花が咲き誇っている。フィールドはとても美しく、プレイヤー達を虜にするほどの絶景が広がる四十七層の『フロリア』へ、クラウドは来ていた。

待ち合わせ場所である。



あちこちで友人なり恋人なりが合流しては広場から離れていく景色の中、一人だけポツンと待ち続けるのは結構しんどいが、彼は気にしていない様子だった。

ここはカップルにとってはかなりのデートスポットらしく、イチヤイチャした雰囲気や霧気が周りに漂っている。円形の広場を細い通路が十字に描かれ、レンガで囲まれた庭園のような場所だった。

そんな中でクラウドは、大きくて重量も相当な大剣を背負って腕を組んで佇んでいる。恋人同士が行き交うデートスポットの中でたった一人で佇んでいるクラウドに対して周りには小声でヒソヒソと何か言葉を交わしているが、気にする必要はない。というか気にしてしまっただけである。

それに、自分はただ待っているだけ。

昨日会ったばかりの少女とこれからクエストに向かうために、敢えて早めに待ち合わせ場所にやって来たのだ。

故に自分は独りというわけではない、一人だけなのだ。

なんのクエストなのかとかは具体的には聞いていなかったが、『思い出の丘』と言っていたことから恐らくは使い魔の蘇生であろう。だから、先にその『思い出の丘』がある四十七層の転移門前にやって来たのだが、

「」

来ないな、とクラウドは心の中で呆然と呟く。

本来なら時間までどっかで暇を潰していようと考えていたのだが、そもそも大前提の具体的な時間を知らせるのを忘れて明日の朝しか書いてなかったので、結果としてずっと立ちっ放しだ。

ブラックな企業にかつて所属していたせいで時間厳守することを身につけていた癖もあるのだが、待ち合わせ時刻を指定していなかったのもあり、遅刻しないようにあれこれ努力してかなり前からここに立っていたのだが、今のところ来る気配はない。

朝の六時からもうかれこれ四時間ほどここに立っている。もしかしてすっぽかされたか、場所間違えたか、なんてことまで考えてしまいう始末。何時まで朝と呼ばれる時間帯なのかは具体的には知らないが、あつちが遅れてくるのでは何のための配慮だったんだろう、とため息を吐く。

かと言つて悪いのは自分であり、今から一旦自分の拠点地に戻つたとしてもすでに待ち合わせ場所にいるし、ここを出た途端にすれ違いになるかもしれない。

クラウドは疲れたように肩を落として後悔する。あの時ちやんと具体的な時間を伝えておけばよかった、予めすぐに連絡とかできるように連絡先とか何処にいるのかとか聞いておけばよかった、と。

まさかこんなところでもコミュニケーション不足に悩まされるとは立っているのも疲れて来たので花を囲う柵に腰を下ろす。

「」

たまたま彼は考えてしまう、なぜ自分はここにいるのだろうか。

ここに来た理由は調査のためだったはず、なのに今はこうして誰かの依頼を受けて生計を立てている日々が続いている。

それもネット空間に存在する仮想世界で、だ。

別に依頼を引き受けてお金を得ること自体が嫌なわけではない。

現実世界でも昔やっていたわけだし、慣れているから気にしてはいない。

問題は、何故こんなことをしなければならぬのかということだ。自分は今頃、いつものように宅配の仕事をして、仲間達と静かに暮らしているはずだった。なのに、今は何故かネットに存在する偽物の世界に閉じ込められて、皆から救援プレイヤーだのチーターだのという肩書きで呼ばれて、勝手に讃えるわ恨まれるわで毎日苦勞する羽目になっている。

それがなんとなくだがクラウドは嫌だった。

ここに来たのは、『あいつ』の痕跡を探すこと。そして事件解決に導くこと、ただそれだけの仕事であった。

それが今では一年近くこんなところで過ごしている。

一年あれば何が出来ただろう。少なくとも、こんな偽物の世界で偽物のお金を稼いで偽物の食事を摂るなんてことにはならなかったはずだ。満たされないものに苦しんでいる気がする。それがなんとも虚しく、なんとも言えない感情に包まれていて苦しい。

自分は今こんなところで何してるんだろうかと、時々虚無感のような感情が胸の中から溢れ出て来て、いつもいつも苦しい想いをするのがたまらなく辛い。

仲間会いたい。

そんな気持ちが一日過ぎる毎に膨れ上がっていく。それがどうしようもなく疲れてしまう原因の一つ。昔はこんなこと思ったことなかったのに、何故かその思いが常に頭から離れない。

顔には出ていないがなんか徐々に精神がおかしくなっていくっていいような気がする。依頼を引き受けることで気を紛らわしているのだが、疲れは溜まっていく一方だ。体力というよりは、精神的な疲れが目立っている気がする。その気持ち自体プログラムされた偽物の感情なんじゃないかと彼は思っていた。

というか、そう思いたかった。

そもそもこの体だって偽物なんだから疲れが溜まるはずなのに、クラウドは重たくゆつくりとため息を吐く。



と、そんな疲労感漂うクラウドに、

「~~~~~♪」  
「？」

滑らかなメロディが聞こえて来た。

透き通るような歌声は女性のもの、そしてどこか幼さも混じった声色だった。

不思議と耳に入ってくる歌声にクラウドは顔をあげて周囲を見渡す。

すると、クラウドよりも小さな女の子が反対側の柵に腰をかけて歌を歌っていたのが目に入った。彼女は白く、白く、白い印象を持つ少女で骨董系価値がありそうな白いリユートを奏でている。楽器を調律するような音と少女の歌声は見事に一つの音楽を奏でており、この庭園をさらに美しくしている。

咲き誇る花たちがそれに応えるように揺れる。そよ風が彼女の肌を優しく撫でる。

詠唱のような歌詞ではあったが、その少女の歌声には感情があった。旋律を奏でながら人々を思いやる気持ちが伝わってきた気がした。

「」

クラウドは歌に関してはあまり知識がない。

彼女の姿からして、恋愛歌や民衆的な歌を歌いながら諸国を遍歴した詩人音楽家の『吟遊詩人』といったところだろうか。

かつてミッドガルができる遙か昔、それも『古代種』と呼ばれる者たちがまだ多くいた時代まで遡るくらいにも、吟遊詩人と呼ばれる者が詩曲を作って各地を訪れて歌っていたらしい。

クラウドは歌自体はそんなに聞いたことがないし、歌ったことがない。軍歌というか社歌みたいなものは歌ったことはあるが、あんなも

のとは比べものにならないほど芸術的で幻想的な歌声だった。聞いている者達の心に人肌のような優しい温もりが伝わり、耳元には聞き惚れる柔らかい歌声、奏でられる楽器からは緩やかな音色を響かせている。

歌は嫌いじゃないが興味がなかった。音色に合わせて歌詞を読むことにどんな意味があるのか自体深く考えたことはなかった。

しかし、彼は今日初めて知る。

歌には緊張や不安といったものをほぐす効果があるということ、クラウドはこの時初めて知った。

このデスゲームの中で奏でられる歌声は、プレイヤー達の抱えている不安を和らげている。

立派な救いだった。少女の滑らかな歌は尚も続いている。

温かい光の中にあるような詠唱、恐らくは本来の世界ではそんな効力すら発せれないのかもしれない。だが、それでも彼女の歌は美しかった。

クラウドはただそれを聞いていた。ろくな考えしか浮かばなかった頭で、自分には絶対出せない歌声を。

そうした中、

「あ、いた！クラウドさくん!!」

「?!」

また別の少女の声がクラウドの元へと飛びかかってきた。

クラウドがそちらへ振り返ると、少年少女の二人がこちらに接近してくるところだった。

昨日会ったばかりの少女シリカと、その隣にいる少年は。

隣にいる少年は

「」

「な、なんだよ?」

誰だろう？ と、クラウドはわかっていないのか首を傾げている。見覚えはあった。

だが、よく考えたら少年の方は名前を聞き忘れていたなどこの時思いついた。

日常会話の中で幾度も少年の名前は出てきたはずなのだが、どうやらクラウドは覚えていないみたいである。クラウドは目線を少年の頭の方に持つて行くと、そこには《kiritto》と表記されていた。名前は分かったものの、これからその名前を呼べるかどうかはクラウド次第のため、成り行きを見守る他ない。

ところでシリカの方だが、以前見た時とは違った装備でやって来ていた。

肩まである茶色い髪を両側で束ねているのは変わらないが、今までの黄色い装備とは違って赤い防具に身を包んでいた。

レベルが短期間で上げられない分、装備でその差を埋めるという戦法か。昨日の今日でもう装備を変えたようだが、なぜかその装備はシリカにすごく似合っていた。戦闘スタイルに見れば動きに無駄がないように軽量化されていて、短剣を使うシリカにはぴったりだった。防御力としては片手剣や大剣スタイルのプレイヤーには劣るかもしれないが、俊敏性のあるシリカであれば問題ないだろう。

たとえ危機に陥っても、こつちがサポートすればいいだけだ。というわけで、

「行くぞ」

「会って早々いきなり!?!」

無事合流できたんでクラウドは足に力を込めて立ち上がる。

まだ会ったばかりなんですからもう少しお話ししましょうよー!

なんて甲高い抗議の台詞が後ろから聞こえてくるが、彼は問答無用で先に歩いて行く。

「ああもう、なんでいつもあんなにマイペースに動くんですかあの人

は!! 私たちも行きますよキリトさん!!」

「え、ちよ!？」

シリカは言い終わると同時にキリトの手をガシィ!! と掴み、ズルと引き摺って先に行ったクラウドを追いかけて行く。キリトはシリカの急な行動に戸惑って何度も瞬きをしているが、やれやれといった感じでそのまま流されるように行って行った。

マイペースだと言っていたが、彼はいつも通り平常運転だ。

空気が読めないというわけでもない。むしろこれでも読んでる方だと思っている。

いつまでもこんなところにいられないのだ。というか、いたくないのだ。

ここはデートスポットであるため、男一人でいたクラウドはすでに周りから浮いて見えてしまっている。そしてそこに二人の男女がやって来たことによって、少年少女のお二人はカップルだと周りは認識していることだろう。そんな中に、パーティーメンバーとはいえない一人でポツンと待っていた奴の所に、男と女の二人でやって来たシリカとキリトが合流してきたことによって、周りからはどう見られているか。

想像したくない。想像した瞬間、自分が惨めになりそうだった。

だからこそ、周りから哀れな目で見られることを避けるために彼は先に歩き始めた。

何やら頬を膨らませているシリカと、苦笑いをしているキリト。密かに手を繋いで歩いて行っている状態なのだが、幸か不幸か二人とも自覚がないままクラウドを追いかけてくる。

クラウドはそんな二人を気にしていないかのように先に歩いて行く。まるで、気にしては負けと言うかのように。

だが、クラウドには申し訳ないがすでに遅かった。

だってもう周りにいたカップル達は手を繋いでいる二人を見た後、その先を歩いているクラウドに対して、

『あんなにイケメンなのに、いつかあの人にもいい出会いが訪れますように』みたいな憐れみに満ちた目を向けていたのだから。



花で埋め尽くされた道を、三人は歩んで行く。

普通のフィールドとは違って計画段階から景観を意識して作られたせいだろうか、統一の取れた風景は他のフィールドとは違って若干の窮屈さを感じるものの、全体としてはやはり綺麗なものだった。

そう、綺麗さが目立つ故にここが戦場であるということを意識させてくれないのだ。剣を振るうにはあまりにも場違いに見える景観に、クラウドは落ち着かなかった。モンスターが出るというのはわかっていても、なんとというか景色がその意識を途切れさせる。

そういう意味では難易度が高いフィールドと言ってもいい。

綺麗な景色に気を取られて戦意を削がれた所をモンスター達が襲撃してくる。これがこのフィールドの特徴だ。一見平和そうに見える場所だからこそプレイヤーは油断してしまうのだ。綺麗な風景を目にした瞬間人間は注意力を失う、それを狙って設計されたんだろう。

大袈裟に聞こえるかもしれないが、美しい光景に目を奪われて命を落とした事例なんていくらでもある。危険な絶景スポットと検索すれば、美しい光景に目を奪われて命を落としたという事例がいくらでも出てくる。

だからここでの攻略法はただ一つ、油断しないこと。

常に周りを見ていつでも交戦できるように気を配れば、いつ襲われでも対処できる。

そう思っていたのだが、



「この層は『フラワーガーデン』って呼ばれていて、見てわかる通り街だけじゃなくてこのフィールド全体が花だらけなんだ」

「そうなんですけどね。とっても、綺麗ですっ!!」

目の前の景色に感動するあまり語彙力が欠如してしまっているシリカは、遙か彼方まで広がるお花畑に目を奪われてしまっている。

確かに、この光景を見れば誰もが美しいと思って立ち止まってしまうだろう。偽物とはいえ驚くほど精密に作り込まれたグラフィックに、今日の前にある花畑は本物だと錯覚してしまう。

だが、一応ここはフィールド。

モンスターが出るエリア。

危険地帯。

それをちゃんとわかっているんだろうかと、危機感があまりないように見える二人にクラウドは呆れたように目を細めている。のんびりと話しながら二人は歩いているため忘れそうになるが目的は使い魔の蘇生。二人の高レベルプレイヤーが応援について頼もしそうではあるが、もうちよつと緊張感を持つて欲しいものだと思う。

心ゆくまで風景を楽しみながら先に歩いて行く二人の後を、クラウドは後ろから腕を組んでついて行っている。

シリカから人のペースも考えて動いてください! と頬を膨らませて言ってきたので、クラウドは二人に合わせるように大人しく後ろからついて行くことにしたのだ。

「あの・キリトさん。妹さんのこと聞いていいですか?」

「ど、どうしたんだい急に?」

「私に似てるって言ってたじゃないですか、それで気になっちゃって

」

話題が変わると、それだけで風景の質が変わったような気もした。

クラウドはその会話に参加していないので別にどうでもいいのだが、確か現実世界の話題はここでは最大のタブーとなるのではなかったか。シリカは恐る恐るといった感じで躊躇しながらもそんな話題を振ったのを見ると、一応それがいけないことだとは理解しているよ

うである。

キリトは若干渋っていたが、やがて自らポツリポツリと話し出した。その会話自体クラウドは興味はないのか聞き流している。そもそも後ろにいるため会話は途切れ途切れで断片的にしか聞こえない。聞こえたのは、仲はそんなに良くない、妹ではなく従姉妹、普段そんなに会話はしていないとか、そういう話が耳に入ってきた。

明らかに重たい会話であったが故にクラウドは聞き流していた。

その会話にどう反応しているのかわからないのだろう、質問したシリカは何か返そうと努力しているものの口調がどこかふらふらとしている。そこから察するに、シリカにとってその会話は完全に理解ができないものだったのだと察せれる。彼女に兄や姉、弟や妹といったものがいないのかもしれない。だから言葉を詰まらせて、キリトの言葉にどう返したらいいのか迷っているのだろう。

それでも彼女は一生懸命に言葉を探して、慰めるような言葉をキリトに言っていた。

キリトはその言葉を聞いて笑顔になって、シリカの方もキリトが抱えていたものを自分に打ち明けてくれたことが嬉しかったのか微笑んでいた。

「」

仲がいいのは結構なのだが、一応ここにもパーティーメンバーがいることを忘れてないか？

おかし。

こんなの絶対おかし。

フィールド上で何気ない会話を楽しむこと自体、緊張感が欠けていてどこかおかしく思ってしまうがそれ以上にその二人の輪の中に入っていない自分もおかしいと思う。せめて自分も参加できそうな話題であれば救われたものを、そんな重い話題についていくのは専門外だ。

馴染めない。

「どうしたって無理だ。やはりコミュ障Ⅱ決して相容れぬ敵、という図式が出来つつある。この攻略は、厳しい戦いになる。」

「昨日会ったばかりの奴らと仲良くならなければならぬという難関に、クラウドは胸を苦しくする。」

「? どうしたんですか、クラウドさん?」

「そんなことを考えているのが悪かったのだろう。勝手に足が止まってしまっていた。」

「シリカがそんなクラウドに対して声をかけてくるも、クラウドはどこか上の空。あの輪の中に入っていくのがクラウドにとってはどのクエストよりも高難易度だった。昨日会ったばかりの奴らとパーティーを組んだのはいいが、彼らとどう接したらいいのかわからない。」

「どうやったら彼らと上手く話せるのか、そればかり考えてしまっている。」

「よって多少は注意散漫だったのも仕方なかったのかもしれない。」

「心配して声をかけてきてくれた少女の足元に、ツタのようなものが近付いてきていることに気付かなかった。」

「あ」

「え?」

「クラウドはそれを見て思わず変な声を溢してしまっただが、静かに忍び寄ったツタはシリカの足に絡まり、勢いよく引っ張られた。」

「よって、少女の悲鳴が炸裂した。」

「き、キヤアアアアッ!? な、なにこれ気持ち悪い!!!  
いッッッ!!!」

「急な出来事にシリカは混乱している。」





顔を真っ赤にしながら救いを求めてくるものの、無茶な事を言うもの  
のだ。見ずに攻撃を当てろというのか。

キリトの言葉は届いていないのか、シリカは悲鳴をあげるように必  
死に叫んでいた。

足を上にして宙吊りにされているせいで重力を受けたスカートが  
どうしても下がって来てしまう。片方の手は鼻を塞ぎ、もう片方でス  
カートの裾を押さえるシリカであったが、モンスターは弄ぶようにシ  
リカの体を左右に揺らしているせいでうまく押さえられない。おかげ  
で彼女のパンツは二人からは丸見えだ。

言われた通り見ないように左手で目を覆うキリトだが、クラウドは  
気抜けしたように呆然としていた。

クラウドの瞳はシリカを捉えていない。むしろモンスターにだけ  
注目していた。

・見覚えがあつたのだ。

現実世界で幾度も戦ったモンスターがこの世界にも現れたことに  
どう思えばいいのかわからなくなっていた。

何せ、そのモンスターはクラウドにとってもトラウマだったから  
だ。

キリトは強くないと言っていたが、こいつは確か相当手強かったはず  
だ。このモンスターの放つ「臭い息」にどれだけ苦しめられたこと  
か。味方全員がその息を嗅いだ瞬間に毒、沈黙、睡眠、混乱、ミニマ  
ム、トードといった何らかのステータス異常を負うことになったた  
め、クラウドはそのモンスターが苦手だった。

特にトードが最悪だった。カエルの姿にされた時はマジで心が折  
れそうになった。

だがそうも言ってられない。

このままではシリカがこいつに食べられてしまう。  
ゴバツ!! という轟音が炸裂した。

クラウドは最大の速度で間合いを詰めるため、足元のレンガの小道  
を爆発させて一気に駆けた。

激突まで、時間にして二秒もない。鼻が曲がるような臭いがクラウド

ドにまで届く距離まで来ると、次の瞬間には膨大な悪臭が場の空気を一気に殺伐としたものへと変貌させる。横薙ぎに一閃、その瞬間に体中の粘液が放たれ、超やばい空気が辺りに充満する。

確かに、キリトの言った通り弱かった。一撃で倒せるほど弱かったが、臭いは現実世界の奴と変わらないほど強烈。

豊かな香りを漂わせる綺麗な花がいくつも咲くお花畑に、顔を顰めるほどの悪臭が三人の鼻を襲う。

鼻がひん曲がりそうな悪臭に三人が苦しみながらも、クラウドはモンスターを倒した後シリカを無事受け止める。もつと空気が良ければ青春のワンシーンのような雰囲気になっていたのだが、周りの空気がそれをダメにしてしまっている。

クラウドはシリカをゆつくりと下ろす。

シリカは変わらず鼻を押さえ、涙が溢れそうになりながらもクラウドの方に振り向き、

「た、助けに来てくれてありがとうございます。あ、あのクラウドさん」

「」

「見ました?」

「」

ぺたりと座り込んでしまっているシリカと目が合うが、クラウドは何をだ? といった顔をする。

ブルブルと小刻みに震える彼女の顔は真っ赤になり、目尻にやや涙が浮かびかけている。

しかし、クラウドは本気で何のことなのかわかっていなかった。ずっとあのモルボルもどきに注目していて、どうやってシリカを助けるかということしか頭になかった。なので、何を見たのか尋ねられたらモンスターにしか注目していなかったとしか答えられない。

だが、このまま何も答えなければおそらく彼女をさらに不安にさせてしまう。

沈黙は肯定を意味する。何を肯定したのかはわからないが、おそら

くシリカにとってそれは自分自身のプライドに大きく関わるものだ。あそこまで目尻に涙を浮かばせているのを見ると、彼女自身の問題の解答を求めているということであろう。かと言って今更見てないと言っても、あれからだいたい時間が経っているため説得力に欠けて余計に彼女を傷つけてしまう。

結局シリカに何を言ってもどうにもならないと考えたクラウドは、予想外ながらも予想通りの面倒な展開に進まないように、この場にふさわしい言葉を素直に告げる。

「すまない」

「~~~~っ／／／」

それを聞いた瞬間、さらに顔を真っ赤にさせたシリカは泣きながらダメージにならない攻撃をクラウドの胸に連続させる。

ポカポカという効果音だけが、しばらくの間辺りに響いていたんだそう。

◇◇◇◇◇

それからというもの、何回も臭い息を吐くモンスターと五回もエンカウント。

先へ先へと進むごとに、奴らのリスポーンする回数が増えていく。思い出の丘にそう簡単にはたどり着けないようにしているのはわかるが、マジでゴキブリみたいにどこからでも湧いてくる。

鬱陶しく何回も現れるモンスターに三人が不快に思う。

そもそも臭い息撒き散らしてしかもグロテスクで生理的に受け付けない見た目をしている奴らなんかの良い要素などない。

何かしらの美点を見つけようとしても、よくて弱いというのと、リスポーンされるのがほぼ同種であることからテクスチャの処理を気にして使い回しにされているという点だろう。

比較対象を誤った。ゴキブリみたいにわらわらと湧いてくるモン

スター達は実にしつこい雑草そのもの。

やつてもやつても生えてくる、誰か雑草処理業者連れてこい。さて、ここでの攻略法はもう大体慣れたはずだ。

故に、キリトとクラウドは手を出していない。リスポンされればシリカが刈っている。経験値を効率的に稼ぐためだ。この中で一番レベルが低いのはシリカだ、なので彼女が率先的に倒すことで普段よりも早く経験値が貯まっていき、レベルがすぐに上がる。

実際、この短時間でレベルが一ほど上がってしまった。少しずつ落ち着いてきたのか最初シリカの体はカチコチに固まっていたが、戦闘の動きを見ると緊張の色が削げていつている。慣れてきたという証拠だろう、これならもうアシスト無しでも攻略できそうだ。

自分の身は自分で守りながら三人は赤レンガの小道を進んでいくと、色とりどりの花が咲き乱れる登り道が見えてきた。

一際小高い丘。

おそらくあそこが今回の目的地、『思い出の丘』であろう。

「あれが『思い出の丘』。あそこで使い魔を蘇生させるためのアイテムが手に入るんだ」

「あれが」

「ただ登るだけの一本道だけど、ここからさらにモンスターは多くなる。気を引き締めていこう」

「はいー」

目的地が見えたことで一瞬安堵してしまったが最後まで油断してはいけないとキリトが念を押す。

もうすぐ生き返らせられる喜びで自然と引つ張られるように思い出の丘へと足を進めるが、キリトの言う通りリスポン数が異常に増えた。先に助言されていたこともあって、シリカは既に交戦準備を終えている。キリトから渡された黒い短剣は不思議と自分の手に合ったおかげか、今では指先を動かすくらいレベルで扱える。

威力も高く、加えて連撃に優れた戦闘スタイルであったため、シリ

力は大概の敵は一人で落とせるくらいまで成長していた。

キリトとクラウドの方はどうかというと、それぞれが得意とする得物を自分の体の一部と認識しているかのように、軽々と武器を振ってモンスター達を撃破していつている。キリトは片手剣であるため一体一体丁寧に倒していつているが、クラウドは身の丈ほどの大きさの大剣を軽々と振るうことで、複数のモンスターをまとめて撃破している。

(桁が 違い過ぎる)

シリカは二人を見てそう思った。

主にクラウドを見て、だ。

見ていればなんとなくだがわかる。彼は普通のプレイヤーとは違う。人と人の実力差ではない何かを彼から感じ取った。

なんて言い現せば良いのか、言葉で説明すること自体難しい。強いて言うならまるでネットワークRPGでレベルが百以上違うキャラクターを相手にしているように感じる。何かトリックがあつて攻撃が効かないのではなく、単純に『経験と実力』が凄すぎて比較にはならない。

キリトも、隣で戦う彼を見てそう思ったらしい。

あの武器を何年も使っているように見えた。それこそ、このゲームが始まる前から。

しかし、だからこそ疑問に思う。

彼は一体なんで今回一緒にいつてきたんだらうか？

ハイレベルな戦いをしてる奴がわざわざこんなことをしているのはおかしい。シリカとは昨日初めて会ったばかりだというのに、彼と一緒にいつて行くと自ら申し出てきた。理由はわからないが、少なくともキリトと同じ理由なわけがない。妹に似てるからとか、そんな都合よく理由が被る訳が無い。

そういえば他にも疑問に思うところがある。初めて会った時も彼はハイレベルのプレイヤーでありながら、それよりも下のレベルの階

層で彼は攻略していた。目的があつてあそこにいたのは確かだが、そんな高レベルのプレイヤーがなんでレベルの低い場所で攻略していたんだろうか。

装備についてもそう、彼の装備は一階層から全然変わっていない。シリカは知らないだろうが、キリトは第一層の攻略時に彼を見ている。その時のことはまだ鮮明に覚えている。故に、彼があの時どんな姿だったかもすぐに思い出せる。今この場にいる彼も、あの時と同じ初期装備でいる。

普通ならあり得ない。

初期の装備に身を包んで攻略なんて、正気ではない。攻略組じゃない奴らでさえも、お金を貯めて上の層でレベルの高い防具や武器を買っているというのに、彼は今日まで初期の装備のまま攻略している。明らかに異常だ、何故もつといい装備にしないのか理解できない。

疑問ばかりが頭に浮かぶ。

問い詰めたところだが幾度もそのチャンスを逃し、そして今はモンスターの襲撃を退けることで精一杯でそれどころではない。なので今はそのことは置いておいて攻略に集中しようと、そして攻略が終わった後に聞いてみようかと、二人はそう思っていた。

クラウドのアシストもあつて、いつの間にか思い出の丘までもう目と鼻の先の距離まで近づいていた。

というか、丘の頂上にすでに足をつけていた。

「うわぁ」

ようやくたどり着いた頂上は、空中の花畑。

辺り一面に咲き誇る花を一望できるその場所はまさに空中庭園と呼ぶに相応しかった。

美しい光景に目を奪われるが、目的を見失つてはいけな

「(一)、(二)に 蘇生の花が」

「ああ。ほら、あそこだ」

キリトが剣を背中に収めながら指をさす。

その先には、花畑の中央に白く輝く大きな岩があった。

岩というよりかは大理石で出来た台座。

シリカはそれを見ると二人を置いて勝手にそこに向かって走り出していた。

四角く切り取られて綺麗に磨かれた台座へと近づき、覗き込んだ瞬間に台座が光を放ち、その光の中から一輪の花を咲かす直前の蕾が現れた。

シリカはその蕾を恐る恐る手に取る。

その花の茎に触れた瞬間それは優しく砕け散り、シリカの手の中には鮮やかな光だけが残されていた。光は徐々に弱まって行き、視認できなくなるくらいに光まで収まると、種子が芽吹いて一輪の花を咲かせた。

美しい花に息を飲むシリカは、そつとその花の表面に触れる。

### 『ブネウマの花』

と、書かれたネームウインドウが表示される。

その花は辺り一面に咲いているどの花よりも美しく、幻想的で心が奪われるようだった。

「これでピナが生き返るんですよね？」

「ああ」

「良かったあ」

「でも、この辺はまだモンスターが湧く場所だから一旦街に戻ってから生き返らせた方がいい。その方がピナも喜ぶさ」

「はいー」

キリトの言葉に賛成すると、シリカはメインウインドウを開いて花をそこにそつと乗せた。失くしたりしないようにアイテム欄の中に



無事に格納されたことを確認すると、それを閉じる。

(ピナにまた会える!!)

そう思うと自然と高揚感に包まれる。

あとは帰って蘇生すればいいだけ。キリトから事前はどこか安全な街に即帰れるように転移結晶を渡されているが、使うまでもない。一気に帰還してしまえばすぐに生き返らせてあげられるが、これは緊急用に渡されたもの。命の危険を感じた場合のみに使用すると決めている。

今はまだその時ではない。

よって、三人は歩いて帰ることに決める。

幸運なことに、丘を降りるのは簡単だった。モンスター達が襲ってくることもなく、楽に麓まで辿り着けそうであった。

シリカは駆け下りるように先に麓まで降りて行き、その後を二人も追いかけて行く。

「なあ、あんた」

「？」

と、その時。

不意に隣からキリトが声をかけて来た。

妙に焦ったというか慎重そうな音色を秘めていた。クラウドはただ平然となんだ？ とだけ返すと、キリトはそんなクラウドを睨みつけながら、

「あんた、一体なんなんだ？ 一体何を企んでる？」

「？」

質問の意味がわからなかった。

よくわからない質問にクラウドが首を傾げていると、キリトは声の

トーンを低くして、

「ずっとあんたに聞きたかった。なんでログアウトできないと既に報道されているのにログインして来たんだとか 聞きたいことが山ほどあるんだ」

その質問に、クラウドは眉をひそめた。

「あんたはどう考えても異常すぎるし不可解な点がありすぎる。装備も初期の頃から全く変わってないし、そんな状態で第一層のボスをたった一人で攻略するなんて明らかに無謀だし馬鹿げてる。ボスは複数のプレイヤーが協力して挑まれることを想定してHPも攻撃力も高く設定されているのに、アンタはたった一人で攻略した」

「それがなんだ？ 別に一人じゃ絶対に倒せないと設定されているわけじゃないだろう。パーティーを組まなきゃ絶対に攻略できないなんて誰が決めたんだ？」

「確かにそうかもしれない。でも、普通はそんなことは実質不可能なはずなんだ。雑魚も湧いてくる中に攻撃力の高いボスに真っ先に狙われたら捌くのは至難の業だ。さらにはHPも高く設定されていて、一人のプレイヤーの攻撃で全部削るには時間がかかりすぎる。だから複数で挑んで雑魚の処理を担当するチーム、ボスに攻撃を加えるチームという風にいくつものチームに分かれて役割分担をして攻略するんだ。そうしないとすぐ死ぬからな。なのに、あんたは違った。普通のプレイヤーなら即HPを削られて命を落とすのに、あんたは何故かほぼ無傷であそこに立っていた」

「つまりあんた自体がおかしい。その装備だつてそうだ。初期装備にしては変わりすぎてるし、何よりアンタが使っていたソードスキルの方も見たことがない。斬撃を飛ばすなんて、今の所使ってるのはあんただけだ。俺が知る限りでは、そんな技は実装されていないはずだ。実装されてもいないものをなんであんたは使ってる？ というより、

「なんであんだだけが使ってる？」

「もし隠し武器とかそういうのがあるんだったら、みんなの生存率をあげるために公開するべきだろう。公開してより強い武器をみんなに共有するべきなのに、何故かそれをしない。それはつまり隠しているか、もしくは自分にはしか使えないか、あとはその武器の出所が自分にもわからないからだ。違うか？」

「今までの質問に何か答えられない理由があるならこれ以上は強引に深入りする気はない。でも、これだけは聞かせてくれ」

「あんたは、本当にプレイヤーなのか？」

うざったい尋問でどこか言葉が足りていないようにも聞こえるものに、クラウドはめんどくさそうにする。

キリトの質問の意味がわからなかったクラウドはなんて答えたらいいのかわからなかった。本当にプレイヤーなのかと聞かれたら、一応プレイヤーということになる。この世界でゲームを攻略している者達のことをプレイヤーと呼ぶのなら、クラウドは歴としたプレイヤーである。

だがそもそも何故それを今聞く。

それを聞いて何になる。

それはどういう意味だ。

と、そればかりがこっちは気になる。

正直もううんざりだ。こういう展開を予想していなかった訳ではないが、何で今このタイミングでそれを聞く。

だが、答える義理はない。答えたところでこっちは何のメリットもない。答えた見返りに何かもらえる訳でもないし、他のプレイヤー達に代わりに弁明してくれるわけでもない。

素直にここに飛ばされたなんて説明してもどうせ信じない。気づいたらこの装備だったし、自分にもわからないが何故か使えていたな

……！  
なんて言っても、そんな都合のいい話なんてあるかと言ってくるに違いない。ここで何か説明したところで余計な誤解を生むだけ、また面倒な噂話が広まるだけだ。

そう思っただけの沈黙を貫くクラウドだったが、

「……」

麓まで降りて来た瞬間、不穏な気配を感じ取った。

一見すると何も無いように思えるが、短い橋の先にある木陰から何人もプレイヤーの気配を感じる。

その数人から感じ取れたのは敵意。いや殺意か。

それを感じた瞬間、クラウドの顔から一気に表情が消えた。キリトはまだ気づいていないようでこちらを睨んでいるが、クラウドは取り合わない。

明確にこちらに対して殺意を向けている連中にクラウドは警戒する。

「？」

キリトもそんなクラウドの表情を見て疑問に思ったのか、橋の向こうに注目する。

「っ!？」

と、ようやく気づいたのか、彼も表情を険しくさせて木陰に隠れている連中に警戒しだす。

「？ キリトさん？ クラウドさん？」

だがシリカだけはまだ気づいていなかった。

彼女は橋を渡ろうとしている。その先はデッドゾーンになりつつ

.....  
あることに彼女はまだ気づいていない。

クラウド達が急に立ち止まった事に疑問に思ったおかげで彼女は足を止めてくれたが、危機は今にも訪れようとしている。

首を傾げているシリカにクラウドは近づき、

「退がれ」

「え？」

「出てこい。もうとつくに気付いているぞ、『タイタンズハンド』」

クラウドはそう言うと、シリカを自分の背中に隠すようにして自分の位置を調整する。ついでに目の前の景色に向かって、第三者に呼びかけるような台詞を投げかける。

端的に、それでいて率直に誰かに対して呼びかけると不意に気色の悪い風が吹いた。

そのタイミングを見計らったかのように、橋の向こうから一人のプレイヤーの影が現れる。

「え!？」

驚くことに、シリカはそのプレイヤーに対して見覚えがあった。

前回シリカはそのプレイヤーと一時的にパーティーを組み、彼女からの陰湿な嫌がらせに耐えきれなくなって自ら抜けたことがある。彼女はとにかくいい印象を持たない。昨日だって初対面のクラウドに対してウザク接してきた。

そんな奴が、何故か目の前に現れた。

隠れていたのを見破られたら素直に出てきて、自らを強烈に自己主張するように口を歪める。

そして見下すような視線でクラウド達を見つめて、シリカの動揺や警戒などお構い無しといった調子であっけらかんとした声で、

「アタシのハイディングを見破るところかギルド名まで特定している

なんて…… やっぱり侮れないわね、救援者さん」

元からクラウドのことを知っているような口調で静かに告げると、イタズラのように口角を上げる。

「その様子だと首尾よく『プネウマの花』をゲットできたみたいねえ？」

「言っただろ、今にわかると」

対して、クラウドも最初からわかっていたかのような口調で返す。

「どういふことなのかわかってないのか、シリカもキリトも疑問の表情を浮かべている。」

「あく、そんなこと言ってたわね。意味わかんなかったから二秒で忘れたけど…… まあ、一先ずはおめでどう、シリカちゃん。じゃ早速――」

真つ赤な髪に十字の槍を装備している女性プレイヤー、ロザリアは相変わらずのウザさで自分を象徴するように、口元をばつくりと愉快に引き裂いた笑みを見せつけてこう言った。

「その花を大人しく渡しなさい」

## 第9章

「な、何を言ッてッ!?」

シリカは自分の耳を疑った。

ただでさえ良い印象を持たないロザリアが、更に印象を悪くする台詞を放ってきた。

苦勞して手に入れたレアアイテムを大人しく渡せ。

彼女はそう言った。

まるでそうするのが当然とでも言うかのように平然と言い放ったのだ。

余裕そうな顔が作るその表情は、相も変わらず歪めている。

花がいくつも咲き誇るフィールドが異様な緊張に包まれる。殺伐としていて、話し合いでこの場が治るとは思えない空気が漂っている。

「聞こえなかったのかしら? さっさとその花を渡せって言ってるんだけど?」

もう一度、にへらと笑ってただそう言った。

その声を聞くだけでも不快なのに、もう一回ふざけた台詞を言いやがった。そこでようやくシリカは状況を飲み込めたいらしい。この先の展開を想像してしまっただが故に、シリカは冷え性に悩むように自分の両肩を抱いてクラウドの背後に身を隠す。

ロザリアは虚勢を張っているがクラウドは無視した。

表情を一切崩さず、真顔を貫いている。余裕そうにしているというよりも単にロザリアに対して興味を抱いていないといった様子だった。格下を見るような目で先ほどからロザリアを睨んでいるクラウドだったが、その時今まで無言だったキリトが進み出て、

「やっぱりそれが狙いだっただようだな。オレンジギルド『タイタンズ  
ハンド』のリーダー、ロザリアさん」  
「!?」

シリカはそれを聞いた瞬間、鼓動が異様に上昇した気がした。

ギルド名は先ほどクラウドが言っていたのと同じであったが、その  
前に付け加えられたものを聞いて驚愕していた。

『オレンジ』

それが何を意味するのか理解してしまっただからか、シリカの指が小  
刻みに震えだしてうっすらと汗が湿る。

キリトの言う『オレンジ』とはいわゆるプレイヤーの頭上にある  
カーソルの色である。

カーソルの色は二種類存在する。

最初は全てのプレイヤーのカーソルの色は『グリーン』。しかし、圏  
外で自分以外の他人のプレイヤーにダメージを与えると、カーソルの  
色がグリーンから『オレンジ』に変わる。その中でも『プレイヤーキ  
ル』通称『PK』を行なった者、つまりこの世界で殺人を犯した者は  
カーソルの色は『オレンジ』でも、ゲームの死が現実の死に直結する  
SAOで人殺しという最大の罪を犯したという経緯から『レッドプレ  
イヤー』と呼ばれる。

そんな犯罪者集団が築き上げたギルドをオレンジギルドと通称さ  
れている。

知識としてはシリカも持ち合わせているものの実際に目にする機  
会はなかったので、今それが目の前に現れたことで気色の悪い恐怖心  
が生まれて心を驚掴みにしている。

だが、

「で、でも……だって！　ロザリアさんは『グリーン』じゃ……ッ!?!」

目の前にいるロザリアの頭上に浮かんでいるのは疑うことなく緑  
色に染まっている。プレイヤーに手を出せば、誰であろうと例外なく



オレンジ色に染まって他のプレイヤーから犯罪者だと認識されるはずなのに、ロザリアは普通のプレイヤーと同じような扱いになっている。

キリトは低い声でシリカに説明する。

「よくある手口さ。グリーンの中の犯罪にも手を染めていないプレイヤーが獲物を見つけて、オレンジが待ち受けているポイントまで誘い込むのさ。そうすることで、自分は犯罪を犯すことなくプレイヤーを殺せる。昨夜の俺たちの部屋で話を盗み聞きしてたのも、あいつのお仲間だよ」

「そ・そんなッ!?!」

つ・ま・り、だ。

シリカも殺されるところだったのだ。

あのままパーティーを組んでいたらオレンジがたくさん集まっているポイントまで誘導されて、そのまま攻撃されていた。運よくシリカはそこから抜けることができたようではあるが、たった今それが遅れて起ころうとしている。

「じゃあ・ここ二週間・ずっと私とパーティーを組んでたのは・ツ・!?」

「そうよ、シリカちゃん。戦力を確認して、冒険で金とアイテムが溜まるのを待ってたの。本当なら今日にもヤ・つ・ちやう予定だったんだけど、一番楽しみにしていたあんたが急に抜けちゃったりするから予定が狂ってどうしようかと悩んでいたら……」

ロザリアは唾液まみれになった舌で不気味に唇を舐めると、

「レアアイテムを取りに行くって言うじゃない? 『 pneumaの花』って今が旬だから高く売れるのよねえ、だから諦めずに跡をつけさせてもらうことにしたのよ。本当、情報収集は大事よねえー」

糞野郎ロザリアが懇切丁寧に自分の目的を明かしてくれた。

こうも敵に対して自分の目的を包み隠さずベラベラと説明するあたり、確かに情報収集の重要性を理解しているようである。

情報提供をしてくれたお礼に思わず感謝したくなるが、こんな奴に渡すアイテムなぞねえ。

と、ここでロザリアはキリトに視線を向けて肩をすくめると、馴れ馴れしく疑問を投げかけてきた。

「でもそこまで解っててその子に付き合ったそのアンタ、馬鹿なの？ 良い装備に身を包んでるからそのツンツン頭の救援者さんよりも機転が利く坊やだと思ってたけど、思い違いだったのかしら」

キリトのついでにクラウドとシリカまでもさらっと侮辱する台詞を述べ、シリカは視界を赤くするほどの目頭が熱くなり強い憤りを覚える。

騙していただけでなく他人を卑下するような発言にいい加減うんざりしてきたのか、我慢の限界で腰に下げている短剣に手を伸ばそうとした。

その時だった。

「くだらない話はもう済んだか？」

「!？」

「あ？」

「話す暇があるんならさっさとかかって来い。そうしてくれた方が、依頼が手早く済んでこっちは助かるんだがな」

シリカとキリトよりもさらに前に出て、今まで黙っていたクラウドが退屈そうにそう告げた。

今回シリカについてきた理由をさらっと軽く言っていたが、大したことでもなさそうにクラウドは冷静に、それでいて冷たく遇らうよう

に右手を差し出す。追加でくだらないというこちらの心情を相手に伝えるために指を開き気味で曲げて、左手を腰に持つてくるポーズを取る。

そんなクラウドにロザリアは、くすくすと窺うような笑みを浮かべ、

「いやあ、こっちとしてもあんたと会うのはお断りだったんだけどね。でもしょうがないじゃない、あんたがその子について行くとか言うから仕方なく機会を窺う羽目になったんだから。こっちの苦労も考えよ、本当だったら話す間もなくアイテムを手に入れたその子を襲うはずだったのに、あんたみたいな『ピーター』がいるせいでそうもいなくて、わざわざ臭い息撒き散らすモンスターを狩りながらこっちはずっと待ってたんだから」

「あんた達の事情とかこっちからしたらどうでもいいし興味もないね。いいからさっさと来い、隠れている連中全員まとめて相手をしてやるからとつとと出てこい。時間の無駄だ」

ロザリアが何言っていたのか数秒で忘れるくらいどうでもいいのか、クラウドは聞き流すと同時にだるそうにため息を吐く。

実際、何言ってるのかわからなかった。

悪役らしい台詞を並べて話しているのはわかったが、そもそも文章が意味不明すぎて常人が理解するには難しすぎる。展開を進めるための過程をすっ飛ばして次に行きたかったクラウドは、何の躊躇いもなく大剣を抜いてロザリアに剣先を向ける。

そのクラウドの態度に、ロザリアは顔に苛立ちを見せる。

苛立ちを見せたことで小物感を醸し出すことになるのだが、ロザリアは頭に血が登って思考が正常でなくなりつつあるのか、むしろ愉快そうに笑いながらクラウドに話しかける。

「あんた、状況わかってんの？ それとも調子乗ってるの？ たった一人で第一層のボス倒したくらいで、自分が特別だと思ってるの？」

「え？」

その言葉に反応したのはクラウドではなく、シリカであった。

『大剣を背負ったツンツン頭のプレイヤーがたった一人で攻略した』  
確かそんな噂だったはず。

その噂はシリカの耳にも届いていたが正直信憑性も全くないし、一種の都市伝説か何かだと思っていた。ボスは複数で挑んでようやく倒せるように設定されているかと思っていたため、たった一人で攻略ができるわけないかと思っていたシリカは、攻略組にいた誰かがラストアタックを華麗に決めてことで、そこにいた別の誰かが大袈裟に噂を流したんだと適当に思っていた。

だが、ロザリアがクラウドに対してビーターだの救援者だの言ったことで、その噂は本当だったことを今理解した。だからロザリアはクラウドの装備を初期装備と言っていたのだ。初対面にも関わらずクラウドの装備が初期から身につけているものだとわかった理由は、彼が有名人だったからだ。

ロザリアはそんな奴を前にしても一切動じず、変わらずに余裕そうにしている。

「みんなから救援者だとか呼ばれて調子乗って、さらに運よく一人で攻略できたくらいで最強気取ってるってこと？　だとしたらあんたもうダメね。つかさ」

ロザリアは中指をこめかみの辺りに当てながらその指をツンツンとつつくと、

「本当に頭イかれてんの？　そんな初期装備で私たちに挑んで、本気で勝てると思ってんの？　イカサマで勝ったあんた如き眼中にないのはこっちも同じなんだよ。多少うまく攻略出来たからって付け上がんのも大概にしな」

その自信がどこから来てるのかわからないが、クラウドを見下す言葉も幾度も投げかけると満足したかのようにこめかみに当てている指を離して、そのまま親指と合わせると勢いよく弾くことで、パチン！ という音を放った。

それが辺りに響いた途端に、あちこちに置かれている木のオブジェクトからのっそりと無数の人影が姿を現した。どいつもこいつも頭の上に禍々しくオレンジ色に染まったカーソルを浮かばせている。

その数は十人程度。そのほとんどが男性プレイヤー。顔とか装備とかいちいち特徴を言っていたら日が暮れそうなので、適当にモブA、モブB、なんならまとめて男達と呼んでも全く問題ないだろう。意味は通るし、実際そんな顔した奴らばかりが並んでいる。これと違って特徴らしい特徴もないし、声もみんな同じで判断しづらいし、よくて銀のアクセサリやサブ装備で重く身を固めている程度なので、細かく紹介する必要もない。

量産型の面子ばかりが小物っぽくニヤニヤと笑っている。

これだけ人がいれば、そう思っているんだろう。

赤信号みんなで渡れば怖くないといった感じで、集団であればどんなものでも楽々倒せるなんて幼稚な考えを抱いているようだ。

いくつもの剣先がクラウドに向けられる。

逃げられないように取り囲み、男達の持つ得物達がクラウドの命を刈り取ろうと凶悪に光を放っている。

「く、クラウドさん!!」

シリカは必死に叫ぶが、クラウドの表情は先ほどから一切変わっていない。

動揺どころか何の感情も浮かんでいない。

「」

付き合いきれん、とばかりにクラウドはため息を吐いて、

「来い」

そう言った途端、周囲にいた男達の一団が一斉に剣を構えて走り出した。

「オラアアア!!」

「死ねやアアア!!」

無謀にも男どもは唇の端を歪めて襲いかかってくる。

救援者だろうがチーターだろうが、ビーターだろうが男どもは気にも留めない。

第一層のボスを倒した？ それがどうした？

今の自分達ならそんな奴軽々と倒せる。序盤のボスなんて今の自分達には脅威にもならない。そんな奴を倒したプレイヤーが相手であつても、自分達の敵ではない。しかも、初期装備のままにいる相手なんて雑魚でしかない。弱い部分しかない奴に遅れを取るなんてあり得ない。

クラウドが襲いかかってこようが、逆に血祭りに上げてやれば良いだけの話だった。

だった、のに。

それら全ては三秒で狂ってしまった。

ブオンツ!! という新たな音が炸裂する。

「「「「「ツ!?!「「「「「」」」」」」」

一瞬だった。

クラウドの腕が真下へと動いた瞬間、周りにいた男どもは一人残らず思いつき吹き飛んだ。

何が起きたのか、そこにいた全員が理解できていなかった。

見たままを説明すれば、クラウドの持つ大剣が下から上に一回転しながら振り上げた瞬間に「竜巻」が発生し、周りにいた連中を空中へと吹き飛ばしたのだ。周りにいた男どもは空中へと投げ出されるも、宙で体をひねってバランスを取り戻して着地点を探すために視線を地面へ走らせる。

爆心地——男達全員といくつもの赤レンガを吹き飛ばしたその中心点には、三秒前と同じ格好で平然と彼は突っ立っていた。

彼の瞳は鮮やかに緑がかつた不思議な輝きを帯びており、その目で宙に浮かぶ男達を睨む。彼は一言すらも発さず、宙に浮く男達へと無言のまま襲いかかる。

やっていることは単純だ。宙に浮いて、足場がなく、身動きが取れなくなった男達へと一人ずつ攻撃を加えているだけ。しかも刃による斬撃ではなく、ご丁寧にもその逆側による打撃だった。

だが、極端に速い。速すぎる。

バスターソードは見るからに相当な重量があるはずなのに、その常識をも超える速度でクラウドは振り回している。

男達が実際に浮いている時間は、たった一秒もない。なのに、彼らにはまるで自分達が空中でピタリと固定されてしまっているような錯覚を覚えた。それほどまでに、クラウドの動きは速かった。視認すらも許さない、まるで止まった時間の中を唯一自在に動き回っているかのごとく。

正常に時間を見る者達、すなわちキリトとシリカ、そしてロザリアには爆心地を中心とした見えざる嵐が巻き起こっているように映ったはずだ。

刃の部分を自分に向け、峰の部分による一撃を受けた連中は地面へと叩きつけられ、花畑の中へとめり込み、あるいは橋の下に流れている水面に飛び石のように水面の上を滑っていった。

都合十人程度の男達を薙ぎ払うと、クラウドは静かに橋の上へと着地する。

湿ったそよ風が彼の頬を撫でた後、宙に舞い上げられた男どもの最

後の一人がようやく地面へと落下した。

地面に激突する音が花畑に鳴り響く。

「加減はじしたつもりだ。この程度なら死者が出ることはないだろう。そつちが頑丈になるように大層な装備で身を固めていてくれたおかげで、こつちとしてもやりやすく助かった」

「な、な、ッ!？」

その静かな声が侮辱だとわかっていても、ロザリアは一言も発せなかった。

周りにいた男達の命は奪っていない。が、体の芯を完全に揺さぶられ、指先を動かすのが精一杯だった。あんなにいたのに、一瞬で再起不能にさせられた。その事実がロザリアの思考を混乱させる。

「川に吹き飛ばした奴もいたが、まあ、意外と浅いようだから溺死することはないだろうな」

クラウドは一度だけ橋の下に流れている川に目をやってポツリと呟いたが、

「っ!!」

苛立ちを含みながらも声を発せなくなったロザリアはただ震えている。

あの余裕そうで、それでいてウザさに重点的にステ振りし、相手を見下すような発言をすることしか取り柄がないロザリアが、たったの数秒でそれら全てを崩壊させた。振り払って逃げようとした。先ほどまであったはずの余裕そうな表情は消え去り、今は逃げるということしか頭にない。

自惚れていたなんて考えはなかった。何かの因果が狂ったとか、予想外だったとか、とにかく自分の見る目がなかったということにはし



たくないらしい。

だがもはや恐怖を得る資格すらも奪われていた。

自分の作戦は完璧、いつものように大軍で襲えば余裕で倒せると思っていたものが一瞬で打ち砕かれて、現実逃避を起こしているに見える。

展開が早すぎる気もするが、あまりの驚愕にロザリアの感覚は麻痺していた。舌打ちだけを残し、腰から転移結晶を掴み出して天に向かって口を開く。

「て、転移——ッ!!」

だが、最後まで言葉は続かなかった。

原因はクラウドにあった。

アイテムなぞ使ってんじゃねえの如く、クラウドはそこらにあった石というか岩のオブジェクトにバスターソードを突っ込んだ。正確には、岩の根元の地面にぶつ刺した。そして、そのまま持ち上げるように岩を掘り起こすと腕を乱暴に振り回した。強引に抉り出した岩は大剣から離れ、恐るべき速度で投げ放たれる。

周りへの配慮とかもちやんと考えていたんだろうか。岩は綺麗な曲線を描いて、標的へと直撃する。

「ゴバツ!？」

見事に、岩は彼女の腹に直撃した。

声の代わりに、ごぼつ、という水っぽい音が発せられた。唾液のようなものがぼたぼたとこぼれていく。その拍子に、手に持っていた転移結晶を落としてしまう。

キリトは逃げようとするロザリアを逃すまいと抜剣の準備をしていたようだが、目の前の光景を前に剣を引き抜いて駆け出そうとする体制で思わず立ち止まっていた。そしてシリカもまた、彼と同様に驚愕した表情で固まってしまっていた。

二人は、今まで勝ち誇っていたロザリアの無様な姿を呆然と見るだけでした。

「っっ」

彼女は体をくの字に折り曲げ、口に両手を当てて、ごほごほと短く咳き込んだ。その度に、指の隙間からぬめつとした透明な液体がこぼれていく。

「が、はあっ!?!」

あの一撃を食らって立っていられるなんて、彼女は相当に体幹を鍛えていると見える。

倒れてはいないが、ふらふらとした動きで、一步、二歩と後ろへ下がる。その仕草に、これまでの余裕はなかった。演技をしているようには到底見えない。本当に苦しんでいるように見える。

「っ!?!」

一連の流れを見ていたというのに、それがあまりにも規格外でこのゲームでの常識をも超える出来事を目の当たりにして、キリトとシリカは冷水を浴びせられたように思考が遮断されかけたが、

「ッ!!」

キリトはチャンスだと思っただろう、意識が戻った。

苦しんで身動きが取れなくなって今なら捕まえられる、と。苦しんでいる人間に剣先を向けるのは若干抵抗があるが、はつきり言えば綺麗事を並べているだけの余裕などない。捕まえられる時に捕まえなければ、こいつはさらに多くの犠牲を遊び半分で巻き起こすことだろう。

キリトは歯を食いしばり、覚悟を決めると抜剣して近づこうとする。

「クソがつ!!」

「!?!」

だが、その前にロザリアの方が先に動いていた。ロザリアはまた腰のポーチからまた別のアイテムを取り出した。

茶色い球体。

それだけで、ここから抜け出すには十分だった。

真下に思いつき振り下ろされると球体は一撃で爆発し、周囲に火花を散らして煙を撒き散らした。

「なっ!?!」

キリトは煙で視界がゼロになった状況で、それだけ叫ぶ。

ロザリアが行なった動作は忍者映画などでよく目にする雲隠れの術のようなもの。一瞬の出来事で理解が遅れてしまったが、彼女のあの表情に今までの軽々しい雰囲気はなかった。

まるで、酔っ払いが殴りかかるような乱暴で暴力的な動きだった。

あの表情からして、かなりこちらに恨みを持っていることだろう。下手に動けば見えない中で攻撃されてしまう。何も見えないという状況は余計に焦りを助長させて行く。

すぐ近くにいるはずのクラウドの顔さえも見えない。

その状況で、バタバタという足音が遠ざかって行くのが聞こえた。

近づいてくるのではなく、遠ざかる。それが何を意味するのか、それがわからないほどキリトだって馬鹿ではない。

「ま、待ってッ!!」

何も見えない状況で、それでもキリトは当てずっぽうに声を投げか

ける。

足音が聞こえる方に追いつくキリトだったが、そんなキリトに牽制の攻撃を二発、三発と小さな短剣が飛んできた。

「!?」

「っ!!」

キリトは見えない中で攻撃されてきたことに目を見開き、一瞬硬直してしまつたものの、クラウドが視界の悪い中でキリトの目の前に現れて大剣を盾にして防いでくれた。

「無事か？」

「あ、ああ」

時間にして十秒程度で煙の発生時間は途切れ、ようやく視界は再び綺麗な花畑を映し出した。

そう、そこにはいつもと変わらない絶景だけが広がっていた。視界を塞いでいた煙が収まって、変わらず美しく花が咲き誇る中にあの口ザリアの姿はない。

キリトもクラウドも結局、これとっていい身動きは取れなかった。

「」

クラウドはただ目の前の景色に視線を向けている。

正直追うべきなのか、それともまた現れるのを待つべきなのか、よくわからない状況だった。

短剣の投げ具合からして、あまりいい腕前とは言えなかった。一直線にダーツのように投げるのではなく、回転させて投げてきたのでおそらく無我夢中で投げたのだろう。そして、ロザリアは視界を塞がれているクラウド達にこれ以上の奇襲を仕掛けるという事もしなかつ

た。

おそらく、自分が危機的な状況に置かれていることでそれに対処するのが精一杯で、他のことまで頭が回っていないのだろう。

なんにしても、逃がしてしまったのには変わりはない。

「すまない」

「？」

と、キリトが小さな声でそう言った。

それと同時に、握り締めた掌から力がこもったような音が聞こえてくる。

「俺が足引つ張ったせいで」

「」

それに対してクラウドは返事をしない。

数秒の沈黙だけが、二人を包み込む。キリトは何も役に立てなかったと思っっていることで自分に対して苛立ちを覚えているようだが、クラウドは無表情のまま黙っている。そこに怒りも悔しさもない。

キリトが悔しがっているのを察してはいたクラウドは、それに対して吐き捨てるように言った。

「お前が気にすることじゃない」

「え？」

「顔はわかったんだ、見つかるさ。それに、あいつは俺たちに対して相応な恨みを抱いただろう。ほうっておいてもあっちから姿を現す」

そこまで言うと、言うだけ言ってキリトの横を通り過ぎて行く。

そこらに散らばっているオレンジプレイヤーを適当に掴むと、呆然と橋の上で見ていたシリカの方へとぞんざいに次々と放り投げる。

シリカは一瞬ビクツと肩を上げて震えてしまったが、クラウドはそ

んなシリカの方を見ようとせせず、バスターソードを背中に戻すと、転移門がある方向へと向かいながら再びキリトの横を通り過ぎて、素っ気ない調子で言った。

「そいつらをどうするかはお前次第だ。お前が引き受けている依頼を達成するのもし、なんなら二度と犯罪を起こさないために殺すのもいいだろう」

「!?」

「どちらにしても俺の依頼も達成される。あとは任せたぞ」

「ッ!!」

軽々と告げたクラウドはそのまま歩き出す。

今までろくに反応を示さなかったキリトは、ゆっくりと首を動かしてクラウドの背中を見た。彼は悔しさのあまりずっと噛んでいたせいで赤く染まった唇を動かし、ポツリと呟くように改めてこう尋ねた。

「あなた 一体何なんだ？」

「何でも屋だ」

クラウドは歩き出しながら、からかうような気軽さでこう答える。

「何でも屋をやっているただの傭兵だ」

◇◇◇◇◇

静寂だけが残された。

クラウドが去った後、キリトは依頼主から全財産をはたいて渡された濃紺の結晶を使用して、打ち倒されていた男どもをそこへ乱暴に放り込んだ。

それを終えた後、キリトは緊張状態を解除して疲れがどつと押し寄

せてきたのかふらついてしまった。

「だ、大丈夫ですか!？」

そして、ただ見ることしかできなかつたシリカも硬直状態を解除してパタパタと走ってくる。

キリトは疲れのあまり、意識が集中できていないようだ。今日だけでいろんなことがありすぎて頭が混乱しているみたいである。今のキリトには、シリカが何となく心配して近づいてきてくれたというこゝとしか掴めなかつた。シリカは傷とかがないかキリトの体をあちこち見つけているが、ようやくキリトは落ち着いたのかやがて囁くようにシリカを見つけて言った。

「ごめんな」

「え?」

「結果的に、君を囿にするような役回りをさせちゃつて」

その言葉に、シリカはただ首を横に振ることしかできなかつた。

恨んでいるかと聞かれたら、多少は怒りは抱いている。何も教えてくれなかつたことで、自分は何もできなかつたのだ。事前に教えてくれれば、自分も何か役に立つために準備をしていただろう。

しかし、今はそれよりも心の中にありとあらゆる感情が入り混じつていて、もはやどう思えばいいのかすらまともに判断できなくなつていた。

「街まで送るよ」

それだけを言つて、キリトも転移門がある方へと歩き出す。

クラウドの姿はもうない。景色の奥を見つめても、彼の姿は既になかつた。

「あ、えっと」

「？」

「足がうまく動かさなくて」

と、シリカが足を震わせてそう言った。

あれだけのことがあったのだ。正常でいられるのも難しいだろう。そんなシリカにキリトは軽く笑って右手を差し出す。その手を握ると不思議と緊張は消え去り、少しだけだがやっとシリカの顔に笑顔が戻った。

二人は三十五層の宿屋を目指して歩いて行く。

結局、彼についてはあまりわからなかったが、収穫はあった。

キリトが守るべきもの、そして全ての人々がこのゲームから解放するには、彼の力が必要だと確信した。彼が何であるかはわからないが、みすみす彼を野放しにするわけにはいかない。どんなやつであろうが、彼はやはりこの世界をクリアするためには必要不可欠な存在だ。

結局の所、進むべき道は一つだ。

(何でも屋 クラウド)

キリトは降りかかってきた新たな問題を、少しずつ整理して行く。救援者。

何でも屋。

そしてクラウド。

◇◇◇◇◇

ロザリアは森の中にいた。

「くそっ!!」



その動きは遅い。口元に当てた手の指の隙間から尚も唾液がこぼれ出ている。時折、腹からの痛みで「ほごほ」と咳き込み、苦しみのあまり膝をついたりしている。

「つぎはやがってッ!!」

あと少しで獲物を殺害できたのに、と悔しさのあまり奥歯を噛み締めている。

そんな彼女を、人工の光が照らしていた。それに加え、人工の木、風、音が彼女の周りに響いている。電脳空間に作られた全てのものが、今の彼女にとつては不快だった。ここなら自分は現実とは違った生き方ができると思ったのに、ここなら自分は別の自分になれると思っていたのに、全てが台無しになった。

「が、あ」

体の内側からの痛みと寒気で、全てが不愉快極まりない。木立がプログラムされた風で優しく静かに揺れる音でさえも、彼女にとつては不愉快なノイズでしかない。

それでも彼女は必死に体を動かす。

(あいつら... どう調理してやろうかな)

恨み。

恨みの塊。

それだけが彼女の脳内を支配していた。あいつら次に会ったらどうやって殺してやろうか、どんな風に苦しませてやろうか、それだけしか考えていなかった。どんなに苦しんでも許してやらない。苦しませて苦しませて、このゲームがたとえ終わったとしても現実世界でも必ず見つけ出して永遠に苦しませる。

終わらない悲鳴を聞かせてもらう。

.....?  
それを考える度に、ロザリアの唇の端が曲がる。  
と、そこで彼女の思考は途切れた。

.....  
ふと、目の前から異様な気配を感じ取ったのだ。

闇の向こうに浮かぶ一つの人影。

.....  
そいつに近づく度に、より明確な姿が彼女の瞳に映し出されて行く。

銀色の長い髪。

光り輝くような長身と、その肢体を包む黒い装束。胸元だけが開いており、正確な性別などは全くわからないが、少なくとも外観の見た目だけなら女性的にも見える。喜怒哀楽の全てがあり、それでいて人の持つ感情とは明らかに異質なものを根幹に秘めた、極めて整った顔つき。

「何よあんた」

苛立ちを含ませた問いかけを投げるも、それは応じない。

正面から向かい合うロザリアはただイライラとしながらそいつを観察する。

対して、そいつもロザリアのことを観察する。

瞳の色がおかしく、翠玉色だった。その中にある瞳孔は人間とは思えないほど異様だった。

猫の瞳みたいに、縦に伸びていた。それが持つ銀髪の髪は、それ自体がうっすらと光を放っているように見える。

だが、そんなことはどうでもよかった。

行く手を塞いでいるそいつに対して、ロザリアは徐々に怒りを増幅させている。

しかし、それにしても笑っているようにも見える。

「三つ数えるからとつととそこを退きなさい。退かないんならそのム力つく顔面に風穴開けるわよ」

そうやってロザリアはカウントする。

彼女のカウントは、ありがちな間延びしたものではなかった。

むしろ、

「はいさんにーいちドーンッ!!」

早口言葉のような無茶苦茶なカウントを終えると、背中にあった槍を引き抜いて爆発的にそいつに向かって前へ出る。

正直、退こうが退かまいがどつちでもよかった。どちらを選択しても、ロザリアはそいつに対して攻撃する気満々だった。オレンジになっても構わないから誰かを殺してやりたいほどロザリアは苛立っていた。八つ当たりできるなら誰でもいい、オレンジになろうが構わない。

誰だか知らないが自分の前からとつと消え失せろ、死んでな!! みたいに突っ込む彼女だったが、そいつは回避しようとも思わなかった。

むしろ、両手をゆつくり広げたまま口を歪めてロザリアを眺めていた。その懐へ飛び込んだロザリアの槍はそいつの顔面を突き刺す寸前まで近づいた。

しかし、

ザシユツ!! と。

直後に、原因不明の衝撃がロザリアの上半身を一直線に貫いた。

「あ?」

重たい刀のようなもので貫かれた。いや、実際刀だった。

ただその刃は通常の刀よりも長く作られており、ロザリアの胸を貫いた刀はそのまま真後ろの木立にもぶつ刺さるほど異様に長かった。まるでマグロの一本釣りのように貫かれたと知覚した直後にはロザリアの体は地面に叩きつけられ、後ろへ二回、三回と転がされ、信じられないほどの苦しみが彼女を襲った。それは上半身の傷口からだけでなく、口や鼻からも溢れた。洒落や冗談ではなく、傷口から内臓がこぼれ出ないのが不思議なほどの大きさの傷口が、彼女の胸元にあった。

「がっ、アアあああああああああああああああああああああああ  
ああツツツ!!!?!”

何が起きたのかわからなかった。

わからないが、その瞬間辺りに響いたのは彼女の絶叫だった。

獣のような、人間らしい叫び。

何が起こったのか分析する前に、第二波がやってきた。

「や、やめッ!! た、助け、ぎっ、がああ、あああああああああああ  
あああああああああああああツツツ!!!?!”

ザシユツ!! ドシユツ!! バシユツ!!

という何かを貫く音と共に、張りのあるウインナーを鋭利なもので切り千切るような音まで響いていた。何が起きているのか、やられているロザリアですらわからなかった。

ここには誰もいない。よって何が起きているのかは『それ』にしかわからない。

何が起きているのか、それを引き起こしている『モノ』が人間なのか猛獣なのかも判別できない。不気味でグロテスクな音が幾度も鳴り響く。近いものを挙げるならミンチ機のようなものだった。骨も血もこの世界ではただのプログラムのはずなのに、湿っぽい音がぐ

ちやぐちやと繰り返し鳴っている。

『』

それは笑う。

楽しそうに、嬉しそうに、幸せそうに、面白そうに。

辛うじて地面を這っているロザリアの顔に刃を幾度も突っ込んでいる。絶叫が気分を盛り上げるBGMとなり、それがさらに気分を高揚させている。既に戦闘不能になっているロザリアに無限に刀を刺し込んでいる。

五回刺して十回刺して十五回刺して二十回刺して としている内に、不意に女の体が砕け散った。見るとHPバーがいつの間にか赤くなっており、それを越えた途端にロザリアの体は空中にフツと消えていった。

『フルtu』

『それ』はもはやそちらを眺めずに、熱い吐息を漏らしながら徘徊を再開する。

『どk o j w i s k w k o j h e d、くr a g e h v s d e w u q  
vド』

音の聞こえ方がおかしかった。

その声が発せられる度に何度もブレて、その瞬間に音源の方向までもズレている。まるでステレオのヘッドホンを左右逆さまに付けているような、不自然な音を広げながら再び暗闇へと消えて行く。

そこには、誰もいなかった。どこを見回してもいなかった。

あったのは、少量のアイテムと、あのロザリアが愛用していた十字の槍だけ。

## 第10章

暗闇の中で、焦げた匂いが鼻についた。

田舎の中の田舎、そこにある小さな村。

パチパチという弾けるような音が、夜の街に響いていた。その暗い情景をふき取るように、あちこちにオレンジ色の火があった。

普通の燃え方ではなかった。

道路、街灯、ベンチ、給水塔、場所を問わずに輝く炎は飛び散り、こびりついた泥のようにあらゆる部分に燃え移っている。

『母さん』

無我夢中で手を伸ばした。

息をする度に自分の肺が燃える。胸が熱くなって涙が出てくる。

目の前にあつたのは、絶望。

生まれた時からずっと一緒だった人が、目の前で失った。自分のせいなのに代わりに大人たちに頭を下げてくれたり、迷惑をかけることもあつたけどそれでもあつた一人の息子を大事に育ててくれた、大切な人。

女手一つで一生懸命大事に自分を育ててくれた人が、憧れていた人に奪われた。

『フツ』

『それ』を人と呼ぶにはあまりにも恐ろしかった。

悪魔、死神、怪物。

そしてその持つ武器は、剣というにはあまりにも長く鋭すぎた。鋭い切れ味で派手な装飾はなくシンプルなデザインに、ただ刃を長くした刀。少し振るだけでも刃は恐ろしい切れ味を持ち、尚且つ素早く広範囲に攻撃できる。

まさに斬ることに特化した刀だった。

人の命を奪える凶器として申し分がないほど美しく芸術的な刀。あれにやられた者はどんな気持ちだったのだろうか、考えたこともあった。痛みを感じる暇もなく死に逝くのだろうか、斬られたことすらも気付かず苦しい思いもせず、死へと贈られるのか、と。

彼は息が焼かれながらも足を動かして前へ進んだ。

目の前に広がる絶望は、いつしか憎悪へと変わっていった。その憎しみが膨れ上がるたび、彼の中にあつたものはどんどん崩壊して行く。人道、倫理といったものはあいつには必要ない。理不尽には理不尽で返す。その思いを胸に、彼はただひたすら奴の後を追っていた。

『凶に乗るなッ!!』

大切なものを奪われた怒りだけが脳内を支配していた。奴を追いかけて、復讐してやるといふことしか頭になかった。

その次の瞬間には、体の内側が不自然に震えていた。内臓の動きがおかしい。いや血流すらも違和感があった。まるで革袋の中で別々の生き物が蠢いているかのような動きをしていた。

『人間ごときが私を倒せるとでも思ったのかッ!!』

あの刀で斬られた者は苦しい思いをせずに

痛い。

苦しい。

痛い苦しい痛い苦しい痛い苦しい痛い苦しい痛い苦しい痛い苦しい  
痛い苦しい痛い苦しい 悔しい。

血だまりが服へと染み込み、わずかな傷口の穴から鮮血を垂らして意識が闇の中へと沈んで逝く気分だった。

通常の人間なら確実に死んでいる。しかし、彼にはまだ息があつた。皮肉にも、胸を貫いた剣が血管から血管へと巡る血を傷口から漏

れ出ないようにしてくれたおかげで、なんとかまだ保っていられた。しかし、それだけだ。

命を繋ぎ止める、意識を手放さないようにするのが精一杯。そこから先の起死回生はやって来ない。でも。

それでも。

『俺の』

『!?!』

掠れた声が聞こえた。

それは確かに彼の口から放たれたものだだったが、これまでの畏敬を含んだような口調ではなかった。彼は怪物に対して、人間の言葉でこう言ったんだ。

『俺の 家族を 俺の 故郷を よくもやってくれたな』

『ッ!?!』

『お前だけは 許さないッ!!』

その言葉が放たれている最中も、彼の苦しみは続いていた。

『ぐあ、あああああああああああああああああつ!!』

鼓膜が破裂しそうなほど叫んだ。眼球が内側から飛び出しそうな、変な圧力が内側から加わった。胸に食らいつく激痛を必死に抑えつけ、両手で冷たい刃を握って、奴の体を魔晄溜まりの中へと放り込んだ。

その後、何がどうなったのか観察することはできなかった。勝利の愉悦などなかった。

一刻も早く、彼は唯一の親友と幼馴染の元へと歩いて行った。意識を今にも手放してしまいそうなお中、とにかく二人の安否を確かめた



かったのだ。一秒でも早くこの地獄が消えて無くなる事だけを祈って、そのまま両目を閉じた。

そして、次目を開けるのが五年後になるなんて、この時は思ってもみなかった。

一つの戦いが終わったんじゃなかった。

むしろ。

あれが全ての始まりだったんだ。

◇◇◇◇◇

あらゆるプレイヤーが集う街——アルゲード。

そこは沢山のNPCやプレイヤーが集まって、昼夜問わず賑わう形に自然と作られた繁華街だ。食い物や屋台、酒場の店先であらゆる会話が飛び交ってさらに賑わいに花を咲かせている。

薄汚れた服や装備が雑にかけられ、金額設定も適正とは言えず文句を店主に放つ者。酒と煙草で体にわざわざデバフをかけて弱体化させているのに無理して口喧嘩を買っている者。ギャハハゲラゲラないわそれーっ！ と馬鹿笑いをして誰かに対してからかいを投げかける者。

賑わいというか、猥雑。

広大な面積に隙間なく饅えた匂いのする空気を張り巡らせ、おそろく純粋なプレイヤーならば近づくことすら躊躇う階層であろう。

しかし、逆に言えばここは流行の発信基地として機能しているとも言える。主に酒場だ、酒場はあらゆる情報が毎日飛び交う場所として有名。そこで屈強な男たちは自分たちの功績を自慢として相手に言って優越感に浸るといふことをしているが、それを視点を變えて聞けば価値のある情報へと變えることができる。中には、聞いてはいけない話題すらも耳に入ってくることもあるが、ここにいる奴らはそんなことは気にしない。価値のあるものかどうかなんて、彼らに測れるものではないのでただの雑談にしかない。

毎日絶える事なく人と情報が行き交う街。

そのため、ここで手に入らない物はないと囁かれているほどの繁栄を見せている。

「いらっしやいいらっしやい！ 安くしておくよ、ちよつと見ていかないかい？」

「今ならこれがお買い得！ これは滅多に手に入らないレア物だよ！」

「なあ少しだけでも見てかない？ あんたにだけは安くしとくからさ〜」

「おい！ それ触んなら買えよ！ うちはとにかく新品を扱ってんだ！ 誰かがそれに触った時点で中古になっちまうんだからよ。買わないつもりなら触るんじやねえよ！」

商売人としては言葉が汚い気がする。

そんな雑踏の中、人々を蹴散らすように歩いている一人のプレイヤーの姿があった。朝から客が来なくて困っていた行商人プレイヤーはそいつを視界に捉えると、せめて回復アイテムだけでも買ってもらおうと、背中越しに声を掛ける。

「よう、そこの兄ちゃん」

しかし行商人は声を掛けた事に対してすぐに後悔した。

ふと歩みを止めて振り返ったそのプレイヤーの眼光が激しく、自分の心臓を射抜くかのように思えたのだ。

「なんだ？」

そのプレイヤーは、厳しい表情に似つかわしくない声を出して尋ねてくる。

無意識なのか、それともそういう空気だったのかはわからないが、気がつくに行商人とプレイヤーの周りにはぽっかりと空間が広がっ

て、道行く人々がその光景を目にして関わらまいとし、息を詰めながら避けて通って行っていた。

「あ、いや、ひ、人違いだったみたいだ」

整った顔のわりに厳しい眼差し。

目を合わせただけで緊張感を生み出し、話しかけるだけでも勇気がいりそうな雰囲気とそのプレイヤーから発せられている。明らかに声をかける人物を間違えてしまった。まだ二十代前半と思えるそのプレイヤーの尋常ではない様子に、なんとかその場を取り繕って逃げ出そうとした行商人だったが、今度は逆に呼び止められる。

「待て」

「は、はい!？」

声を掛けられただけで肝が縮んだのか、行商人は肩を上げて固まっていた。

「見たところ行商人として商売をしているみたいだが、他の層の街や村に行くことがあるのか？」

「ま、まあ。ここを拠点として活動しているが、アイテムを収集するためにいろんなフィールドに出ることはあるかな」

「じゃあ、その層での情報も耳にすることもあるのか？」

「あ、ああ。いろんなところに赴くからそういう情報も勝手に入ってくる。かもしれないですね」

「モンスターや、プレイヤーの噂もか？」

「ま、まあ、多少は。専門外だからあまり取り扱ってませんが」

行商人プレイヤーはいつの間にか敬語になっていた。目の前に立ちただかる金髪のツンツン頭プレイヤーの威圧感に、自然と膝が震え

てくる。？

と、そんな行商人に構うことなく、彼は個人的な事情をぶつけるように低い声で尋ねてきた。

「長い銀髪、長い剣。そういった特徴を持つモンスター、もしくはプレイヤーに心当たりはあるか？」

「長い銀髪に長い剣」

「今探しているんだが、なんの手がかりもない。そういった奴を見たという話を聞いた事はないか？」

「いや、えっと」

手を横に振りかけた行商人だったが、ふと何か思い至ったかのように手を叩く。その仕草には、なるべくこいつの前から早く立ち去りたいという気持ちも多分にあった。

「そう言えば、前どつかの犯罪者ギルドがそんな奴に襲われたなんて話を耳にしたことがあったような」

「!?」

それを聞いた途端、彼の目が光った気がした。行商人は慌てて後ずさろうとしたが、肩を掴まれて動けなくなる。

「それはいつのことだ？」

「た、確か、半年前だったかな？ えっと、まだ五十六層を攻略し始めた時期くらいに聞いた気がする。なんか、どつかの犯罪者ギルドが一夜にして消えたつて噂。なんでもノイズまみれで姿はよくわからなかったらしいから銀髪かどうかは知らないけど、少なくとも長い髪を生やしてたって聞いたよ。カーソルがなかったらしいから多分モンスターなんだと思うけど、そいつが犯罪者ギルドの連中を根絶やしにしたとかなんとか。それ以上のことは詳しく存じませんので、はい」

「半年前、それだともう遅いな。そいつを見たって言う奴は？ 噂が

「広まってるんなら誰かが広めたんだろう？ その噂を広めた奴は誰だかわかるか？」

「さ、さあ。酒場で誰かが話してるのを盗み聞きした程度なんで出所は知らないです。もしかしたら、本当にただの噂話だったのかもしれない」

「そうか」

彼は頭の中で所要日数を確かめていたようだが、残念そうに舌打ちをする。

「今頃はあいつの痕跡も消えてるな」

場所はわからないが、それだけの日数が経っているなら現場には何も残っていないだろう。遺体も残らないこの世界じゃ解剖結果すらも出せない。それらしい情報を手に入れたというのに、鮮度が落ちすぎていてあてにならない。

眼光鋭いプレイヤー、クラウドは苛立ちのあまり奥歯を強く噛み締めていると、

「あとう」

行商人は、恐る恐るクラウドに声を掛ける。

「差し出がましいようですが、そんなの俺らなんか頼らずとも情報屋のアルゴのそこに行けば詳しい話を聞けるんじゃないですか？」

「もう行った」

「あ、そうですか」

ちよつと八つ当たり気味に答えた。

ここなら何か手がかりが得られるのではないかと思つてやってきたのだが、あの情報屋でも空振りに終わったのだと、クラウドは語つ

た。

「その、モンスター？ プレイヤー？ と、何かあったんですか？」

「別に」

睨んでいるように見えた。

実際はただ単に目を鋭くしているだけなのだが、行商人視点から見ればめっちゃくちゃ苛立つて睨んできているようにしか見えなかった。うっかり気安く語りかけるものではないと反省する。

「」

クラウドは再び黙り込む。

何故そいつを探しているのかわからないが、どこまでも追いかけてでもそいつの居場所を見つけるつもりだった。この一年と半年ほどの期間、多くの村や街、様々な狩り場を駆け巡っては奴の情報を手に入れようとしてきた。依頼を引き受けて生計を立てながらこの仮想世界で生活しながら足取りを追おうと密かに行動していたものの、それでも奴の行方は杳として知れない。

だが諦めるつもりはない、絶対に。

「あ、あのう」

「？」

「あんた、ひよつとして攻略組だったりとか？」

「？ なんでそう思うんだ？」

「あ、別に深い意味があるんじゃないでして！」

普通に尋ね返したと思うのだが、クラウドの形相に行商人は敬語をおかしくさせながら首を振る。

「てつきりそうなのかなと。私の勝手な思い込みでしたが、ハハハ」

「

それだけを聞くとも何も言わず、もうあんたに用はないとばかりにクラウドは行商人の前から立ち去った。

結局ここでは、あのかつての『英雄』の情報は得られなかった。

◇◇◇◇◇

それから半月ほど経ったある日。

クラウドはかつて一度訪れた、四十七層の『フロリア』へと足を運んでいた。

色とりどりの花が咲き誇るフィールドから離れたところにある森のフィールド。クラウドは歩きにくい森の中を一步一步慎重に足を進めながら、一心不乱に『奴』の痕跡を捜し続ける。

すでに太陽は西の空へと没しつつある。実際の時間と同期することでベストな体験をできる種類のゲームであるとされるこの世界では、実生活と同様の時間軸を過ごすことで違和感なく仮想世界を活動できるように設定されている。

クラウドがここに訪れたのはまだ日が明け切らぬ薄明の時間帯だったのだ。ほぼ丸一日この場で探索し続けていたという計算になる。通常のプレイヤーからしてみると、採取や経験値稼ぎに訪れたにしては時間がかかりすぎるし、何より攻略が進んだ今、もっといい狩り場もあるだろうと疑問に思われるに違いない。

「

かかんでいたクラウドは一度足を伸ばすために立ち上がると、周囲を見渡す。

元から太陽の光を通しにくい森の中はかなり暗くなっており、今頃花畑の方は夕日の光を受けて真紅の園へと急速に変化しているに違いない。

「日が暮れるまでにはできれば何か手がかりを見つけたかったんだが  
ここまでか」

クラウドの声には焦りの色が含まれていた。

採取や経験値稼ぎに費やせる時間は、このゲームでは非公式ながら  
プレイヤーの間で設定を決められている。狩り場を独占して経験値  
を稼いだり、貴重な資源の乱獲を防ぐために大手のギルドが勝手に決  
めたらしいのだが、こつちからすればただ単に恨めしい設定でしか  
ない。

現実世界の掟に縛られているせいだろう。もしくは、この世界の製  
作者の意思を汲み取ったのだろうか。

本来、クラウドが為さねばならないものを達成しなければなら  
ないというのに、現実の掟に縛られた者達が勝手に決めたルールによっ  
て足止めを喰らうことにクラウドは苛立ちを見せる。

仮想世界の何でも屋としての依頼も山積している以上プライベ  
ートでの時間が取れない中、出直すというのは論外だった。

「ロザリアの消息が絶つたのは俺達を襲った後。転移結晶を使わず  
にフロアを移動するには転移門を通らないと移動できないのに、あ  
いつは転移門を使わなかった。足取りから考えて、おそらくこの森に  
いると思っただが」

自分に言い聞かせるように独り言を述べながら探索を続ける。

彼がここに来た理由は、以前捕獲し損ねたロザリアの足取りを追う  
ためだった。

あれからだいぶ時間が経ったというのに、全くと言っていいほど姿  
を現さなかった。キリト達と別れた後、クラウドはすぐさま転移門の  
方へと向かった。ロザリアは転移結晶をクラウドの攻撃で落として  
しまったので、他のフロアに移動するには転移門を使うしかない。

急いで向かってそこにいたプレイヤー達に事情聴取したところ、ロ



ザリアと思われる人物が転移門を使ったという情報は得られなかった。

だとすれば、ロザリアはまだ四十七層に身を潜めているということになる。クラウドは粘って転移門周辺のフィールドを探し回ったが、影すらも掴めなかった。このフィールドで身を潜める場所があるとしたら、少し離れたところにある森だと思っただが、時間も時間だったので彼は搜索を後回しにした。それに、どうせまた襲撃するために姿を現すと思っていたクラウドは、それ以上の搜索はせずに家へと戻った。

しかし、事は上手く運ばなかった。

あれから半年以上経っても、ロザリアは襲撃をしてこなかった。

疑問に感じたクラウドはアルゴにそれらしい情報はないか尋ねに行った所、噂話ではあつたが誰かに消されたという話を聞かされた。ソースはどこから得たのかはわからなかったが全然姿を現さなかったのを考えると、その可能性はあると見える。

そこで、クラウドはあることを聞いた。

プレイヤーが、何者かに殺害されるという事件が多発している、と。今更何を言っているんだと思った。犯罪者ギルドの仕業だろうとアルゴに言ったのだが、彼女は首を横に振った。クラウドの言葉を否定する素振りを見せたアルゴに首を傾げていた所、彼女はこう言ったのだ。

『プレイヤーを殺しているのは全て単独犯。しかも、普通のプレイヤーだけでなく犯罪者ギルドにまで手を出している』

それを聞いて、クラウドは眉をひそめた。

たった一人で多くのプレイヤーを相手にしているというのか、しかも凶人共が何十人も集まっている犯罪者ギルドにまで。普通に考えたらおかしい。犯罪者どもは頭のネジが外れているため容赦無くこちらの命を刈り取ろうと襲ってくるはず。

そんなやつらを相手にするには勇気もいるし、そもそも意味がわか

らない。犯罪者を相手にする理由はいくつも思いつくが、わざわざたった一人で挑みに行くか？

過去にオレンジプレイヤーに何かをされて、恨みを抱いたため気が狂うほどモンスターを相手にして経験値を稼ぎ、たった一人で戦いに行くというのは理解はできる。

が、ならば何故通常のプレイヤーにまで手を出している？

オレンジプレイヤーに手を出してもカーソルが変わる事はないが、通常のプレイヤーを手に掛ければデメリットしかないはず。理屈に合わないことをしている時点でそいつは頭がおかしい。

その時、クラウドは珍しくアルゴにそいつのことを詳しく聞こうと問うていた。

何故そいつのことを知ろうとしたのか、自分でもわかっていなかった。

どんなものでも関心を持たない性格のクラウドが珍しく自分から聞いて来たことにアルゴは驚いていたが、すぐに情報屋モードに切り替えてそいつの特徴を教えてください。

だが、そこでやめておけばよかったとすぐに後悔した。

本来の仕事を思い出させるような発言をアルゴから耳にした途端、クラウドは見たこともない表情を見せたのだ。

『長い髪に長い剣』

その特徴を聞いただけで、クラウドの全身にゾツとした感覚が襲いかかった。

心当たりがあつた。そして、思い返してみればその要素にも思い当たる節があると遅れて気付いた。

ここに来る前、現実世界の依頼人であるチャドリーに言われた言葉、

『あらゆる機械には『魔晄』が使用されていました。それはネットワー

クも例外ではありません。新しいネットワークを開発するまでは旧式を現在使用しておりますが、正直僕自身もあり得ないと思っておりますし、どう考えても納得がいきませんが、ネットワーク構築にも魔晄が使われており、それが原因でライフストリームに溶け込んだ彼の意識がそこに紛れ込んでしまったとしたら』

あの言葉が一年ほど遅れて蘇った。

一見すれば誰にでも当てはまりそうな特徴であったが、その事件を起こしている奴と『あいつ』の過去の行いを照らし合わせれば納得がいく部分がある。

動機なんてそいつにはどうでもいいこと。人の命すらも容易く奪う。

それが誰であろうとも、奴にとっては邪魔な存在でしかない。

経験しているクラウドにはわかる。

『奴』の持つ武器で胸を突き刺され、死をも覚悟した痛みと感じたことのない苦しみを。自分の記憶が時間が経つにつれて曖昧になりつつある今でさえも、その特徴を聞いただけで胸に残っている消えない傷跡と共に思い起こされる。

『あいつ』の姿が記憶の奥底から明確に思い起こされた途端、クラウドの口から掠れた声が漏れ出ていた。声帯どころか、全身が震えてまともな言葉が出ないまま、その時初めてこの世界で彼はその名を絞り出した。

『セフィロス』

思い出の奥底に封じ込めていた奴が、今こうしている間にもこの世界を徘徊している。

そう思うと居ても立つても居られず、すぐに搜索を開始した。アルゴにも協力してもらい、手当たり次第に情報を集めるために各地を回って行って、そうして今に至る。

だが、何の成果も得られなかった。

生暖かい風だけが森の中を吹き抜けて、真紅に染まった木々の葉た

ちが波のように音を立てている。

「」

と、その時だった。

真紅に染まった空から降り注ぐわずかな光が、何かを煌めかせていた。

金属のようなものが夕日の光を反射してクラウドの目を射抜く。オレンジ色に染まった何かが、彼の視線に飛び込んで来た。

それに気付いたクラウドは太陽の光が完全に沈んでしまう前に全力でその場へと走って行く。近づくにつれ、それまで気付かなかった周囲の惨状が明らかになる。

一定の間隔をおいて、木々が根こそぎ薙ぎ倒されていた。

何か鋭利なもので振り回した跡が目立つ場所。その中心までたどり着くと、クラウドは慎重にかがみこんで目を凝らした。

「ッ!？」

驚愕の声を微かに漏らしながらそれを見る。

半ば地面に埋れるようにして転がっていたのは、あの女が持っていた十字の槍だった。

あれから半年間、この場にずっと放置されていたせいで地面の一部と化していたんだろう。そこまで現実再現されているなんて、ここまですら製作者に対して呆れるしかない。クラウドは慎重に掘り起こして手で掴む。ずしりと重たい手応えと共に、あの女のウザさを象徴するような装飾が施されていて思わず顔を顰めてしまう。

槍をよく見るために、クラウドは手馴れていない手つきで槍を指先でクリックする。ポップアップメニューを開くと、武器の状態についての情報が目の前に表示される。クラウドは、手にした槍を顔に近づけて行く。じつと凝視するその表情は怖いくらい真剣で、触れれば切れるほどの凄みさえ漂っている。

カテゴリーとか固有名には目を通さなかった。製作者も誰だかわからない奴だったし、たいして気にしなかった。それよりも耐久値や攻撃力の方に目が行った。攻撃力は最低でも四十九層のレベルのモンスターを倒せるほどの品の質で、耐久値もそれほど減っていない。

「」

様々な角度から確認し終わると、クラウドは一先ずその槍をメインウインドウを開いて乱暴にポーチへと放り込んだ。

半日以上四十七層に滞在していたというのに、成果はたったのこれだけであった。だが、これだけでもかなりの収穫だった。

「あの噂話は正しかったみたいだ。ここに来て正解だったな」

アルゲードでの情報収集は早々に打ち切って、以前アルゴから聞いていた単なる噂話を信じて一か八かここに訪れたわけだが、どうやら足を運んだ甲斐はあったようである。

あの女の槍だけが不自然にこの場に残され、辺りには争った様な惨状。

『奴』に間違いはない。

『奴』 『セフィロス』こそが。

ロザリアの命を奪ったのだと、犯罪者ギルドを壊滅させたのだと、一般プレイヤーを根絶やしにしたのだと、そう信じ切っていた。

「ッ!!」

不気味にオレンジ色に染まった村が記憶に焼き付いている。あの悪夢の様な光景が、絶望を撒き散らしていた怪物の姿が呼び起こされ

た。

あれが全ての始まりだった。あれから全てが狂ってしまった。

あいつのせいで、あいつがやって来たせいで、あいつがこの世にいたせいで。

一度そう思い込んだら、クラウドはセフィロスについて調査をせずにはいられなくなった。

「どうやらあいつは偽物の世界でも絶望を送るつもりのようなだ。あれから月日が経っても、寄生虫のようにクラウドの喉元に絶望を突き付けてくる。」

「ふ」

薄く笑った。

馬鹿馬鹿しくて笑ったのか、それともただ笑うしかなかったからか。

いずれにしても、これではつきりした。

「セフィロス ツ!!」

歯を食いしばった。

呼ぶことすら恐ろしく、それでいて不快な男の名前を正確に口にしました。

今度こそ、正真正銘の絶望がこの仮想世界にて、確実にクラウドに押し寄せようとしている。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

扉をくぐると、自分の家に帰って来たかのように心が安らぐ。

攻略を終えたプレイヤーにとって、ここはそういう場所だった。

外はまだ日が暮れて間もない。それでも多くのプレイヤー達がここ、『騎士団』の名を冠する者達によって築かれた本部に押し寄せて賑

やかになつていた。

外にある石畳と大差ない飾り気のない石造りの床。大きく無骨な柱が、見上げるほど高い屋根を支えている。それだけと言っても過言ではない簡素な作りではあるものの、ここに集うもの達はどいつもこいつもかなり立派な装備を身につけている。

「ふう」

「ふう」やら「彼女」の方も、見慣れた光景を見てようやくと肩の力を抜いた。

目的の任務を終えても、帰る途中で別のモンスターと遭遇することもある。厳密に言えば、街の一步外に少しでも出ればモンスターと遭遇してもおかしくないのだ。そんな理由でたとえ任務を達成したとしても、簡単に緊張が解けるわけではない。

こうして、無事に街へと戻り、任務の精算をするために本部に訪れる。この瞬間、初めて終わったと感ぜられるのだ。

「無事に着きましたね 『アスナ』様」  
「ええ」

男は裏返つたような声で彼女の名を呼んだ。

そこに立っているのはこの世界ではトップレベルで顔の造形が整っている女性で、純白と真紅に彩られた騎士服を纏った女性。プレイヤードだった。男よりも低身長ではあるものの、気品で気高く、とにかくその美人すぎる容姿が周りの目を引く。姿勢にいい立ち姿とが相まって求道者のような雰囲気まで感じ取れるほどの聖女性を醸し出している。

彼女の名はアスナ。

今は大手ギルドにその身を置いており、そして隣にいる男よりも遙かに上の身分と技量を持つプレイヤーである。それだけでなく、常に自然との調和を考えながら動くその姿勢なども、大手ギルドに所属す

る全員がいつも手本とするほどの人物だった。

「でも、報告し終わるまでまだ任務が終わったわけじゃありませんから」

立場上本部では常に敬語をデフォルトにしているのか、誰に対しても敬語を使っているようである。

意識が高いのは結構なのだが、そう言うアスナの表情も、任務に出るときとは比べ物にならないほど和らいでいる。攻略に出るようになってから一年ほど、変化に乏しいと思っていた彼女の表情も、その変化は小さいものの、よく見れば随分多くの感情が表れるようになってきている。

「そうですね。報告に行きましょう」

男は頷き返す。

頬肉が足りていないような男と、容姿端麗なアバターでこの地に足をつけているアスナは奥へと進んでいく。本部の奥にはギルドとしての設備があった。石造りのカウンターと、大きな板を使って高級感を見せるためにデザインされた掲示板。カウンターでは、このギルドに所属するプレイヤーが一般のプレイヤーから依頼を引き受けるための手続きができる。一般のプレイヤーが依頼を持って来ればそれが掲示板に貼り出され、このギルドに所属する者はそれを確認次第依頼を受けるかどうかを決める。

大手ギルドであるが故に始めたビジネス。困ったプレイヤーの助けになるために、このギルドの『最高責任者』が設置したものである。

ちなみに、ここでは依頼のことは任務と呼んでいるようで、その理由は多分八割が雰囲気であろう。騎士団という名を語る以上、それにふさわしい呼び方で依頼に取り組んでいるようである。

「副団長にクラディールさん、任務お疲れ様でした」



カウンターには給仕服姿の女性プレイヤーが立っていた。彼女は攻略組ではなく、この大手ギルドに雇われた人間で、任務の契約を受け付けてくれる。

数日前、アスナとクラデイルが依頼を引き受け、任務を達成して帰ってきたことを労ってくれた。

「ありがとうございます」

「それでは、こちらが今回の報酬になります。本当にお疲れ様でした」

ストレージにコルが追加される。

自分たちで分配しなくていいように、プログラムが自動で二つに分けてくれた。任務を終えた後、お金を数えて分配するのは面倒な作業だ。早く家に帰って休みたい身にはこの気遣いは嬉しかった。

「ところで副団長」

「？」

と、帰路につこうとしたアスナを受付の人が急に呼び止めてきた。アスナは足を止めて振り返ると、

「実は、副団長を名指しにして依頼が入ってきているんですが」

「え？ 私に？」

普通、依頼は掲示板に貼り出され、条件に合うプレイヤーであればどんなプレイヤーでも依頼の契約ができるように公開されているはず。ただ中には例外があり、非常に困難な依頼の場合などは稀に指定されることがあった。

その最たるものが緊急依頼案件で凶暴なモンスターの討伐やら、有名パーティーから見込まれての直接打診など。他にも、個人でどうしてもこのプレイヤーに頼みたいという強い要望があった場合にも指

名されることがあるのだとか。

いずれにしても、それは相手から相当の信頼をされているという証だった。無論だが、隣にいる男にはそんな経験はない。一方で、副団長という肩書を持つ彼女には時折こういった依頼が舞い込んでいた。改めて、彼女の成長力の凄さを実感する瞬間である。

「緊急の依頼ですか？」

安全圏に戻ったおかげで和らいでいたアスナの表情が、任務や攻略で見せるそれへと引き締まる。緊急の場合は、大体が人命に関わる場合が多いからだ。

しかし、受付の女性は首を横に振ると、

「いえそうではなくて、調査の依頼です」

「調査？」

「とあるパーティーが見たことのないモンスターを目撃したらしくて、その正体を突き止めてほしいとのことですよ」

「見たことのないモンスター」

「どうされますか？ 引き受けていただけますか？」

「引き受けるのは構わないけど、先に場所とそのモンスターの特徴を教えてくださいませんか？ それを聞かなければ返事ができません」

「あ、それもそうですね」

基本的なことをうっかり忘れていた受付女性はパンと手を叩くと、カウンターの下から一枚の紙切れを取り出した。掲示板に張り出す依頼の詳細が書かれたものと同じ紙。アスナを名指ししてきているために貼り出さず保管していたのだろう。

カウンターの上に置かれた紙にアスナは見入る。ついでに、さつきからずっといるおまけのような男も、アスナへの依頼とはいえ一緒に手伝うことになるだろうという感じで盗み見るようにして紙を覗いている。

「場所は第一層？」

場所を見てアスナは驚く。

懐かしい場所だった。初めて、ある「男の子」とパーティーを組んだ場所もそこだった。最初の地であるため、あれ以来足を運ぶのは初めてだ。

「標的の情報は『長い』？ たったこれだけ？」

「はい。どうやら見かけたのは夜だったようでよく見えなかったらしいんですが、とにかく長い何かが見えたらしいです」

曖昧で少なすぎる情報だった。

どんなモンスターかわからない以上、初めてそのモンスターを相手にする場合は普段以上に緊張するものだ。

それでもアスナの表情からは不安は感じられない。彼女の今の能力を以ってすれば、あらゆるモンスターにも対応できる。苦労はするかもしれない。それでも全く無謀な試みとはならないはずだ。

「それでは、私とそのモンスターについて調査を——」

「いえ、名指しされている以上私が赴きます。クラデイル、あなたは本部での待機をお願いします」

「なっ!? しかし、私にはアスナ様の護衛としての勤めがツ!!」

「護衛はいりません。第一層ならば私一人でも対処できます」

「じ、しかし——」

「副団長としての命令です。聞き分けてください」

「ツ!!」

流石に差し出がましいと感じたのか、クラデイルは渋々了承した。

これ以上は副団長様を不快にさせるなんて思ったんだろう、クラ

デイルは頭を下げると同時に数秒間沈黙したままでいた。

「それじゃあ引き受けます。明日すぐに調査に向かうと依頼主にお伝えください」

「はい、かしこまりました」

そうやって、アスナはカウンターから立ち去る。

クラデイルが何かを言う前に颯爽と出口の方へと向かっていく。呆気にとられたクラデイルは護衛をする者としての使命を思い出しすぐに追いかけてしようとするが、アスナはまるで逃げ去るようなスピードで足早に本部を出て行ってしまふ。

実を言うと、彼女は一人になりたかった。

いつも護衛をつけられて一人でいる時間が少なくなったので、ストレスは溜まっていく一方。

そんな時に、名指しで依頼が来てくれた。

これはアスナにとってはかなりの好都合で、依頼の内容も自分一人で片付けられそうであったが故に、彼女は護衛をつけないようにした。

久々に一人になれる、しかも目的地は懐かしい第一層。

そう思うと、思わず笑みが溢れる。

アスナは明日の準備をするために本部を後にし、ウキウキとした気分で自分の家がある六十一層へと向かった。

## 第1章

依頼は時々こんなものまでやってくることがある。

「おっしゃ！ 今日も張り切って行くぞお前ら!!」

「三」「おおっ!!」「三」

「」

青い空に、元気な声が響き渡った。

目を輝かせるようにしている男性はこの世界では珍しく刀を使っている。ウータイのような鎧を着込んでいる者達が複数いる中、クラウドもまたそこにいた。

彼らがいるのは狩り場の一つ、豊かな水と常緑の木々が生い茂っているフィールドだった。そのフィールドの街の出入り口で、クラウドはパーティーメンバーに声を掛ける。

クラウドは正式版プレイヤーの一人だ。赤いバンダナをつけ、これからの攻略が待ちきれないとも言いかのように、キラキラと澄み切って輝いている。身につけている防具でパーティーの統一性を表しているが、案外この世界ではその装備は浮いて見える。そこらへんは個人の趣味次第なので口を出す権利はない。

しかし、そんなウータイのような装備にバンダナはどうなのかとは思ってしまうが、そこは個人の好みなので気にしてはいけない。

「つつても、今回は採取しからないからな。それでも！ 気を抜いたら即やられる！ どんなものでも全力で立ち向かうことだけは忘れるな!! 全員気合いだけは入れとけよ!!」

「三」「おう!!」「三」

彼らが今いるのは始まりの街、第一層だった。

彼らが引き受けた依頼は採取系。ここでしか取れないアイテムを

各自で協力して採取するだけの簡単なお仕事だ。故に、最前線で活躍している攻略組とはいえ小規模のギルドである「風林火山」というパーティーに白羽の矢が立った。名指しでの依頼でも、こういう雑用に似たものまで回されることがある。

普通なら大手ギルドの第三軍とか、そういう下っ端に任せればいいのにわざわざこっちに回してくるのを見るとなんらかの意図を感じる。

クラウドがここに来た理由は、アルゴからの依頼だったからだ。

あいつが持つて来るものは大抵がデカイ仕事なのだが、今回はお遣い程度の依頼だった。とある小規模ギルドの採取に護衛についてくれ、ついでお前も採取に加われというその依頼内容を聞いた時、即断ったのだが、アルゴが何故か大金を持つて来たのでつい引き受けてしまった。

採取如きでこんなにな？　と思っただが、どうやらこれはアルゴ自らが出した金だった。つまり、アルゴが出した依頼だった。

どういふつもりか尋ねたら、『たまには仕事とか考えず気分転換してこい』とだけ言っつてそのまま出て行ってしまったためにそれ以上は聞けなかった。

彼女なりの配慮だったのだろうと、今になって思う。

ここ最近、『あいつ』を探すのに神経を使っていたため少々体力を消耗していた。それを見兼ねたアルゴが気を遣ってくれたんだろう。

そんなわけで、その小規模ギルドメンバーと共にここに来ているわけだが、

「ところで、護衛のクラウドさん。今日は俺たちに付き合ってくれてありがとうな。アルゴの紹介だからめっちゃくちや頼りにしてるけどよ、俺たちも足を引つ張らないように頑張つて攻略するから！　一緒に頑張ろうぜ!!」

「ああ」

「ん、聞いてはいたがお前さん本当に口数少ないな。それじゃ友達できないぞ?」

「ここで仲間を作ったところで、いずれ皆元の世界に帰るんだ。無駄話をする必要なんてない」

「何だよそれ、見かけに寄らず中身が幼いな。『別れる運命だ、仲良くしたって辛いだけ』ってか？」

(誰がそこまで言った)

その言葉にクラウドは口をへの字に曲げてムスツとする。

全くもって失礼な、ただ単にクラウドは口下手なだけである。

初対面の相手からは、よくクールなイケメンさんだと思われるほど整った顔立ちをしているが、クラウドはここにいる誰よりもおそらく強い。そして、今日会ったばかりなのに気安く話しかけてきて結構グイグイ来るからどう話していいのかわからないだけなのだが、実際ここで仲間を作ったとしてもこのゲームがクリアされれば全員と会わなくなる。

だったら作ったとしても無駄なだけである、どこかおかしいだろうか？

だが、そんなことは気にせずにクラインは自分の意見を述べる。

「いいか？ 確かにこのゲームが終わればみんなとはお別れだ。でもな、普通に過ごしているだけだったら絶対に会えなかつた奴らばっかりだぜ？ 今のうちにいろんな話をしとかなきゃ損だぞ？」

「普通なら体験できないような経験を皆でして、おとぎ話に出てくるような武器を使って強大な敵にみんなで立ち向かうんだ。そうすることによって、自然と『みきき』が広まるんだ」

「？」

みきき

(まさか『見聞』<sup>けんぶん</sup>のことか？)

「いつかは別れは来る、そりやそうさ。みんなそれぞれ住む所が違う

からな。けどな、ものすごく好きな人がいても、大切な人が出来ても、いつか別れなきやいけなくなる。ゆつくり言葉を並べて別れられるとも限らない。この世界じゃ尚更な」

「でもな、それまでの間は一緒にいるわけだろ？ 別れる一瞬なんかよりもずっと長くて楽しい時間じゃねえか。つまり！ いつか別れるからこそだ!!」

クラウドはクラウドの前を常に歩きながら力説をしていると、急に振り返ってクラウドは勢いよく拳を突き上げる。それが顎に当たりそうになり、クラウドは冷静に胸を反らしたが、クラウドはそれに気づくこともなく続ける。

「今のうちにわいわい騒いどくべきなんだって！ この世界の開発者はゲームであっても遊びではないなんて言ってたけどよ、ゲームってのは普通楽しむもんだろ？ 一々暗いことばかり考えてないで、皆で協力していけばあつという間に攻略できると俺は思うぜ!!」

「つてなわけでき、これからも仲良くやろうぜ！」

クラウドはクラウドとは初対面ではあるが、めちやくちやポジティブな人間であることはすぐに理解した。

こういう人間は意外と苦手だ。神羅時代の頃、唯一の親友もこいつみたいに常に明るく振る舞っていたが、最初はどう接していいのかわからなかった。グイグイと前に出てクラウドと仲良くしようとして来るクラウドにクラウドはたじたじになる。

「よし！ じゃあ出掛けようぜ!!」

拠点から坂道を下って採取ポイントへと向かう。

安全圏である街を抜け、モンスターが闊歩するフィールドへ足を踏



み入れるなり、そよ風が木々の間を吹き抜けてきた。

「やっぱ、最前線に比べるとここは気持ちいい所だなあ」

クラインは胸いっぱい息を吸い込んだ。それにつられるように他のメンバーも空気を鼻から吸い込んでいく。ドウドウと流れ落ちる滝壺からは銀色の魚の鱗が光っており、跳ね上がるしぶきが小さな虹を描き出す。樹齢がまだ若そうな木の幹には虫が樹液を啜り、川縁ではイノシシ型のモンスターが水遊びをして体熱を逃している。

懐かしい場所に訪れた一行は久々の大地に足を踏み入れて、不思議と新鮮に感じた。

視界に入った懐かしい光景を、しっかりと目に焼き付けていく。

「お、早速依頼リストに書かれているものを見つけ!!」

右手の木陰に、ひっそりと薬草が生えていた。

薬草は失った体力を回復させるための基本中の基本とも言えるアイテムだ。そのままでも使えるが、大抵はそれを調合してさらに回復量をアップさせたアイテムにして使用することが多い。村や街の道具やなんかでも購入可能だが、懐具合が寂しいプレイヤーからすればタダで手に入るに越したことはない。

しかし、意外と手慣れているようにも見える。目ざといのかすぐに目的の物を見つけているのを見ると、こういったことはよく頼まれるのだろうか？

クラインたちは夢中で採取を続けていた。

採取していくごとにアイテムが取れなくなる。そうなれば、また別の場所で採取をする。またなくなったらまた別の場所へ、と数回繰り返し移動しているうちに、いつの間にか雑木林のような場所にまでやって来ていた。

「大収穫だな、出だしは上々だぜ」

立ち上がったクラインは、汚れた手で汗を拭う。

「ほら、半分やるよ」

と同時に、採取した薬草を草むしりのように握りしめてクラウドに差し出す。

「いらない。自分の分は自分で採る」

「いいからいいから！ 遠慮すんなって！ 初めて会った記念にさ、な!!」

いらないと言ったのにクラインは強引に薬草を押し付ける。共有できるアイテムはなんでも平等に分配すべきだし、自分だけで独占するのは納得がいかない人間なのだろう。

とりあえず、護衛としての依頼でやって来ているためクラウドが先行して突っ切ることになったのだが、いくらも進まないうちにクラウドは突然立ち止まった。

「いてっ!! 急に止まんなよクラウド」

「しっ!!」

額をクラウドの背中にあるバスターソードにぶつけて文句を言いかけたクラインだったが、振り返ったクラウドが人差し指に口を当てて黙るように指示する。そのサインに全員が従って口を閉じると、息を潜めて耳を澄ます。

すると、どこからともなくドスドスという微かな音が聞こえて来た。

見ると、雑木林の各地に生えている木の枝がわずかに揺れている。それに加えて地鳴りが徐々に轟いている。

「な、なんだ？」

とつさにクラインと背中合わせになる。

他のメンバーも二人を中心に全方位に注意を払う。

全員が各々の武器へと手を伸ばし、構えようとしたところ、

「あそこだッ!!」

風林火山のメンバーの一人がそう叫ぶ。クラウドから見て右側の雑木林の奥で、木々の枝が弓なりにしなっていた。幹が軋む音と同時に大地が揺れ、しかも次第に近づいて来る。

これは間違いない。モンスターの足音、それも大型の。

風林火山全員が警戒することによって緊張が生まれ、喉が急速に乾いていく。第一層とはいえ、命を刈り取ることができるモンスターには変りない。それに、噂ではそれぞれのフロアには強大なモンスターが最低でも一匹ぐらいいは設置していると聞く。そのレベルは、その階のレベルの二十倍ほど。こういうめちゃくちや強い敵がいるとあらかじめ宣伝しておくという手法なのかもしれないが、こっちからすれば迷惑極まりない。

既に第一層を余裕で攻略できるレベルだからといって、油断は禁物である。

「来るぞー！」

「ああ！ わかってる!!」

だが、二人とも落ち着いて一切の掠れもない声で互いに応じると、二人一斉に武器を引き抜く。バスターソードと刀が、期せずして同方向に向けられた。

やがて雑木林から姿を現したのは、背の高い木々をかけ分けるようにして巨大な二本の角を乱暴に振り、長い舌をだらしなく垂らしたモンスターだった。

◇◇◇◇◇

「な、なんだこいつ!?」

「アプスッ!!」

その見たこともない風貌を見て風林火山メンバーは驚きを隠せていなかったが、クラウドだけはそのモンスターの正体に気付いていた。

ルール違反が認められている街、"ウォールマーケット"の支配者と言われたコルネオの屋敷に潜入した時、コルネオの罠にはまって下水道地下に落とされた時に襲って来たモンスターだ。こいつの生態がどうなっているかは知らないが、二本の角を発光させることで地下の下水を操るといってもない技を使ってきた。

所狭しとも遠慮なく駆け回り、殴り付けやそのでかい尻尾での薙ぎ払い、高速突進、壁によじ登ってからの強襲など肉弾戦主体でかつてクラウド達を追い詰めてきた意外と厄介なモンスターだ。

まさかこんなところで、しかも最初の階層なんかで再会するなんて思っても見なかったが、現れたのならば倒すまでだ。

「やるぞ」

「お、おお!!」

短く声を掛け合ってから、クラウドは先に飛び出した。正面にいるアプスを右手に見つつ、弧を描くようにして一旦大きく迂回する。クラウド達は見たこともないモンスターを警戒して様子を伺っているみたいだが、クラウドはそんなことは構わず先行する。

十分に距離を詰めたクラウドは全力疾走を敢行しながらバスターソードを振る。土につま先をめり込ませつつ一気に肉薄、アプスの後脚目掛けてバスターソードを一閃させる。

ガキンツ!! と。

「ッ!？」

「ッ!!」

と、その時初めてアプスはこちらを視認したようで、クラウドを視界に捉えるとその大きな腕を振り下ろしてきた。

難なく避けることは出来たが、違和感があった。

手応えはあったのはあった。

だが、アプスの体はベヒーモスに引けを取らない筋肉質で頑強そのものだった。何度バスターソードを打ちつけても、巨木が軟弱な斧を跳ね返すようにびくともしなかった。金属すらも切断するバスターソードでも斬れないとは、どうやらここでは製作者によって魔改造を受けた化け物と化しているようである。

しかし、クラウドは眉根ひとつ動かさず、黙々とバスターソードを振るい続ける。

自分一人でも大丈夫だが、今回は頼れるパーティーも一緒についてきている。今日会ったばかりでまだ連携すらもしたことはないが、どんな手強いモンスターであっても、今の自分たちなら引けを取ることはないと固く信じている。

「うおおおおおおおっ!!」

その思いを具現化したかのように、ダッシュでクラウドが接近してきた。予想通りアプスはクラウドに気を取られているため、後背は全く無警戒だ。クラウドはアプスの尻尾の脇を通り過ぎると、クラウドとは反対側に滑り込む。そして愛用の刀を使って、アプスの足を縦横無尽に斬りつけ始めた。

「うおりゃあっ!!」

クラインの雄叫びに合わせて、刀が光芒を発する。この一年でほと

んどのプレイヤーが成長したように、クラインもまた成長していた。刀は見かけによらず軽いので、クラウドがバスターソードで一撃加えるうちに、クラインは素早さを活かして斬撃を連続で当てる。しかもその動きはこの一年のうちにいっそう洗練されており、無駄に思える動作が全くない。

「ツ!!」

アプス越しに二人は一瞬チラリと互いを見やる。

初めての連携が楽しいのか、二人ともニヤリと笑い合った瞬間だった。

「グオオオオオツ!!」

「っ!?!」

耳を撃くアプスの方向にクラインの筋肉が収縮した。

ピリピリと空気が振動し、体全体が圧迫されて思わず武器を手にしたまま耳を塞いでしまう。その咆哮の大きさをや、上層のモンスターのどこかフロアボスにも引けを取らない。アプスはいよいよその潜在能力を発揮してきた。上体を持ち上げるようにして前傾姿勢を取ると、後ろ足に力を込めてその場で素早く回転したのだ。

「避ける!!」

「っ!!」

クラウドの一声でクラインは正気を取り戻す。

後ろ足を軸にして独楽のように回転するその動きは目で追うことすら難しかったが、クラウドが声をかけてくれたおかげで難なくやり過ごせた。二人の鼻先すれすれを何か硬いものがすり抜けていった。直接当たったわけでもないのに風圧に押されて仰け反ってしまい、クラインは足を取られて体勢を崩す。

「リーダー!？」

後ろで見ていたメンバーが声をかけてくる。

他の奴らはリーダーであるクラインよりもまだ警戒をしているのか、上手く攻撃にでられない。

クラインは無事だとも言うかのようにサムズアップを送る。しかしやばい。

目の前を通過していったのは、明らかにアプスの尻尾だった。あの硬い尻尾の先が直撃したらどうなるか、想像しただけで鳥肌が立つ。

「やっべ!!」

身の危険を感じたクラインはすぐさま立ち上がり、その場から大きく飛び退る。

しかし、アプスは今度は腕を振り回しながら次第にクラインの方へと身を寄せてきた。

次の瞬間、横殴りの衝撃がクラインを襲った。背骨を貫くような痛みが走ったかと思うと、弾け飛ばされるように木立へと叩きつけられる。頭の中にある頭脳がその衝撃で揺さぶられる感覚をプログラムが再現したせいで、一時的に行動不能になった。

「グオオオオオオツ!!」

前足に比べて一回りほど太い後ろ足で直立すると、二人を威嚇するように両手を広げるアプス。初めてのモンスターが見せる初めての威容、風林火山全員の背筋に鳥肌が立つ。

「へ、へへへ。そうこなくっちゃ」

だが、それと同時に待ちに待っていた瞬間が訪れたことに胸の鼓動

が高まった。

実を言うと、クライン自身も今回の依頼には不満を持っていた。

攻略組として名をあげたのに、大手ギルドの連中はいつも下っ端の仕事ばかり回してくる。噂じゃ大手の連中はたった一人に超おしい仕事を与えてるんだとか。報酬は最高クラスで、ほとんどの仕事は大手系が受け持っている。それで、自分たちに相応しくないと感じた依頼は他のギルドに譲る。それで不満を持たない方が無理な話だ。

何故第一層なんかでこんな強敵が現れたのかはわからないが、ただの雑用クエストの最中に大型モンスターと対面できるなんてツイてる。自分たちだけでこいつを倒せば、大手の奴らもさぞかし驚くはずだ。

「へへっ！ もうあの時の俺たちじゃないってところを見せてやるぜ！」

武者震いしつつ、クラインは刀を斜めに大きく振りかぶると、右足を蹴りつつアプスの右脇腹に叩きつけた。

「グオオオオオオッ!?」

切れ味がいい刀はかなり刃が通りやすく、ズバッ!! とした衝撃がクラインの両腕を伝わっていく。彼が放った一撃にしては十分すぎる手応えだった。

「ヒュー!! この感触気持ちよすぎだろツ!!」

なんだそのリアクションはとクラウドは思ったが、クラインは心地の良い感触に快哉を上げたものの喜ぶのは早すぎた。

アプスは両手を頭上に掲げると、のしかかるように倒れこんでくる。



「ちよっ!? 危ねえッ!!」

刀を持ったまま、横方向に転がって辛うじて避ける。素早く立ち上がって体勢を整えたクラインは、背後にいるクラウドに叫んだ。

「クラウドッ!!」

クラウドは無言で頷く。

狩りはもう終盤だ。いつまでも付き合う義理はない。

アプスは下水にいてこそ真価を発揮する。近くに川辺なんかがあつて有利な状況に逃げ込まれればそれだけで有利と不利がひっくり返つてもおかしくないはない。

「グオオオオオオッ!!」

高速突進をしながら迫ってくるアプス。

激しく頭を振り回しながら走るせいで進行方向が定まっていな。つまりアプスを避けようとする横への動きを追いかけるような形になるため、避けづらいことこの上ない。射程圏内にいたクラインであつたが、先程と同じ様に前方に身を投げ出して回避していた。

「はあああああああああああああッ!!」

クラウドはクラインが無事に避けたのを確認すると同時に一気にアプスとの距離を詰める。

「そらよっ!!」

と、巧みにアプスの死角に回り込んだクラインが刀でその突進するための足を斬りつけた。

場所を正確に言えばアキレス腱。

そこを斬ることによってアプスは体勢を崩し、地面へとスライディングするように倒れこむ。舌がだらしなく地面を舐め、大量の土がアプスの口の中へと投げ込まれる。

「はあああああああああああああッ!!」

クラウドは全力を込めた一撃を集中させる。

その瞬間、クラウドのバスターソードに鮮やかな赤のライトエフェクトが宿った。まだこのゲームに慣れていない頃、それになんの意味があるのか全くわからなかったが、この世界に降り立って月日が流れた今ではその意味を完全に理解している。

クラウドが放った一撃は単純だった。

鋼鉄で作られたバスターソードと共に真っ直ぐ縦に一回転すると、アプスの顔面に振り下ろされる。標的にぶつけるとは思えないほどの轟音が炸裂し、地面とバスターソードに挟まれたアプスの体から全ての力が奪われた。

「グオオオオオッ!」

その威力にとうとう最後の力も尽き、巨体は地面に寝転んだままガラス片へと変貌して空中へと消えていく。

「」

クラウドは本当に仕留めたかどうかを確認してからようやくバスターソードを背中にしまいこんだ。

アプスには確かベビー的な雑魚モンスターがいたはずなので、まだ警戒を解かずあたりを見つめていると、

「はあくやつと終わった」

クラインがそう言うのと、脱力したように地面に座り込んだ。

見れば何もしていなかった他の風林火山のメンバーまでも座り込んでいる。あれは疲れているというより、緊張が解けて安堵したという感じか。アプスのHPがあとわずかでも高ければ、それが個体差程度のわずかな差であったとしても、もしかしたら依頼を中止にして撤退するという手段に出ていたかもしれない。

たった一人でサポートするには多すぎるし、ある意味彼らが下手に動かなくて助かった。

「クラウドがいなかったらどうなったか……」

安全圏に戻ってからのの方が安心して休むことができると思うのだが、この中で一番活躍したであろうクラインは消耗していた。最低限の警戒をしながら、とりあえず安全圏の街に戻れるだけの体力を回復しようとしていた。

「しっかし、やっぱ大型のモンスターになるときついなあ」

喘ぎながらクラインが口を溢す。

それに反応するように、風林火山のメンバーがそれぞれ答える。

「俺たちの力量ではまだ装備も万全じゃないし、さらには小規模だから真正面から挑むしかなくなるからなあ」

「ま、きつい分、俺たちもそろそろ次に進めてるってことじゃねえか？」

「次？」

「おう！ 今のモンスターを討伐したことを報告すれば、俺たちもそれなりの評価が与えられるってことだよ!!」

「ああなるほど、そうなりや契約できる依頼の数も増えるってことか!!」

「そんじやそろそろ新しいメンバーの募集でもするか？」

「ああ！　いいなそれ!!」

なんか勝手に盛り上がってるが、クラウドは興味がないのか会話を全て聞き流している。

クラインを除いた風林火山のメンバーがワイワイと賑やかに騒いでいる中で、クラウドはただアイテムを使ってクラインの治療に専念している。

「なあ、クラウド」

「？」

と、クラインが声をかけてきた。

「俺たちのギルドに入るつもりはないか？」

「!?」

急な提案だった。

いや、クラインの仲間たちが話しているのを耳にして、多少は予想できた展開だったかもしれない。

その提案を聞いた瞬間クラウドは目を見開き、状態異常に陥ったかのように固まってしまった。そんなクラウドをクラインは見つめるが、返答が来るのを待っているのか何も言っていない。そのクラインの様子を見て、クラウドはすぐに理解したのか、数秒間黙っていた口を開いて提案の回答を告げる。

「いやいい」

「だよな」

簡潔に述べると、クラインは最初からわかっていたのかあまり断られたことに対して気にしていなかった。

だが、頭をガクツと一瞬下げたのを見ると多少は期待していたん

じゃないかと思う。それでも、クラウドの答えはNOであった。一人の方が気楽だし、何より今は仲間とか作る余裕はない。探している奴を見つけた際、もし仮に仲間なんていたらすぐ狙われて殺されるに違いない。

現実世界にいた仲間達ならまだしも、この世界の住人は、本当の意味で武器を握った事のない者達ばかりだ。そんなやつらと一緒にいれば足手まといになるし、あいつに指一本も触れられずに終わってしまうだろう。

だから彼は、誰からのスカウトも受け付けない。

「ま、気が向いたらでもいいから考えておいてくれ！ 少なくとも、俺はあんたの味方でいるつもりだからよ！」

断られた後だというのに、クラインは落ち込む暇もなく立ち上がってクラウドにそう告げた。

その様子を見て思わず笑ってしまったが、クラウドは得意の口下手な口調で、

「報酬次第だな」

「へへっ、そう言うと思ってたぜ」

クラウドの性格が大体わかってきたクラインはクラウドがどう反応するのか容易に想像できるようになってきていた。

クラインは笑いながらクラウドに手を差し出すと、クラウドはその手を取って立ち上がる。

「で、依頼は達成したから俺たちは報告しに行くけど、そっちはどうする？」

「俺はもう少しここに残る。先に行っただいぞ」

「え？ でも、分け前は？」

「俺の依頼は、『気分転換』だからな。依頼を達成するために、もう少

.....  
「ここにいます」

「そっか」

「言っている事の半分も理解できていないだろうが、クラインは頷いた。」

「彼の言葉には偽りは無い。」

「避けたくて断ったんじゃない、きつと。」

（なんかこいつ見てると.....「あいつ」が思い浮かぶんだよな）

突如だったのか、会った時から考えていたのか、クラインの脳裏に最初に出会ったプレイヤーの姿が思い起こされる。

正式版から始めたため、まだこのゲームの仕組みをわかっていなかった時、偶然通りかかったβテスター時代からのプレイヤー。そいつにレクチャーしてもらおうと頼み込んで、遅い時間まで丁寧に教えてくれたのは今となつてはいい思い出だ。この世界の本当のルールを告げられた後、一緒に来ないかと誘われたのに断ってしまった。他に仲間がいるからと、待ち合わせをしていた仲間との合流を優先してその申し出を断り、彼とはその場で別れた。

そう考えると、ある意味でクラインもクラウドと同じ事をしてきた。

だが、クラウドが一番近いのはおそらくあいつだ。

彼の行動パターンはあいつと当てはまる部分がいくつもある。しかし、根拠のないことは口にしないことにしたクラインは、ギルドのメンバー達と共に報告するために先に帰ることにした。

「そんじゃあな〜！ またいつか一緒にクエストやろうぜ〜!!」

手を振って去って行くクライン達を、クラウドはしばらく見送っていた。

時刻は夕方。西に傾きつつある陽の光が差し込み、クラウドの姿を

浮き上がらせて行く。時間も時間なのか、フィールドに出ていたプレイヤー達もにわか慌ただしくなり始め、それぞれ安全圏へと戻って行く姿が目に入る。

さて帰るか、とクラウドも踵を返そうとした所で、

「？」

ふと、視界に違和感のある光景が映った。

皆が街に戻ろうとしている中、“一人の女性”が反対方向へと走って行っていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇

一人になりたかったというのは嘘ではなかった。

だがどちらかと言うと、それは半分の理由であった。

「この辺りかな？」

草原やら川辺があるよりも奥の方、滝が流れ落ちてくる崖の上が続く足場の悪い道をアスナは歩いて行く。目撃情報によれば夜間にこの辺で見たと言うらしいが、それらしいものは見当たらない。

アスナは諦めずに真剣に探しているものの、もうすぐ陽が沈みそうな時間帯だった。

切り取った岩壁に囲まれた小さなエリアには、草よりも岩が目立つ。アスナが歩いている場所の近くには水場があり、そこから川に滝となって落ちるのだが、その場所ではモンスター達が喉を潤しているのが見える。第一層でよく見かけるイノシシ型からして、あれのわけがない。

ましてや、『長い』という特徴もない。

この小さなエリアにそんな特徴を持ったモンスターが本当にいるのかどうか、いよいよ疑い始めてすらきている。

滝に流れるための湿った微風が、彼女のさらっとした髪の毛の表面を撫でる。

（私も、一人で戦わなくちゃ）

実は、彼女はあることに悩んでいた。

それは、『副団長』という肩書きのせいで一人では戦えなくなったということだった。

彼女は今、大手ギルドのトップクラスのメンバーの一人である。はじめの頃はまだ右も左も分からない初心者だった自分が、いつの間にかそんな地位にまでついてしまっていた。側から見れば誰もが羨む地位だろうが、それでもなかつた。

常に護衛を付けられ自由な時間は与えられず、攻略には絶対参加するものの自分は副団長だからという理由で周りのプレイヤーから優先的に守られたりなど、自分の力で攻略しているという感じではなく周りのサポートがあつてのことのように感じていた。

それである時、疑問に思ってしまった。

自分は、誰かに頼らないと勝てないのでは？ と。

そんなことはないかと否定はした。なんなら周りのみんなもそんなことはないと言つて来てくれた。だが、なんの説得力もなかつた。大手のギルドに属しているから自動的にトッププレイヤーが集まるわけだが、主に自分よりも下のプレイヤー達が活躍しているように思える。それはとてもいいことだし、駆け出しのプレイヤーが自ら前に出てトップレベルにまで登りつめるのは喜ばしいことである。

だが、自分はどうか。

戦略を練つてボスに挑むということとはしているものの、いざ攻略となつた時に前に出ているのだろうか。

出てはいるだろう。しかし、周りが勝手に守りを固めてきて中々出れないようにしてくる。余計なお世話だなんて考えはないが、前に出て自分も戦いたい。戦つて、自分の力を証明したい。全然前に出て戦えず、『副団長』という肩書きは単なるお飾りなのではないかと感じる



ようにまでなってきた。

要は、プレッシャーに苦しんでいるという感じなのだろうか。

それによって被害妄想が起きていると思われる。

地位に甘えて守られていると周りに思われるのが嫌なのか、だから彼女は自分の力を証明するべくここまで足を運んできたというわけだ。

「この辺りだと思うのに」

呼吸が落ち着いてきたところで、アスナはもう一度周囲に視線を巡らせる。

水を飲むイノシシ以外、モンスター影はない。聞こえるのは湿った風が崖の上を吹き抜ける音だけ。それさえも、頭上、遥か遠くから聞こえてくるのみである。

『ゲヘッ グフフツ!! 可愛い女の子、ワイの好みやあく!!』

その時だった。

湿った風に混じって、なんかくそきもい台詞が風と一緒にこつちに飛んできた。

「だ、誰っ!?!」

戸惑うアスナをよそに容赦なく目の前からまた声が飛んでくる。

『んく? ワイを知らんのかいな!? ワイひよつとしてあんまり人気ないんかなあ?』

「」

ふと。

見過ごしてはいけないものを見てしまった気がした。

アスナは警戒して抜剣直前の構えをとっていたものの、目の前の光景を見て動きを止めた。

周囲には相変わらず、イノシシたちの水を飲む音と吹き抜ける風の音の空気で満たされている。一種独特で、言い方を変えてしまえば『異様』といってもいい状況ではある。だが、それを吹き飛ばすほどの、あまりにも長い何かがある。アスナはそう確信する。

問題なのは。

その長い何か、めちやくちやくさん生えていたということだ。どう表現すれば良いのやら。

まず、歯が長い。

そんで、腕が長い。

それを沢山詰め込んだ存在。

見ただけで嫌な汗を噴き出させるようなレベルの長い何か、アスナをいやらしい瞳で眺めている。

そうだな、とりあえず、厳密には『長い』が第一印象になり得るものではないというのは確かだった。

が。

ある意味で、『長い』という特徴が当てはまるかもしれない存在だった。

『ええかあ？ よく聞いてやあ？』

ワイはなあ？

〃オルトロス

“ ゆーねんくツ!! ”

後で依頼主にクレームを入れたい。

見えづらかったとはいえ、絶対にもっと相応しい特徴を記載するべ

きだっただろう、と。

## 第12章

見た瞬間、全ての常識は砕けてしまった気がした。

通常、モンスターといったエネミー系はプレイヤーへ襲いかかるものであったはず。無駄な会話をすることはなく、恐怖を抱かせるための不快な咆哮だけを上げる。プレイヤーの命を刈り取るためだけに設定されており、必要最低限の発声器官しかプログラムしていないはずなのに、目の前にいる奴は人間らしい言葉を放ってきた。

その言葉に、アスナは強烈な違和感を覚える。

本来、敵というのは喋らないはず。なのに、目の前にいるこいつは流暢に人間の言葉を喋った。

そういう設定をされている特別個体か？ と考えれば納得がいくが、ゲームをあまりやってこなかったアスナからすればそういう考えにたどり着くことはできなかった。敵は喋らずただプレイヤーを視認した瞬間襲ってくるだけの害を為す存在という常識が定着してしまっているアスナからしたら、こんなモンスターがいるなんて信じられなかった。

「……これが依頼に書いてあったモンスター!？」

存在すら疑いたくなる。

別に喋ったからというわけではない。確かに、モンスターが人の言葉を話すのは気味が悪いが。

それ以上に、そのモンスターの外見の方を見て存在を認めたくなかったようにも思える。

だって、どう考えても気味が悪い。

受け入れがたい長いものをいくつもつけ、思わず引いてしまうほどのだらしないやらしい目つき。

見ようによってはマスコットの存在に見えなくもないはず。だ

が少なくとも、女性にとってはかなり無理そうな見た目をしている。

「っ!!」

不意に不安が襲ってきたが、大きな声が出せなかった。嫌なものを見た瞬間、思わず悲鳴を叫びたくなるようなものだが、それは唐突に現れた際に適用される現象だろう。今回は堂々と目の前に現れた。幽霊やゴキブリみたいに不意に現れるのではなく、正面に堂々と登場したため叫んで現実を否定してしまうよりも先に、理性が脳内を上書きして思考を正常のものにしてきた。

目の前の現実を否定できなかった。

なかったことにはできなかった。

ともかくにも、今日の前にいるモンスターは紛れもなくそこに存在している。見た目があれなのに、目つきがどうだのと文句を言う暇なんてなかった。たとえどれだけ気持ち悪かったとしても、受け入れがたい見た目だったとしても、目の前に現れたら全てを受け入れるしかない。

アスナは警戒を強めながら武器を構えようとする。いつでも戦えるように剣を抜く寸前の姿勢になる。

だが、そのアスナの姿勢には迷いが含まれていた。剣を抜こうにも抜けない。抜こうとすれば躊躇いが生じてしまう。

言葉を話す時点でこいつは異質な存在であることは明らかだ。それ故に、本当にモンスターなのかどうか判断がしづらい。見た目は完全にモンスター、疑う余地もなくモンスター。だが言葉を話したことで本当にこいつは害を為す存在なのかわからない。

もしかしたらこいつはただのNPCなのではないか？ という考えが頭を過る。そうであった場合、多少の罪悪感を感じてしまうかもしれない。アスナはそれがなんとなくだが嫌だった。万が一こいつが害のないただのNPCだった場合、なんの罪もない奴を手に掛けることになってしまう。本音を言ってしまうえば、こんな見た目をした奴の命の責任なんてとりたくない、そんな感じの理由なのだろう。普通

のNPCであった場合、アスナはこいつを手に掛けてしまった責任をこれから先ずつと抱えなくてはならない。そこまで深く考えなくともいいのかもしれないが、実際そういう代償がついてくる可能性もある。

ではどうやって確かめればいいのか、方法は一つである。

昔、偉い人達は口を揃えてこう言った。

人は見かけで判断してはならない。

当たり前判定で判断しよう、と。

「はあああああああッ!!」

『へ? ちよ待ってッ!?!』

アスナの剣がオルトロスの横を通り過ぎる。

刃に当たってHPが減るやつは大体全員敵キャラだ。人畜無害なNPCに当たり前判定が存在するわけがない。あつたとしても、相手がモンスターっぽい奴だったからとでも言い訳すればおそらくみんな納得する。誰にでも間違いはある、自分でもこんな奴を前にしたら敵と間違つて攻撃してしまっていた自信があると、賛同の声を上げてくれるに違いない。

少なくとも責められることはないだろう。

危険因子の排除を第一優先すべきこの世界では、アスナの行為は正当防衛として適用される。怪しい奴が目の前に現れればどんな奴であろうと警戒すべきである。危害を加えられる前に即刻対処する。それがアスナが出した結論であった。

『ちよ、ちよっ!! ちよ待って?! いきなり何すんの?!』

「あなたでしょ!?! この辺りで暴れているっていうモンスターは!?!」  
『はくいく!?!』

ある意味、オルトロスは真つ当な反応を見せた。

急に攻撃されたことに驚いたオルトロスはギョ!?! としながらも

大きく跳んで避けたことにより、アスナの剣は惜しくも当たらなかった。

なんの前触れもなく攻撃されて驚いてはいるみたいだが、それでもオルトロスの表情は全く変わってない。相も変わらずふぎけた目つきでアスナを見ている。本当に驚いているのか疑わしいので判断に困る。結局当たり判定も確かめられなかったので、まだこいつが危険な存在かどうかわからない。

と、アスナが警戒を怠らず細剣をオルトロスに向けていると、

『ちや、ちやうちやう！　ちやうでく！　ワイ、悪いモンスターじゃないよお〜？』

その台詞を言っているのは「奴」だけである。

序盤で簡単に倒せる雑魚敵だが仲間になればめちやくちや強くなって頼もしい存在である、あの「青い奴」がその台詞を言うことではないんだな。ではこらしめるのはやめよう。それにこんなに可愛くてプルプルとした奴が人に危害を加えるとは思えない』という気持ちに初めてなる。

だがこいつはどうだろうか？　悪くないモンスターに見えるだろうか。

先程、人は見かけで判断してはならないと言ったが、ある「合衆国の心理学者」は人間が相手に与える印象がどのような要素で構成されているのかを研究していた。

そこで「ある法則性」を見つけ出した。

『第一印象は見た目で決まる』

この意味は「第一印象は出会って数秒で決まる」ということと、対面の人について「言語、視覚、聴覚」で矛盾した情報が与えられた時に、どの要素を優先して判断しているかというものである。

そのことについて研究した結果、

視覚で55%、聴覚で38%、言語で7%。

という結果になったという。

つまり話の内容といった言語情報よりも、見た目や仕草、身だしなみがだらしなかつたり、姿勢が悪かったりといった視覚情報が人の印象を左右するという事である。視覚情報と聴覚情報を合わせると九割にも達するため、「人は見た目で九割判断している」という解釈が広まっていた。

残酷なことだが、今の世の中で初めて会った人に好印象を与えるには、自分の人間性やトーク力よりも見た目が重要なのである。第一印象は出会ってから三秒から五秒で決まるとすら言われており、初対面の段階で与えた印象は余程の転機が無い限りはずっと残り続ける。

初対面でいい印象を与えると、悪い部分を見せても今日はたまたま機嫌が悪かったんだらうと見なされて多少は許されてしまう（だがあまり人前では常に悪い印象を見せないように心掛けることをお勧めする）。逆に初対面で悪い印象を与えてしまうと、良いところがあつたとしても簡単には相手の考えを覆すことは困難。

最初のイメージがずっと定着する現象を『初頭効果』と言う。

初頭効果に加えて、ハロー効果と呼ばれる際立った特徴に引きずられてその人の全てを判断する心理学的な性質も人間は合わせ持つているので、人は人を誤解しやすい傾向にある。初めの印象で誠実そうな印象を与えると、多少の遅刻が許されるようになったり、有名大学出身や大手企業に就職していると聞くと関係は無いのに頭を使うこと全般では超優秀だと思われやすいのはこのことだ。

長々と説明してしまつたが、要はオルトロスその台詞にはなんの説得力もないということだ。

アスナは警戒を一切解かずオルトロスを睨んでいる。

「『そんな警戒せんでもええやんか、ワイは本当のことしか言わないよお〜』」



『っ!! そ、そんなに疑うんやったら証明するよお。ワイ、君の言うてるモンスターのこと知ってるわ』

「え?」

その言葉を聞いた途端、彼女は警戒を緩めてしまう。

しかし、その言葉を信じるほど彼女も馬鹿ではない。むしろ優秀な方である。

『なんなら、ワイがそいつのどこまで案内してあげるよお』

「そ、そんな言葉に騙されるもんですか。貴方みたいなのと関わるとろくなことがないのは目に見えてるわ」

『ワイがそいつのどこまで案内してあげるよお』

「」

なかつたことにされた。

アスナがうんざりした目を向けていると、オルトロスはお構いなしに、

『君の探してるやつはこの先にいるから、ワイも一緒に探してあげてもいいよお』

元から笑っているように見えたが、オルトロスはにっこりと笑ってそう言った。

「」

アスナは未だに疑っている。

しかし完璧なまでに無邪気な言葉に、彼女はどこか信じ始めてしまっている節もある。

普段ならモンスターにエンカウトした瞬間に全身を粉々にしてしまうほど斬り刻んでいるのだが、なんとも間が悪いことに、前にボ

スモンスターをどう攻略するか各ギルドを招集して会議している中で、その攻略に参加していた『黒い剣士』から、

『NPCはその辺にある岩とか木とは違う。悲鳴だつてあげる、感情だつて表に出る。生き返るからつて困にしているわけじゃない。もつと他に方法なんて探せばいくらでもある。人だろうとコンピュータだろうと、作られた物だろうと命は弄んでいいものじゃない』

と言われた後である。

あの時、彼女は最高責任者であつた。

攻略をする際の総指揮を執ることを任せられ、彼女はボスモンスターを村に誘い込み、ボスがNPCの村人を攻撃している隙に、自分達が攻撃して倒してしまおうという提案を出した。そんな理不尽はNPCにとつてみたらたまつたもんじやないと、第一層で初めてパーティーを組んだ『彼』が言い返したところから次第に口論は激化していったことがある。

それ以来、彼女はNPCに対しての認識は変わってしまった。自分たちと同じ人間のNPCは普通の人間と同等に扱うようになり、こつちから剣を抜くことは決してしなくなった。危害を加えてくるNPCは例外だが。

さつきから親しく？ 話しかけてくるこいつにアスナは未だに迷っている。本当に悪いモンスターなのか、もしかしたらいいモンスターなのではないか。いやはや慣れないトークなどするべきではないものだ。ギルドに入つてかなりトークスキルは上がったとはいえ、相手がプログラムされた存在ではそのスキルが活かされるかどうかも疑わしい。

別に、『彼』との会話など律儀に心の隅に留めておく必要などどこにもないのだが、ここでまた確かめもせず倒してしまうと、何となくいろんな奴から『お前のタバコやめませす宣言は一時間しか保たなかつたな！ 笑える!!』に似たニュアンスの台詞を言われる気がするのだからそれはそれで癪だ。

まあ、彼は絶対言わないと思うが。

周りも言わないにしても頭の中では思われる可能性がある。

どうするかアスナは考えに考え、思考回路をオーバーヒートさせるほどあらゆる可能性を考慮した後、彼女の判断をオルトロスに告げる。

「わかったわ」

『おほ〜！ じゃあついてきて〜！ こっちだからあ〜』

聞いた瞬間オルトロスはすぐに後ろを向いて、そのまま先に歩いていく。

背中を見せることで隙が生まれてしまっただけでいつ攻撃されてもおかしくないのだが、敢えて無防備な背中を見せて信頼関係を築いていこうというオルトロスの考えなのだろうと、アスナはそう解釈したため何もせずただ後を歩いて行く。

だが、オルトロスの脳内は別のことで埋め尽くされていた。

(グフツ グフツ!! 可愛い上に、ワイについてきてくれるその素直さ...ますますワイの好みやで〜!!)

それ口に出して言ったら完全に即八つ裂きにされていただろうが、オルトロスはそのことについては心に留めておくだけで終わらせた。

どうせ後で楽しめる。

それまでは我慢我慢。

と、いつもと変わらない表情でそう思っていた。

まあ、嘘であった場合容赦無く斬り倒してしまう予定なのだが、そのことについてはまだ黙っておこう。

◇◇◇◇◇

『グフフ!』

触手を器用に動かして前を歩くオルトロスはドロリと濁った瞳で笑いながらアスナを連れていく。紫色の肌に気色悪い長いものをつけたタコさんは、相も変わらずのわるーい表情を浮かばせている。当人はどうやら、とつてもご満悦らしい。

上機嫌に触手をバタバタ振って、

『なんかこれって、いわゆるデートっていうのをしてるみたいやな』

『ねえ？ まだなの？』

『え？ 無視？ まさかの無視!』

「私は真剣にこの任務に取り組んでるの。さっさと案内してくれる？」

『んもう！ せっかちなんやから〜。もちよつと先やで〜』

普通の会話を繰り返してアスナとオルトロスは歩いていく。

あれから数十分が経過。結構時間を有効的に活用したい副団長のアスナからすればかなりのタイムロスに感じるだろう。本来であれば現実世界で使うはずだった時間。それを仮想世界で使うことになって皆苛立っている。アスナもその一人。一分一秒でも無駄にたくない。その時間を現実世界に戻るために使いたいのには、今回の単独任務で失ってしまった。

しかし、これに関しては何をしても改善しない。

今のところ、出来ることは前に進むことだけ。

日々レベルを上げて剣術を極め、更なる高みへと目指すことだけが元の世界へと帰る唯一の方法。今この瞬間どう足掻いても何かが変わると思えない。

だがしかし。

さすがに、長すぎる気もしてきた。

オルトロスについていってもう何分経ったのか、細かく時間を数えていたアスナはそろそろ我慢の限界に近かった。ついていってもそ

れらしい物は見当たらない。それどころか、なんか人気のない場所まで来てしまっていた。

アスナは低い声で尋ねる。

「ねえ？　一体どこまで行くつもりなの？」

『デュツ　デュフフフ!!』

と、質問した瞬間にオルトロスは口を三日月みたいな笑みを浮かべ、

『そら、二人でええコトできるトコに決まっとするやないか〜!』

「!？」

『へへ〜ん!!　騙されちゃってまあ可愛い〜!!　ホンマ君ワイの好みやで〜!!　えへへ、残念だけど全部嘘でした〜!!　君の言うモンスタ〜も!　この辺りで好き放題やってんのも!　実はワイでした〜!!　ギャハハハツ!!』

「」

『あれ?　今ムカつくタコ野郎と思わなかった?　ごめんねごめんね〜!!』

一気に寒気が押し寄せてきた。

ずっとその嫌な空気は感じてはいたものの、今の台詞で全身に鳥肌を立てせる。

どの女性にとつても不快で気色の悪い発言だが、オルトロスは弛緩しきった笑みを浮かべているだけで悪びれている様子もない。いやらしい目つきでアスナを見ているが、現在彼女の頭の中はぶちギレる寸前にまで達していて、そんなキラキラした瞳を受け止める余裕などなかった。

「まあ、こうなるんじゃないかなって思ってたけど」

震える手を腰にある細剣へと伸ばす。

モンスターのかげに、ご丁寧な日本語で真実を語ってくれた。

では、もう遠慮はいらない。

「覚悟しなさい——ッ!!」

『えらい秘密の技！ たこ足!!』

「!？」

アスナの返事も待たなかった。

怒りを爆発させて切り刻もうとした瞬間、オルトロスが先手を打った。自分の触手をアスナの腹の真ん中に巻き付け、身動きが取れないようにする。アスナの体を捕まえた途端にオルトロスは腕を持ち上げ、その際にアスナは剣を落としてしまう。

『グフツッ。グフフ!!』

「このッ!! は、離してッ!!」

アスナは無論抵抗した。

幸いにも腕だけは自由だったので巻き付いている触手に何度も拳を叩きつけて、拘束から逃れようとする。

しかし、びくともしない。

逆に、殴れば殴るだけ体力が消耗してきつくなってくる。

その様子を見たオルトロスは愉快そうに笑っていた。ついにあんなことやこんなことにそんなことまで出来る瞬間がやってきて嬉しいのか、アスナの体に巻き付けている触手の力を強めてさらに苦しませる。で、ネバっとした触手でアスナは頬を撫でられ、彼女の背筋に悪寒が走る。

『ギャハハハハッ!!』

「ッ!!」

逃れる術がない。

このままではやられる。こんな気色の悪い奴に何かをされてやられてしまう。そんなの絶対嫌だ。死ぬよりもひどい目に遭う未来しか想像できない。

なんとしてでも逃れたいが、解決策が見つからない。

ギリツと奥歯を噛んだ、その時だった。

ザシユ!! と。

直後に触腕の一本が根本に落ちた。

ちようど、アスナを捕まえていた一本である。

『ぎぎにゃあああああああああああああッ?!?!?!』

鼓膜に響く甲高い声がオルトロスの口から発せられる。

その声が聞こえた瞬間、アスナの心臓は掛け値なしに止まったと思う。何が起こったのか理解できず、拘束から解き放たれたアスナはそのまま地面へと落とされ、尻餅について啞然としてしまっている。

その間にも、オルトロスは自慢の腕の一本がなくなった苦しみで悶えており、ブヨンブヨンと体を揺さぶってどうにか痛みを逃がそうと必死になっている。

「無事か?」

「!?!」

そんな中で、アスナは確かに聞いた。

男の声だった。

いつの間にか目の前に立っていた男から発せられた声。アスナはその声の主が誰なのか、息すら殺して視線を徐々に上へと上昇させる。

足から腰まで。

腰から胴体まで。

胴体から顔まで。

少しずつその全体の全体を確認するように視線を向けるにつれて、ピリピリと全身の肌を薄く刺すような感覚が増していく。

目の前にいる男の全体像を把握し終えた後、先程まで悶え苦しんでいたオルトロスも自分に攻撃してきた奴を視認すると、わかりやすい質問を投げかけてきた。

『こ、こんの〜!! なんやねん! 誰やねんお前は〜ツ!!』

必死な声色で何者なのか聞いてきたオルトロスに、男は手に持っていた大剣を肩に担ぐと口元に余裕そうな笑みを浮かべ、静かに言った。

「ただの通りすがりだ」

『あ、実はワイもただの通りすがりですねん。ほんじゃ』

気が変わったっぽい。

男の筋肉を見た瞬間に考えを改めたのか、ふざけた口調だけを返して帰ろうとするオルトロスであったが。

ズバア!! と。

鋭い音の塊がオルトロスの目の前を通過した。

オルトロスは冷や汗をかきながら一撃が来た方向へと視線を向ける。音の塊というよりは空気の高圧を破って解き放たれた衝撃波がオルトロスの全身を叩いた。

鋭い一撃を放ったくせに、アスナはまだ当てる気ではない。

今のはついうっかり。なんかふざけたことを抜かして立ち去ろうとしていたので、つい力の制御を誤って剣先から鋭い一撃が飛び出しただけだ。

その一撃がもしオルトロスの体に少しでも当たっていたら死んでいたかもしれないが、まだその時ではない。

顔の前に細剣をかざすと、刃に宿っていた光の残滓が弾ける。プログラムされた技を放ち終えたという知らせだった。敢えて当てな



かったソードスキルには殺意が込められており、もしそれが当たったらどうなってしまうのだろうか、オルトロスはさらに冷や汗を流している。

「ふざけないで」

可憐な少女にしては、俯いているにせよあまりに低い声であった。そこに副団長としての気品はない。

「逃がすと思ってるの?」

俯いていた少女が、何か怖い声で呟いていた。

そしてようやく顔を上げる。

「いよいよ、アスナの眼光が真っ正面からムカつくタコ野郎を射貫いていく。」

「あれだけ時間を取らせておいて、その挙げ句私にあんなことをしておいて、ただで済むと思わないでよねッ!!」

「あらいやだ、とオルトロスは心の中で思った。

「どうしよう、好みの女の子の後ろに悪魔みたいなのが見える。完全になんか黒いオーラを纏っている。」

「ふっ」

対して、その様子を見ていた男は薄く笑った。

「嘲るのでも、見下すのでもない。」

「なら、俺も手を貸そう」

彼は、クラウドは彼女の隣に立って武器を構える。

前後に何があったのかは知らないが、面白い展開になりそうだと感じたクラウドは微笑んでいた。

釣られるように、アスナもまた薄く笑っていた。

二人は肩を並べ、各々の得物をオルトロスへと向けていつでも戦えるようにする。

一見すれば、大団円みたいな柔らかい空気。

冷静に考えれば不自然極まるそのムードをぶち壊すように、改めてオルトロスはふざけた口調で冷酷に言っただけだ。

『じよ、上等じゃ〜ツ!! 二人まとめて相手してくれるわアアアアアアアアツ!!』

オルトロスが長い触手を乱暴に振り回して迫ってくる。

それに合わせるように、二人も地面を蹴って向かっていく。今日初めて会ったばかりだが、上手く合わせられるとお互い確信していた。

チームプレーも悪くはないと感じていたクラウドには、何の迷いもない。

両陣営に別れた剣士二人と怪物は互いに睨み合い、そして躊躇なく激突した。

## 第13章

戦いというのは常に先を読んで行われる。

相手がどう動くのか、そして自分は動くべきか。上層プレイヤーや攻略組と言われる範囲に入った今でも、この瞬間が最も緊張する。加えて、今日は初対面の奴との攻略だ。

上手く合わせなければ、攻略もうまく進まない。

チームプレーは慣れていても、初対面のやつが相手では緊張する。

「行くぞー！」

その声のアスナの硬直を解いた。

クラウドの掛け声によって思考は臨戦体勢に切り替わる。余計なことを考えるよりも先に剣を動かすことを優先して動かねばならない。

「俺は右から攻める」

「じゃあ私は左からー！」

短く言葉を交わし合うと、同じタイミングで走り出す。

打ち合わせなんてない。だが、最小限の会話と身振りで直ちに行動を起こせるように心構えはできていた。二手に分かれて、オルトロスの注意を分散させるように接近する。

『ちよっ!! それずるゝい!!』

しかし、ピンチだとは全然思っていない様子だった。

二手に分かれて一人に集中できないようにしたことで一瞬の硬直が生まれた隙に、クラウドが背後へと回り込む。クラウドが背後へと回った時には、左から攻めてきたアスナがオルトロスの触手を斬りつ

ける。

『いや〜!!』

痛がってんのかそれともふざけてんのか、どちらにしても手応えは感じられなかった。

やはり、こいつの腕はかなり固いようでアスナの細い刃では通りにくいようだ。

見た目通りこいつは軟体動物。タコのようにおそらく身体の九十パーセントが筋肉でできており、その筋肉がかなり固いと思われる。

アスナのような武器は相手の身体を突き刺すということに特化した武器。一応切ることも可能ではあるが、相手を突くという剣術が基本のため斬り落とすという部分では普通の剣より劣る。クラウドのような重い一撃を放つバスターソードや、クラインのような切れ味に特化した刀でなければ斬り落とすことは難しい。

しかし、アスナの狙いはそこではなかった。別に、触手が切れまいがどつちでもよかった。ただ、注意をこつちに向けられればそれで良かったのだ。

『ごんの〜!!』

オルトロスは、目障りなアスナに気を取られているようで、腕を切りつけてくるアスナを再び捕まえようと自慢の触手を小刻みに動かし、クラウドに無防備な背中を向ける。

「隙だらけだな」

バスターソードをその無防備な背中へと振り下ろした。

一閃。二閃。

ふざけたように吠えるオルトロスが振り返ってクラウドに攻撃しだす前に、前転で触手の間をすり抜ける。

『あくんもう痛った〜い!!』

こいつの感情がよくわからない。

先程から攻撃を当てるたびにこいつはふざけた悲鳴をあげる。本気で痛がつてんのか、ふざけてんのかわからないからちやんと攻撃が通っているのか不安になる。悔しがっているというのは多少あるのかもしれないが、それすらもふざけた態度のせいでよくわからない。何本もある腕を乱暴に振り回して二人の身体を捕まえようと必死になっているのを見ると一応は戦う気はあるようだ。

しかし結局、オルトロスの触手は誰も掴むことはできなかった。

二人の連携が完璧だったからだ。

アスナが前から攻撃して注意を前へと向けさせると、背後に回ったクラウドが無防備な背中を斬りつけ、そのクラウドに攻撃しようと振り返ってもすでにそこにクラウドの姿はない。これを繰り返すことで、オルトロスは混乱状態に陥っている。

これは先程採取クエストで風林火山のメンバーと一緒に攻略した際に得た教訓だった。

チームプレーをする際は、正面から渡り合うのは不利。全員が全員で馬鹿正直に前から攻撃してしまえばあつという間に全滅する。誰かが注意を引いて、無防備になった背中に攻撃を叩き込む。これをさっきのアスとの戦いで学んだ。

オルトロスのような大柄なモンスターに比べて小柄な人間ならばこそ、動き続けることで翻弄できる。オルトロスが体を半回転させたときには、すでにクラウドは背中側へと常に回り込んでいた。一方、アスナおその動きを見澄ましていたかのように動いていた。クラウドと二人でオルトロスの頭と背中を挟み込む位置に移動する。

「今だ!!」

クラウドが叫ぶよりも早く、アスナは身軽に左右にステップを踏み

つつ、オルトロスの顔面に狙いを定めていた。

オルトロスがアスナに気を取られ、その背後がまたガラ空きになる。まるで吸い込まれるように、クラウドはその背中に斬りつけていた。その一撃でまたふぎけた悲鳴を漏らしたオルトロスがクラウドに向き直れば、待っていたとばかりにアスナが細剣を叩きつける。

無言のうちにも見事な連携だった。

だが、この連携の一番の活躍を見せたのはアスナだった。アスナがうまくオルトロスを誘導してくれたからこそその成果なのだ。

しかし、クラウドの方も素晴らしいと言える。アスナの無言の作戦を察しているのかと疑ってしまうほどにうまく合わせて動いている。打ち合わせもなしに連携を繰り出せるクラウドの対応力も異常なほど素晴らしかった。

(うまく合わせてくれるからやりやすい)

ただのプレイヤーではないと思っていたが、これほどの腕前だとは。

クラウドのおかげで気持ちに余裕が生まれたアスナは自信を取り戻す。今まではただ作戦を練って、攻略の際は周りに守られていたばかりのアスナであったが、今回のクラウドの連携で自分の腕前が確かなものになりつつあった。自分だってやれる、剣を持って戦える。それが証明された気がした。

アスナは剣筋の速度をさらに上げる。

何度目かの細剣の攻撃が、オルトロスの横顔に食い込んだ。今までとは違って確かな手応えが腕を伝わってアスナの全身を駆け巡る。

『ちよっ!?! アカ〜ンッ!!』

口調は相変わらずではあったが危機感を抱いている叫び声と共に、オルトロスが横倒しになった。

「ツ!!」

腕をばたつかせながらもがくオルトロスに、クラウドとアスナが駆け寄った。きらめく刃。二人の得物がオルトロスの命を刈り取るために鮮やかに光を放つ。

互いのソードスキルを叩き込み、一気にライフを削り取る。

『って、いつまでもやられっぱなしのワイじゃないわあああああああああッ!!!』  
『あッ!!!』  
『うッ!?!』

オルトロスの目に炎が灯った。

ようやくやる気を出したのか、いよいよ反撃に出るようだ。この程度では絶対に斃れはしない。好き勝手動き回ってあらゆる方向から攻めて来られたせいでこっちの攻撃は当てづらかったが、二人が目の前から同時に攻めてきたことよって最大のチャンスが訪れた。

すぐに体勢を立て直して起き上がると、触手を振り回して近づきすぎたクラウドとアスナを吹き飛ばした。

「くっ!!」

「うッ!?!」

クラウドは大剣を盾にして両足に力を込めて踏ん張って身を守ったが、アスナの方は細剣であったが故に受け止めるには防御力が足りなかった。アスナはそのまま吹き飛ばされ、地面に何度も叩きつけられながら転がって行く。

クラウドは無事かどうか確認しようとしてアスナの方に目をやる。すると、細剣を支えにして懸命に立ち上がっている様子が見えた。まだ戦えそうではあるが、あれではしばらくは動けないだろう。アスナもそう悟ったのかストレージから回復薬を取り出して回復に専念している。

その様子を確認したクラウドは改めてオルトロスの方に向き直る。オルトロスは先程から変わらなずふぎけた表情でいるものの、明らかに怒りを抱いているようにも見える。腕をプルプルと小刻みに震わせ、クラウドを睨むようにして視線を固定し、そして、隙を見せないように威嚇しながら距離をとっている。

『こんのおおおおおおおっ!!』  
「っ!!」

オルトロスが跳躍して一気に距離を詰めてきた。

触手の先端を丸め、まるで爆裂拳のような攻撃を繰り返して来る。けれども、その動きもクラウドは織り込み済みだった。

オルトロスの攻撃を大剣で防ぎつつ、わずかな隙を見つけたら即座にそこに叩き込む。オルトロスと渡り合いながら状況を確認しつつ、秘かに少しずつ立ち位置を変えて地の利を得ようとする。

だが、捌くのが大変だった。何本もある触手をたった一本の剣で凌ぐのはさすがのクラウドでもきつい。合体剣のように二刀流であったらここまで苦労はしなかったが、どういうわけかこの世界では剣を二本持つことができない。剣を二本予備で所持したとしても装備できるのは一本だけ。システム上、大剣を二本両手に持つことはできないようだ。

止むことなく何度も繰り返される触手の爆裂拳に、クラウドは次第に押され出す。

『筋肉モリモリな奴嫌いだああああッ!!』

「!？」

『終いやあああああッ!!』

と、オルトロスが急に叫んだ。

叫ぶと同時にオルトロスは最も強い一撃を放つと、クラウドの身体が後ろへとわずかに吹き飛ばされる。吹き飛ばされたことによつて



強引に体勢を崩され、クラウドは地面に膝をついてしまう。距離を離されたクラウドはオルトロスの姿を確認しようとする。目の前を見たその瞬間、

「危ないっ!!」

「ッ!？」

アスナの声が飛んできた。

その声に一瞬戸惑っていると、距離が離れていたはずのオルトロスが至近距離に迫ってきていた。何本もある触手全てに力を込め、強靱な脚力を使って跳躍したのだ。

オルトロスはクラウドの身体を押し潰そうと斜め上から落ちてくる。

「くっ!!」

反射的に前に飛んで回避した。

うつ伏せに地面に倒れこむと、オルトロスの身体はクラウドを通過していった。背中の上をオルトロスの巨大な触手達がまたいでいったとき、ガチガチと長い牙を噛み鳴らす音はつきりと聞こえた。

「離れてくださいっ!!」

後ろで控えていたアスナが地面に落ちていた小石を拾ってオルトロスに向かって投げつける。

小石でオルトロスの気を逸らしてくれている間に、クラウドはどうにか起き上がることに成功する。

斜め横に側転しながら起き上がると、クラウドは再びオルトロスに接近してバスターソードを振り下ろす。見事に一番右の脚に命中し、体勢を崩したオルトロスが吠えながら二、三步横にズレた。

『ッ!! ぐぬぬっ!!』

「今だ! 叩き込め!!」

「はいッ!!」

短い返事を合図に、二人はオルトロス目指して走り出す。

二人を威圧する眼光に心臓を波打つが、それを熱い闘志で押し返した。

『コンニャロオオオオオッ!!』

鋭い睨みを散らつかせたオルトロスは上体を斜めに向ける。

その動作が何を意味するのか、二人はとづくに気付いていた。体当たりの予備動作であるということは、これまでの経験ですでに把握済みだった。

ぶつかってくるよりも早く前方回転で懐に潜り込み、バスターソードと細剣をそれぞれ触手のつけ根目掛けて叩きつける。

『いったアアアアアアアアッ!!!?』

二人の刃が強固な鱗を貫いた。会心の手応えでオルトロスは尋常ではない叫び声をあげた。

「いけるっ!!」

アスナはオルトロスが苦しんでるのを見てそう確信した。

自分たちがそうであるように、オルトロスだって手傷を負ってダメージが蓄積しているのだ。実際、オルトロスの頭の上に表示されているHPも残りわずか。あとはモンスターと二人の根比べ。どちらが先に音を上上げるか。それで狩りの帰趨が決する。

「ここまできて先に引くわけにはいかないッ!!」

アスナは細剣を振るい続ける。

クラウドもそれに合わせるようにバスターソードを素早く振り続ける。

一撃、二撃。

こまめな斬撃を繰り返してから、最後に大きく足を踏み込んで殴りつけるように横薙ぎに斬る。

『も〜うッ!! 痛いって言ってるやろおおおおおッ!!?』

何度か斬撃を繰り返していると、オルトロスはたまらず上体をひねった。そのまま飛び跳ねるようにして二人の前を通り過ぎると、密着していたはずの空間に隙間が生まれる。

鞭が唸る。

強固な鱗で覆われた触手達が、二人に迫る。

しなるようにいくつもの触手の先端が曲げられた瞬間、触手は鋭い一撃となる。

が。

「同じ手は喰わない」

クラウドが咄嗟にアスナの前に出ると、バスターソードを盾のようにして構え直した。足を踏ん張り、何度も放たれる衝撃を全身で受け止める。鋭い金属音に揺さぶられ、ブーツのつま先が地面にめり込む。

それでも、クラウドに直接的なダメージはない。

「ッ!!」

「!」

クラウドは後ろにいるアスナに視線を走らせる。

碧く幻想的なクラウドの瞳が意味ありげに光るのをアスナは見た。その視線の意味を理解したアスナは心の中で応答し、クラウドの肩に足に乗つけて空高く跳躍した。

オルトロスの頭部を超えるほどの高さ。

『っ!?!』

オルトロスの目が上へと向けられる。

その隙を見逃さなかったクラウドの大剣に鮮やかな赤のライトエフェクトが宿る。それを確認すると、クラウドは姿勢を低くし、剣を振り回しながらその場で横に何度も回転すると、その勢いそのまま飛び上がり、遠心力と共に相手に重い一撃を叩き込んだ。

『ッ!?!?!?』

地面ごと叩き斬る一撃は身体中に鋭い感覚が這い回る。

インフィニットエンド。

スピード、バネ、反射といった全身の身体能力をフルに使って回転を利用し、斬った時の衝撃と反動をも次の攻撃へ繋げ上乘せする。回転と攻撃を繰り返すほど攻撃力は増していくその威力は絶大だった。

その一撃でオルトロスの首がこちらを向き、再び注意が逸れたその瞬間、アスナの細剣に光が宿る。

「はあああああああああッ!!!」

まばゆい閃光。

落下の勢いもろともに集束した熱量が一気に剣先から放出され、頭部を貫くと赤黒い血飛沫が噴き上がり、オルトロスが前のめりに倒れ込んだ。

空より落ちたアスナの逆手に持った細剣がオルトロスの頭に突き立てられ、そのまま踏み倒されたのだ。

『ぎにやアアアアアアアアアアアアッ?!?!?!?』

もう斬れ味も構っていられなかった。

たとえ刃こぼれしようとも、剣が折れようとも、ここで決めるしかなかった。

頭を貫くと刀身は落下の勢いとオルトロスの硬い鱗との重圧に耐えられずにバキンツと音を立てて折れてしまい、そこでオルトロスはひととき大きな咆哮を上げると、ガラス片となつて爆散した。

周囲の空気は錆の味へと変化し、第一層のフィールドが赤いまだらな模様に染まつていく。

「やった」

アスナは確認するように周囲を見渡す。

あのふざけた顔面をしたタコ野郎の姿はどこにもなかった。あの変態モンスターがアスナの前に現れることは、二度とない。

「やったんだ!」

狩りを達成したと理解した途端、全身から力が抜けていく。

膝を折ってへたり込みそうになるのを懸命にこらえた。疲弊して膝をつくなんて無様な姿は副団長として許されないと思つたからだ。

「怪我はないか?」

「!」

と、クラウドが大剣を背中にしまいながらやってくる。

怪我がないか尋ねられ、アスナは息を切らしながらも笑顔で答える。

「へ、平気です」

アスナは折れた細剣を胸に当てながら頷く。

その様子に、クラウドはただ目を瞑って微笑んだ。

そして、『副団長』としてではなく『一人のプレイヤー』としての攻略が無事終わったことに、アスナは疲労以上の安堵を覚えた。

私はやれる。プレイヤーとして剣を持って戦える。

「彼」に、自分が及ばないのはわかっている。それでも、皆が望む結果を出せたのだから、みんなが理想としているプレイヤーに少しでも近づけたのではないかと思うのだ。

「」

そんなアスナの横顔を、クラウドは黙って見つめていた。

その目の奥には、自分の存在価値の採点をしているような光が輝いていて、クラウドは少しだけ彼女のことを心配になっていた。

◇◇◇◇◇

「剣が」

アスナは折れた愛剣を悲しく見つめる。

攻略できたとはいえ、力加減やペース配分も疎かにしてしまったことを反省しているようだ。クラウドの圧倒的な動きに魅入られ、自分はそのれについて行くのに精一杯だった事が悔しかった。

「どうした？ やっぱりあいつに攻撃された場所が痛むか？」

いつの間にか、クラウドがすぐ隣に来ていた。

言われて改めて自分の体を確かめる。鈍い痛みは残っていた。それでも大きな怪我をしているわけではないそうだ。

「い、いえ、全然大丈夫です！……………それより、あなたの方こそどうして

？」

「？」

「どうしてこんな人気のないところにいたんですか？」

アスナはクラウドが何故ここにいるのか疑問に思っていた。

こんなところに人が出歩くことなど滅多にない。序盤のステージなんてよほどの用事がないと訪れないだろう。クラウドほどの圧倒的なプレイヤーがこんなところにいるなんておかしいとは思えない。

「それに」

「？」

「どうして私を助けてくれたんですか？」

「」

その質問にクラウドはそんなことか、とつまらなそうに目を細めると、

「特にない」

「え？」

「誰かを助けるのに一々理由なんてない」

つまらないことを聞くんだなと、クラウドは薄く笑っていた。

昔のクラウドを知っている者がこの場にいれば、今回のクラウドの行動を見て驚愕していたことだろう。他人に対して興味がなかった彼が、人のために動いた。それだけでも驚くべきことだった。金がないければ動かない、それ以上のことはしないと心に決めていたクラウドが自らの意思で見返りも求めずに助けに向かったなんて、昔のことしか知らない人たちからしたら耳を疑うレベルだった。

だが、クラウドは変わったのだ。

本当の自分を見つけ出したクラウドは、自分のためじゃなく誰かのために行動できるようになった。

仲間をこれ以上失いたくない、何もできずに終わるのは嫌だ。

そう思えるようになったのは、「彼女達」のおかげだ。

スラムの教会で花売りをして、自分がピンチの時は必ず助けてくれた『古代種』の女性。そして本当の自分を見つけるために一緒に探してくれ、いつも寄り添うようにそばにいてくれた幼馴染。

あの二人によって、クラウドは己の答えを見つけたのだ。

迷っていた自分に何ができるのか、何をすべきなのかを理解した。

だからクラウドは、わざわざこの世界にやって来たのだ。

これ以上、悲劇を繰り返さないために。

「あ、あのひよつとして」

「？」

「ひよつとしてあなたは、第一層のボスをたった一人で倒したあの」

今頃になって、アスナは気が付いた。

一瞬しか見れなかったので今日まで忘れていたが、目の前にいる男がああ時のプレイヤーなのではないかということに。

その質問に対して、クラウドは涼しい顔で微笑を浮かべながら一言だけ答えた。

「どうだろうな」

すれ違いざま、アスナに何かを手渡してそう言った。

渡されたのは、『転移結晶』。

「先に行くぞ、あんたもあまり見栄ばかり張りすぎるなよ」

「え？ あっつ!!」



その先の言葉をアスナは言うことができなかつた。お礼の一言を言う前に、クラウドは既にアスナの前から姿を消していた。

アスナは弾かれたように左右を見渡す。

どこを見ても、クラウドの姿はなかつた。たった数秒ほど瞬きをした瞬間にいなくなるなんて、正直驚きを通り越して呆れしかなかった。

「」

アスナは転移結晶に目を向ける。

転移結晶に目を向けている間、アスナはクラウドの言葉の意味ばかりを考えていた。

あまり見栄ばかり張りすぎるなってどういふことだろう、と。

アスナは何故かその言葉が「よくやったな」と褒めてくれているような気がした。妄想だろうか。同時に、クラウドはやはりアスナを気にして助けに来てくれたんだと確信した。理由はないと言っていたが、おそらくまだ未熟な自分を気にしてわざわざ駆けつけてくれたのではないか——そう思ったのだ。

見栄ばかり張るなというの、副団長としての立ち位置を意識しすぎるなということだったのかもしれない。自分が副団長だと言った覚えはないが、そう言われた気がしたのだ。

ここまで気にくれるなんて、素直じゃない人なんだろうなと思つた。

ただ、その言葉がどういう意味であつたのかは本人にはかわからな

い。

そのことについてはまた会つた時に聞けばいい。この世界は広いようでもとても狭い。だからまたいつか会えるだろう。

そう思つたアスナはクラウドから受け取つた転移結晶を発動させ、とある『鍛冶屋』の元へと移動した。折れてしまった剣の修理、もしくは新しい武器の製作をお願いするために、昔からの知り合いである『女性プレイヤー』へと会いに行く。

ただ、今日中というわけにはいかなかった。

鍛冶屋に向かっても、その女性プレイヤーは生憎と留守であったからである。



暑苦しい洞窟の暗闇の中に、短い呼吸音が鳴る。

物陰に隠れている『笑う棺桶』ラフィン・コフィンの下っ端のプレイヤーは、誰からも『なんでこんな殺人者に堕ちたのか想像がつかない』と言われるような男性だった。現実では家に引きこもって親に食料を分け与えてもらうような人間ではあったが、それにはそれなりの理由がある。

人には必ず、事情が存在する。

何かに裏切られ、現実に絶望して空想に逃げ込むという人間は確かに存在する。それら全ては他人のせい。本来は明るく元気に頭脳労働、肉体労働ともにそつなくこなせる。そういう人間であった。

彼にも彼なりの事情があるのだが、そういつたことを他人が興味を持つても、上手く誤魔化すだけの話術を備えていた。

ともかく、『笑う棺桶』ラフィン・コフィンとかいうクズみたいな集団の中でも、彼はそれなりの良識を持っていた。そこに流れ着いた際、他人との協調を求めていた。互いが互いを蔑みあう青集団の中で、そういった行為は浮いていたのだが、彼は少しでも信頼を築きたかった。

が。

「くそ あいつらの悲鳴がやかましい」

あらゆる方向から悲鳴や救援を求める声がひっきりなしに聞こえてくる。

もう、誰も信じられない。

この組織の幹部の四人はとつくにどっかに消えてしまった。仲間

を見捨てて、自分たちだけ既にどこか知らない所に逃げ去ったのだ。ゆつくりと築いていこうと思っていたものは、全て今この場で崩れ去った。

何もかもが、〃誰か〃によって崩壊させられたのだ。

「うっ」

思わず口から嗚咽が漏れる。

とにかく一度ここから離れたほうがいい。今この場に安全なところなどない。

見知らぬ〃人影〃が徘徊している以上、迂闊に動くことなどできない。しかし、多少のリスクを負ってでもここを出るべきだ。ここにいる『仲間』を置いてでも。自分の命が狩り取られてしまう前に。

「最悪だ。なんでこんなことにッ!!」

ふらふらとおぼつかない足取りで、彼は出口を探し始めた。もう戦意も殺意もない。必要以上の緊張が、かえって彼の集中力や思考をぶっ切りにして行く。

と、そこで気付いた。

「なんだ、急に静かに？」

あれだけ騒がしかった絶叫が、聞こえなくなっていた。

「ま、まさかッ!!」

ドツと汗が吹き出る。

まさか既に全員が、得体も知れないやつのお餌食になったのでは、などと最悪の連想が頭を過る。

(いや、それとも)

現実から目をそらしたかったんだらう。思考の逃げ道を探していた男性は別の可能性を思いつく。

「全員逃げたんだ！ そうだ、きっとそうに違いない!!」

その台詞に喜ばしく思える部分など存在しないことに、果たして彼は気付いているのだろうか。そうであった場合、彼は仲間から見捨てられてしまったということになってしまおうのだが、だが彼はそちらの方がマシだと思った。

最大の犯罪ギルドが全滅するわけがない。みんな逃げ切ったんだ。そう思った。

そうとわかれば自分も早いところ安全な外に出た方がいい。

彼はそう結論づけると、今までよりも若干力強い足取りで出口を指す。

自分にはまだ希望がある。みんなが集まれば怖いものなんかない。自分たちは、最大で最恐の犯罪ギルドなのだから。

そう思っていたからこそ、

ザシユ!! と。

腕が消し飛ぶ感覚がやってきた途端。

彼の思考はぐるりと回って、一気に恐怖状態に陥った。

「あつ、あああああああああああああああああああッ  
!!!!???

叫び声をあげながら走る。  
いる。

後ろにいる。

それがわかった途端に走るという行動しか思いつかなかった。

ただ、絶望はそれだけでは終わらなかった。

走っている最中、幾度も人間の一部のようなのが目に入った。腕、足、胴体、目。

特に、腕のある部分に目がいく。黒い棺が掘られた痕がある腕。それが目に入る度に錯乱状態になる。意識の細い糸が切れる。ぷちんと、小さい音が聞こえたような気がした。

「うがぁ!?! ギャあ!! ギャあああああああアッ  
!!!??」

男性は喉が裂けるほどの勢いで叫ぶと、全力で出口を目指して走り続ける。もうこれ以上は耐えられなかった。今まで自分を作っていたものがボロボロに崩れ、全ての意識が消え去った。そんな状態で走り続けていると、

「いっつ!?!」

急に硬いものにぶつかつたと同時に、男性は尻餅をついた。

目の前を見ると、そこには長い刀を携えて待ち構えるようにして立っている、『男』がいた。

雑音まみれで姿はよく見えないが、そいつが持つ長い刀に鋭い眼光はどう考えてもそれは驚異そのものだった。

「うわああああああああああああああああアッ!!」

振り払って逃げようとした。

後ろへと逃げ、また別の道から出口を目指す。

だが、本当は気づいていたのかもしれない。

薄く薄く伸ばしたような声が、自分の口から延々と漏れ出ることで意識はわずかに正常に戻りつつあった。

こういう事だったのだ。

沈黙が生まれた意味は単純だった。作戦も何もない。巻き返しも



## 第14章

生きとし生ける者達よ。

我々は既に『現実』という舞台に立ってしまった。  
始めてしまった以上。

もう後戻りは出来ない。

時は決して戻らず、過去を取り戻すことなど出来はしない。

プレリユード  
前奏曲はもう、奏で終わっているのだから。

この世界でいくつも学んだだろう。

裏側に隠された自分自身の歴史を紐解くだけでも、その人自身の『人間』を表すのに必要なくつかの重要な世界があることがわかる。

この世界はもはや本物となりつつあった。

多くの人間たちの幻想によって。

『これが俺の隠し技。エクストラスキル《二刀流》だ!!  
スターバースト・ストリーム“ツ”!!!』

これらの行動によってもたらされる『人間』の現実性はあらゆる常識をも覆し、非現実を更なる現実へと変化させ、そこに一つの世界性を見出すことで混沌とした知識の渦を劇的に整理する柱を打ち込むことが可能である。

『欲しければ、剣で——《二刀流》で奪い給え。私と戦い、勝てばアスナ君を連れていくがいい。だが、負けたら君が“血盟騎士団”に入るのだ』

『すなわち、『思想』。』

人にはそれぞれ個性があるように、その人の考え方も違う。違いがあれば、無論衝突が行われる。意見の食い違い、自分の思考の押し付

け、あらゆる願望が交錯して、やがて人々はその人を『他人』という『人間』として認識する。

その現実性が世界を更なる現実へと近づける。

『人間』同士のぶつかり合いは現実での常識、という事実を認めることが世界を本物にするためのスタートラインとなり得る。

『荒野で犯罪者プレイヤーの大群に襲われエー、勇戦虚しく三人が死亡オー、俺一人になったものの見事犯罪者を撃退して生還しましたアーツ!!』

『これは復讐なのか？ お前は、"ラフコフ"の生き残りだったのか!?!』

『アア？ 違いよ、いつの間にか勝手に壊滅して存在しなくなった奴らのギルドにどうやって入んだよ。これはそこにいた幹部の一人から教わったテクニックで、俺はただのそいつの知り合い。って、これから死ぬやつに言っても仕方ねえかアア!?!』

全ての思想を捨てた者までいた。

それは普通の人生設計や夢といったものとは話が違う。一つ一つの感情を積み重ね、『他人』に全てをなすりつける。あまりにも現実的な思考で、あまりにも非現実的な行動は、また本物へと近づける重要な欠片の一つとなる。

『間に合った間に合ったよ 神様 間に合った』

『わ、わかった!! わかったよ!! 俺が悪かった!! もうギルドはやめる!! あんたらの前にも現れねえよ!! だから——』

『人間』は困難と共に成功し、あまりにも簡単に失敗する。

それでいて。

人間たちは当たり前のように諦めたり引き下がるという事を知らない。



『この人殺し野郎が』

一つが壊れればその残骸を積み重ねて、現実には徐々に亀裂が生じさせている。

だが、世界も常に変わるように、人も変わっていく。

何かが失敗することが、次に進むべき道への手がかり足がかりを構築していくと信じている。よって、正常な現実の思考に縛られた者にはその常識が理解できず敵対してしまう。

何故、この現実を受け入れるのか。

何故、この世界を一つの世界だと認めるられるのか。

何故、そうまでして常識的でいられるのか。

世界は理不尽で理解ができないことばかりだ。一人の人間ともう一人の人間。考えが違う故に完全には理解することは出来ない。意見の対立ははずれ争いを生む火種になってしまう危険な存在。

『俺の命は君のものだ、アスナ。だから君のために使う。最後の瞬間まで一緒にいる』

『私も。私も、絶対に君を守る。これから永遠に守り続けるから。だから』

しかし、それでも人は他人を理解したがる。

その人の現実が魅力的であればあるほど、他人からはそれが美しい光景に見える。対立ははずれ、惹かれ合うものへと変わっていく。

失ったことを嘆いている者には、相応の褒美を与える。手を掛けたことを悔いている者には、相応の救いを与える。

自分達だけの現実はいずれ、運命へと変わっていく。

時の番人どころか運命の神々に唾を吐くほどの唯我独尊。あらゆる心理はあらゆる人が平等に全てを解き明かし、振りかざす権利があると信じ切って、既存の常識、倫理、あるいは信仰によって目の前の答えに蓋をして自らの真なる自由を放棄し、その他のために力を振るうことを誓う、傲慢でありながらも自己犠牲の心の持ち主。

それでいて、自分の大切な者達には自分の弱い部分すなわち真の自分を曝け出し、時には救ってもらおうという、矛盾した心の持ち主。

結局、この世界でも人間は『人間』であるしかなかった。

たとえば、どれだけ現実離れの世界を構築したとしても、魅力的な剣を握ったとしても、なりたかかった自分になろうとしても、その『本質』を見失うことなんて出来なかった。

仮想世界に構築された<sup>アバター</sup>霊媒は、『並行世界の自分』だったことに少年たちは気付き始める。

『何かを守ろうとする人間は強いものだ。君の勇戦を期待するよキリト君。攻略開始は三時間後。予定人数は君たちを入れて三十三人。七十五層、コリニア市ゲートに午後一時集合だ。では解散』

そんな中で、この世界を望んだ『人間』は何故ここまで『思想』を『現実』へと、多くを犠牲にして多くの時間を費やしていったのか。

どうして、この世界を作ったのか。遊びではないという言葉の意味は一体どういう意味なのか。

真実を知るには、本人に聞くのが一番だ。

安易な常識を否定して、真剣に狂人の内側へと切り込んでいこう。

『こうなってしまうては致し方ない。予定を早めて私は最上層の《紅玉宮》にて君たちの訪れを待つことにしよう。だが、その前に……』

他人の思考は理解できない。

理解できないからこそ、人はそいつの心理を追い求める。

段階を乗り越えてでも、展開を無視してでも。

『キリト君、君には私の正体を看破した報奨を与えなくてはな。チャンスあげよう、今この場で私と一対一で戦うチャンス。勝てばゲームはクリアされ、全プレイヤーがこの世界からログアウトできる。……』

『いいだろう。決着をつけよう』

さあ、<sup>シナリオ</sup>幻想を最終章まで進めようか。

これより始まるのは、その現実を生きる『人間』達の最後の物語である。

◇◇◇◇◇

ミッドガル、神羅ビル。

崩壊して今はほとんど立ち入る者達が少なくなったその場所には多くの人達が集まっていた。

科学者、と言っても間違いではない。

しかしこの場合、二元科学者と呼んだ方が役割として適切である。彼らは今どこにも所属していない。かつて神羅で生物兵器や武器開発などといったものを研究していたフリーの科学研究者達ばかりがここに集められていた。召集を受けた老若男女は普段の神羅ビルの静寂を引き裂くような勢いで、縦横に行き交い様々な情報のやり取りを行い、またミッドガルから遠くに離れた“社長”や遠隔地の味方と通信を行なっている。

「状況はどうなってます？」

と尋ねたのは、チャドリーと呼ばれる子供型のサイボーグだ。

一見すればこの関係者にはとても見えないが、これでも彼はここ  
の統括、つまり最高責任者を務めるほどの人物であった。

「先ほどよりも、数値が不安定です。クラウド・ストライフの精神面が  
危機的状況にあると思われれます」

と答えたのはこの研究者の一人。

古代種やソルジャーといった生物学に関しての知識に富んだ優秀

な人材で、かつては宝条の助手だった。

「まだ仮想空間にダイブしてから時間がそんなに経ってないっていうのに、なんでこんなにも意識や感情が混濁してるんだ？」

「クラウドさんがダイブしてから二十分ほど経過しましたが、連絡がないのも謎ですね」

調査に直接向かった本人からしてみれば、その事実の方が謎である。

時系列がおかしすぎる。

クラウドの中では既に二年という時間が経過している。なのに現実ではまだそれほど経っていない。

それだけではない、短時間のうちに彼の意識が異常値に達していた。様々な感情が、短時間で発生している。

喜び、悲しみ、怒り、驚き、恐れ、嫌悪、希望、畏敬、当惑、苦手、呆れ、冷静、困惑、渴望、夢中、嫉妬、興奮、痛恨、憎悪、面白さ、懐旧、緊張、敬服、崇拜、称賛、娯楽、焦慮、好感、性欲、同情、満足、不安、無力、疑問、悲惨、絶望、悲哀、挫折、驚嘆、空虚。

そんなありとあらゆる感情そのものが、クラウドの脳内に響き渡っている。

常人なら頭が割れそうなほどの激痛が起き、思考や感情の全てが奪われるほどの衝撃が身体中を暴れ回る気分。

要は、精神崩壊どころかショック死してもおかしくない状況だった。だが、クラウドは非公式ながらもソルジャーとしての耐性を身につけているためまだ耐え切れている。

しかし、本来のクラウドは精神面が弱い。

このままではクラウドがどうなるかわかったもんじやない。下手すると、魔晄に浸かって精神が崩壊した中毒者達よりもさらに悲劇的な状況に陥ってしまう可能性がある。

「電源を切ろうにもこちらからのアクセスを受け付けず、強引に切つ

た場合はクラウドさん自身に障害が起きる可能性もありますし、下手に動けませんね」

彼とてプロの科学者であり、それ相応の危機に対処するために綱渡りの行動を起こしたことも何度かあるが、ここまでの規模となると数えられるほどしかない。

そして、『未知の空間』という、今までのある種安定した箱庭の中で力を振るっていたこれまでの事件と違って、どのジャンルか、相手がどんなやつなのかもわからない所から取り組むとなると、これまでの経験はほぼ通用しないと断言してもいい。

あの、『英雄』が関わっているかもしれないともなれば尚更だ。

だが、『あの青年』はそんな世界を歩んできた。

日常と非日常。二つの世界を行き来し、自分の立っている場所が安定しているかどうかもわからない状況で、数々の敵と相対し、数々の悲劇を阻止しようと力を尽くしてきた。

そして今も、悲劇を起こさないためにわけもわからない場所に飛び込んでくれた。

「」

チャドリーは首を横に動かして隣の部屋を見る。

外からでも、ダイブした人間の変化を逐一確認できるようにするためか、その部屋の壁はガラス張りで、メインルームからでもVRゴーグルをつけて寝かされているのが見えた。大量の機械に囲まれたベッドの真ん中に、ツンツン頭の青年が横たわっている。

チャドリーはそこでわずかに表情を曇らせた。

クラウドの表情は見えないが、モニターに表示されている数値で感情や意識などは判断できる。だが、それが観測不能なほど感情が入り混じっていたらどう判断するべきなのかわからない。

当然、今回の事件には黒幕がいるはずだ。

まだ誰の仕業かもわからないが、仮に相手が『英雄』であった場合、

クラウドだけでなくミッドガル全体にさらなる悲劇を起こしにくる可能性は高い。

『失敗すれば最悪、人類が滅びる』なんて状況で、対抗するための切り札を用意したチャドリーが、切り札を失わせるなんてマネを取るわけにはいかない。クラウドを救い出すには、ただ傍観するしかないのか。黙って成り行きを見守る他ないのか。

「解決策の候補はいくつかあるものの、今は待機といった所ですか」

「チャドリーは壁に映った映像を睨みつけながら、内心では自分の感情をコントロールしきれていない事を自覚していた。

映像には、何も映っていない。

世界の危機へ対応すること。

これが、英雄を倒した無名の一般兵がいつも抱いていたものなのか  
今更ながら、チャドリーはそう考える。

「しかし、何もしないのは科学者として恥ですよね」

今はやれることをやるしかない。

彼が動けない世界で戦い続けるしかない。

そう思ったチャドリーは、クラウドがいる部屋の中へと入って行く。

そして、クラウドがつけているVRゴーグルに接続されている繊細な機械に、これまた複雑そうな機械を持ってきてクラウドのゴーグルにケーブルを繋げた。

「ブラックボックスとなる部分の解析はクラウドさんに任せて、僕はそこから漏れ出る残り物から解析をしてみます」

さて、ここからが本題なのだが、チャドリーの言っていることが理解できたものは少ないだろう。というか、全くいまいかもしれない。

彼の考えは簡単に言えばこうだ。

黒幕やら事件の詳細はおそらくクラウドが現在進行形で観測している。こちらからは何が起きているのかは全くわからないが、そのクラウドが今抱えている感情とリンクしてどういう状況なのかを推測するという、暴挙に近い観測方法だった。

つまりは記憶の読み取りといった感じか？

正確に読み取るのは難しいかもしれないが、何もしないよりはマシのはずだ。

チャドリーはもう一つのVRゴーグルを持つてくると即席で新たな機能を追加するために一度分解しだし、電子基板の端子から端子へとブリッジを繋げ、ラインの中を走る信号を明確な形に変換するように電子辞典ほどの大きさのパーソナルコンピュータから改造コードを入力して付け足していく。

「これであとは」

装着すればいい。

ゴーグルをかけて意識をクラウドの脳内にリンクさせるために意識を集中すると、今までなかった引っかけかのようなものを感じ取った。

ジジツ、と。

小さなノイズに似た電子信号がチャドリーのAI機能に衝撃を伝えてくる。

「何かを捉えたっ!？」

だが一体何とアクセスしているのかはわからない。

しかし本当はクラウドの脳内がこの空間に繋がっているのか、答えは最初から見えていたのかもしれない。

ただその名前を声に出して読めば良い。そこには必ずこうあるはずだ。

“セフィロス”、と。



繁華街から二本ほど入り込んだ場所にあるアルゲードの通り。

アルゴはそこをただ歩いていた。その場所に足を踏み入れるのは初めてではない。

彼女はよくここに通い詰めている。何故こんな治安の悪そうな場所に通い詰めていたのか、そこが『情報屋』にとつての宝の溜まり場だったからだ。そしてアルゴは、その情報を入手してあらゆるプレイヤーに有料で提供する『情報屋』と呼ばれる立場だった。

それと同時に。

彼女はとある便利屋に仕事を斡旋する『仲介屋』としての役割も担っている。

顧客から受けた依頼を便利屋に斡旋してマージンを得る、そこだけを見ればただの中抜き業者の真似事にも感じるが、それに文句を言う便利屋ではなかった。便利屋という立場である以上、そういった職をしている人種は社交性に欠けているくらいがある。つまり、縁を得ることが難しい。折角のうまい話を、依頼人を怒らせたばかりにふいにしてしまいかねない便利屋にしてみれば、アルゴのような社交性に長けた存在はむしろ有り難かった。

「そんなオレっちでも、時には我慢できなくなる時があるんだよナ」

独り言にしては、第三者に話しかけるような口調だった。

アルゴは唐突に立ち止まると、そんな誰に対しての言葉なのかわからない台詞を言い放った直後、アルゴの後ろの物陰から人影が現れた。

振り返ると、アルゴは目を見開いて言葉を詰まらせた。

幾度も後をつけられて鬱陶しく感じていたので遠回しに出てくる



ように言うと、そこに現れたのは見慣れぬ格好をした一人の『人間』がいた。痩せた体の上に小汚いローブを被っているため姿はよく見えない。生気のない青白い顔をして、槍ぐらいの長さの棒を杖代わりにして地面に突いており、正直なところ、どう見ても真つ当な人間ではない。

「悪いけど、今日は店じまいなんだ」

アルゴはそいつに近づきつつ、ゆつくりと告げた。

「オイラのことをどっかから知ったみたいだが、今日は勘弁してくレ。七十五層のボス攻略のための情報収集を徹夜でしたせいで疲れてるんだ」

見れば彼女の目の下が黒く染まっている。

涙袋の化粧にしては不健康な見た目。明らかにここ最近寝ていないような様子を見せている。その証拠に、彼女の足取りはどこかフラフラとしている。

そこまで言うてからアルゴは目の前の奴を見て、同意を求めるように首を傾げつつ頷く。

だが、そいつは黙ったままじっとアルゴを見つめていた。

そいつの反応を待つ素振りを見ながらも、アルゴは目の前の人間の姿を注意深く観察していた。何か危険なものは持っていないか、或いは『通常じゃないプレイヤー』の可能性はないか。

そいつは杖を持っている手とは反対の手に、大きな袋を抱えている。なんの袋かわからないが、おそらくは金だろう。見た感じ七桁ぐらゐは行きそうなほどの大金が入っているように見えるが、アルゴのいる場所からではそれ以上のことはわからない。

「あなたがアルゴ？」

長い沈黙の後、ようやくそいつは口を開いた。

女性のような高い声で、よもや名を呼ばれるとは思っていなかったが、アルゴは戸惑いつつも小さく頷く。

「そ·う·だ·が·何·の·用·ダ·?」

「あ·な·た·を·探·し·て·た·の·。·あ·る·人·」に仕事を頼みたくて

「!」

「あ·な·た·に·会·え·ば·。·彼·に·会·え·る·ん·だ·よ·ね·?」

「」

「出·来·れ·ば·。·今·す·ぐ·会·い·たい·ん·だ·。·す·ぐ·に·引·き·受·け·て·ほ·し·く·つ·て」

アルゴは息を呑んだ。

同時に、なるほどと思いましたが。言われてみれば確かに、目の前に

いるやつはいかにもそつちの方の雰囲気を感じ出している。

情報を欲しているっていう顔じゃない、急いで仕事を彼に引き受け

て欲しいといった感じであった。

「急な依頼ってことか?」

念のため、目の前にいる女にそう尋ねると、彼女は小さく頷いた。

その問いに疑問を抱いた様子もないのであれば、この依頼人がもたら

す仕事は間違いなく「危険」な仕事であると言える。

「わ·か·つ·た·。·じ·ゃ·あ·つ·い·て·こ·い·。·ア·イ·ツ·の·元·ま·で·案·内·し·て·や·ル」

そう促すと、依頼人は黙ったままアルゴに従って歩き出した。

幸いにも、アイツの住んでいるところはここの層だ。歩いて約三分、走ればそれよりも早く着く距離にアイツは何でも屋としての店を構えている。

「ちなみに、依頼内容を先に聞いてもいいか?」

それが気になつて仕方がなかつたアルゴは好奇心を抑えきれず、思わず聞いてしまつていた。

やつちまつたかなと思つたが、彼女はその問いに何も思わず、無機質な声でこう言つた。

「三十分後に始まる七十五層のボス攻略の場に、今すぐ向かつてほしい、つていう依頼だよ」

◇◇◇◇◇

今日も、いつも通りの一日になるだろう。

彼はそう思いながらカウンターに頬杖をついている。

いつも通りの一日だと思つてしまふのは本来おかしいと思う。何故なら、そう思うということはこの世界に慣れてきてしまつていているということを実証してしまつていているということに繋がるからだ。

それが何となく嫌だつた。

ここ数ヶ月、彼は雑用ばかりこなしていた。危険なモンスター退治。それだけを繰り返し返して、毎日毎日時間を無駄に過ごしていくだけの日々が続いている。

一応、大きな仕事だつて来る事もある。それさえ受ければ少し刺激的な一日を送れるはずなのだ。実際、今日だつて大きな仕事が出来た。あの大手のギルドである「血盟騎士団」の使いが今日の朝急にやつて来て、「今日、七十五層の攻略が行われる。報酬は払うから参加してくれ」と言つてきた。

仲介屋も通さずにやつてきたことには少々不快に思つたが、生憎とそう言つた仕事は引き受けてはいない。どれだけ大金をもらおうが、そういうのは例外なく断つている。使いのプレイヤーも引き下からなかつたが、クラウドの鋭い眼光を受けた瞬間に腰を抜かして出て行つてしまつた。

何度も諦めずそういった依頼をしに来るのをみると、大手のお偉い

さんはクラウドを高く買っているようである。

しかし悪いが、クラウドは絶対に攻略には参加はしない。

というか、自分がいなくても別に攻略はできるだろうと毎回思うのだが、何故そうまでして彼らはクラウドをしつこく参加させたいのか。

今回の攻略だって、最前線を攻略し続けるプレイヤーばかりがメンバーに選ばれていた。

あの、『二刀流使い』の『黒の剣士』に、この世界でその名を知らない者などいないとまで言われている『閃光』の名を持つ『副団長』だっている。ちなみに、聞いた話ではその二人は最近結婚したらしい。あの二人が結婚したと聞いた時はさすがのクラウドでも驚きを隠せなかったが、そんな最強と最強が組み合わさった最強夫婦が参加するのだから自分には必要ないように思える。

それだけでない。

あの第一層からみんなを引っ張ってきたディアベルが築いたギルドのメンバーも今回の攻略に参加し、『風林火山』の奴らも参加すると聞いた。

十分すぎるほどの精鋭が揃っているのだから、自分が出る幕はない。

しかし、こうも金にならない仕事もどうかとは思う。いざとなればアルゴに金を貸してもらうかなんて事を考え始めた矢先、

「ヨッ!! クラウド!!」

件のアルゴが事務所に現れた。

アルゴはそうやって、いつも絶妙なタイミングでクラウドに仕事をもたらしてくれる。そんな仲介屋だからこそ、人見知りのクラウドも信頼し、長年に亘って付き合いを続けている。

「お前に仕事だ。引き受けるかはお前次第だけだな」

まるでお前は絶対引き受けないだろうなという前提で言ってきたようにも聞こえた。入って来るなり開口一番がかなり失礼な気もするが、アルゴは構わず扉の方へと指し示した。

クラウドは無言のままそちらの方に目を向けると、いつの間にかローブを着た奴が扉の前に呆然と突っ立っている。

「お前に仕事を頼みたいっていう依頼人だ。話を聞いてやってくれ。それじゃ、オイラは疲れてるんで家に帰らせてもらおうぞ」

そのまま扉の方に向かったアルゴに対して、クラウドは思わず腰を浮かしていた。

「おい!？」

「じゃあな〜」

ろくな説明をせずにさつきと出て行ってしまったアルゴを、クラウドは呆けたように見つめるよりなかった。疲れてるのか足はふらふらとしていて意識が遠のいていたことから限界に近いみたいだ。

一方、依頼人と呼ばれたローブを着込んだ奴は、クラウドを食い入るようにして見つめていた。身長と同じくらいの杖を持ち、ただその場に突っ立っている。

■ 妙な奴だ。

■ クラウドは内心そう思いながら、腰を下ろして依頼人の話を聞くことにした。

■ 「依頼内容は？」

■ 単刀直入に聞いた。

■ 名前やら経歴やらなんかはクラウドにとっては興味のないもの。仕事の内容だけが一番重要で、それ以外は聞かないことにしている。

だがしかし、クラウドはそう尋ねながらも、尚そいつへの観察は

怠っていないかった。赤いローブを深く被っていて、顔はよく見えないし内側に着込んでる服も見えない。正直怪しい雰囲気しかない。

しかし、せっかく来てくれた依頼人だ。仕事の内容次第では引き受けてもいい。見たところ、杖を持つ反対側の手には大きな袋を持っていることから、おそらくは大きな仕事だろう。いずれにしても、こいつがまともなプレイヤーではないことは明らかだった。アルゴのあの様子からしても、少なくともただの雑用ってわけでないことは間違いないだろう。

クラウドがそう口にすると、ずっと黙っていた依頼人はようやく彼の方に近付いてくる。

視線をクラウドの方に固定したまま、予想通りの内容を口にした。

「七十五層のボス攻略の場に今すぐ向かって欲しいの。手遅れになる前に」

「何度も聞いた依頼だった。」

その依頼内容に、クラウドは思わず鼻で笑ってしまった。依頼人が大きな仕事を持ってきたという予想は的中していた。だが、よりもよってつい先ほど断った案件を再び持って来られるとは。

「そういう依頼は例外なく断ってるんだ。悪いが、諦めるか他を当たってくれ」

「それに、もうボス攻略は始まっているはずだ。俺が今更行っても、たどり着いた頃にはクリアされてるかもしれない。どっちにしても今向かったところで結果は出ているはずだ。すでにボスを倒してしまっているなら、俺の出番はない」

クラウドにとって、ボス攻略は他人との対立の場だった。

最後にトドメを刺した者には特別な報酬を与えられ、それに対して

妬んだ者からの総攻撃を受けることになる場所。チームプレー、協力なんて一見良い言葉だけを並べているように思えるが、みんな自分ばかり気にしていて、本当に他人のことを想って戦う奴は少人数だとクラウドは思っていた。

第一層をたつた一人で攻略した時、クラウドはほとんどのプレイヤーから敵視されていた。出歩けば毎回冷たい目で見てきて、正直鬱陶しくてうんざりしていた。

あんな面倒な思いをするくらいなら雑魚モンスターを駆除したほうが、まだやりがいがあつてマシかもしれない。

それに、このモンスターは弱すぎる。もはやルーチンワークとすら言えない、自分よりも弱い奴らを蹂躪するだけの行為。そこには何の手応えも、何の歯応えもない。そんな奴らを相手にして、倒したら倒しただけ他人から悪く思われるなんて、そんな不相応な待遇を受けるくらいなら何もせず攻略は他に任せたほうがいい。

第一層を攻略して、元の世界に帰れる第一歩を踏み出せた達成感はずかしくあつた。

あつたが、周りからの冷遇を受けてしまっただけに、その後の落胆は大きかった。

依頼人の発言に嫌味な態度で返してしまったのも、そんな過去があつたからだ。

「勘違いしてるみたいだから言っておくね」

「?」  
「攻略に参加してなんて誰も言っていないし、倒して欲しいのはボスじゃない」

だが、依頼人は真剣な面持ちで、そんな主張をする。

「倒して欲しいのはあなたを追っている人」  
「!？」

その言葉の意味が、瞬時に理解できたわけではなかった。

だがクラウドは、まるで最初からクラウドのことを知っているかのようなその口ぶりに、改めて依頼人を見つめていた。

そこでようやく、依頼人の顔がわずかに見えた。

一瞬であったためよくは確認できなかったが、女性だった。大自然のように緑豊かな瞳を宿した女性だった。

その瞳が一瞬見えた瞬間、彼の脳裏にあの「花売りの女性」の姿が過った。

この女は只者ではない。

直感的なものではあったが、クラウドはそう感じている。その一方でこの女が只者ではないのなら、何故そんな発言が出来るのか不思議でならなかった。

（俺の、追っている奴？）

「お代はここに置いておくね。手遅れになる前に、どうかお願い」

「!? お、おい!？」

こちらの事情を待たず依頼人がお金の入った袋をカウンターに置いた瞬間だった。

ジジジツ！ と。

誘蛾灯が点滅するような音が響いた。一瞬の不快な音に耳を塞ぎ、つい目まで閉じてしまったがクラウドは辛うじて瞼を開けて依頼人の方を見る。しかし、どういう手品を使ったのかはわからないが、つい先ほどまで目の前にいたはずの依頼人は気が付けばどこにもいなかった。ほんの微かに、全方位から、ジジジツ！ と小刻みに似たような音が響くだけだった。

「」

クラウドはしばし虚空を見つめていた。

が、しばらくすると壁にかけておいたバスターソードへと勢いよく



手を伸ばし、背中へと手早く収めた。

「ッ!!」

別に、あの依頼人の言葉を間に受けたわけではない。

しかし、どうしても拭えない。

悪夢のような予想が正しければ、今こうしている間にもボス攻略が行われているはずだ。

「あいつの言うことが本当ならッ!!」

可能性はある。

本気でそれが証明されていたら迷わず向かっていった。しかし、半信半疑でも向かわなければならぬ。

そう。

もしかしたら、追いかけていたものが現れるかもしれないのだ。

前置きも前触れもない、唐突に現れた。

クソみたいな問題文を目の前に広げられ、異端も異端が頭を揃えても答えが出ないくらいの難問に直面しているのだ。

「」

これまでの日常がガラリと変わる出来事だった。

中から外へと逃げ出すのではなく、外からわざわざ中へと踏み込む。大切なものを守るために、世界の中心点となる場所へ向かって走り、駆け抜け、飛び込んで行く。

クラウドに迷いを感じる暇などなかった。

いたずらだとも思わなかった。

モタモタとしている間に、約束の時間は過ぎていく。攻略を開始して二分は経過しただろう。今行っても間に合わないなんて考えよりも、急いで向かうということしか考えなかった。

どっちみち、本当にそこに現れるのなら行くしかないのだ。安全にこの世界から抜け出すためには排除するしかないのだ。

この世界に来てしまった原因となる、ソルジャーの頂点に君臨するあの『人間』を。

いや、『化け物』を。

だから、クラウドは迷わなかった。

全てを終わらせる戦いが、そこにあるかもしれない。ならば、黙って引きこもっているわけにはいかない。

それだけを胸に、クラウドは決意を込めて全世界に宣告するようにこう宣言したのだ。

「終わらせるッ!!」



『ク・ラ・ウ・イ・ワ・ク・ク・ノ・ウ』

もう一度、そいつは名を呼んだ。

男性にも女性にも、大人にも子供にも、聖人にも罪人にも見えるその人間が発した声色が、ほんの一瞬だけ、その名を呼ぶ時はザザツとした歪な感触を含ませた。

喜怒哀楽の全てを内包する普段のものとは違う何かの不気味さを増している。

『

と、その時だった。

バキリ!! と。

そいつの体の中心が細かく碎けるような感触があった。

そいつ自身の存在を司る、『記憶』の集合体の結合にエラーが生じている。その原因を考え、それからそいつは城の中へと振り返った。銀色の毛先からザラザラと分解しつつあるそいつの顔色は変わらなかった。あるいは、そいつにはそれすらも興味を向ける価値がなかったのだろうか。

だが、微かな変化には驚いていた。

『h o w う』

そいつは笑う。

自分と同じイレギュラーが紛れ込んだことに興味を示す。

距離も方向もわからない、ただ確かな敵意の感情。そいつは歩みを止めて、別のものへと注意を向ける。そいつほどの人物であっても注意を向けざるを得ない何か、城の中に存在していたのだ。

「なruasdfほぐ」

その間にも、ザラザラと指先が形を失って行く。

もう一人のイレギュラーが現れたことによって聖なる存在と言っているのかわからないが、何かの力によって存在を保てなくなってしまうている。

だが、そいつはこんなことで焦るようなほどの人間ではなかった。

『ryeirnfheおん』

そいつは歌うように何かを呟いた。

右手はすでに肘の辺りまで分解されており、体全体が半透明に透け、今にも崩れ落ちそうなのにそいつは笑っている。

しばらく笑うと、そいつは蜃気楼のようにそこから姿を消した。

消えた、と表現しないのは、まだそいつはこの世界に紛れ込んでいるからだ。

奴は別のところに移動したのだ。

最も効率的に周りから強引に存在価値を認識させられる、最前線の場へと。

◇◇◇◇◇

「キリト君っ！」

少年の背後から声がかかる。

キリトは首だけを動かして振り返ると、そこには地面に倒れ伏したアスナが涙を流しながら自分の名を大きく叫んでいた。

普段の彼女なら、こういう反応は見せなかつただろう。

だが、いつもの日常を送り続けた人間は急な展開を迎えると、全ての過程を通り越して現実を否定したくなる。

目の前にいる少年はみんなと違い、二本の足で床を踏みしめ、二本

の剣を持ち、勇ましい姿を見せている。その姿自体はいつもと変わらない。だが、いつもの展開から外れざるを得ない状況に直面しており、彼女は今少年のことを恐れていた。

少年が怖くて恐れてるなんてそんな幼稚で単純な理由じゃない、失うことが怖いのだ。

なにせ、少年の様子が、明らかにいつもと違っていた。

勇ましさはあるものの、まるで氷の海に浸かっていたように青ざめた顔。身体中に巻き付いた重い装備に耐えるのもやつとという感じで震えているのが見える。

彼だって、本当は怖いのだ。

今、目の前には元凶がいる。

黒幕がいる。

開発者がいる。

この世界の神がいる。

そんな奴を目の前にして、流石の彼も緊張してしまっている。先ほどまで一緒に戦っていた存在が実は黒幕で、その正体に気付いたらまさかの一騎打ちの申し出。勝てばみんなを解放するという最大のチャンス。そのプレッシャーもあって、彼はこれ以上ないくらい緊張している。

失敗は許されない。

失敗はつまり、自分の死を意味する。

勝利と死が同時に迫って来て、彼は心臓が破裂しそうなほど緊張している。

「ごめんな。ここで逃げるわけにはいかないんだ」  
「っ!？」

だが、それを感じさせないような台詞を彼は最愛の人に告げた。

その目を改めて見て、アスナはギョツとした。

よく見なければわからない程度だが、キリトの右目と左目の瞳孔の開き方が全く同じだった。焦点は正常に合っていて、なんの曇りも

ない瞳でアスナを見つめている。キリトの表情から、その事に気付いている様子はなさそうに見える。

つまり、彼には何の迷いもなかった。

本当は崩れ落ちそうになりながらも、彼は体に力を込めて真っ直ぐな目でただアスナを見ていた。

アスナの表情が止まった。

その目を見ればわかる。その目が語るのはキリトの抱える本当の芯。

だからこそ、少年は臆病な自分を隠す。誰かのせいだと、こんな世界がなければこんな事にはならなかったと、そんなつまらない台詞を口に出して誰かを傷つけないために。

もはや思い出すだけでも辛い、一つの過去。レベルを偽ってパーティーメンバーに入り込み、そこで得た仲間たちからの信頼。それを、自分のせいで全て失ってしまった。百パーセント自分が悪いというわけではない。しかし、それでも彼はその件については自分のせいだと悔やんでいる。あの事件に囚われている。

だから彼は、ずっとソロで続けた。

もう二度と、失わずに済むように。失うものが最初からなければ、傷つくことはない。

だが、そんなキリトにもう一度やり直すチャンスがやって来た。自暴自棄で攻略していた彼に、手を差し伸べた存在が現れた。

彼女、アスナがいなければ彼はずっと自己犠牲のようなプレイを続けていただろう。彼女のおかげで彼は変わったと言ってもいい。

実際、キリトは大切なものを守るために傷つく覚悟を決めて、一つの結果として成し遂げた。お涙頂戴の美化された自殺願望ではなく、ただやるべき行動の先にある種の終わりが待ち構えていて、それでも大切なもののために、彼女のために、前へ進んだのだという、一つの結果を。

その折れない芯が、アスナを黙らせる。

「死ぬつもりじゃないんだよね？」

「ああ、必ず勝つ。勝つてこの世界を終わらせる」  
「わかった、信じてる」

おそらく、アスナでも彼を止める権利はなかったのかもしれない。知らず知らずのうちに、彼女は自分でもわかっていない彼の本質を見抜いていた。他人は、その人が知らない自分を見抜くのが得意だ。故に、今彼が考えていることがアスナにはわかっていた。

「キリト！ やめろっ!!」

「キリトオオオオオオッ!!」

また新しい声が少年に投げられた。

自分よりも年下の男の子に運命を任せるなんて真似、大人として見過ごせないのだろう。勝つか死ぬかが賭けられた戦いに、まだ十五年前くらいしか生きてきていない子供なんかにはやらせるわけにはいかない。未来を生きるべき人間がそんな戦いに挑むなんて納得できない。二人は止めるためにシステムを凌駕しようとするほどの力で必死に立ち上がろうとしている。

しかし、少年はそんな二人の方に振り返ると、首を横に振って、

「エギル。今まで、剣士クラスのサポートサンキューな。知ってたぜ、お前の儲けのほとんどは全部中層プレイヤーの育成につき込んだこと」

「!?」

「クライン。あの時、お前を置いていってずっと後悔してた。悪かった」

「キリトッ!!」

優しい声、という感じではなかった。

掠れたような声色で懺悔の言葉だけを残し、改めて元凶の方へと向き直った。



クラインはとにかくそんなキリトの納得ができなかった。

まるで、ここでお別れだみたいな意味を含ませた謝罪の言葉に怒りの感情を抱く。おそらく、少年は負けるつもりはないとは思っているだろう。しかし、あえてそんな言葉を言うということは、最悪の事態を心の中で想定しているということ。それはつまり、勝負の結果が少年には既に見えているということだ。

まだやってもいないのに、勝手にそんな結果を押し付けられたことにムカついたクラインはその考えを否定するように、

「て、テメエキリト!! 謝ってんじゃねえ!! 今謝るんじゃねえよ、絶対許さねえぞ!! ちゃんと向こうで、飯の一つでも奢ってもらってからじゃねえと絶対許さねえからなッ!!」

溢れんばかりの涙を流しながら、喉を潰してでも叫んでいるクラインの言葉に、キリトはただ無言で親指を突き出して返事をする。

今度こそ、黒幕と対峙する。

こいつを倒せば全てが終わる。こんなデスゲームからみんなを解放できる。いよいよ始まる決戦に手に汗が滲み出る。これほどまでに緊張したことはない。

でも、引くわけにはいかない。

全てを賭けた戦いが、今から始まる。

だが、その前に、

「悪いが、一つだけ頼みがある」

「何かな?」

そう言うときリトは最後にもう一度、泣き笑いの顔でこちらを見て来るアスナを見ながら、

「負けるつもりはないが、もし俺が死んだら——しばらくでいい、アスナが自殺できないように計らってほしい」

「!?」

「良からう。彼女はセルムブルグから出られないように設定する」

「キリト君!! ダメだよ!! そんなの、そんなのないよツ!!」

残酷な取り引きだった。

一見すれば救いのように見えるが、視点を変えたらそれはゲームクリアまで孤独感を抱えて過ごすという意味になる。

そんなこと、少年は理解していた。もし自分が死んでしまったらアスナに辛い想いをさせてしまうということに。それでも彼はアスナにだけは死んで欲しくなかった。愛する人が先に死んだり、自分の後を追ってくるなんてこと、許せるはずもない。

彼女の幸せを願う少年は、とにかく彼女にだけは生きていて欲しい。

残酷な重荷を背負わせようと、辛い想いをさせようと、彼女だけは死んではダメだ。

だからこそ、彼は負けるつもりはなかった。

そんな辛い想いを彼女にだけさせないために、キリトは二つの剣を構える。

その様子を見た茅場は微かに微笑むと、左手のウィンドウを操作して、キリトと茅場のHPバーを同じ長さにまで調整された。レッドゾーンぎりぎり手前まで引き下げられ、強攻撃が一撃でも入れればすぐに決着がつくほどの量。次に彼は、キリトと対等な立ち位置になるため、今まで設定していた不死属性のプログラムを解除し、床に突き立てていた長剣を抜いて盾を構える。

いよいよ本番が始まる雰囲気漂っている。

二人の剣士は鋭い眼光で互いを見つめ合い、殺意を交差させている。

そう。

これから始まるのは試合じゃない、死合だ。

その緊張感は計り知れないほどではあるが、その空気を押しのけるようにキリトは深く呼吸をする。

集中し、ただ一つのことだけを考えればいい。  
そう、目の前にいるやつを、

「倒すッ!!」

ドツ!! と二人は同時に前へ出た。

莫大な粉塵が舞い上がり、あつという間に土ほこりのカーテンが周りに倒れ伏しているプレイヤーの視界を遮って行く。地面を揺さぶる振動はほとんど地震に近く、屈強に訓練された血盟騎士団でも怯えの嘶きを上げた。

「はあッ!!」

「っ!!」

金属音が連続する。

二刀流と剣盾。

それぞれの武器は守りと攻撃の両方の役目を全うしながら動いている。攻撃に特化して、攻撃こそが最大の防御とでもいうかのような二刀流に、バランスに優れて防御攻撃の調和がとれた剣盾では正直勝敗となるものがわからない。

しかしやるべきことは変わらない。

脅威がものすごい速度でこちらへ疾走してくるが、キリトの方針は揺らがなかった。

全ての目的はそこに集約される。

そう。

強大な敵に惑わされてはいけない。

彼の目的は一刻も早く、一秒でも正確にこのゲームを終わらせる事だ。

「ッ!!」

音は消えた。

光は消えた。

ただ真正面から飛び込んだキリトと茅場が互いの剣を叩きつけた。それだけのシンプルな動作にも関わらず、周囲に撒き散らされた余波は甚大だった。

数瞬遅れて、爆風が発生した。

金属同士のぶつかり合いによって生じた轟音と共に、二人を中心にドーム状の衝撃波が広がった。ちょうどボスエリア程の範囲の爆風の嵐が、周囲に倒れこむプレイヤーの肌を殴りつける。

「おおおアあああッ!!」

神速の剣術。

目にも止まらぬ速さで何人にも受け止めることのできないはずの斬撃を幾度も交差させて放つ。しかし茅場は盾で剣を弾き返す。続けて複数の太刀筋を見舞いながら、キリトは知る。茅場もまた、キリトと同等かそれ以上に多種多様な剣術を所有している。

当然といえば当然か。

茅場はこのゲームの開発者。

開発者が開発したゲームなのだから、このゲームが苦手なんてことはまずない。自分の性格の一部が開発する際にこのゲームに入り込んでいるため、この世界は茅場のために作られた世界だ。対して、こちらはただのプレイヤー。一種のゲームファンにすぎない。ゲームを購入し、めちやくちややりこんだだけのただの一般人。

開発者と一般人。

その違いは言わなくてもわかる。

しかし、両者には共通点も存在している。

エクストラスキルとエクストラスキル。

ユニークスキルとユニークスキル。

《二刀流》と《神聖剣》。

判明しているのはこの二つだけだが、他にも様々なスキルが存在す

る。

片手剣を二本使用する駿足の《二刀流》、防御を攻撃に変える《神聖剣》、防御を捨てて戦う《暗黒剣》、構えから放たれる《抜刀術》、槍の極み《無限槍》、短剣などの投擲の《手裏剣術》。

一人一つが習得することを想定されたもの。出現条件がわからず、並みのプレイヤーですら習得できる可能性は少ないスキルの一つを、二人は互いに一つずつ所有している。

「大したものだ」

「!?」

二刀流と盾がぶつかり合う轟音の中、茅場の声を通る。

「二刀流をそこまで扱い、速さだけでなく力技でねじ伏せに来るとはな」

しかし、と茅場は続け、

「——そのアバター、すでに限界に達していると見える」

「ッ!?!」

その指摘にキリトの動きがわずかに鈍った所で、茅場の攻撃がさらに苛烈さを増して襲いかかる。

一瞬で差を引き離されそうになり、しかしキリトはさらに逆転し返すべく刃を振るう。

《二刀流》のスキル発動時のキリトは、生身の身体を制御できる運動量を超えたパワーを強引に引き出している。二刀流は速さと攻撃力に特化しており、そのスキルは通常の片手剣と比べたら遥かに動きが多くなり、その代償として現実の肉体、正確には頭脳に負担がかかる。激しい運動をしている感覚が現実の頭脳を刺激し、疲労感を発生させてしまい仮想の身体が自動的に悲鳴を上げる。

そんな状態で長時間の戦いなど行えるはずもなく、ましてやギリギリの戦いだった七十五層のボス攻略の後ではキリトの身体はもう限界寸前だった。だからこそキリトの《二刀流》は必然的に一撃で勝負を決められる威力を出すように研ぎ澄まされていっていた。

だが、茅場に一撃必殺は通じない。

同等かそれ以上の力、ユニークスキルをもって立ち塞がる茅場は、絶対的な防御力のスキルに加えて『ゲームマスター』という特性までも利用して、どのプレイヤーよりも先にこのゲームを理解しており、それによって己の神経を徹底的に強化している。キリトですら瞬間的に踏み込むことがやつとの世界を、茅場は悠々と突き進む。

まさに神そのものだ。ゲームを作ったものとしての特権を最大に利用してキリトの前に立ち塞がっている。

「くッ!!」

その事実にはキリトは奥歯を噛んだ。

似たような許容量を持つプレイヤーとは思えぬ差。全てのプレイヤーにとつての脅威となる存在が与える一撃はシステムを超えるに匹敵する。

だが、考えられるか。

本当にそれほどの力を秘めた場合、許容量を超えて自滅しないものなのか。

「ふっ!!」

茅場が息を吐く音が聞こえる。

一瞬、ふわりという妙な感覚がキリトを包む。

それは茅場は苛烈な攻撃を止めて力の溜めを行ったのだと気づいた瞬間、渾身の一撃が来た。

「ッ!?!」

真上から思い切り叩きつけられた剣を、キリトは両方の剣を交差させて構えて受け止める。その拍子に、ズシン!! という特大の衝撃が剣から腕、胴体、足へと一気に走り抜け、ブーツを履いた靴底が数センチほど地面へめり込んだ。足元は硬い地面になるようにプログラムされているはずなのに、まるで泥のように沈んでいた。

頭を殴られたわけではないのに、脳震盪のような揺らぎが生じる。だが受け切った。

そして全体重を乗せた渾身の一撃を放った直後の茅場には、隙が生じるはずだ。

「おおおおおおッ!!」

キリトは雄叫びと共にエリュシデータとダークリパルサーを振り抜いた。受け止めた剣を弾き返し、茅場はわずかに後退する。

完璧なタイミング。絶好のチャンス。起死回生の一手。

にも拘らず、それすら茅場の盾は受け止めた。ガギイ!! という鈍い衝撃波が、剣に込められていた威力を分散させられてしまった事実を広く喧伝して行く。

「流石だねキリト君」

「!?!」

「二刀流をここまで使いこなすとは……ユニークスキルを発生させただけのプレイヤーではある」

至近距離で、茅場は感情のない笑みを浮かべる。

「だが終わりにしよう。私はまだ、この世界を本物に仕切れていないんだ。いつまでも『ゲーム』に興じる暇はない」

「ッ!?!」

キリトはまともに応じず、一度引いた剣をより強く振るい、苛烈な一撃を見舞う。

しかし茅場は眼前にいない。

剣は虚空を斬り、茅場の姿だけその場から消え去った。

視力ではなく気配でキリトは察知する。標的は頭上。茅場の体が真上に十メートルほど飛び上がっていた。常人には不可能な、まるでロケット発射にも似た跳躍。この世界では現実では不可能なことを可能にする。壁を走って登ったり、屋根から屋根へと長い距離を飛んだりなど、システムの助力によって物理法則を無視できる。

「ッ!!」

キリトは即座に追おうとするが、先ほどの戦闘の疲労とスキルによる負荷によって、ほんの数瞬のラグが生じてしまう。

茅場は重い装備を身につけたまま空中で体を反転させると、空中に足をつけるようにしてこちらを見下ろした。

「行くぞ・・・キリト君」

頭上にいる茅場のささやきに応じて、その手が持つ剣が爆発的な光を発する。明らかにシステムされていない技だった。通常プレイヤーではまず再現できない。普通のプレイヤーではあり得ない理屈を、茅場は強引に押し通す。

「はあッ!!」

怒号にも似た掛け声と共に空気を蹴飛ばすように勢いよく下降する茅場晶彦。

一直線の落下。

そして振り下ろされる特大のスキル。

そこから放たれたのは、斬撃や刺突や射出や爆発や破裂や分断や粉



砕なんかではない。

ただの重圧。

上から下へと勢いよく突き進む圧倒的な破壊力は、星を砕く隕石を思わせる一撃であった。

◇◇◇◇◇

ただでさえダメージを負っていたボスエリアはその一撃で粉碎され、ボス攻略クリア後の静謐が漆黒の闇へと戻って行く。

必殺とも言える一撃を放った茅場を中心に爆風が巻き起こり、麻痺状態で地面に倒れ伏していた攻略メンバー全員を吹き飛ばしていた。全員無事みたいだが、中にはその攻撃に巻き込まれてライフが赤にまで減っている者までいた。

爆音と、振動と、粉塵が炸裂する。

「ぐっ　　はっ」

そんな中に、キリトは倒れていた。

攻撃自体は二つの剣で受け止めたものの、それを支える足の方が耐えきれなかったのだ。疲労で立っていられるのも不思議であったキリトの足はもつと前から悲鳴をあげており、莫大な重圧を受けてその限界を超えてしまったらしい。殴り倒されるように受けた攻撃によってキリトは地面に叩きつけられ、みんなと同じように仰向けに転がっていた。

その全身はボロボロだった。茅場の一撃が直撃しなかったとしても、重圧は武器を通して体を蝕む。特大な威力を誇る謎のスキルと人工の大地の間に挟まれたキリトは、腕と言わず足と言わず胴体と言わず、ありとあらゆる所から痛みが生じている。

あのトッププレイヤーの一人でユニークスキル保持者のキリトでさえ、この有様だった。

もう一度同じ攻撃を喰らえば、今度は絶命するという計算がすぐに

導かれた。

だが、

「ッ!!」

ギシリ!! と奥歯を噛み締めるキリトの顔に、恐怖や驚愕、ましてや諦めといったものはない。

あるのは怒り。

不幸中の幸いにも犠牲者はいないようだったが、しかしそれは結果論だ。明らかに広範囲に当てることを想定されたその未知なスキルは、下手すれば身動き一つ取れないアスナ達にまで巻き込みかねない危険な技だった。実際、スキルを放った余波が何人が受けている。

幸いにもアスナやクライン、キリトと長く接していた者達は無事だったが、もしあれがアスナにまともに当たっていたら。そう考えただけで、キリトの背筋に寒い何かが走る。

同じプレイヤーのくせに。

対等な立場で戦うと言っていたくせに。

世界に認められた優秀な頭脳を持つているくせに。

どうして、こんなつまらない事にしか力を振るえないのか。

「茅場・晶彦　っ!!」

傷だらけの体を引きずるように上半身を起こし、瓦礫の上に落ちていたエリユシデータとダーククリパルサーをつかみ直し、キリトは掠れるような声で元凶の名を呟いた。

対して、同じように隆起している地面へ荒々しく足をつけた開発者の茅場は、

「終わりかな?」

「ッ!?!」

「それとも、まだ私に挑む気かな?」

「茅場あああああああああああああッ!!」

尊敬もクソもない。

呼び捨てにしようが誰も咎めない。

己の血を振りまくような勢いでキリトは猛然と立ち上がる。両手に構えた二刀流はふらふらと揺れていた。あまりにも強く握りしめ過ぎたのか、彼の爪からビキリという音が鳴った。受け流しきれなかった莫大な衝撃のせいで、もうHPバーは残っているのかわからないくらいのあたりにまで減っていた。

つまる所、ライフはあと一しか残っていないという状態なわけだろ  
う。

もはや勝ち目など見えなかった。体もフラフラとさせていて立っているだけでもやつとなのに、こんな状態で勝てるわけもない。

しかし。

それでも。

「ッ!!」

それでも、彼の眼光だけは衰えない。

そしてその眼光が消えない限り、キリトの両手剣の刃が止まることはない。

己を鼓舞するように傷ついた呼吸器官を押してまで雄叫びをあげるキリト。その意思は揺らがない。全てを剣に込める。人々の想いを、託されてきたものを、この男にわからせてやるといふかのように、彼は再び二刀流の構えをとった。

「面白い」

しかしそれ以上に早く、茅場が動いた。

「それでこそだキリト君。それでこそこの世界を生きた者が持つ栄

光だ」

言葉と共に、また茅場の剣に光が灯る。

「キリト……その名は永遠にこの世界に刻まれるに値する!!」

敬意を表す言葉を剣に乗せ、再び茅場は莫大な速度で一直線にキリトに迫る。

(だ、ダメっ!!)

余波を受けただけでもわかる。

あれをまともに受けたら今度こそキリトの命はない。その一撃を今度はキリトにだけ与えるつもりのため皆が巻き込まれる心配はないが、それでもアスナは止めるために立ち上がろうとする。

(このままじゃっ!!)

目の前で最愛の人を失ってしまう。

歯噛みするアスナの前で、キリトが構える。

しかし、あれはどう見ても攻撃の構えじゃない。明らかに受け止めるつもりだ。

このままでは本当に失ってしまう。

(ダメッ!!)

ルールを凌駕する力で麻痺状態の中強引に立ち上がる。

足に力を込める。破壊の塊を込めて放つ茅場の前まで走り抜ける。反撃のための挙動ではない。

全ては防御。

彼を失わないために、アスナは盾となるため走るのだ。

「ダメええええええええッ!!」

間に合わない。

茅場が、全力をもってキリトの体を貫く。

光が吹き荒れた。

キリトだけでなく、アスナの目が、耳が、鼻が、舌が、肌が、全ての感覚プログラムが機能しなくなっていた。

ガキンツ!!

?その音すら理解できなかった。

五感が死んでいる。あるのは白。瓦礫の吹き飛ぶ音も、吹きすさぶ衝撃波も、舞い上がる粉塵も、何かを貫く感触も、何もかもが脳に入っていない。本物の死とは、純粹な消滅とは、これほどまでに何も無いのか。

「.....」

なのに。

何かがおかしい。

少しずつだが、五感は戻りつつある。真っ白に塗りつぶされた五感が戻るのに、しばらく時間が必要だった。

失われたのではなく、回復しつつあるということとは

「な、何が.....」

茅場が放った一撃は、まさに確実に命を狩り取る一撃であったはずだ。キリトを含む、下手したら周りにいた奴ら全員のライフを一つ残さず奪い尽くしてもお釣りが返ってくるはずだ。それがまるでなかったことにされたかのように、キリトの体は無事だった。被害らし

い被害もない。

「君はっ!？」

反応したのは意外にも、全てを用意したはずの元凶だった。

珍しく驚きの表情を見せているその顔は、まるで彼のことを知っているかのような様子を見せている。それもそのはずだ、彼にとって目の前にいるそいつは初対面ではないのだから。アバターを変えているからそいつはおそらく認識していないだろうが、元凶にとってそいつはイレギュラーな存在。

元凶のその言葉に全員の五感が戻り、ハッと顔を上げた。

その元凶の放った、誰かを呼ぶような言葉。それが全員に行き渡った時には全ての感覚が息を吹き返した。

システム外のような一撃であったにも拘らず、被害が起きていない状況。

そして、その中心点に立っているのは。

「ク、クラウド!？」

「」

茅場の攻撃を正面から相棒のバスターソードで押さえつけ、キリトを守るように降り立った一人の兵士。

自称、『元ソルジャー・クラス1st』のプレイヤーが元凶の前に立ち塞がったのだ。

## 第16章

どうしても、どうあつても。

茅場から解き放たれた、普通のプレイヤーでは扱うことができないシステム外スキルの一撃をキリトは回避できるはずがなかった。辺り一面は何の遮蔽もないただっ広い空間。眼下に現実性を望むこのフィールドは、どこまで行っても茅場晶彦という『ゲームマスター<sup>神</sup>』が用意した究極のアウェイでしかないのだ。

だが少年は死ななかった。

間近で炸裂した恐るべき轟音に思わず両目すら閉じていたのに、いつまで経つても痛みや衝撃は襲ってこなかった。

ゆっくりと、痙攣する臉をこじ開けるようにして、キリトは再び視界に色を確保していく。

目の前に『それ』は広がっていた。

クラウド。

初期装備にはあまりにも変わっており、こんな最前線では場違いなほどの不釣り合いな何でも屋を営んでいる傭兵が立ち塞がったのだ。

「君はっ!?!」

むしろ一番初めに驚愕の声を発したのは、キリトではなく攻撃した本人であった。何故黒幕が驚いているのか、周りのプレイヤーは理解できていなかった。あいつの個人的事情が含まれてそうな顔で、キリトの間に入ったクラウドを見つめていた。

茅場はクラウドの姿を食い入るように見つめていた。

何でも屋の手にあったのは、初期から身につけていた大剣であった。おおよその攻撃力を放つことができるであろうその大剣は茅場

のスキルでさえも凄い。一見すれば初期装備であるためとても弱いと思ってしまう者が大半であろうが、この武器は入手方法は不明で、この階層だけでなくあらゆるモンスターにも対応可能な武器でもある。今日まで身につけているということは、耐久値が異常なほど硬質で、それほどあらゆる場面で役に立つということ。

並大抵のプレイヤーならおそらく扱うことすら難しいだろう。大剣を振るうには力のパラメーターを強化しておく必要もあり、更には素早く動ける体力と身体能力も必要ははず。

それがクラウドの武器だった。

並みのプレイヤーを超える速度で戦う存在は、あらゆるプレイヤーをも凌駕する。

彼の大剣がゲームマスターのシステム外スキルを受け止めた事実が、それを証明している。

「」

整えられた大剣は少しずつ火花を散らしているが、彼は尚も黙ってあの茅場の一撃を食い止め続けている。

「ク、クラウド!？」

ようやくとキリトの方にも混乱が伝播してきた。

両手にある剣を握り直しながらも、彼の頭は理解できない空白でいっぱいだった。

「どうしてっ!？」

驚愕するキリトに、クラウドは何かを呟いていた。

だがそれは誰の耳にも届かなかった。何を言ったのかは聞こえなかったが、次の行動でクラウドが何を言ったのかを理解できた。キリ



トを手で押し飛ばして後ろに後退させた後、クラウドはまるでもたれかかるように茅場の方へと足を踏み出した。

交代。一見すればそう見えなくもない。

一瞬その行動に誰もが理解が遅れたが、悪意を誰にも向けずにただ目の前にいる元凶にだけ敵意を向けていることから、先ほどクラウドが何を呟いたのか、言葉はわからないが意味は理解した。

「ッ!!」

「っ!？」

ガキンツ!! と。

二人の剣が交差する。言葉を発することもなく、何の予兆もなく、ただ二人は流れるように戦い出した。

実を言うと、いきなりの展開にまだ理解ができていなかったのは黒幕も同じだった。ボス攻略の場に途中参加するような事例は少なく、それに今は自分の正体を見破られて決闘の最中だった。決闘の邪魔が入らないように周りにいた攻略プレイヤーには地面に寝転がってもらって、保険のためにこれ以上の増援を来させないようにするため、ボス部屋の出入り口も権限者の力で開かないようプログラムをしていたはずだった。

にも関わらず、彼はそのセキュリティを掻い潜って黒幕の前に現れた。

一体どんな手品を使ったんだとか問い詰めたかったが、急に攻撃してきたためそれは叶わなかった。

クラウドは何の感情も抱いていない表情で剣を振るう。

眉間にしわを寄せ、険しい表情のまま茅場と剣を交える。

何らかの罫や策を使って一気に翻弄させるのでもなく、彼はただ、バスターソードを上から下へと振り下ろす。

己の目の前にいる敵を倒すために。

「フツ 面白いな」

案外真剣にやっていたと思っただが、急な展開でしかも攻撃されているにも関わらず、茅場は茅場でどこかアクシデントを楽しむような口振りでそんな言葉を吐き出していた。

茅場はクラウドの攻撃を盾で受け流すと、そのまま押し返すように盾を前に突き出した。顔面を狙った攻撃にクラウドは僅かに目を見開くが、すぐに冷静さを取り戻してバスターソードを横にして防いだ。その衝撃でクラウドは後ろへと飛ばされ、強制的に後退させられた。

それを確認すると、茅場はようやく肩の力を抜く。その様子を見たクラウドは何かを察したのか、剣先を茅場に向けるも攻撃はしなかった。

急な展開で力んでしまっていたが、これでようやくお互いに落ち着いて話し合いをすることができそうだ。

「まさか　君が私の前に現れるとは」

この時をずっと待っていたと言わんばかりの眼差しをクラウドに向ける。

対して、クラウドはそんな眼差しなど気にも留めずに相変わらず無言のまま茅場に剣を向けている。

「だが、何故君がここで立ち塞がる。攻略組でも何でも無い君には、見ず知らずのプレイヤーのために命を懸ける理由などないはずだが？」

煽るような質問。

対して、自称元ソルジャーの何でも屋は言葉ではなく、行動で返した。全長一・九メートル、重量三十キロを越す鉄塊の得物を真横に振るう。

空気を裂く音が聞こえた。

直後に、元凶でさえも想定していなかった閃光が炸裂する。

破曉撃。

気を纏って生み出された壮絶な雷光は、規則正しい曲線を描いて地面を抉り取り、轟音と閃光を撒き散らして黒幕へと突っ込んだ。ちゃんと狙うのは茅場だけで、周りにいるプレイヤーには命中しないような軌道を選んだのだろうが、撒き散らされる衝撃波だけで何人かがひっくり返っている。

このゲームを作った本人でさえも見たことがない技を目の当たりにして驚愕の表情をわずかに見せる。

灰色の粉塵が舞う。

標的までの距離は目と鼻の先。

身に覚えがない技を放ってきたクラウドは一体何者か、彼は一体なんなのかとか様々な考察をしている黒幕に、恐るべき速度で直撃する。

ドゴオオオオオオオオンツ!!!

莫大な音の塊が炸裂した。

灰色の粉塵が撒き散らされて、茅場がいた場所を覆い隠す。全てのプレイヤーの視界が一時的に奪われた。

もうもうと立ち込める粉塵は、しばらくそのままだった。

やがて、ゆっくりと視界は回復していく。

クラウドの前に、景色が広がっていく。

「」

世界は何も変わっていないなかった。

自称で非公式とはいえソルジャー・クラス1stの力を振るい、気を溜めてまで放った一撃。それだけのものをぶつけられても、黒幕はびくともしなかった。

結果は明白だった。

奴の持つ壁は、生半可なものではない。防御力に優れた盾はクラウドの攻撃さえも防ぐ。

だが、これでこっちの意思は伝わったはずだ。何しに来たのかとかそういった質問の答えはこれで十分のはず。彼なりの最大限の意思表示をしたことよって、周りにいたプレイヤーは目を見開きながら驚き、クラウドに対して警戒を高める。

対して、今回の事件の黒幕の男だけは冷静にただ静かに頷いた。

「なるほど。自分が関係ないものだったとしても、やるべきことは変わらない、か。実に素晴らしい考え方だな」

「」

彼はただ興味深い目でクラウドを見ている。

対してクラウドは片手一本で重いバスターソードを水平に構えたまま、周囲へ視線を走らせる。

何でも屋を中心とした、半径三十メートル前後の半円。それが、麻痺状態で地面に倒れ伏しているプレイヤー達によって作られた闘技場だった。それぞれが抱く感情がクラウドに向けられて妙な空気感が漂うが、彼は気にしなかった。

彼はただ中心に立っている黒幕の男だけを見て、わずかに唇を動かした。

「死人が大量に出る直前だったみたいだな」

「ここでようやく、状況を完全に理解した。」

その一言で取り囲むように倒れているプレイヤー達の警戒が膨らんだが、やはり黒幕だけが率直に頷いた。

頷いて、クラウドの後方で呆然と見ている黒服の少年剣士を見ながら、

「そう、彼らの中の一人が私の正体を見破ってしまつてね。彼らには悪いが仕方なく、管理者権限で強制的におとなしくしてもらつてゐる」

「証拠隠滅か。相当追い込まれてたみたいだな」

「少々事情が変わつたんでね。私も形振り構つてはいられなかつた」

告げながら、黒幕である茅場晶彦は己の親指で、自らの胸を差す。

そして、一言で言った。

「決闘をしないかクラウド君？」

「」

一瞬、唐突な発言に思考が停止した。

しかしその一言で、また一つ理解した。

だから先ほどまでキリトはたった一人で戦っていたのかと。周りが倒れ伏している中で唯一立っているキリトに違和感を抱いていたが、そういうことだったのか、と。

だがクラウドは、そんな茅場のクソ真面目な態度につまらなそうに目を細め、

「ここは本物の戦場だ、上品な剣士の礼儀作法になんか興味はないし必要もない。本当に本気でやるんなら全力で来い、こっちも手加減なしで戦わせてもらう。無駄死にが嫌ならとつと目の前から消えることを勧めるが」

「心配はない」

クラウドは煽つたわけではない。その言葉はむしろ確認だった。おふぎけじやないことを今一度確認するための台詞を言うのと、茅場は軽く腕を振る。

その手に握られている幅三センチ程の刃を備えた一振りのロングソード。軍馬を操りながら戦う騎士が扱う用に最適化された剣は八

十センチ程度の長さの剣だ。バスターソードに比べたら耐久性や攻撃力が劣っているようにも見えるが、そうは感じさせないほどの殺意が宿っている。

茅場はその剣を構え、クラウドに告げる。

「ゲームであっても遊びではないことはこちらも重々承知している」

黒幕が最初に言った言葉は本人にも刻まれている。

その言葉の意味を真に理解しているからこそ、こんな行動に出たわけだ。

「この世界を本物にするために受け入れた『イレギュラー』の君がこの二年でどれほどの実を結んだか、試させてもらおう」

それが合図。

権限者とイレギュラーの対一の激突が、始まる。



彼らの動きを再現するために、処理速度が悲鳴を上げる。

ドツ!! と発射音のような足音が、倒れ伏している彼らの動作に遅れてボス部屋に響く。地面は抉れ、地上で二、三回と巨大な刃が激突した。火花は雷光のようだった。そして、続けざまに撒き散らされる衝撃波が、花火のように何度も球状へ広がっていくのを、周りに倒れているプレイヤー達は見た。

悲鳴を上げる者までいた。

衝撃波の余波は殴りつけるようなほどの威力で、まともに喰らえばHPを減らしてしまうほどだった。

身を屈め、ダメージを受け止めようとする者もいる。

衝撃波の渦は、それらを平等に叩き伏せていった。

「なるほど」

盾の耐久値は武器よりも高い。

剣で何度もぶつかり合っていたが、クラウドの一撃は重すぎるものがわかった。大剣であるというのものもあるが、単純にクラウドの力が異常だった。剣で受け止めることがとても難しい。剣で受け止めれば刃先から衝撃波をまともに受けることになり、腕が痺れてすぐに使い物にならなくなってしまう。

だから攻撃のほとんどを盾で受け止めた茅場は、一度クラウドの剣を弾き返すと一旦引き下がり、周りにいたプレイヤー達を不甲斐ない眼差しで見渡していた。

クラウドに一騎打ちを申し込んだのはおそらくこれが理由だ。

彼はまさにイレギュラー的存在。その存在は全てのプレイヤー諸君を凌駕する。経験や精神力といったゲームのレベル上げのシステムではどうにもならない部分が飛び抜けて優れているクラウドといつペン戦ってみたかったのだ。

戦って、彼の存在を理解しようとしていた。

彼のあの身のこなし、あれは明らかに現実的ではない。音速を超えて戦うクラウドは、現実の常識が通用しない。ゲームのシステムを借りても、あそこまで動けるなんてプレイヤーはそうそういない。彼には、我々が理解できない何かを隠し持っている。それがなんなのかを知りたい。だから茅場はわざわざ乱入してきたクラウドと一対一で戦うことを望んだのだ。

「楽しいな」

そんな言葉を溢したのは黒幕だった。

こんな状況なのにも関わらず、彼はこの戦いが楽しいと感じてしまっていた。

一見して、二人の男は剣と剣をぶつける肉弾戦で戦っているように見えるかもしれないが、その本質は互いに異なっている。茅場はおそ

らく正当なゲームシステムの中でさらにレベルを上げた状態で戦っているのかもしれないが、クラウドの力の本質は『ある細胞』だった。その細胞は人の常識なんかでは説明できないほどの力と可能性を秘めている。

そもそも、馬鹿正直に筋力だけを增強したところで、あれだけの破壊力を生み出すことはできない。筋肉をいくら鍛えたとしても、金属製のものを一刀両断なんてことできるわけがない。せいぜい一定のラインを超えたところで、自分の筋肉が内臓を圧迫してしまい、自滅するのがオチだろう。

彼らは音速を超えるほどの素早さで剣を交える。

相手の思考を高速戦闘の中読み取り、即座に攻撃へと移行する。弾き返されれば次の一手を数秒単位で考える。

これがかなり難しい作業だった。

彼らの真髄は人の身で圧倒的な破壊力を生み出すと同時に、無理な力や速度を出した結果起こるであろうあらゆる弊害や副作用を事前に推測し、補助的なシステムによつて摘まみ取つていく周到さにこそある。戦闘中は常に数百、数千も生み出され、なおかつ戦況によつて一瞬一瞬で変わつていく弊害を一つでも見逃せば、その直後に高速戦闘中のプレイヤーは死亡する。

限界を超える、と口に出すのは簡単だが、そこまでやつて初めて成し遂げられる業であり、そこまでやつたとしても、『生身の身体に限界』はやはり完全には拭えない。

頭脳への負担は半端なく、それを再現するためのVR機器も処理に忙しくて回路が焼き切れるほどだった。

権限者としても、並外れた力を持つ超兵士の力にしても、単に強大な力を持つていれば強い、などという話ではない。結局は、莫大な力を振るう者には莫大な力を操るだけの技術や資質が必要とされているのだ。

クラウドは強い。

茅場晶彦は強い。

何らかの力を得ただけでは、そのポジションに立てるわけではな



い。レベル上げシステムで強くなろうと、特殊な細胞を埋め込まれようと、それを使いこなせなければ何の意味もない。どれだけスピードが出るレースカーを持つていたとしても、それを操る者が実力不足なわけではありません。元から強大な力や技術、頭脳を持つ者だからこそ、特殊な力を発揮できない。彼らは常人には想像もつかない領域にまで足を踏み入れることができる。

だがしかし、クラウド自身は特別ではない。

茅場に比べれば生まれつきの特別資質や優秀な頭脳に恵まれたわけではない。

しかし。

しかし、だ。

彼には彼だけにしかないものがある。

黒幕もかつては持っていた、大切なものを。

それは何か。彼はただ、一・九メートルを越す巨体な剣をゆらりと構え直す。

その様子を見た茅場は、前から、それもゲームが開始しても間もない頃から気になっていたことを聞いてきた。

「そうまでして、このゲームをクリアしたい理由があるのかな？」

そう問うと、構えたクラウドに応じるように茅場も動いた。

盾を前に出し、反対側に持っている剣を斜め上で構える。

周囲ではクラウドに加勢しようとしてプレイヤー達もがき、それでも震える手で各々の武器を掴もうとしているのが見えたが、二人は改めて視線をやることすらなかった。

「君は覚えていないかもしれないが、ずっと聞きたかったことがある。」

「君は何故、何の目的があつてこの『ソードアート・オンライン』にログインしてきた？　そして、一体どこからどうやってこの世界にやつて

来た？　ようやく話せる状態で会えたんだ、少しくらい君のことを聞かせてくれ」

「ずつと気になっていた。あの時、私が全プレイヤー諸君にこのゲームの本来の仕様を伝えた直後に、新たなプレイヤーがログインして来たという知らせを受けて正直困惑した。デスクゲームと化していることはもう世間に公表されているにも関わらず私の世界に自らやって来るとは、一体どんな奴なのか興味すら湧いた。だが、それと同時に疑問に思った。何故君はこの世界にやって来たのか、そしてどうやってここに来たのか。そればかりが気になってどうやって接触したのかとこの二年間ずつと考えていたよ」

「わざわざ危険な場所に自ら飛び込んで来るだけでなく、その方法すらも私はわからない。一体どうやってやって来たのか、何故この世界に来たのか、そして君は一体何者なんだ？」

そこで、茅場はふと言葉を止めた。

小さな笑い声が上がったのだ。

クラウドの肩がわずかに上下している。しかし彼の顔にあるのは黒幕が知るような、会いたかった者を前にした時に浮かべる、静かながらも狂気が含まれているような笑みとは違う。

失笑だった。

「戦っている最中に言葉が多いな」

クラウド・ストライフは、耳に入った言葉を全てなかったことにするかのよう否定した。

記憶にすら留めることすら馬鹿馬鹿しいという表情で。

「戦っている中で無駄話をするほど、俺は甘くはない」

応じる声はなかった。

ビュン!! と。

風を切り裂くような音が茅場のすぐ横を通過した。

クラウドがいた場所には彼の姿はなく、気付いた時には茅場のすぐ後ろにいた。地面の腹を恐るべき脚力で蹴飛ばした結果、音速の領域へと踏み入る事ができ、その速度を保ったまま茅場の左腕を斬り裂いた。クラウドのあまりの脚力に足場になっていた地面が抉れているのを見ると、彼はもう容赦は出来ないようだ。容赦はせず、確実に黒幕を倒そうという意思が見て取れる。

斬られた部分が赤く染まる。左腕に発生している痛覚が現実の脳に衝撃を伝え、盾を握る手を弱らせる。

血ではなく、電子。

それが表面上に現れるたびに命が削られていくのだと自覚させられる。

「フフツ」

当の本人はそれでも楽しそうだった。

この世界はまさしく本物。彼にとってはそれが嬉しい事実であり、それが証明されたことを祝福するかのように、彼は笑っていた。

笑って、自分の欲望を叫んだ。

「私は幼い頃からいつも同じ夢を見ていた。空中に浮かぶ鋼鉄の城、その光景が何度も頭の中に過る」

「それが何度も何度も夢の中で現れるうちに、その世界に行きたくなった。夢を現実に、誰もが一度は抱く理想。それを私は実現したかった」

茅場晶彦は何度も夢を見てきた。

故に自らが窮地に立たされたとしても、それでスタンスが変わるこ

とは絶対にありえなかった。

「ただの理想に留まらない、あれほどまでに美しい世界を夢で終わらせるなんてことは絶対にしない！ あの時抱いた理想を、夢見た世界を現実に見せろ!! そのためなら私は、そのためだったら——」

「そのためだったら自分の理想を穢してでも叶えてみせる、か？」

ようやく、クラウドは会話らしい会話の言葉を発した。いい加減うんざりしたのか、結局茅場の話に付き合う気になっただろう。つい先ほど甘くはないと言っていた癖にもう折れるなんて、彼はもしかしたらツンデレなのかもしれない。

そしてそれは、本来であれば別世界の住人であるクラウドが語るべきではなかったのかもしれない。

彼はいわば部外者。

どこまでいっても別世界の住人であり、その世界が一体どういうものなのか、奴の抱いている理想が何なのかさえも彼は興味がなかった。そんな奴が、黒幕の考えなどを勝手に解釈して代弁すること自体間違っているのかもしれない。

だけど、そもそもその世界を血で汚したのは誰だ？ そういう風に設定したのはどこのどいつだ？

そして、そいつは世界を現実にしようとしたことで一体どんな利を得ようとしていた？

決まっている。

茅場晶彦は自らの目的のために他人の自由を奪ったのだ。他人の幸せを奪ったのだ。他人の人生を奪ったのだ。

その結果、この世界はどうなった？

現実性が生まれてより素晴らしくなった？

そう考えるものは少ないだろう。現実とは違った刺激を味わうためにこの世界に来た人達は開発者の身勝手な思惑によって絶望を抱

いた。それから人々は変わっていった。必死に生きる者、現実から目を背ける者、手を血で汚す者。一見すれば彼の望み通り現実とはなっている。現実らしい出来事がこの世界で起きていることで、ゲームの中に作られた仮想世界は本物らしくなっている。

しかし、知らず知らずの内に世界は汚れていつている。

皮肉にも、この世界を作った創造主によって。

「何の罪もない奴らに絶望を送りつけて、人の尊厳や夢を無条件で奪って、本来笑い合える場所を血で染めるような穢れきった世界がアンタの望んだ世界か？」

「」

「美しい世界って何だ？ 現実って何だ？ アンタにとってそれは一体何なんだ？ ただ単純に生きた人間を連れて来て、非現実的なモンスターと戦わせて、プレイヤー同士互いに殺し合いをさせて、理不尽ばかりの世界にして、そのまま生命活動をこの世界で終わらせることが、アンタにとっての現実なのか？」

クラウドはただ聞いていた。

質問を繰り返していた。

興味の対象外なものにも関わらず、まるで興味を抱いたかのように質問を連続させる。実際、気になってはいた。黒幕は何故この世界を作ったのか、みんなを閉じ込めるような真似なんてしたのか。その答えを聞きたくてクラウドは黒幕に質問していた。尋問や詰問ではなく、素直な質問を。

そんな質問を繰り返している内に、茅場から息の詰まる音を確かに聞いた。

「実際アンタは凄いことをやり遂げた。みんなが夢見た世界を創造し、その世界にみんなを連れて来た」

そこだけは認める。

普通じゃ考えられない世界。  
夢を幻想を、現実に変えた世界。

「だが結局その世界を穢したのはアンタ自身だ。自分勝手の理想を一方的に押し付けて、他人の理想を踏み躪って否定する。それがアンタの抱いた理想だったのか？」

もはや言葉の応酬に留まらなかった。

質問に答えることもせず、茅場はただ黙って剣を構えた。奴の顔に怒りはない。しかし剣を構えると奴の剣に光が宿る。その剣に乗せられているのは明確な敵意と殺意。

さっきのクラウドの真似か、答えて欲しくば剣で語り合おうってことなのか。

どちらにしても、その意思はクラウドにはちゃんと伝わった。茅場と同じく剣を構え、赤のライトエフェクトを宿らせる。

そして、

「っ!!」

ゴウツ!! と。

ついにクラウドの剣が茅場の懐へと潜り込む。

バーストスラッシュ。

クラウドが保有している技の中では弱い方だとは思うが、鋭い突きで間合いを一気に詰めるにはうってつけだった。

だが奴の闘志はまだ途切れていない。彼もそれに合わせるようにスキルを発動してクラウドへと迫る。そもそも彼は自分が行使したスキルに限り負荷を軽減している。周りのオブジェクトやプレイヤーのグラフィックなどのデータ量が抑えられている今、彼らを縛るものは何もない。

「ッ!!」

しかしクラウドだけはその先へと行く。

クラウドの身体が悲鳴を上げる。処理速度の限界を超える。アバターを保つための負荷が彼の肉体を破壊しにかかる。

「ッ!!」

両者とも、最初から回避など考えてもいなかった。互いに剣を突き構えで標的に向かって駆け出した。

クロスカウンターなどという小綺麗なものではなかった。

両者の攻撃がそれぞれの肉体へと容赦無く突き刺さった。

二人は互いに交差し、互いが先ほどまでいた位置に入れ替わるようにして突き進んだ。

剣を交える瞬間、その直後。

二人はしばらく剣を突きの構えの状態のままその場に立っていた。

一瞬にも見えたが、あるいは永劫にも見えた。

しばしの沈黙のうち。

やがて動きがあつた。

「ふっ」

最初に聞こえたのは声だった。

その笑いがこぼれた時、クラウドは思わず姿勢を崩してしまう。足をふらつかせ、膝をついてしまう。

が。

「なんで、だろうね」

世界の全てを築き上げたはずの黒幕から出てきたのは、シンプルな

疑問の言葉だった。それだけでは質問の意味がわかりかねるほどに。

「哀れだな」

クラウドはふらつきながらも再び立ち上がり、大剣を二、三回ほど回転させて背中に収めた。

そして、ポツリと呟いた茅場のあらゆる意味が込められた疑問に、クラウドは哀れみの目を向けながらこう答えていた。

「アンタは何もわかっていなかった。自分の妄想を現実にしようとすることばかり考えていた結果、いつの間にか『人間』としての尊厳や夢、誇りを忘れた。それがアンタの敗因だ」

それ以上は何もない。

直後。

重たくズン、と。

理想を抱いて溺死するかのように茅場晶彦が纏うアバター、ヒースクリフの身体が真下へ崩れていった。

◇◇◇◇◇

全部終わった。

荒い息を吐くクラウドが辺りを見回すと、そこには既に緊張感はなかった。倒れ伏した勇敢な剣士達ばかりが並べられた空間に過ぎない。

「クラウド!!」

「クラウドさん!!」

意外なほど間近で声が響いた。

驚いてクラウドがそちらへ目をやると、キリトとアスナがいた。



「無事か？」

「ごっちの台詞だ（です）！！」

「??？」

二人の声が見事に揃った。

具体的な事は何もわからないが、ともあれ二人とも無事のように合流できたのはいい事だ。

そしてその後ろにいるクライン達はクライン達で、

「嘘だろ あノ茅場晶彦がぶっ倒れてやがるぞ」

「本当に 倒しちまいやがった」

「マジかよ」

「本当に クリアされたの？」

驚愕の事実には驚くばかりで、全員が全員倒れている茅場に注目している。

そしてクラウドも、倒れている茅場の方へ視線を戻して、

「」

何も言わなかった。

ただ、憐れむような目で茅場を見ていた。

結局、こいつはこいつなりの信念を持って生きた。自分の理想を追い求めた結果、人としての正しい道から外れて狂気へと走ってしまった。

彼もまた、この世界に囚われた被害者の一人なのかもしれない。

理想に囚われた哀れな被害者。

意味は違えど、彼はこの世界に囚われていた。

同情はしないが、可哀想な奴だ。だから彼は負けてしまったのだ。

「 .....  
」 .....  
キリトもまた、彼を見つめていた。クラウドと同じような目で、  
ともあれ、これで一区切りだ。

キリト達はそう思って、ゲームがクリアされたことを皆で喜ぼうと  
した。

その矢先だった。

「がはっ!?」 ..... という、あまりにも酷い声が響き渡った。

音源はどこか。

クラウドが、キリトが、アスナが、クライスが、エギルが、その場  
にいるプレイヤー全員がそちらへ振り返った。

開発者であり黒幕である、茅場晶彦。

仰向けに倒れている人影の、その左胸へ容赦無く

.....  
あまりにも唐突に、細長い刃が貫通していたのだ。

「[[[[[?]]]]」

全員が全員目を見開いた。

よく考えてみれば、おかしいところが沢山あった。

黒幕は倒したはずなのに、彼のアバターはポリゴンになって弾ける  
というこの世界でのお決まりの動作がなかった。HPは確かにゼロ  
になっていたはずなのに、ただ仰向けに倒れるだけで終わっていた。  
そのことに気付かなかった自分たちの愚かさを呪おうとするも、もう  
遅かった。

第二波は既に投げられていた。

更なる脅威が、舞い降りていた。

茅場のアバターに、異常にも長い刀が刺さっている。

その凶器の名を、何でも屋はこう呟いていた。

「正宗」

その直後、茅場に突き刺さっていた凶器の持ち手から声が聞こえてきた。

『フルtu』

心臓を串刺しにされた茅場の顔を見ようと現れた影は、ノイズまみれだった。

ザザツ！ と。

何重にもブレた姿で降り立った奴の髪はあまりにも長すぎる。その姿を目にしたプレイヤー達は全員警戒心を高める。そんな奴らを気にすることもなく、『そいつ』は串刺しにした茅場を突き刺したまま持ち上げて愉快に笑っていた。

「だ 誰、だ ツ!？」

茅場は苦痛に耐えながらもそう尋ねた。

その質問に、『そいつ』は雑音まみれの声で、

『d j h j w 李 k r t k j f d ゆに w o q p l s ん』

「ツ!？」

わけのわからない言葉に、頭痛がした。

その言葉に反応したのは串刺しにされながらも誰なのか問い詰め

た黒幕ではなく、クラウドだった。

彼らにとつてはバグの言語で意味が理解できなかった。しかし、その言葉を唯一理解できた者がクラウドだった。

その言葉は何度も聞いた。現実の世界で、何度も、何度も、何度も耳にした不快な言葉だった。その言葉はクラウドの耳に入ってきた直後、今日の前にいる奴が何者なのか理解した。理解してしまった。

「セッ!!」

ぶるぶると、クラウドの唇が震えた。

この場合、頭に浮かぶのは一つしかない。

蘇るのは、現実での記憶。

彼がこの世界にやってきた原因であり、現実で幾度も相手にしてきた、史上最高で最悪の『英雄』。ある意味において、その存在は伝説となった者。

そうこうしている間にも、ノイズだらけの奴の体が明確な姿になろうと強引に元の形に戻されて行く。

そう、茅場晶彦のアバターを取り込むことによって。

「!？」

それに気づいた時にはもう遅かった。

それはじわじわと茅場の体を蝕んでいき、外側から内側へと染み込ませるように重ねていつていた。

くつくつと『それ』は嗤っていた。

嗤いながら、茅場の体に侵入していく。

「セッ!？」

「クラウド?」

キリトがクラウドに声をかける。

しかし、声は届かない。

不自然なまでに今ある光景に得体のしれない悪寒を覚えたクラウドはゆっくりと目の前を見る。しかし、そうしようにも頭痛がそれをさせない。それだけの余裕がない。頭を押さえるのが精一杯で、焦点すら合わせられない。

「おいクラウド!？」

「クラウドさん!？」

「ツ!!」

膝をついた。

「声が聞こえる」。

前方から、『あれ』を象徴する長い銀髪。その輝ききれぬ闇の中から、甘美ながら武骨な男の声が飛んで来る。

「あ」

クラウドの判断能力が粉々に吹き飛んだ。クラウドにとっての脅威が、完全に理性を消しとばした。苦しみながら後ろに逃げるように後退するが、『それ』の足音が近づいて来る。

『くあuedfrioriofkttoencd』

『それ』の声が嗤っている。

圧倒的な苦痛。あるいは明確化された死へのカウントダウン。闇の中から突如現れた奇怪な声に、思わず頭を押さえる。キリトとアスナに声をかけられても何も聞こえない。聞こえるのは、『あれ』の声だけ。

そしてついに、

『リユニオン』

誰もが聞き取れる声と共に、グジユるグジユりという粘質な音が響き渡った。

音源は貫かれた茅場晶彦の中へと潜り混んでいき、そして『それは存在を確立するために新たな依り代<sup>アバター</sup>を手に入れた。茅場の体はそれに完全に侵食されて見る影もなくなった。あいつの面影はもうない。代わりに、クラウドにとっての悪魔の顔が浮かんでいた。

「フフツ」

そして。

今度の今度こそ、奴の存在が明確になった。

「あ……ああ……ツ!!」

クラウドは後ろに引く。

その存在を認めたくないかのように。

「な……」

「なん、だよ……あいつ!?!」

周りにいた奴らはただ見ることにしかできなかった。

目の前で起きている現象が意味不明すぎて何もできなかったのだ。常識を超えた出来事に脳は衝撃を受けて言うことが効かなかった。全て目の当たりにしていたというのに、その現象の詳細が何一つ理解できていなかった。

「キ、キリト君……ツ!?!」

「ツ!!」

「お、おいおい何なんだよ……いつ!?!」

アスナは目の前の現象に恐怖心を抱き、キリトに恐る恐る抱きついていた。

何が起こったのかわからなかった。

とにかく茅場の体を奪った、ということだけはキリトも理解できた。そう思った時には『そいつ』の姿は明確な形を取り戻していき、綻びにかけていた部分を修復していつていた。あまりにも非現実的な現象に流石のキリトも恐怖していた。アスナを抱きしめたまま、キリトはエリユシデータを『それ』に向けていつでも戦えるように構えておく。

その時だった。

「クラウド」

一言。

その呼び方だけで、クラウドの全身にゾツとした感覚が襲いかかった。

「ッ!!」

あのクールなクラウドが取り乱している。

その様子を見たキリト達も、目の前にいる奴がとんでもない奴だと理解した。誰なのか知っているのかとも聞こうとした。しかし、クラウドはそれどころではない。頭を抱えて地面に崩れ落ち、苦痛が容赦なくクラウドを襲う。

そいつは近づいてくる。

それは。

プレイヤーなどではなかった。

カツカツと、コツコツと。取り込んだアバターで、得意げに足音を鳴らし、その存在自体を自慢するかのようになり、そいつはゆっくりと近づいてくる。

見知った奴だった。

そいつはまさしく『それ』だった。

奴の銀髪には魔が宿る。

背中一面の銀色の滝にはまるで背中一面の刺青か何かのように、  
禍々しくも巨大な悪魔の顔が浮かんでいた。猫のように縦に開いた  
瞳孔は見る者を圧倒するほどの冷たさ。

その存在は『英雄』と呼ぶにはすさまじく、『災厄』と呼ぶにはあ  
まりにも畏ろしい。

クラウドの口から、掠れた声が漏れた。

声帯どころか、全身が震えてまともな言葉が出ないまま、彼はその  
名を絞り出す。

「セ・フ・イ、ロ・ス、ツ!!」

「久しぶりだな、クラウド」

ゾワツ!! と。

今度こそ、真正銘の絶望が口を開き、クラウドだけでなくキリト  
達まで丸呑みにする。



## 第17章

「そういえば何故自分はここにいるんだっけ？」

クラウドは無意識にそう思った。

「そもそもここはどこだっけ？」

クラウドは今までいた場所すらも認識ができないほど現実を否定し続けていた。

彼は一人だった。周りにはたくさんさんのプレイヤー達が目の前の『あれ』に注目しているのに、彼だけは今自分の中に閉じこもっている。理由は簡単だ。またあの絶望が、やって来たんだ。クラウドの背中をゆつくりと襲うように現れた人影は、それほどまでの力を持っている。単純な腕力や能力の問題ではなく、それ以上の圧倒的な恐怖が根底にあった。

「クラウド」

「ッ!？」

闇の向こうから聞こえる声。

その声が聞こえた瞬間、クラウドは頭を押さえて呻き声を上げていく。声が聞こえるたびに頭痛がする。

口を開こうにも頭痛がして言葉を紡げない。

現実の頭に負荷がかかって発言のプログラムでもイカレたのか、言葉を発することができなかった。

そんな彼に代わって、目の前にいる奴に問いを投げかける勇敢な若者がいた。

「そう、キリトである。」

「アンタ、一体何だ？」

「」

「答えるッ!!」

「

しかし、そいつは応じなかった。

キリトなんて初めからそこに存在しないかのように無視しやがった。視線すら送らず、ずつと冷酷に微笑んでいるのを見ると奴はキリトどころか周りの連中すらも眼中にないのかもしれない。

「クラウド」

相も変わらずクラウドの名を呼び続ける。

逆にそれが不気味さを醸し出し、後ろにいたアスナも次第に歯を小刻みに揺らして鳴らし始める。周りにいた多くのプレイヤーもそうだった。目の前で繰り広げられた奇妙な光景を目にして戸惑っているようだ。目の前で起きた光景を現実存在するものとして処理して良いのかいけないのか、その段階ですでに迷っている風に見える。脳が処理しきれないまま、攻略組の生き残り達はただ目の前を見ていた。

だが、やはり彼は興味を示さなかった。

奴にとつてはその価値すらもないのだろう。今日殺せる者は明日殺せるし、明日殺せる者は一年後にだって殺せる。興味を抱くのも馬鹿らしかった。わざわざ路傍の石ころ程度の連中の存在を認識するほどのことでもなかった。

「つ!!」

そしてここでようやく、クラウドは何かを呟いた。小声で、何かブツブツ言いながらゆっくりと立ち上がる。

頭を押さえ、呟くように目の前の『あいつ』に問いかけた。

「アンタなのか」

「

「本当に アンタなのかつ!？」

その声<sup>が</sup>が奴に届いたかどうかは本人にしかわからないが、きつと届いた<sup>だ</sup>るう。クラウドが喋った直後、奴の口角が僅かに上がった。ずつと雑音だらけの言葉しか喋れなかったのもあって、久々に会話<sup>が</sup>できて嬉しいの<sup>だ</sup>らうか。クラウドが喋る<sup>こ</sup>とに微妙にリアクション<sup>シ</sup>ョンしている。

「クラウド こいつのこと知ってるのか？」

キリトがそう聞いてくるも、クラウドは俯いたまま何も答えない。見ればクラウドは、僅かながら震えていた。恐怖か怒りか、それとも別の感情か。とにかく何かの感情がクラウドの全身を覆っている。指を丸めて拳の形を作り、その手を力強く握りしめている。

「グ、クラウド さん？」

アスナまでクラウドのことを心配して声をかけてくるが、それでもクラウドは応じなかった。クラウドの中から湧き上がってくる感情は体どころか五感すらも支配し、目の前にいるあいつと同じような状況<sup>に</sup>なっていた。

笑みのままなのは一人だけだった。

セフィロス。

「哀れだな」

「G」

「受け入れろ」

その言葉が引き金となった。

背中に背負っていた大剣に手が伸びる。手に取った瞬間にバスターソードは赤い光を発する。

それが何を意味するのか、セフィロス以外はわかっていた。

ここでようやく思い出した。ここに来た理由を、受け継いだ剣を再び握った訳を。

ここまで来て害意がないとは言わせない。

そして、単なる辻斬りや通り魔に巻き込まれたというのもあり得ない。

元凶が目の前にいる、ならばやることは一つだろう。

「うあああああああああツツツ!!」

「!?!」

クラウドが吼えた。

あるいは合理性など何もなく、恐怖に縛られた両足の拘束を引き千切るための儀式でしかなかったのかもしれない。

心臓から全身へ伝わる恐怖と嫌悪へクラウドは素直に従った。その右手に持つ大剣を強く握りしめ、全力で走り出す。勇気を振り絞るというよりかは、テレビに映るホラー映画からよそのチャンネルへ切り替えるためにリモコンを掴むような後ろ向きで剣を振り抜く。

「ツ?!? クラウドツ?!?」

「クラウドさん!?!」

皆が静止している中でキリトとアスナだけが叫んだ。

急な行動に反応できたのはたった二人だけ。クラインもエギルも、常連の攻略組も時が止まったように反応が出来なかった。

二人の叫びにクラウドの全身が跳ねるが今更動きは止まらない。その間、キリトとアスナは二人同時に理解した。何かとんでもない地雷を踏んだ、それだけは理解できた。何しろ、あのクラウドがあそこ

まで取り乱している事態だ。絶対に何かろくでもないことが起きる。思わずクラウドの後を追うように二人も走り出していた。両目をつぶってしまいそうな恐怖と後悔が背筋に忍び寄る。それを払拭したかっただけかもしれないが、二人は息を合わせるように同時にクラウドを止めに行っていた。

そしてクラウドのバスターソードと奴の正宗とが激突した。直後の出来事だった。

「この時を待ちわびたぞ」

「!?!」

「さあ、この世界に絶望を贈ってやろう」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!

恐るべき破壊力が世界を埋め尽くした。

それはクラウドの後を追っていたキリト達にも、そしてただ呆然と見ていたプレイヤー全員にも均等に襲いかかってきた。

だが一番被害に遭ったのはクラウドだ。全身を叩かれたツンツン頭は、そこで頭を揺さぶられて前後左右上下の概念すらも失った。すぐ隣にいる者達がどうなったのかを把握することすらできない。それどころか地面の感触もない。極限まで窮地に立たされたクラウドだったが、不思議とその感覚に懐かしさを覚えた。

思い出したくもない記憶。

運命に抗った過去の思い出。

そう。

あの時と同じ。

落ちていく。

クラウドは、キリトは、アスナは、プレイヤー達は。どこまでも落ちていく。



ズキンツ!! と。

改造VRバトルシミュレーターが受信しているモノに意識を集中させるチャドリーのこめかみに、何か鋭い痛みが走った。

「っづ!？」

思わず顔をしかめるチャドリーだが、その間にもVRバトルシミュレーターからは小さなノイズのようなものが断片的に響いていた。入ってきた信号を読み取るように、チャドリーの脳内メモリーに滑り込んでくるなりいくつかの言葉に変換されていく。

脈絡もなく。前後の確認もなく。聞き手が理解しているかどうかなどの確認すらもなく。

その断片的な言葉の羅列は誰かの頭の中を覗き込んでいるようであり、まさに今実際にやっていることであった。クラウドが見ているものが一部分ずつ送られてくる感覚には違和感すら覚える。他人に説明するために整理する必要なんてない、必要な事前知識を全て備えた自分自身が理解できればそれでいい。まさに一人称の視点、あまりにも乱暴で乱雑なその乱舞。

見ている者からの説明なしの描写。

地の文が無い小説を見ている気分。

起承転結もてにをはもなく、ただただ単語とその重要度だけが強調されたぶつ切りの応酬は、台詞と細かいメモをページ一面に埋め尽くしたメモ帳を眺めてその時のプロットを再構築しているような作業にも近いかもしれない。他人の思考は理解できないとは言うが、それを実際にやって見たら本当に理解ができない代物だった。

乱暴な情報の渦と向き合うのがこんなにも苦痛だとは。サイボーグの人工頭脳でなかったらおそらく脳が焼かれていたことだろう。人間であれば間違いなく死亡する。自分の脳細胞でも炙るような痛みを押さなきやならない作業の中、チャドリーはサイボーグの頭脳に流れてくる信号を送りつけて無理にでも言語化を進めていく。

何かが見えようとしている。  
クラウドの目の前にあるのはなんだ？  
この視界の向こうは一体どんな世界に繋がっている？

「っ!!」

断片的な単語と単語を結びつけていった先に、何かがぼんやりと像を結ぼうとしているような気がした。そいつを認めてしまっっては、クラウド達がこれまで築いてきた何かが盛大な音を立てて崩れてしまいうような漠然とした不安もあつたが、なぜだがそこにはチャドリーもよく知るフレーズがこびりついていて離れない。

乱暴な電子暗号が積み上げられて今にも崩れそうなか、チャドリーはゆっくりとその信号を引き抜くように読み解いていく。崩れれば今まで読み込んだデータがパアになるだけでなく、チャドリーの脳内メモリーすらも破損してしまう。まるでジェンガが崩れないようにその中の一つの板を一つだけ、ゆっくりと慎重に引き抜いていく。そしてチャドリーはそつと人工の舌に言葉を乗せた。

「セフィロス」

やはり関わっていた。

だがしかし、おかしな部分がある。

セフィロスという電子暗号が脳内で言語化されたのに、その表示のされ方がおかしかった。

「何故 茅場晶彦」という名前で表示されているのにセフィロスと読んでしまうのでしょうか？」

◇◇◇◇

その時、世界から音が消えた。

世界が破裂する音すらも、消えた。

地面へと突き刺したセフィロスを中心に、第七十五層ボス部屋の地面そのものが全空間にわたって容赦なく突き崩れた。落下の衝撃はクレーターをつくることすら許さず、そのまま鋼鉄の地面を粉々に砕き、巨大な穴と化する。

シエルター級の硬度にプログラムされていようが関係なし。奴の放った力はプログラムをも凌駕する圧倒的な力。崩壊したボス部屋はそのまま下へ降り注ぐ。

爆音と、振動と、粉塵が炸裂する。

「クラウド」

忌々しいセフィロスの声が耳に滑り込んで来た。

そのあまりにも奇怪で絶望的な状況に、クラウドは理解が追いつかなかった。

「美しい、そう思わないか？」

「っ!!」

ようやく、クラウドは自分が仰向けに倒れていることを自覚した。

慌てたように飛び起きる。そして、絶句した。周りの様子がおかしかった。もし七十五層から落ちて来たのだとすればその先には七十四層があるはずなのに、それらしいフィールドは広がっていないかった。

黒、黒一色。

ひたすら平坦で一切の狂いのない平面が広がっているだけ。ミクロン単位の起伏もない陸地が地平線の向こうまでひたすら続いていた。

「ハァハァッ」



自然物らしい自然物はない。人工物らしい人工物はない。

往來の表現でしか説明できなかったが、そもそも地平線という概念についても微妙だった。陸地も空も全てが同じ黒で統一されているため、その区別すらもつけられないのだ。辺りを見渡すために自分を中心にぐるりと一周、三百六十度を見回しても、景色の変化はない。光も目印になるものさえもないこの場所では、自分が今いる正確な位置も特定できない。故に、一周した際に自分が最終的に戻って来た場所が、本当に一周しようとした時の始まりの場所なのか、正しい位置なのか、目印になるものがないためその自信もない。

だが、そんな世界の中でも目立つモノがあった。

長い銀髪に、長い剣。

セフィロスの銀色の髪と冷たい白い肌だけが、統一された闇の世界の中で満月のように強調されていた。

それを認識した瞬間、徐々に得体のしれない現実感がクラウドの精神へ襲いかかってくる。今まで避けていた現実感という言葉にここまで敵意と拒否感を覚えるのは何年ぶりだろうか。

「ここ、はどこだ？」

「私の世界だ」

位置の特定作業中、元凶の声が前から飛んで来た。

その声は紛れもなくセフィロスの声だった。

だが、何故だろうか？

その言葉はまるで借り物で、そいつ自身から出てきた言葉ではないように感じた。

なんと言えば良いのかわからない。そいつの思考回路は間違いないあのセフィロスのものなのに、そこに何か「別のモノ」が紛れている気がする。

結局、わからない。

恨みの塊が考えているものを理解することができない。

「ふざけてるのか？」

「何故そう思う？」

質問を質問で返してきたことにクラウドは怒りを覚えるが、それよりも先に疑問の言葉がいくつも出てきた。

「ここはどう見ても仮想の世界とは違う場所だ。さっきまで俺は七五層のボスの部屋にいて、アンタの一撃で真下に落とされた。ならここは、一つ下の七十四層のはずだ。でもここは明らかに違う、ここにはそれらしいものが何もない。あの世界の面影すらない。アンタ、一体何をした!? ここは一体どこなんだ!?」

『私の世界』 そう言ったはずだ

「っ!! あの世界はどうなった、さっきまでいたあの場所はどうなったんだ!?」

「お前の目にはまだあるように見えるのか？」

「あそこにいた連中はどうなった!? キリトは、アスナは!? あの

世界にいた他の奴らはッ!？」

「私が気にすると思うか？」

「ッ!？」

頭が空白になる。

認識が壊れる。

喜び、怒り、哀しみ、楽しみが、どのようにして作り出されるのかを忘れてしまっている。混乱の渦の中で湧き上がってくる感情の名称すらわかっていない。湧き出てくる感情に意識を奪われ、自分の本来の性格すらも忘れてしまっていた。今抱いている感情は一体なんなのかを認識できない。

「哀れだな、クラウド」

と、混乱しているクラウドにまたもやセフィロスが声をかけてく

る。

銀と灰色と白の三色の塊。あらゆる雑念が人の形を取ったような影は嗤って、クラウドのことを蔑みながらこう宣言したのだ。

「事象の中心は全てお前にあるというのに、まるで今日ここまで生きてきた中で起きた全ての悲劇を私が演出してきたような口振りだな」

「何?」

「お前がいなければこうはならなかった」

セフィロスはそう告げた。

告げながら、新しい言葉を繋げるようにまた言った。

「クラウド お前がわざわざ私を追ってここに来なければ、そもそも私をあの時殺さなければ、私があの世界に紛れ込むことはなかったはずだ」

「!?」

ある意味では、それは間違いではなかった。

前提から見ていけば、全てはあの時から始まった。故郷のニブルヘイムでの魔晄炉の調査。本当はそれよりも前から始まっていたのかもしれないが、クラウドとセフィロスの二人の因縁で言えばあの時が全ての始まりだった。

「元凶は私かもしれないが、そうだったのは全てお前のせいだ。お前があの時私を魔晄に落とさなければ いやそもそも、お前がソルジャーなんて目指さなければこんなことにはならなかった」

「ッ!?!」

「お前がいたから、本来死なずに済んだはずの者たちが死んだ 全てはお前のせいだ、クラウド」

主犯は嗤う。

いや、どちらが主犯でどちらが共犯だったのか。

どうしてクラウド・ストライフという人間には、『ソルジャーになる』という道しかなかったのだろうか。そうでなければ、他の道があったのなら、あんな悲劇に巻き込まれなくて済んだかもしれないに。

夢見た『ソルジャー』になることはできずに一般兵に留まることになって惨めな人生を送ってきた。それでもいつかソルジャーになると信じて、神羅にしがみついた二年間。結局芽が出ずに故郷に向かうことになって、自分の惨めな姿を見られたくないから正体を隠しての帰省。その時一緒に同行したセフィロスの手によって壊滅。その後を追ってなんとか撃退したが、そのまま五年間魔晄漬けにされることもなかった。

どうしようもない悪党や闇の部分が多く隠し持っていた上層部が全ての引き金を引いていたように見えていたそれらも、クラウドさえほんの僅かでも違った道を選んでいれば起こる必要のない悲劇だったかもしれないのに。

何故、こうなってしまったのか。

過去のことばかりが浮かんでくる。

拭いきれない過去の出来事。忘れられない過ち。残留し続ける未練。

それら全てを解決する方法はなかったのだろうか。

「お前は誰も守れない」

「っ!？」

「ああ、自分さえもな」

その真の意味を理解しようにも判断能力がバグっていてまともに受け取れない。

言われてもいない言葉が頭の中で鳴り続ける。

「ッ!!」

被害妄想と本物の記憶の境界が。

曖昧になっていく。

何故。

どうして。

どうすれば。

「」

考えて、考えて、考えて。

そしてクラウドは頭から手を離して前を見据えた。

青年は、吼えた。

「ぶざけるなッ!!」

都合の良すぎる言葉を並べられて惑わされるな。

もしもだとか、仮にだとか、そんな話をしたところで今更何かが変わるわけではない。

現に今、クラウド・ストライフはここにいる。その事実を変えられない。ソルジャーを目指した事実も、かつてセフィロスに憧れていたという事実も、悲劇の物語も彼が生まれるよりずっと前から始まっていたというその事実だって変えられない。その全てはいつか自分にやってくるクラウド達を見据えて事前に用意されていたシナリオだったとしても、後から生まれてきた当の本人達には原因の芽を摘み取るなんてそんな因果を逆転させる事、最初から到底及ばない事実だったのだ。

だったら、論ずるべき場所はそこではない。着眼点はそこではない。

あの時誓ったはずだ。

『前に進む』と。

これ以上の悲劇を回避するために、あの時『彼女』に誓ったはずだ。いちいち過去を振り返ってないものねだりをしている暇はない。今の自分に何ができるのかを考えろ。本来自分が為すべきことを思い出せ。真っ先にすべき事が何かはわかり切っているならば、それに向かつて突き進め。

絶望なんて何度も見てきた。

今更脅威なんていう圧に押しつぶされたりはしない。

「終わらせる」

「ふふっ」

セフィロスもまた変わらない。

おそらくは真実を知った時と同じ。あるいはそれら全てを受け入れて作られた新たな自分の役割を全うすべく、その信念は決してブレない。

ただ一つの理由。

英雄として生まれることを約束され、母親の温もりを感じられなかった悲劇を当たり前のように経験して、そんなことでなどという一言で片付けられてしまう。そんな残酷な運命を許容する世界に一矢報いるため、それだけを考えてセフィロスは絶望を送るための最悪の一手を打とうと企む。

「フツ」

「ッ!!」

光る。

漆黒だけで埋め尽くされていた世界に、二本の剣が光をもたらず。明確な変化。

あるいは、終焉の前兆となるべき何か。

「あの時言った言葉を覚えているか クラウド？」

「？」

「私は思い出にはならない」

セフィロスは適当な調子で告げる。

これから処刑される人間を嘲笑うような目で。

「お前が守りたかったもの、お前が帰るべき場所、お前が大切にしたいもの、その全てを奪う喜びをくれないか」

直後に、世界が白一色へ染まっていった。

強い光が降り注いで目が眩んでいるのではなく、真っ黒に染め上げられていた何も無い世界の方が輝きを放っている。

変質していく。

二人を中心にして、化物の思惑通りに。

世界が創造されていく。

あの世界の光景を、この世界に創造していく。

免震機構や鉄筋がしこたま入った瓦礫の残骸が散らばる仮想世界。

壊れたビルに、壊れた列車。

建物の墓場のような世界が創造されていく。

空中に漂う建物には所々に『神羅』というロゴが貼られている。

そう、結局化物が思い描く世界はこれしかなかった。どれだけ「世界を創造する霊媒<sup>アバター</sup>”を手に入れて世界を創造したところで、再現できるものはこれが限界だった。世界を手に入れる目的が変わっていない、世界に復讐しようとしても、結局は紛い物。本人もそう。

紛い物の思考に紛い物の身体を手に入れて、死んだ者の願いを叶えようとするだけの残りカス。世界を支配できる神になれるわけではない。

だが構わなかった。

「全てに滅びを」

きっと生まれる前から結びつき、きっと生まれた時から運命は決まっていた。

お互いはその歩みを説明するにあたって、切っても切れない関係になることは必然だったのかもしれない。

だから。

「ハアツ!!」

「ふっ」

今度の今度こそ、言葉など必要なかった。

ゴオツ!! と。

二人揃って勢いよく地面を蹴って駆け出していた。

◇◇◇◇◇

どこまで行っても、クラウドは『人間』だ。

それでも、彼には特別な力が備わっている。本来才能がなければ手に入らない能力、あるいは身体的特徴を有することが叶った人物で、ある『細胞』を強引に埋め込まれて奇跡的に精神面が回復したことで、その力の一端を手に入れ、自由に操ることができる者なのだ。

大抵の敵など、彼の前では雑魚同然。

だが、

(相手はあのセフィロスだ。そう簡単に撃破できるわけではない)

クラウドはセフィロスの挙動を注視しながら、柄に添えていた指に強く力を込める。

その様子を見たセフィロスの眼光に、ドロリとした感情の色が混じる。

その瞬間、



ぞわり、と。

唐突に、セフィロスの体から見えない何かが放出される。

クラウドの視界からセフィロスが消え失せる。

凄まじい速度でクラウドの視界の外へ移動されたと気づくまで、一瞬の時間が必要だった。そしてその時には、ヒュオ!! という風を切る音がクラウドの真後ろから響いていた。

「ッ!?!」

とつさに後ろへ振り返りながら、バスターソードを横にして防衛に入るクラウド。

セフィロスが放ったのは、ただの蹴りだった。

にも拘らず、『ソルジャー』としての身体能力を持つクラウドの体が、ガードしたバスターソードごと大きく吹き飛ばされた。仰け反り、バランスを崩すクラウドの腹へ、セフィロスは左手に持っている“正宗”の柄による突きをただ放つ。

ズツパアアン!! と、凄まじい轟音が炸裂した。

クラウドの体がノーバウンドで十メートルも飛び、漂っていた瓦礫の一部に直撃した。直撃した直後、複数の免震構造によって頑丈に作られていたはずのビルが粉々に砕け、クラウドの体がさらに空中へと投げ出される。そして、ようやく別の足場へと滑り込むように着地した頃には、急激な痛みが遅れてやってきていた。

「がっ は、アッ!?!」

一筋縄ではいかないとは思ってはいたが、それにしてもここまでとは。以前戦った時よりもさらに強くなっている気がする。

ソルジャー含め、生身の人間に扱える力の量には上限があるはずだが、奴はそれを上回っている。

(まさかアバターによるシステムアシスト!?)

茅場のアバターを取り込んだことでゲームシステムの力を借りて更に強くしているというのか？

現実よりも更に動きやすく設定されたアバターの力を最大限に活かし、人間が動ける範囲を越えて動いているという感じか。それに、あの時の記憶をもし引き継いでいるなら、セフィロスは復活することに強くなるということになる。呼吸困難になったクラウドの頭にあらゆる疑問が浮かぶが、冷静に考える暇はなかった。

セフィロスは既に五メートルもの高さを飛び、クラウドを突き刺すために刀を下に構えて迫ってきていた。

「ッ!？」

とつさに横へと転がるクラウド。

しかしソルジャーとしての運動性能をもつてしても、安全圏へは逃げられない。

直撃こそ避けたが、周囲へ撒き散らされたアスファルトの残骸が、クラウドの体を叩いたのだ。この世界は仮想空間であるはずなのだが、血を噴きながら転がるクラウドを、セフィロスは着地点から嘲笑うように静かに見下ろしていた。観察しているというよりかは、クラウドが苦しむのを楽しんでいるという表情だった。

「何を意外な顔をしている？」

全身から警戒心を発し、指先から髪の毛の先まで注目するクラウドに対して、セフィロスは両手を緩やかに広げた。しかしそこにあるのは強者としての余裕ではない。失望に近かった。

「私は選ばれし者。世界の支配者として選ばれし存在だ。ソルジャーとしての身体能力を持つとはいえ、たかが『人間』ごときが、対等に戦えるとも思っていたのか？」

「ッ!!」

クラウドは応じず、バスターソードに気を纏わせて放つ。

「懐かしいな」

しかしセフィロスは動じない。彼は空中へと手をやると、そこから突如として現れた鏡のような壁にクラウドが放った破睨撃が当たると、威力は跡形もなく消し飛んだ。

「覚えている。そう、覚えているぞ。お前に倒されたあの時のことを」

眩き、セフィロスはクラウドと同じように空間を切り裂くような衝撃波を放った。その威力はクラウドよりも鋭く、直撃を受けたクラウドの体が砲弾のように真後ろへと飛んだ。

「ごっ、ぼ　ッ!!」

今度は空間を漂っていた列車の一本に激突し、ようやく動きを止めるクラウド。

放たれた衝撃波はもはや衝撃波ではなかった。クラウドのとは比べ物にならないほど鋭かった。あまりの威力で凝縮された気は圧縮され、それが鋭い刃物のように放たれたのだ。

「変わったなクラウド」

「ッ!？」

「だが、そのせいでお前は弱くなった」

セフィロスは指を動かし、関節をゴキゴキ鳴らしながら、静かに語る。

「私の前に立つべきは、あの時の『クラウド』でなければならぬ。かつて私を葬り去った『ソルジャー・クラス1st』のクラウドでなければな」

「ッ!!」

「いや、単純な実力だけなら『ソルジャー』では足りない。世界を作り替える力”を手に入れた私は過去の私よりも遥かに上。率直に言おう。お前では役不足だ」

直後に轟音が響き渡る。

セフィロスの体が消えた時には、既にクラウドの真つ正面にいた。彼が横へ跳んだ直後、セフィロスの刀がクラウドの立っていた足場を消し飛ばした。斬り刻むのではなく、消し飛ばした。

クラウドは空中へと投げ出され、浮いている僅かな足場を確保してセフィロスを睨み付ける。

「くッ!!」

その威力に戦慄するクラウドの手が、無意識に動く。いつまでもやられっぱなしではられない。カウンターを繰り出すために、片手に持っていたバスターソードは、クラウドの手によってセフィロスの首をめがけて正確に放たれる。

だが、

ゴツキイイ!! と。

轟音と共に、セフィロスは何事もなかったかのように、片手に持つ刀でクラウドの刀身を掴み取る。

今度こそ、クラウドの全身を恐怖ではなく困惑が包み込んだ。

動きを止めたクラウドに、セフィロスは言う。

「甘いな」

刃を受け止めたまま、セフィロスは片足を地面から離す。

「この痛みで私との闘いを思い出せ」  
「ッ!？」

ドツパアアンツ!! と、爆発音が炸裂する。

セフィロスがクラウドに蹴りを放った音だった。あまりの威力に意識を手放しそうになるクラウドの体が、遠くへ遠くへ薙ぎ払われる。

「う」

朦朧とするクラウドは、空間のど真ん中に浮いているセフィロスを見た。

「私との闘いを記憶の奥底に封じ込めた結果がこれかクラウド？ その程度の力ではかすり傷一つつけられないぞ」

クラウドは立ち上がろうとする。

しかし、その足に力が入らない。

特殊な環境、状況にあるとはいえ、明らかにこれまで戦ってきたどのセフィロスよりも理不尽だった。幾度も復活したセフィロスに苦戦はしたが、今回のそれはそれ以上だ。今の奴は、茅場のアバターを取り込んでいる。ゲームマスターとしての力を取り込んだことによって、この世界の常識を自由に塗り替えられる。今までのセフィロスならばまだ『打ち合う』事ぐらいはできた。

だが、今度のセフィロスはそれすらも許さない。

そして奴は、その力を誇りすらしない。

「哀れだなクラウド」

セフィロスの瞳孔が縦に細くなる。

その表情は嗤っているが、つまらなそうだった。

「今のお前では本領を發揮する私を倒すことは叶わない」

何とか力を振り絞ろうとするクラウドに対して、セフィロスは無操作に正面から近づいた。

そうしながら、彼はこう言った。

「お前に最高の絶望を贈ろう」

最後の言葉が放たれた。

そして、セフィロスは両手で握った正宗を、一切の迷いなく振り下ろした。

クラウドの首めがけて。

今度こそ、全てを奪い取るつもりだろうかのように。

同時に、

ドッパアア!! という凄まじい衝撃が、二人の間に割り込んだ。

その瞬間、二人がいた足場は崩れ、両者はまた空中へと投げ出される。

「ほう」

その瞬間、砕けた足場から退避するように上へと跳んだセフィロスは、目の前に現れた衝撃波に対し、笑みすら浮かべて声を上げた。

「ッ!？」

その瞬間、クラウドは目の前で起きたことが理解できなかった。

先ほどまで地面にへたり込むように膝をついていたはずの自分の

体が宙に浮いていた。クラウドはあわてて近くの足場へと移り、何が起きたかを冷静に分析する。

そんな中で、クラウドは確かに聞いた。

「すまない、遅くなった」

黒い、黒い、黒い装備を身に付けた少年。

「大丈夫ですかクラウドさん？」

白く、美しく、可憐な少女。

二人の手には、得物が握られている。

少年は黒い剣と碧い剣の二つを片手に一本ずつ手に持ち、少女の方は剣先が鋭く尖ったレイピアを装備している。

クラウドは知っている。

その武器を持つ者達の名前を知っている。

「キリト アスナ」

呆然とした。

思考が白く焼き切れたかと思った。

二人の間に割って入ったのは、まだ十代の子供だった。

キリトとアスナ。

ゲームの垣根を越えた世界の中で、二人の剣士がクラウドに加勢するよう降り立った。

## 第18章

容赦なしであった。

たとえどんな事情があろうと、ピンチになっていたことには変わらない。

ので、介入したまでだ。

「ッ!？」

事情が何もわかっていない者からしたら、突然の出来事に思えたはずだ。

急にひざまづいていた足場がなくなり、目の前に衝撃が走った。その一撃が突如加えられたことで戦況は大きく変わる。

「すまない、遅くなった」

「大丈夫ですかクラウドさん？」

難攻不落だった怪物を一時的に退けたことを確認し、黒い装備を身につけた少年と白い装備を身につけた少女はそれぞれ涼しげな調子でクラウドに囁いていた。

装備品のデザイン性だけならそれはどうなのかと疑問を抱いてしまふような見た目ではあるが、この世界ではなんの違和感もなく、何より防具としての性能自体は間違いなく本物だ。武器も強者と渡り合うなら十分すぎる威力と強度を誇り、怪物相手に刃を向けてもその切れ味は怯むことはない。

そして一刻も早く打倒しなければならぬ相手は目と鼻の先にいる。

「見たところ、尋常じゃない状況みたいだな」

「うん。この空間といい、あの団長を取り込んだ人といい、明らかに



ゲームの域を超えてる」

アスナはキリトの声を聞いて同意するように頷いた。それから二人は改めて周りに視線を走らせた。

まずはこの空間。この空間はどう見てもSAOで用意されていたワールドではない。何故わかるのかと聞かれればただなんとなくしか答えられないが、作りがどう見てもSAOのようなファンタジー系の風景ではない。現代的な作りでゲームらしきもない。というか、そんな現代的な建物があちこちに浮いているというわけのわからない現象が起きている時点でここはソードアート・オンラインではないと確信を持って言える。

ここはおそらく別の空間。

キリトやアスナどころか、クラウドだってこの場所を把握しきれていない。

そして何より、

「アイツ、どう見てもただのNPCってわけじゃないよな」

何しろ茅場晶彦のアバターを取り込んだくらいだ。SAOを作った本人も予期していない事態が起こったという表情をあの時見せていたため、これは明らかに異常事態だ。茅場本人が意図した演出とは思えない。しかしあの世界をあれだけの複雑なプログラムを設定しておきながら、制作者でも予想できなかった事態が起きるとでもいいのか。目の前で今それが起きているということがわかっていても、あの茅場の作ったセキュリティを掻い潜るイレギュラーがあるなんて信じられない。

あるいは茅場ではない誰かの策略か。

その辺については確認するにしても確かめるにしても、あの空中に浮いている奴をぶっ飛ばして身柄を確保するのが一番だ。

「クラウドさん」

一緒にこの空間に連れ込まれたアスナが、大きく息を呑んでいた。何やら疲れたような顔で、クラウドを見る。

「なんだかわかりませんが、あれが全ての元凶ということではないんですよね？」

「あ、ああ」

「それでお前はその元凶の思惑に巻き込まれている、と」

「ああ」

キリトがアスナに続くように質問した。

二人はそれを聞くと互いに見つめ合い、セフィロスの方を眺めてから再度クラウドに質問する。

「クラウドさん、一つだけ確認させてください」

「？」

再びアスナが最初に質問し、キリトがそれに続くように尋ねた。

「あれは俺たちの味方か？」

「絶対ない」

クラウドは即答した。迷いもしなかった。

「アイツが味方になるなんてこと、未来永劫あり得はしない!!」

「そ、そこまでか」

語尾をやたらと否定的に強調したのを見ると、キリトが言った可能性をどうしてもなかったことにしたいみたいだ。

そして、ここでまた一つわかった。

クラウドはアイツのことを知っている。

どこまで知っているのかは現段階ではキリト達にはわからないが、おそらくほとんどのことを知っていると見える。あそこまでハツキリと味方ではないと言い切る辺り、彼らには何か深い因縁があると思われる。キリトとアスナはそんなクラウドの態度をよそに、今も遠くの方でこちらを嗤いながら見てきているセフィロスを眺め、それからまたクラウドの顔をもう一度見直した。

「つまり、アイツを倒せば」

「ここから抜け出せる」

二人は、睨む。

異形の怪物を。

その二人の視線を受けたセフィロスは、ようやく二人の存在を認めただのか眼光をさらに不気味に光らせる。

纏う空気、瞳の奥に宿る闇、口元の笑み。

これはそういう形をした別の何かだ。キリトやアスナよりもはるかに老練な。圧倒的な威圧に押し負けそうなくらいの存在に二人は思わず息を飲む。そこにいるのにそこに存在しないかのような違和感が拭いきれない。

だが引かない。引くわけにはいかない。

二人はセフィロスに敵対するという意思を見せるために剣を掲げる。あの世界で最も活躍した二人の剣士、あまりにもわかりやすい直接戦力の要。

「ふっ」

笑いが漏れた。

震源は二人の後ろから。

ズタズタに全身を叩かれようとも、彼は決して倒れなかった。

クラウド・ストライフの戦いは終わらない。彼の戦いは始まったばかり。いいや、この戦いはそんな小さい枠には留まらない。たった三

人で怪物に挑むこの戦いは、歴史に刻まれるに値する。記録には残らずとも、紡がれることにはなるだろう。

二人の少年少女達によつて、この戦いは想い出にいつまでも残り続ける。

クラウドは立ち上がる。

二人の剣士が目の前に降り立った。たったそれだけで彼はもう一度、どこまでも強く固く。手に持つバスターソードを握り直した。

絶望で埋め尽くされた戦況はもうない。この先に待つのは真正銘本物のゲームクリアまでの道そのものだ。

クラウドは二人に続くように、間に入って剣を構える。

彼の 彼らの戦いは未だに終わっていない。

「フツ」

対して、セフィロスはこの世界の看板役者に近い。大仰な身振りで、声も高らかに、なのに誇示すればするほどどこか夢か幻のように存在感や現実味は逃げて行く。

だからまだ彼は存在し、だからクラウド達の前に立ち塞がっている。目的を果たすまでは、何度も蘇る。全ての者達の敵対者として、ゲームの常識を塗り替えてまで、人々が持つ現実という『正しさ』の概念を強奪し、生きる権利をもぎ取り、絶望を蔓延させていくに至るほどに、彼はしぶとく立ち塞がる。

やることなすこと全てが失敗し、裏の裏を読んでもなお裏目に出る。そこまで苛烈でどうしようもないほどの茨の道を自ら歩んでおきながら、それでも奴はここまで這い上がってきた。

セフィロスは絶対に止まらない。留まることはない。

妨害されるのが前提、失敗するのが当然。そう考えてなおここまでやってきたのだから。なおのこと、今更どんな障害が行く手を阻もうとした所で、自称選ばれし者にとっては驚くべきことなど何も無い、

平然な状態でしかないのだ。

そして、奴は言った。

手に持っていた剣を逆手に持ち、クラウドの前に降り立った子供相手にセフィロスの甘ったるい唇がこう紡いだのだ。

「二匹邪魔者が増えたところで、変わることはない」

「ツ!？」

「来るがいい」

「ここではつきりと明記する。」

「対するキリトやアスナ、そしてクラウド側にはもはや対話などなかった。」

「ツ!!」「」

ゴウツ!! と。

闇を引き裂いて、全員同時にセフィロスへ斬り込んで行く。

◇◇◇◇◇◇◇◇

音速の限界を、突き破る。

それぞれの肉体そのものを凶悪な武器へと変える、規格外の攻撃。キリトはその派手な二刀流のスキルを放ち、アスナは鋭い先端に全威力を集中させた突き、クラウドは工夫もない片刃の剣。スピードと突きに直球の攻撃、どれか一つでも対処不能なものを、念押しで重ねてきた。まともに喰らえばオーバーキル。傷一つどころか肉体全部を粉々にするほどの威力が同時に放たれる。

「ふっ」

「だが、セフィロスは呆れたように鼻から息を吐いただけだった。」

三方向からの攻撃に、三回同時に音が響き渡る。

ガキンツ!! と。

火花を散らす音が一面に炸裂した。

直後。

もはや無音に近かった。何かの間違いかと、その一瞬は時間が伸びたかと錯覚するほどの静寂。

あろうことか奴は、同タイミングで放たれた攻撃をたったの一瞬で捌ききった。やったことは単純だった。体を素早く動かして刀を三方向に向かったただ振っただけ。何人にも受け止めることのできないはずの斬撃を、セフィロスは一振りの刀で弾き返した。

「な!?!」

「ふっ!」

一番近くにいたキリトが一番最初の被害者だった。セフィロスは三人の攻撃を弾くとキリトに一番最初に注目し、飛び蹴りを放って反対側の方向まで吹っ飛ばした。

「がっ!?!」

ノーバウンドで薄いアスファルトに激突したキリトは止まることはなく、そのアスファルトをバラバラに粉碎しながら崩れ落ちる。

「キリト君ツ!?!」

「ハッ!」

「!?!」

アスナが声をかけるもすぐに次の攻撃が迫ってきていた。

セフィロスは生死など確認しない。次々と標的を変えて戦況を有

利な状態へと変えていく。縦に開いた瞳孔は揺らぎ、それでもターゲットを正確に捉える。

「っ!!」

それでもアスナは油断はしていなかった。

キリトに声をかける余裕を持っていたから動けたわけで、戦闘の真つ最中だということは忘れていなかった。

故に、アスナは臨機応変に対応した。

まさに一瞬だった。

瞬きの暇も与えず、闇を引き裂く一撃が迫り来る元凶の胸へと襲いかかっている。

自らこちらに迫ってきて利用していることを利用して、アスナは鋭い突きを誰よりも早く見舞ったのだ。

元々、あの世界で一番と言われたギルドの副団長だ。キリトとも互角に戦えるほどの戦闘力まで鍛え上げ、そして幾度も最前線で凶悪なボス達と戦いを繰り返してきた経験もあって、即座に作戦を考えることなど造作もない。常に戦況を見て、その場で瞬時に攻撃方法を組み立てる事ができるその頭脳こそがアスナの最大の武器。

アスナの鋭い突きの攻撃と、迫り来るセフィロスのスピードを利用してさらに威力を増大にさせれば、このまま全身を粉々にできる。

しかし、

「言っただろう」

「!」

今度こそ、アスナの表情が凍りついた。

閃光と化したレイピアが、いつの間にか光を失っていた。スキルが発動し終わったという証拠と、セフィロスから歌うように囁かれるその声に、背筋が凍りついた感覚が襲ってきた。

「増えたところで何も変わらない」

ゴツキイイインツ!! という重たい音と共に、矛先の流れが強引に弾かれた。

■ 剣先は、セフィロスの右手の中に。

■ 傷口を押しさえているわけではない。皮膚に触れるギリギリのラインで、奴の掌がアスナのレイピアを掴んでいる。

「ッ!?!」

■ 馬鹿げた防ぎ方に目を見開く。

■ 片手での真剣白刃取り。

■ 普通の人間にはできない芸当をセフィロスはあっさりとやって見せた。

そのままアスナはセフィロスの手によって遠くへと投げ払われる。得物を喰いそびれたアスナは近くに漂っていた鉄の街灯へと激突する。

「アアツ!?!」

背中からぶつかり、その衝撃で街灯はくの字にへし折れる。

「ッ!?! アスナ!?!」

いつの間にか復活していたキリトが愛する者の名を叫ぶ。

セフィロスはそんなことすら気にせず、何の変哲もない右手をひらひらと振っていた。何ともない、そう言っているかのようにキリトに堂々とした姿を見せる。

「っ!!」



何かを警戒するように、隣にいたクラウドもまた一步後ろへ下が  
る。あるいは、次なる一撃を放つための助走や間合いを考慮している  
のか。

「どうした？」

酷薄な笑みを浮かべているが、果たしてどこに向けているのかわか  
らない。

始めから戦っていた自称ソルジャーに対してか、あるいはここに乱  
入してきた黒の剣士にか、それとも先ほど放り投げた閃光か。

「この程度で私に挑もうとしてきたのか。愚かだな」

セフィロスの唇が歪む。

そこに尊敬やら喜びやら、そういったポジティブさを示す笑みは刻  
まれていない。

嘲り。

それだけであった。

「跪き、許しを請う姿を見せてくれ」

全長二メートルを越す刃が横へと薙ぎ払われる。

ドツパア!! という轟音が空間に炸裂した。

武器を盾代わりに使う暇もなかった。その音が自分たちの体から  
出す音だと気付いた時には、すでに呼吸が止まっていた。空間を超え  
て放たれた無数の斬撃に切り刻まれた彼らの体は、一秒もかからずに  
分厚いコンクリートまで吹き飛ばされる。

「がっ、ああ!!」

「ぐッ!!」

灰色の粉塵が、煙のように舞い上がる。

空中に漂っていたコンクリートの一つまで吹き飛ばされた二人は縫われたようにそこに固定された。重い何かで押さえつけられている感覚。重力が歪み、そのコンクリートを軸にして二人を押さえつけていると気付くには数秒の時間がかかった。体を固定されたクラウドは、コンクリートに埋れそうになりながら、首だけを動かして頭上を見上げた。

が、見上げる必要はなかった。

「つまらんな。数が増えてそれぞれが策を練って攻撃を繰り出したところで、もう限界が来たか？」

奴はいつの間にか二人に接近しており、ふわりと羽毛のように近くに浮いていたアスファルトに足を乗せると、静かに語る。

「その程度の力しか持たないのなら、もはや何の価値もない」  
「ツ!!」

返事はない。

しかし行動はあった。今にも砕けそうなコンクリートから離れようとボロボロの体を動かして、再び戦うために立ち上がろうとしているのだ。キリトもそんなクラウドを見習って自分もこの拘束から抜け出そうと必死にもがく。

それを見たセフィロスは嘲笑い、

「いいだろう」

異常に長い刀を構え直し、先端をまずキリトに向ける。

「お前が守りたかったものから最初に葬ろう」

「なッ!？」

「ッ!!」

クラウドは力を振り絞って抜け出そうとする。

しかし、残念なことにセフィロスの方が早かった。既に刀はキリトに向かって放たれる。長い刃はセフィロスの意志に応じて大きくしなる。的確に、絶命させるようにキリトの首めがけて。

キリトは目を瞑らなかつた。

だからこそ、彼は最後の最後で気付いた。

「キリトくうううんツツツ!!」

閃光が瞬いた。

音速の三倍もの早さで放たれた一撃は、セフィロスの攻撃を中断させるには十分だった。空間に漂っていた瓦礫の残骸を抉り取り、轟音と閃光を撒き散らして銀髪の怪物へと突っ込んだ。

だが、

「ふん」

その展開は最初から予想していたので驚くことはなかつた。

もはや彼女からしても確信を得るための試し撃ちだったのでだろう。セフィロスが攻撃を止めて迫りくる虫を払うように刀を振るうだけで、あつさりと致死の一撃が横に弾かれ、穂先が宙を泳ぐ。

しかし、彼女は目的を果たせた。

攻撃を中断させたことで連鎖的に二人を縛っていた拘束も解かれ、二人はそのまま下へと落ちていく。落ちていくといっても投げ出されたわけではなく、感覚的にはゆっくりで、二人の足は無事に浮いている足場の一つへと接触する。

「キリト君!! クラウドさん!!」

「アスナ!!」

アスナが近付いてくる。

キリトはその声に応じ、互いの安否を確認するために両者とも距離を詰めていく。見たところ目立った傷はない。四肢共に正常にくっついていて、これならばまだ問題なく剣を振れるだろう、二人は互いにそう思いながら安堵していた。

そんな中で、クラウドは確かに聞いた。

「救えないな」

セフィロスの声がわずかに低く落ちた。

なのに、彼の顔は未だに嗤っていた。奴の顔に一体どんな感情の色が乗っているのか想像もしたくないが、まだ余裕そうにしているということだけは明らかだ。

「どの一撃も致命傷とまではいかず、に全て弾き返されるとは、救いようがないな。殺意という便利な武器がありながらそれを酷使できず、私に傷一つ負わせられないとは、本当に救えない」

そうとわかれば一切の容赦などない。

セフィロスが踏み倒して先へと進むと宣言すれば、奴は本当にそうする。そこらの雑魚を害虫駆除するのと同じように、何も気にせず踏み潰して殺して進む。

と、その時だった。

変化があった。

「ハアアアアアアッ!!」

ゴウツ!!

ヒビが入っていた足場を蹴飛ばし、クラウドがセフィロスへと向

かっっていく。

あまりの脚力に、足場に使っていたアスファルトが砕ける。

セフィロスはクラウドが急接近してきたことを確認すると、クラウドと対立するように自らも真っ直ぐ前方へと飛んだ。それこそ空中をスライドするかのような、重力を力技でねじ伏せた二人の体が、剣が、中間地点で容赦なく激突する。

火花が爆発した。

「ぐっ!」

「きやつ!」

衝撃波が無尽蔵に撒き散らされる。その余波としての衝撃波が周囲一帯へ均等に炸裂し、キリトとアスナは薙ぎ倒されそうになりながらも、キリトが彼女を抱き寄せて身を守ることと堪え、辺りに漂っていた足場は木っ端微塵に砕け散った。

前進するために使った全身のエネルギーは初撃で完全に失い、クラウドとセフィロスは真下へ降下を開始。しかし二人にとって、重力落下は脅威ではない。彼らは構わず、さらに至近距離で剣を振るう。

ガガガガギギギギツ!!

という刃が複雑に噛み合う音が響く。

足場のない空中戦では、真つ当に自分の体重を預ける斬撃は繰り出せない。そこでクラウドとセフィロスは、相手の攻撃を受け止めたその余波のエネルギーを逆手に取って体を回転させて、様々な角度から一撃を返し、返し、返し合っていく。

それは複雑に絡み合いながら落下していく。

足場なき状況を最大限に利用した応酬も、永遠に続くことはない。空間に浮いている足場達が二人のすぐ真下から上へと都合よく迫ってきていた。そして、それに着地した瞬間こそが、拮抗した状況を崩す大きなきっかけとなる。

それはすぐにやってきた。

二人の足が、運ばれてきた足場へと降り立つ。

「ハアツ!!」

「ふっ!!」

衝撃が轟音と共に再び炸裂した。

クラウドとセフィロスの体が、それぞれ爆心地からかなりの距離まで離れる。それこそ、大きな爆弾に吹き飛ばされる小石のように。

それが激突の結果だった。

二人の一撃は同等で、互いに後方へと吹き飛ばされるほどの余波が生じていた。クラウドの体はまた別の足場まで吹き飛ばされ、ちょうどそこにはキリトとアスナが立っていた。最初にクラウドが飛んだ衝撃で崩れた足場から逃れるように、二人は既に別の場所へと避難していたようだ。

クラウドは二人がいる場所へ無事に着地すると、すぐさまセフィロスが吹き飛ばされた方を見る。

対して、セフィロスはこの空間の中心部分と言えるほどの大きなビルの中へと突っ込み、バキバキと内装を破る音が連続していた。

「クラウド!!」

キリト達がクラウドの方に駆け寄ってくる。

それにクラウドは目を向けると、険しい表情をする。眉間にシワを寄せ、側から見れば睨んでいるように見えたかもしれない。しかし、クラウドが睨んでいる相手はキリト達ではない。

吹っ飛ばしたセフィロスだった。

「くそっ!!」

明らかかな舌打ちと共に、クラウドはビルの方へと視線を向ける。

吹っ飛ばしたというのに、彼は不快そうに舌打ちをした。そこに不満を感じる要素などないはずなのに、彼はそれが気に入らないといっ

た表情をしている。

■ その様子に違和感を感じたアスナは一体どうしたのか尋ねていた。

「どうしたんですかクラウドさん？」

「嘗められてる」

「え？」

■ クラウドの顔には不快しかない。

■ 自分の手を見つめて、ムカつくように掌を握りつぶす。

■ 手応えを意図的に外された感覚が残っている。

一撃を加えたクラウドだからわかる。あの踏み込みであそこまで吹き飛ばなんてこと、あり得ない。手応えも全く感じられなかったのにあんなに吹き飛ばなんて考えられない。

考えられる可能性は一つ。

奴は自ら跳んだのだ。

衝撃を逃すように、自らの足であそこまで跳んだのだ。あたかもクラウドとの衝突で吹き飛ばされたなんて下手な演出までして。

「すぐに終わってしまったのはつまらんだらう？」

テロにでも遭ったようなビルの真ん中から、そんな声が聞こえてきた。

心を読まれたような一言を呟きながら、吹っ飛ばした穴から奴は平然と現れた。ギクリと体を強張らせる暇すら与えないほどの強者としての威圧感に圧倒される。

セフィロスはむしろようやく自分と意図に気付いてくれたかとも言うように、緩やかに両手を広げて目の前の敵を受け入れていた。クラウドは浅い息をして標的を睨む。

いい加減に、セフィロスが何をしたいのかがわかってきたからだ。

この空間の支配者は緩やかに両手を広げ、ひび割れたビルから出てきてうっすらと嗤っていた。灰色にぼやけた空の下で、そのまま言った。

「せっかぐ二人も追加されたんだ。すぐに終わってしまったては勿体無い」

「こいつ ツツツ!!」

キリトもようやくその意味を理解し、奥歯を噛みしめる。

この程度で、勿体無いかとかであっさり勝負を投げられる程度の考えで、こいつは戦っていたのか。

ムカつく。

悔しい。

本気でこっちは相手をしていたのに、奴はただ遊んでいただけだったのだ。三人はその事実を知り、明確な敵意をセフィロスへと向ける。

顎を引き、目を鋭くさせて構える。

そして噛み締める。

戦い、という言葉の意味を強く強く噛み締める。

噛み締め、ざりッ!! と。そしてクラウド達は靴底で路面を擦り、己らの敵と向かい合った。

その直後にセフィロスはつまらなそうにこう言ったのだ。

「普通に勝つだけでは物足りん」

ブワツツツ!!! と。

風が横顔を蹴つたのだと、三人はそれぞれそう認識していた。いや違う。

横顔を蹴つたのは風なんかではない、《羽根》であった。

ビルの中から出てきたセフィロスの背中には、悪魔のように黒く、天使のような形をした翼があった。



その翼が彼の背でゆつくりと羽ばたくと、真横に灰色のカーテンが遅れて薙ぎ払われる。

まだ距離はあるのに、その翼が羽ばたく度に余波がここまで届いた。

「ッ!!」

「ッ!?!」

クラウドはそれを見てさらに顔を険しくさせるが、キリト達はその神々しくもどこか邪悪さを感じさせる姿に唾然としてしまっていた。

怪物は、唾然とする少年たちに気づいたのか。

「ふっ」

鼻で嗤って、『片翼の天使』は凄絶な笑みを浮かべて、看板役者のような大仰な言葉でこう呟いたのだ。

「今再び...忘れられぬ痛みを刻んでやろう」

## 第19章

世界を変える時はいつもとてつもない『破壊』が巻き起こる。

それは決して目で見ることが出来ず、しかし世界を揺るがす事象。

世界中で記事になるほどの出来事が起きる時、人々はようやく世界が変わろうとしているということに気付き始める。つまりそこで人々は初めて対策を練ろうと動き始める。しかし、世界はもう変化しようとしている。段階的にはもはや手遅れなところまで進んでいることが多い。それで今更何かを練ったところで、すでに起きている事象を止めることは極めて難しい。

例えば、白亜紀には巨大隕石が地球上全ての生命活動を押しつぶすようにして、強引に一つの時代を終わらせていた。

今それがこの時代でも起きた場合、果たして人間はそれを止められるのだろうか。

結果誰がどう生き残るにせよ、世界は全く異なる神秘のフォーマットが支配していたことだろう。

セフィロスの場合、それは『偽の真実』を知った時。

全てあの時セフィロスが間違った情報を自分の中で勝手に自己解決してしまったせいで、全てが変わった。

始まった、もしくは終わったと表現しても良いかもしれない。

善人であった頃の『英雄セフィロス』はその時死んだ。代わりに生まれたのが『怪物セフィロス』だ。目の前にある情報を自分の脳内で整理していった結果、今までの思考を『破壊』させて掴み取ったのは、化物か、怪物か、天使か。

全てに滅びを送ることを誓った彼を止めることは出来ない。改心など不可能。彼は万人が平等に扱えない力を誇示し、世界の象徴とも言える場所から更なる場所へと踏み入れようとしている。

人間が決して踏み入れることができない、神の領域。

その場所を、彼は作られた世界で為そうとしている。

「ハハッ」

嗤いが漏れたその瞬間、二つの爆風が吹き荒れた。

「ハアアアアアアアアアアアッ!!」

キリトにアスナ。共にトツプの座にいるプレイヤーがイレギュラー目掛けて再び突っ込んで行くが、間に挟まれたセフィロスが怯むことはない。

むしろ、待ち構えるように彼らを迎え入れる。

二人の剣に明確な殺意が込められている。それを察知できないほど、セフィロスは馬鹿ではない。絶対に即死していなければおかしいはずなのに、むしろ片翼の天使の方がこの場を主導している。世界の常識は全てあいつの手の内。あいつが望めば世界をいくらでも作り変えられる。

この理不尽で意味不明な状況を楽しむようにして、長い銀髪をたなびかせて踊るように剣を振るう。

「フン」

馬鹿馬鹿しい、そう言うように鼻で笑って二人の攻撃を見切る。

二人が狙うのは胴体。

腹と腰の上半身と下半身を繋ぐ境界線部分。前と後ろの双方を両断するように銀の刃が閃いたが、声高に嗤うセフィロスはそれすらも遇らう。

なんの変哲もない動作。ただ前と後ろを素早く振り向いて長い剣を振って弾き返しただけ。

「ツ!!」

だが、意外にも二人はその行動を見ても驚かなかった。

理由は単純で、予想できていたからだ。

弾かれるなんて想定内。だからこそ、次の一手もすでに考えていた。弾かれた二人はそのまま身を任せるように吹き飛ばされ、背後に視線を送る。

と、二人の間から一つの影が飛び出していく。

「ハアアアアアッ!!」

「ふふっ」

クラウドの肉体が、超音速の爆音と化した。

キリト達を弾き飛ばした直後に、クラウドが入れ替わるようにセフィロスの前へと飛び込んで行く。

「来い、クラウド」

奴は待ち望むようにクラウドを受け入れる。

しかしただでは終わらない。

音速で前へと躍り出たクラウドの一撃により足場は崩壊。細かくなった足場は空中に散らばっていく。だがすでにセフィロスの姿はそこにはない。

次々天から降り注ぐ瓦礫の残骸へと飛び乗っていくセフィロスは、まるでクラウドを誘うように逃げていく。そう、逃げているのではない。追ってこさせるように仕向けているのだ。

「ッ!!」

クラウドは、さらに上へ。

爆速で空中へと飛んだクラウドはまだ空中にあるブロックの真裏、下面へとコウモリのように張り付く。

銀の厄災の脳天目がけて、刃の閃光が落ちていく。

「っ」

わずかに息を呑む音があった。

だが先ほどまでとは違い、次々に瓦礫が流動している中ではわずかな硬直すら許されない。だからセフィロスは下手に受け止めるのではなく身をひねってかわし、別の足場へと飛び移っていく。

結局クラウドの剣は瓦礫を崩壊させるだけで終わった。であれば、次の一手に出ればいい。追いかけるようにクラウドも別の足場へと飛び移る。

二人の体は互いに見つめ合うように真横に張り付く。そして眼光が交差した瞬間、二人は攻め合うように剣を振るう。一撃を与えれば二人の肉体は別の足場へと吹き飛ばされ、そしてまた二人は攻撃すべく互いに向かい合っていく。

変則的な空中戦が続く。

自分の攻撃が相手に届くかどうかなど、クラウドは気にも留めていないだろう。

そもそも、会話すること自体無駄である。

「お前に私は倒せない」

「っ!!」

「人の身程度の力で私の世界を掌握して圧倒しようなどと考えるのが、そもそもの間違いだ。この世界を抜け出したければ、最低でも世界を滅ぼす程度に己を鍛え上げてから挑むべきだったな」

その言葉を真剣に聞いてやるほど、クラウドには余裕がない。

戯言、挑発。

そんなものに惑わされるほど、こちらは追い詰められていない。クラウドはそれを証明するように、バスターソードに光を宿らせて再び迫る。

ガキンツ!! という重たい金属の噛み合う音がした。

互いの剣をぶつけさせて、力比べをしようとしている。だがしか

し、力では圧倒的にセフィロスの方が上だった。

「ほう。」

「ぐっ!!」

「まだまだ楽しめそうだな。どこまでやれるか試してからお前を倒してしまおうのもいいかもしれないな」

「黙れッ!!」

いい加減その口を黙らせてやる!!

そう言うようにクラウドは瞬間的に筋力を底上げし、セフィロスの力を上回ったところで吹き飛ばすことに成功した。

「キリト!!」

「ああ!!」

待機していたキリトが空中へと跳んでいく。

二つの剣の威力を合わせた二刀流の力を持つてすれば相手の肉体を砕くことが可能。吹き飛ばされたセフィロスが体制を整えるために別の足場に着地した直後、キリトはその隙を逃さないように一撃を入れる。まだ足場として機能していた瓦礫は容赦無く根元から突き崩され、セフィロスもまた上手く避けたようだが足運びを変更せざるを得なくなる。

一旦セフィロスは安定した足場へと、ふわりと浮遊しながら着地する。着地し、嘲笑うようにキリトを睥睨してくる。

「くそっ!!」

せつかく作ってくれたチャンスが無駄にってしまった。

だが予想はできていた。あの規格外のイレギュラーならばこの程度の攻撃なんて通らなくて当然だと。悔しい気持ちはあるが、そんなことを考える暇があるならば次の作戦を考えろ、そう思うようにキリ

トは気持ちを切り替える。

「ふ」

またかすかに嗤いが漏れる音が聞こえた。

今度は正確に、キリトに対して。

「身の程を知れ」

直後の出来事だった。

ゴオツ!! と。

世界が一瞬で赤く染まった。

「!?!」

三人は何が起こったのか、明確にはその原因を突き止めることは出来なかった。

しかし、視界に飛び込んできた情報だけで今起きていることを理解するには十分だった。

今もなお空間に漂う瓦礫は空高く打ち上げられ、ありとあらゆる建物が現実の常識から切り離され、この空間の頭上で容赦なく炸裂する。

いわゆる、重力の崩壊。

元からこの空間に重力という概念があったのかは定かではないが、今まで漂っていた物質は全て上へと運ばれていっていた。

その出来事に三人は目を奪われていると、視線は自然と上へと向けられる。

そして、その先にあったものを見てさらに三人は驚愕する。

全てを呑み込む炎の渦。

引力に捕まった威力で一瞬で膨張、大気圏に突入した瞬間に着火、広範囲を炎と爆圧で埋め尽くすというとんでもないものが迫ってきて

ていた。

核技術どころか世界すらも破壊する規模を持つ自然兵器。

夜の闇が吹き飛ぶ。

莫大な光と熱と音の洪水が小さな空間を埋め尽くす。

この世界が本物ならば、仮に事態を認識できていたとしても、把握はできなかつただろう。爆発によって爆発を食い潰す、すべての生命循環システムを破壊する、ろくでもない光景がひたすら広がる一撃。

隕石。

そのものが迫ってきていた。

「冗談じゃない」

吐き捨てるように、キリトは呟いた。

それはすぐに大きな声になった。

「冗談じゃないぞくそツ!! ゲームのシステムすら無視するなんて、ふぎけてるにもほどがあるツ!!」

「なに、これ一体どうなってるのツ!?!」

キリトとアスナの二人は常識を越えた事態についていけなくなっている。当然といえば当然だが、ゲームの域を越えてる光景を見て二人はもう混乱どころではない。

「何なんだよ、あいつ何したんだ!?!」

「見てわからないか?」

「!?!」

「隕石を呼んだ。ただそれだけのことをしただけだ、あいつは」

クラウドは簡単なことのように言うが、キリト達は思わず絶句していた。



「そもそもこの世界はあいつの思惑通りだ。その中にいる時点で、俺達は不利な状況だ」

隕石を呼ぶ。言葉遊びなら簡単だが、それはつまり自然現象の理屈を覆すことを意味している。今更ながら、キリト達は改めて理解した。

今起きている現象の凄まじさにピンと来ないなら、『世界を終わらせる力』とでも思えばいい。例えば地球の地軸がわずか10度ズレただけで地球上の動植物の四分の一は絶滅するし、地球の自転を止めれば世界は滅亡する。

隕石なんてものが飛来すれば、地面はその圧倒的な威力で重力すらも隆起させ、地球表面の地殻が丸ごと吹き飛ばされて跡形もなく世界を呑み込むのだ。

それをやってみせたのが、目の前にいる相手。

それはつまり。

この世界を支配しているセフィロスは、好きな時に好きな場所で、こうしたいと想い望んだだけで、この世界を壊すことができるということだ。

「なんだよ、それ。ゲームマスターである茅場のアバターを乗っ取っただけでそんなことまで可能なのか!？」

「無理だ、人の力だけでは」

鋭利で冷たい刃のような声は、この世界の支配者の本人だ。

「この世界には、何人もの死者の思念が渦巻いている。それは怨念となつてこの世界を巡り、やがてこの世界を侵食する。世界を憎むもの達の願い、それらを加護として利用すれば容易く世界を望む姿へと変えられる。死者達の願い、『この世界を壊したい』というな」

「!?!」

「楽しむべきはずだった者達は、理不尽によって命を落とした。その

際に残った思念の多くは、『こんな所に来なければよかった』という願いがほとんどだった。『こんな世界に来たばかりにこんな目に遭った。こんな世界ははじめからなければよかった』という怨念は次第に願いとなった。願いは明確に形を成していき、やがてそれは正確になった。『このふざけた世界を壊したい』という死者達の願い。私はそれを利用していただけだ」

そう、『神』という位置にいるアバターを取り込むことによつて。と、付け加えるようにセフィロスは言った。

正直、意味がわからない説明であった。何を言っているのかわからない。ゲームマスターを取り込んだことによつて神になり、その概念を利用して人々の願いを叶えるなんて幼稚な説明をしているつもりなのかもしれないが、あまりにおかしな所が多すぎて理解ができない。

いや、そもそも理解ができないのが当たり前なのかもしれない。考えてもみろ、あいつは現実で何をしでかした？

宇宙からやって来た災厄、『ジェノバ』を自分の母だと勘違いした挙げて句、自分は選ばれし者で星を支配するに相応しい人間だと思ひ込んでメテオを発動させた。その後、倒されてもなお思念として蘇り、今度は星を船として宇宙を旅するなど抜かしやがった。

そんなやつの思考をまともに理解しようなんて最初から無理な話だ。

一々付き合ってたらキリがない。

「私はただ望みを叶えているだけだ。この世界に散っていった者達の願いをな」

それでも天使は続ける。

もはやなんの弁明もせず、ただ己の一方的な話を聞かせるように右手を天上へと振りかざす。

ゾクンツ!! と心臓を貫くような悪寒。

頭上の隕石が、一際大きく赤く輝いた。

風は熱風へと変わり、音は破壊へと変化し、大気は世界を飲み込む。セフィロスは己が作り上げた惨状を見渡す。世界を漂っていた建物は熱風の塊に舞い上げられ、列車もノーブレイキで辺り構わず激突して崩れていく。無数の鋼鉄がぶつかり合う景色の中、片翼の天使の嘲笑だけが仮想空間に吹き抜ける。

隕石の周りにはうつつすらと、複雑な紋章を描くように様々な光の筋が走り回っている。

数式のような魔方陣。

難解な理論が絡む複雑な計算を組み立てる事ができる茅場の頭脳と史上最強のソルジャーの力、そして人々の願いを増幅させて生み出した究極魔法。

人間一人の力で出来た技ではない。

世界を動かすことが出来るアバターの権限を手にした代償を思う存分に使うセフィロスは、ついに笑いだした。鼻で笑うのではなく、口を歪めて。

「母さん」

セフィロスは落ちてくる隕石を抱くように両手を上げて頭上へと吼える。

周囲の闇の全てが赤く染まりつつある中でも、奴の信念は揺らがない。

摂氏一万度もの高熱の余波が、三人の皮膚に火傷のようなジリジリした痛みを植え付ける。

「ッ!!」

熱いはずなのに、クラウドの背筋に悪寒が走る。

一刻の猶予もない。

あれはもう、防ぐことのできる一撃ではない。そんなの馬鹿でもわ

かる事実だ。触れた瞬間に蒸発してしまうような高熱の塊など、もはやこんな電子で作られた体で対抗しようと考えること自体が馬鹿らしい。

クラウドは一度あいつに勝っているというのに、勝てるビジョンが見えてこなかった。

ソルジャー。

星を救った英雄。

たとえやめろという悲痛な叫びを奴にぶつけても、あの片翼の天使は一片も動じないだろう。なにせ、奴にとってはクラウドが苦しむところこそ最高の娯楽なんだから。

おそらくもう、あいつには理屈は通じない。あいつが実体を持った時点で、因果はいつからか狂ってしまったんだろう。

今のあいつには、『目的を果たす』というたった一つの命令文しか存在しない。

クラウドは犬歯を剥き出しにして頭上にいるセフィロスを睨み付ける。

もはやあの隕石を止めることなど不可能。まだ落とすまでには至っていないにしてもあの隕石自体を止めるのは物理的には無理だ。止められないなら、それを扱う術者を止めるしかない。仮想空間で使われた魔法は、いわばプログラムを組み立てる途中の段階。あの魔法がまだ発動段階なら、術者を止めれば発動を妨害出来るはずだ。

だが、

「くそッ！」

それすらも不可能に近い。

一番簡単な打開策が目の前にあるというのに、それが難しいという事実にも奥歯を噛み締める。

奴がそう簡単にくたばるはずがない。

強さは規格外。戦うだけでも一苦勞。倒す前に魔法が発動してしまつては意味がない。

そんなクラウドを、セフィロスはまるで一つの高みから泥の中でも  
がく害虫を嘲笑うように言う。

『ゲームオーバー』だな。クラウド」

その視線に危機感はない。哀れみすらも感じられない。ゲームを  
楽しむのに、そのような感情は無用なのだから。

「」

二人を後ろにし、前へと一歩出る。勇敢な行動に見えるが、実質そ  
れは無謀でしかない。

クラウドの体から、湧き出るように汗が噴き出ている。

天使との実力差はもはや人の手で埋められるようなものではない。  
手を伸ばしても届くかわからないその先に、奴は待ち構えている。

まさに、ラスボス。

勇敢な勇者の前に現れる最後の刺客。

「クラウドさん」

と、アスナが静かにクラウドの名を呼んだ。クラウドはその声に振  
り返った、その時だった。

バチンツ!! と、唐突に右頬に鋭い痛みが走った。

外部からの攻撃。そうと気づいた時には、クラウドはわけのわか  
ない一撃を感じながら右頬を押さえていた。

アスナが左手で、自分の頬を叩いたのだと自覚する。

「???

してるのに、出てくるのは疑問ばかり。

意味がわかっていないクラウドに、アスナは真剣な声色で言う。

「落ち着きましたか？」

「！」

「さつきから勝手に一人で抱えて、一人で勝手に葛藤しないでください。忘れたんですか、ボスは一人で挑むものじゃありません。チームで挑むんですツ!!」

「!？」

「少しは私達を頼ってください！ 私達だってプレイヤーなんです！ 私達だってクリアするために戦ってるんです!! あなた一人で攻略してるわけじゃないんですから、少しは私達も協力させてくださいツ!!」

唐突なアスナの力説にクラウドは思わず馬鹿みたいにポカンと口を開けた。

アスナの説得を受けてなお、理解が追い付いていないクラウドはしばらく自分が思考を働かせていることに自信が持てなかった。

「アスナの言う通りだぞクラウド」

「!？」

そんな空気に乗っかるように、キリトはクラウドの肩に手を置きながら簡単な調子で言う。

「俺達はプレイヤーだ。いくら第一層のボスをたった一人で倒したことがあるからって、一人で勝手に突っ込んで勝手に追い詰められてるんじゃない意味がないだろう。俺が言えた義理じゃないが、仲間に頼るっていう基本すら忘れたのか？」

「。」

「あの時言っただろ、ボスはたった一人で倒すように設定されてない。お前にこういうことを言っても仕方ないと思うが、今回ばかりはボス戦には参加してもらおうぜ。今までフロアボス攻略に参加しな

「かった分、きつちりと協力してもらおうッ！」

参加させてもらうのではなく、参加しろという命令文。

二人は自分達の意見を告げると、クラウドよりも前へと出る。

二人の背中はその以上、なにも言わなかった。クラウドに自分達の意志を告げるのに、それ以上の言葉は必要なかった。

剣を構え、自分達も戦うという姿勢をクラウドに見せつける。

「」

クラウドは、愚かだったのかもしれない。

個人のわがままで第三者を巻き込まないようにしていたのに。力の差がありすぎるが故に、まだ現実で本物の剣を持って化物に挑んだことのない少年少女達に無理を聞かせるのは気が引けたというのに。

「あれを止めるには、もうあいつを倒すしかない」

頼むしかない。

「時間も無いし手強い相手だ。一気に方を付けなければすぐにゲームオーバーだ」

頼むしかない。

「俺一人じゃもう手に負えない……だから」

親友から受け継いだバスターソードを拾い上げるように構え直し、絞り出すように、クラウドは口を動かす。

一点を見据える。

やるべきことは変わらない。いつだってそうしてきたはずだ。

異世界からの乱入者は化物を狩り続け、ゲームプレイヤー達はクリ

アを目指してきた。

だから、

「もう一度お前達の力を貸してくれ、決着をつけるぞ」

「ああ!!」

「はい!!」

ずっとその言葉を待っていた。

ようやく、たった一人で攻略したプレイヤーから洩れ出た言葉に、二人は思わず笑みを浮かべる。

協力を求めたクラウドの期待に応えるように、二人はもう一度、どこまでも強く固く。

剣をしっかりと握り直した。



## 第20章

片翼の天使と三人は十メートルの距離を空けて対峙する。

隕石が迫ってきて落ちてくれば即ゲームオーバーという、時間制限付きの戦場になってもそれらを引き裂くように彼らは動く。

セフィロスが左手を振るった。

右から左へ。

その動きに合わせて目に見えない衝撃波が動いた。空間を突き抜ける攻撃は形を崩すように津波となって横一線に全てを薙ぎ払っていく。

ドツ!! という轟音が炸裂する。

「ツ!!」

クラウドは咄嗟にバスターソードを構え、二人を守るように防ぐ。

そこを境に、破壊の渦が後から追いかける。この空間は今もなお破壊をしつくしているというのに、その左右に建つ崖のような建造物をまとめて抉り取り、列車やら瓦礫を吹き飛ばし、建物そのものを斜めに傾がせる。

しかし、それは剣で防げる攻撃。

喰らえばひとたまりもないが、当たらなければどうということもない。

「キリト、アスナ!!」

クラウドは叫び、彼らの返事を待たずにセフィロスの元へと走り出した。

セフィロスの攻撃をこちらで引き付け、その間に二人がセフィロスの懐に潜り込む。最も効率的なパターンで攻めていく。

何故そんな戦法で挑むのか、それはセフィロスがクラウドにしか興

味がないからだ。

他の二人など、奴にとつてはただの路傍の石ころ。ならば、クラウドが引き付けている間に二人が攻撃を加えればいい。それに合わせるように、クラウドもまた戦闘に加われればいい。

二人はそのクラウドの行動の意味を理解し、首を縦に振ると、二人は左右に分かれるように走り出す。

一方、セフィロスの方も思惑通りにクラウドに注目したらしい。

「面白い」

ニヤリと嗤いながら、セフィロスは正宗を振るう。

上から下へ。

その動きに合わせ、衝撃波は縦一線の軌道を描き、その鋭い一撃がクラウドへと襲いかかる。

「ふッ!!」

クラウドはどうかそれを弾き飛ばすが、あまりの威力にどうしても防御に集中してしまつて一瞬の硬直が生まれてしまう。

が。

ヒュ!! と。

そんなクラウドをアシストするように、二本の剣と細剣を携えたキリトとアスナが走り抜けていく。

「ふん」

セフィロスの正宗が二人へと向けられる。

ビュン!! という膨大な音が耳を打つ。

横薙ぎに一直線に放たれた刃を、しかし二人は上半身を振るようにして避けた。それでいて、二人の足は止まらなかつた。二度、三度と放たれる必殺の一撃を的確に回避しながら、剣を構え直して懐へと飛

び込んでいく。

最初はアスナからだった。

「ハア!!」

一度後ろへと引かれた細剣が、勢いよく前方へと突き出される。

セフィロスはその細剣を、横薙ぎの正宗で弾く。

さらに逆方向へと刀を動かし、今度はセフィロスの攻撃が横からアスナを狙う。カウンターののように放たれる刀は、アスナの首もとを正確に捉える。

「させるか!!」

が、その一撃を止めるべくキリトが割り込む。

正確な軌道を描いていた正宗はキリトが弾き返したせいで後ろへと引かれ、そのタイミングを見計らうようにキリトは弾く返す際に振るった剣とは反対側の剣をセフィロスに突き出す。

セフィロスはそれを無理に受け止めようともせず、斜め後ろに跳ぶように後退する。そうしながら正宗を後ろへと引き、力の溜めを作ってから一気に振り払う。

「せいやッ!!」

並みの人間ならバラバラにされてもおかしくない状況だが、少年にとってはその攻撃はもはや見慣れた一撃だった。

フロアボスとの戦いで培った戦闘経験は動体視力と反射神経のレベルを上げている。

キリトは二本の剣を交差させて防御の体勢を取り、周りの瓦礫が派手に吹き飛ばされるが、二人とも五体満足のままだ。

「今だ!」

「ええ！」

キリトに呼ばれてアスナは即座に前へと出る。  
しかし、キリトが防御の体勢を取ったせいか、すでにセフィロスは  
体のバランスを取り戻している。

故に、だ。

「ハァー！」

「ふ！」

セフィロスの表情は変わらなかった。

ただ口元を歪ませただけで、あとは正宗を前へと突き出しただけで  
あった。倒すために突き出したアスナの細剣だったが、片翼の天使に  
かすり傷を負わせることすら出来なかった。

「目障りだ」

「ッ!？」

セフィロスの首が滑らかに動き、縦に延びている瞳孔でアスナを見  
据える。

直後。

ゴッ!! という衝撃が腹に突き刺さる。

「がはっ!？」

アスナは襲い来る痛み思わず口から液体が溢れ出るが、それは無  
色の液体であった。

アスナの腹に突き刺さったのは正宗の刃ではなく、楕円形の金具が  
嵌められた柄頭であった。突き刺されて絶命することはなかったが、吹  
き飛ばされたアスナは地面を転がっていく。

「~~~~ツツツ!!」

アスナは痛みにも耐えつつも、靴底を滑らせて摩擦を利用して体その場で停止させる。腹の内側に重い衝撃が残っているが、耐えられない痛みではない。

「アスナツ!?!」

「だ、大丈夫ツツ!!」

まだ剣は握れる。

そう言うかのように、アスナは剣を杖代わりにして立ち上がる。痛みは残留しているものの、次第にその痛みも引いていくだろう。それまでは一時的に安静が必要。

アスナの無事を確認したキリトは、再びセフィロスに刃を向ける。セフィロスは相変わらず舐めたように片翼を羽ばたかせて睥睨している。

「ツ!!」

舐めやがって、とキリトは歯噛みしてセフィロスを睨み付ける。

が、セフィロスはそんなキリトに対してまるで害虫を見下すような視線を向け、嘲笑を注ぐような口調で言った。

「無駄な足掻きだ」

「!?!」

「受け入れろ」

「ツツ!!」

身を強張らせるキリトに、セフィロスは凶悪な笑みで応じた。嗤って、正宗をその喉元に突き付けるようにして挑発してくる。

そんなセフィロスに歯噛みするキリトであったが、その瞬間、セ

フィロスは何故か怪訝な顔をした。

直後だった。

斬撃が来た。

真横からの一撃。

距離など関係なかった。壁を貫くように現れた翠玉色の衝撃波はキリトの真上を通り抜け、セフィロスだけでなく、その足場をも大きく削り取るように放たれる。

ズバツ!! という空気を切断する音が、後から遅れて響き渡る。

紫電のような瞬き。

それは、あの何でも屋が得意とするシステム外の必殺技。

「ふん」

セフィロスの笑み。

薙ぎ払われた一撃の出所がわかった途端に口角を上げると、あまりにも巨大な衝撃波を、セフィロスは呆気なく真下からアッパーカットのような鋭い剣撃を見舞った。

結果、クラウドが放ったであろう攻撃はわずかに軌道が上に逸れ、セフィロスの頭上で突き抜けることになり、鉄筋コンクリート性の建物に勢いよく突き刺さった。

「くだらんな」

その一撃を放った人物を視界に入れると、セフィロスはまたもや鼻で嗤う。

それに対して、遠くから一撃を放ったクラウドは思いつきりジャンプしてキリトの真横に飛び降りてくると、からかうような口調でこう言った。

「行けるか、キリト?」

「ああ・当然だ!」

そう言つて。

何でも屋と黒の剣士は、互いの背中を合わせて剣を構え直した。並んで立つ二人の姿。

個人の戦鬪ばかりをしていたもの同士が、ついに肩を並べる。

もはや、注意深く互いの目を見ながら語る必要もない。クラウドはぞんざいな調子で信頼を預けるように、キリトに対してただ一言こう言つた。

「行くぞ!!」

「ああ!!」

「ゴバツ!! と大地が裂けた。

二人が同時に駆けたことで、地面の方がその圧倒的な二人の力に耐えきれなくなったのだ。

「ハア!」

セフィロスもそれに応じる。

生き抜くために剣を握りしめるクラウドとキリト。永遠に思い出に留まることはないセフィロス。

両陣営の剣士達は互いに睨み合い、そして直後に躊躇なく激突する。



クラウドは右から、キリトは左から。

それぞれ回り込むような挙動で、もはや肉眼で追い掛けるのも難しい速度で、彼らは片翼の天使の元へと進み剣を振るう。

「ふんっ!」

対して、セフィロスはやはりというべきかクラウドの方へと反応した。

全長がクラウドの身長に匹敵するバスターソードを身を捻って回避すると同時、その動きを活かして正宗を横回転するように振り回す。

「消え失せろ」

セフィロスは超至近距離で、クラウドにささやく。

直後。

「舐めるなッ!!」

ゴッ!! と二つの斬撃が激突した。続けて放たれた袈裟斬りに、クラウドもバスターソードで応じる。しかし、ただ応じたわけではない。次の一手に繋げるためにただ弾き返すだけで終わらせない。

クラウドの破曉撃は剣から気を飛ばして遠距離攻撃が出来る技だ。クラウドの剣とセフィロスの刀が叩き合ったその瞬間、クラウドのバスターソードから衝撃波が生まれ、そのままセフィロスの持つ正宗へと振動が伝わっていく。

「っ!?!」

今まで一方的に振るう側だったセフィロスが、予想外の反動に驚愕する。

剣と刀がぶつかり合って生まれたクラウドの破曉撃は正宗の刃によって貫通することはなかったが、衝撃波の威力を受け止めたことによってセフィロスの体を強引に後ろへと押し出していく。下がるといふより地面を削りながら滑るような動きだが、そこはまだ両者の射程内。



続けて互いの一撃が走る。

「ハアッ!!」

「ッ!!」

剣の大きさなど気にならず、武器ごと致命傷を与えようと攻撃を放つ二人の超人兵士。二人の力はほぼ互角で、わずかな差で勝敗が決することはない。

だが、

「せいやッ!!」

「ッ!!」

そこへ、真横から二本の剣を携えたキリトが突っ込んだ。右手と左手を互いに反対方向へと振り上げ、振り下ろす際に交差させてバツ字を描かせる。

まともに食らえば相手は両肩から胸に、そして両足と腰の境目部分まで潜り抜けて身体は四つに分けられる一撃に対し、セフィロスは土壇場でキリトの剣の軌道を捻じ曲げ、これの防御に当てる。

当然ながら、そうするとクラウドの攻撃に身を晒す羽目になる。

しかも、ダメ押しと言わんばかりにキリトも力を振り絞って剣を再度振り下ろす。

「うおおおおおおおッ!!」

二人の雄叫びが重なってビリビリと戦場を高揚させる。

「ッ!!」

セフィロスはそんな声に一々反応を示さず、まずはクラウドの腹に鋭い蹴りを突き入れて、わずかに剣の軌道を曲げる。

「がはッ!？」

剣は不安定な軌道を描き、ギリギリの所をバスターソードが通過するのを待たずに正宗と拮抗するキリトの剣を弾くと、追撃から逃れるために大きく後ろに跳び下がる。

あの怪物がやるとは思えない全力の回避。

しかし二人はそれを黙って許すことはない。

「ハアッ!!」

「セイヤアッ!!」

「ッ!!」

火花の嵐が下がるセフィロスを追うように向かっていく。

腹の痛みを根気で抑えつけ、キリトと共に連撃を繰り返していく。

様々な角度から迫る攻撃に対し、セフィロスは長いリーチが取り柄のその正宗を振るい、次々と受け止め、いなし、弾き返す。

対するクラウドとキリトも、優勢を構築しようと剣を振るい続ける。

三者の斬撃が続く。

会話はおろか単語の発音すら許されぬ世界の中、クラウドとキリトの連携は切り崩されることなくセフィロスに攻撃を仕掛けていく。セフィロスの正宗と二人の剣は何度も交差していき、終わることのない追い討ちが炸裂する。

セフィロスはなんなく弾き返しているように見えるが、肩から首筋にかけて筋肉が強張るのを自覚する。

「」

笑みは消え、もはやセフィロスは二人の斬撃を受け止めることに集中している。

それほどまでに、二人の連携は上手く合わさっていた。クラウドの一撃は重くそして早い。キリトの攻撃は一撃はクラウドよりも弱いものの彼よりは素早かった。両者が得意とする技を余すことなく繰り出していくその連携に、セフィロスは一瞬眉間に皺を寄せる。

セフィロスの中に、『何かよくないもの』が芽生え始める。

二人の剣を受け止めることに、その『何か』は明確な形を為していない。両者の攻撃のその一つ一つが、的確にセフィロスを削り取り、その内側にあるものを浮き彫りにさせていく。

攻撃の流れを弾いても、その流れを止めることは出来ない。

何故だ、とセフィロスは思う。

彼の力はこの世界では威力を増すはずだ。そして、今のセフィロスはこの世界の創立者であるアバターを取り込んだことによつて更なる力を得たはず。世界最強のソルジャーと世界最高の頭脳を持つアバターを組み合わせ、適切な性能を引き出すことに成功しているのだとすれば、セフィロスは間違いなく無敵といえる戦力を保有しているはずだった。

だが、

「何故」

ポツリと、セフィロスは呟いた。

彼は二人の連携を崩すべく、正宗を振りながら掴み直す。

隕石ももうすぐそこまで来ている。

隕石の残骸の一部が雨のように降り注ぎ、鉄筋コンクリートで作られた建造物の塊が次々に倒壊し、クラウドとキリトの立つ足場にも亀裂が走る。爆風が圧力を伴って四方八方へ撒き散らされ、セフィロスでさえ、思わず片翼で顔を庇うほどの破壊が吹き荒れる。

しかし。

クラウドとキリトは倒れない。

何故だ。

こいつらにはそんな力はなかったはずだ。

いつまでこいつらは剣を握り続けている？

二人の剣はいつになっても止まらない。二人の視線と天使の視線が交錯する度に、二人の瞳の奥で強大な何かが灯り続けている。

望んでいた悲劇がもうすぐそこまで迫ってきているというのに、何故二人は諦めようとしない。

天空が、大きく開く。

時間切れまでもう僅か。

もう無駄な足掻きだとわかっているはずなのに、先程からずっと変わらない展開を繰り返している。

二人のそのしつこい姿勢に、セフィロスは思わず怒りのような感情を抱く。

「な」

怒り、とは？

何故、そんな感情を抱いた？

こんな奴ら簡単にねじ伏せられるのに、何故そんな感情を今感じてしまったのだろうか。

瞳の揺らぎが消える。瞳孔は縦に伸びて固定される。光を反射させるだけのものへと変わっていく。

セフィロスの常識に亀裂が入る。

思考に邪魔が入る。変わらぬ展開の最中に、予想外のノイズが入り込む。

余計な思考が、セフィロスの勝利の確信を鈍らせる。  
ゼキイイイイツツツ!!! と。

唐突に、セフィロスの頭の奥から凄まじい頭痛が迸った。

「な」

思わず、思考が止まった。

その出来事は些細なものかもしれないが、そこには重大な意味があ

る。

勝利の前提が崩れ去った。

セフィロス自身が構築していたその傲慢さからくる勝利への確信。唐突に抱いた感情によってその考えに揺らぎが生じ、自分自身でその勝利を疑い始めたのだ。

二人の剣はもしかしたらこの身に届いてしまうかもしれない。

たったそれだけをわずかに考えてしまったが故に、動きを遅らせてしまうという事態に陥ってしまった。

そして。

そして。

その余計な感情がセフィロスの中で発生した瞬間を見計らうように。

戦況はいよいよ終焉へと向かう。

「クラウドさん!! キリト君!!」

「!?!」

「スイツチツ!!」

そう。

我らが『閃光』の異名を持つ少女によって。

◇◇◇◇◇

アスナはセフィロスを見た。

長い刀を振るい、莫大な攻撃を次々と振るう天使。戦場という名前の巨大な台風の目として、決して人の波に呑み込まれない化物は、もはや楽しむことすら必要としない。

今のセフィロスには、天使という言葉が似合わない。

悪魔。魔人。化物。

そういうのが正しい気がする。

自分の欲望のために他者を利用するその傲慢さ。それはどこか、茅

場と似ている気がした。己の野望のためなら他人がどうなろうと知ったことではない。目標達成こそが全ての願い。

彼が茅場のアバターを依り代としたのはつまりそういうことなのだ、アスナは漠然と知った。

似た者同士の思考。セフィロスに近いものが茅場だった。ただそれだけだったのだろうと感じた。

その時だった。

「ハアツ!!」

「っ!!」

セフィロスの眉間がわずかに寄った瞬間、一瞬の硬直時間が生まれた。長く戦っていた二人の攻撃はようやく意味を成した。

その隙を、血盟騎士団の副団長を長くやっていた彼女が逃すはずもない。

だからアスナは、決着へと持ち込むために迷うことなく叫んだ。

「クラウドさん!! キリト君!!」

「!?!」

「スイツチツ!!」

「ツ!!」

それは合図だった。

アスナの叫びに、屈強な何でも屋と黒の剣士は応じた。

彼女の想いの強さを知っていた二人は、アスナの意志を即座に理解した。言葉を交わすことなく、作戦会議すらもない。そんな余裕はなかったし、言わなくてもやるべきことはわかっていた。

二人が後ろへと下がると、アスナは強大な磁力にでも引かれるように地面を蹴って勢いよくセフィロスへと向かっていく。

アスナはこの世界に来てから変わった。

この世界に来た時は全てに絶望し、何もかもが嫌になって自暴自棄

になり、死に急ぐように戦っていた。

いつ死んでもいい。どうせ生還なんて夢のまた夢。

考えるだけ無駄だと思っていた。

なのに、それら全ては単なる自分の被害妄想であることを知った。『あの少年』と出会って、アスナは変わった。少年との出会いは運命とも言える。あの時出会わなければ、アスナは今もなお冷たい性格で、先を見ずにただ突っ込んで無謀な戦いを続けるだけの存在になっていただろう。救いのない世界で生きるのは辛く残酷だ。それを背負ってこの世界を生き抜くのは無理がある。

その認識を彼は変えたのだ。

共に戦ったことで、まだ剣を握りしめることが出来る。

アスナがここに来て変わることが出来たならば、この世界は美しいものだと思えたはずだ。とてつもない試練や苦難にぶつかっても諦めることはなく、真っ正面から挑んでいくことが出来たのは、この世界に来たおかげ。

そして、大切な人と出会えたのもこの世界に来たおかげだ。

そんな世界を個人的な願望や欲望によって歪めるようなことをする者がいるならば、黙っているわけにはいかない。

だから、迷わず放つ。

世界を歪める元凶へ、鋭い一撃を。

「イヤアアアアッ!!」

裂帛の気合いと共に突き技を放ったアスナの細剣は、真っ直ぐセフィロスの胴体へと直撃した。

先端は正確に射貫き、天を衝くような閃光が炸裂する。

セフィロスは強制的に後ろへと押され、強引に体勢を崩されてしまい不安定な足場の上で身体を揺らす。

その際に出来る一瞬の硬直。

セフィロスはそれを確認している暇もなかった。

「スイッチ!!」

「うん!!」

そのタイミングを逃さず、キリトは大声で叫んでセフィロスの正面へと二本の足を使って全速力で前へと駆ける。

セフィロスは目と鼻の先だ。

こちらは幸い、未だ五体満足を保っている。一步、たったその距離を強く踏み込めば剣が届く距離に来て、キリトは短く息を吐いた。タイミングを見計らって極限の緊張を少しでも削ぎ、全体重を乗せてセフィロスの身体に迷わず狙いを定める。

「フンツ!!」

素直に攻撃を受け止めるはずもないセフィロスはその長い刀をキリトの胴体にお見舞いしようと振るわれる。

それも素早い速度、一瞬とも言える早さで。

雑草を刈るような他愛もない勢いでキリトを絶命させようとする。

「ハアツ!!」

だが、キリトはそれ以上に早く両手を動かした。

キリトは長年の相棒である『エリユシデータ』で受け止めると、今まで攻撃を受けた分をお返しするように、止まない攻撃を連続させる。

受け止めた剣と反対側の『ダークリパルサー』で腹を切り払う。数秒の間も許さずに次の一撃を入れる。

右、左、右と。

それぞれの剣の力を爆発させ、脳内が焼き切れるほどの速度で振るい続ける。

処理速度を超えて、もっと早く。  
早く。



■ 甲高い効果音を響かせながら、二つの剣を次々と振るう。

「ッ!!」

■ セフィロスの身体が星屑のように飛び散る。

■ 反応が追いつかない。

その事実を認識するかしないかのところで、セフィロスの身体はわずかに揺らいだ。体勢を整えようとしているのだろうが、キリトの攻撃は止まることはない。襲いかかる『二つの剣』がセフィロスの身体を貫通していく度に、セフィロスの右腕が真つ正面から吹き飛ばされた。

白光の塵が舞う。

かろうじて受肉していたセフィロスの身体が依り代を失い始め、苦しげに身を振るわせた。

そう。

これがキリトの隠し技、エクストラスキル『二刀流』の本領。

その上位剣技、

「スターバースト・ストリィィィィィムッ!!!」

キリトは絶叫しながら左右の剣をセフィロスの身体に叩き込み続ける。

限界を超える。

全身をアドレナリンが駆け巡り、剣を動かす度に脳神経を麻痺させる。現実の頭脳が処理速度についていけずに悲鳴を上げようとも、キリトはシステムを上回る速度で攻撃を放ち続けた。

「ハアアアアアアッ!!」

力を振り絞って最後に放った十六撃目が、セフィロスの胸を突き刺した。

「な、に?」

得体の知れない激痛が雪崩のように襲いかかってきたのか、顔の皮膚を乱雑に歪めながらセフィロスは声を漏らす。

別に、キリトの力が増幅されたわけではない。

キリトはあくまでもキリトというただの人間でしかない。  
なのに。

それを超える力を持つセフィロスは、その小さな少年に押し負けてしまった。

セフィロスは勢いよく胸を突き刺されたことで後方へと吹き飛ばされ、空中で身動きが取れなくなる事態に陥ってしまう。

片翼の翼は空中に浮遊するのはもちろん、空間を自由に動き回れることができる便利な代物だが、ダメージを受けたセフィロスの身体はスパークしたかのように動けなくなっていた。

「ぐっ」

それはキリトも同様。

剣技の余熱によって眩暈を引き起こし、キリトは全身の力が抜けるのを感じるとその場に膝をついてしまう。

まだセフィロスは身体を失っていない。

まだ戦いは続いている。

「あとは」

ならば、ラストアタックを決めるのは、

「任せました」

キリトでも、アスナでもない。



ズツドオオオオオオオオオオツ!!

轟音が炸裂した。

何者の攻撃も受け付けなかったセフィロスの凶体にバスターソードを叩き込んだクラウドは、そのままの勢いで強敵を薙ぎ倒す。

この世界へこびりつこうとしていた『片翼の天使』の残滓は、空気に溶けるように今度こそ完全に消滅する。

同時に。

その瞬間世界から、あらゆる景色が消え失せた。

## 第21章

全ては漆黒に染まっていた。  
何の脈絡もなく。  
世界はパズルのピースのように崩壊したのだ。

「ッ!!」

言葉を発することは出来なかった。とっさに出そうとした言葉は恐怖よりも先に疑問や理不尽さが先行したらしい。

空間中の空気が歪んでいる。  
まるで魚眼レンズ越しに暗闇の景色を見ているような現象は、かつて一度経験したことがあった。

クラウドの持つバスターソードへと激突した『片翼の天使』は、そこで全ての常識を覆すようにして世界の軌道を大きく変えた。空間そのものがバラバラと散らばる。元へと返る前に、世界は完全に空中分解してしまった。

だが、起きてしまったことはどうにもならない。思わず何かを掴むように虚空へと手が泳ぐが、もう完全に体重は未知の引力に乗ってしまっている。修正することは叶わない。

青年の身体は暗闇のトンネルを駆け巡る。

仮想空間が生み出す凶悪な重力が死へと誘う鎖となって、引き込むべくクラウドの全身を握り取っていく。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ギギギギギギギギギギギギギギギギギギギギギギギギギッ!!  
と。

世界の軋む音が響いてくる。

クラウドの身体は流れ星のように暗闇の中を突っ切っているが、彼

はわずかに視線を上げた。一人称視点から見れば上を向いていると表現できるが、体勢から言えば視線は下へと向いている。

そこにあるのは、

「ッ!!」

下から吹き上げる擬似的な風圧を無視して、二本の足を揃えて着地に備える。

激突の寸前で、足の裏を地面につけるように一回転をして身体を元の体勢に戻す。着地時の勢いを殺すために足をつけた瞬間に膝を曲げ、着地の衝撃を逃がすことに成功する。

が、

「ツツツ??  
!!!」

地面について体を支えていた足の先端が滑る。

着地には成功している。だが、その次の瞬間にザザツ、と頭の内側で何かが悲鳴を上げた。頭の中の血管が異様に膨らむ。神経の流れが不気味な脈動や苦痛と共に意識の表面へ浮かび上がってくる。

両手で割れそうな頭を支えて、限界を超えた痛みから脱却するべくヤスリで削ったような擦れた息を吐き出して荒い呼吸を繰り返す。

これ以上は堪えられない。

頭が燃え上がるように熱くなっている。

「ぐッ!!」

ぐらぐらと揺れる視界が定まらない。

うずくまって大口を開けてありったけの力を込めて呻き声を咆哮するのが精一杯であった。

「キリト アスナ ッ!!」

それは、助けを求めているようにも聞こえた。

本来は仲間を心配して呼びかけるための言葉だったのだろうが、苦しみのあまり救いを求める声に寄せてしまっていた。

しかし、どこからも返事はなかった。共に歩んできた仲間達がいなくなっている。いや、ひよつとしたら世界から消失しているのは彼らではないのかもしれない。異世界からの乱入者であるクラウドこそが消えてなくなっていくのかもしれない。

そしてどこかから声が聞こえてきた。

「気をつけろ」

「!？」

遠い過去の中にあったのと同じ声色だった。

いや、そいつはもう何年も変わることはないだろう。記憶どころかそれすらも超えて具現化してくる奴は宣言通り思い出に留まることを知らない。

銀と灰色の影が視界に映し出される。

それはどこか不明瞭で、ノイズまみれになったその集合体をクラウドは自然とこう呼んでいた。

「セフィロス」

「もうここから先は、『俺達』の世界ではない」

俺達の、とはどういうことか。

このいくつもの星が異形に繋がった未知の空間にいるこの場所か、先程戦闘を行っていた場所の事か。

「ッ!!」

クラウドは思わず後ろに下がる。

頭痛はいつの間にか治まっており、思考回路も何の問題なく働いてくれていたお陰で冷静に判断できた。

今、確かにこいつは自分のことを「俺」と呼んだ。

そこに何の意味があるのか、しかしクラウドは深く考えなかった。

「我々の星は、別の星と繋がった。その影響で、俺達は今世界の先端とも言える場所に立っている」

闇の中で二つのシルエットが浮かんでいる。

一人はクラウド。

一人はセフィロス。

今まで音速を超える勢いで動いていた彼らは、ピタリと静止していた。セフィロスの長刀はやる気もなくなった下へとだらりと下げられるような体勢で宙に固定され、クラウドのバスターソードは背中へといつの間にか納められていた。

そもそも、あれだけ共に猛威を振るっていた黒の剣士と閃光の細剣使いも、ここにはいなかった。

まっとうに考えれば、いつ戦闘が開始してもおかしくない状況。

しかし、今はそんな空気ではない。

闇に隠れる二人の表情は対照的になっていた。

苦悶と超然。

どちらがその表情を抱いているのかなど、二人の立場からしてすぐにはわかると思う。今までの戦闘のことなどなかったかのように喋り出すセフィロスに、クラウドは思わず引いてしまう。

「俺は、消えたくない」

「↓」

「お前を、消したくはない」

先程から話している内容が支離滅裂な上に一方通行で何を伝えたいのかかわからない。



だが、一つだけクラウドは確信していた。  
まだ終わっていない。

奴が今日の前にいる以上、脅威はまだ去ったわけではない。ノイズまみれながらも、そこにあるのは虚像ではない、真正正銘の肉声だ。身を隠すものも遮蔽物も一切何もない空間の真ん中で立っているセフィロスは、ずっと前からここでお前を待っていたと言わんばかりの声色でこう囁いてきた。

「ここから先にあるのは、未知なる世界」

絶対的優位に立っているかのように、長刀を持っている左手にわずかに力を込める。

「繋がった空間によって流れる異世界の死者の思念。それはライフストリームによって我々の星へと侵入し、やがていつかは侵食される。架空の世界とさえど、その影響は計り知れない」

「」

「お前の力が必要だ、クラウド」

「!?!」

言いながら歩いてきた英雄は、至近距離で視線をぶつけてくる。

セフィロスはクラウドのバスターソードを戒めながら、右手を差し出して揺るぎない声で言う。

「共に、奴らの領域へ踏み入ってみないか？」

その提案が冗談でも挑発でもなく嘘偽りのない本気だということ、声色からも伝わってきた。

クラウドとセフィロスの速度は同格だ。それでも戦って勝てるかどうかなどはわからない。

こんな至近距離では、それこそあっさりと斬り殺されてしまうだろう

う。

「」

訝しむクラウドは、そこでセフィロスの右手を見た。

より正確にはその掌、救いを求めるような正真正銘の協力を。

「一体、何が望みなんだ？」

「この期に及んで、まだわからないのか？」

その言葉を聞いて、クラウドはますます怪訝な顔になった。

セフィロスは単なる殺人鬼ではない。英雄として称えられ、その裏で自分の出生の秘密を知ってしまった哀れな『人間』だ。偽の真実を知ってしまったが故に運命は狂ってしまい、最終的に本人も狂ってしまった。

そんな奴を知っているからこそ、クラウドは思わず恐怖を抱いてしまふ。

この男には、常に芯がある。

しかし、こんないきなり協力を求めるような展開に裏表も何もないだなんて思えない。

何か、セフィロスには本当の狙いがあるんじゃないのか。

かつて、ライフストリームに自ら飛び込んで星の膨大なる記憶を読み込んで、星を我が物にしようとしたような奴を、信じられる、わけがない。

「」

そこでクラウドは思い出した。

セフィロスはさつきまで、ゲームマスターのアバターを乗っ取っていた。それからというもの、奴は妙に仮想空間の仕組みやそこにいるプレイヤー達の事情に詳しくかった。

クラウドでさえ、あの世界が別の世界の住民によって作られたということを説明されて納得が出来なかつたというのに、セフィロスはその事について元から知っていたかのように話していた。

「まさか!?!」

そして何より、クラウドに奴らの世界へと足を踏み入れてみないかという協力の申し出に違和感を持った。

クラウドは改めて奴の右手を見る。

「本気か」

呻くように、クラウドは言った。

「あんたは本気で、そんなことを頼むために俺に協力を求めているのか?」

対して、セフィロスはようやくやくそこまで考えが及んだかと言っているように顔の筋肉を緩めた。

「言ったはずだ。俺の望みは、宇宙の闇を旅することだ。かつて『母』がそうしたようにやがて我らは新しい星を見出だし、その地で輝ける未来を創造する」

「不可能だ」

「いや、可能だ」

セフィロスは驚くほどに気軽に返した。

「実際はお前の言う通り不可能に近い。たかがネットでは現実に干渉することなど出来ない。だが、そのために俺はあの世界の『神』とも呼べる存在を取り込み、新たな世界を作り出すための活路を見出だし

た。あの世界では可能だ、仮想を現実にすることが出来るあの世界ではな」

「お前はただ俺の望み通りに無言のままに実行してくれればそれでいい。そう、『人形』のようにな」

「——ッ！」

奇しくも、ここにきてクラウドは言葉を失った。

かと言つて、素直に従う気も、ここで剣を抜かない理由もなかった。可能だ不可能だとかの仮定の話は置いておいて、どう考えたところで、その提案に乗らないのが妥当だ。

故に、

「——断る」

「ふっ」

互いの理由は提示された。

そこにはもう、これ以上の話し合いなど無意味だった。

どちらかが勝ち、どちらかが負ける。もはや彼らに残された道はそれだけだ。

「——」

夢と誇りを受け継いだバスターソードと。

赤黒い血と恨みがその刃に染み付いた正宗。

剣と剣の距離は均等の長さで保たれている。

直後、

「ハアッ!!」

クラウドは全力を込めてバスターソードの柄を思い切り手前に引

き、そして刃同士が激突した。

先行を取られたセフィロスは、一時的に攻撃力を失った正宗の刃でいなしていく。

しかし、バスターソードを手にしているクラウドは攻撃を受け流していくセフィロスを追って、その懐に潜ろうとする。

ガキンツ!! と。

火花を散らせるほどの一撃が連続していく。

安易に逃げ切ることをよしとせず、相手の望みを徹底的に断ち切るクラウド。

全てに滅びを、絶望を送るために異世界にまで手を出そうとしているセフィロス。

互いの想いに干渉するように、二人の剣は何度もぶつかり合う。

「ツ!!」

音が消えた。

同時にクラウドまでセフィロスの前から消えた。

ソルジャーの動体視力をもってしても、敵の動きを追えなかった。かろうじて残像のように現れるクラウドの身体はジグザグの軌道を描き、見えた時にはまた姿は消えている。

「ハアツ!!」

真後ろからの声。

敵の脇腹目掛けて横薙ぎに振るわれる。と見せかけてクラウドはフェイントでその反対側へと一回転しながら移動して、その勢いを乗せたまま一撃を放つ。

迫る風圧に、セフィロスは振り返らずに正宗だけを脇から背後へと突き出す。無理な体勢から攻撃を放ったせいかわ、クラウドの手首に鈍い痛みが返る。

それを無視して、クラウドは体ごと空中で旋回させた。兜割りを仕

掛けるもあっさりと跳ね返される。それでも諦めることなく次の一手を放つ。それすらもセフィロスは軽くあしらい、ただ正宗をわずかに傾けるだけで攻撃を通さなかった。

クラウドはその顔面にバスターソード突き刺そうと勢いよく距離を積めて接近を試みるものの、セフィロスはただ首を左に傾げ、正宗で軽く流した。バスターソードの軌道はそのまま正宗の刃にくっついたまま一直線に、それを弾き飛ばしたことでクラウドの身体も後ろへと飛ばされる。

「ッ!!」

必勝を勝ち取るため、クラウドはバスターソードを持つ右手に力を込めて音速で再び突っ込んでいく。

これが最後の一撃。

当たればクラウドが勝利する。

元ソルジャーは、全身の力を込めてバスターソードを振り下ろしていた。

銀髪の剣士は、ただ勝つことも負けることも考えずに刀を斜めにし、て応じた。

二つの巨大な剣が交差する。

そして。

ガツギイイイイ!! という甲高い音と共に。

バスターソードと正宗が、鏝に近い位置で拮抗した。

「ッ!!」

セフィロスの身体は両断されなかった。

至近距離の鏝迫り合いの中、セフィロスだけが笑っている。

「軽いな」

直後だった。

真下から真上へと細い刀が跳ね上がった。

それはクラウドのバスターソードを挟る形で、一気に刃の腹へと向かっていった。

回避する時間も、受け流す余裕もなかった。

ガキンツ!! と。

クラウドの握るバスターソードは手から離れ、遠くへと弾き飛ばされてセフィロスに傷一つ与えることは出来ない状況へと陥った。

闇の中、二人の男は静止していた。

クラウドは弾き飛ばされたバスターソードに。

セフィロスはクラウドの顔の横に自分の顔をつけて。

誰の目から見ても、結果は明らかだった。

「終末の七秒前」

「!?!」

「だが、まだ間に合う」

セフィロスの言葉に、クラウドは答えない。

そして、セフィロスの声が鼓膜に直接振動するほど近くなったところで彼はただ、ゆっくりと告げる。

短く。

「未来は、お前次第だ。クラウド」

「っ!!」

決着の音が響き渡った。

空間に直接開いた黒い亀裂が徐々に砕け始める。

暗闇の中、後には何も残らなかった。

敗者はただ背後へと視線を向け、その空間に雪のように降り注ぐ『黒い羽根』だけを見続けていた。

## 第22章

全天然燃えるような夕焼けであった。

？気付くと少年は、不思議な場所にいた。

「」

彼も状況が飲み込めていないらしい。

それもそのはずだ、目を覚ましたらいつの間にか見知らぬ場所に立っているのだから。視界の先に広がるのは、美しい光景。

「」は「」

自然物も人工物もない。

地平線の彼方まで赤く染まった空が続いている。

彼の足元には靴底が少し浸かるくらいの水面が果てしなく広がっている。それが水晶の鏡となり、美しい黄昏の空を写し出している。陸地も空も全てが同じ赤色で統一されているため、自分が本当に地面に足をつけているのか区別がつかなくなる。

一周、三六〇度見回しても景色に変化はない。ひたすら平坦で、狂いのない平面が広がっている。

一体自分はなんでここにいいのか、前後に何があったのかがわからない。

先程までわけのわかんない場所で、わけのわからない『片翼の天使』と戦っていたはずだ。あの正体不明の自称『何でも屋』で、皆からは『救援プレイヤー』だと呼ばれていたあの青年と共に、肩を揃えて戦っていた、はず。

「」

「」



ようやく、キリトは自分がその場に立っているということに自覚した。

慌てたように自分の状態を確認する。そして、絶句した。レザーコートや長手袋といった装備は未だに装着されたままであったが、身体全体が僅かに透き通っているのだ。夕焼けは少年の身体を通過し、その瞳に直接焼き付ける。

自分の身に何があったのか、分析しようにも素材不足で理解が追いつかない。キリトは癖になっているかのように右手を前へと出して軽く指を下へと振ってみた。聞き慣れている効果音と共にウィンドウが出現する。

その時知る、まだここはあの世界の中であると。

だが、その見慣れたウィンドウに映し出されたのはゲームメニューではなかった。自分のステータスを確認するための図面はなく、武器や防具を変更するためのボタンもなく、ただ『最終フェイズ実行中 現在54%完了』とだけ表示されている。

それが何を意味するのか、考えるまでもなかった。

「キリト君」

「」

そんな少年の耳に、愛する者の声が滑り込んできた。

身体全体に響かせるその声は、間違いなく彼女のもの。ずっとずっと一緒にいた少女の言葉。つい先程まで彼女も戦闘に参加し、死と隣り合わせで最低限の命の保証もされなかった。それでも戦いに参加し、あの強敵に立ち向かった少女の台詞。

その声色に、細いながらも芯が取り戻されたことをキリトは確信した。

揺らぎ、いつ消えるかもわからなかった。世界の崩壊はすでに始まっている。

なのに、その声を聞いただけでキリトは安定した。

これ以上、彼女がああ死の世界に苦しめられることはない。

「アスナっ!!」

キリトは振り向く。振り向いて、事実と共に奥歯を深く噛み締めた。そして、気がついた時には動いていた。『黒の剣士』という異名を持つ少年は、震える唇で彼女の名を呼び、手を伸ばして彼女の身体を抱き寄せた。

強く。

二度と離さぬように。

「良かった」

ポツリと、言葉が漏れる。

彼の言葉は震えていた。一瞬でも目を離したら消えてしまいそうな少女の身体の温もりを感じた瞬間、笑みと共に涙も溢れ落ちた。

「良かった。本当に良かったっ!!」

本来の少年なら出てくることのない言葉かもしれない。

いつも孤独で戦い続けた少年に大切なものができたからこそ出てきた言葉。

前後に何があったのかわからないのは、少女も同じだった。

だが関係なかった。

抱き締められたアスナは、その手をキリトの背中に回し、ゆっくりと撫でる。

受け入れるように。

おそらくは、一番最初に彼の中でこの世に存在する何よりも美しいものを見つけた時と同じように。

「うん！」

ようやく取り戻した温もりを確かめながら、二人は思う。確かに、この世界は死と隣り合わせで、理不尽で、冷たく、厳しく、どうしようもないほど悪意に満ちていた。

しかし、同時に救いもあった。

自らの意思で手を伸ばせば、歯を食い縛って前へと進み続ければ、その先には必ず光は存在する。その一筋の光すらも奪い去るほど、この世界は絶望的ではなかったのだ。

「なかなか絶景だな」

「!?」

その時だった。

抱き締め合う二人に、一人の男の声が哀しそうながらも懐かしさを含む調子で言葉を紡いでいた。

首を回し、周囲の様子を確かめる前に二人は異変を感じ取った。

「アインクラッド」

遠く離れた空の上に、それはあった。

薄い層がいくつも積み重なって全体を構築している巨大な孤城。二年もの間、長きにわたって戦い続けた剣の世界。

大空を埋め尽くす浮遊城が、虚空へと呑み込まれていく。

フロアの一部一部が次々と崩壊し、破片を撒き散らしながら剥がれ落ちていく。

その光景を、哀しみながら見つめる男が目の前に立っている。

今まで殺し合っていたというのに、彼のその様子を見たキリトは抱いていた怒りも恨みも忘れてしまっていた。

そんな彼は崩れゆく巨城から視線を外すと、二人の方へと振り返り、静かに口を開いてこう言った。

まるで、古い友として迎え入れるように。

「待っていたよ……キリト君、アスナ君」

◇◇◇◇◇

「そこは夕暮れに染まる世界だった。」

「」

自分は今、崩れゆく暗闇の中で、あの『片翼の天使』と戦っていたのではなかったか。理不尽に次ぐ理不尽な状況に頭を悩ませるが、それ以上に両足で踏んで支えとなる地面がある事に安堵感が全身を包む。

何だかよくわからずひどく空虚というか、充足感を得ることができても心臓への圧迫を抑えられていない感覚がする。

クラウドは自分の手足を一つずつ動かし、とりあえずどこも切り落とされていない事だけ確認を取る。

「ここはどこだ？」

「終わった世界だ」

終わった、何が？

疑問を挟むまでもなく、人の気配があった。クラウドの疑問を答えるべく、全く別の方向から男の声が響いてきたのだ。

「君を待っていたよ、クラウド君」

「!？」

クラウドはその呼び掛けに振り返る。

そこには、見知らぬ男が立っていた。その顔には疲れが見えている。白いシャツにネクタイを締め、長い白衣を羽織ってクラウドの前に立っている。

「アンタは？」

「私の本当の姿を知らないのを見ると、どうやら君は本当に別世界の住人みたいだな」

「!?」

「失礼、そもそも自己紹介すらまだしていなかったね。名前くらいは耳にしたことがあるかもしれないが、改めて私の自己紹介をさせてくれ」

こちらは知らないのに、相手はこちらを知っている。

その異様なほどの違和感が高密度の緊張感を生み出し、しかしどこか安堵の空気が漂っている。緊張があるのはただの錯覚だ。目の前にいるのはもはや敵ではない。

その敵とも呼べない男は、白衣のポケットに手を突っ込みながらクラウドに自分の名を明かす。

「茅場晶彦」、あの世界を創造した者だ」

「」

■ 心臓が、ぎゅつと締まる。

クラウド自身か、あるいは名を告げた本人か。

「何しに来た？」

「別れを告げに」

空と海、二重の夕暮れの中、燃えるようなオレンジ色の世界で茅場はクラウドに話しかける。

この場において、あまりにも不釣り合いな状況にクラウドは面を食らっていた。

わざわざ、自分に別れを告げに来るなんておかしいとしか思えない。自分はただの一般人。無数の人間の一人に過ぎない自分に挨拶

するなんて、思考がおかしいんじゃないかとすら思えた。

少なくとも、クラウド自身はゲームマスターに注目を置かれるような人間ではないと感じていた。

だが、それはクラウド自身の話。第三者から見れば、彼は紛れもなく開発者に注目されるべき人物だ。

この期に及んで未だ自分の価値観をわかっていないクラウドに、茅場は笑いかける。

まるで、古い友のように。

「君とは、一度ゆっくりと話したかった」

茅場は、わずかに安堵の息を吐く。

「さて、と。何から話そうか」

クラウドは黙っていた。

かける言葉など見つからない。見つかるはずもない。それでも、クラウドは視線を外さなかった。たったの一度も、互いの命を懸けた死闘を繰り広げた相手から視線を外さなかった。

茅場の顔は、電池の切れたロボットののように表情がなかった。

あるいは、その素面が彼のデフォルトなのかもしれないが、少なくともクラウドには、目の前の男がいきなり何年も歳を取ったように見えた。

「まさか、私の世界に別世界の住人が紛れ込んでいるとは、馬鹿げた事だとは私自身も思っていたのだがな。こんな方法で私の願いが叶えられるとは思っても見なかった」

やがて、茅場は言った。

自分の犯した罪を、見つめ合うような表情で。

「彼に私のアバターを奪われた時、私の意識は一時的に彼と同化した。主導権はあちらが持っていたがね」

「アンタは」

「心配はいらない、私はもうただの『データの残骸』だ。彼の意識どころか、本来の私すらも既にここにはいない」

その意味を、クラウドは咄嗟に理解した。

今日の前にいるのは、『あいつ』ではない。長い刀を持ったあいつの意識はなく、そこにいるのは確かにゲームマスターの茅場晶彦であった。

「自分の魂もデータに変えたのか」

「何もおかしいことはない。君の宿敵もやってみせただろう？」

「あいつから知ったのか」

「ああ。彼の存在には驚いたが、彼に身体を奪われた際に私は彼の記憶を覗き込むことができた。そして気付かされたよ。私の、私達の世界がすでに異世界だったということ」

茅場は、己の舌でも噛み切るような表情でそう言った。

悔しい、そんな気持ちなのかもしれない。自分が知らなかっただけで、実はもう自分の願いは叶っていた。

その願いがなんなのかは、クラウドには何となくわかっていた。あの世界を本物にしたい。彼はあの時そう言っていた。

「私は小さい頃からどこか、この世界じゃないどこか違う場所に現実世界とは別の違う世界があるんじゃないだろうかと考えるようになった。空に浮かぶ鋼鉄の城がある」と、そんな事を考えていた

「まさか、それを証明してくれる者が私の世界にやって来るとは」

クラウドは息を呑んだ。

茅場から表情が消える。

何が楽しいのでもなく。何が嬉しいのでもなく。

そこにあるのは、何も無い。

「子供の頃から夢見た世界を、私は現実にしたかった。例えそれが人の手で作られた偽物だったとしても、限りなく本物に近いものにしたかった。そうするには実際に『生きる』という想いをあの世界に植え付けなければならぬ。だから、現実にいる人間が必要だった」

「あそこにいた連中は？」

「心配には及ばない。先程生き残った全プレイヤー、六一四七人のログアウトが完了した。先程までここにいたキリト君達も、今頃は現実の世界で目を覚ましていることだろう。あとは君だけだ、クラウド君」

つまり、キリト達は無事に元の世界へと帰ることができたのだ。感謝の言葉を告げたかったが、先にログアウトしたという事が聞けただけでも嬉しかった。

しかし、クラウドには無表情に言葉を紡ぐ茅場の感情が読めない。きつと、それが茅場の狙いだろう。その仮面の裏に隠れる、押し殺すこともできないほどの渦巻く悔しさ。それだけは、決して見せたくないという、気持ちの表れだと思う。

「死んだ連中は、どうなった？」

「生半可な覚悟で他人の命を扱うつもりはないよ。彼らの意識は帰ってこない。死者が消え去るのはどの世界でも同じさ」

「私の勝手な願いのために皆を巻き込むなら、それ相応の覚悟を持たなければならぬ。そのおかげで私も、こうして魂だけの存在となった」

ただの自業自得だった。当然の罰を受けた。



それはよく分かっている。

茅場は自分の目的を達成するために、あまりにも多くのものを利用しすぎた。世界中の世論を激怒させ、命の重さをまだよくわかっていない一般市民までも恐怖に陥れ、同じ会社に所属する者達さえも踏みしめた。

茅場が勤めていた製作会社も、彼の個人的な目的を知れば反旗を翻すだろう。

そんな事のために今までゲームを作ってきたんじゃない、と。

茅場は静かに思いをはせながら、静かにこちらを見る。

オレンジ色に染まる世界は、地獄で燃える炎に似ていた。炎の中で、一人の男はただ凍えるような無表情でいることしかできなかった。

だからこそ、彼はクラウドにこう聞いた。

頭上で崩れゆく城を見据えて、

「君は後悔しているかい？ あの世界、『ソードアート・オンライン』に  
来たことを」

「」

うつつすらと笑う。

また一層のフロアが、落ちる。崩壊が進んでいく、まさにその一瞬前の出来事だった。

彼の表情を見た瞬間、茅場の表情も微かに変わっていた。確かに、この世界に閉じ込められたとき、彼は他のみんなと同じように絶望した。彼の元々の目的はネットワークに発生した未知の領域の調査、ただそれだけのはずであった。なのに、何の脈絡もなくこの世界に迷い混み、さらには何の説明もなくデスゲームに参加させられ、そして拳げ句の果てには救援プレイヤーだと周りに勝手に決められて追いかけられたりもした。理不尽に次ぐ理不尽にクラウドはうんざりしていた、それは間違いない。

なのに、何故だろう。それなのに彼はこの世界を醜いものだとは思

えなかった。全ての出来事が、必ずしも不幸だとは思えなかった。故に彼は、古い友として迎え入れてくれた茅場に応えるように、まるで旧知の仲のように短くこう告げたのだ。

「興味ないね」

それだけだった。

おそらくは、笑みを浮かべて。

寧猛で、野蛮で。

それでいて上品さの欠片もない。けれど、確かに最高に最強な笑みを浮かべて、クラウドはそう宣言した。

「」

茅場は。

茅場晶彦は、言葉も出ない。

その言葉の真の意味を、理解してしまったから。

オレンジ色に染まる世界で、ただ崩壊の音を聞きながら、茅場は笑っていた。笑って、笑って、笑って笑って薄く引き伸ばしたように笑って。

ふっ、と。

その時、初めて本当に、茅場晶彦は心の底から小さく笑っていた。

「そうか」

気の抜けたような声でそう言った。

茅場は、何か大きな荷が下りたという表情を浮かべて、

「君に会えて良かった、クラウド君」

崩壊の音が進む。

そして、それは他のところにも及んでいた。  
世界の創設者、茅場晶彦。彼の身体も徐々にこの世界から離れて  
いつている。

「君に、伝えておくことがある」

それを悟った彼は、クラウドに大切なことを伝えておく。  
これから先の未来、一体何が起こるのかを予知するような口調で。

「私のアバターを奪った。彼は、私達の世界にいる」  
「！」

「今の彼は私と同じように器のない魂だけの存在となつて、私達の世  
界へと足を踏み入れようとしている。今はまだ意識だけがネット  
ワークに溶け、しかし拡散することなく私達の世界を巡っている。止  
められるのは君だけだクラウド君」

現在進行形で奴の状態を教えてくれた茅場は、それだけを言い残す  
とクラウドに背を向ける。

あとは頼む。そう背中が語っているようであった。

そんな茅場に対してクラウドは、ただ唇を僅かに動かしただけで  
あった。言葉は聞こえなかった。言う必要も聞く必要もなかったか  
らだ。

彼の願いは、ちゃんと『何でも屋』に聞き届けられた。  
それでもう十分だった。

「ああ。最後に私から、私達の世界の代表として言っておこう」  
「？」

彼は振り返る。

振り返って、優しい笑みを見せながらクラウドにこう言ったのだ。

「君もこの世界に生きる命、ゲームプレイヤーの一人だ。この世界に  
来てくれて、私のゲームを遊んでくれてありがとう。そして、ゲーム  
クリアおめでとう。『元ソルジャー』、クラウド」

そうして。

最後まで、その言葉の末尾まで茅場は紡ぎ続けた。

それが礼節だと思ったから。

そして、世界の創設者は風と共に消え去った。

そんな最後の言葉を残して消えた茅場に、クラウドはそつと息を吐  
くようにして答えた。

「『自称』、な」

◇◇◇◇◇

ようやくと、クラウドは全てを見届けた。

役割を終えたのか、もうここにはあいつの影はない。

「」

一人残されたクラウドは、いつでもこの世界から抜けることはでき  
た。

しかしクラウドはまだここに残っている。

世界の崩壊さえも、彼は見届けたかったからだ。

この世界はもう保たない。

改めてその事に気付かされたクラウドの耳に、女性の声が響いてき  
た。

誰もいないはずの世界の中で。

『クラウド』

「」

聞いたことがある声だった。  
七十五層を攻略するきつかけを作ってくれた依頼人の声。  
そして、ずっと聞きたかった声だった。

『クラウド』

ゆらり、と。

空気から浮かび上がるように、透き通る女性の体が生じた。重力を無視し、それは真つ直ぐクラウドを見ている。

その声に、クラウドはゆっくりと振り返る。

赤いローブを羽織った女性の瞳は、とても綺麗な緑色を帯びている。

そう、クラウドは既に気付いていた。セフィロスの精神がネットワークに紛れ込んでいるのなら、『彼女』だって迷い込んでいる可能性だってあったはずだ。

だからこそ、彼女はクラウドの前に現れることができた。

「っ！」

くらり、と視界が歪んだ。

名を口にしたいのに、唇が震えて言葉を上手く紡げない。

だから先に話し出したのは、彼女の方からであった。

『やったね、クラウド』

「ああ」

ようやく会話ができた。

それだけでも彼は嬉しかった。二度と話すことができないと思いつけたのに、まさかこんな形で再会できるとは思わなかったからだ。彼女は言う。

『なんで、あなたはまだログアウトしないの?』

「アンタと、話したかったから」

クラウドはそう言うと、ふと表情を曇らせた。

ずっと伝えたかったことを、今なら言える。これまで生きてきた中で、ずっと解消しきれなかったことを。

「ごめん」

助けられなくて。

今までずっとその責任を背負ってきたが、それは本当に彼女が望んでいることなのか、ということ。

彼女を忘れなくなかった。だからそれを罪として縛り続けて忘れないようにしていた。しかしそれは言うなれば言い訳に過ぎない。立ち直れない理由に都合よく彼女を使っていただけの最低な行為だった。

自分を戒めて、一生許されるはずもないと、そう思っていた。

でも、本当はクラウドは許されたいとは思っていない。

ただ彼は、彼女に謝りたかったのだ。

セフィロスの戦いを終えた今なら分かる。

本当に彼女のためを思うなら、伝えなくてはならない。

今度は立ち止まらず、足を踏み出して。

「あの時俺は、あいつが怖くてアンタを助けられなかった。一步も動けなくて、助けられなかったことを今でも後悔している」

ほんの僅かにクラウドは俯いた。

「めん」

ぼつりと。

クラウドは俯いたまま、静かに口の中で呟いた。それでも告げる。

そのために口を開くことが、こんなにも勇気がいる事だと思ったのは、これが初めてだった。

しかし今度こそ、声が届く距離で言う。

クラウドは今まで溜め込んできた涙を、ぼろりとこぼして呟いた。

「あの時、助けられなくてごめん。アンタを言い訳にして、逃げたりしてごめん。」

次々と漏れ出てくる懺悔の言葉。それに対して彼女は顔を俯かせているクラウドの元まで歩いていき、ずいっと身を寄せた。

下手に動く唇と唇がくっつきそうな距離まで近づいて、彼女は言う。

少し意地悪に。

『あなたの望みはなに？ クラウド』

「聞かせて、あなたの願い』

簡単な質問だった。

とても簡単に意地悪な質問だった。

言える。言えるのに、その言葉はまだ出せない。

しかしやがて。

やがて。

やがて。

クラウドは彼女の瞳を見つめて、ゆっくりとした動きで震える唇を動かした。

凍った涙腺から涙をこぼすように。

こう言った。

「許してくれ。」「エアリス」

その瞬間、彼女が羽織っていたローブは光となって消え去った。そしてそこには、ずっと会いたかった「彼女の姿」が確かにあった。

その言葉を聞いた彼女は、ゆっくりと、そして優しく彼の頬に手を当てていた。

クラウドという人間の胸の内から噴き出した言葉を、静かに受け止めていた。

それはきつと、とても醜い姿勢だったかもしれない。けれど。

『ごうん』

遮るように、彼女の声が聞こえた。

『そんなの、もう、気にしてないよ。クラウドが自分を取り戻してくれただけでも、私は、嬉しいから』

彼女独特の喋り方を聞いて、クラウドはまた涙を流す。

そしてほんの僅かに、彼は黙った。

黙って、そのまま両腕を使って華奢な体を抱き寄せた。

背中に手を回す。

胸の真ん中を、あの正宗が貫いた箇所でも手を固定する。

そして。

そして。

「会いたかった。エアリス」

『ごうん』



その耳元で、クラウドは囁いた。

クラウドの想いを受け取った彼女は、黙って彼と同じように背中に手を回す。

その直後、光があった。

光の粒子であった。

長い髪が、端からほどけていくように白く輝いていた。

本質的に、その体は元々肉体を持っていない。その世界から剥がれ落ちるように、見えない何かバラバラと分解されていく。

黄色い花卉のような何か、夕暮れの世界へと散らばっていく。

『私も、会えて嬉しかったよ。クラウド』

抱き寄せられたまま、クラウドの腕の中にいる彼女は目を細めた。幸せそうに。

本当に、幸せそうに。

『でも、そろそろお別れみたいだね』

ピシリ、という音が徐々に早くなっていく。

小さな音が連続しているのが聞こえていても、クラウドは逃がさないようにその手を離さない。

『ねえ、クラウド』

「？」

『私も、これだけは伝えておくね』

そのクラウドの願いを聞いたかのように、彼女はまだ消えない。途切れることはない。自分の体が舞い散っているのを自覚しながらも、彼女も伝えなかったことを告げる。

笑って、クラウドのその綺麗な瞳を見てこう言った。

『また、会おうね。クラウド！』

その言葉を最後に、彼女は姿を消していた。

クラウドがようやく異変に気付いた途端、それまで抱き寄せていた彼女の感覚が消失した。

華奢で今にも消えてしまいそうな彼女の体が、光となって空へと昇っていったのだ。崩れていった彼女の体は雪よりも儂くて、そして咲き散る花のように美しかった。

風に乗るようにしてクラウドの前から去っていった彼女を未だに抱き締めるように、彼は涙を溢していた。

涙腺から溢れ出る涙が重くて、思わず膝をついてしまう。

彼女の先程の言葉の意味を理解していくにつれ、流れゆく涙が水晶の床へと落ちていく。その言葉はあまりにも彼女らしく、それを聞いただけでクラウドは救われた気がした。

彼女の伝えたかった言葉は『さよなら』なんかではない。

『ずっと傍にいるよ』

そこで消えてしまった彼女の声を、もう一度だけ聞いたような気がした。

それが本当に存在したのか、単なる幻聴だったのか。

そんなの言うまでもない。

クラウドはそこで、ゆっくりと空を見上げた。

一点を見据える。

崩壊し終わった城の跡だった。

彼はその景色を最後に、そのまま静かにゆっくりと瞳を閉じた。



いくつもの夢を見ていた。

真っ白な世界で、彼は意識を手放しながら落ちていく。

その光景はまるで、光が戻ってきたということを表しているようにも感じた。

それに合わせて、彼も光となって消えていく。

自分の役目が終わった、そう考えた。

そして今。

長かった、と思うことができる。

ここまで来る間の出来事は、決して楽しいことばかりではなかった。

何度も何度も理不尽に傷つけられ、その際に剣を握って戦って、そんなことを繰り返してきた。

だけど、それもようやく終わる。

あの世界に思い入れはないが、それでもどこか悲しい気分になる。

ここまで来るまでにあつた色々なことは、今となっては全てが美しいと感じられる。嫌な記憶があつたとしても、それが終わるとなるとどこか懐かしいと感じてしまう。思い出したくないことも、今ではそれも大切な記憶の一つとなっていた。

全てはもう一つの現実。

それを感じるように、クラウドは身を任せるように落ちていく。

「ッ！」

意識がない中で、誰かの声が聞こえた気がした。

おそらくは、懐かしむ思い出の中の何かが映像となつて鳴り響いているのだろう。

その証拠に、映し出される映像には現実世界で待っている『彼女』の姿があつた。

黒髪のロングストレートで、赤い瞳を宿した彼女の姿。

彼女も今頃心配しているはず。二年もの間家を空けて、何の事情も伝えずに一方的に出ていってしまつて、おそらくは相当怒っているかもしれない。

心配を掛けた分、帰つたらきつちりと働かなくてはならない。

「もっしゅ？」

視界に徐々に光が差し込むにつれ、彼女の姿も明確になっていく。

目の前に彼女がいる。

懐かしい姿がその瞳に映った瞬間、彼は元の世界に戻ってきたんだなという実感を得る。

「もっしゅ？」

彼女の声が聞こえる。

遠くの方で、自分を呼んでいる。

多分、ずっと眠っている自分に付き添ってくれていたのかもしれない。二年間も行方不明となれば彼女だつて心配する。

彼女の性格上、おそらくは色んなところに聞き込みをして、最終的にはチャドリーの元にいるという情報を掴んだのかもしれない。

そういえば、チャドリーにも少なからず文句は言わせてもらおう。それくらいのこととはしてもバチは当たらないだろう。

だがその前に、自分を待つてくれている目の前の彼女に一言謝らねば。

彼女の姿を捉えるべく、クラウドはゆっくりと目を見開く。

？

「もしもし？ お兄さん聞こえる？」

「」

一瞬、見知らぬ声が聞こえてきた。

目の前には誰かがいる。ロングヘアで赤い瞳であることからおそらく目の前にいるのは『彼女』のはずだ。

しかし、声が少し違う気がした。

可愛らしい女の子のドリームボイスと共に、心配そうな台詞が鼓膜を震わせる。

「」

クラウドはそこで目を覚ました。

目を覚ました瞬間、彼は首に力を込めると、辺りを見渡すべく首を右左へと動かす。

まず、最初に入ってきた光景は、『青空』だった。その次に周りを見渡して、何か手がかりとなるものはないかと探してみると、辺りにあったのは木や草、そして花といった植物ばかりであった。

場所はつまり、自然の中ということか？

本来なら目を覚ませば、施設の中にいて無機質な天井が見下ろしているはずだが？

（何だ、ここは）

心臓が不気味に脈動するほどの衝撃だった。

驚いて周囲を見渡しても、そこにあるのは外の景色だった。多少視界がぼやけてふらついているが、まだ体は動く。問題は、ここがどこ

であるか、だ。セフィロスを撃退し役目を終えたというのなら、目を覚ました先に広がるのは、元の世界であるはず。しかしここにはそれらしいものは見当たらない。どこまで行っても、広大な大地が広がっているだけだ。

何か。

嫌な予感がする。

「あゝ良かった！ お兄さんやつと目を覚ました！」  
「え？」

すぐ近くで、少女のような声が聞こえた。

何だ何だ？ とクラウドが首を巡らせていると、

「お兄さん大丈夫？ 立てる？」  
「!?」

唐突に、自分の顔を覗き込むようにして膝を曲げた『少女』の姿が目の前に現れた。

その急な展開に思わずクラウドは慌てたように立ち上がった。誰なのかもわからない少女は小柄で、立ち上がったクラウドを尚も覗き込んでいる。興味深そうに見てくる少女にクラウドはたじたとしたような素振りを見せるが、少女の方は気にせずに見つめてくる。

そして、少女の姿を見てクラウドは思わず息を呑んだ。

瞳の色が、『彼女』と同じように『赤色』だった。

さらに、髪が長くてその毛質も柔らかかそうであった。

しかし、その髪の色に違和感を抱く。

彼女の髪の毛は『紫』だった。

現実らしくないその髪色に猛烈な違和感を抱き、いまいち状況把握ができていないクラウドは警戒しながら目の前にいる少女が何者なのか尋ねた。



起き上がり、両腕を頭へとやって頭に固定されている装置を取る。

それを前へと持ってこようとしたが、何かに阻まれた。

それは点滴のチューブに、電極のコードなどだった。

肘を中心に腕全体に配線されていて、命を繋ぎ止めるためのいくつもの線が体を維持させるために固定させてしまっている。

少年は手に持っている装置『ナーブギア』を溢れ落とすように枕の横に置くと、力もないのにそのまま立ち上がる。

点滴のスタンドに手をかけて、床に足を下ろす。

冷たい感触すらも曖昧で、ベタベタと音を鳴らしながら歩いていく。

スライド式の扉を手の摩擦で強引に開くと、そのまま彼は外へと出ていってしまう。

「あすな」

ふらふらと、少年は白い廊下を歩き続けた。

あれだけ強大で死と隣り合わせだった世界に背中を向ける形になったが、もはや、直接的な命の危機を感じとることさえできなくなっていた。

「あすな」

眩く。

辺り一面は狭い壁で、廊下は一直線に伸びていて人が隠れるような起伏や遮蔽物は何もない。

誰かが立っていれば、すぐに見つかるはずだ。故にここから先は発見次第確保される。

「あすな」

だからその前に、彼は最愛の人を追い求めて歩き続ける。



「アスナ」

ただただただ、いつまで歩いてもどこまで歩いても全く同じ廊下が続いているが、少年は歩き続ける。

最愛の人を探し求めて、

キリトは、「桐ヶ谷和人」は。

彼女の名を呼びながら、白く長い廊下に吸い込まれるように消えていった。

◇◇◇◇◇

かつん、と。

固い足音が響いたのはその時だった。

そこにいるのは少なくとも人間と呼べるものではなかった。

「ふっ」

空気が変わる。

主導権を奪う。とでも思っているのだろうか。

常人には見えない何かを抱いている怪物は、その手の中でこの世界に生えていた一輪の花を握り潰し、彼は口を歪めてこう言った。

躊躇なく、挑みかかるように。

「さあ、クラウド。楽しもうか」

## A L O 編 第1章

人間とは難儀な生き物だ。

例えどれだけ優れた知性を持っていても、例えどれだけ恵まれた才能を持っていたとしても。

それが結果に結び付かなければ、何の役にも立たない。

人は皆一度は夢を見る。

なりたいものになるために、人は皆人一倍努力をする。

その結果として、彼らは常人よりもその分野に体を酷使することになる。

しかし、必ずしも求めていたものに手が届くとは限らない。手を伸ばせば届く距離にまで来たのに、忌々しい何かがそれを阻む。

壁、そう呼ばれる目に見えない何かに人はぶつかってしまう。

例えそれを手にするのに相応しい力を持っていても、現実はそのなかに甘くはない。

『元一般兵』も、そんな理不尽な現実を何度も見てきた。

どれだけ頑張っても、どれだけ努力しても、それが手に入らないのでは意味がない。夢や誇りを持ってと言われても、それが実現しなければ意味がない。

結果ではなく過程。

そう言うのならそれにどれだけの価値があるのかを教えてほしい。過程がいくら素晴らしくても、それが良い結果に結び付かなければただの思い出だ。結果を出せて初めてその過程が美しいものだと感じられる。

その時はそう思っていた。

そこにあるものを手に入れる方法はわかっているのに、理不尽な壁がそれを阻む。

手に入れるための努力を報わせるためには結局は、諦めなければよいのだろうか。

何かを手に入れようとする者は、その努力によってその身を削り取

られる運命にある。

そうであつても、それがわかつていても、なお己の道を進む覚悟というものが、夢を追い求める者としての第一前提条件なのかもしれない。

結局、今から始まる話はそこに帰結する。

『少年』はそれを証明するために、失くしたものを取り戻す戦いへと身を投じる。

◇◇◇◇◇

バトルシミュレーター

戦闘空間を擬似的に生み出し、その場で戦闘データを計ることができ

きる。神羅の技術者が長年かけて開発したそれは、どこまでも果てしなく広がる世界を作ることができ、物質や空気に視覚、ありとあらゆるものを限りなく現実に近づけることができる優れ物だ。

どこまで暴れてもその景色が崩れることはなく、よくてその時発生した破壊力が現実にどれだけの影響をもたらすか、瞬時に予測結果を導き出してそれを映像として再現させる。

『英雄セフィロス』の斬撃が生み出す破壊力が世界にどのような影響を与えるのかも正確に観測できるそれを、携帯型にしたのが『VRバトルシミュレーター』だった。

それを開発したのが、マッドサイエンティスト“宝条”によって創られたサイボーグ、“チャドリー”である。

宝条の研究のサポート役として生み出された彼は、研究に必要な能力を極限まで強化された一方、制作者である宝条の意思に背く行動は取れないようプログラムをされていた。例えば、自分にとって不必要な研究、今後自分の研究に影響を与えてしまうかもしれないような実験。それらを勝手にやらないように奴は抑制という制約を取り付けていた。

しかし、彼はそんな宝条が取り付けたプログラムの抜け穴を見つけ

た。

その要となるのが、クラウドであった。

クラウドは宝条にとっても興味深い存在であり、そんなクラウドにセフィロスの一部を植え付けたのも宝条であった。

故に、宝条にとつてクラウドは研究対象の一つである。

宝条のクソ野郎は複数の研究を同時並行で進めていた。いくつもの研究をしていた中で、クラウドはその中でも失敗作として扱われて優先的には低く設定されていたが、もし仮に他の研究対象が詰まったとしても、並列する別のラインに一度軌道に乗せ換えて後で再び元の研究へと戻るといいう用意周到なプランを立てていたため、予備の研究対象であったとしてもそれは後に役に立つので研究リストからは外されていなかった。

何せ、純粋なS細胞の最後の持ち主を無視してしまつては勿体ない。だから彼は敢えて研究リストに『クラウドの観察』という項目を残していた。

精神崩壊して使い物にならなくなったから優先度を低くしたがために本人は既に忘れていたみたいだが、サポート役として創られたチャドリーはそれをチャンスと捉えた。

クラウドのような可能性を秘めた存在を独自に研究することは宝条の意思には反しなかった。

クラウドに接近して研究に協力してもらおうようお願いをし、戦闘データを採取していくたびにチャドリー自身に適用する機能向上パッチを仕込んで、自由になるための抜け道を確保するための手段を得る計画を密かに実行していた。

要は、クソみたいな主人に嫌気が差したんで辞表届を一方的に出したというわけである。

クラウドのおかげで、今自分は自由の身にある。

だから、クラウドに恩返しするために全力でサポートすると決めていた。

「なぬほづ」

得体のしれない空間に自身が開発した機械を使ってクラウドの見たる映像を暗号化して読み取る。

まるで望遠鏡を使って太陽を眺めているような気分だった。

答えはすぐそこにあるのに、不用意に直視してしまつてはこちらがやられてしまう。膨大なデータはチャドリーの容量の限界を超えて押し寄せてくる。いつオーバーヒートしてもおかしくない状況。

短時間にクラウドが感じている感情を直接読み取つて状況を把握するなんて、どんなに演算能力が優れていようと処理が追い付かない。意図して分厚いフィルターを何重にも重ねて視界を塞ぎ、取り込む情報量に制限を掛けることでようやく常時接続ができる。

得られる情報には限りがある。核心を得られるものは既にクラウドの頭脳が読み取っているはずなのにそれを掴みきれない。だがしかし今はそれら全てを知る必要はない。

なぜなら、

「やはり関わってましたか」

フォーカスすべき点はすでにわかっている。

つい先程、状況に変化が投げられた。部分的でしか覗き込むことはできなかったが、少なくとも彼は今回の事件を解決してくれた。

今回の調査の目的である、『未知の空間の発生原因』。

その裏には、『別世界へと繋がった』という全くもって馬鹿げたような事実が発覚した。

そこに迷い込んだクラウドは、その世界の制作者によつて外部への干渉までも遮断されたことにより連絡が取れない状況に陥っていた。

よつてクラウドは既にそこで二年間という歳月を過ごし、脱出のためその世界の頂に辿り着くということを余儀なくされた。

そして、クリアまであと一歩というところで、『奴』が現れた。

今回の事件の主犯であり元凶。

その元凶となつて存在を、苦戦はしたが彼は撃退して

くれた。別世界の住人と結託して、共に剣を握って戦って勝利を掴みとった。

よって、ネットワークも安定していくかに思えたが、

「それでもまだ、終わっていないようですね」

しかし、何時間経っても彼の意識は戻ってこなかった。

心臓は正常に動いていることから死んだわけではないようだが、その理解不能な現状にチャドリーだけでなく他の研究者までも頭を悩ませている。

原因は何なのか、研究者達は早急に解明すべくあらゆる機械を使って分析を進めている。

「そして、クラウドさんが今いる場所もわかってきました」

従って、チャドリーもクラウドの意識を取り戻すために引き続き観測を行っている。

誰よりも早く、クラウドの居場所と原因を突き止めた。

暗号自体はきちんと解析できなくても、クラウドの脳内から発せられる電波を読み取ることができれば、記憶を明確化させて現在地を掴むことができる。

チャドリーはVRゴーグルを介して仮想空間へと飛ばされたクラウドの位置情報の把握にかかっていた。

そして、同時にあることを考えていた。

本来の自分を探すためにライフストリームへと落ちたクラウドも、同じようなことをしていたのかもしれない。

星に流れる膨大な知識の塊、『ライフストリーム』。

星の血、星の記憶。

呼び方は様々だが、どちらにしてもその星の力となる存在は、人間の精神を崩壊させる。星へと還った者達の記憶を保存しておくそれは、その中に落ちた者の頭の中に容赦なく人々の記憶や知識をぶち込

む。

そうならば人は耐えられなくなって、最終的には魔晄中毒になって  
廃人となる。

それでも、クラウドは帰ってきた。

ティファと共に魔晄へと落ちた際、彼女と一緒に本当の自分を見つ  
け出した。星が記憶していたものと、ティファと自分の記憶を繋ぎ合  
わせて見つけることができた。散らばっているパズルのピースを、二  
人で協力して一つ一つ見つけて出して繋ぎ合わせていく作業。それと  
似たようなものなのかもしれない。

なんて事を考えていた矢先、チャドリーが装着しているVRゴーグ  
ルがまた新たな情報を捉えていた。

「《A l f h e i m   O n l i n e》。そこにクラウドさんは囚われて  
いる」

現在のクラウドを取り巻く環境を考えれば、あの『英雄』が原因で  
あるとは言い難い。

紛れ込んだ『英雄』によって仮想空間に捕えられていたものとは  
違って、今回は明らかに『あちらの世界の害意』によるものだ。チャ  
ドリーは考えた。

奴の痕跡は見当たらない。少なくとも、クラウドもそう考えている  
ようだ。クラウドから流れてくる感情には、『英雄』への恐怖心がな  
い。

つまりは、想定外のハプニングが起きた。

そう捉えるべきだろう。

なんとしても、クラウドをそこから連れ戻す策を考えなければなら  
ない。別世界に繋がっているという事実が発覚した以上、もし強引に  
装置を取り外したらクラウドにどんな影響が起きるかわからない。

なにより、クラウドはまたどこか別の空間へと飛ばされたことがわ  
かった。

また別空間に飛ばされたクラウドの意識は、本来あるべき場所を見





電腦空間を作り出し、強敵のアバターをクラウドと対峙させた。そのクラウドの戦闘データから得られる可能性を解析し、自身のパーソナリティーを見出だした。

その彼からすれば。

どうすれば恩人であるクラウドを救いだせるのかを考えるなんて造作もない。

よって、少年の行動は決定した。

「皆さん、聞いてください」

「！！！！」

全員がチャドリーの方へと振り向く。

誰もが解決策を見つけ出すための作業を止め、チャドリーの真剣な目を真っ直ぐに見る。責任者としての責任を取る、そう目が語っているようであった。

それを悟ったとたん、研究者達はどんな命令にも従う覚悟でいた。

その研究者達の姿勢を見たチャドリーは、サイボーグながらも人間的な口調で言った。

「————ッ」

「！！！！」

耳を疑うような宣告。

その判断に皆がざわめいた。明らかに正気の沙汰ではない。本当にチャドリーに搭載されているAIがそう判断したのかと疑問すら抱く。

下手したら、自分の存在すらも抹消してしまうかもしれないのに。

研究者の誰もが逡巡したようだった。

有能な科学者が、そんなギャンブルのような事をするなんて。しかも、見た目だけとはいえ子供なんかにそんな危険な事をさせるなんて。

色々な問題が彼らの頭の中で渦巻いていたのかもしれない。

だが、やがて皆互いの顔を見合い、一人一人の顔を見ると揃いも揃って首を縦に振って、その中の一人がこう言った。

「やりましょう、そこに可能性があるのなら」

全員からの合意を得た。

そこにいる者達がチャドリーの判断に従い、それを実行するための準備を開始する。

クラウドの隣にまた新しく横になれるスペースを確保し、そこにあらゆる装置を備え付けていく。全ての準備を終えたことを確認したチャドリーは、自身の開発したVRバトルシミュレーターの電源を入れる。

今回ばかりは、ただ傍観するだけには留まらない。

目で見てただ情報を得るだけではなく、今度は全身を使ってクラウドをサポートしなくてはならない。

「それでは皆さん、お願いします」

チャドリーからの合図に、研究者達は開始のスイッチを押した。

その瞬間、チャドリーを構成するメインフレームはその身体から離れた。

チャドリー。

彼はこれから、クラウドと同じ舞台へと立つ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

研究者達はその後も作業を続けている。

責任者がいなくなったとはいえ、そのサポートに回るのもまた彼らの仕事だ。

研究者達の目の前にあるコンピューターの画面には、『フルダイブ』

プログラムの稼働状況が表示されている。

全員が彼らの帰還を願っている。

優れたAIが搭載されている彼なら、きっと連れ戻してくれるだろう。

一人の研究者が腕時計に目をやった。正確な時間を計り、一分一秒の時間も無駄にしないようにバックアップに専念するつもりらしい。と、そんな時だった。

唐突に、

ドゴオツ!!

という爆音が響き渡った。

なんだなんだ!?! とその場の全員が愕然とする前に、次の動きがあった。

かつん、と。

思い切り蹴り破られた扉の向こうから、『一人の女性』が歩いてくる。

黒髪のロングストレートで、上下共に黒い服を着てへそが丸見えだった。

彼女はその『赤い瞳』を鋭くし、中にいる研究者達に冷たい眼光を向けると、手につけている格闘用の手袋をはめなおしながらこう言った。

「クラウドはどこ?」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「エギル——このソフト、貰っていいか?」

「本当に行く気なのか?」

「ああ、この目で確かめる」

一方、こちらにも動き出していた。

似ているがどこか違う星にある、一つの店。そこはかつてあの世界に閉じ込められていたプレイヤーが経営する喫茶店兼バーであった。

二つのサイコロを模った看板に刻まれた店名は、《Dicey Cafe》。

そこに、二人の『生還者』が何か真剣な表情で話し合っていた。大柄な男は、目の前に座っている少年に何かを貸しているみたいではあるが、その顔には気遣わしげな表情を見せている。

その憂慮は少年も理解しているようだが、少年は男に出されたコーヒーを一口含むと、ゆっくりとした挙動で椅子から立ち上がった。

立ち上がって、ニツと笑って恐怖心の欠片もない顔で言っていた。

「死んでもいいゲームなんてヌルすぎるぜ。難なく攻略してやる」

「ふっ、そうか」

「ああでも、ゲーム機を買わなくちゃな」

「ナーヴギアで動くぞ。『アミュスファイア』は単なるセキュリティ強化版でしかないからな」

「へえ、そりや助かる」

「ま、もう一度アレを被る度胸があるならだけどな」

「心配しなくても、もう何度も被ってるさ」

それはどういう意味なのか、それを考える前に男は笑っていた。

一々心配をしてやるほどでもない。それは逆に、少年にとつての足枷になる。行くという覚悟を抱いている少年を見送ってやるのが、ここでは正解だ。

少年はポケットから掴み出した小銭をカウンターへと置くと、男に感謝の言葉を告げる。

「じゃあ、俺は帰るよ。ご馳走さま、また情報があつたら頼むよ」

「ああ、情報代はツケといてやる。アスナを助け出せよ、キリト」

「ああ、任せとけ」

「そしたらまたここに連れてこい。いつかここで生還者達だけのパーティを開いてやるからよ。シリカにリズベット、そんでクライン。さらには『あいつ』も呼んでやろうぜ。『何でも屋』のあいつには、色々世話になったからよ」

「ッ！」

「？ キリト？」

「あ、ああ。そうだな。いつかここでオフをやろう」

一瞬言葉を詰まらした和人だったが、何もなかったかのように拳を打ち付け合うと、そのまま振り向いて店を後にした。

喫茶店のオーナー、エギルこと『アンドリユー・ギルバート・ミルズ』は、その少年の背中を黙って見送った。

◇◇◇◇◇

「」

家に戻ってきた和人は、ベッドの上に座っていた。

エギルから貰ったゲームパッケージを、見入るようにつめていく。

《アルヴヘイム・オンライン》

深い森の中から見上げる巨大な満月が、パッケージに描かれている。黄金の円盤を背景に、少年と少女が剣を携え飛翔している。

どう見てもファンタジー系のゲーム。

彼はパッケージを開封して小さなROMカードを取り出すと、あの装置のスロットへと差し込んだ。

『ナーヴギア』

二年間も捕縛した枷であり、今となっては戦友でもあるゲームハー

ド。かつて濃紺に輝いていたその機械は、いまや塗装があちこちで剥げ落ちて傷ついている。

まさかまた、被ることになろうとは。

ネットに繋げて意味もなく被ったことはあったが、まさかまた仮想空間へと行くためにこれを使うことになろうとは思ってもみなかった。

この装置に、あの世界の記憶の全てがある。

そんな感慨にとらわれて、和人はギアの表面をそつと撫でた。

「」

ナールヴィアを手にしたまま、和人は一瞬硬直してしまっていた。

これを手にすると、必ずと言っていいほどあの世界の記憶がフラッシュバックする。そして、一番最初に思い出すのは、あの世界に初めて入った時の記憶でも、攻略をしている時の記憶でもなかった。

『“彼”がまだやって来ていないが、まあ先に話してしまっても問題ないだろう』

崩壊するアインクラッドを背景に、夕焼けの色の世界でわずかな時間語り合った時の事は今でも鮮明に覚えている。和人の頭には今もあの『宿敵』の言葉が残っている。手に持ったナールヴィアを撫でながら、最後に出会った宿敵の言葉を思い出す。

その時はまだ、アスナと手を繋いでいた。彼女と二人で、心の奥を抉り取るような話を聞かされた。

あの時のことはおそらく一生忘れないだろう。

宿敵から告げられた衝撃的な真実を。

『彼の存在にはとても驚いた。彼は、この『ソードアート・オンライン』の正式サービスのチュートリアル後の直後にこの世界へと降り立った。正直、どこの愚か者だと思ったよ。既にログアウトできなくなる

と報道されているのに入ってくるなんて、正気の沙汰ではない。だが同時に、彼には興味が湧いた。なにせ、彼からは『ナーヴギア』の反応がなかったからね。まだ他にフルダイブ機能がついているゲームハードは販売されていないはずだが、彼の正体を知って納得したよ。どうやら彼は正式にこのゲームを買ったわけではなく、手違いでこの世界に迷い込んでしまったらしい』

『手違い?』

『ナーヴギアじゃないハードでこの世界にやって来たってことか?』

『それだけには留まらない。彼の存在はとても興味深いものだった。それこそ、全ての常識を覆してしまうほどにね』

その言葉には、どういう意図があったのだろうか。

何らかの価値と興味を見出だしたのか、茅場の言葉だけがその時は流れていた。

『彼という存在を覚えておくといい。彼の存在は、世界を大きく変えてしまうほどの価値がある』

『・』

キリトとアスナはその時は黙って聞いていた。

手を握って、ただ己の言葉だけを続ける茅場の声に耳を傾けていた。あまりにもクラウドの存在を重要視している茅場は、キリト達にどうしても伝えたいことがあったらしい。

彼自身あり得ないと思いつつも、茅場は真剣な表情でキリトとアスナに真実を伝えた。

『彼は――』

その言葉は、今でも覚えている。

脳に焼き付いている。

あの時の茅場の表情にキリトは訝しげに眉をひそめたが、その次に

放たれた言葉を聞いて、アスナと共に驚愕した。

茅場の言った通り、世界の常識を覆してしまう衝撃の真実を。

「」

腕の中にあるナーヴギアを抱えた和人の唇が、ほんの僅かに動く。

あの言葉を思い出す度に、未だにこの世界が現実なのかと判断ができなくなる。茅場があいつに注目していた理由がわかる。それほど衝撃的だった。

むしろ。

あの世界にいたどのプレイヤーよりも、とても重要な役割を担っていたのではないかとすら感じる。

彼の胸を締め付けているのは、たった一言だ。

和人はほとんど声にならない言葉で、茅場があの時言った言葉を復唱するように呟いていた。

「別世界の、住人」

それだけを呟くと彼は一度首を横に振り、気持ち切り替えるようにナーヴギアを頭に装着した。

今はそれよりも、「彼女の搜索」だ。

その後、アイツについて考えればいい。

不安と興奮で速まる心臓を抑えつけながら、和人は再びあの世界へと挑みかかるようにこう宣告した。

「リンク・スタート!!」



「本当にびっくりしたよー。いきなり上から落ちてくるんだもん」

「」

「でもよかったー、お兄さんが無事で。まだこのゲームには慣れてないのかな？ コントローラーなしで自由に飛び回るのにも相当な練習が必要だからね、あんまり無理しちゃダメだよ？」

「」

「さつきから少女がずーっと一人で喋り続けてきてこっちはどう反応したらいいのかわからない。」

まるで今まで静寂を守ってきた分、その鬱憤でも晴らそうとしているかのように、全然会っていないなかった友人に久しぶりに会った時のようなマシンガントークを放ってくる少女は、特に何の疑いもなく親しい口調でクラウドに話しかけてくる。

「随意飛行はコツがあるからね、できる人はすぐできるんだけど。ところで、お兄さんって種族は何を選んだの？ 見たところ耳も尖って

ないし……そういえば、名前聞いてなかったね。お兄さん名前は？」

「お兄さくん？ お名前は？」

返事がない、ならば聞き直そう。

このぐいぐい来る感じ、こういう人はいつになっても慣れない。

クラウドは初期ステータスの人見知りが発動するも、構わず話しかけてくる少女「ユウキ」はそんなクラウドに頬を膨らませる。

むく！ と不貞腐れた子供の唸り声に負けたクラウドは、小さな声で自分の名前を言った。

「クラウドだ」

「クラウド、いい名前だね！ よろしくねクラウド！」

それが新たな物語の始まり。

失ったものを取り戻す。

それぞれの想いを抱え、多くの人間達が一ヶ所に集う。

別々の世界で現実の道を進んでいた者達の道が一点に交差する時が、まもなく訪れる。

## 第2章

「クラウドは、VRMMOはここが初めて？」

「いや」

「え！じゃあ他のゲームもやってたんだ！何やってたの!？」

「」

一応確認しておきたい。

クラウドとこの子は初対面であつたはずだ。

普通なら距離感的にはもうちよつと他人としての間隔があつてもいいはずだ。初めて会つた相手にはそれなりの緊張感が生まれるはずなのだが、それらしい雰囲気は全くと言っていいほどない。

少なくとも少女の方の距離感はバグっている。

世間一般の常識を超えて、あつという間にクラウドの目と鼻の先までやってくる。

少しでも動いたらクラウドの鼻にそのよく喋る口が直に当たりそうなほど。

クラウドはたじろいだ。

初対面の相手が好奇心丸出しの表情で真つ直ぐ近づいてきたら誰だって怖い。

とりあえず、少女の質問に答えなければならぬ。クラウドは機械のような平坦な声で言う。

「ソードアート・オンライン」

「え？」

その言葉は聞き捨てならなかった。

その言葉を聞いた瞬間、ユウキは瞬間的に冷凍されたように硬直していた。手足を一ミリも動かさず、ただ唇を震わせて。





情など存在しない。なんなら、自分はただ隠れていただけである。最初くらいしか大きな行動を起こさず、あとは最後の方でアイツの手がかりを掴んだから横槍を入れる形で介入したくらいの程度のものだ。これといって、プレイヤー達に貢献した覚えはない。

少なくとも、クラウド自身はそう思っていた。

自分は卑怯者だ。皆と対等な立場で戦わず、皆を守るほどの力を有しておきながらそれを敢えて使わずに隠していた。

目立ちたくない、そんな理由なんかで。

だからクラウドは、称賛されるに値しない。凄いと言われる筋合いもない。

そう思っていたクラウドは、俯きながら、

「俺はそんな人間じゃない」

「え?」

そう呟いた。

その呟き。そこに込められた得体の知れない感情の渦がユウキの心の芯を貫いたような気がした。

クラウドはゆっくりと陽炎のように音もなく腰を上げると、ユウキに背を向ける。唐突な展開すぎてついていけないユウキはポカーンとしていた。

時間が止まったような空気がその場を包んでいる。

それを良いことに、クラウドは一方的に言葉を投げかける。

「世話になったな」

「あ、ちよつと待って!!」

それだけを言うと、クラウドは立ち去ろうとする。

しかしそんなクラウドにユウキは尻を叩かれたように慌てて飛び起きる。飛び起きると、そのまま立ち去ろうとするクラウドの腕にガシイ!! と絡みつくように掴んだ。

「ねえクラウド?」

「?」

「出会ったばかりの人にこんなことを頼むのは失礼かもしれないけど」

いまいち、煮え切らないような声だった。

急に引き止められて、ましてや腕を掴まれてこっちはそれどころではないというのに。

言いにくいことなのかちよつと言うのを躊躇うような表情に訝しむクラウドだったが、最終的には言う決心がついたのかユウキはクラウドの瞳を真っ直ぐに見て言った。

「あの、ボクと手合わせしてもらえないかな!」

「え?」

そのお願いにクラウドは首をひねった。

なんのために? 一体なんで自分なんかと戦いたいなんて言い出すんだこいつは、と。クラウドは無意識の内に何か断るための否定材料を探していた。

面食らったクラウドをよそに、ユウキは真剣な声で言った。

「ボク、クラウドみたいなSAOをクリアしたような強い人と剣を合わせてみたいんだ」

「」

その顔には本心そのものが現れていた。

今の言葉から何かが分かったわけではない。むしろ何も分からないう。その本心の意味が理解できなくて、クラウドはそこで思考が止まってしまう。

なぜなら、意味がないからだ。

本人には何か明確な目標があったとしても、こちらからしてみればそれで何かこちらに利点が生まれるのかと、疑問すら覚える。

しかしどうも冗談で言っているようには見えない。そんな様子もない。

というか、初対面相手にそんなことを頼むなんて、クラウドは思わぬといった調子でふっと笑ってしまった。ただの興味本位ってわけでもない。どこか心に迫るものを感じる。

ユウキは笑って、こちらを見つめている。

よってクラウドの答えは決まっていた。

クラウドもふっと微かに笑って、

「ああ、いいだろう」

「ホントツツ!! やったーツツ!!」

「でも安くはない」

「え!?! お金いるの!?!」

ただし有料です。

といっても、ただの冗談であるが。

クラウドは人見知りである。故に、こう少しでもジョークを言わないと相手と気軽に話せないのだ。和やかな雰囲気を作って笑いを取り、初めて自分も心を許せて相手の目を見ることができると、ちよつとここで言うところじゃないだろ感があるが、彼なりの緊張ほぐしだ。

似合わないことをしてしまったと自分でも自覚しているし、冗談だとすぐに訂正しようとするが、

「うーん...じゃあね」

「?」

すると、ユウキは真に受けたのか両手を組んで考え込むように首を傾げると、手をポンと叩いて指を一本立てる。



ニツコリと笑って、ウインクしながら告げる。

!?

「デ・ト、一回って言うのはどうかな?」

「え。」

「お金はさすがにちよつと、ね。ボクもこのゲームをやり始めたばかりだし、手持ちが少ないからさ」

「いや、さっきのは冗だ——」

「ね!..それをお願い!!」

両手をパン! と叩いてお願いしてくる。

自分で提示しておきながら、その提案に思わず目を見開いてしまう。確実にユウキの方が被害者のポジションにいるはずなのに、報酬を用意するような事態になってしまって、何だろう。このとてつもない罪悪感。

だがしかし、これ以後には引けなくなった。ここまでされてしまったのは断るわけにはいかない。

彼女の依頼はちゃんと『何でも屋』に聞き届けられた。

故に、本気で応えよう。

クラウドは静かに背に手を回すと、巨大な大剣を抜き放つ。あの世界から変わらず持ってこれた剣はやる気を見せるようにギラリ!! とその刀身が光る。

「いつでも来い」

「っ!..うん!!」

クラウドがそう言うと、ユウキも腰にある剣を抜く。彼女の背丈に合った剣は軽そうに見えるが、おそらく強度と切れ味のレベルは高い。

受け継いだ大剣を構えるクラウドと、まるでリズムを刻むようにステップを踏みながらリラックスするユウキ。

二人は互いの目を見合い、そして剣の柄を強く握り締めると。

「ッ!!」

瞬間、二人の足元の地面が地雷でも踏んだかのように爆発した。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「ヤアアアアアアアアアッ!!」

ユウキは叫び、彼とほぼ同時に走り出した。

全速力を維持したまま、ユウキは剣を携えて『ソルジャー』へと突撃していく。

歩法、呼吸、剣を握る五本の指の位置、折り曲げる角度、力の込め方まで。その全ての動作に無駄がないように思えた。

突進してくるユウキに、クラウドも応戦する。

ガキン! と。

ユウキの剣がクラウドのバスターソードに突き刺さった直後だった。ユウキはすぐさま剣を引き直し、再び突きを繰り出す。

剣を真横にして防ぐクラウドはそれに応じるように一歩ずつ素早く下がる。様々な角度からほぼ同時に襲いかかる突き技に対し、バスターソードを掴むクラウドは、

「踏み込みが甘い」

「ッ!!」

ゴツキイイ!! という轟音が炸裂した。

気がついたときには、クラウドとユウキは超至近距離で鏝迫り合いをしていた。ただ真っ直ぐ剣を振るっただけ。その単純な動作が、一瞬ユウキには見えなかった。

単なる勘でその攻撃を防ぐことはできたが、次もまた同じようなやり方で防げるかと問われたら難しいと答えるだろう。

ドツ!! と二人は互いの得物を弾き合い、そして再び刃を振るう。両者の体が霞んだ。

そこから先は、二人の位置を把握するのも難しい攻防だった。ガキン！ ガキン！ という金属音がマシンガンのように連続し、同時に二人の間にキラリと光るものが舞う。鋭利な切れ口と共に次々と切断されていく残骸物質の刃、すなわち火花。

「中々やるな」

「クラウドこそ!!」

二人は高速で剣を交えながら笑い合う。

火花と衝撃波が飛び散る。

二人はただ剣を振るだけで、ソードスキルらしい技は繰り出さない。二人の間で行われているのは戦闘の基本とも言える読み合い。次の一手が打たれたらこちらはどうか出るか、そしてそれが無意味に終わったらそこからどう次へと繋げるか。クラウドと連続的に打ち合いながら、ユウキはその軌道が生み出す戦闘の流れすらも自分の攻撃手段へと組み込んでいく。

クラウドが剣を振るうと、その攻撃を通さないようにして弾かれる。その弾いた剣はすぐさまクラウドへと向かい、ライフを削り取ろうとする。外れた軌道の中にある隙、それらを見逃さないユウキの斬撃は恐ろしい速度で様々な角度から襲いかかる。

（速い！）

攻撃を防ぐためにバスターソードは突撃を食い止める壁となる。金属の震える音だけが草原に木霊している。

しかしユウキは止まらない。

彼女の剣は真っ正面から立て続けに空気を引き裂いて襲いかかる。彼女の武器はレイピアといった細剣には見えないが、限りなくそれに近いのは確かだ。斬ることに使えるが、どちらかというと突き刺す

方の威力がずば抜けている。

突きを繰り出すと、その先端は超高压に圧縮して鋭い一撃を生み出す。それを素早く何度も繰り出すからこそ、彼女の剣筋は素晴らしいと評価できる。

真つ正面から彼女の攻撃を何度も回避できたのはまさしく『ソルジャー』の賜物。

攻撃の度に彼女の剣は軌道を変え、様々な効果を発揮する。まさしく変幻自在。少しでも突き出す位置を変えたらその威力もまた変化する。彼女はどこにどういう攻撃を繰り出せば高い威力を出せるか理解しているように付き出してくるから厄介だった。

キルポイントを正確に見定めて襲いかかる。

それができるのでクラウドは悟った。

だがいつまでも防戦でいるわけにはいかない。真つ正面から胸板に向けて、様々な位置から突き出されたその剣を見ても、なおクラウドは薄く笑っていた。

次の瞬間には、ユウキは最大の一撃を繰り出すように鋭い突きを放った。

ガキン！ と。

バスターソードがユウキの剣の矛先を受け止めると、クラウドは何かを呟いた。

「悪く思うな」

「!？」

今度は、クラウドの力が真価を見せる。

凄まじい光線が迸った。ユウキがそう知覚した時には吹き飛ばされていった。

横薙ぎに一閃。

大振りの大剣の威力はユウキの剣では受け止めきれなかった。後ろへ吹き飛ばされたユウキはそこで妙な間隔に包まれる。

自分の体が空中に固定されているような気分だった。

理由は単純、クラウドの速度が肉眼では追い付けないほどだったからだ。

「ハアッ!!」

ゴバツ!! という爆音。砕けた地面をさらに踏み潰し、ソルジャーの身体能力を持つクラウドがロケットのように空間を突き抜けた。

音速を突き破り、風圧も物理法則ももろともせず突破する。その瞳は一点を見据えていて、ただ真つ直ぐにユウキの元へと砲弾の如き速度で跳躍した。

その手に握られているバスターソードが全身の速度と重さを抱えてユウキの首元を狙う。

「っ!?!」

ユウキは慌てて体勢を整えようとしたが、もう遅い。この状況でできるのはもはや、とつさに持っていた剣で自分の体を守ろうとするくらいだ。

クラウドの足が空気を蹴ってユウキの懐へと強く踏み込む。

全身の体重移動によって強く握り締めたバスターソードへ絶大な力加わり、振り抜かれた刃はユウキの首へと勢いよく突き出される。

直後だった。

ユウキが予想したような、衝撃はいつまでもやってこなかった。

「あはは。負けちゃったか」

首間近に止められたバスターソードを見て、ユウキは苦笑していた。

負けたことに対して、残念そうに肩を落としているユウキであったが、

「いや」

「え?」

クラウドは首に突きつけているバスターソードを背中へと戻すと、両手を組んで常識的なことを述べた。

「そもそもデュエル申請をしてない」

「あ」

と、そこでハツと思い出したユウキは思わず吹き出していた。

子供のようには笑っていた。

なんて、馬鹿げた話。

互いに作法を忘れるほど試合を急いでしまうなんて、その事実についてあつはつはと笑い飛ばしていた。

その声を聞いて。

その表情を見て。

さっきの戦いが実は楽しかったクラウドも、ほんの少しだけ頬を緩めていた。

◇◇◇◇◇

日も暮れて、夜空には月が出ていた。

元々日没間近の時間帯だったのもあるが、それほど長い間剣を交えていた。

「あー楽しかった!」

ばたりと、新しい夜風が吹く草原の真ん中で、彼女は仰向けに地面へ寝転がる。クラウドが近くにいるというのに、緊張感が解かれたように。



今のクラウドは所謂迷い子。さまよう旅人。流浪の剣士。つまりは目的もない、というよりかは何をすれば良いのかわかっていない状態だ。

そもそも、この世界が何処なのかすらわかっていない。気が付いたらここにおいて、前後の説明もされずに広大なフィールドへと放り出されている。

「」

無意識に、クラウドは考え始めていた。

現実の時間的にはほんの数秒だったのかもしれないが、体感で測ったら数時間ぐらいに感じられた。

あの時、セフィロスと戦ってなんとか退いたところで『SAO』の創設者で黒幕でもある茅場と会話をしたところまでは覚えているのだが、その後はどうしたのだったか。思い出そうとしても、激痛と視界のノイズで記憶が埋もれてしまっていた。当時、世界が崩壊していくに従って自分の意識も朦朧としていたこともあって、そもそも正常に記憶されていなかったのかもしれない。

しかし、徐々に状況の異様さが追い付いてくる。

やや涼しい空気と一緒に、その違和感が肌の奥まで突き刺さって潜り込んでくるようだった。

誰かが、クラウドをこの世界に閉じ込めた。

と判断するのが妥当だろう。だが一方で、それはどれだけ困難なのだろうとも思う。まず、あの世界とこの世界は全くの別物。それは姿形が違うユウキや、この世界の自然物を見ればわかる。

何よりもまず、あの明らかに目立つ『樹』。樹齢何百年どころではなさそうな天を貫く巨木は、おそらくこの世界の重要な役割を担っていると思われる。それこそ、ゲームクリアの鍵となる存在かもしれない。だがしかし、それは可能なのだろうか。

ゲームが崩壊していたとはいえ、別空間にいた人間をまた別空間に移動させるなんて、軽々に行えるようなものなのだろうか。



それを実際にやった誰かがいる。

そんな気がしてならない。

ただ迷い込んだとは考えられない。何か明確な意図を持ってクラウドをこの世界に縛り付けたと考えると行動すべきだろう。

しかし、具体的にどうすればよいのかという考えが浮かばない。この世界について何もわかっていないのだから当たり前だ。

結局は手詰まりであった。

散々考えた末に導き出した答えが『わからない』なんて、情けなくて思わず鼻で笑ってしまう。

その時だった。

そんな様子に何かを察したのか、ユウキは気遣わしげながらも純粋な笑顔をクラウドに向けて、

「ないならさー！ ちょっとボクの家に寄っていかない!？」

「？ 家？」

「家といっても、ゲストハウスみたいなどころだけだね。もしまだ時間があるならちよつと遊びに来ない?」

「」

その提案にクラウドはまた悩みます。

提案自体は悪くはない。何もわかっていないのなら、色々知っていい奴に聞くのが一番手っ取り早い。本来のクラウドならそれができる。何故なら彼は、コミュ障だからだ。格好つけて、道行く人に話しかけることさえ難しい。というより無理だ。

話しかけたのに無視されるという事態に陥った場合、クラウドの精神はボロボロに砕けるほど傷つくだろう。せつかく勇気を振り絞ったのにそれが無意味に終わったら、クラウドの自尊心は一気に失ってしまう。

そんなことになるくらいなら、ユウキの言う通りに家にお邪魔するのも悪くない。

この世界をよく知ってそうで、ついでに既に話し合える仲にまで発

展しているユウキならば、これ以上の適任はいない。状況整理のためにも、その提案を快く受け入れるべきなのだろう。

剣で語り合った仲なのだから、信頼しても大丈夫だろう。クラウドはそう考えた。

「わかった」

「ホントツツ!」

そう言った瞬間、ユウキは嬉しそうにして飛び上がった。

そしてユウキは腰を降ろしているクラウドの腕を掴んで強引に立ち上がらせると、

「じゃあついてきて！　すぐそこだから!!」

「お、おい!」

あまりにも急すぎる展開に叫ぶクラウドを無視して、元気そのものようなユウキは問答無用で引つ張っていく。

正直、不安しかない。

わけのわからない状況に陥ってこの先何があるのかわからないのだから、不安になってしまいうのも無理はない。

けどまだ起こってもいない未来を不安視する前に、無邪気に笑いかけてくれる少女に手を引かれていくのも悪くない。

◇◇◇◇◇

閉じた瞼を透かして届いていた朧な光の渦が体を包み込んだ。

全ての初期設定が完了し、ただ幸運を祈りますという人工音声に送られて、足の裏の感触がなくなつて浮遊感のようなものが少年を襲う。

光の中から、徐々に異世界が姿を現す。深い闇に包まれた世界の上空に、彼は出現した。

よって、彼は問答無用で空へと投げ出された。

「え!？」

疑問を口にする暇もない。

上空を吹きすさぶ強烈な風はあつという間に少年の体を拾い上げ、そのまま大空へと飛ばしていく。

現地時間は夜中。

清々しいほど真つ暗な夜空の下、キリトの絶叫が炸裂する。

「どうなってるんだあああああああッッッ  
!!!??」

三六〇度で夜空展開中。

手足をバタバタと振り回すと空気抵抗が変な風に働いたのか、彼の体が訳のわからない方向に回転していく。

ぐるぐると回りすぎて何が何やらな視界の中、遠くの方で信じられないほどでっかい樹木が見えた気がしたが、今はそれどころではない。  
い。

「というか、そもそもどうやって安全に着地するんだろう。このままでは地面に激突してしまうが。」

「ちよ!? 待て待て待て待てツツツ  
!!!??」

と、恐怖心に体が支配されて顔が真つ青になったが、結局は為す術などなかった。

無意識の内に何かを掴もうと虚空へと手をひたすら伸ばしてなんとかこれから来る衝撃へと抵抗するのが精一杯だった。

ちなみに彼は、唐突な映像フリーズによって生じたバグによって本来の降下予定地点を大きく外れ、樹海のど真ん中に落ちることをまだ知らない。

### 第3章

現状の調査結果を報告。

調査を行った結果、ミッドガルネットワークに突如として発生した未知の空間は『SAO』と呼ばれる別次元の世界で作られた仮想空間であることが判明しました。その空間は調査に向かった者の活躍により消滅致しました。よってネットワークの回線状況も徐々に安定していくと思われれます。

しかし予期せぬ事態が発生。

調査に向かった者の意識が未だに元の身体へと戻らないため、仮想空間に取り残されている可能性があります。『SAO』と呼ばれる空間は完全に消え去ったため、別の空間に迷い込んでしまったと推測されます。前例のないことのため、装置を強制的に取り外すということが試みた場合、永遠に意識だけが仮想空間に取り残されるというリスクが生じてしまう可能性があります。調査に向かった者の記憶から逆探知を試みた結果、『Alfheim Online』と呼ばれる別空間に飛ばされたという情報を入手しました。

安全に調査に向かった者の意識を取り戻すため、『責任者』が自ら現地に赴き、彼のサポートをするという方向で救助にあたります。

最低限の必須事項は、彼の身の安全の保障。

各研究員は、サポートに向かった者のバックアップをお願いします。

前例のない事態に陥ってしまった以上、細心の注意と共にサポートに臨んでください。

◇◇◇◇◇

「バツバツ!?!」

ドスン!! という勢いよく地面に激突した音が聞こえた。

それが自分の顔面から出た音だということに気付いて、キリトは面食らう。

いきなり全ての映像が停止し、あらゆる方向でポリゴンが欠け、青白い閃光がノイズとなって視界の端を這い回った瞬間にモザイク状に全オブジェクトの解像度が減少した。その一瞬の出来事のせいで、こんな樹海の真ん中に落ちてしまったのだ。

「つつ〜ツ!!」

痛覚は現実よりも抑えられているはずだが、なんとなく無意識の内に痛みを感じてしまったらしい。

地面、木々に囲まれた土の上でキリトは尻餅をついた。大空から落ちるなんて経験、現実だとスカイダイビングくらいでしかできないだろう。しかし、キリトは仮想空間とはいえ、パラシュートもなく自由落下状態に陥っていた。

キリトの腕に震えが走る。

命綱なしのスカイダイビングなんて、普通に考えて恐怖でしかない。

が、それも数秒で収まった。

恐怖よりも先にこの世界へとやってきたという実感を得て安心したという感情の方が先行したらしい。無事に仮想空間へと降り立った安堵感に包まれた影響か、やたらと体が重たく感じられる。

キリトはその重みに従うようにゆっくりと背中から仰向けに倒れる。

寝転がって見上げると、無数の星達が見下ろすように空に広がっているのが見えるから今は夜なのだろう。

仮想空間と現実世界は、現実と同じ時間が流れている。現実で夜の時は仮想空間でも夜に、現実で昼の時は仮想空間でも昼にといったように、時間の変化によって景観が移り変わる設定になっている。時間とともに移りゆく世界の表情や移ろう景色を楽しむための設定は、どうやら『あの世界』から引き継がれているようだ。

エギルに話を聞いた時はまだ半信半疑だったが、今広がる景色を見ただけでこの『ALO』のモデリングの高精細さは『SAO』と何ら遜色がないように思える。

その再現力の高さに、思わずキリトは眼を閉じながらため息をつく。

「また来ちゃったなあ」

その言葉に含まれた感情は複雑だった。

二年間も閉じ込められたことによる疲労、死んだら現実でも死を迎えるという恐怖、そしてその世界を生き抜いたという事実。

それらがぐちゃぐちゃに混ざり合って、見えない感情に体が拘束されたような錯覚を感じる。地面に縫い付けられたように横たわるキリトは思わず苦笑する。

あれだけの恐怖を味わったというのに、性懲りもなく仮想空間へとやってきた自分に呆れているのか。

だが、あの世界との明確な違いは、この世界はライフがゼロになっても現実では死なないということ。そしていつでも好きな時にここから出られるという保証がされているということである。

しかし、ここは一体何処なのだろうか？

辺りを見回しても、チュートリアルでナビゲーターが言っていたような種族の街は何処にもない。建造物どころか、キリトの他に人はいなかった。

着地予定地が狂ったことに疑問に思う。何故そうなったのか、必ず原因があるはずだ。開始直後にバグに襲われるなんて、そんなの今後の運営に関わる大きな問題だ。

先程のオブジェクト表示異常、そして謎の空間移動。

あれが原因みたいだが、そうなってしまった理由はなんなのか。何の理由もなくあんな現象が起きるなんて思えない。何か必ず理由があるはずだ。

ソフトもネット環境も良好のはず。何かそこに不具合を起こす原

因となるものはない。ゲームハード一世代前の機械とはいえ、問題なく動く。

『ナーヴギア』が正常に稼動している以上、そこにも問題はないはずだ。

「」

と、そこまで考えたところで、キリトは思い当たることがあるのか目を大きく見開いた。

「ま、まさか、な」

キリトは片頬を引き攣らせながら、『あの世界』でのメニューバーを呼び出す動作を行ってみた。右手を上げて、揃えた人差し指と中指で下へとスライドした。

しかし、メニューは開かれない。

そこで、先程聞き流していた『この世界』でのメニューバーを呼び出す動作を試してみた。左手の指を下へとスライドさせると、軽快な効果音と共に半透明のメインメニューのウインドウが開かれた。

デザインは『あの世界』とほぼ同じだった。

その事実には、懐かしさと恐怖心の両方がやってきた。

デザインが同じなことによって、キリトの脳裏に不安が過る。ログアウトボタンは機能しているのか、そこが重要だ。

「あ、あった」

と、そんな心配は無用と言うかのように、メニューの一番下にログアウトの表示されたボタンが光っていた。一先ずゲームからの脱出不可能という不安要素は取り除かれた。

そして、キリトの予想は当たっていた。

「やっぱり、こんなことがあるのか」

何故、広大な森のど真ん中に落ちてしまったのか。何故、ゲーム開始と同時に不具合が起きてしまったのか。

その答えは、やはりキリト自身にあった。

「あの世界のセーブデータが、この世界に引き継がれてる？」

初期ステータスが異常だった。ほとんどのステータスが、マックス値に近かった。ゲーム開始時点でこの数値はどう考えても異常だ。データがバグってるんじゃない。

疑問に思いながらもキリトは見入るようにメニューを操作していると、ある事実にとどり着く。

それは、熟練度の数値だった。

その熟練度の数値が、SAOで二年をかけて鍛えた各種スキルの熟練度と一致している。

片手剣のステータスに、体術のステータス。その他釣りやら索敵やら、欠損しているものもあるがほとんどのステータスが『SAOキリト』と同じだった。

この世界はSAOを作った会社とは別の会社であるはず。わざわざ別のゲームにセーブデータを引き継げるなんてシステムを導入しているとは考えにくい。仮にそんなシステムがあったとしても、念のため本人の確認を取るはずだ。『別のゲームのデータをこの世界に引き継ぎますか?』という項目も出さずに勝手に引き継いでしまったら、ゲームバランスが崩壊する。

ではこれはやはり、『ナーヴギア』でゲームを起動したことによるバグなのか？

「わけがわからないな」

キリトはメニューから視線を外し、やや遠くを見た。



ここから何千、何キロメートルほど先には、この世界を象徴する『でっかい樹』がある。天を貫くほどの大きさの樹木。

そこに、『彼女』がいるかもしれない。

それだけを目的としてこの世界に降り立ったはずなのに、今は混乱しすぎて自分の頭の中は疑問で埋め尽くされている。何か疑問を払拭するための材料を探すものの、思考が止まってしまってこれ以上は進まなかった。

ならば切り替えるしかない。

今優先すべきことは、『彼女の救出』。そのための策を今から考えてから行動すべきだ。

疑問で埋め尽くされて真っ白になっていた脳みそを無理やり動かし、キリトはこの世界のことをよく知るために再びメニューを開いて目を通す。

もしも。

もしも、だ。

あの世界のセーブデータが引き継がれたというのなら、何か使えるアイテムも引き継がれているかもしれない。

例えばそう、『武器』とか。

「……ってうわ!？」

しかし、現実はそんなに甘くはないみたいだ。

「ま、そりゃそうか」

この世界でも使えるアイテムがあるかもと、そんな期待を込めてアイテム欄を開いてみたものの、そこに現れたのは文字化けした羅列。理解できない文字に意味不明な順に並べられた数字、どれがどれなのかすらも判別できないほど激しく文字化けしている。

そりゃ覚悟はしていたが、やはり考えが甘かったようだ。

下にスライドして全てのアイテムを確認していくものの、どれもこ

れも同じように破損してしまっている。

「っ!？」

いや、一つだけ例外があった。

それを見た瞬間、キリトの指がぴたりと止まった。

「ユイ」っ!？」

一見すれば、そこに表示されている文字を見ただけでは何のアイテムなのかは理解できない。少なくとも、第三者がそれを見ても他のアイテムと同じく文字化けした何かとしか判別できないだろう。

しかし、キリトには理解できた。

というか、キリトにしか理解できなかった。

『MHCP001』

その意味を知っているのは世界でキリトと、『彼女』だけだった。

彼はその項目に視線を固定した瞬間、無意識の内に震える指をその項目へと伸ばす。アイテム選択の効果音が鼓膜へと伝わってきた時、目の前に『小さなクリスタル』が浮かび上がった。

涙滴型の無色透明の水晶。

それは紛れもなく、『彼女』とあの世界で出会った《小さな女の子の魂》が宿っている『結晶』。

「ッ!!」

息を呑む。

このアイテムだけ他とは違う、キリトはそう確信していた。だからこそ、彼は試そうと思った。また、『あの子』に会えるかもしれない。『彼女』と一緒に育てた小さな女の子。短い時間だったが、家族のような時間を共に過ごした女の子の姿を思い浮かべただけで、キリトの目頭が熱くなってくる。

「神様、お願いします」

もう、目元から涙すら浮かべそうな表情で。彼は天に祈るように、そつとその『クリスタル』を二度押した。

パキン!! と。

唐突に、その手の中にあつた結晶からそんな音が聞こえた。

「ッ!?!」

キリトは目を見開いて立ち上がる。

クリスタルから発せられた音につい不安になってしまったが、次第にその心配はなくなる。

水晶がキリトの手から離れると数メートルほどの位置に停止して、純白の光が辺りを照らす。光が強くなることにそれは明確な形へと変貌していく。

長い黒髪に、純白のワンピースを着込んだ『小さな女の子』。

瞼を閉じていて眠っているように見えたが、それは紛れもなく彼が知っている女の子だった。

じわじわと、キリトの体の内側から希望が滲んできた。

やがて、女の子の両目が静かに開いて真っ直ぐにキリトのことを見つめた時、彼の頬に一粒の涙が伝っていた。

情けない姿に見えたかもしれない。なんなら、自分の姿はあの時とは全く違う。髪型に服装、耳まで尖っていて誰なのかわかりにくい姿をしている。

それでも、彼を見ている女の子からすればその姿はあの時と全く変わらない。その瞳に宿る勇ましさは、紛れもなく彼のものだった。

彼を見た瞬間、女の子は今にも泣きそうな子供のような声でこう言った。

「また、会えましたね。パパ」

小さな女の子の声が聞こえた。

たったそれだけで、少年の涙腺が熱を帯びた。涙を流した姿を見せないようにするために、一度顔を下げたから目元を拭くと、優しく笑いかけながら静かに囁いた。

「おかえり、ユイ」

◇◇◇◇◇

「それでね！ ボクは他のVRMMOもいくつかやってたんだけど、間違いなく最悪だったのはアメリカの『インセクサイト』ってやつだよ！」

クラウドはどう反応したら良いのか迷っている。

難しい顔をしながら、昼と夜の区別がいまいちつきづらい仮想空間に作られた街中を歩く。一応時間帯は夜に設定されているせいか、行き来するプレイヤー達の足取りは心なしか忙しい気がする。おそらく、ログアウトするための準備に取りかかろうとしている前段階なのだろう。

しかし、それ以上になんか目立っている気がして落ち着かない。

横を通りすぎるプレイヤー達が先程からクラウドを見てくる。そんな注目されるような人間ではないと思うのだが、誰もが皆クラウドの姿をチラリと見てくる。珍しそうな視線をぶつけられて、クラウドは少々悪寒のようなものを感じていた。

できれば、自分の自意識過剰の被害妄想であってほしい。それはそれで苦しむことになるが、皆自分のことを実は見てませんでしたで終わってくれた方が何かと楽に感じられる。ただの思い込みだったとなれば、安心感が得られる気があるからである。

「なんで最悪かって言うと、虫！ 虫ばっか!! モンスターが虫なのはともかく、自分も虫なんだよ!? ボクはまだ二足歩行のアリッコになっただけだ——」

「現状、こつちの方が最悪です。」

確実に目立ってる気がする。ユウキが人目を気にせず話してるからというのはいくも考えにくい。それもあるのかもしれないが、行き交う人々はクラウドの方に注目している。ユウキの話し声はその注目度を高めている。

とりあえずわかったのは、そのインセクサイトやらなんやらが最悪でしたという話だけだ。『SAO』が発売されて以降、新たなVRゲームが続々と発売されたという話も聞いたが正直自分の世界とは関係ないのでどうでもよかった。アメリカってなんだろう？ って思ったが、別世界の地名かなんかだと思われる。

それはいいとして、ちよつと人目が気になり始めたクラウドは出来るだけ早く目的地にたどり着くように早足になる。

「あ、待って！ ちよつと待って!!」

それに気付いたユウキもクラウドに合わせてるように歩く速度を上げる。

「そんなに急いでどこ行くの?」

「あんたの家」

「あはは！ そうでした!」

からかうように言ってくるユウキに頭が痛くなる。

わかっているくせに、クラウドの様子を見て敢えての冗談交じりの質問に彼は投げやりに答えた。

剣を交えた仲とはいえ、やはりこの子はどこか慣れない。少し似て

いる人間を知っているからだろうか？

と、ユウキはそんなクラウドに小首を傾げて、

「もしかして、皆に見られてるの気にしてる？」

「別に」

「まあでも仕方ないよ。クラウドのアバター、どっからどう見てもただの人の姿なんだもん。妖精がモチーフのこの世界で普通の人間が歩いてたら人目につくのは無理ないよ」

「」

流された。

気にしないようにしてたのに、ユウキはお構いなしに注目されている原因を明かした。

しかし、だとしたらまずいことになった。

このままだとクラウドはどこに行っても注目的になる。なんだろう、『あの世界』でのトラウマが甦るようだ。救援者だのスパイだの、チーターだのビーターなどと言われて注目されていた頃と似た状況に陥るなんて、『ここならやり直せる！ 新しい人生が俺を待っている！』的な期待がたった今打ち砕かれた気分だ。

クラウドがうんざりした表情になると、ユウキは喜色いっぱい顔で、

「でも、クラウドが注目されちゃうのもわかるなあー」

「？」

アバターがおかしいからだろ？ という眼差しを向けるも、ユウキは覗き込むようにクラウドの顔を見ながら、

「だってクラウド、すごいイケメンなんだもん！」

「え？」

「初期段階では種族の選択しかできなくて容姿は無数のパラメーター

からランダムで生成されるのに、クラウド恐ろしいくらい顔が良いもん！ 一応現実の顔も参考にして作られているって聞いたことがあるけどさ、それってつまりクラウドって現実でも顔が良いってことでしょ!? 羨ましいなあー、そんなんじゃあれでしょ？ 女の子もほっとかないでしょ！」

「別に」

「うくん、クラウドだったら、グイグイ引っ張っていくようなタイプの子がぴったりだと思うなあ〜」

「」

にっこりと笑ってそう言った。

今自分が何を言ったのか、自分が一体どんな人間なのかも知らずに。

ユウキは自分で言うっておきながら気付いていない様子なのか。天然って怖い。

「はあ」

完璧なまでに無邪気な言葉に、クラウドは思わずため息をついた。改めて思ったが、こういうグイグイと引っ張っていくような女の子の話に付き合うのは思ったより疲れる。

◇◇◇◇◇

ユウキの住んでいた家は、大きな通りから一本小さな道へ入った所にあった。石畳の道路にある小さな宿屋。

どうやらアパートメント型の宿屋の一室を借りているらしく、彼女が立ち止まったのは三階建ての建物だ。壁の表面は薄いベージュ色に塗られた煉瓦作りで、どこか歴史的建造物のような雰囲気が出ている。

「ここだよー！」

「ああ」

ユウキの案内でクラウドは宿屋の中に入る。彼女が泊まっている部屋は三階とのことだったが、一階は酒場兼レストランのような場所であったため、おそらく寝泊まりできる場所は二階三階の二フロアのみなのだろう。

宿屋の主人は時間も時間だからか居眠りの真っ最中。見た感じNPCのようだが、客の接待もせずに堂々と職務放棄するとは情けない。

「この部屋だよー！」

重たいバスターソードを背負って延々と続く階段を登っていくと、先行していたユウキがずらりと並ぶドアの一枚の前に立っていた。古めかしい木のドアにユウキが立つと、ポケットの中に手を入れてゴソゴソと鍵を取り出した。

「ただいまー！」

鍵を差し込んでドアを開けると同時に元気よく声をかける。

「お帰りなさいユウキ」

「ただいま シウネー！」

と、部屋の奥から一人の女性の声がユウキを出迎えた。

「遅かったですね、一体何をしていたんですか？」

キッチンスペースから呆れながらも優しく落ち着いた声色が返ってくる。白に近いアクアブルーの髪を両肩に長く垂らし、伏せた長い



睫毛の下には穏やかな濃紺の瞳が輝いている。

彼女はキッチンでカチャカチャと使い終わった皿を洗っている。

「ごめんね、いろいろ回ってきたから」

「もう夕食の準備ができてますよ。あなたも早く召し上がって——」

と、彼女は一旦皿を洗う手を止めて振り返った時、クラウドの姿を視界に入れた瞬間に体全体まで止まった。

シウネー、と呼ばれた女性はクラウドのことを凝視する。

しばらく見つめると彼女は礼儀正しくクラウドに会釈をしてきたので、クラウドも慌ててそれに倣おうとしたところで、

「紹介するねクラウド。ボクのギルド、『スリーピング・ナイツ』のメンバーの一人、シウネー」だよ！」

ユウキはシウネーの元まで歩み寄ると右手を大きく横に伸ばし、クラウドの方を振り向いてそう言った。

「それで、このお兄さんはクラウド。さつき会ったばかりだけど、友達だよ」

再び半回転して、今度はクラウドを手で示して紹介した。

友達、という単語にクラウドは一瞬瞬きをするが、それを聞いたシウネーがまあ！ という感じで笑いかけた。

「どうぞ入ってくださいクラウドさん」

シウネーが勧めてきたので、クラウドは軽くお辞儀をして部屋の中へとお邪魔する。

彼女達が借りている部屋はワンルームではなく、家族や友人もまと

めて泊まれるような複数の部屋がまとまっている形式を取っていた。宿屋とはいえ誰かの部屋にお邪魔するなんて滅多にないため、クラウドはどこか新鮮な気持ちになっていた。

「それでは、クラウドさんの分の夕食もご用意致しますね」

リビングに入った途端にシウネーはそう言った。それを聞いたユウキはお腹ペコペコとお腹をさするが、それに対してクラウドはわずかに眉をひそめて、

「悪いが、金を持ち合わせていない」

「そんなのいりませんから遠慮しないでください」

「そうだよクラウド！ ほら、座って座って!!」

クラウドはつい遠慮してそのありがたい申し出を断ろうとしたが、二人はすぐに話の軌道を修正する。

ユウキはクラウドの後ろへと回ると、問答無用で背中を押す。わずかな抵抗をするクラウドだったが、グイグイと押されていつて強引に椅子へと運ばれる。

素直に話が良い方に進みすぎててなんか猛烈に不安になる。シウネーという女性もなんも疑問に思わずに初対面の相手にご飯をご馳走するなんていい人すぎて逆に怖い。後で多大な請求をされるんじゃないかとか、この期に及んで今の状況が何かの罠なんじゃないかと思いはじめていた。

しかし、シウネーはそんなクラウドを気にせず夕食の準備に取りかかる。

ユウキもユウキでクラウドの前に向かい合うように座ると、構わず話しかけてくる。シウネーの作るご飯はうまいんだ！ という話題を振られてクラウドはただそうかとしか返すことができなかったが、シウネーはそんな二人を見て優しげな笑みを浮かべていた。

彼女の目にはほのぼのとした光景に見えているようだが、当の本人に

とっては地獄絵図である。

つい先程知り合ったとはいえ、コミュ力が足りていないクラウドでは彼女の会話相手になることはできない。何て返せばよいのか、どうそこから次の会話へと繋げればよいのか、そこらへんの問題ばかり考えすぎて思わずクラウドはやや俯き気味になる。視線を合わせただけで口が堅くなる。

ユウキはそれでも話題を振ってくるためなんとか日常風景が成り立っているが、クラウドからしたら一分一秒でも早く次の展開へと進んでほしいと願うばかりである。

「ところで、他の皆は？」

「出かけています。この時間帯でしか現れないレアモンスターを倒しに行くみたいで、場所も遠いし時間も遅くなるとのことです。今日は別の所に泊まってくるそうです」

「そっかー」

他の皆も紹介できなくて残念そうにするユウキ。

そんなユウキを他所に、クラウドは安心したようにため息をつく。

これ以上全く関わりのない人達に囲まれてしまったら、コミュ障が発動して何も喋ることができずに気まずい雰囲気を作ってしまうことになる。そんな展開にならずに済むと、深い安堵を覚えるクラウドであった。

◇◇◇◇◇

ユウキが楽しそうに会話をしていたり、クラウドが無心になりながらその話を聞いていると、シウナーが食器皿をたくさん載せたトレイを両手で持ってキッチンから出てきた。

白いシチュー。

仮想世界特有の食材で調理された料理からいい匂いがする。その香りがより一層食欲をそそらせて、クラウドは思わず唾を一気に飲み

込む。

「はい、どうぞぞ」

と、シウネーがそんなクラウドにスプーンを差し出してきた。クラウドは無言で頭を下げて受け取ると、シウネーは微笑みながら席に着く。

「さあどうぞ、召し上がってください」

シウネーに料理を勧められて、クラウドとユウキは揃って『いただきます』と声を出した。

クラウドはスプーンを手にとってシチューをすくうと、全く無音で唇をつけ、一拍の間をおくと、

「お味の方はいかがでしょうか？」

「旨い」

目を見開いてクラウドはそう呟いた。

溢れ出るように言ったその言葉は、クラウドなりの料理評価だった。普段、あんまり料理に対して関心がないクラウドが思わず旨いと言ってしまうほどの美味しさ。

食べたこともない味に感動して、それ以外の言葉が出てこなかった。

そんなクラウドを見たシウネーは優しく微笑んで、

「有り合わせの物で手早く作ったんですけど、お口に合って良かったです」

有り合わせの物で手早く作ってこの出来とは恐れ入る。クラウドは料理評論家ではないが、彼女の作った料理は三ツ星に値する。

何より、クラウドはシチューが好物だった。

特に好きなのは、『母が作ってくれたシチュー』だ。

落ち込んだ時、クラウドの母はいつも美味しいシチューを作ってくれた。何か辛いことがあると、あの料理を食べただけで心が回復できた。ソルジャーになれず、『一般兵』にしかなれずに故郷へと帰った時も彼女はシチューを作ってくれた。ソルジャーになれなかったことを恥じ、自分の情けない姿を晒しても、母親は『自慢の息子』として温かく迎え入れてくれた。

母の愛情が込められたシチューはどの高級料理よりも美味しく、一口食べただけでしみじみと子供時代の母との事を思い出し、しんみり温かい気持ちになった。

また食べたい。そう思うことは何度もあった。

でもその前に、クラウドの母は亡くなった。

尊敬していた人に、彼の母親は奪われてしまった。

もう二度と食べられないと思っていたのに、何故かシウネーが作ってくれたシチューを食べた瞬間に母の事を思い出して懐かしい気持ちになれた。

まさか、仮想世界の料理で母の手料理を思い出すなんて思ってもみなかったらう。彼はそのシチューを深く味わうと、微かに笑みを浮かべていた。

「あ、笑ったー！」

「え？」

と、ユウキが唐突にそんなことを言ってきたのでクラウドは首を傾げる。

「クラウド、さつきからずっと難しい顔してたけど、ようやく笑ったね

！」

「」

少女はそう言った。  
笑って、純粹に笑って。

真つ直ぐにクラウドのその笑顔を見て。

クラウドが自分でそう自覚したのは、それから五秒も経ってからだつた。

自覚した瞬間クラウドはわずかにシチューの皿に視線を落とした。ほっぺたがわずかに赤くなっているような気もする。

そんなクラウドを見て、少女はまた笑っていた。

とても嬉しそうに。



「アルブ Heim?」

「ううん、『アルヴ・ Heim』! 『妖精の国』っていう意味で、その名の通りプレイヤーは九つの妖精族を選んで、世界樹と呼ばれる巨大な樹木の頂点にあるとされる空中都市を目指すっていうゲームだよ!」

「..そうか」

..ここは『アルヴ・ Heim』と言うのか、とクラウドの口からなんとも間の抜けた咳きが出た。

現在彼は簡単にはあるがこの世界の知識を聞いている。

情報収集は攻略の基本。チュートリアルを真面目に聞かずにこの世界にやって来てしまったなどとたaramを述べて、この世界のことを教えてもらっている。結構無理な言い訳な気もしたが、ユウキ達はすんなり信用してくれた。わかるよー、ゲームを早くやりたくてチュートリアルとか聞き飛ばしちゃうよねー、とむしろ共感してくれた。

聞いた限りでは、この世界はソードアート・オンラインを元に制作された仮想空間ではあるようだが、あの世界とは違ってここでは死んでも現実では死なないらしい。他にも、ちゃんとログアウトができる

ように完璧に安全が保証されているとのこと。

しかし、クラウドは疑問を抱いた。

何故自分はそんな世界に降り立ったのかということだ。

何の予兆もなくこの世界に放り出されたクラウドは、自分が現在何処にいるのかもわかっていなかった。誰かが茅場と同じようにこの世界に閉じ込めたという仮説を立てたが、なんとなくその可能性が高まった気がした。

その証拠に、自分のメインメニューウィンドウにはログアウトのボタンがない。

クラウドはあの世界でのメニューウィンドウを開く動作を試してみたが、何も起こらなかった。それを見たユウキがこの世界でのメニューの開き方を教え、クラウドは言う通りに左手の指を振ってみた。すると、効果音と共に半透明のメインメニューウィンドウが開かれた。デザインはあの世界と同じだったので見方についてはそれほど困らなかったが、『ログアウト』と本来表示される場所には何の文字も書かれていなかった。

しかし、ユウキ達は普通にログアウトが表示されているようである。

クラウドのメニュータブだけおかしいことになっているというのがわかると、その事に関してはユウキ達には明かさないことにした。

面倒事に巻き込みたくないという、クラウドなりの善意だった。

ユウキ達には『ログアウトボタンがあった』と嘘をつき、何の問題もないような平然とした態度で振る舞う。

話を戻すが、何故それで閉じ込められたと思うのか、についてだ。他の皆はログアウトできるのに、自分だけできないというのは何かなんでもおかしすぎる。

“誰かが何か明確な意図を持ってクラウドのメニュータブからログアウトの項目を消した”、としか思えない。この世界に呼び寄せた、この世界に閉じ込めた、それを実行した誰かがいるとしか考えられなかった。

運悪くこの世界に迷い込んだ可能性も考えられなくはない。それ

でも現段階では、何者かがこの世界にクラウドを縛り続けている、と仮定して動く。その後で新たな情報が入り次第、徐々に修正していけばいい。

もしクラウドの読み通り、別空間から誰かが自分を呼び寄せたのだとすれば、今いる場所は敵地。クラウドはその真ん中へ降りてきたという訳だ。

下手に動けば、敵に自分の位置を知らせてしまうことになる。脱出を試みようとした場合、閉じ込めた誰かが何かよからぬ妨害をしてくる可能性もある。茅場だって、皆を仮想空間に繋ぎ止めておくために『死』という鎖を全プレイヤーに植え付けてきたのだ。このゲームの制作者も何かしらの方法でプレイヤー達の行動を常に把握していると考えた方がよいだろう。

慎重に行動せねばならない。

脱出の糸口を見つけ出すために、この世界での明確なクリア方法を知ろう。

まずはそこからだ。

「このゲームをクリアするにはどうしたらいい？」

「うーん。ここはSAOとは違ってこうすればゲームクリア！ っていう感じのゲームじゃないんだ。探索とか、種族間競争とか、そういうのがメインのゲームだから。強いて言うなら、この世界の中央にある『世界樹』っていうでっかい樹の頂点にいる『妖精王オベイロン』っていう人に謁見して、滞空時間が無制限となる高位種族『アルフ』に進化することがこのゲームの大目標、ってところかな？」

クラウドはゲームについては実は詳しくはない。

ゴールドソーサーでアーケードゲームを遊んだことはあるが、こういった家庭用のゲームには手をつけたことがなかった。そもそもゲーム自体あまりしたことがない。故に、ゲームとはクリアするためにあるものだと認識していたので、ユウキの説明を聞いて少々混乱していた。



クリアが目的ではないゲームってそれ何の意味があるんだ？ と、楽しさがいまいち理解できなかったが、どうやらそうだったゲームもあるのだと何となく理解すると視線を正面のユウキから横の窓へと移す。

「あれがその『世界樹』か？」

「うん。あそこの頂上に妖精王がいて、その人に会えば高位種族に生まれ変われるんだ」

「そうか」

そう言った直後、クラウドは急に席を立った。

突然の行動にユウキは硬直してしまっただが、すぐに我に返って彼の手をガシイ！ と掴んで動きを止めさせた。

「ちよ!? ちよつとどこ行くの!?!」

「『世界樹』の上に行く」

「ええッ!?!」

あまりにも唐突な返答だったせいか、ユウキはそんな声を出した。少々呆れたような視線を向けるも、クラウドの表情は一切変わらな

い。冗談と思っていたのだが、どうも何か事情があるらしい。

だが、クラウドが言ったことはあまりにも馬鹿げているわけで、

「それは多分全プレイヤーがそう思ってるよきつと。でも、無理だよ」  
「どうして？」

「世界樹に登るには、世界樹の内側、根本の所にある大きなドームを通って行かないといけないんだけど、そのドームを守っているNPCのガーディアン達が凄く強いんだ。今まで色々な種族が何度も挑んだんだけど、案の定どの種族も全滅しちゃったんだ」

「そのガーディアンというのは、そんなに強いのか？」

「強いどころじゃないよ、だって考えてみてよ？ このゲームは正式サービスが開始されてからもう一年も経つのに誰もまだクリアできてないんだもん。それくらい敵は強く設定されている上に、一体だけじゃなくて何体も襲ってくるんだよ!? 大勢で挑んでも突破できないんだから、ほぼ不可能に近いね」

クラウドは少しだけ黙り込んだ。

ユウキは懇切丁寧に、それでいてどこか落ち込み気味に言葉を紡いでくれた。まるで、力になれなくてごめんとでも言うかのように。

このゲームの大目標といえるそのクエストをクリアすれば何か変わるかと思つたが、ユウキの表情からして絶対攻略不可と思われるぐらいの難易度に設定されているのだろう。一年も誰もクリアできていないのなら、その難しさは容易に想像できる。

実際、世界樹の頂上に行ったらこのゲームから解放されるなんて確証もない。

特別なスキルが与えられるとしか言われてないし、そこに行ったらこの世界から脱出できるなんて誰も言っていない。

口から出た言葉は、無音だった。

彼は目を閉じて、天井を見上げて一言だけ呟いていた。

面倒だな、と。

冷めた表情をして疲れたように。途方に暮れたように突っ立っているクラウドは肩を落とす。決勝の試合で敗北した側の選手のように、顔に手を持ってきて大きいため息をついた。

「あ、ああ！ えっと！ ご、ごめんねクラウド!! 話の腰を折るようなこと言っちゃってツ!!」

おろおろして両手をバタバタと振りながら謝るユウキであったが、完全に萎えているクラウドはネガティブモードに突入していた。

こうなってしまうたらクラウドはとことん落ちてしまう。元から精神面が弱かったのもあり、マイナスな考えが少しでも入ってしまうと思考が散漫になって一気にダメになる。何を考えてもマイナスに捉えてしまい、もはや気まずい雰囲気生まれ始めている。

あわわわわ！ とユウキは慌てた様子で何とかしてクラウドの機嫌を取り戻そうと奮闘していると、

「あ、あのう」

身動きのないクラウドにユウキがおろおろとしていると、場を和ませるようにシウネーがようやくやく会話に加わった。

「もう時間も遅いですし、続きは明日の朝にしませんか？」

「そ、そうだね！ もう時間も遅いし、そろそろ落ちないとだね!! クラウドも、それでいいよね？ 宿泊代はこっちで出すから、ログアウトするために今日はここで寝泊まりしない？」

シウネーが神業的なフォローを割り込ませ、クラウドとユウキの騒ぎが和らぐ。ナイスアシストと言うかのようにユウキは目を輝かせると、即座にクラウドにもその提案を提示する。

人という生き物は気を遣ってもらうと、それに甘えないと失礼だと考えてしまうが故に気持ちをプラスの方へと切り替えてしまうものである。

「ああ」

考えるのに疲れた、という顔をしながらクラウドは頷く。

「よかったあー！ じゃ、こっちに来て！ ちょうど一部屋空いてる

んだ!!」

そう言うとユウキはその部屋に案内すべくクラウドの手を取る。クラウドを部屋へとつれていく前にユウキはシウネーの方を一瞬振り向いて、『ありがとうシウネー』とアイコンタクトを取ると、シウネーは気にしないで言うように微笑み返した。扉がいくつも向かい合っている中、ユウキはその中の一つを開ける。

奥にベッドが一つだけあり、他には特に変わったものはなかった。とりあえず、寝起きするだけなら十分すぎる設備だけが備えられていた。

「この部屋だけ誰も使っていないから、自由に使って！」

「ああ、助かるよ」

「じゃあまた明日ね！今日は色々ありがとう！おやすみークラウド」

笑ってドアをゆっくりと閉めるユウキから目を離して、クラウドは横の窓から夜空を眺めた。

「まだ続いているのか」

何気なく、そう呟いていた。

ユウキ達には隠すことになってしまったが、今のクラウドはログアウトができない。よって暇潰しのために窓の外を覗いてみたが、何をしても満たされることはない。

不安を払拭しようとしても、精神面が弱いクラウドではそれができない。

夜空はとても綺麗ではあったが、それでも偽物だ。現実に近い星空が広がっているものの、微妙に違う夜空に、クラウドは口の端を歪めてしまう。

「偽物には偽物がお似合いってことか」

クラウドはほんの一瞬、わずかに一瞬だけその光景の前に息を止めた。

結局は、これが現実。

皮肉が込められてそうな現状にクラウドはただ笑うしかなかった。ソルジャーになれなかった偽物には偽物の世界での活躍を、なんて暗いことまで考えてしまう始末。そんなにネガティブな思考になってしまうのは、全てが終わったと思ったのにまだ仮想世界に囚われているからだろう。

お前にはここがお似合いだ、なんて世界そのものに言われている気分だった。

「」

くだらない、とクラウドは鼻で笑った。

被害妄想にも程があるだろうと最終的に自分の中でそう結論付ける。

バスターソードを背中から離して近くの壁に立て掛けると、そのままベッドの上へと寝転がった。

ぼんやりと天井を見つめていると、クラウドは目を閉じる。暗闇の中、コオロギの鳴き声に似た音が聞こえてくる。その鳴き声は人によつてはうるさく聞こえるかもしれないが、クラウドは一々そんなことを気にしなかった。

なんかやけに全身に疲労が溜まっているような気がする。

その理由を考えて、やがて一つの答えを導き出す。優しい闇のまどろみの中、睡魔に囚われた幼い子供のようにはんやりとして、

（あいつとの戦い、楽しかったな）

無意識の内に、彼はゲームを楽しんでいた。

そしていつの間にかクラウドの心の中には、『見えない何か』が生まれつつあるようだった。

それに気付かないまま彼は眠気に身を委ねた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

真夜中。

人の声はすっかり聞こえなくなり、冷たい夜風が窓のカーテンを静かに揺らす。

遮光カーテンによってベッドの近くにある窓は閉ざされていたが、それも完璧ではない。

カーテンから漏れた月の光が、薄くクラウドの部屋全体を照らし出す。今まで物の輪郭しか見えなかったが、色や質感の違いまでわかる程度の薄暗闇へと変貌していく。

小さな吐息。

その音を辿ると、ベッドの上で眠るクラウドに行き当たる。彼は暑いのが苦手なのか、毛布もかけずに眠っていた。窓も開けて、部屋の空気を常時換気させている。

今日だけで色々なことがありすぎて疲労が溜まっていたのもあり、彼は完全に熟睡してしまっていた。

しかし、だからこそクラウドは気付くのが遅れた。

何者かがクラウドのすぐ隣で自分の顔を覗き込んでいるということに。

「ッ!?!」

クラウドはすぐさま飛び起きる。

人の気配を感じ取ったクラウドは数瞬遅れてベッドから飛び跳ねるように起き上がると、近くの壁に立て掛けてあるバスターソードへと手を伸ばす。

疲れていたせいで人の気配すらも感じ取れなかったなんて、と奥歯を噛み締めながらもクラウドは「そいつ」に警戒する。

「だが、いつまで経ってもそいつは何もしてこない。」

これだけの動きを見せたのに、そいつは何もしないどころかただクラウドを見つめている。明確な敵対心をさらけ出しても、目の前の相手は襲うことが目的ではないのか、背筋をピンと伸ばして立っている。

剣を手にしたのにただ突っ立っているだけなんて、明らかにおかしすぎる。

「」

「なんだこいつは？」と疑問に思っていると不意に風と共に窓から月灯りが射し込んだ。

影が明確になり、クラウドはゆっくりとした動きで目の下をゴシゴシと拭った。動きが遅いというよりは、力が入っていないように見える。

警戒する必要もなくなった、そんな感じで。

彼はしばらく自分の顔を覗き込む『そいつ』をぼんやりと眺めていると、

「お久しぶりですクラウドさん！」

「片眼鏡を掛けた少年」は緩やかに言っ、久々の再会を祝うように頭を下げた。

## 第4章

空の色は闇夜の海のような黒色へと変わっていた。

今宵の月はいつもより弱く光っている。しかし、「そこ」を照らすには十分すぎるくらいだった。

天に近い場所に吊り下げられている『鳥籠』。いや、『檻』と言った方が正しいかもしれない。

そこに入られているのは鳥ではない、『人』だった。見た目は人には見えないが、彼女は紛れもなく人である。

「はあ」

彼女は細い格子の奥に見える月を眺めている。今宵は三日月。嘲笑う口に似た細い月の光は弱すぎる。彼女がいる場所には屋根がなく、壁もなく、全て煌めく金属の格子でできている。雨風も凌げず、眩しい太陽の光すらも遮らせない。

だが、そこはシステムで人体に負荷がかからないように設定されているようで特に問題はなかった。格子は見かけだけで、実際は壁と言ってもいい。格子と格子の間から手を出そうものなら、脱走防止用のシステムが作動し見えない壁を作り出す。

そもそも、この世界に広がる光景はどこまで行っても偽物。太陽光とか、雨とか風とか、そういう自然すらも全て人工的に作られたもののため、ボタン一つでその設定を変えられる。雨が降らないようにしたり、風は適度な強さにしたたり、光は目に負担を与えないほどの明るさにしたりなど、自由に変更できる。

「」

そこに閉じ込められた少女「アスナ」は一人椅子に腰かけて、ぼんやりと遠い街の灯りを眺めている。



下に広がる世界は、一体どんな所なのだろう？

何度見てもその光景は星の瞬きにしが見えない。手を伸ばしても決して届かない、果てしなく遠い存在。自分がその光景を見ることは一生ないのかもしれないというほど、その街灯りは遠すぎる。

「」

掌を握って、もう一度開く。

たったそれだけの動作にアスナはわずかに目を細め、唇を強く噛んだ。

かつてこの手にあった剣は、ここにはない。あの世界で生き抜くために握っていた剣は、彼女を強くした。初めて自分の意思で仮想世界に降り立ったあの時の事は今でも忘れない。閉じ込められたことに絶望し、どうせ死ぬなら恐怖に負けずに立ち向かって死のうと考え、死に急ぐように戦ってきた。

それを止めてくれた少年のことも忘れない、忘れるわけがない。

彼がいたから、今自分は生きている。共に戦い、共に背中を預けあい、そして共に心を許した。彼と一緒になら、いつか幸せな日常を送ることができるかもしれない、と本気で考えていた。

そう、剣を握っていた頃のアスナなら。

無力な存在となってしまう今の自分には、そう考える資格すらない。と彼女は思う。

「キリト君」

小さな唇が、ポツリと最愛の人の名を紡いだ。

彼と一緒にいた時間は、本当に幸せだった。一緒にゲームを楽しんで、共に暮らすための家を購入して、そこで小さな女の子を本当の子供のように育てた。短い時間ではあったが、彼女にとってはそれは大切な思い出だ。

いつかその思い出が現実になればいいなとさえ思った。

しかし、現実はその少女の願いを予想もできない方法で粉々に打ち砕く。

「っ!!」

現実の世界で起きている出来事は全て聞かされた、この世界に閉じ込めた本人によって。

SAOが終了して生き残ったプレイヤー達のほとんどが無事にログアウトできた中で、未だに自分は昏睡状態だった。

この世界の《システム管理者》の思惑によって、自分はまだ仮想世界に閉じ込められている。それを利用して現実では今、望まない結婚が行われるように事が進んでいるということを知られた。

この世界に閉じ込めた「アイツ」は、自分を手に入れることを目的としてこんな非人道的な計画を立てた。目的は他にもあるようだが、メインはアスナを手に入れるためだった。

その計画を聞かされ、彼女は再び絶望した。まるで人形のように扱われている現状に。

「どうして」

こんなことに、と。

アスナは震える唇で呟いていた。

「」

できうる事なら、どうかしてその運命に抗いたかった。

だけど、無力な自分ではそれは絶対に不可能だと思った。

「クラウドさんなら、どうしてたかな？」

アスナの脳裏には最愛の人の他に、あの「青年の顔」が浮かぶ。第

一層のボスを軽くあしらうだけの正体不明の力を持ちながら、死と隣り合わせのあの世界で誰とも群れずに戦い続けた青年。

ビーターという不名誉な烙印を押されて不当な扱いを受けたというのに、『興味ないね』の一言で切り捨てる強さを持つ青年。

何故彼の事を思い出したのか、自分でもわかっていなかった。

でも何故か、自然と彼の姿を思い浮かんでいた。

初対面にも関わらず自分をあの気持ち悪いタコモンスターから助けてくれ、それだけでなく黒幕をたった一人で打ち倒し、そして強大な敵にも立ち向かった彼ならば、この状態を打開できたのだろうか？

きつと、できたと思う。

アスナにも、キリトにも、全プレイヤーができない事も、あの人ならできるとような気がした。

別世界からやって来た彼ならば、運命に逆らうことができるかもしれない。

なんてことを思うが、今そんなことを考えてもどうにもならない。

現実には甘くない、都合良くヒーローが駆けつけてくれるなんて展開はおとぎ話だ。そもそも別世界からやって来たということさえ簡単な作り話かもしれない。

信憑性のないものに何かを望んでも、現状が良くなるなんてことは、決してない。

「ッ!!」

結局、何もできない。

誰にも頼れない、何も変えられない。その悔しき、自分の無力さに腹が立ち、彼女は自分で自分を責めて、そして誰もいない檻の中で涙を流した。

恐怖に怯え、ボロボロになった彼女の涙に誰も気付かない。決して誰にも届かない『助けて』という願いが少女の口からこぼれても、その願いは闇に消えていく。

その時だ。

突然だった。

ゴオツ!! と。

薄暗い雲の中から『光』が現れた。

「えッ!？」

唐突に投げられた変化。

その急な出来事にアスナは格子へ身を近づけ、食い入るように『光』を眺める。

今まで見たことがなかった光景に、アスナは思わず驚愕していた。だが、アスナが本当に驚いていた理由は、その『光』そのものではない。

その『光』の中にある『何か』。

その正体は

「『人』？」

暗い星空に一瞬現れる流れ星のような輝き、その中に『人』のようなシルエットがあった。あまりにも距離は離れていて顔ははっきりとはわからない。

だがこれだけはわかった。

輝きの中にあるのは、『女性』だ。

シルエツト越しだから正確な姿はわからないが、髪が背中まで伸びているのが見えた。それだけでもあれは女性だと判別できる。

疑問を感じる暇もなかった。

思いもよらぬ光景を前に呆けていたアスナだったが、その輝きは容赦なく真上から地面へと投下していった。

「」

一瞬の出来事ではあったが、アスナは最後まで見送っていた。闇を引き裂くようにやってきた、流れ星を。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「いたたッ!!」

全身を蝕むダメージのせいで、しばらく起き上がれなかった。腹筋に力を入れて上半身だけ起き上がり、周囲の状況を確認する。

森の中だった。

人工物らしい建物はどこにもない。天空の色も闇に染まっている。静寂の黒。周りに広がっていた景色を眺め、『彼女』は漠然とした答えを得た。

「やって、来れたんだ」

ここからどうしたらいいのか、彼女にはわからない。

端から見れば、新規のプレイヤーがゲームを開始してこの世界に降り立ったように感じたかもしれない。だが、彼女はここが何処なのか一切わかっていない。

自分が今何処にいるのか、これから何が起きるのか、全くわからない。

「ここに……いるのね」

しかし、やるべきことは決まっている。

この世界に降り立った目的、それを達成する方法はいくらでもある。現在は何もわかっていなくても、先の事は先に進んでから決める。

「よしー。」

そう思い、彼女は元氣よく立ち上がった。

仮想世界の地面の上に足を乗せると、緊張感を払拭するように腕を上へと伸ばして背伸びをする。

「よしー。」

とはいえ、目的を達成するには時間がかかりそうだ。

戦場のど真ん中で、人工物がほぼ存在しない森のそこかしこには、やはりとすべきか当然とすべきか樹海を再現するための木のオブジェクトが大量に展開されている。

彼女は自然の香りを鼻に感じながら、真上を見上げていた。

上から少し見えたが、たった一人でこの広い世界の何処かにいる。ツンツン頭の男を探し出すのは難しいだろう。近隣の住民へ一軒一軒訪問して聞き込みをするべきだろうが、それだけでも結構骨が折れる作業になりそうだ。

「どうやって見つけ出そうかな？」

物騒な意味が込められてそうな台詞をポツリと呟いた彼女は、そこで背後から金属同士がぶつかり合う音を聞いた。その音を聞いた感じ、誰かが近くで戦っているのだと推測する。

「よしー。」

彼女はこう見えて、戦闘のエキスパートだ。

いくつもの戦場を渡り歩いてきた彼女なら、この森の奥で一体何が行われているのかなど容易に想像できる。

この金属がぶつかり合う音のタイミングといい、わずかに聞こえてくる裂帛とした叫び。おそらく、今行われている戦闘は模擬戦といっ

たような生易しいものではない。本当に互いの命を削り合う戦闘が行われている。

干渉すべきではない。普通はそう思うだろう。

無関係な者が勝手に手を出せば、面倒な問題が発生する可能性が出てくる。戦っている者達の事情を知らないのに、自分の勝手な解釈と判断で他人の問題に首を突っ込むべきではない。だから彼女は、今起きていることを見なかったことにして、ここから去るべきだ。

そんなことはわかっている。理屈の上なら誰でもわかる。だけど。

彼女の中にある何かが、それを許さなかった。

彼女は、ギツと拳を握り締めて、

「ッ!!」

結局、見て見ぬ振りなどできなかつた。

状況はわからなくても、戦いの残酷さを知っている彼女がそれを放っておく事など、できるはずもなかつた。

◇◇◇◇◇◇◇◇

だが実際はそこまでの問題ではなかつた。

理由は簡単、すでに別の誰かがその問題に首を突っ込んでいたからだ。

「何してるの!?! 早く逃げて!!」

この戦闘空間の中心人物である、“金髪の少女”がその“乱入者”に向かつて思わず叫んだ。

少し状況を整理しよう。今何が起きているのか。

現在この場には、三つの異なる種族が集結している。

『サラマンダー』と呼ばれる赤い髪に比較的大柄な容姿のプレイヤー

が三人、『シルフ』と呼ばれる緑がかった容姿を持つ女性プレイヤーが一人、そして最後に『スプリガン』と呼ばれる全体的に黒みがかった容姿を持つ少年が一人。

何がどうしてこんな争いにまで発展したのか、そこは所謂ゲームの本質というかシステムに従っているだけというか、大した理由ではない。異なる種族同士ぶつかり合うというのがこのゲームの醍醐味なので、理由を強いて言うなら勢力争いだ。

シルフのプレイヤーが同じ種族の仲間達と共に充実した冒険を行っていた時、八人ほどのサラマンダープレイヤーが襲いかかってきた。目的はおそらく追いつきと剥ぎといったアイテムの略奪だと思われる。異種族同士なら戦闘が可能なため、相手を倒してしまってもデメリットはない。倒された側はアイテムを全てその場にドロップしてしまうことにはなるが、勝った側はそれらを全て奪い取れるというメリットが生まれる。

よって、冒険してアイテムやお金をたんまりと稼いだシルフ達を待ち伏せしてそれら全てを奪おうと襲ってきたというわけだ。二つの種族は互いに削り合って、今ではシルフ側は少女一人になってしまったが、相手のサラマンダーはまだ三人いる。

絶体絶命・と思われたが、そこで予想外な事が起こった。

突然、両者の間に一人のスプリガンプレイヤーが乱入してきた。ツンツンと尖った髪型にやや吊り上がった眼をした、やんちゃそうな少年が何の前触れもなく急に降り立ったのだ。

見た感じ、彼は初心者なのだろうか。

簡素な防具で武器は背中にある貧弱そうな剣一本のみ。初期装備に身を包んだ奴がこんな中立域の奥深くに出てくるとは何を考えているのか。

少女が心配して声をかけてきたにも拘わらず、少年は動じる素振りも見せずにただ余裕そうに突っ立っている。

「重戦士三人で女の子一人を襲うのはちよつとカツコよくないなあ」  
「ああ!?!」



「んだとテメエ!？」

そればかりかのおんぴりとした調子で挑発までしてしまう始末。

シルフの少女を守るようにして、サラマンダー達に鋭い眼光を向けながら状況を把握する。どう考えても被害者はシルフの女の子だ。三対一という状況から判断して、一方的に蹂躪してしまうつもりだったらしい。そもそも女の子一人に対して男三人は反則すぎる。

故に、彼は煽って討伐対象を自分へと向けさせた。

シルフの少女は助けには入ろうとするも、リーダー的な男が上空で牽制しているため下手に動けない。おとなしくするしかないようだ。

「ハッ！ ピンチのヒロインを助けるヒーローにでもなったつもりかよ。たった一人で俺達に勝てると思ってるのか？ 望み通りテメエから先にやってやるよッ!!」

少年の前方に陣取ったサラマンダーが武器を握り締め襲いかかる。直後、それに合わせるように後方で控えていたもう一人も、少年が回避した所で仕留めるべく時間差で背後から襲いかかるつもりらしい。

二方向からの同時攻撃。到底初心者にどうこうできる状況ではなかった。サラマンダーの凶器が少年の体を貫くのを見たくなくてシルフの少女は思わず眼を逸らす。

だが、一人のサラマンダーが持つ武器が少年に届くことはなかった。

バキンッ!! と。

首の骨が折れたような音が聞こえてきたからだ。

「」

・ ・ ・

シルフとサラマンダーだけでなく、スプリガンの少年まで驚いた表情を見せる。

やられたのは、目の前から迫ってきていたサラマンダーだった。音を聞くだけでも凄まじい威力だと推測できた。おそらく、攻撃を受けた本人は自分の身に何が起きたかわからなかっただろう。首が折れて一気に木まで飛んで激突し、そのままズルズルと地面に崩れ落ちてしまう。

直後、男の体は四散。『エンドフレイム』と呼ばれる死亡エフェクト。キルされたということを証明するように、その場に小さな残り火が漂っていた。

少年の背中で待機していた仲間は急な展開に面食らって思わず動きを止めていた。いやそいつだけじゃない、その場にいる全員か。人間の首が折れる瞬間を初めて見て、衝撃を受けている。仮想空間のためアバターの体がダメージを受けただけなので現実の体には何の問題もないだろうが、その一撃でアバターの体は砕け散った。それほどまでに容赦のない一撃に全員が驚愕している。

「…そういうの、感心しないなあ」

一撃を入れた張本人がようやく声を発した。

黒髪のロングストレートで赤い瞳を持つ女性は両手につけている格闘用グローブをはめ直している。

活発的な印象で、へそが見える白いタンクトップに黒いサスペンダー付きの丈がかなり短いタイトのミニスカートを穿いている。スタイルが非常に良く、豊満な肉付きをしているが腰などは痩せており、そこにいるシルフの少女と良い勝負ができそうだ。

女性はジロリと、少年の後ろにいるサラマンダーを見る。

「子供相手に刃物を向けるなんて、大人のすること？」

何言っただこいつ？ と、少なくとも残っているサラマンダー達

全員そう思った。これそういうゲームだろ、と言おうとしたが彼女の  
その気迫に圧倒されて何も言えなくなった。

だが、そんな中で唯一言葉を発した者がいた。

スプリガンの少年である。

「いや、ちよつとアンタ——」

「二人とも大丈夫？ この赤い人達に襲われてたみたいだけど、もう  
安心して。あとは私がやるから」

「いや、そういう問題じゃ——」

「大丈夫、私に任せて。今の私の蹴り、見たでしょ？」

「」

話が通じない。

会話が一方通行すぎて、少年の主張は彼女には届かなかった。急に  
乱入してきてその後すぐに攻撃したため、次から次へと移り変わる展  
開に少年少女二人の頭の中は真っ白に染まっていた。助かったのは  
助かったが、説明不足の現状に誰もが思考を停止させている。

結局、少年と少女はおとなしくするしかなかった。今の一撃を見た  
限り、何か反論すると恐ろしいことになりそうだと感じたのか、二人  
ともただ黙って成り行きを見守ることにした。

急に乱入してきた女性は、何やら冷酷そうな顔で残りのサラマン  
ダー達を見る。

「どんな事情があろうと、子供相手に武器を向けるようなら——」

彼女は険しい表情のまま、静かに、それでいて容赦なく、右足を地  
面に踏み締めてこう言った。

「すり潰すよ」

「な、舐めるなッ!!」

直後に、ずっと硬直していたサラマンダーが女性目掛けて突進してきた。ただ武器を構え、わかりやすい攻撃を仕掛けてくる。

対して、女性は足元にあった物を蹴り上げた。

それは先程ぶっ飛ばした男が愛用していたランスだった。それを空中に蹴り上げると、彼女はそのランスを相手に向かって蹴り飛ばした。ランスは回転しながら男へと向かっていく。その攻撃に男は思わずギョツとして避けた時には、女性は男に向かって走っている。彼女の拳は固く握られていた。

「ヤアッ!!」

「ッ!!」

かろうじて、拳の射程圏内に潜られる前に男は武器を振るう。

しかし、彼女はボクサーのような体勢で、男の膝辺りまで身を低く屈めてその攻撃をやり過ごす。男が攻撃方向を修正する前に、彼女は低い位置から伸び上がるような動きで、一気に彼の腹の真ん中へタックルを仕掛ける。木どころか岩すらも破壊できそうな一撃を受け、男の体は何メートルも飛んだ。

「いぼっ!」

凄まじい音が響き、彼の呼吸が止まりかける。

男は何とか意識を保つと、すぐさま何かを呟き始める。

この世界では、『魔法』というものが使える。その魔法を使用するためには、ファンタジー系ではお決まりの動作、実際に口で呪文を詠唱しなくてはならない。システムが認識できるように一定以上のボリュームと明確な発音が必要となり、途中でつつかえれば詠唱は失敗と見做され、また最初から呪文の唱え直しとなってしまう。

しかし、男は詠唱慣れをしているようで、暗記しているスペルを可能な限り早口で無事に唱え終えた途端、彼の右手から炎が放たれる。

サラマンダーという種族だからか、炎系統の魔法に優れており、そ

の威力は他の種族よりも高火力に設定されている。  
だとしても、当たらなければそれは何の意味もない。

「ふっ!!」

ぶっ飛ばされて意識を保っている間にも男は呪文を唱えて炎を放っているのだが、彼女は上半身を振っただけで簡単に避けた。魔法を放ち終えた瞬間を狙って蹴りが放たれ、彼の手から武器がもぎ取られる。

だが、この程度ではまだ終わらない。

「私の本気、見せてあげる!!」

そう言い放つと、さらにもう一度鋭い一撃が来た。

グシャアッ!! という鈍い音が男の顎から響き渡る。女性はバツク転をしながら男の顎に蹴りを放ち、空中へと吹き飛ばした。

サマーソルト。

両足に某アメリカ空軍少佐並みの力を込めた結果、その一撃で男は思わず舌を噛み、脳ミソは激しく揺れ、一気にHPバーが真っ赤に染まる。空中で一回転して後方へと降り立つと、力の抜けた男の体がぐしゃりと地面に崩れ落ちてきた。彼の手の中にあつた赤い炎が空気に溶けるように消えていく。そこにはもう、危機感はなかった。

女性は自分で蹴り飛ばした男の残骸を見下ろすと、残っている最後の一人を見つめて、

「どうする?.. あなたも、戦う?..」

女性が笑みを浮かべてそう問いかけると、リーダー格らしき男は苦笑しながら両手を上げた。

「いや、やめておく。もうちょっとで魔法スキルが九〇〇になるんだ、

「デスペナになるのだけは避けたい」

「……って言うてるけど、二人ともどう？」

彼女がそう二人に尋ねると、二人ともその男と同じように苦笑して、

「……いいと思います」

それだけしか言えなかった。

豊満な肉質ながらも筋肉質の女性はそれを聞くと肩の力を抜く。左手を腰に当て、こちらにはもう戦闘意思がないということを示すと、最後の一人は翅を広げて飛び去っていった。

その姿に女性はわずかに眉をひそめたが、男は気にすることもなく燐光を残して暗い夜空へ羽ばたいていく。

後に残ったのはシルフの少女とスプリガンの少年だけ。二つの赤い灯火もその場に残されていたが、それらも空気に溶け去るようになってふっと消えていた。

問題は解決した。ほぼ一方的なやり方で。

それを自覚すると静寂だけがこの空間を包み込み、三人の間には微妙な空気が流れている。みんな時が止まったようにして体を硬直させていたが、シルフの少女がやや緊張した様子で、乱入者二人に少し煽り気味な口調で問いかける。

「……で、あたしはどうすればいいのかしら。お礼を言えればいいの？ 逃げればいいのか？ それとも戦えばいいのか？」

「うーん・俺的には正義の騎士が悪漢からお姫様を助けたっていう場面のはずだったんだけど、全部そっちのお姉さんに取りられちゃったしな」

少年は頬を掻いて隣に立っている女性を見る。

今度はあんたが話す番だ的な視線に気が付くと、女性は顎に手を当

てて何かを考え始める。えーっと、という感じで頭を悩ませていたが、しばらくすると彼女は二人の顔を見つめて、

「ちよつと道に迷っちゃってね。そんな時にあなた達が襲われてるのが見えたから。邪魔しちやつたかな？」

「いえ、問題ありません」

「そう？　ならよかった。ところであなた達に聞きたいことがあるんだけど」

「？」

そう言うとき彼女は、頭の上を指差しながらツンツンとつつくようにしてこう質問した。

「実は人を探してるんだけど、『髪の毛がツンツンの男』、知らない？」

そう言われると、少年少女二人は互いに顔を合わせる。

そしてシルフの少女が少年の頭を見つめると、その視線に気付いた少年は自分の尖った黒髪をいじる。確かに、少年の髪型は女性が言った特徴に当てはまる。

だが、それを見ていた彼女はふふつと笑って、

「もつとよ。名前は『クラウド・ストライフ』って言って、金髪で尖った髪型をしていて大剣を背負ってる人なんだけど」

「ちよつと待てそれ詳しく聞かせてくれ」

目の色を変えた少年が女性に詰め寄る。

互いの名前も知らず、何もわからず、それでも展開は進んでいく。微妙に置いてけぼりされたシルフの少女は呆れたようにため息をつくが、ここまで来てしまった以上、無関係の間柄で終わらせるわけにはいかない。巻き込まれてしまった以上は最後までとことん関わらせてもらう。

シルフの少女に、スプリガンの少年に、ごく普通の女性。  
たった一人のツンツン頭プレイヤーを巡って、  
どこをどう見渡してもまともそうではないパーティーが今、ここに  
完成した。



## 第5章

「お久しぶりですクラウドさん！」

目の前からの、声。

それを聞いた途端、そいつへ向けようとしていた剣は止めざるを得なかった。何せ『久しぶり』という、自分を知っているかのような言葉が飛んできたからだ。

そこにいたのは、男。というか少年である。ただしずっと幼い子供の姿でいる奴に向かって『少年』という表現は果たして正解なのかどうか。

チャドリー。

いつ生まれたのかは知らないが、ずっと十歳前後の姿で生きてきたサイボーグ。少年らしい服装を着こなして、その上から羽織っている白衣だけが新品のカッターシャツのように輝いている。

未だにこんな奴がマッドサイエンティストの手によって作られたサイボーグだなんて信じられなかった。

見た目は子供、頭脳はA I。

A Iを搭載したサイボーグを作ったのはまだ理解できる。自分と同等の頭脳を持った者がいれば、自分の偉大な研究が捗ってより没頭できるだろう。

だが何故子供の姿にしたのかが理解できない。あいつの趣味なのだろうか、にしては違和感が強い。

まあそんなことはどうでもよろしい。今気にすべきところはそこではない。

「おや、おかしいですね。クラウドさんの記憶を読み取って時間の流れを照合した結果、『久しぶり』という言葉が適切だと判断したのです  
が」

親しげに笑いながらそんなことを言う。

目の前の少年のおかしさもさる事ながら、こんな胡散臭い少年に協力していた自分もどうかしていると今になって思う。クラウドはここまで来て初めて、自分で自身の在り方に身震いした。

全ての始まりは、こいつからの依頼だったということを含んで忘れていたことに少々腹を立てた。

「あ、記憶を読み取ったと言いましたが安心してください。クラウドさんのプライベートな部分は覗き見ないようにちゃんと配慮致しましたので」

思わずギョツとした。

プライバシーの侵害とも言えるような行為を行ったというのに、チャドリーは配慮したからという一言で終わらせた。本当にそうしたのか疑問を抱くが、今はそんなことを考えている場合ではない。

「」

クラウドは喉を鳴らして、信じられないものを見る目で目の前にいる少年を眺めた。

「なんでここに？」

「あなたを助けに来たんです」

怪訝そうな顔でそう尋ねると、チャドリーは親に叱られた子供のような表情でそう言った。

対して、クラウドは特に顔色は変えなかった。

「すみませんでした」

「まだ何も言っていない」

「クラウドさんの顔色一つで、何を考えているのか僕にはわかります。

顔色をスキヤニングした結果クラウドさんが抱いている感情は、『戸惑い』、『疑問』、そして『怒り』といったものを検知しました。よって、この場を借りて謝罪の言葉を述べさせていただきました」

「許すかどうかはこれから決める。それで、助けに来たってどういうことだ？」

「それについてなのですが、どこから説明したら良いのか」

チャドリーは何だか居心地が悪そうな顔で目を逸らし、何かしら気を紛らわせるために片眼鏡をつまんでくいつと上げていた。

何だかどう言い訳したら良いかとか考える子供を見ている気分だ。

クラウド自身に自覚はないのだが、そんなにおっかない顔でもしているんだらうか？

ゆっくりと息を吸って、そして吐いてからクラウドは改めて切り出す。

「どれくらい経った？ こっちは二年もの間仮想空間に閉じ込められて、現実の体はずっと眠ったままのはずだ。これ以上眠ったままの状態だと、起きた時に鈍った体の重さに自分が崩壊しかねない」

「その点に関してはご心配無用です。クラウドさんの体はきっちり僕達が管理していましたので。それに加え、この後詳しい説明を致しますが、先に結論を言っておくとクラウドさんがネット空間にダイブしてからまだ数時間しか経っていませんので、現実の体に戻った際は何の不自由もなく動けると思われます。ご安心ください」

「そういう問題じゃない」

びくん、と場の空気が冷たく動く。

鋭い刃物のような視線を向けられて、しかしチャドリーもまた目を外さない。

ただただ、中心人物のクラウドを捉え続ける。

表情一つで相手が何を考えているのかわかるチャドリーなら、クラウドの言いたいこともわかるだろう。

彼が過ごしてきた時間を奪われた、それも二年という長い時間を。何か情報をくれるようではあるが、その説明次第ではクラウドは本当に刃を向ける。

冷たい視線を向けられ、それでも平常心を保ち続けているチャドリーはゆつくりと話し出す。

「クラウドさんの怒りはもつともです。ですがその前に先に僕の説明を聞いていただけるとありがたいです。自分で勝手に進めて煮詰まっただけの怒りの矛先をこちらに向ける前に、まずは現段階の状況を整理すべきです。僕の説明と、クラウドさんの現状。それらを照らし合わせて、正しい方向へと修正した後、文句を受け付けます」

「説明されて納得ができるようなものなのか？」

「当然です」と言いたい所ですが、今回起きてしまった事件に関してはまだ解明できていないところが多々あります。ですから僕の仮説も交えての説明になってしまいますが、もし僕の説明を聞いて信じられないようなら斬ってもらってもかまいません」

「俺は、本当に斬る」

「つまり！　最後までちゃんと聞いてくださる、ということですね！」

チャドリーは肩をすくめて、

「クラウドさんはすでにご存知かと思いますが、まず端的に説明すると、この世界は僕達の世界と別の空間に位置する場所に存在しています。所謂『異世界』と呼ばれるものですね。それはご理解しているかと思われれます」

「ああ」

「そして、ここが一番重要な所です。この世界は、僕達が生活している世界の物理法則とは異なる性質が観測されました」

「？」

「その一つが、『時間』の経過の違い。この世界を解析した結果、この世界は僕達の世界とは違う時の流れの中で動いていると思われれます。」

別空間という曖昧な境界線によって、クラウドさんの頭脳はタイムラグを引き起こしている」と推測されます」  
「??？」

よくわからない文章を並べられて、クラウドの思考は一瞬空白に塗り潰された。

微妙に暑さでぼーっとしたような気分にはなっていたが、それでも意識を集中してチャドリーの説明を聞く。

「『量子ゼノン効果』というのはご存知でしょうか？ 例を出して説明すると、弓を引いて放たれた矢は次の瞬間には少しだけ進み、そしてまた次の瞬間には少しだけ進み、と展開が進んでいくことで飛んでいきます。この時、『発射されたその瞬間』の時間をどんどん小さくしていけば矢は止まることになり、その時点だけを切り取って考えると、結局全ての瞬間で矢は止まることになるから矢は完全に止まって動かないはずであり、どちらの方向に進んでいるのかもわからなくなる。という観測次第で物事の性質を変えてしまうのが『量子ゼノン効果』というものです」

「当然こんな現象は現実に観測されるはずがありませんが、量子力学では一定の条件のもと似たような現象が観測されることがあります。時間経過により量子状態が現在地から別の場所へと移ることを、量子力学の言葉では『時間発展』と呼ばれており、普通特に問題がなければどの世界でも同じように時間発展がなされていきますが、観測という行為が挟まれると『量子ゼノン効果』が生まれてきてしまいます。頻繁に測定、観測を行うことによってその時の時間発展が凍結してしまうという現象が、電子で構成されたこの仮想空間で引き起こされているという仮説を立てました」

聞き慣れない単語に文章に首をひねる。

理解するために改めて耳で追っていくが、追いつけずに置いてけば

りにされる。内容が専門的すぎて自分の持っている知識をフル稼働させて何とか自分でも理解できるものへと変換していく。

「状態 a から状態 b にクラウドさんが時間発展する時、途中でクラウドさんの状態を観測すると時間発展が抑制され、元の場所の状態 a に引き戻されます。このような効果の下だと、クラウドさんは本来の時間の経過に気付くことが出来ません。ある状態に固定されたクラウドさんが次に時間を感じるのは、観測の効果を逃れ、次の状態に時間発展した時のみになります」

「簡潔に説明してくれ。そういう専門的な単語を乱雑に並べられても意味がわからなくて全く理解できない。それに俺が知りたいのは『今俺はどういう状態にいるのか』ということだけだ。世界の法則だとか効果とか、そういったものになんか興味はないね」

もう我慢の限界だった。

思ったことを素直に言つて、さつさと現実と今の自分の状態を知りたかった。

そして、言われたことの意味がわからなかった。

だからその先にある説明すらも、理解することができずにいた。今までよりも簡単な文章なのに、それに関連した知識を持っていなかったからその説明はクラウドにとっては単なるノイズにしか聞こえなかった。

クラウドの言葉にチャドリーはここからが面白いところなのにと少し残念そうな顔をするが、こほんと一回咳をして、こう結論付けた。

「つまり、状態の遷移が著しく抑制されたクラウドさんにとっては二年間の経過に感じてしまいました。元の世界ではまだたったの数時間ほどの時間しか流れていない、ということですよ」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

頭の中が真っ黒に染まっていた。

知識の塊を無理やり脳みそにぶちこまれたような感覚で、頭の中があらゆる単語で埋め尽くされていた。紙の端まで隙間なく書かれた文字を眺めているような気分には頭痛がする。

そのチャドリーの説明を聞いて、クラウドは眉をひそめる。

時間の経過の違い。

まずその言葉と、現在の自分の状態がカチリと重なったような気がした。

もしチャドリーの立てた仮説が正しいというのなら、やはりここは本当に別の世界なんだろうか、とクラウドは思う。

実の所、クラウドはここが別の世界だということがまだ信じられずにいた。頭ではわかかっていても、それが本当かどうかは確かめられなかった。話だけを聞かされたんじゃ、何の確証も得られず、信憑性もなくて単なる夢物語なんじゃないかとさえ思ったことがあった。

実際、チャドリーの説明を聞いてもまだ信じられていない。言葉だけでは何の説得力もないからだ。

しかし、そこにばかり囚われては一步も進めない。

クラウドは思わず頭を横に振っていた。脳裏にそんなめっちゃくちゃな理論が過ることさえ、許したくなかったのかもしれない。

「実際に二つの世界を比較するために両方の現時刻を観測してみたところ、この世界は二〇二五年の一月二十日で、僕達の世界はまだクラウドさんがフルダイブした時と変わらず、一九九九年であるという解析結果が出ています」

だから、クラウドの代わりにチャドリーが答え合わせを進めた。

いつまでも同じ思考に立ち止まり続けているクラウドの認識を覆すために、最先端を行く人工知能の少年が現実を突き付ける。

クラウドの二年間は単なる数時間ほどの時間だったという認識に塗り替えていく。

「だから、クラウドさんの時間はほとんど奪われていません。故に、まだやり直せる時間は大量に残っているということですよ。この言い方は不適切かもしれませんが、あの世界、『ソードアート・オンライン』にいた人達とクラウドさんの存在は全く異なっています。彼らの常識に長く囚われすぎていたせいでクラウドさんも彼らと同じような認識に置き換えられ、そのまま物事が都合良く進んでしまった結果、二年もの時間が進んでいると勘違いしてしまったんです」

クラウドは、チャドリーではなく窓の外に目をやった。

この世界の法則は自分達の世界とは異なっている。

そんな場所に長くいたせいで、いつの間にかクラウドは『彼らと同じ時間の中を生きている』と認識してしまっていたらしい。

「」

クラウドの表情は変わらない。というよりは、あらゆる感情が混ざりすぎた結果、真顔になってしまっている。

チャドリーの説明を全て理解したわけではないが、今の自分の状態を知って混乱しているようであった。

誤認、誤解、錯覚。

わけもわからない幻想の中を彷徨っているような気分が目眩がする。無駄にしたと思っていた時間が実は失っていないかつたという事実を聞いても、素直に喜べなかつた。そもそも理解不能な理論を聞かされて、それをなんとか理解しようとして頭が働きすぎて疲れてしまっていて、他のことなど考えられなかつた。

たったの数分で立て続けに常識や前提がくるくると覆り、何度も何度も入れ替わって、頭の中をぐちゃぐちゃに掻き回されたような感覚までやって来た。

しかし、その情報が聞けただけでもよかつたのかもしれない。

もし仮に、この世界と同じように自分達の世界も同じ時間軸の流れ



で動いていたとしたら、今頃自分の体は鈍りまくって当分使いものにならない状態になっていたはずだ。

結構覚悟を持って仮想空間に飛び込んだというのに、なんならティファにしばらく旅に出ますという書き置きまでしたというのに、それらを台無しにするような事実ではあったが、そこはもう気にするところではない。

時間が奪われていないのなら、また続きから始められる。それがわかっただけでも幸福だと思えばいいだろう。

と、そこまでポジティブに考えられたところで、チャドリーに質問する。

「それで、これは一体どういうことなんだ？」

「どういうこと、とは？」

「なんで俺は、仮想空間からまだ抜けられないんだ？」

ようやく前向きな思考に戻ってきたというのに、クラウドはまた表情を曇らせてそう聞いていた。

そう、まだ問題は解決していない。

問題となる部分は解決したと思ったのに、未だに自分は解放されていない。何故なのか？ それが一番知りたいことだった。

するとチャドリーは、何を思ったのか目をつぶって耳を澄ますかのように首を傾けていた。

それから数秒後、チャドリーは瞼を開けると、

「そうですね、そろそろ本題に入りましょう」

今までののは単なる序章とでも言うかのように、気を取り直して本題へと入った。

「まず、この世界について説明させていただきます。この世界がなんと呼ばれているかご存知でしょうか？」

『『アルヴ・ヘイム』だろ?』

「はい。一応彼らの世界ではトップに入るほどのゲームらしいです」

チャドリーは少し機械的に言う。

「おそらくそこは別に重要ではないと言いたいんだろう。」

「...それで、それがなんなんだ?」

不信感も露に、クラウドはチャドリーの顔を見てそう言った。重要ではないなら、注目すべき所を早く述べて欲しかったからだ。

それでこの世界ですが——とチャドリーはまた機械的に答える  
と、

「この世界は、クラウドさんがいた『ソードアート・オンライン』のサーバーをコピーして作られたようです」

クラウドは目を見開いてチャドリーを見た。

それが何を意味するのか、普段脳筋で動いているクラウドでも理解できたからだ。

「基幹プログラム群やグラフィック形式、その他諸々全て完全に同一で構成された世界みたいです。新しく最初から作るよりも元となった物をそのまま使うという、二流が使いそうな手口ですね」

どこか毒があるような口調にクラウドは訝しげに眉を寄せた。

やっぱり、マッドサイエンティストに作られただけあって科学者としてのプライドは高いみたいである。

そこまで聞いて、クラウドは小さく笑って言った。

馬鹿馬鹿しい、と思いながら。

「つまり、ソードアート・オンラインのプログラムをそのまま持ってき

「だから俺まで連れてこられた、ということなのか？」

「さすがはクラウドさん！ 物分かりが良くて助かります！」

「」

「」

冗談で言ったつもりだったのに、チャドリーは目を光らせながら小さく首を縦に振った。

「と言っても、まだ確証を得られたわけではありません。何が原因でクラウドさんがまだ仮想空間に囚われているのか、そこはまだ解明できていませんから。仮説はいくつか思い付きますけどね」

「聞かせてくれ」

「おそらく、ソードアート・オンラインのプログラムをそのまま持つてきて制作されたことにより、クラウドさんは偶然そこに巻き込まれ、それでソードアート・オンラインでのキャラクターデータやセーブデータ、そして『ログアウトできない』というシステムまで引き継がれてしまったのだと思われます」

「なんで俺だけ巻き込まれたんだ？」

「わかりません。クラウドさん自体、彼らにとっては異物な存在となるわけですから。未知なる法則が働いてイレギュラーなことが起きてしまった、としか現時点では説明できません。申し訳ありません」

チャドリーはまた叱られた子供のようになり落ち込みながらそう言った。

だが、チャドリーの説明を聞いていくつかわかったことがある。

クラウドがこの世界に紛れ込んでしまった原因は、おそらくバグのせいだと思われる。断定はできない。

しかし、だとするとクラウドはこの世界にとってはイレギュラーな存在のはずだ。ゲームバランスをぶち壊してしまうかもしれない。このゲームを運営している所が正常であるならば、少しのバグも許さないだろう。完璧なゲームにするために、どんな些細なものでもすぐに修正するはずだ。

でもそれをしない。元からあるゲームをそのままパクるような運営会社なのだ、そんなこと別に気にしていないのだろう。

手抜きと言われようとも構わない。普通ならゲームシステムを逐一確認すべきなのに、それをしていない。

最初から良くできたプログラムがあるのだから一々細かい部分まで見なくていい、穴だらけなシステム。そこに今クラウド達はいる。ならば、クラウドがここから出るにはどんな行動に出れば良いか。

「なるほどな。」

この世界がソードアート・オンラインと同じシステムで動いているのだとしたら。

「そういうことか」

そして、天才的な頭脳を埋め込まれたチャドリーがわざわざこの世界に自ら降り立ってクラウドを救いに来たということは。

「チャドリー、お前の力を使って——」

クラウドは小さく笑い、そしてチャドリーもそんな彼に微笑み返し。

それこそ二人で内緒話でもするかのような声で、

「この世界のプログラムを正しく修正してログアウトできるようにすれば良いのか」

◇◇◇◇◇

「だとしても、具体的にどうすればいいんだ？」

「解析した結果、『世界樹』と呼ばれるところに『データ閲覧室』とい

うものがあるみたいです。そこにたどり着ければ、クラウドさんのデータを見つけ出してログアウトできるようにすることが可能です」

「世界樹」

元々行くつもりだったところだ。

その頂点には妖精族の王様がいるだのなんだの聞かされたが、今はそんなことに興味はない。

目的が決まった。

本当にそこまでたどり着いて、そしてプログラムを書き換えることが可能なのか今のところわからないが、試してみる価値はあると思う。

希望を見出だしたクラウドを見たチャドリーは、片眼鏡をくいつと上げて再び喋り出す。

「世界樹まではここから。大体五十キロメートルですか。相当に遠いですね」

「歩きだと最低でも四日はかかる距離だな」

「ソルジャーの身体能力を持つクラウドさんならさらに短くなると思います。さすがに僕は疲れると思います」

お前サイボーグだろ、ってツツコミたかったがやめておいた。こいつもこいつでそういう感覚が埋め込まれてるんだと勝手に思って強引に納得した。

「このゲームでは『羽根を生やして空を飛べる』というシステムが組み込まれているようですが、クラウドさんはソードアート・オンラインのアバターのままですから、変更しようにも権限がないのでプログラムが書き換えられませんね」

「そうか」

「でも、僕自身のアバターは変更できるみたいです」  
「？」

「僕は元々人間ではなく、人工知能を組み込まれたサイボーグです。よって、システムは僕を人間と判断しなかったようです。だから僕は人間としてのアバターではなく、『ナビゲーション・ピクシー』というプレイヤーサポート用の疑似人格プログラムを使用してログインしているみたいです」

歌うように話し出すチャドリーだったが、『ナビゲーション・ピクシー』という言葉が呑み込めないクラウドにはいまいち実感が湧かない。

するとチャドリーは次の瞬間、何の前触れもなくその姿が虚空へ消える。

「!？」

突発的な事態に、クラウドの頭はまた空白に染まる。何らかの状況が進展したというのはわかっていても、思考がそれに追いついていない。

漠然と、何か変化が起きたと理解した瞬間、

「なるほど、これが『ピクシー』という姿ですか」

聞き慣れた声がいきなり割り込んできた。

クラウドの肩の上から、何か小さな影が立っているような感覚までやって来た。

わずか十五センチほどの少年。

その正体は。

「僕自身の興奮を検知。興味深い姿になったことですごく驚いてるみたいです！」

「」

もう、ついていけない。

いい加減理解するのも馬鹿らしくなってきた。

チャドリーはライトブルーの服と帽子に、黒いズボンと土色の靴を履き、背中に半透明の翅を二枚生やした姿でクラウドの肩にちよこんと立っていた。妖精というか、ずつと子供でいたいと言い続けている童話の登場人物みたいな姿をしている。

ちなみに、服の上には科学者の象徴とも言える白衣を羽織っている。

それだけで世界観がぶつ壊れると思うのだが、もうなにもかも都合の良い方へと解釈して強引に納得した方が手っ取り早いとさえ思い始め、気にしないことにした。

すると、掌サイズになったチャドリーは翅をぴこぴこ動かしてクラウドの前まで来ると、

「そういえば、忘れていました」

「？」

「実はクラウドさんをサポートするために、いくつか役に立つものを持ってきていたんです」

そう言うとチャドリーは白衣のポケットに手を入れ、そこからBB弾くらいの何かを取り出した。チャドリーはそれを握ったまま、クラウドに手渡す。

すると、クラウドの手に渡った瞬間にそれは掌サイズまで大きくなり、『大きな水晶玉』へと変化した。

『緑色の水晶』

それが何なのか、クラウドはすぐに理解した。

「それが何なのか、説明しなくても大丈夫ですよね？」

『回復マテリア』 用意がいいな」

「他にもいくつか持ってきました。これから先役に立つと思いますので、受け取ってください」

合計で四つ。

『炎』が封じ込められたマテリア、『氷』が封じ込められたマテリア、『雷』が封じ込められたマテリア。

それぞれ最上級の物を受け取ると、クラウドはすぐにバスターソードに空いている二つの穴にはめ込んだ。

とりあえずセットしたのは『炎』と『回復』。これだけで十分だろう。

「それではクラウドさん、これからどうしますか？」

「決まってる」

朝まで待っていても仕方がないような気がした。たとえそれが一番懸命な選択肢だったとしても、目的が決まった以上はこの場でじつと時が来るのを待つなんてことはできるはずもなかった。一秒だって耐えられない。

「すぐに出るぞ。外に出たら先導してくれ」

「了解しました！」

クラウドはチャドリーを連れて部屋の外へと飛び出す。誰かに見つかるとかそんなことは一々気にしなかった。

クラウドに優しく説明してくれた少女達は、おそらくもうログアウトしているだろう。

だからなりふり構わず宿屋の廊下を走り、階段を駆け降り、玄関の扉を開け放って勢い良く外へと飛び出した。

「」

それを見ていたものがあるとも知らずに。

◇◇◇◇◇



説明を聞くのに時間をかけたせい、空は完全に真っ暗な闇に覆われていた。

クラウドは真夜中の街を走り抜ける。

先導していくチャドリーを追いかけ、世界樹を目指す。

人混みも全くなく、静かな風しか吹かない繁華街を突っ切っていると、街の外へと出るアーチ状の城門が見えた。

クラウドは走り続ける。

モンスターが彷徨くフィールドに誘われるように、灯りの消えた街の外れへと一歩踏み出そうとする。

だが、その歩みを止める出来事が起こった。

ピョコツと。

まるで尾行しているのが丸わりの下手な探偵のように、城門の外側から『一人の少女』が顔だけ出して、クラウドの足を強制的に止めた。

「あ」

見覚えがあった。

クラウドの行く先を塞ぐようにして出てきた少女は、むーつと口を尖らせながら近づいてくる。

不機嫌な猫みたいにむすーつとしながら、

「あれ〜？ これは偶然だね〜クラウド？」

「…どういうつもりだ？」

クラウドは神妙に聞く。

チャドリーは先読みしたのか少女が出てくる前にクラウドのズボンのポケットへと身を隠すように避難していた。

すると少女は、う〜んと考えるように小さく首を傾げるも、にっこり笑顔で純真な眼差しを向けてこう言った。

「待ち伏せ？」

「どうして？」

「もっと、一緒にいたいから！」

「」

ちよっぴり上目遣いで笑いかけてくるユウキを見て、クラウドはもはや何も言えなかった。

どうやら、意地でもついてくるつもりだ。一気にユウキに対する好感度ゲージが変化したクラウドは、ジト目で彼女を見る。

そんな視線など物ともしないユウキは、相も変わらず可愛らしい笑顔を見せている。

ようやく、諦めがついたクラウドはため息をついて、

「道案内を頼む」

「喜んで!!」

元気良く返事をしたユウキは先導するようにクラウドの前を歩いていく。チャドリーは出るタイミングを完全に失ったのか、ポケットの中でおとなしくしている。まあしばらくは様子見といったところか。いつか機会が訪れた時に説明すればいい。

それにしても。

なんていうか、この子を見ているとどうしても『彼女』を思い出してしまう。

仲間が増えたのは良いことだと思おうべきなのだろうが、安息の日々が戻ってくるのはまだまだ遠くなりそうだな、などと思ってしまうクラウドであった。

## 第6章

「じゃあ、事実上世界樹に登るのは不可能ってことなのか？」  
「あたしはそう思う。そりゃ、クエストは他にもいっぱいあるし、生産スキルを上げるとかの楽しみ方も色々あるけど、でも諦めきれないよね、いったん飛ぶことの楽しさを知っちゃうとね。たとえ何年かかっても、きつと——」  
「それじゃ遅すぎるんだ!!」

酒場兼宿屋の中にあるとある一席で、少年はそう叫んだ。

周りへの迷惑だとか考えなかった。そもそも現時点ではこの店には少年達しかいない。他のプレイヤー達はまだ冒険へと駆け出しているのか、それとも単にログインしていないだけなのか。

奥まった窓際の席にキリトと向き合って腰掛けているシルフの少女「リーファ」は、口元を食い千切るほどの強さで噛み締めている少年の唐突な怒号に目を見開いていた。

わけもわからず叫んだわけではないのは見てわかる。彼の様子からして、何かしら事情があるのだろうと察しはした。

しかし、その少年の行動で場の空気は静まり返っている。

「パパ」

机の上でクッキーを美味しそうにかじっていた自分の娘にまで心配させる始末。キリトの肩に座ったピクシーは宥めるように小さな手を這わせる。

しかしそれでも空気は一向に良くなるらない。

何故そこまで世界樹の上を目指すのか。

まだやり始めたばつかなのに何がしたいのか。

尋常ではない雰囲気醸し出して自分の目的に囚われ続けているキリトであったが、そんな彼の耳に女性の声が滑り込んできた。

「二人とも落ち着いて」

「！」

「キリトもそんな顔しないで。どんな事情があっても、誰かに当たっちゃダメだよ？」

「テイファ」

表情を曇らせていたキリトに声を投げかけてきたのは、先ほど知り合った女性だった。

彼女はトレイに乗った追加のワインを二人の前に置くと、

「何か訳があるんだろうけど、そんな調子じゃ達成しようにも達成できないよ。まずは冷静になって、落ち着いていかないとか何も変わらないよ」

「ああ、そうだな。驚かせてごめんリーファ」

「ううん、大丈夫」

「でも俺、どうしても世界樹の上に行かないんだ」

言われて冷静さを取り戻したキリトではあったが、それでも彼の瞳は変わらず鋭いままであった。明確な意思を宿した瞳は目の前に座っていたリーファに異常な緊張感を与えてしまう。

まるで蛇に睨まれたカエルのような気分であった。

そのキリトの様子を見て動揺していたリーファだったが、ワインを一口飲んで気持ちを抑え込む。

そんなリーファに代わって、隣に座っていたテイファが落ち着いた口調で尋ねた。

「どうして、そこまで？」

「人を探してるんだ」

そう言った途端、キリトは二人を見て微かに微笑んだ。何ともな

い、そんな意味が込められてそんな眼差しを向けてくるも、ティファはその奥にあるものに気付いていた。

『彼』と同じ、深い絶望の色に染まったような目。

「ありがとう二人とも、ご馳走さま。色々教えてもらって助かったよ」

「ちよつと待って」

立ち上がりかけたキリトだったが、そんな彼の腕をティファが優しく掴んでいた。

気にかけるように。

「なら、丁度良かった」

「え？」

「言ったでしょ？ 私も人を探してるって」

「あ、ああ」

「あなたはどうかやらクラウドと面識があるみたいだし、あなたと一緒にいるといつかは見つけ出せるような気がするから、私も一緒に行くよ」

「え!?!」

「それに、誰かを探してるなら人数が多い方が見つけやすいでしょ？」

ね、リーファ？」

「!」

ティファは言いながらリーファにそう投げかけた。

その意図を読み取った瞬間には、リーファは考えるよりも先に口が勝手に動いていた。

「そ、そうだよ！ 一人で探すよりは皆で探した方が効率がいいよ！」

「いや、それはそうだけど」

「だからあたしも行く！ あたしが世界樹に連れて行ってあげる!!」

「え!？」

どンドン移り変わる展開に思わずキリトは目を丸くする。

「いやでも、会ったばかりの君達にこれ以上世話になるわけには」

「いいの! もう決めたから!! ね、ティファさん!？」

「うん、私もリーファと同じく同行させてもらおっかな」

「」

二人は互いに顔を合わせ、息を合わせてキリトの方を見つめる。

まるで拒否権はねえと言われているようだった。可愛い女の子二人がここまで言ったんだから否定なんてしたらどうなるか、コミュニケーションであるキリトには容易に想像できた。

というか、否定する前にリーファが先に話し出した。

「それじゃあ、明日も入れる?」

「え、あ、う、うん」

「じゃあ午後三時にここでね! あたしはもう落ちないといけないから。あの、ログアウトには上の宿屋を使ってね。それじゃあ、ティファさんもまた明日ね!!」

「うん、また明日」

立て続けにそう言うと、リーファは左手のウィンドウを出してそのままログアウトボタンに触れる。

肉体感覚が徐々に薄れる中、彼女は二人に笑みを送って消えていった。

残された二人はそれを見届けると、キリトはやや呆気に取られた様子でティファの方へと体を向け、

「えつと、ティファはまだログアウトしないのか?」

「うん、まだあなたと話したいから」

「奇遇だな、俺もだ」

キリトのその台詞に眉をひそめたが、ティファは机に置かれている飲み物を口に含む。

喉を潤して声の調子確かめるように咳き込むと、斜め席のキリトにティファは話を進めていく。

「それにしても、凄いね」

「え？」

「私、本格的な仮想空間なんて初めて来たけど、想像以上にリアルに作られてて驚いちゃった」

「そっか」

「キリトってたしか前にもこんな感じの世界に行ったことがあるんだよね？」

「ああ、『ソードアート・オンライン』っていうゲームをな。あんたが探してるクラウドも、そのゲームにいたんだよ」

「ふくん」

それを聞いた途端、ティファは重たい息を吐く。

するとキリトは、そんな彼女を見た瞬間に急にこんなことを言い出した。

核心を突くように。

「アイツには恐れ入ったよ」

「え？」

「あのゲームはログインしたら最後、クリアするまでもうログアウトできなくなるっていうのに入ってきたからな。既にニユースで報道されてるのにログインしてくるなんて、普通ならありえない行動だよ」

「！」

「それだけじゃなくて、アイツはたった一人でボスに挑んだりしたん

だ。本来なら何人もの人達とチームを組んで戦わないと勝てない相手なのに、アイツは単独で最初のボスに挑んで勝ったんだ」

「え、えつと」

「しかもさ、これが一番凄い話なんだけど、あのゲームをクリアしたのはアイツのおかげなんだよ。あのゲームのシステム管理者である茅場晶彦と一騎討ちになつて、システムを自由に操作できる相手でさえもアイツは余裕で勝ったんだ」

「」

「なんだ。」

この探りを入れるような話し方は。

キリトは聞きもしないのにクラウドの活躍をいくつも喋り出す。話ながら、ティファの顔をずっと見てくる。一言一言発する度に、ティファの顔色を伺う。

「気付いてるのか。」

明らかにわざとらしく説明している。

クラウドについて何かを知っているかのように話すキリトは、ティファから少しでも情報を得ようとしている。自分の持っている答えと照らし合わせるために、クラウドのことを自分よりもよく知っている彼女に詳しく聞こうとしている。

反応を見て、本当にそれが真実なのかを確かめようとしている。

「これはごまかしが効かないな、とそう考えたティファは、特に表情も変えず、椅子の背もたれに体を預けて、

「その様子じゃ、もう知ってるんだね」

「ああ」

「いつ知ったの？」

「あのゲームが終わった直後、さつき説明した茅場っていうゲームマスターから直接聞かされたよ。と言っても、ちよつとしか教えてもらっていないけどな。少なくとも、クラウドが俺達とは全く異なった常識の中で育ってきた、つていうことだけは知ってる」



「そっか」

もう何もかも察したティファは、全て諦めたかのようにため息をつく。

彼は既に気付いている。にも拘らず、キリトは探るように説明したのだ。本当かどうか、あの茅場晶彦が言っていたことは真実なのか、それを確かめるためにクラウドの名前を口にした彼女の反応を見て、それを知ろうとした。

回りくどいやり方ではあったが、直接素直に聞くということができない彼にとってはこのやり方が一番やりやすかった。俯瞰的に見ても、少々変な奴だと思われても仕方がない方法だったが、当事者に関わっている者から事情を聞き出すにはこれが最適だと判断した。

実際、ティファは探りを入れるように話すキリトに少々背筋を凍らせた。しかし意図に気付いた途端に、ティファはやれやれといった様子でキリトの目をまっすぐに見る。

そして敢えて、彼女はキリトにこう尋ねた。

挑みかかるように、試すように。

「話してもいいけど、その代わりにあなた達の事も、ちゃんと教えてくれるんだよね？」

「ああ、もちろんだ」

「何から聞きたいの？」

「あんとクラウドは一体何者なのか」

◇◇◇◇◇

夜中ではあったが、意外とフィールドは明るかった。

すでに辺り一面は黒い影に覆われていた。光がなければ視界には風景が映し出されない。だがしかし、クラウドはこういった夜での活動には慣れていてため何の問題もない。昼夜問わずいつでも出勤させられるブラック企業に長くいた結果、夜間での行動には慣れっこ

だった。

そもそもクラウドはどちらかというとき夜行性な生き物だ。三時間も眠れば十分だし、太陽が昇っている間の時よりも夜の方が思考が活発になってよく動ける。

その理由としては、ネガティブだからである。

夜になると彼は脳機能自体が低下し、情動を司る大脳辺縁系のコントロールがうまくできなくなってくるため、抑うつ的な気分が強くなっていつてしまう傾向がある。普段から睡眠不足の状態であれば、認知機能を司る前頭連合野の脳機能が低下するため、論理的に考えることや、状況の変化に柔軟に対応することができなくなっていく、結果物事の捉え方の誤りによって、イライラや憂鬱感を引き起こして頭が強引に活動してしまふ。

不安や悩み事、そして劣等感。

それらが夜になると一気に押し寄せてきて考え込んでしまつて眠れなくなる。

今回もそう。

ログアウトできなくなるという状態が引き継がれているという事実と、そのログアウトするための場所が攻略不可能と言われている世界樹の頂上にあるということを知られた結果、この先の展開が不安になってしまった。

本当に出られるのか、本当に行けるのか。そういった考えが何度も脳裏に過る。

じつとしてたらさらにその考えが増幅し、不安をより強くする。

だから彼はすぐにでも世界樹の頂上にあるという『データ閲覧室』へと向かい、チャドリーのサポートによって一刻も早くこの世界から脱出しようとしているわけだが。

「なんであんたはまだログアウトしてないんだ？」

どんよりした調子でクラウドは呟く。

てつきりもうこの世界から先にログアウトしていると思つていた

のに、何故かユウキは未だにクラウドの側にいる。

つい先程知り合つて、夕飯までご馳走になつて、そして寝る場所まで提供してもらつたとはいえ、いきなり何の理由もなくクラウドについてきていい人物ではないはずだ。だって、ユウキには何のメリットもないからだ。

これ以上クラウドに付き合つても、何も出ない。なのに彼女はそれでもクラウドについてくる。

わざわざログアウトもせずに、だ。

一体何を考えているのか、クラウドにはわからなかつた。

当然の疑問を放つクラウドに対し、ユウキはにこにこ少女らしい微笑みを浮かべながら、

「別に何か特別な理由があるわけじゃないんだけどね」

かと思えば次の瞬間には不服そうにまた頬を膨らませて、少々口調をゆつくりにして答えた。

「ボクに何の相談もなく勝手に出ていこうとするクラウドがちよつと嫌だったから。だって考えてみてよ、朝急にいなくなつたら凄く心配になるでしょ?」

「まあ」

「だからクラウドの後を追いかけてきたんだ! ボクを置いて行こうとするなんて百年早いよクラウド!」

ふっふーん! という感じで両手を腰に当てて小さな胸を大きく張るユウキ。

初めて会つたときからなんとなく感じてはいたのだが、もしかするとこの子はずいぶんお節介な考えを持っているんじゃないだろうか。

思い違いかもしれない。けど、それでも意地でもついてきた彼女の

その行動力の根本にはそういった思考回路があるからなのではないか、とクラウドは推測する。

ポジティブな言い換えをすれば人情が厚い、思いやりがあるとも言えるのだろうか。

そんなクラウドの感想などには気付かず、ユウキは変わらず笑みを浮かべながら、

「まあ、本当はクラウドがログアウトしたらボクもログアウトするつもりだったんだけどね。クラウドもう寝たかな〜って思ってた覗きに行こうとしたら部屋を出ていくのが偶然見えたから。」

「ここから先は俺の問題だ。何の関係もないあんたを、本当なら巻き込むわけにはいかない」

「大丈夫だよ！ ボク強いから!!」

「いや、そういうことじゃなくて」

「それにクラウドのことが心配。あっちこっち迷いそう」  
「ツ!!」

「道に迷っても格好つけちゃって、助けなくて言えなそう」

「俺の何がわかる。ツ！」

「だからついていくって決めたの！ クラウドはまだこのゲームをやり始めたばかりでしょ！ それに、このことをちゃんと説明してあげるって約束したのに、クラウド勝手に一人で行っちゃって——」

「はあ」

クラウドは両腕を組んで面倒そうに目を細めると、重たいため息をつく。

そのまま無言で先程までいた街の方角へと目を向けていると、

「ああ〜!! ひよつとしてこの期に及んで追い払おうとしてるねクラウドッ!？」

「いや」

・

「そうは行きませんかからね〜！ 最後まで付き合わせてもらおうから！！」

むすつと、口を尖らせながらも逆に関き直った。こうなったら、何を説明しても彼女は絶対納得せず、何がなんでも同行してくるだろう。

実際、クラウドが今一体どういう状況なのか、何を目的としているのか説明しても理解できないだろう。自分の正体について、誰かに説明する機会は滅多にない。

しかも『別世界の住人』という世間一般の常識から大きく外れている知識を教えるには、まず『異世界の仕組み』について知ってもらわないと説明にならない。

クラウドでさえまだ理解できていない部分もあるのに、それをユウキに説明しようだなんて無理な話だ。

何を言っても堪えないであろうユウキは、そろそろ自分が気になっていることを聞きたいようで、呑気にクラウドの後についてきながら質問してくる。

「そもそも、世界樹までどうやっていくつもりだったの？」

「歩いて」

「.. やっぱり」

.. そうクラウドが答えると、ユウキは急に彼の背後へと回り、どういふつもりなのか勝手に背中をペタペタと触りだした。

正確には肩甲骨の少し上。

「!? お、おい!?!」

「思った通りだったよ」

「？」

「クラウドのアバター、ボク達とは全然違うからもしかしてとは思ってたけど..」

「何が？」

「クラウド……『翅』がないんだね」

「！」

「前にも説明したけど、ボクらのアバターはこの世界の雰囲気に合わせて、妖精族としてゲームをプレイするんだ。だからこうやって、妖精らしく翅を広げて空を飛ぶっていうのが主な移動手段なんだよね」

ユウキはそう言うと、自分の背中から輝きを宿した翅を広げた。コムオリ型の半透明翼を出現させると、その身をわずかに空中へと浮かばせる。

「落ちてきた時は思わず飛ぶ練習をしてたのかと思ったけど、どうやらそうじゃなかったみたいだね」

「いや、これは」

「あ、無理に聞くつもりはないよ。皆話したくないことはあるだろうからね。なんでクラウドのアバターは人間体なのか、なんで翅がないのかとか、そういうのは自分が話したくなった時でいいから」

「助かる」

「でも、この世界は広いよ。歩いてだとどれくらいかかるか。高いところや怖いから空を飛びたくないっていうプレイヤーは歩いて探索とかしてるけど、それでもここから世界樹を目指すとなればあまりにも遠すぎるよ」

「問題ない」

「え？」

予想外の反応に、ユウキはキョトンとした顔になった。  
対してクラウドの方は、

「確かに空を飛ぶことはできない……でも」  
「？」

「ソルジャーの身体能力を使えば、長い距離を長い時間跳べる」  
「ソルジャーって？」

疑問を抱くよりも先に、行動があった。

ゴバツ!! と。

地面を思いつきり蹴った衝撃で、クラウドは勢いよく空中へと跳んだ。

「!?」

一気に数十メートルまでの距離を突き進んでいくクラウドに驚愕するユウキ。空中へと跳び上がり、足裏で空気を叩いたクラウドはさらにその距離を伸ばす。

脚力と大気を操作して真っ直ぐに突き進む。これがクラウドにとっての行動手段だった。

ソルジャーとしての身体能力がなければできない芸当。ユウキ達のように翅を広げて空中を漂うのではなく、一直線に突き進むことで空での行動を可能にする。

機動力に関してはどうしてもユウキ達より劣ってしまう。だが、ソルジャーの身体能力があればどんな状況でも臨機応変に対応できる。

大気の流れを掌握すれば、方向転換だって可能だ。

ソルジャーの可能性は無限大。使い方次第であらゆる芸ができる。壁を走る、空気を蹴る、音速の壁を瞬間的に越えるといったことまでできてしまう。

物理学の分類には当てはまらない、ソルジャーによって生み出された新たな法則。既存の物理法則を無視し、自分だけのルールの中で行動できる。

と、空高くへと跳び上がったクラウドが長い時間をかけて地面へと戻ってくる。

「何にしても応用次第でなんとかなる。俺の身体能力は他のみんなと

は違う。翅を動かして飛んでるわけじゃないから滞空時間や機動力という面ではどうしてもあんた達よりも劣ってしまうだろうけど、相手に引けを取られることはない」

ふっ、と鼻で笑ってそう言っただけを見た。

自信満々に、それとどこか誇らしげな表情で。

「」

ポカーンと、開いた口が塞がらないユウキは思考を停止させていたが、やがて興味津々な眼差しを向けて、

「すっごおおおおおおおおおおおおおおおおいッツツツ!!!」

好奇心丸出しな表情のままに、一瞬でクラウドの元へ詰め寄ってくる。

そしてがしいっ！ とクラウドの両腕を掴むと、

「今のどうやったのクラウド!?!」

「え、あ」

「空気を蹴るなんて普通できないよ?! 一体どんなスキルを使ったの!?!」

「」

目を輝かせて早口なユウキの人間離れした恐るべき力でがつくんがつくんと体を前後に激しく揺さぶられるクラウドは、これだけで自分の体がバラバラになるんじゃないかという危機感に襲われた。

ユウキは興味深そうに聞いてくるが、クラウドはだんだん気持ち悪くなってきた。

ので、ちよつと強引にその手を止めさせる。ユウキの両肩を掴んで



少し奥へと押して距離を取らせる。

「とにかく、いざというときはこうやって空を跳ぶことができる。でも、目立ちたくないから世界樹を目指す間は歩きで移動する。ついてくるつもりならあんたも歩いて来てもらうぞ」

「えくせつかく凄いスキルを持つてるのに使わないの？」

「無駄話をしている余裕はない。夜明けまでには次の街に行きたい」

「残念だなく。それじゃあボクの後について来て、次の街に行くにはこつちが近いから」

「ああ」

強引に話を変えて、本来の目的へと修正したクラウドはユウキの指示に従って行動する。

この世界に詳しいユウキがついてきてくれるのはとても心強いと思う。しかし、何の関係もないユウキを本当に巻き込んでもよいのだろうか、とクラウドは悩む。

「面倒だな」

「心配はいらないと思います」

両腕を組んで深く悩んでいるクラウドに、横から少年の声がかかった。ほぼ無声に近いほどの口調で。肩に隠れるようにして話しかけてきたのは、わずか十五センチの少年、チャドリーだ。

「彼女の表情を読む限り、特に何かを企んでいるというわけではなさそうです。それに、彼女なりの善意を素直に受け止めてあげた方がむしろ得策だと思います」

「だとしても、な」

対して、クラウドは悩みの姿勢を崩さなかった。

何が起きるのかわからない。

その事実が不安を煽って、クラウドの心の隅をチクチク刺して余計不安にさせる。

「今は彼女のぐい厚意に甘えるべきです。僕もまだこの世界についてはわからない部分がたくさんあります。彼女の知識と僕の照合データを掛け合わせて攻略していけば、必ず良い方向へと進むはずですよ」

「……」  
チャドリーはそれ以上訂正を促さなかった。

言わなくてもクラウドなら理解してくれると信じたから。

意味のある希望的観測をしようというチャドリーの提案には素直に同意する。都合の悪い現実から目を背けては、状況の悪化を促進させてさらに不安を強くさせるだけか、とクラウドは最終的にそう結論付けた。

そして彼は世界樹がある方へと体ごと向ける。

はるか前方に見える樹を視界に入れた直後、彼は背中に背負っているバスターソードへと手を伸ばして柄を掴む。

抜刀はせず、ただ掴んだ。

掴んだ手を放さず、闇夜の奥にある世界樹を見据えて、ポツリと呟く。

「……待っている」

◇◇◇◇◇

解析完了。

ネットワークに散らばった『博士』の断片の一部を発見。該当座標は『ALO』、ほぼ中央地点。

テスト準備完了。

これより『シン・リユニオン』のテストを開始します。

受肉適正アバター選定中。

候補発見。照合データの検索を開始。

シンクロ率、八十七パーセント。

アバターモデル、『オベイロン』をベースに追加システムを上書き。

クリア。

変貌を確認。

世界を統御するカーディナルシステムはコードを認証。

『博士』の思考、行動パターンを用いて強制操作することにより、システム管理者及び元の人格を抹消するためのハッキングを開始。

第一段階は完了。

変更を確認。

完全アップデートまで ..... 残り、四十二時間。

◇◇◇◇◇

アバターの上書き及び、『人格の再構築』は途中段階だった。

しかし、それでも一つの感情を再現するには十分だった。精神だけとなっていた『それ』は、受肉、または『乗っ取り』が完了するま

ではおとなしくしているつもりだ。

そもそも、思考もできない状態では何の行動も起こせない。だから時が来るまでは波風は立てない。

だが、まさか上手く行くとは思わなかった。

『あの女の理論』など単なる妄想だと思っていたんだが。

今回はまだテスト段階。現実でいずれ強靱な肉体を手に入れて『復活』するための。

『自分の作ったサイボーグ』が仮想空間に侵入したことにより、ネットワークにバラまいた自分の断片を見つけやすくなった。

あとは試しに、この世界でもつとも権限があるアバターを手に入れば、現実での復活もやりやすくなる。

データだけの『それ』は笑う。

汚ねえ笑みをこぼしながら待つ。

狂気染みた笑みを浮かべて、サイコパスな天才は時が来るのを待つ。

## 第7章

一月二十一日、早朝。

突き刺すような日差しにも拘わらず、その場は涼しげな空気に包まれていた。

いや、どちらかといえば冷酷な空気だった。

「その表情が一番美しいよ、”ティターニア”」

「泣き出す寸前のその顔がね。凍らせて飾っておきたいくらいだよ」  
「なら、そうすればいいでしょう」

ティターニア、と呼んだその男の声にアスナはみしりと手の中の骨を軋ませる。

あまりにも聞きたくもない奴の声に、頭の血管が切れるかと思っ

た。  
アスナの目が鋭くなる。ざわざわとした感情の渦が、彼女を中心に周囲一帯へばら蒔かれて絶対零度な空気へと変えていく。

「あなたなら何でも思いのままでしょう。システム管理者なんだから。好きにしたらいいわ」

「またつれないこと言う。ぼくが今まで君に無理やり手を触れたことがあったかい？」

「こんな所に閉じ込めておいてよく言うわ。それにその変な名前で呼ぶのはやめて。私はアスナよ”オベイロン”」  
「いえ、”須郷さん”」

須郷伸之。

そのアバター『妖精王オベイロン』。

この世界を管理するゲームマスターらしい。それはつまり、この世界の神である事をも意味している。

「興醒めだなあ。この世界ではぼくは妖精王オベイロン、そして君は美しい女王のティターニア。プレイヤー共が羨望を込めて見上げるアルヴ・ヘイムの支配者。それでいいじゃないか。一体いつになったら君はぼくを伴侶として心を開いてくれるのかな」

アスナは取り合わない。

今自分の置かれている状況をクソツタレとしか思っていない。

そんなアスナに須郷は肩を軽くすくませ、

「やれやれ、気の強いことだ」

「でもねえ、なんだか最近は」

「でもねえ、なんだか最近は」

いつまでも無視をし続けるアスナの顎に無礼にもそのむかつく手をかけて、強引に自分の方へと向けさせる。

「そういう君を力づくで奪うのも楽しいかなあと、そんな気もするんだよね」

気色の悪い台詞を吐きながら、気持ちの悪い手触りでアスナの頬を撫でる。

指一本一本を別々に動かし、粘つくように。

悪寒が走るようなその手触りに、アスナは嫌悪感を激しく抱いて固く目をつぶってしまう。

それがいけなかったのかもしれない。それを見た須郷は別の解釈として受け取ったのか、指先を徐々に下へと動かしていく。頬から首筋へ、そしてついには深い襟ぐりの胸元付近へと向かっていく。

そこにあるリボンに指先が当たると、須郷は口を三日月のようにはっきりと笑って引こうとする。

「やめて」

しかし、アスナがその手を止めさせた。

強気な声ではあったが、その裏には恐怖心が隠れていた。

そんな弱い女の子が見せる微力な抵抗に須郷は微かな笑みを溢してリボンから手を離れた。からかうように自分の指を相変わらず汚く小刻みに動かしながら、愉快そうな顔をして言う。

「冗談さ。言っただろう？ 君に無理やり手は掛けない、と。どうせすぐに君の方からぼくを求めようになる。時間の問題さ」

「本気でそう思ってるの？」

「ふふ、そんな口を利けるのも今のうちだけさ。すぐに君の感情はぼくの意のままになるんだから」

その時、見開かれた須郷のアバターのエメラルド色の瞳がアスナを突き刺すように捉える。

その濁った視線にアスナは恐怖を感じた。

吐き気で胃袋の中が爆発しそうだった。

須郷のその気分を悪くする視線に胸焼けがしてきた。

「見えるかい？ この広大な世界には、今も数万人のプレイヤーがダイブし、ゲームを我が物顔で楽しんでいる。娯楽施設としか思っていない奴らは何も考えずにただフルダイブが与える快樂に溺れている。しかしね、そんなんだから彼らは気付かないのさ。フルダイブの本当の技術をね！」

須郷が行っているのは、茅場が残した可能性を実現する実験だ。それは何度も聞かされた。

フルダイブ用インターフェイスマシン、つまりナーヴギアやアミュスフィアは電子パルスのフォーカスを脳の感覚野に限定して照射して仮想の環境信号を与えている。別空間に用意されている幻想を見

せている。

だがもし、その限定された部分を取り外したらどうなるか。

須郷は常軌を逸するように語り始めた。

「脳の感覚処理以外の機能。すなわち思考、感情、記憶までも操作、制御できる可能性があるってことだよ!!」

それはまさに洗脳、と言える類いのものだった。

ゲームハードを実質的に洗脳機械へと変えて、人の脳を直接書き換えるのだ。どんな技術かは知らないが、命令文を一文追加するのにはまともな神経で行えるはずもない。

人の脳は繊細だ。

須郷が述べたのはあくまでも可能性でしかない。

現段階でそんなことをすれば、電気的に入力するなんて、それこそ脳を焼き切るほどの電気信号を送らなければならない。人間の脳細胞の動きを一つ残らず監視しなければならいなんて、並大抵の事ではない。生体電気を逆流させるようなことをしてしまえば、人間の脳は簡単にぶっ飛ぶ。

何より人道に反している。

茅場が行ったこともそうだったが、彼はまだ道徳心を完全には失ってはいなかった。彼は覚悟を持ってそれを実行していた。だから彼は最後に潔く死を選んだ。

しかし須郷はどうだ？

人の功績に身を隠して、そこから新たなものを生み出そうとしている。非人道的な行動を起こした茅場の事件に隠れて実験を行っている。大量の人間を使って実験を行っている。

上手くいかなかったら全部人のせいにするとか、そんなことを思っているのだろうか。

少なくとも、こいつは救いようのない糞野郎であった。

「イカれてるわ」



「どうとでも言えればいい。どうせぼくはもうすぐ結城家の人間になる。そこからやがて名実ともに『レクト』の後継者となって、いずれはレクトごとアメリカの某企業へと研究や技術を高値で売り付けてやる」

「ッ!？」

「そして君の配偶者となる！ その日のためにもこの世界で予行演習しておくのも悪くはない」

怖気が走る。

そして虫酸まで走る。

須郷の企みがもはや人間の常識を越えていて、何もかもが全て不快に思えた。拒否反応が脳を刺激し、一刻も早くこいつをなんとかしなければとさえ思ってしまった。

しかし、今の自分には何もできない。

自分は今眠っている。フルダイブ機能によって意識はここに囚われている。それをまずどうにかしなければ何も変わらない。

楽しいげな声。

新しく思い付いた手品の仕組みを語るような笑み。  
そんな流れをさらに楽しむように話を続ける。

「ん〜その表情、懐かしいよ〜」

「えっ？」

さつき似たような台詞を言っていた気がするが、その中の一単語がどうも引っ掛かった。

だが須郷は変わらずアスナを舐め回すように観察する。

「まるで、あの『古代種の娘』みたいな目をする」

「古代、種？」

急にわけのわからないことを話し出す須郷は、どこか楽しそうだった

た。話すごとにテンションを上げて気分を高揚させていく。その様子に、アスナは疑問を抱くように目を細める。

須郷は先程と打って変わって、口調をガラリと変えているように見える。

アスナはその違和感に気付いたみたいだが、須郷は何ともないような顔をして話を続ける。

「そんなことよりも、さっさとあの計画を進めなければ」

「計画って？ さっきからあなたは一体何を言ってるの!？」

「全くこっちの事情を察してくれないかあ？」

「？」

須郷は乾いた息を吐いた。

教え子の無能ぶりを失望した教師のように。

「君達のことなどどうでもいいのだよお。こっちは端からこんな夏休みの工作みたいな世界なんか眼中にない。こんな二流科学者の脳みそなんぞさっさと消し去って、『私』の偉大なる研究に没頭したいんだあ」

「？」

一人言を呟くように喋る須郷に疑問をぶつけた途端、平然ながらも異様な雰囲気醸し出した。

彼のその様子を眼前で目の当たりにしたアスナの瞳孔は大きく動く。予想外の行動に思わず血の気が引いた。

「ッ!？」

「須郷さん、あなた」

「なんだ、ぼくは今、なんと言った？」

と、そこでようやく須郷は表情を変えた。

自分で言っておいて、さつき言ったことを忘れているかのようなことを言い出した。喉の調子を確かめるように、自分の首をさすりながら違和感に遅れて気付く。

自分でも理解できない状況に呆気に取られていたが、わずかに首を傾けて表情を元に戻した。

まるで、誰かが語りかけているから耳を貸しているかのように。すると須郷はすぐに左手を振ってウィンドウを開くと、それに向かって言う。

「ああ今行く。指示を待て」

そう言うと、彼は何事もなかったかのようにアスナに気持ちの悪い笑みを浮かべながら猫撫で声で囁く。

「さて、これでわかってもらえたかな？ 拒んでいても、いずれ君はぼくのことを盲目的に愛することになる。でも、ぼくはそんなことはしたくない。だから次に会う時はもう少し従順になることを祈るよ  
ティターニア」

それだけを言い残し、彼は鳥籠の外へと出るためのドアまで小物感満載な背中をアスナに向けて歩いていく。

去り際にアスナは髪を撫でられて、その悪寒と恐怖に耐えるように彼女は目を逸らす。

そしてやがてガシャンという金属製のドアの開閉音が鳴り響くと、嵐が去ったような静寂だけがその場を支配していた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

とある宿屋。

爽快感溢れる早朝。

不安が膨らみすぎて、現実だったら目の下にどす黒いくまを作つて

しまうレベルで眠れなかったクラウドは寝不足でふらふらになりながらもベッドの中へと再び潜り込む。

「」

夜ってなんでこんなにも長いんだろうと感じてしまうほど眠れなかった。

クラウドは元々メンタルが弱い。不安事が多すぎると悩みすぎてしまつて頭の中が混乱してしまう体質だ。

自分の事を元ソルジャーだと思い込んでいた時の方がどれほどマシだったか。何もかもをソルジャーとしての素質へと置き換えていた頃は、自分の弱さなど忘れてしまつていた。乗り物酔いもしないし、悩み事もそれほどなかった。

しかし、本来のクラウドを思い出してからというもの、その弱点は再び自分の難敵となった。

一生抱えて生きなければならぬのはわかっているが、今でもこの性格に悩まされる。全てを受け入れて前を向いて進んでいこうとは決めてはいたが、やはりどうも気にしてしまう。

だが。

何もその自分の性格だけがクラウドの悩み事ではない。

「クラウドさん、もう朝ですよ。いつまでも寝ていては頭が退化してしまいます！」

突然襲来した、心底楽しそうなチャドリーはノックもせずクラウドの部屋へと押し入って強引に目を覚まさせる。

元から覚めていたが、チャドリーは問答無用でクラウドを叩き起す。

「ちなみに睡眠時間は合計たったの十五分。」

「」

「寝不足を検知。おや、どうやら昨晚はよく眠れなかったみたいですね。」

「わかってるなら、少しは気を遣ってくれ」

「しかし、僕はこれでもクラウドさんを一刻も早く世界樹へと導いて脱出を手助けする救済者としてこの世界へやって来ています。僕のせいでクラウドさんをこの仮想空間に閉じ込めてしまったのですから、一秒でも早くクラウドさんを救い出すために心を鬼にしてでもサポートをさせていただきます。それに、クラウドさんの日常を管理するのは『ナビゲーション・ピクシー』としての務めでもあります。既にユウキさんもログインしてお待ちしておりますので、クラウドさんもお早めに支度していただかないと」

急なキャラ設定を気取り始めるチャドリー。

今の役割が気に入っているのか、それともちゃんと使命を全うしようとしているのか。なんとなく判断に困る。

と、そこに騒ぎを聞きつけたユウキが部屋へやって来て、

「チャドリー、クラウドもう起きた？」

「ちょうど今起こしてました。しかしどうやら昨晚よく眠れなかったようです」

「そっか。でももう宿屋の人が御飯用意しちゃってるからそろそろ起きないと、クラウドも早く降りて来てね！ 行こ、チャドリー！」

「はい！」

「」

ちよつと待っていたきたい。

あなたたちいつの間になんかに仲良くなれたんですか？ そんな顔をするクラウドは瞬きを何回もして、部屋を出ていくユウキ達を見送った。

信じられない光景を目にしてどうリアクションすればいいのかわからない。

おかしい。

どうもおかしい。

少なくともクラウドはまだチャドリーの事は話していないはずだ。存在も明かしていないのに、二人はまるで昔からの知り合いみたいな距離感で話していた。

まさかとは思うが、チャドリーの奴勝手に部屋を出てユウキに会いに行ったのだろうか？

それも気付かない間に。

チャドリーは事態把握のためならどんな場所にも赴く覚悟でいる。自分の生みの親から離れるために、わざわざ敵である自分に会いに来たくらいだ。ミッドガルのネットワークをハッキングしてでもクラウドの行動を監視するくらいに行動力がある。

この世界のことをよく知るため、ユウキに会いに行ったということなんだろうか？

だとしても、一日で関係が進みすぎじゃないか？ とクラウドは啞然としてしまっている。

それにユウキも状況の飲み込みが早すぎる。もっと何か疑問を抱くべきだろう。これは一体どういうことなのかとか、こいつは一体何なんだとか、そういう疑問を少しくらいクラウドにぶつけてもいいはずだ。なのにそれをせずいつもの日常を送っているということは、もうすんなり受け入れたということだろう。

チャドリーの説明の仕方がよかったのか、事態は上手く収まったようだ。自分の知らない間に。

眠らずにずっと起きていたというのに、展開が進むその瞬間を見逃してしまった自分の愚かさにさらに絶望する。

注意力が不足してしまうほど油断していたということなのか。

不安や悩み事を抱えすぎて他の事を考えられなくなってしまう結果、周囲の変化に気付けなかったらしい。

「はあ」

クラウドは望まぬ場面転換に重たくため息をつく。

なんかもう、この先がさらに不安になってきた。事態は良い方向へと向かっているはずなのに。都合良く展開が進みすぎていて逆に怖くなる。

そんなこんなで『ALO脱出作戦』二日目もドタバタでスタート。

◇◇◇◇◇

一体なんでこんな展開になっているんだ？ とクラウドは肩を落としていた。

ここは地下に広がる地底都市。

そこにある宿屋の食事場。オープンスペースとして、店の外にもいくつかのテーブルが並べられている。

そのテーブルの一つに、紫と黒が混ざったような装備を着た少女が食事を摂っていた。朝食らしい食事。パンにベーコンエッグ、そしてミルクが一杯だけ。

ちなみにクラウドは、パン一個のみ。彼にはそれだけで十分だった。

だが、チャドリーが凄かった。

彼は今、ハンバーグやスパゲッティやサラダといった大量の料理に埋もれていた。念のために言っておくが、これ全部チャドリーのものだ。ピクシー姿のままなのに、彼は吸い込むようにその食事にかぶりついている。

「濃厚でいくとくなくない。後味も素晴らしい。また、使用した鉄板の温度も精密に再現されていて肉の硬さを程よく仕上げております。舌を刺激して脳に深い幸福感を与える。これが、『美味しい』という感覚でしょうか？ とても興味深いです!!」

「」

チャドリーはサイボーグであったが故に食事を必要としていな

かった。もし食事なんてすれば腹の中に料理の残骸が溜まる一方で、消化器官がないから下手すれば故障する恐れがあった。

しかし、現在チャドリーはアバターの状態だ。

何を食べても故障なんてしないし修理も必要ない。料理は元から電子で構成された偽物なのだから、食べても現実には何の影響も与えない。よくて、食べたという感覚を脳に与えるだけだ。

よって、チャドリーは今まで体験したことがなかった『食事』という文化に触れて心底楽しそうであった。

仮想空間での体のため現実には何の問題もないのだろうか。しかしまあ、これだけの料理をガツガツ消費していくこの少年の許容量は一体どうなっているのだろうか？

ピクシー姿で食える量ではないと思うんだが。

傍目から見ると、とてつもなく目立つ食事風景だった。

そんな中クラウドは、目の前に広がる暴食の光景を眺めながら嘆息する。

すると、食事を終わらせたユウキがクラウドに聞いてくる。

「それにしても、クラウドってやっぱ凄いな」

「え？」

「その子、『プライベート・ピクシー』っていう奴でしょ？」

「たしかプレオープンの販促キャンペーンで抽選配布されたっていう。今日ログインしたらその子がボクの部屋の前でウロウロしてたから一瞬驚いたけど、クラウドのナビゲーション・ピクシーだって言ってきたからさ」

「あ、ああ」

「でも、プレオープンから参加してたのにあまりこの世界のこと詳しくなかったよね」

「それは」

「リアルが忙しくてアカウントだけ最初に作って暇ができたから最近始めた、って感じかな？」



「そうだな」

「ふくん」

ユウキの質問にクラウドはただ頷くことしかできなかった。だがしかし、ユウキがそれを補助するように都合の良い解釈を自分でして話を進めてくれた。さすがに踏み込み過ぎたと感じたのか、ユウキはそれ以上は聞いてこなかった。

内心かなり焦ったが、クラウドはそれを表情には出さずに冷静に対処した。都合の良い解釈を勝手にしてくれて本当に助かった。

しかしチャドリーの奴、やっぱり勝手にクラウドの元から離れていたらしい。それに気付かなかった自分を改めて呪った。だが、一応元の世界のことは話してはいないみたいだった。そこはやはりちゃんとしているようだ。

それにしても一体何のためにチャドリーは自分の元を離れたのだろうかと疑問に思っていると、チャドリーが口を開いた。

「ところでクラウドさん」

「？」

「世界樹に行くまでの道のりの話なんですが」

「ああ」

「ある程度聞き込みをして照合してみたところ、最短距離で行けるルートを僕なりに作ってみました」

世界樹に行くには、この鉾山都市を通らなければならなかった。

世界樹に行く先にある山脈は、どうやら飛行限界高度よりも高いせいで山越えができないらしい。山脈は世界中央を囲むように広がっていて、どう足掻いても洞窟の中を歩いて進まなければならなかった。一応洞窟の中を進まずに行けるルートもあるみたいだが、遠回りになる。故に、世界樹に向かうには地下に広がる都市を通って行かなければいけないらしい。

元から歩きで向かう予定ではあったが、どちらにしても好都合では

ある。なんで飛ばないのかとか、そういう疑問を周りのプレイヤーが考えなくて済むからだ。

道中何事もなくやって来れたのは運がよかったから、とユウキが説明してくれた。この洞窟にはオークというモンスターが大量に棲んでいるらしいのだが、一回もエンカウントせずにやって来れるなんて奇跡らしい。

そんなことよりも、まずはこれからどう動けばいいのかの相談だ。

チャドリーは勝手に離れて手に入れた情報を整理して、最短で世界樹にたどり着くルートを説明する。

「洞窟を抜けると、世界樹までの距離は二十キロメートルにまで近づきます。そこを目指す途中には街や村はないみたいです。中立地帯になるため、その場で即ログアウトといったことができません。しかしこのアルン高原にはフィールド型のモンスターはいないみたいなので、特に戦闘も行わずにたどり着けそうです」

「そうか」

「ただし、プレイヤーに襲われなければ、の話ですが」  
「！」

「世界樹に近づくにつれ、強敵なプレイヤー達と交戦する可能性が高まります。皆さん世界樹の上へ行く方法を必死になって探していますし、お金を奪い取って強い装備やアイテムなどを手に入れるための資金調達をしようと企む者達がこの先増えてくると推測します」

「そういえばこのゲームはプレイヤー同士の争いがメインのゲームであった。」

自分達の種族の勢力を発展させるために、違う種族を襲うのがこのゲームの醍醐味だ。そこから得た金やアイテムを執政部に上納して良い武器を揃え、そしてプレイヤー達を強化し、最終的には世界樹へと挑む。

「そういうゲームであったことを忘れていた。」

しかし、今さらそんなことを気にするわけがない。

襲われたら返り討ちにする。ただそうすればよいだけのことだ。

「わかった」

それだけを呟くとクラウドは足に力を込めて、椅子から立ち上がる。  
うとする。

が、ここでユウキが意見を出してきた。

「その前にさ」

「!?」

「まずはアイテムを揃えない? 距離が近いとはいえ、チャドリーが  
言っただよようにこの先色んなプレイヤー達と戦うかもしれないし、途  
中には街も村もないから、回復が得意なウンディーネの援護もなしに  
進むのは危険だと思うんだ。だからせめて回復アイテムでも買い揃  
えておこうよ」

「確かに、そうですね。その方が効率良く攻略ができそうです。万が  
一襲われてしまった時に保険として回復アイテムは買っておいた方  
がいいかもしれません。クラウドさんもそれでいいですよね?」

「ああ、そうだな」

「なら、早速アイテム屋に行こつか! 値段が安い所知ってるからつ  
いてきて!!」

ユウキは行きつけのアイテム屋へ案内するために椅子から立ち上  
がって先に走っていく。チャドリーも、その後を追いかけるように小  
さな翅をパタパタと動かして飛んでいく。

「」

そんな中、クラウドは何故か顔をひきつらせた。

原因はクラウド自身にあった。

ここに来てからというもの、クラウドはあまり役に立っていないよ

うに思える。ユウキの善意に甘えて、部屋を貸してもらったり、道案内してもらったり、なんか人に頼りつきりな気がする。

チャドリーも、勝手に動いたのはどうかとは思うが、クラウドの代わりに情報を手に入れてくれていた。コミュ障の自分に代わって、道行く人々に聞き込みをしてくれた。それだけでも凄い役に立っている。

ユウキとチャドリーは現段階では自分よりも有能な働きを見せている。それがなんとなく、劣等感のようなものを感じてしまって、クラウドは落ち込んだように肩を落とす。

改めて説明しておくが、本来のクラウドは気が弱いのだ。メンタルが弱く、悩み事を抱えてしまうとネガティブになりやすい性格だ。

二人に甘えてばかりで本当に良いのだろうか、自分ももつと活躍しなければいけないのではないか、とか何とか考えながら彼は一度深呼吸した。

「クラウド〜！ 早く〜!!」

「ああ」

「いずれにしても、この世界に詳しい二人に頼らないと何も変わらない。」

今は目立った活躍が出来ていないだけでこれから挽回すればいい、とクラウドはやや前向きな気持ちになりながら二人の後を追うように歩調を速めた。

## 番外編

過去を乗り越えるのは容易な事ではない。

そんなのは皆同じだ。

悲しい過去と向き合うのはどんな人間だろうと辛いものだ。いや、辛いという枠には収まらないだろう。それ以上の感情を抱くことになる。あんな嫌な気持ちはないだろう、胸を締め付けて心を苦しめるような気分は決していいものではない。忘れたくても忘れられない記憶、それは一生背負う罪なのかもしれない。

しかし、それでも人は乗り越えようとする。少しでも前に進むために。

やり方は人それぞれだ。どれも参考にはできないが。

一つ例を挙げるとするならば、『自分の恐怖と向き合う』というのが一番最善な克服方法かもしれない。

恐怖の対象となるものと真剣に向き合い、徐々に克服していく。『ある男』も、いずれはそうするだろう。

さんざん恋い焦がれた者の無念を晴らすため、自身に埋め込まれた宿命を受け入れた。胸を張って『彼女』の想いを継ぐために、『男』はまたもう一度強く“銃”を握ることができた。

これは、まだ先のお話。

罪と罰に向き合うために、“一人の少女”と共に彼はまた引き金を引く。



電話は持たない主義だ。

あんなもの、持っているだけ無駄だ。連絡などこっちからほとんどしないし、そもそも誰も連絡を寄越さないからだ。持つてるだけで邪魔になる。

しかし、一応は連絡手段として無線機だけは預けられている。持っているのではなく、預けられていると表現したのは、彼の意思関係なく持たされているからだ。どこにいても繋がる衛星電話のため、連絡以外の機能は一切ない。

「彼は隠れ家として使っている宿屋の一室で、窓際のベッドに座り込んでいた。壁に背中を預けるようにしている理由は単純で、眠れないからだ。」

もう、十分眠った。

そう言うかのように、彼はずっと起きていた。

窓から入り込むそよ風に、羽織っている赤マントが微かに揺れる。異様に伸びている髪は風には流されずに形を保っている。赤いバンダナで前髪を上げているがその髪質はかなり痛んでおり、所々が跳ねている。

彼はベッドに座りながら、だるそうにして首と肩で無線機を挟んでいた。手を使いたくないほど、彼は今無気力状態である。

そちらからは、渋い男の声が届いてくる。

『私、リーブです。最近どうですか？ 元気になっていますか？ 噂じゃあなた、犯罪組織を片っ端から片付けているそうですね？ 最近聞いた話では、金にもならない戦闘に参加してテロリスト達を鎮圧し、誘拐されそうになっていた人達を無償で助けたとか』

「ハハ、相変わらず口数が少ないですね。そこら辺はやっぱり、どこかクラウドさんと似ていますね』

「用件はなんだ？」

頭の中で何か的確な言葉を考えながら、同時に無線機で話をする男は少し不機嫌そうに目を細める。言葉を出そうとしても、それよりも

先に電話相手が話してしまうから口下手に見えるだけなのだが。

通話相手の名前はリーブと呼ばれる、『神羅の元幹部』である。

『ああ、忘れてました。実はあなたにどうしても頼みたいことがありますまして』

「？」

『つい先ほど、ミディール付近にある小規模施設とある犯罪組織が立てこもり事件を起こしているという通報を受けまして、それをあなたに解決して貰いたいのです』

「断る」

『即答ですか!?!』

「誰が何の目的でそんなことをしているのかは知らんが、面倒に巻き込まれるのはごめんだ」

『な!?! そんな、一緒に世界を救った仲じゃないですか!?!』

「第一、私は便利屋ではない。そういうことはクラウドに頼んでみたらどうだ?」

『私も最初はそうしようと思いました。ですが彼は五ヶ月ほど前にとある大仕事を引き受けていたらしく、『休暇中につき、アンタ達のおもりをするつもりはない』と断られました。ですからあなたにしかお願いできず——』

「なら私も休暇中だ。他をあたってくれ」

彼は嫌そうな声で言ったが、電話相手のおじさんはそれを聞いた瞬間『そりゃないわーっ!』と叫ぶと、

『ゴホン!』ではせめて、援護だけでもしていただけませんか?

我々だけでは人質となっている者を無事に救い出すのは難しいのです

「そもそも、そいつらは何の目的でそんなことをしたんだ?」

『聞いた情報では、そこは元々とあるフリーの研究者が使っていた実験施設のように、様々な研究資料が残されていたとの事です。使わな

くなつたとはいえ、一応そこは神羅が管理していた場所だったので、警備の者を一人配置して一般人は立ち入り禁止にしていたのですが、どこかから聞き付けたのか、彼らはその施設にある研究資料を狙って今回の事件を引き起こしました。人質となっているのは、そこを警備していた者ですね』

「貴重な資料なのか？」

『と、言われるとそうではないみたいです。元々破棄されたプロジェクトの残りみたいなものですから。調べたところによると、見込みのある兵士達を訓練するべく仮想空間で戦わせるためのマップデータがあるのだとか。今では神羅が開発したバトルシミュレーターがありますから、別に珍しいものではないです。その元となったデータ、原本という意味ではある意味貴重ですが』

「フリーの研究者とは？ どこにも属していない研究者の施設を、神羅が強引に占拠したということなのか？」

『いえ、たまたま見つけたというのが妥当です。それに、少なからずその研究者と神羅は関わりがあつたようです。業務提携、とでも言えば良いのでしょうか？ 神羅が見つけた時には既に無人の施設で、破棄されたような場所だったので神羅が管理してたようです。事業拡大というやつです』

いつの間にか、彼はリープの話聞いていた。特に興味もないのに、今回の事件の詳細を細かく聞いていた。

おそらく、昔の癖が無意識に出てしまっているのだろう。彼は元々、そういう仕事をしていた。

人には言えない、そんな仕事を。

『無人の施設だったので、神羅が有効活用したというわけですね。たしか、その施設を使っていた研究者の名前は…… “グリモア博士” 』

「ッ!？」

それを聞いた途端、彼は目を見開いた。



血のように真っ赤に染まった瞳がゆらゆらと揺れる。

『そのグリモア博士が残した資料を求めてその施設へと侵入したみたいですが、何が目的なのかは現段階では不明です。いずれにしても、その人質になつている方を助けねばなりません。お願いします、あなたにしか頼めなくて——』

「で、何をさせたいんだ？」

『!?!? 引き受けてくださるんですか!?!?』

散々自分で頼んでおいて、やる気を見せたらすぐこれだ。

彼は呆れたような口調で話す。

「私の気が変わる前に、早く言え」

『は、はい！ と言つてもこちらがして欲しいのはその人質を救い出すことだけです！ 既に施設の周りは包囲していますので、やり方は任せますから好きなだけぶちのめしたってください。あ、倒してください』

「さー」

ぎゃあぎゃああとテンションを上げて説明していたらなんか変な話し方が混じってしまったことに気付いたのか、リーブは何事もなかったかのように訂正した。

『それじゃあ後で合流しましょう。あなたの事だから我々が着く前に終わらせてしまうでしょうけど』

「さあな」

無線機からの声に、彼は突き放すように言った。

そして通話を切ると、無線機をベッドの上に投げ捨てて立ち上がる。後ろを振り返らず、彼は部屋を出るために出口へと向かう。

出る、と言つても。  
扉からではなく、窓からだ。



今時の泥棒は、何を盗むかわからない。

金目のものなら何でも盗むみたいだが、それにしても研究資料はないだろう。貴重でもない限り、それには何の価値もない。

だが、奴らには奴らなりの価値観があるのだろう。

当初の計画では暗闇に紛れて施設に近づいて、さっさと目的のものを盗んでとつととんずらするだけだった。

神羅も見放した施設なんて簡単に掌握できるなんて甘い考えでいた。施設の見取り図も既に入手しており、どこをどうすれば全ての部屋を調べられるかも事前に調べていた。

最初の失敗は、まさかの警備がいたということ。

見捨てた施設だと聞いていたのに、警備をしていた者にばったり遭遇してしまった。警備の者も驚愕しただろう。いつものように施設内を巡回していたら、まさか盗人と出くわすなんて予想もしていなかったはずだ。人っ子一人いないような場所に配属されて退屈な仕事をこなす毎日とうんざりしていたから非日常を味わいたいと思つたこともあつたらうが、こんな形でその願いが叶うことになるとは。

おかげで警備員は施設内を逃げ回り、警備室から救援を要請したせいで泥棒共は立ち去る事もできず、立てこもりという情けない状況に陥ってしまった。

ちなみに今、警備員はしっかりと縄で縛って拘束した上で気絶をさせて床へと寝かせている。

「くそ、なんでこんなことに！」

盗人の一人が苛立ちを見せた。

今回も絶対に上手く行くと思つたのに、楽勝な仕事だと思つたの

に、とんでもないミスでこんなことになってしまった。まだ警備員がいたという情報は聞かなかった。

つまり、意図的に伏せられていた。

そんな事すら気付かず潜入してしまうなんて三流じゃないんだからよ、と思わず叫ぶ。凡ミスでは済まされなような失態をしてしまつてさらに苛立つ一同は銃器を強く握りしめる。

この状況では、仮に施設から目的のものを手に入れたとしても逃げられるかどうかかわからない。誰にも気付かれずに奪つて見事に逃げきるとというのが自分達の売りだというのに、と奥歯を強く噛み締める。

「おい！ まだデータは見つかんねえのか!？」

「今やってる！ 少し黙つてろ!!」

野太い声で叫ぶが、仲間の男は容赦ない口調で応答すると目の前にあるモニターに集中する。

カタカタカタカタとキーボードを操作し、目的のものを探し出す。

それにしても長い。

長すぎる。

かれこれ三十分はかかっている。目的のもの一つ探し出すのにあまりにかかりすぎだ。リーダー各らしき男は苛立った顔のまま鼻をこすつて溜まつた鼻水を吸い込む。

緊張と焦りからくる汗が集中を乱すし、何より彼は短気であった。

「くそ、なんでこんな仕事引き受けちまつたんだ!! 『ファーストソルジャー計画』のデータを探し出すなんて、なんで今更そんなの欲しがらんだよディープの奴らはよおッ!!」

依頼人の名を告げながら悪態をついた、その時だった。

「！ おい！ 見つけたぞ!!」

「!!」

それを聞いた途端、部屋のあちこちで応援の奴らが来ないか見張っていた男達が一ヶ所に集まりだした。

モニターに表示されている文を見て、皆が歓喜の声を溢した。どうやら当たりのようだ。

それを見たリーダー各の男はUSBドライブを取り出すと、データを取り出すために差し込み口に差す。

「よし、データを完全にコピーしたらさっさと逃げ出すぞ。焼夷弾を何発か打ち込んで目眩ましを起こしたらすぐバラバラに散らばって後で別のところで合流する。わかったな!」

めちやくちや手抜きな指示に思えたが、全員がその命令に頷く中、

バアンツ!!

という甲高い銃声が炸裂した。

その瞬間、男達の心臓は掛け値なしに止まったと思う。

いや、実際に止まっていた。

固まっていた男達の内の一人、モニターを操作していた男が、不自然な体勢で真横に吹き飛ばされていた。倒れ込む方向に、赤黒い血が尾を引き、そのまま力なく床へと転がる。

その男の頭を起点に、血がどんどん溢れてきて床へと流れ込む。

「な!」

リーダーが驚きの声を上げるも息を詰まらせて上手く話せなかった。

動揺を隠せていないみたいだが、彼はすぐさま視界を横に向けて何があったのかを把握するために状況を確認する。

そんな中、あるものに目が行った。  
そちらにあるのは、部屋の出入口。  
そこに、一つの影があった。

「て、てめえッ!!」

アサルトライフルを持った盗人が叫び声を上げた。そこでようやく、全員が金縛りに似た感覚を強引に解いた。

標的を見つけた瞬間に全員が手に持っている銃をそいつに向けると、容赦なく引き金を引く。

ドドドドドドドドツ!! という銃声が部屋中に響き渡る。

空気を振動させて自然の音をかき消していく。

無数の弾幕が一点に集中する。

だが、どれも当たることはなかった。

「フッー」

床を蹴ってその場から消えると、彼は天井にある電球を全て撃ち抜いた。

ガツンガツン!! と、ガラスの悲鳴が炸裂したと同時に部屋全体が闇に染まる。モニターから漏れるわずかな光だけが、中心で固まっている男達の周りを照らしている。

すると彼は、全員が視界を奪われ硬直状態に陥つたのを見計らうと、真ん中に固まっていた男達を部屋の反対側の壁まで吹っ飛ばす。どうやったのか、男達は考える暇もなかったはずだ。闇の中で何が起きたのか、情報が確保できない状態では知る術はない。

唯一わかったのは、闇の中で青白い火花が瞬いだと思ったら、唐突に現れた怪物みたいな姿をした影にぶん殴られたということだけだった。

全員がぶっ飛ばされた中で、一人はノーバウンドで分厚い壁に激突したせいで、体の内側からバキンという何かが粉碎された音が鳴り響

いた。そいつはそのまま床に崩れ落ちる。

「ぐっ!!」

他の何人かは生き残っているようだが、関係ない。彼は一々全員の生死など確認しない。

真っ赤に染まった瞳で全てのターゲット達を正確に捉える。

「ハッ！」

息を少し吸って吐くと、手に持っている拳銃の銃口を向け、迷わず引き金を指にかけてそのまま引く。

彼の拳銃は特別だった。

三本の銃身を持つ、古式銃型の特注品だった。

そこから放たれる鉛弾は散弾のようにして正確に一人一人に撃ち込み、風穴を空けて血を撒き散らしながら床へと転がした。

口から熱い何かが溢れたと自覚した時には、既に意識はなかった。急所を撃ち抜かれた男達は血管を破壊され、傷口から溢れるように赤黒い液体が流れ出ている。

たったの数秒で銃撃を鎮圧させた。

これでは、敢えて残しておいたリーダー各の男だけだ。

「ひっ!?!」

ギロリと睨まれた男は、とっさに近くに偶然転がっていた物を掴み起こす。何か鈍器的な物で殴られたのか、意識を失っている人質の警備員だった。

人質を盾にすれば攻撃できない、そう思ったのだろうか。だが、考えが甘かった。

今日の前にいる奴は、『神羅の暗部を司る精鋭組織の元メンバー』。そして、『星を救った一人』でもある。

よって、その足掻きが無駄に終わることをわかっていない。  
彼はゆっくりと肘を曲げて銃口を上に向ける。

「へ、へへっ！　これでてめえも下手に動けねえだろ！　撃とうとしてんならやめといた方がいいぜ？　その銃は散弾式なんだろ、照準を一点に向けられない時点で俺だけじゃなくこいつまで巻き込むことになるぜ!？」

「哀れだな」

「はあ!？」

「自分達で罪を犯しておきながら最後までその悪を貫き通そうとはせず、我が身可愛さに追い詰められたら何の罪もない人を盾にするとは」

「あ!?!　何言ってるんだてめえ!?!」

そう言いながら彼は、腕を降ろして拳銃を下へと向ける。あの言動からして、おそらくは手を引こうとしているのだらうと、リーダーの男は素直にそう捉えた。しかし、その考えは甘かったと後に知ることになる。

彼は哀れんだ眼差しを向けて、しかし同情することなく。

人の道を外れたクズを睨み付け、冷酷に小さな声でこう言い放った。

「せめて最後くらい、銃口に向かって死んで見せろ」

彼の目の色が変わった。ゆらり、と陽炎のように体が歪んだと思ったら唐突に、ヒュン!!　という風を切る音が生じた。

空間を引き裂いて宙に浮いた彼の体は瞬間的に失い、赤いマントのみになって一瞬で男の真横まで距離を詰めていた。

彼の弾丸は人質には当たらなかった。

代わりに彼は、リーダーの男が何か次の動作を行うためのトリガーが引かれるよりも先に引き金を引いた。

パンツ!! と鼓膜を破裂させる音が至近距離で聞こえてきたと思ったら、男の体が大きく仰け反った。

「がッ、あああッ!?!」

肩に赤黒い風穴が開く。

襲いくる激しい痛覚に男は何とか踏ん張ろうとしたがそれよりも先に筋肉が音を上げてしまって、本人の意思と関係なく床に倒れ込む。

人質の警備員は怪我は負わなかったが、男が吹き飛ばされた衝撃で転がっていった。

だが、これで人質の安全は確保された。あとやるべきことは目の前で倒れ込んでいるクズの掃除だけだ。

リーダーの男は床に倒れながらも眼球だけ動かして彼の顔を見る。化け物を見るような目つきで。

「な、なんなんだお前。一体なんなんだよ!? なんでお前みたいな化物を神羅は雇ってんだよ!?!」

「むしろ私が聞きたい」

驚愕に染まりながら疑問をぶつけてくる男だったが、彼はそれに対して疑問で返した。

「何故私が、手を切ったはずの神羅と再び手を組んでまでお前達を追い詰めたと思う?」

「は」

「仕事だからだ」

男の喉が干上がる。

その一言を言い終わった瞬間、彼は改めて銃口を前に出すと、静かに囁いた。



「これがプロフェッショナルのタークスのやり方だ、“元”だがな」

最後の銃声が響き渡った。

リーダーの男はその瞬間までわずかな抵抗を見せたが、すぐに動かなくなった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「これか」

彼はモニターの前でキーボードを操作していた。

先程まで銃撃戦が繰り広げられていた空間の中心にあるモニターにはいくつものデータが残されていた。

人質となっていた警備員は、目が覚めたと同時に目も当てられない現状に体を縮めて震えていたが、彼は気にすることもなくモニターを操作する。

彼がとにかく気にしているのは、盗人どもが欲しがったデータだけであつた。

一体奴らは何を求めていたのか、それを確認する。

何故彼はそんなものに興味があるのか、理由は単純だった。

（親父）

自分の父親が使っていた研究施設が狙われていたと知ってしまった。自分は、黙っていられなかった。

その昔彼は、神羅に属していた。

神羅の暗部と言える組織の名は、『タークス』と言う。社会の裏にしながら、表舞台を守るために活動している小組織だ。

三十年ほど前に、彼はそこにいた。まだ神羅カンパニーが神羅製作所という名で活動していた頃の話で、世界に名だたる企業になる前に

彼はそこから抜け出した。

抜けた、と言ってもほぼ強制的であった。

『ある狂った研究者』によって人体改造された彼は、もはや人として生きられなくなり、表舞台から姿を消した。

望まない力を手に入れた代償として失ったのはかけがえのないものだった。

日常、時間、感情、愛する人。

その全てを失った彼は日が当たることを拒絶し、とある屋敷の地下深くでずっと眠っていた。

気が遠くなるほど暗闇の中で過ごしてきた彼であったが、ある日元ソルジャーだと名乗る青年達がやってきたことがきっかけで再び地上へ出ることになった。

そこから今に至るまで話すと長くなるのでいつかまたどこかで説明させてもらうが、とにかく彼は自分の知らないところで自分の父親が研究していたものがなんなのかを調べるために今ここにいます。

わざわざ回りくどいやり方でやって来たんだから、それなりの報酬があってもいいはずだ、と思った時。

ピッ、とモニターから電子音が鳴った。文字化けのようなデータが高速でスクロールされていき、その中の一つに『機密ファイル』と書かれたものがあつた。

おそらくこれだろう、奴らが欲しがったのは。

彼はキーボードを操作して、そのファイルのロックを解除した。機密コードのパスワードを即座に解析して入力できたのは、彼がタークスにいたおかげだろう。あらゆる汚職を引き受けていた彼ならば、短時間でパスワードを特定するなど造作もない。

と、画面に表示されたデータに彼は注目した。

盗人どもがあれだけ欲しがったということは、単なるデータではないと受け取ったのだ。

自分の父親が研究していたデータ。

その正体は。



そうして、彼は依頼主であるリーブと久々に再会した。彼の部下達が事後処理を行っている中での再会に、普通なら懐かしむところだが。

「あはは！ やっぱり自分達が着く前に終わらせとりましたか〜！  
任せて正解でしたわ〜！」

「えらいすんまへんなあ。普通なら本人が来るべきなんでしょうけど、自分戦うの苦手なもんやさかい。それに加えて他にも仕事があつて忙しゅうて現場に行けへんかったので、今日はいつもの『ぬいぐるみ』を着込んできたつちゆうワケですわ」

彼の目の前には、糸目をした二足歩行の猫がいた。王冠を被って長靴を履いて、小さくて赤いマントを首に巻いて訛りのある喋り方で彼に話しかける。

彼はそれを眺め、呆れたようにため息をついた。  
すると猫型のぬいぐるみは急に真面目な声色で、しかし訛りを忘れてない口調で彼に声をかける。

「ところで、何かわかりましたか？」

「調べたんでしょ？ あいつらが求めてはった物」

そう言われると彼は、猫のぬいぐるみにUSBドライブを渡す。

「記録を漁ってみて、得られた情報はそれだけだ」

「これは？ 何のデータが入ってるんです？」

「座標」だ」

「座標？ 何の？」

「神羅が極秘計画のため、使っていた『仮想空間』だ。超人兵士、つまりはソルジャーとなるものを生み出すための訓練用プログラムとして使われていた場所へ行くための」

「まさか、『ソルジャー計画・プロジェクト0』でしょうか？ でもなんで今更そんなもん奴らは欲しがりましたんやろ？」

「さあな、私の知ったことではない。そもそもそれは使われる前に破棄されたデータだ。それを元にして、神羅は新しい仮想空間を自分達で作りに出してしまったから用済みとなったんだろう。今でもその仮想空間は残っているみたいだが、どんなところなのかはまだ解析できていない」

「ま、それについてはこちらで解析しときます。しかし、やっぱりそういう類いのものでしたかー。仮想空間そのもののデータやなく、行くためのデータというのが意味不明やけど。神羅のことやから銃とか剣とか、そういった武器を兵士に扱いなれさせるための訓練用フィードプログラムとかでしょうね」

ぬいぐるみがそれを受け取るのを見ると、彼は何も言わずに静かに振り返った。

立ち去ろうとするその背中を見て、ぬいぐるみはニヤツと口角を上げて、

「せやけど、ほんまに『ヴァインセント』はんは優しいわあ。何やかんや言うても、助けてくれはりますんやから」

「」

猫は素直に褒めた。

彼は真剣に感心していた。

『ヴァインセント・ヴァレンタイン』はしばらくその場に立っていたが、特に何のリアクションも見せずに歩きだして離れていく。

戦いの果てに得たのは、よくわからない仮想空間への入り口。

今後、それが彼の人生を左右する重大な転機のカギとなるのだが、この時はまだ知る由もなかった。



そのデータは別の世界へと繋がるカギだった。

その世界は荒廃しきっており、まさに世紀末とも言える場所であった。

「！」

翠玉色に染まった前髪サイドを肩に掛からない程度に伸ばしたショートカットの少女には、暗黙のルールが設定されていた。

今肩に背負っている対物狙撃銃を、『自らの恐怖』と向き合うために使用する。それに承諾すれば、いつかは自分の罪の意識を払拭できると信じていたからだ。

いつかこの世界を出し抜く。

荒廃しきったフィールドで行われるゲームに勝利する。

そして、『過去の自分』に再び自由を与えなければならぬ。それだけが彼女の目的であり、それ以外は何もなかった。

それまでは、自分を蝕む恐怖の思惑に乗って動いてやる。

その先に待つものが必ずしも結果に繋がるとは限らないが、もう止まってやるつもりもない。もしそうになったら、自分をそこまで追い込んだ貴様自身を恨むが良い、と。ネガティブながらも、周囲の状況に押されて体を前に進ませている。

日没寸前の薄暗くなってきた砂漠地帯の中で座りながら、そんなことを考える少女。

その時だった。

「来たぞ」

「！」

仲間からの合図に、彼女は顔を上げる。

周りにいた奴らもそれを聞いてそれぞれの得物を構えて戦闘に備える。

「よし、俺達は作戦通り正面のビルの陰まで進んで敵を待つ」

「」

「——ッシノン」、状況に変化があったら知らせろ。狙撃タイミングは指示する」

「了解」

カウボーイハットを被った男に言われて、少女は相棒の『PGM・ウルティマラティオ・ヘカートII』のスコープを覗く。遠く離れた場所にいる今回のターゲットは、スコープを通して見ると、圧倒的に大きく感じられる。

照準を合わせ、風の流れを読んで射撃のタイミングを見計らう。

と、準備をしていると耳につけているイヤホンから男の声が飛んできく。

『位置についた、狙撃を開始しろシノン』

「ッ!!」

声を殺して発せられた声に従って、彼女はリラックスした様子で引き金を引いた。

ドン!! という銃声が周囲を震わせた。銃口から飛び出した弾丸はターゲットへと向かっていく。

いずれ、その銃口はまた別の誰かに向けられるだろう。

近い未来、その弾丸は『別世界の住人』にも放たれることになるのだが、それはまた別の話だ。

## 第8章

須郷は薄暗い一室にいた。

世界樹の中にあるその部屋は、ファンタジー世界であるこのゲームには似つかわしくないデザインだった。

仕事のために使うであろう大量の機材に、現代的な事務机と椅子があった。簡単に言い表すなら企業ビルのてっぺんにある社長オフィスだ。カーテンで閉め切った部屋で須郷は高級そうな椅子に腰を掛け、両足をだらしなく机に乗せてくつろいでいた。

重役だからこそできる態度。仮想空間だからこそ許される姿勢。

彼はたった一人で、誰が聞いても不快にしか思えない下手な鼻歌を気持ち良さそうに歌っている。おっさんの鼻歌なんて想像するだけでゾツとする。

呑気なものだ、と第三者の誰かがこの場にいたらそう思っていただろう。彼は今重罪を犯しているというのに、何も思っていないような顔で振る舞っている。

『SAO』の生存者の意識の一部を強引にこの世界に閉じ込め、そして人体実験を行っている。世間にバレれば即逮捕されるようなことをしているというのに、それでも須郷の顔から余裕が消えることはなかった。

計画は完璧。皆娯楽にばかり注目して、フルダイブの本当の価値に気づいていないバカな奴らばかりだ。楽しんでる内は誰も肝心なことに気がつかない。たとえ何かの手違いで世間に漏れ出たとしても、今行っている実験の偉大さを見せつけければ誰もが須郷を讃えるだろう、と少なくとも本人はそう思っているようだ。

人は本当の須郷を見ればクズな人間のお手本とでも表現するだろう。しかし、そういう非難を平気で浴びせている時点で、そいつらも人の尊厳を知らないクズに過ぎない。

何を言われようと偉大な実験が成功すれば皆自分の重要さに気づいて保護さえするようになる。

そう思ってるから彼は困らない。

「ボス、指示されてた被験体の継続モニタリングの結果の報告に来ました。一回目と変わらず、またスピカちゃんの夢見てました」

と、ヌメつとした声が聞こえた。

敬語ではあるが、その一文一文に敬意はそこまで込められていない。

聞こえてきた方を見ると、そこにはナメクジ型のモンスターが一匹いた。触手をうねうねと動かしてこちらに近づいてくる。

気持ちの悪い姿をしているが、こいつは須郷の共犯者。つまり非人道的な実験を行っている科学者の一人である。

何でそんな姿をしているのかはわからないが、十中八九そいつの趣味だろう。普通の人なら絶対になりたくない姿を平気そうな顔でしているということは、つまりはそういうことなのだろう。

そんなナメクジ部下からの報告に、須郷はゆつたりとした調子で適当に言葉を投げ返した。

「感情誘導回路形成の結果か、それともただの偶然か。どちらにしても、お前はそんなつまらない結果の報告をするためだけにわざわざここに来たのか？」

須郷は優秀な部下しかいらぬタイプの上司だ。

要件の重要度を自分で理解できないような奴は須郷からすれば使えないレベル。無能な部下を雇うなんて、須郷からすればあってはならないこと。採用する時見る目がなかったということにだけはしたくないのか、須郷はナメクジ部下を害虫でも見るかのような目付きで睨む。

「す、すみません!!」

「ふん」



しかし、人員確保が全然出来ていないのは当人の能力不足が原因。須郷が人件費ケチって優秀な人材を雇えなかったから、その程度の事も出来ないような奴しか見つからなかったのもまた事実。

たかが知れてる部下の判断能力など、期待するだけ無駄。

だから大抵は諦めている。よって余程の事がない限りは許してやっている。

しかし、失態に対しては死んだ程度では許さない。ペインアブソバを全切りして限界まで痛め付けて、現実で後遺症を残すほどの苦痛を与えてでもケジメをつけさせるのが須郷のやり方だ。

そのため、ナメクジ共には常にペインアブソバを切らせている。いつでも処刑を実行できるように。

「と、ところでボス」

「あ？」

「昨日言っていた、『頭痛』の方はもう大丈夫なんですか？」

「ああ、まだたまに痛むよ。原因はおそらくフルダイブで脳に負担をかけすぎたからか、もしくは働きすぎからくる疲労が原因か」

「だ、大丈夫なんすか？」

「原因はどっちでもいいんだがなあ。フルダイブだろうが疲労だろうが、そこから来る頭痛なんてプロピオン酸系の解熱消炎鎮痛剤でも飲んできやどうにでもなる。問題はあっちだな」

須郷は昨日から頭痛に悩まされている。

痛み自体はそこまででもない。なんか頭重いなあと軽く感じてしまう程度のものであるため、特に日常生活に支障をきたすほどではない。

ただ、それよりも気になることがある。

（あの現象は一体なんだったんだ？）

口が勝手に動いて思ってもいないことを喋るなんてこと今までなかった。自分は社交不安障害でもないし、統合失調症でも発達障害でもない。『てんかん発作』の一種なのかとも思うが、だとしてもそんなことになるほど自分は脳を過剰に活動させてはいない。

廃ゲームマー共よりもフルダイクはしていない。仕事や実験の際にログインするくらいで、たいして脳の神経細胞に負担を与えていない。

なんにしても、あの現象は不気味だった。

まるで、意識が乗っ取られたかのような感覚だった。

須郷はあの現象について悩みつつも、すぐ近くにいるナメクジ部下に話しかける。

「『そういう被験者を確保した時に、『意味不明なバグ』が入ったろ？あれの原因は特定できたか？」

「え、ああ」

須郷のその言葉で、部下は彼が何を尋ねようとしているのかを察した。

「まだ解明できてませんが、一つ気になるものがありました」

「あ？」

「SAOがクリアされてログアウト処理が始まった際に開始した被験者確保で何人かのプレイヤーをこっちに連れてきたとき、一人を除いて全員アバターを与えずに閉じ込めたじゃないですか」

「ああ」

「で、被験者の数を数えた時に気付いたんですが、数が合ってませんでした」

「は？」

「えっと、たしか三百人の旧SAOプレイヤーをこっちに連れてきたと思うんですけど、データを確認して人数を数えてたらなんか『三百一人』って表示されてました」

初めて聞く報告だった。

そりゃ今日初めてその件についてこっちから聞いたんだから知らされてなくて当たり前だが、報連相の基本も出来ていない部下に須郷は一瞬怒りの感情を抱く。

何かわかったら即報告するようにと伝えたのに、それすらも出来ないのかこいつは、という視線を向けるも部下はそれに気付かない。

今日まで全然知らせて来なかった部下の失態についてどうケジメをつけさせるか須郷は考え始める。少なくとも生きてるのが辛いと感じるほどの罰は最低限でも与えるつもりだ。

だが一先ずはその件については置いておく。部下の話の続きを聞いてから処遇を決定しよう。

「でもデータ閲覧室には三百人しか収納されていないんすよね。何度数え直してもちゃんと三百人分しか用意されてなかったし。たった一人だけアバターが与えられて今もフィールドに野放しなんてそんな馬鹿なこと素直に考えられないし、だから正直わかんないです」  
「だが、一応その一人のデータは事実上データベースにあるんだろう？」

「あ、はい。閲覧室に保管されてなくても、データベース上には記録として残ってます」

「...そいつのSAO時代のプレイヤーネームは？　もしくは現実世界の实名は特定したか？」

「いえ、確認したんですけど文字化けしてて何もわかんなかったです。ついでに繋がっているナーヴギアも特定しようとしたんすけど、どうもおかしんすよね。なんか逆探知しようとしたら機材が変なことになるというか、誤作動を起こすというかなんというか」

「プレイヤーデータもか？　それすらもわからないのか？」

「もう謎だらけっす。何もかもが文字化けしててデータにしようにもバグるし。この辺りはほんと何もまだわかってません」

まあわかることがあるとすれば、とナメクジは前置きをして、

「正式な研究機関のような機材があるわけじゃないから断言できませんけど、どうもこいつ存在しているかも怪しいんですね。ここまですら解なことが起きてると、もはや何かの心霊現象なんじゃないかとすら思えるっすね〜」

「じ、冗談です」

須郷は椅子に腰掛け、テーブルに足を乗せたまま辺りを見回した。眉間にシワを寄せ、まるで今の状況が気に食わんと言っているかのよう眉毛がピクピクと動く。

須郷は思考を巡らせる。

今須郷を襲っている特殊な現象。存在するはずのないSAOプレイヤーデータ。

その一連を、心霊現象などといったオカルト的なものだけで説明できるだろうか。

(無理があるだろ)

科学的な思考を持つ彼にはそんな考えには至らない。しかし、先ほどの報告を聞く限り、今起きている現象は自分の頭脳では説明できない。

そもそも自分の作った世界にバグが起きております、なんて須郷のプライド的に許せないしふざけてる。完璧な世界を創造したんだ、バグなど起きるはずもない。

となると、今起きている怪奇現象は一体どんな法則で起こされているのだろうか？ と、結局はそこへと戻ってくることになる。

ナノテクに電磁波や量子力学など複数の科学技術が挙げられる、が。この場合でも須郷の意味不明な現象の説明がつかない。そもそも、そういった技術はまだどこも開発できていないはず。自分すら今

やっていることなのに、他企業が先行して開発し、第三者が自分の頭脳を遠隔で制御するのは可能だったのだろうか。

いやおかしい。説明がつかない。というか納得できない。

しかしだとすると、それこそオカルトの世界に話が進んでしまうことになる。常識を越えた知識が今この現象を引き起こしているとか、非科学的すぎてもはや笑えてくる。

（ヒヒッ）

須郷の目が細くなる。

心の中で乾いた笑い声を上げるが、そこに悲観的要素は何一つなかった。

むしろ須郷は、興味深いとすら思っていた。

普段の須郷ならありえない思考だ。そんな現状にいつもなら苛立ち、なんとしても解決して何事もなかったかのように振る舞うのが彼のスタイルのはず。

しかし、今は無理やり理解する。

科学の最先端の場にいるからこそ、あらゆる事態が楽しくて仕方がない。予想外な出来事こそが科学者として最も望むべきものだ。計算通りに事が進んでしまつては面白くない。何千何万と実験を行っている、理論だけでは演算できない妙な数値が出てきたりもする。

それがむしろいい。

心地良い。

そこから更なる研究結果を出せばそれでいい。

「あの、ボス？」

「あ？」

「さっきからずーっとボーっとしてますけど、聞いてますか？」

と、ナメクジが急に声をかけてきた。

どうやら無意識に、自分の世界へと入り込んでしまっていたらしい。先ほどからずっと説明していたようだが、須郷は気付くこともなく仮説をずっと立て続けていた。

須郷はナメクジに問題ないとだけ告げると、目元を抑えて固く目を瞑った。

（最近、こういうことが頻繁に起きてるな）

須郷はこの世界を創造した辺りから、漠然と何かに囚われていた。自分の信じている完璧な理論のどこかに、見えない穴が空けられたような感覚。

何かを考える度に、それを越える知識がそれを否定する。たどり着く事のできない常識がいつも脳裏に過って須郷の思考を遮る。

まるで、第三者が『お前の考えは全部間違っている』と言ってきている気分だった。

彼は舌打ちをすると、机からようやくやく両足を下ろした。

「まあいい、特に支障はないんだ。それよりもこっちはこっちの事を進めるべきだ。実験の状況は？」

「あ、はい。実験体の一人に対して感情誘導回路形成の結果を観測するために、そいつが最も好きそうなイメージを記憶領域に挿入させてみたところ、まだ三回目なのにB13と14フィールドがスケールアウトしてて、16もかなり出てたんでもうこの頻度で現れるのは閾値を越えていると証明したと言っても過言ではないです。それから、人の思考を変更するために生体電気の逆流を試みて、人格や知識を強制入力するためのプログラムの開発状況についてですが――」

ナーヴギアといったゲーム機器は、本当なら開発するべきではなかったのかもしれない。

頭脳に直接干渉する機械なんて、必要最低限の安全装置がなければただの殺人兵器だ。今では、ナーヴギアのように頭をすっぽりと覆う

ような機械ではなく、ゴーグル型のより軽量化したゲーム機器が使われている。

しかし、彼らはリスクについてちゃんと考えているのだろうか。脳に与えられる負担は一体どれほどのものなのか、開発した者達は本当に試したんだらうか。

機械から発せられる電気信号が脳に与える影響によって、何らかのデメリットが発生しないなんて本当に証明したのだろうか。まだたったの二年しか使われていないフルダイブ技術を、更に長く使えば人間はどうなってしまうのか。パソコンやらコンピューターで正確に計算したとしても、それはただの仮説だ。現実で実際に起こるまでは証明したとは言えない。

心配しないで使い続けて下さいませ、と言われて使い続けられればいずれ人体に悪影響を及ぼす作用によって、肉体になんらかの支障が生じる。昔のゲームだって、大型テレビに繋げてずっとゲームをプレイしていれば目に負担が行って徐々に視力が落ちていく。

フルダイブ機器から発せられる微量な電気が脳細胞を絶対に傷つけないなんて、誰が証明したんだらう。

何かを求めれば求めるほど、安全は損なわれているように思える。  
だが、どうでもいい。

「科学の発展には犠牲がつきものだ。そうだろう、二流科学者君？」

研究結果が映し出されているホロウインドウを触手で操作しながら説明していると、ふと須郷がポツリと呟いた。

乾いた笑みを浮かべて、一人言のように。

「はい？」

当然、ナメクジはそんな須郷にまた目を丸くしていたが、須郷は何事もなかったかのように『何でもない』とだけ言った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「クラウドってさ、SAOにいた頃ってどんなプレイヤーだったの？」

「いきなりだな」

「ちよつと気になっちゃって」

薄暗い洞窟でユウキが変なことを聞いてきた。

クラウド、ユウキ、チャドリーの三人は先ほどまでいた街を発ち、今は外へ出るための道を進んでいた。モンスターとエンカウントすることもなく、普通に歩いているだけでさすがに退屈だと感じたのか、気分を少しでも変えるためにユウキはクラウドに話しかける。

「SAOで仲の良い人とかいた？」

「いや、いなかった」

「ふん」

クラウドは気まずそうな調子で、まるでユウキの視線から逃れるように先へと進んでいく。

しかしユウキは遅れることなくついてくる。何がなんでも会話をするために。

クラウドは視線を前に。

元々洞窟内で光が届かない状態なので、地下空洞内に明かりはない。ただし、地下への街に行くために所々経路案内を示す松明があるため、完全な暗闇という訳でもなかった。洞窟の壁に直接松明が差し込んで設置されているので、たとえ明かりがなくてもとりあえず通路を歩ける感じだ。

少し進んでクラウドは後ろを振り返ると、

（「こゝもモンスターが現れないものなのか？」）

出口を目指して足を進めているものの、こゝもモンスターと都合よ



く出会わないもんなんだろう。洞窟こそいかにも魔物の住み処  
と感じて大抵襲いかかってくるものだと思うのだが。

などと思っただが、ここはゲームの世界。仮想空間であるため自  
分の常識は通用しない。あまり考えない方がいいのかもしれない。

「どうかしたのクラウド？」

「何でもない」

ユウキはそんなクラウドに首を傾げた。

彼女の様子を見ると、やはりこの世界ではモンスターの生態は現実  
とは異なっているのだと思われる。こうもリラックスしながら歩い  
てるのを見ると、モンスターは決まったところにしか出現しないので  
はないかと思われる。

気配を察知することに長けたクラウドは常に周囲を警戒している。  
だが街を出てから洞窟内を歩くまで人影らしい人影もなかったし、人  
の気配らしい気配もなかった。人であろうとモンスターであろうと、  
潜んでいるなら潜んでいるなりの吐息すら聞こえてきそうなほどの  
静寂に包まれているというのに、その音さえ聞こえない。

つまりは単に誰もいないということだろう。

そう勝手に思い込んで自己完結する。

出口へと導くために両側に備え付けられた松明の明かりを頼りに  
奥へと進んでいくクラウドとユウキ。

リラックスした状態を保ったまま二人は先へと歩いていく。

そんな時だった。

カツン、と。

何か小さなものが転がるような物音がクラウド達の後ろから聞こ  
えてきた。

「!?」

クラウドは慌てて背後を振り返る。

その途端、次の動きがあった。

洞窟の壁一面が大きく波打った。壁を形成している岩がゴロゴロという固い音を響かせ、どこか一点に集中していく。

そして不意に、彼のすぐ後ろにいるユウキの足元が勢いよく盛り上がっていた。

「!?」

ユウキが気付く前にクラウドが驚いた。洞窟の地面が隆起し、そこから『掌』のようなものが現れた。

「ユウキ！」

「え？」

クラウドはユウキの返事も待たずに走り出す。そしてそのまま飛び込むように彼女に抱きつき、一緒に地面に倒れ込む。

固い地面に背中をぶつけるように倒れた彼はようやく事態の把握を開始する。

先程までいた場所に、巨大な腕が伸びていた。

洞窟の天井まで伸びている腕は、地面を突き破ってそのまま真下から飛び出してきた。

それに応じて周囲の石ころや岩がその一点に集合していく。形は問わずに強引に押し潰し、練り混ぜて形を整えたような巨大な何か的形成されていく。

石像。

この世界ではゴーレムと言った方が適切か。

巨大な石像は地を踏み鳴らし、洞窟内の地面を大波に揺られる小船のように大きく振動させた。

「ようやくお出ましか」

そこまで考えて、クラウドは思わず笑った。ユウキもそれにつられるように笑みを浮かべる。

出口までの道を大きく塞いだ石像は、二人を睥睨するように見下ろしている。そして二人の姿を捉えたゴーレムはゆっくりとした動作で腕をゴゴゴと上に上げると、勢いよく二人の元へと振り下ろした。クラウドはユウキを抱き抱え、その攻撃を避けるように後ろへと一歩後退してかわす。

避けられたことを確認したゴーレムは、ジロリと頭を動かして二人を睨み付ける。砕けた岩が複雑に噛み合ったような音を鳴らしながら、石像は重たい足音を響かせて二人に近付いてくる。

クラウドはユウキを地面に降ろして体勢を立て直すと、彼女に問いかける。

「やれるか?」

「もちろん!!」

この時を待ちわびた。

そう言うかのようにユウキは元気よく答える。

二人は得物を抜き、構える。

「始めるぞ」

「うん!!」

クラウドが戦闘開始の合図を囁く音量で叫び、ユウキもそれに応えて駆け出していく。

めちやくちや熱い展開になりそうな予感に気分が好調した二人は、自分達の相棒を握り締めてゴーレムへと立ち向かっていく。

## 第9章

洞窟内は無風だった。

よって空気抵抗もなくスムーズに動ける。

「ツ!!」

足場がでこぼこで安定しない中でも、二人は弾丸のような速度で坑道内を走る。おそらく人が見れば驚いてしばらく瞬きをするような速度で。

身体能力が極めて高い自称ソルジャーと、この世界で磨かれた仮想の剣士。

二人はどこか似ていて、そしてどちらも得物を構えて突進していく。

直後。

ゴオツ!! と真っ正面から拳が飛んできた。

二人のプレイヤー。その存在を認知したゴーレムは真っ正面から踏み込み、重たい一撃を突き入れる。

「右へ回避しろ!」

「わかった!!」

その動作に気付いたと同時に、クラウドは盾になるように前へと出てユウキに回避するように指示する。

「来いツ!!」

言って、クラウドはバスターソードの先端を、思い切り地面に突き刺す。

ドツ!! という衝撃波が炸裂する大音響が坑道内に響き渡ってク

クラウドとユウキの鼓膜を叩く。待ち構えたクラウドとゴーレムの拳を中心に、破壊された岩から粉塵の嵐が巻き起こる。

最初の一撃を見て確信した。こいつの一つ一つの動作はゆっくりで、簡単に見極めることができる。

大降りでわかりきった攻撃など、待ち構えていればどうということもない。

「今だッ!!」

思わず大声を出すのが、返事はない。

代わりに、

「ヤアアアアアアアアアアッ!!」

裂帛とした気合いと共に放たれた剣がゴーレムへと迫っていく。

彼女の持つ剣は黒曜石製。

現実であれば窓ガラス並みの硬さとされているため、ナイフや鋭利な金属に当たるとわずかに傷つく程度の耐久力しかないが、ここはゲームの世界。ゲームの仕様上、鍛冶スキルを極めた者に強化を頼めば、その硬さはダイヤモンド並みにクラスアップされる。

ゲームシステムを利用して最大限に強化した剣は、ゴーレムの岩肌すら一刀両断する。

・は  
・ず  
・が、

ガキン！ と。

そのユウキの硬い剣を弾き返した。

「え!?!」

硬い岩に弾かれて腕が痺れる。

その硬い岩すら両断することが可能な彼女の武器が弾き返されて腕に痺れを負わせられたことにより、ユウキの混乱する頭は真っ白に

染まる。

彼女は強張る体を震わせながら、

「ッ!!」

そこでゴーレムは、ギロリ！と目を回した。

視界に入れたユウキにタゲをつけたゴーレムが、クラウドを無視してその巨体を大きく振り回した。

グルグルと回転して鉄球の如く振り回される腕に、ユウキだけでなくクラウドまで吹き飛ばされる。

「ぐっ!?!」

「うわ!?!」

クラウドは元から防御体勢だったので無事だったが、ユウキは違った。彼女の剣は普通の剣より細い。その剣を盾にして受け止めたが、不安定で体重を預けられなかった事と、片手で防いだのが災いしたのか、その体が浮いた。

その瞬間に、未だに振り回されていた腕が彼女に直撃する。

「うわああああああアッ!!!?」

ユウキが脇腹を殴られると、彼女の体が坑道の壁に激突し、その岩を粉碎させた。

ゴロゴロと音を立てて崩れていくユウキに対して、クラウドは叫ぶ。

「大丈夫か!?!」

「う、うん。平気」

背中を強く打ち付けられて地面に倒れ込んでしまったが、彼女は心

配をさせないようにVサインを送る。

その間に、ゴーレムは回避行動で致命傷を避けたユウキを見つけ、再び無造作にその物理攻撃を振るう。

しかし、地面に腹を密着させている今のユウキでは、これ以上の攻撃は致命的となる。だからクラウドは、ユウキとゴーレムの間に割り込むように飛び込んだ。

「はあああああああああッッッ!!」

ユウキの体に振り下ろされかけた巨大な拳をギリギリの所で、全てを断ち切るバスターソードを使って攻撃を遮断する。

しかし、ガキン！ という音が響くだけでダメージは与えられない。

「何で斬れない!？」

バスターソードの切れ味は、硬い金属でさえも両断する威力を持つ。それなのに、目の前のゴーレムにはその攻撃が効かなかった。

あり得ないと思った。

いつもならこの程度の敵、すぐに斬り崩してしまえるのに。

「クラウドさん!」

その時、チャドリーがポケットから顔を出した。

ズボンのポケットにいるので、チャドリーはクラウドの耳に届くように結構な音声で叫びまくる。

「あの敵は現実的には作られていません！ この世界を創造したシステム管理者がより強化して普通の攻撃、つまり剣の刃を通さないようにプログラムされています!!」

クラウドは眉をひそめる。

つまり、ゲーム上の仕様ということか。

散々現実には近付けるためによりリアルな世界を創造したくせに、今になって嫌がらせにも思えたそのシステムにクラウドは舌打ちをする。ラストダンジョンならまだしも、ここは街を出て数距離にあるところなのに、こんな強敵をフィールドに配置するなんて馬鹿げてやる。

一応攻略できるように設定はされているだろうが、剣が効かないのでは話にならない。

ではどうしろと言うのか。

剣が効かないなら何で倒せと言うのか。

素通りしようにも、完全にゴーレムはこちらを敵視している。プレイヤーの上にあるアイコンに反応し、設定された動作通りに動く。見逃すなんてバカな真似はしない。

岩の巨人は敵NPCとして、あくまでも自動的にプレイヤーを排除しようとする。

そう、尚も近くで倒れていたユウキに。

「避けろッ!!」

「ッ!!」

ゴッ!! と腕が振り下ろされた。

ゴーレムは一度捉えた相手は見失わない。完全に叩きのめすまで標的にする。

空気どころか洞窟内全てを押し潰そうとするその拳は、ユウキの顔を正確に狙うコースだった。

「しまっ!?!」

体がまだ麻痺していて避けれないと悟ったユウキは、その一撃を前に小さく息を呑むが。



「ハアッ!!」

一撃が横切った。

瞬間、ゴーレムが真つ直ぐ放ったはずの拳は蛇のように横に逸れた。クラウドが放った一撃はどれもこれも重い。

粉碎するには至らなくても、横に逸らすことは出来る。

振り下ろされるはずだった拳が軌道を曲げられたせいで壁にめり込み、粉碎された岩から巻き上げられた砂煙が洞窟内に漂う。

霧のように漂う砂の粉末が、巨人を起点に取り囲む。

うつすらと視界が悪くなった中で、クラウドのズボンから何かが飛び出してきたのが見えた。

「クラウドさん!!」

「!？」

急に現れたチャドリーに目を見開くクラウドだが、今はそれどころではない。

「こんな時に何だっ!？」

「いえそうではなく、チャンスです!!」

疑問を浮かべたクラウドは訝しげにチャドリーを見る。

すると彼は、小人となった手を巨人に向けると、

「現在ここは洞窟内、しかもちょうど良く無風状態です」

「だからなんだ？」

「よく聞きますせんか？ 鉱山なんかで爆発が起きる事故のほとんどの

原因は、その鉱山の中で削られた岩の微細な粉末が空気中に充満していたせいなんです。ちょうど今みたいに」

クラウドはその時悟った。  
チャドリーが一体何を言いたいのかを。

「そこにわずかな火花や静電気といった微量な熱が加わると、どうなるかと思いませんか？」

「ッ!!」

にやり、と笑った。

ある意味、純粋な子供のように。

火というのは、燃え続けるために酸素が必要となる。それで可燃性の粉塵が大気中に浮遊した状態で着火すると、燃えるための酸素の燃焼速度がものすごい勢いで速くなり、最終的に爆発を引き起こす。

粉末が漂っている中で火を点けたことにより発生した熱は、さらに他の粉塵粒子の分解を促進し、次々連鎖的に可燃性の気体を放出させ、空気と混合して発火、火炎と爆圧を伝播させていく。

その為に、堆積粉塵の存在する箇所は全部粉塵の爆発の被害を受ける。粒子の表面温度を上昇させる手段としては熱伝導だけでなく、遠くからの光や熱のような放射電熱によっても発火することがあり、遠距離からでも熱を投げ込めば爆発を引き起こせる。

ちょうど今、それに適したアイテムがクラウドの手にある。

「どいてろユウキー！」

「ッ!!」

気付いた時には、クラウドはユウキを退げさせるために叫んでいた。

その声を聞いたユウキは何か策を思い付いたようなクラウドの顔を見て察し、縦に一回頷いて起き上がると、バックステップで引き下がっていく。

充分な距離まで離れたと確信したその時、クラウドのバスターソードにはまっついている翠玉色の水晶玉が光る。

二つの穴にセットされている内の一つが光ると、その光は剣を通してクラウドの右手へと伝っていき、体全体を包み込む。

彼は剣を下へと向けると、左手を開けて上へと向け、

「ファイガ」

クラウドの左手の掌から炎が噴き出した。まるで彼の手の中から火山が噴火したかのように、それは一瞬で燃え上がった。

彼は使い慣れているようにその現象に何の疑問も思わなかった。

一切の躊躇もなく、ゴーレムの巨体へと炎の渦を裏拳気味に空気を振り払う手振りで解き放つ。炎は激突と同時に膨らみ、閃光手榴弾のように辺り一面へ眩い光と炎を撒き散らした。炎が酸素を吸い込み、勢いを留めることなくゴーレムの身体に巻き付く。

ゴバツ!! という轟音が炸裂した。

凶悪な音が響き渡り、摂氏三〇〇〇度もの地獄の火炎がゴーレムの周囲を渦巻いて燃やし尽くす。

まさに火山の奔流、もはや爆弾。

爆音による閃光と、熱波による黒煙が吹き荒れる。クラウドの放った炎は鉄の巨人を完膚なきまでにバラバラに粉碎する。

「ッ!!」

今までかろうじて人の形を保っていた岩の巨人は、クラウドが放った炎を受けた場所を起点に、まるで爆発するように飛び散った。大量に切り分けられた岩石は坑道内の天井近くまで吹き上げられ、それから重量に従ってゆっくりと落ちていく。

音のない断末魔を上げたゴーレムは土へと還る。

『炎』が封じ込められた結晶、『マテリア』の業火が解き放たれ、微細な粉末に点火した炎が辺り一面の空間を爆発して炎と熱風を撒き散

らす。

衝撃波がクラウドとユウキの頬を叩き、風圧でよろめくが、それでも爆炎に巻き込まれる事だけは避けられた。

もうもうと立ち込める粉塵の烈風は、数秒も経たぬ内に消えていく。

クラウドが放った魔法、『ファイガ』に押し出された空気之余波は、この世界を長くプレイしているユウキにとっては見たこともない魔法だった。

「す、凄い…ッ!!」

ユウキは見たこともないその魔法の威力に圧倒されていた。

本来、この世界の魔法は複雑な呪文を唱えなければならぬ。最低でも四行ほどの長い詠唱を唱えなければ魔法は発動しないのに、それをクラウドはたった四文字しかない言葉を呟いただけで跡形もなく消し去るほどの業火を放った。

一体どういうトリックなのか、ユウキには理解できなかった。そもそもクラウドの種族もよくわかっていないのに、炎属性の魔法を使ったこと自体驚きだった。

これほどまでの威力を少し呟いただけで放てる炎の魔法は、この世界にはまだ実装されていない。数文字程度で高威力を放ったクラウドのその技術に疑問を抱くが、

「無事かユウキ?」

対して、クラウドは既に危機は去ったとばかりにユウキの元へ歩いてくる。

何も言えなかったユウキはただ淡々と頷くことしかできなかったが、心の底からクラウドに対して興味を示すような眼差しを向けていた。瞳を輝かせて、その力の正体は何なのか興味津々だった。

クラウドの放った魔法の正体はわからないものの、その力はまさに

圧倒的だった。

危機は去った。

全てを燃やし尽くしたクラウドの炎は、今もなお坑道内を高温に満たしている。

◇◇◇◇◇

空の色は相変わらず青色に染まっている。

危機的状况を脱したクラウド達は、無事に洞窟内を抜けることができ、てくてくと森の中を歩いていく。

「ずっと洞窟にいたから外の空気が新鮮だね！」

「データの空気なんて所詮作られた紛い物でしかない」

「もー！ 夢がないなあ!!」

「」

しまった、とクラウドはちよつと罪悪感が湧く。こういう時に限ってコミュ障が発動する。人との会話が五秒も持たないクラウドの話し方にユウキはまた頬を膨らませる。

クラウド的には普通に会話をしようとしているつもりだが、彼の言葉のチョイスに少し問題がある。問題ないように話してはいるものの、他人からしたら空気が読めてない発言と取られる。

そんなクラウドにムスツとしたユウキは、

「ねえクラウド!!」

「？」

「はい!!」

すると、何を思ったのかユウキはクラウドの前に出ると両手を上に上げてにっこりと笑顔を見せる。手のひらを顔らへんの高さに合わせて固定し、何かを待っている様子だった。

これはあれか。

クラウドは少し渋い顔をする。

なんとなく、ユウキが求めていることがわかった。しかしどうしてもそのスキンシップはクラウドには合わない。何か恥ずかしいというか、抵抗があるというか。

「ほらー！ 早く早く!!」

そもそも何故それを今やらねばならない？

悩んでいるクラウドにユウキは手のひらを誇示するように爪先で立って急かしてくるが、どういう展開があったらそんな行動に出るのか説明してほしい。

と、ここでクラウドは思い出す。

「あー」

そういえばさつき共闘したね。

しばらく経ってからその事に気づき、ため息を吐くクラウド。

「腕、疲れてきたかも」

わざとらしく言うユウキはそれでも笑っている。

もう何もかも諦めたクラウドは、渋々ユウキの提案に乗ってあげる。

パン！

と、二つの手のひらが重なりあった。

「うん！ よし!!」

「」

にこつと笑うユウキにクラウドはどこか肩を落とすが、案外悪いものではなかったのは確かだ。

と、そんな調子でクラウドとユウキはテンションが噛み合わないながらも森の中を歩いていく。

木々が揺れ、突風が吹き上げるとクラウドはそれに釣られるように視線を上げる。その先には、目標地点である世界樹があつた。周りにある木とは違って、天を貫くほどの高さがある巨木。

それがもう手の届く距離まで近付いていた。

クラウドの意識が世界樹に向いたせいか、会話が途切れた。

ずっと真剣に見ているクラウドに、ユウキは何か察したんだろう。隣に合わせるように歩いていたユウキは、

「あ、もうこんな時間だ」

唐突に彼女はそう言った。

その声にクラウドは隣へと視線を移すと、ユウキがウィンドウを表示して時間を確認していた。

ユウキはこちらをくるりと振り返ると、

「ごめんねクラウド。ボクこれから予定があつて、一旦落ちないといけないんだ」

「そうか」

クラウドとしては、こういう小さな女の子が長くゲームをプレイしていることが心配だったので、ちよつと安心だ。

ゲームは適度にプレイするもの。この先は自分一人でも何とかかなる。心配はいらないから安心してログアウトして欲しいとクラウドは思った。

クラウドはユウキに無言で頷いて、別れの言葉を言おうとすると、

???

「だからさ、ここで一回ローテアウトしよー！」

「」

■ わけのわからない呪文にクラウドは首を傾げる。

■ あれ？　ここでお別れではないのか？　という顔をするクラウドに、ユウキは説明する。

「ああえつと、ローテアウトっていうのは交代で休憩することだよ。ここはまだ中立地帯だからね、ログアウトしてもアバターだけ残されちゃうんだ。そんな状態のまま、他のプレイヤーなんかに襲撃されちゃうとアイテムも全て奪われちゃうから、残った仲間が抜けたアバターを守るんだ」

「そうなのか」

「うん！　クラウドなら安心して任せられるし、いいかな？」

言っていることの半分も理解できていないだろうが、要は守ればいんだらうとクラウドは頷いた。

「ありがとう！　じゃあ一時間くらいしたら戻ってくるから、それまでよろしくね！」

長い、という感想を抱く前にユウキはウィンドウを表示させてログアウトボタンを押した。その瞬間、ユウキのアバターは目を閉じ、横倒しに崩れそうになった所でクラウドに寄り掛かってきた。

クラウドは慌ててユウキの体を支え、倒れるのを防ぐ。

ユウキはぴくりとも動かない。意識は完全にログアウトしたようだ。

クラウドはユウキの体を傷つけないように、そつと地面に降ろす。彼女の体を寝かせると、このまま一時間守らなければならないということを書いて出して周囲を警戒するも、辺りに人の気配はない。



そんな時、クラウドのズボンからもぞもぞとチャドリーが姿を現して、彼の顔の前に飛んでくる。

「クラウドさん。ユウキさんが戻られるまで時間がありますし、クラウドさんも少しお休みになつては？」

「いや、そんな時間は——」

「彼女は先程アバターを守って欲しいと仰っていましたが、周囲の状況を確認するためにこちら一帯をスキヤニングしてみたところ、この周辺には他のプレイヤーどころか敵NPCの反応も検知されませんでした。多少休んでもバチは当たりませんよクラウドさん？」

「」

クラウドは無言だった。

何も言わず、ただぼたりと仰向けに地面に寝転がる。すると、チャドリーもうんうんと頷くとクラウドのズボンに戻っていく。

神経を使いすぎたか、と気が抜けたのか緩んだのか、クラウドは大きなため息をつく、隣に寝ているユウキを見て独り言を呟き始める。

「よくわからない奴だな」

「何がですか？」

「なんでもない」

チャドリーが聞いてくるも、クラウドはわずかに口角を上げてそう呟いた。

クラウドは思わずといった調子で笑ってしまった。

何故か彼女といると、退屈しない。『いつもグイグイと引つ張ってくる彼女との接し方』がわからない感覚が、どこか懐かしかった。

クラウドは『彼女の事』を思い出す。

（エアリス）

彼女もユウキのように、活発な女性だった。

別に全てが一緒ってわけじゃない。でも、どうしてか彼女とユウキを重ねてしまう。ソードアート・オンラインが崩壊する直前に、再会できたのは奇跡だった。ずっと言いたかったことをようやく言えた。それだけで心が救われた気がした。

彼女には感謝しかない。

自分のその後を強く決定づけるほどの影響を与えてくれた彼女とどこか似ているユウキと一緒にいるのは、意外と楽しい。

「」

少し寂しそうな息を吐いたクラウドは、ユウキが戻ってくるまでの間、昼寝でもするかと目をゆっくりと閉じる。

まさに、その一瞬手前の出来事だった。

「ん？」

視界の端に何か映った。

輝く太陽を切り裂くように、何か得体のしれない影が上空を横切る。

「」

小さな点にしか見えなかったが、その数は三つ。

三つの影は、一直線に突っ切っていった。

その勢いよく通りすぎていく何かを眺めていると、

（あれは!?）

そのシルエットに見覚えがあった。

二人の影に抱えられている者のシルエツト。その姿はこの世界では珍しく、翅が生えていない。空を飛ぶことが出来ないのだろう、よって二人に持ち上げられて連れてかれている。

二人の姿はよくわからなかったが、抱えられている者の姿は確実に捉えた。

それは、黒い髪を腰の辺りまで伸ばした女性だった。格好も独特でタンクトップにサスペンダー、それにミニスカートを履いている。赤いショートブーツが目印となり、そこからあのシルエツトが誰なのか特定できた。

見間違えるはずもない。

本来、この世界にはいてはいけない存在。

「ティファッ!?!」

その存在に気付いた時には反射的に起き上がっていた。かなりのスピードで飛んでいってもう姿は見えなくなってしまうが、飛んでいった方向だけはわかる。

世界樹から少し離れた地点に向かっているようだ。

それがわかると、彼はティファであろう人物を追って駆け出す。前に。

「ユウキ」

寝かせているユウキをこのままにしておけない。

頼まれた以上、最後まで守り続けなければならぬ。しかし、目が覚めた時にどういいうわけか違う場所にいることに戸惑う彼女の姿が目に見えぬ。

だが、だとしてもやっぱ置いていくわけにはいかない。

クラウドは迷わなかった。

寝ているユウキを起こすと、脇を閉めて両腕を差し出し、ユウキの上半身と下半身をそれぞれの腕で分担する形で支え、腰を支点にして

自分の腹の位置まで抱え上げる。

端から見ればお姫様抱っこをしているようにしか見えないが、幸いこの周辺には人がいない。

クラウドはユウキのアバターを連れて走り出す。

さっきのが見間違いでないのなら、ソルジャーの身体能力を最大限に活かして森の中を駆け抜け、一気にティファ達が向かったであろう方向へと走る。

## 第10章

時は遡って、別の場所での出来事。

この世界の時間は、というか二つを繋ぐ仮想世界の現実の時間は曖昧で、いつが過去なのか未来なのか、そして現在なのかわからない。しかし。

牢屋の中で囚われていたアスナは、強引に入れられた鳥籠の中で必死に脱出方法を考えていた。

人の手では決して破壊できない、見た目的には普通の黄金の格子だが、強固にプログラムされたデジタルコードの、所謂ゲーム仕様状破壊不可能なように設定にされているのだ。

たとえば、どんな強敵でも、一撃で倒せるといわれている伝説の剣の破壊力をもってしても、その対象に当たり判定の設定がされていなければ、何の効果も発揮しない。

「」

だが、彼女はついに今日脱獄を決意する。

彼女には、明確な計画があった。

いつも自分を猫撫でしてシステムを使って脳をいじくり、強制的に服従させようとしてくる下劣な男、

自身の父である彰三の後継者の座について、最高責任者としての権利を持ってして世界を手に入れるという、どこか馬鹿げた幻想を持つ男。

どっかのおとぎ話の悪者が抱く野望を持つ男の名は、須郷伸之。

もしくは、初めから自分のアイディアで構成しようとはせず、既存の作品であったソードアート・オンラインを複製して新しいゲームを作り出した二流科学者、妖精王のオベイロン。

あの世界のデータを手に入れて最新作を作るだけでなく、多数のソードアート・オンラインプレイヤーの意識を拉致し、記憶や感情の

操作技術を研究している、とてつもなく下賤な野郎だ。

故に、奴は気付かなかったのだ。

この牢屋には、捕らえておくためとはいえ、アスナという女性のために美しく華麗な部屋にしたかったらしく、ゴシック調のベッドを支える壁には、大きな鏡が据えられている。

そこに映る景色は自分だけでなく部屋全体を映し出す。

それが、抜け穴となってしまうた。

あの男は、アスナが逃げ出さないようにいつも牢屋にやって来て出ていく場合は、その扉の前にあるタッチパネルに決められた番号を入力して出ていく。

当然、中から外に出るのだから、タッチパネルに触れるあの男の姿はアスナの目にも映る。

しかし、そういうわけにはいかなかった。

そこだけは、ちゃんとしていたのか。

奴は、ゲームマスター権限で、彼女のアバターの瞳にある制限をつけた。タッチパネルを操作する様子を見せないように、視界がぼやけるようにしたのだ。

特定の展開で起きる異常状態。

それによつて、彼女は脱出するための番号を知らずに今日までベッドの枕を濡らすことしか出来なかったわけだが、あることに気が付いたのだ。

そう、鏡だ。

部屋全体を映し出す鏡から、あの男が出ていく際に入力する番号が見えたのだ。

そこに気付かなかった、もしくは考えてなかった須郷はやはり二流どころか三流だ。

鏡であるため左右反対で読み取るのには苦労したが、これで行くことができる。

今、アイツの気配はない。

アスナは脱獄する機会を伺って、その日が今だと確信していた彼女は、ドア目掛けて早足で歩いていく。

タッチパネルまで来たが、あの男の設定通り視界がぼやけて良く見えない。輪郭がハッキリとしないのだ。

しかし、手探りでなんとかどこに何のボタンがあるのかわかっていたアスナは、自力で開錠番号を押そうとする。

と、

そんな時だった。

「え？」

どこかから、気配を感じ取ったのだ。

これは足音？

「!？」

アスナはタッチパネルを操作する動作を止め、ベッドに寝るフリをして耳をそばたてる。目線はドアの方。目を僅かに開けて、寝たような格好にする。

内心、心臓が破裂しそうなほど鼓動が早くなる。

頬に汗を垂らしながら、心臓が引き絞られる。

寝たフリをするように努力するものの、緊張のあまりアスナの呼吸は荒くなっていく。寝息だと錯覚させようものにも必死な状況に、動機が余計に激しくなつて、無性に喉が干上がって渴いていく。

そして。

そして。

聞こえてきた足音がゆっくりと近づいてきて、アスナが囚われている部屋の前で、誰かが立ち止まった。

気付かれないように、寝たフリを全力で演じ切る。私は今熟睡中ですので、見回りご苦労様ツ!! と心で思いながら瞼を少しだけ開ける。

誰なのか確認しなかったのだ。

半目だから良くは見えない。

着ている服も、背中に背負っている武器も。

目も、

鼻も、

口も、

髪も、

よくわからなかった。

なのに。

なのに、だ。

うつすらと見えたその姿が、『あの少年』に似ていたのだ。

(キリト君!?)

半目だったし、良く見えなかったからただの見間違いかもしれない。  
い。

しかし、似ていた。

そこに映る姿は昔とは異なっているが、髪色などが似ていたせいで  
多分見間違えたのだ。

真っ黒な服に、真っ黒な髪。

しかし、背の高さも違うし、雰囲気も違う。

それだけはわかった。

希望が見せた幻想。

だったのかもしれないが、彼女には愛したあの少年の姿のように見  
えた。見えてしまったのだ。

しかし、彼ではないということもちゃんと理解していた。

『  
』

『男』は須郷ではない。そして、キリトでもない。

それだけは間違いない。

あのソードアート・オンラインでのイレギュラーな存在だと言われ  
た『クラウド』の雰囲気にも似ていたが、彼とは全く違う何かを感じ



取る。

しかし、目の前にいる彼は敵ではないと直感でわかった。

コミュ障で陰キヤな彼らとは違って、その男には『陽気さ』という前向きな希望に満ちた気配がしたのだ。

すると。

一体何をしたのか。

彼は掌を扉の前に向けただけで、ドアのロックを解除したのだ。

「ッ!？」

驚きのあまり声を詰まらせたアスナ。

牢屋の錆び付いた蝶番を軋ませながら開かれた扉の前に立っている男性は、扉の前に当てていた掌を離すと、ゆらりとした足取りで、アスナに背を向けた。

半目だったからよく見えなかったが、背を向ける際に見えた横顔。

その左頬に、『バツテン印の傷跡』が見えたのだ。

彼はまるで、役目を終えたとも言えるかのように、僅かに微笑んだ横顔を見せて部屋の前から去っていく。

歩いて、ものすごく高い場所に位置する世界樹の枝に刻まれた通路を躊躇せず、臆することなく、彼は進んでいく。

世界樹の本体とも言える場所を目指して。

「待って!! ちょっと待って!!」

アスナは寝たフリをする気などもうなくなり、跳び跳ねるように起き上がって躊躇いもなく牢屋の外へと抜け出す。

脱獄、という感覚はもはやなかった。

外へと出られたというのに、その喜びを感じる暇さえなかった。

見ず知らずの人が一体何の目的で自分を閉じ込めていた牢屋のロックを開けて、そして何をしようとしているのか。

そして、『貴方は一体誰なのか?』

それだけを知りたくて、彼女は去っていった彼の後を追うように世界樹の中心部へと走っていく。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ティファさん大丈夫!? 辛くないっ!?」

「うんっ! 意外と、平気みたい!」

半透明な翅を羽ばたかせながらリーファがそう尋ねてきた。なので、素直に笑顔で答えてみた。

「全く、意味わからないな。妖精がモチーフのこの世界でティファだけ人間体アバターで、それで翅すらないなんて。」

「えっと、ごめんね。私のせいで、二人に迷惑かけちゃって」

「あ、いやッ!? 別にそういうつもりで言ったんじゃない——ッ!!」

「ハイ! すんませんッ!!」

「もう! 無駄話はいいからちゃんと支えててよ!! 私達が手を離したらティファさんは真下に落っこちちゃうんだからッ!! 女の子は丁重に扱うんだよ!!」

「お、おう!」

女性を二人掛かりで抱えているキリトとリーファは、ティファの両脇にそれぞれ腕を通して飛んでいる。

二人の両腕だけが、この恐怖のアトラクションの安全バー。

手を離れたら彼女は真っ逆さま。地面と激突した瞬間彼女の肉体は周辺に飛び散ることになるだろう。そんなグロテスクな展開にならないように、ティファは羽交い締めのような状態で両足をぶらぶらとさせながらとある地点を目指す。

「そんなことよりも二人とも、領主会談の場所まであとどれくらい?」

「あつ、そうだね。えつと。今抜けてきた山脈は輪っかになってて世界中を囲んでるんだけど、三ヶ所に大きな切れ目があって、『蝶の谷』って呼ばれる所で行われるらしいから——」

リーファは飛びながら周囲を見渡して方向確認をすると、北西の方向へと方向転換して飛ぶように指示する。

「あつちだね!!」

「了解ツ!!」

ティファを落とさないように二人で息を合わせながら空を飛ぶのつて案外大変な作業だった。

何故彼女達は領主会談の場に行こうとしているのか、それには複雑な理由がある。

このゲームは他種族同士が競い合い、領地やアイテムなどを奪って楽しむというスタイルのゲームだ。ラスボスを倒せばゲームクリアとかではなく、寄り道を楽しむ系のもの。

種族間のパワーゲームが繰り広げられるALOにおいて、種族の頂点にいる存在を討ち取ることは、この世界の頂点へと近づくのに最も適したやり方だ。

それを、やろうとしている種族がいる。

サラマンダー族。

一部からは最強の種族と言われている。理由はたぶん、色が赤いからとか、強みは力だからとか、一般の人が好きそうな要素が多く含まれてて、所謂多数派が多いから強く見えるだけ。選ぼうとする種族のこだわりが皆共通過ぎて人員オーバーしてる感じなんだろう実態は。

そんな、この世界での最大勢力と呼ばれる種族の軍団が、シルフとケットシーの領主会談を襲撃して、更に有利な立場になろうとするためである。

シルフとケットシーは同盟を結ぼうとしている。もしくは、既に裏でしていたのかもしれない。

そんな二つの種族が同盟を結んだりでもしたら、パワーバランスが一気に崩れ、最大勢力であるサラマンダー側は不利な立場へと落とされてしまう。

それを阻止したいのだろう。

それを聞いたリーファは、キリト達に事情を説明し、やれることは限られてるだろうが、リーファの種族であるシルフの領主「サクヤ」を救うためにロケットの如く空へと飛び出したらしい。

正直、キリトとティファは事の重大さをよくは理解していないが、仲間であるリーファが困っているのならば見過ごすなんてことはできない。

助け合う。

そう誓って組んだパーティーなのだから、助けに入るための理由なんて一々必要ない。

「もしサラマンダーの人達が襲いに来るならあっちからこっちに移動してくるわけだから」

両腕を捕まれて口と首くらいしか動かせないティファは南東から北西へと目を動かして。

「俺たちより先行しているのかどうか微妙な距離だな」

キリトが続くようにそう呟いた。

「とにかく急ぐしかないな。ユイ！ サーチ圏内に大人数の反応があったら教えてくれ」

「はい！ パパ!!」

少年のポケットから顔を出した小妖精がそう頷くのを確認し、三人は目的地に向けて加速していく。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あの人……一体どこに行つたの!？」

小声で、アスナはそう言った。

いや、単に歩き疲れているせいで声を出す気力がないから自動的に声が抑えられているのかもしれない。

アスナはあの後、どうやっても自力では開かなかつた扉を開けた男を追つて世界樹の内部を息を潜めながら走り続けた。

須郷の部下が彷徨いていないか、人の気配をしないか、あの『謎の男』以外の気配だけを頼りに、素早く体を壁から壁へと身を潜ませる。

世界樹の内部を言い表すのならば、マジで世界観に合つてないデザインだった。

実験室的な白い廊下が続き、それでいて薄気味悪いほど薄暗く、僅かな証明が歩きやすくするように通路を照らしている。

全体的に、青い。

青い証明が、世界樹内部を包んでいた。

外見と内部の違いに呆気にとられるアスナであつたが、そんなことは言つてられない。早く、自分を閉じ込めていた牢屋から救い出した男を探し出してどういふつもりなのか問い詰めなければならぬ。

出来れば、その『謎の男』の気配だけを感じ取れば良いのだが、須郷の部下も、その須郷本人の気配すらも感じない。

人手不足なのか、それとも警備をするための金がないから配置してないのか、なんかアイツのケチ臭さを感じ取つて寒気がする。

あんな奴と結婚したら、一生お金について考えないといけなくなりそうだ。

それを考えるだけで悪寒がする。

絶対にあんな奴と結婚したくない、と。改めて硬く誓つたアスナは無限に続くと思われくらいの通路を突き進む。

通路の他に、扉が所々見えたが、直感でそこは重要ではないと告げていたので入る気にはならなかつた。

というか、そもそも自分にはそんな扉すら開く権利すらないのか、あちこち触つても全然反応してくれないのだ。

「うう」

なんだこの待遇は。

と、アスナは落ち込んだように肩を竦める。この世界の管理者のお気に入りならもつと都合のよいステータスをつけてくれたっていいじゃないか。

許嫁とは名ばかりの実態は見ての通り、ただの鳥籠にいる鳥だったというわけか。その冷遇さに、再び怒りを覚えるのは至極当然なこと。

目的の人も見当たらないし、どこに行けば良いのかわからないし、攻略本でもあつたら即購入するくらい現在行き詰まってイライラしている。

すると、

「!!」

アスナの視界に、『誰かの姿』が入った。

一瞬だったからわからなかったが。

確信はした。

(あの人だッ!!)

『服装からしてあの人だッ!!』と、そう思った彼女は追いかけるように、その人の後を追う。

格好だけで判断してしまったが、こんな妖精が彷徨くファンタジーな世界にあんな現実的な格好をしている人は少ない。

彼はとある部屋の中に入ったようで、入った瞬間に扉は閉められた

が、アスナはその扉の前に貼られているポスターを見て呟く。

「データ・閲覧室？」

それが何を意味するのか、アスナは唐突に理解した。

あらゆる意味が含まれた、データという単語の閲覧室。

おそらく、この奥にあるのは、あの須郷が進めている研究のデータ閲覧室だろう。ソードアート・オンラインから拉致したプレイヤーの意識も、ここに保存されているかもしれない。

「ッ!!」

彼女は勇気を振り絞って、足を前へと一步踏み出す。

すると、どういうわけかこの部屋だけ、アスナというアバターに反応したのか扉は自動的に開かれた。

その展開に驚きつつも、アスナは部屋の内部を見てさらに目を見開く。

その部屋は、壁すら地平線の彼方にまで感じられるほど広かった。白く、白く、白く染まった広大な施設。

壁に天井、全てが真っ白だった。

そんな中に、三百もの柱が均等に並べられている。正確に記録しやすくするように配置されているんだろう。

その中にあるのは、どう見ても一生目にすることはないであろうものだった。

脳。

脳そのもの。

「うッ!!」

人の内部にある臓物を目にしてなんだか胸焼けというか、胃が気持ち悪くなってくるアスナは、それでも耐えて息を呑みながらその部屋

の内部へと足を進める。

人間の本能的に気色の悪いものに拒否感を覚えながらも、ついその脳らしきものに目を向けてしまう。

柱に付けられているグラフの画面には、まるで脈を測る心電図みたいなものが映し出されている。時折、その脈が早くなったりすると、英語で『pain』など、苦しむという意味が含まれた単語が表示される。

それで、アスナは理解した。

須郷が、一体どんな実験を行っているのかを。

「ひどい。酷すぎるわッ!!」

吐きそうになりながらも言葉にした想い。

許せなかった。ここで行われている研究は、そしてそれをしている奴の部下の研究者はこれを見て、面白おかしく記録をしているんだ。

この一つ一つが、人の記憶を。

人の命を削ってここに閉じ込められてるんだという罪悪感にも気付かないで。

「許せない。ッ!!」

それを口にした途端、また視界の端に何かが映った。

「？」

そこにあつたのは、他のとは違った柱。

造形が異なり、柱の上には何やら『緑色の水晶』が乗つけられている。

『水晶玉を固定している柱』

その下に、何かの『カードキー』が刺さっているようにも見える。アスナはついそれを引き抜いてしまった。



ここで行われていることを絶対に許さないという想いを抱えつつも、その『緑色の水晶』に興味を示しつつ、近付いてついそこに刺さっていたカードキーを抜いてしまった。

重要な証拠になるかもしれないという軽くも重い気持ちで引き抜いたわけだが、

すると。

ザザツ!!

と、世界が揺れた。

「!?」

アスナは驚きの目で部屋中を見つめる。状況が追い付かないのだ。なぜなら、

周囲に、惑星のようなものが飛び散ったからだ。

「な、なに!?!」

カードキーを抜いた瞬間、柱の上に備え付けられていた『緑色の水晶』から全周囲に向けて緑色のレーザーポインターのようなものが拡散されていく。

急な出来事に目を閉じてその次に目を開けてみると、そこは『宇宙』だった。『宇宙』が広がっていた。

アスナはいつの間にか白い部屋から、『惑星や小さな星が無数に配置されている空間』へと投げ出されていた。

地面を踏んでいる感覚は、ある。

あるのに浮いている気分がするのは何故なのだろう？

アスナは鋭い目で周囲を見回していると、『地球』のようなものが目前まで迫ってきて、大気圏に突入して視界が真っ白に染まった時、

『人はいつか死ぬ。死んだらどうなると思う?』

どこかから、そんな声が聞こえてきた。

『かつてこの星には、「古代種」と呼ばれる種族が住んでいた。星の開拓をして、地中に眠るエネルギーの存在に気が付いて上手く操っていた。独自の技術で加工し、活用して。そんな彼らの歩みをなぞるように、「私は」意識だけになっても研究を続けた』

まるで用意されたナレーション台本を読み上げるように、感情も特に込められていない、解説の声だ。

『身体は朽ち、星に帰る。【意識】、【心】、【精神】、【記憶】。それら全て、星に帰ることになる。人間だけでなく、宇宙にいきるもの全て等しく』

『星に帰った精神は混ざり合い、星を駆け巡る。星を駆け巡り、混ざり、分かれると言われているそれを「ライフストリーム」と呼ばれるうねりとなる。それはすなわち星をめぐる精神的なエネルギー、ある種の道だ』

機械的な、『誰か』の録音された人間の声は続く。

『「精神エネルギー」……その祝福を受けて、新しい命は宿るとされている』

「なに？ 一体何のことを言ってるの？」

理解できない、本当にどっかのゲームみたいな設定の説明に、頭脳明晰なアスナでさえも理解できなかった。

なんか、興味のないゲームの話が聞かされている気分だ。しかし、ナレーションはお構い無く続けられる。

『それが、この世界の仕組み……それと似たような世界が他にもあるか

もしれないと知った時、私はそれに対して凄く興味が湧いた！！」

機械的で台本を読み上げるように話していた声に、唐突に感情が籠る。

まるで、知りたがる子供のよう。

『もしこの仮説が正しければツ!! 我々の知らない未知なる世界がいくつもあるということだツ!! それを証明するためには何が必要か、私はもう既に準備していたツ!!』

「な、何を言ってるの?」

『私が作り出したサイボーグに、奴に作らせたVR神羅バトルシミュレーター。それと、ライフストリーム。これらを合わせることで、ネットに繋げることで、異世界の扉が開かれるという仮説を立てたツ!!』

「??」

『問題は、そこにいくには【意識】だけの存在にならなければならぬということだ。つまり、【死ぬ】ということだな』

「!？」

『だがそんなことはどうでもいいツ!! 私は喜んでその可能性に賭けてみようと思うツ!! 新たな可能性が見つかるならば、私は今進めている研究も同時進行でやりつつ、そしていつか死を迎えた時に異世界に行けるように、あのサイボーグに私の「全ての記録」を埋め込んでおいたツ!!』

「え? なに? どういうこと!？」

『あとは、時期が来るのを待つだけだ。私の計算が正しければ、もちろん正しいに決まっているのだが、セフィロスが死んだらその意識はライフストリームに溶け、今もなお【魔晄】が使用されているネットへと繋がって、異世界への扉を開いてくれることだろうツ!! そこからネットは混乱を及ぼし、チャドリーは問題解決のために動くはずだ。あとは、仮想空間に侵入した際に奴に埋め込んだ私の【意識の記

録】を適正のあるアバターにアップロードして―――」

わけのわからない説明に理解できないアスナは頭が痛くなる。  
今の説明を聞いて、理解できたかと言われたら全く理解できていない。

しかし、唐突に理解した。

これは、非常に危険な実験であると。

善にも悪にも転がりかねない、まさに『無限の可能性』というものを  
知った彼女は恐れを抱く。

よくわからないが、その恐れに嫌な予感を感じた彼女はこのことを  
誰かに早く告げなければという使命感を得る。

が。

その前に、そんな彼女を足止めするような状況が襲いかかる。  
部屋全体が、ぼつきりと突起が折れたんだ。

「え!？」

ノイズが走り、部屋全体が歪む。

体がすっぽ抜けるようにアスナの体が再び虚空へと投げ出される。  
そして、ぐにやりと景色が歪みまたホログラムのような 違う、これ  
は。

「現実?」

仮想世界の中で映し出された映像はさらにリアルだった。

質感、空気、肌触り。

仮想世界とは思えないほどの現実さに、違和感を覚える。

そしてまた、何の脈絡もなく。

ある映像が流れ始める。

「ッ  
!!!??」

見えた光景に、息を呑んだ。  
壊れた都市。

頭上に真つ赤な隕石が落ちてくるような赤い空が輝いてるのを察するに、今起きていることは異常事態だ。

それにしても、やけにリアルだ。  
まるで、本当にあつたかのような映像がアスナの周囲に映し出される。

と、あるものに目が行った。

見慣れぬ都市が広がる中、隕石のど真ん中に立っているように見せている一人の『フードを被った男』。

気怠く、だらしなく両手を下ろして俯いてフードの陰に顔を隠していた。

そんな人物を捉えた時、陽炎のように唐突にその姿が揺らぎ、『見覚えのある男』へと変化した。

ソードアート・オンライン時代、そのゲームマスターのアバターを乗っ取って世界そのものを書き換えた『銀髪の男』

「あれは!?!」

見間違えるはずもない。

どのプレイヤーよりも強く、圧倒的で、それでいて恐ろしい怪物。その名を口にしたことはなかったが、今まさにその名を彼女の口から出そうとしたとき、

ザザツ!! と。

またノイズが走る。

そして、また景色が変わる。

今度映し出されたのは、アスナが現在住んでいる東京を象徴する六三四メートルの地上デジタル放送用電波塔がよく見える場所。

その真上に、さつきと同じ真つ赤な隕石が落ちてきていた。

「ッ!!」

ぞわぞわと、それを見た瞬間両手の全ての指の先端から身体の奥深くへと不気味な何か走り抜けていく。

街の広い範囲が、まとめて停電していた。しかし停電していても、周囲は全く暗くない。

むしろ明るい。

眩しすぎるくらいだ。

オレンジ色の光が瞬いていたが、それは隕石によって発せられる熱から起こされた、人を焼き殺すために放たれた莫大な地獄の炎だった。

まるで、『この世界もこうなる運命だ』とでも言いたげな現実映像に、アスナの体が小刻みに震え始める。

『『『『うわあああああッ!!』』』』』

擬似的に作られた人々が逃げ惑う映像が映される。

アスナなんて初めからそこに存在しないように、認識していないように落ちてくる隕石の炎から逃げている人々は、アスナにぶつかる前にホログラムと化して通過していく。

だから今起きてるのは、現実ではない。

それはわかってるんだ。

けど。

わけがわからない。

一体自分は何を見せられているのだ!?

「なん、なのッ!?!?!」

現実的すぎる映像に、理解が追い付かない。

見知った街が、隕石によって焼かれている。それだけはわかる。

遠くに見える東京都庁も、数々の高層ビルも、熱を纏った竜巻に

よって真つ赤な天空へと崩壊して巻き上げられていく。

でも、何故そんな映像が流れてるのか理解できない。どこから何を考えたら良いのかもわからない。

今まさにどうにかしなくてはという思いだけが頭の中で響き渡る。被害や災害で失われていくものを連続的に見せられて、彼女の精神は不安定になっていく。

一歩一歩退がって、自分も逃げようと足が勝手に後退していく。すると、

『フツ』

「ツ!!」

背中から悪寒がした。

あのスカイツリーが熱波に押し倒されて崩壊した瞬間、背後に猛烈な殺気を感じた。

背中に当たる直前だった。背中合わせになっているような構図で、二人の長い長髪が強烈な熱波によってなびく。

感じたことのある気配。

実際に味わった絶望。

その思い出を呼び起こすように、『銀髪の剣士』は嘲笑を注ぐように言う。

『お前は、無力だ』

「ツ!?!」

『何故なら』

鼻を鳴らして、非力で何も出来ない少女を憐れに思いながら、更に深い闇の底に落とすような絶望的な一言を聞かせる。

『ただの“人形”だからだ』





ナメクジの一人は意識を別の空間へと移動させている最中、悪態をつくように小言を囁く。

だって、あの人は部下には一切容赦しないパワハラ上司だ。逃げ出してたと報告したら、どんな処分が待っているのか。

「つか、様子から見て完全におかしかったし。どう見てもあのプレイヤー達の脳が並べられている部屋を見たってことだよな？ 実際そこいたわけだし、俺だってあんなの見たら気色悪くてゾツとするけどあそこまでなるか？ 女性だから生理的に受け付けないとか？」

なににしても、それをあの上司に報告しなければならぬなんて考えているだけで更に寒気と悪寒がする。

重要な研究室を見られたのと、少女の脱獄。知ったら多分ぶちギレるんだろうなあ、と半分諦めかけた顔をして落ち込みながら空間のトンネルを抜けていく。

と、空間から空間を抜けていく最中。

「んあ？」

視界の端に、何かを通り過ぎた気がした。

普通空間を通り抜けるなら、自動的にロードが挟んで身体は勝手に動くはずなのに、通りすぎた“それ”は平然と歩くようにナメクジの隣を通り過ぎていった。

その先にはどこの空間に繋がってるのかはわからないが、ナメクジはその人物に見覚えはなかった。

「え!? 侵入者!？」

またややこしくなりそうな事態が起きた。

これも報告すべきなのかどうか悩むが、一応話してみた方がいいか

もしれない。

だって、社会人の基本でもある『ハウレンソウ』もできないようじゃ、更にあの上司は容赦しないだろう。ブラック企業の社長って、どうしてそんなにも人に当たるのが好きなのか、全く理解できない。何にしても、まずは報告が優先だ。

世界樹の上に閉じ込めていた『女の子』が勝手に抜け出してたことと。

報告を告げるために向かう空間を通り抜けている最中に、『見たこともない不審者』を見かけた、という情報を伝えなくてはならない。しかし、一体誰だったのだろうか？

こちらを見ることもなく、平然と廊下を歩くような様子で通り過ぎたあの『銀髪の大男』を雇っているなんて話、ボスから聞いたこともないし。

不確かな情報でも、やはり報告はすべきことは報告するべきだろう。じゃないと、またどやされるんだから。



その世界の料理は一体いつ作られた文化のものなんでしょうねー、と笑いながら切り刻んだ一口サイズの肉を食べる下衆男。

長身をダークグレーのスーツに身を包ませ、やや面長の顔にフレームレスの眼鏡が乗っている。薄いレンズの奥の両眼には、野心に満ちた笑みが宿ったように細かった。

須郷伸之。

現実の世界では奴の姿は本当にどこにでもいそうなサラリーマンみたいな格好だった。

第一印象だけ見れば、単なる一流サラリーマンが豪華なレストランで食事をしているだけに見えるが、この世界の肉の味を知ったこの男は、気色悪く口の両端を吊り上げて笑う。

「どの世界でも、やはり肉というのは共通の味のようなだ。あんまり大したことなかったなあ」

あまり好みの味ではなかったのだろうか？

満足そうでない表情の須郷は、それでも一応食事のマナーに従って残さず食べることを誓う。肉を咀嚼する回数が少ないことからかなり柔らかめに作られた高級肉だと思うのに、彼はそんなことに興味を示さない。

「それにしても」

須郷は皿に乗つけられたステーキを一口サイズに細かく切り分けながら、

「何だこの世界は？ 科学の進歩がまるで感じられないじゃないか。結構期待していたんだがなあ、この世界の可能性に」

もはや呆れたような調子で辺りを見回す須郷は、他人視点から見たら異様な発言をしている。

何言ってるんだコイツ？ と変な目で見られないのは、高級レストラン故に客が少ないからだろう。

どうやら地理的にこの場は貿易話やら企業案件やら、仕事の交渉場所として一流企業の社会人が活用する店らしく、スーツに身を包んだ者達がそこらに見かけられる。

人に聞かれたくない話の場合は個室へと案内されるが、須郷は窓際の、大勢の客が入れる場所を自らの意思で選んだ。

彼の目的は料理や仕事のことではない。

『この世界のこと』を知りたかったのだ。

窓の外を眺めてみると、高層ビルがいくつも立ち並び、地平線の向こうまで家らしきものがゴミのように散乱している。

『荒廃した大地』は見当たらず、自然にも恵まれているような街を見る

と、どういわけか食欲が湧いてくる。

「ライフストリームといったものはなくう。精神エネルギーという概念さえもないのかあ？ ま、それはつまり『星の命』を借りずとも科学が進歩し続けているとも取れるなあ」

と、割とポジティブな思考で世界の価値観を見直した時だった。

ポケットの中にはあった携帯電話が小刻みに振動していた。須郷はせっかくのプラス思考をマイナスにされたことにため息をつき、だるそうにしながらポケットに手をつ突っ込んで携帯電話を取り出す。

「全く、せっつかれる私の立場も察してくれないのか。この二流科学者の役立たずの部下は」

などと他人事みたいな台詞を含ませてスマホの電源を入れた須郷は、小さな画面に表示されている受話器が描かれた着信ボタンを押して耳に当てる。

食事をする場で電話に出るのはルール違反になるのだろうが、客も少ないし文句を言う奴もほとんどいないだろう。

普段なら社会人スタイルできっちりとした形で対応するのだが、どういわけかこの時の須郷は本当に気怠そうに首を傾けて電話に耳を押し当てている。

『あ、えっと。ボス？』

「」

間が長い。

須郷は部下の声に不快に思いながら一度電話を耳から遠ざけ、はあ。とため息をつく。と、極めてめんどくさそうな口調で応えた。

「なんだね？」



に不安になってつい強い口調になって問い詰めた。

『ボス？ あの、本当にボスなんですよ？ さつきから独り言が多いですけど、どうしたんですか!？』

「いやね？ 娘つ子一人がそう簡単に抜け出せるようなセキュリティを作ったこの二流科学者の頭に、ちよつと呆れていてね？ まあ、あれだ。自暴自棄？ というやつか」

『は、はあ?』

「まあ、いい。彼女もいずれ良い研究材料になり得るだろうし、一先ずすぐにラボの上の牢屋に戻して、ドアのパスを変えて二十四時間態勢で監視しておきたまえ」

『え？ それだけですか?』

「他に、なにか問題でも?」

『い、いえ。なんかいつもと違って随分と落ち着いてるなあって思っ  
て、あ、いえ！ なんでもございせんっ!!』

一瞬、不吉な予感に囚われていた部下だったが、思ったよりも冷静な対応をする須郷に慌てて首を振って謝罪する。

し、失礼しますという一言で電話が切られそうになる瞬間、

「あくそうそう」

『?』

「君達にはわからないだろうが、あの世界樹には世界を本当に変革するにたる貴重な資料達が眠っているんだ。『異世界』という存在を証明するためのね」

『え? はい?』

「まあ要するにだ、余計なことだけはしないでくれよお?」

須郷が呆れたように言うと、彼はほとんどなげやりになった調子でそのまま電話を切った。

切って、須郷伸之は。

いや、『須郷伸之という人間の形をした誰か』は。

この世の全ての物に興味を示すように。

ニチャア、と下品に嗤って。

窓の外の光景を楽しんでいた。

◇◇◇◇◇

——彼は悔しかった。

ガシャン、と音を立てて鳥籠の格子戸が閉められて、ヌメヌメとした触手がドアロックのナンバーを変更して操作すると、うねうねと動かし手を振って別れを告げていた。

そんなナメクジに、彼女はそっけない態度で背を向ける。

——せっかく、助け出したのに。

生前、愛していた『彼女』と同じような状況に陥っている少女を助けたくてこの世界に不安定ながらも肉体を得られたというのに。

——今、彼の体を内側から激しく急かしているのは、タイムリミット。

ここにいられる時間はあまりない。

そもそも、ここにいること自体奇跡といっても良いくらいの存在なのだ、彼は。

クラウドやティファと同じように妖精の姿ではなく、『人間』としてこの地に降り立っている彼には、かつて『夢』があった。

——『英雄になること』

その想いを受け継いだ人に、また託すしかない。

自分が出るのは、今はもう、彼女を見守るくらいだ。

この世界にいられる時間は曖昧で、時々ノイズのように消えたり現れたりする。そんな幽霊みたいな存在に出来ることなんてない。

——だから、こうした時に真っ先に浮かぶのは、やはり『アイツ』だ。

たとえソルジャーになれなくても、決して希望を捨てずに強敵に立ち向かった『アイツ』の立派な姿だ。

もちろん、彼にまた使命を押し付けたくはない。

しかし、もう頼れる人間は『アイツ』しかない。

『想い』を背負って、かつて自分も憧れた英雄を討ち倒した『アイツ』になら、彼女を助けられる。

このような陽炎のような状態で、最速で頭をプラスの方向へ切り替えさせる台詞は何か。あやふやな存在で、どこにでも現れ、どこにでも消えることが出来る存在となっている彼が今出来ること。

彼は反対側の格子まで歩いて疲れ果てたように頭を押し付けている彼女に、囁くように、幻聴のように、彼は言う。

『夢を抱き締めろ』

「え？」

『そしてどんな時でも。アンタの誇りだけは、絶対に手放すな』

少女はその声を聞いて、周囲を見渡した。だが、その声の主らしき人はどこにもない。いつもと変わらず、無機質な鉄格子が彼女を逃がさないように囲んでいるだけだった。

「」

しかし。

そのたった一声で、アスナは希望を持てた。

アスナは手に持っている『銀色のカードキー』に視線を移す。

脱獄した際に手に入れた、唯一の希望。

それを抱き締めながら、手放さないようにしっかりと握りながら誓う。

「私、負けないよ。キリト君!!」





一方その頃。

街灯の明かりも、方位を表示する看板すらない森のけもの道を、一人の人間アバターは走っていた。

紫髪の妖精少女を抱えたまま走る、自称元ソルジャーのクラウド。知らず知らずのうちに、結構重たい使命を勝手に背負わされた青年。彼の腕の中には安心したように目を閉じているユウキがいるが、意識はそこにはなく、ただ彼女のプレイヤーアバターを預けられている。

彼は彼女に預けられたアバターを落とさないように慎重に突っ走っているのだが。

「はあ。はあ。どっちに行つた？」

さつきから同じ風景ばかりが続いていて、今自分が何処にいるのかさえもわかっていない。

彼は、見覚えのある女性を追いかけて深い森の奥へと足を運んでしまった。方向はあつてはるはずなのに、目印となるものがなにもないからマジでここはどこ状態である。

「クラウドさん。もしかして」

と、ポケットから顔を出した小妖精となったチャドリが、少し罪悪感を抱えながら、それでもクラウドに問いかける。

「方向音痴、なんですか？」

「ッ!!」

それを言われた途端、クラウドの胸に何か鋭いものが刺さった気が

した。同時に、ぐはっ?!? という腹を殴られたような痛みまでやって来た気がする。

クラウドはソルジャーを自称していたものの、本当はただの一般兵。

単独行動は許されず、団体で動くことで敵戦力を無力化するのが任務だったことが多いから、一人で動くとなると案外道に迷いやすいのだ。

だったらなんで現実世界で運び屋なんてやってるのかと聞かれたら、そりゃカーナビつけてるんだし何の問題もない。

しかし、ソルジャーを自称してただけあつて、クラウドはチャドリーが言ったことをどうしても否定したいらしく、現場慣れしているという体で対応する。

「モンスターに出会ささないように最適なルートを決めて進んでいるだけだ。ユウキを抱えて守りながら戦うのはできるだけ避けたい。それに、このまま行けば森の出口にいずれたどり着く」

何も言わないナビゲーションピクシー。

自分の直感を信じろ。地図はないけど、心の声に従えば必ず目的地にたどり着ける。

なんて情けない部分を見せないため、強気な態度で誤魔化すクラウドだったが、

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!

腹に響く、凄まじい轟音が炸裂した。

まるで隕石が落ちたような衝撃音。尋常ではない爆音に大気まで揺るがす。

音の震源地は、すぐ近く。

「あそこか!!」

クラウドはさっきのやり取りをなかったかのように走り出す。チャドリーもいつの間にか彼の肩に乗っかっており、先程の発言を無言で取り消した。

音がした方角へと目指すクラウドは、まるで軍馬の如きスピードで走り出した。

## 第11章

「双方、剣を引け!!」

その大声一つで、その場にいる全員の得物に宿っていた殺意が失われる。より正確には、唐突な爆音が領主会談場に響き渡った瞬間に砂塵が巻き起こり、視界を奪われて戦闘を中断せざるを得なくなった。そして、空気中に漂っていた砂塵は時間が経つと共に薄れてゆき、視界が確保されたと思ったら、その爆音の震源地で得意気に仁王立ちしている黒髪のツンツン頭が自分達を睨んでいた。

「うわ?」

「びっくりしたあくッ!!」

その男性の隣にいた美少女と美女二人は、男の大声に驚いて思わず驚愕した声を上げていた。

心臓の鼓動にまで影響させるほどの爆音を放った少年。

三六〇度空を見上げてみれば、三つの種族が剣や杖などをただ手に持っている状態になってしまっているのが見える。

今の様子を一言で表すなら、一触即発の一つ手前。

まだ触れても戦闘は起きない。だが皆敵意は常に保っている状態だ。話し合いでこの場が収まるとは思えない。

彼のやったことはなんとなく察するが、どう考えても愚かだ。

勇敢ではなく、蛮勇。

止めるからには、さぞ事の重大さを理解しているのだろう。むしろ皆、彼が何をしようとしているのか興味を示していた。

「これは」

「ちよつとまづいかも」

猪突猛進したキリトの行動で周囲から冷たい目で見られて背筋が凍る二人。

やばい、この後どうなるんだろう的な不安感を感じながら成り行きを見守っていると、

「リーファ!?!」

と、リーファを呼ぶ声が飛んできた。リーファ同様シルフと思しき緑衣を纏ったダークグリーン艶やかなロンクストレートが乱れぬように先の方で髪留めで揃えた女性を取り乱しながら歩み寄ってくる。

和風の衣。

ファンタジー世界でもギリギリセーフなデザインな服装を一人だけ着ていることから、彼女がシルフのリーダーなのだろう。

「サクヤ!」

リーファはリーダー的な人にため口で応える。

「一体何故ここに!?! いやそもそも、これは一体どういうことなんだ!?!」

「それについては」

「申し訳ありません」

取り乱したように質問を投げ掛けられて混乱していたところ、同行していたティファが助け舟を出す。

「そちらは?」

「あ、この人はティファさん。最近一緒にチームを組んだの」

「ティファです。よろしくお願いします」  
「それで、この件に関してなんですけど」

助け舟を出したものの、自身も困ったように困惑気味に頬を掻きながら、

「簡単に説明はできません。一先ず言えるのは、これからどうなるかはキリト次第、ということだけです」

言いながらキリトの方に目を向ける一同。

もう何が何やらわからない。その場は完全に混乱に満ちており、何がきつかけで全面戦争が起きてもおかしくない雰囲気だ。

元々、そのつもりだったかもしれないが。

それを食い止めてくれるのは、皮肉にもあの少年だ。少年は微動だにせず、周囲にいる全種族を無差別に睥睨している。主になっている種族はサラマンダーにだが、全員が武器を振らないように眼光を鋭くして見張っている。

「何か始まりそうな雰囲気かプンプンするんだけど」

ウエーブヘアから猫耳が二つ飛び出ている小柄な女性がそう言う。見た目から察するに、ケットシーの領主か幹部か、とにかく偉い立位置にはいるはずだ。

そんな彼女が、鼻を猫みたいにピクピク動かして不穏な空気を嗅ぎ取り、やんのかステップの如くめちやくちや猫背にしている。

どう見ても異常な事態。

イベントだったらどれだけ良かったか。プレイヤー同士の単なる争いが生み出した緊張感に皆が硬直している。

それはキリトも同様。

実は心の中ではかなり動揺している。

だが、もう後戻りは出来ない。

この騒ぎの元凶であるサラマンダー軍に向けて、キリトは真っ直ぐ眼を固定しながら大きく叫ぶ。

「指揮官はどいつだ？ そいつに話がある!!」

「[[[「?」]]]」

その声に、サラマンダー軍は息を漏らす音を立てて後ろを向く。

その先には、皆と違って兜を被っていない、火山が燃え盛っているように鋭く逆立っている男が笑いながらキリトの方を見ていた。

彼は元から若い衆に任せるつもりだったのか、それとも敢えて自分が出るタイミングを遅くしてたつもりだったのか、彼の手には剣が握られていなかった。

キリトの持つ大剣よりも更にでかい巨剣を背に納め、その背中から深紅に光る翅を羽ばたかせて、その部下達が作った通り道を我が物顔で進み出てくる。重たい装備を目立たせるためにガシヤツ!! とさせて降り立った重剣士は、手を下ろして武器を手取る様子を見せずに一歩ずつ近づいて、キリトの前までやって来る。

背の差から、別の意味で二人は上から目線で睨み合う。

紅の男はただキリトを見るように下を向き、キリトは自分の方が偉いとアピールするかのようになり、一切動じないという意志が宿った瞳をして顎を上げて睨む。

数瞬の沈黙。

するとようやく、紅の重剣士は太い声で会話に応じた。

「スプリガンがこんな所で何をしているかは知らんが、その度胸に免じて話だけ聞いてやろう。お前は？」

「俺の名はキリト。スプリガンとウンディーネ同盟の大使だ」

その言葉に反応したのは、同行していた二人の女性だった。声は出さなかったが、絶句したような顔色でキリトのハツタリ演説を聞く。

「この場にはシルフとケットシーとの貿易交渉に來ただけなので、護衛はそこにいるシルフの少女だけだが、この会談が襲われたとなれば

話はそれだけじゃ済まなくなる。サラマンダー族がこの場を襲うからには、我々四種族との全面戦争を望むと解釈していいんだな？」

愕然としている周囲とは違って、素知らぬ顔をするキリト。

リーファとティファはその様子に思わず目を逸らしそうになる。なんか、連鎖反応で羞恥的なものが襲いかかってきそうな気がしたからだ。

サラマンダーだけでなく、シルフとケットシーの領主もその発言に啞然としていたが、二人はなにも答えずとりあえず微笑み返しておく。

キリトの前に来たサラマンダーの剣士は顎を擦りながら、

「にわかに信じがたいな。ウンディーネとスプリガンの同盟だと？」

「そうだ」

「あとの一人は誰だ？ 護衛ではないのか？ どういうわけか、普通の人間にしか見えない見た目をしているが？」

「話を逸らさないでくれ。今話すべきことはそんなことじゃない。あんたらは今全面戦争を持ちかけてきている状態なんだぞ。四種族で同盟を結ばれて、サラマンダーに対抗する事態になってるんだぞ」

「」

「よく、考えろ」

かなり勇気を振り絞って言ってやったキリトに称賛を送りたい。なんか何気にティファの件をなかったことにしたのも凄かったが、この場を収めるのに最適な言い訳を咄嗟に思い付いた彼はマジで凄いと感じた。

普段、そんな感じを見せなかったが、彼は恐らくやる時はやる男なのだろう。

しかし、やはりサラマンダーの剣士は納得がいていないようで、

「ふん、たいした装備も持たない貴様の言葉を信じろというのか？」





てきたテイファにはわかる。

あの男、相当強い。

直感で、そう感じ取った。

何か根拠があるわけじゃない、でもそう感じてしまうのだ。

だが、それを証明するようにいつの間にか隣に立っていたシルフの領主であるサクヤが補足するように囁く。

「まずいな」

「え？」

「サクヤさんもそう思います？」

「ああ、気配だけでもわかるが、それ以外にもまずい要素がある」

「あの男が持っている両手剣は、『レジエンダリーウエポン』と呼ばれる武器の一つ、『魔剣グラム』だ。聞いた話によると、サラマンダーの領主の弟リアルでも兄弟らしいが、知恵が強みの兄に対して力が強みの弟。純粋な戦闘力はその弟が上だとされている。その弟が持つ武器が確か、レジエンダリーウエポンだと聞いたことがある」

「ということとは」

「それって、つまり」

「そう、あの男こそがサラマンダー最強の指揮官、そして全プレイヤー中最強プレイヤー、『ユージーン將軍』だ」

◇◇◇◇◇

「」

空中で対峙するキリトは、目の前にいるサラマンダー相手に息を呑む。

こんな装備でどこまでやれるか、問題だらけで少し不安感を拭えな

い。相手の実力を計れば、こつちが劣勢になるのが簡単に予想出来てしまう。

二つの剣に日差しが宿る。  
と、

「ふんッ!!」

「ッ!？」

空気を重く蹴るかのように、ユージョンが素早く動いた。

翅が見えなくなるほど早くなると、ユージョンはあつという間にキリトの目と鼻の先にまで接近していた。

「はあッ!!」

「チッ!!」

動きは超高速で素早かったが、大きく振りかぶってくれたおかげで防ぐことはできた。

ユージョンの持つレジェンダリーウェポン『魔剣グラム』が真上から振り下ろされ、キリトは自慢の反射神経を活かして頭上に剣を掲げて剣を受け流す。

大剣同士がぶつかり合い、魔剣は単なる大剣に流されるように軌道が逸らされる。

「ここだッ!!」

受け流しからのカウンター、そのタイミングを逃さなかったキリトは右に大きく振りかぶって曲線を描いて重たい一撃を入れる。  
と、思ったが。

「ふん」

ユージーンは鼻を鳴らしただけで、簡単そうに頭を少し下げて回避した。

「ぬんツ!!」

そのまま持ち上げるように下から振るわれた剣に、キリトはまた防ぐ態勢に入る。防いで、またカウンターを叩き込む、その流れをまたやっつけてやるつもりだった。

が。

どういうわけか。

ユージーンの持つ赤い魔剣がその姿を霞ませ、キリトの持つ大剣を透過した。

「なツ!？」

驚くのも束の間、ユージーンの持つ魔剣は彼の持つ剣を透過すると、その姿を明確に実体化させ、キリトの体を空高く打ち上げる。

「ガアアアアアアアツ!？」

キリトの胸に赤い線が刻まれる。

敵の攻撃が命中したことを証明するように炸裂した斬撃は爆音を周囲に響かせ、彼を象徴するスプリガンの黒い防具が斬り剥がされながら真上へ飛ばされる。

すると、それよりも早く誰かがキリトの横を通過した。

キリトよりも更に高く、限界飛行区域のギリギリなんじゃないかと思うくらいまで高く飛ぶと、打ち上げた彼を待ち構えるようにユージーンが魔剣を上へと掲げる。

刀身が当たる位置にまで来た瞬間、

「はあああああアツ!!」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!

巨大な大地の怒号。

飛ばされてきたスプリガンとウンディーネの大使と自称するキリトの体を、レジエンダリーウエポンである魔剣グラムを持つユージーが地面に叩き落とした音だ。

常人ではまず耐えきれぬ一撃。

そして静寂。

一秒を千に等分したわずかな静寂の後、

「ぐっツ!!」

さつきの爆音が自分の体から出た音だと気付いたときには、すでに叩き落とされていた。上から叩きつけられた彼の体は深い穴を作り出し、一秒もかからずに防弾繊維の防具を突き破った。

灰色の粉塵が、煙のように舞い上がる。

一撃でボロボロになったキリトは、砕けた大地に埋もれながら、首だけを動かして頭上を見上げた。

「ほう、よく生きてたな」

「ぐっ!!」

「しかし、この程度か、話にならない」

彼はほとんど潰れかけたキリトを見下して静かに語ると、

「三十秒、たった今経ったが気が変わった。その首を取るまでに変更だ」

「なツ!? ふぎけ——ツ!!」

叫ぼうとするキリトだったが、ユージーは目を細めて語る。

「だが、もはやその気すらなくなった。剣を交えて、ある程度お前のこととは把握した。技術に関しては俺と同じくらいだと思うが、『この剣』に對抗できなければ話にならない」

「ッ!!」

「だから、選ばせてやる、スプリガン」

「!?」

「このまま大人しく去るか、ここで燃え尽きるか、どうするか選べ」  
「ッ!!」

返事はしない。

答えは決まっているからだ。

屈しはしない、『こんな奴』程度に。

剣の強さに頼りきって己の本当の強さに気付いていない奴なんかには、本当に命を懸けて戦ったこともない奴なんかには、負けはしないッ!!

そう言うかのように、砕けた地面の破片を掴み、ボロボロの体を動かして立ち上がろうとする。

「悪あがきもここまでだな」

ユージーンは魔剣を突き構えをして、静かに語る。

「束の間だったが、楽しかったぞスプリガン」

グラムの先端がキリトの左胸を指し示す。

刀身の姿を霞ませる魔剣グラムと同じように、素早さでその姿を眩ませたユージーンはキリトに迫り来る。

瞬間、領主会談の場から凄まじい轟音が響き、地震のように空気が

震えた。



「ああッ!!」

リーファは絶句する。

キリトの実力は確かに本物だ。しかし、ユージーンという男が放つ殺気はリアルすぎる。

キリトはあくまで仮想世界で育て上げられた剣士だ。本物に近い殺意を向けてくる相手に、三十秒間持つのかわからない。

そして、戦いが始まってまだ十秒も経ってないのに、彼は上空へと打ち上げられた。彼の持つ剣を通過して、魔剣グラムがキリトの胸に斬撃を当てたのだ。

「今のは!?!」

ティファがその意味不明な現象に驚くと、それに答えたのはケツトシーの領主、アリシャ・ルーである。

「魔剣グラムには『エセリアルシフト』っていう、物体をすり抜けてくるエクストラ効果が付与されてるんだヨ。剣や盾で受けようとしても非実体化してすり抜けて、相手に当たる直前に実体化させル。それがユージーンの強さの秘密ってわけだヨ」

「そ、そんなッ!?!」

リーファが目を見開いて慌ててキリトが埋まった地点を見る。そして再度アリシャに質問する。

「でもさっき、最初は透過しなかったじゃん!? 何かそうなる条件とか——ッ!?!」

「違うよりーファ」

「!?」

透過する瞬間に何か仕掛けもしくは条件があるのではないか、もしそうならそれを見抜ければ勝機はあると思つて聞いてみたリーファだったが、ティファが即座にそれを否定する。

「楽しんでるんだよ、あの人」

「楽しんで、でる?」

「戦いを楽しむために、わざと最初はキリトに攻撃を防がせたの。互角に戦えると錯覚させるために、希望を持たせてから絶望させるために」

「!?」

つまり、遊ばれていた。

それほどの余裕があつたから、キリトにまずコイツとは対等に戦えるという感覚を感じさせた。それを与えたことで、その希望を打ち砕く喜びを感じたかつたんだろう。

そのためだけに、ユージーンは一瞬手を抜いたのだ。

「ッ!!」

リーファはそう思つた瞬間に止めようと翹を出そうとするが、それをティファが止める。

「なんで止めるのティファさん!?!」

「今行ったらキリトの行動が無駄になつちやう!」

「!?」

「あの人がこの戦いの中で動いていいって許可したのはキリト一人だけなんだから、私達が今動いちやったらその瞬間に他の人達が襲いかかってくるよッ!?! それこそ、キリトが言つてた全面戦争が始まっ



ちやうツ!!」

「ツ!!」

ではただ見てると言うのか。

キリトのHPバーがどれくらい残ってるのか確認しようと目を凝らす。

というか、もう三十秒経ったはずだ。

それなのに、ユージーンは殺意を手放そうとする様子は見られない。むしろ、これから狩り取ろうとしようとするかの如く、突きの構えで剣を持つ。

先端を左胸へと向けていることは明らかだ。急所に当てられたらキリトのHPバーは即ゼロになり、死亡エフェクトであるエンドフレームに包まれ、折角の停戦状態も無駄になる。

それだけは避けなければ。

キリトもそう感じているのか、立ち上がろうとしている。

それを見たユージーンは躊躇することなく、一撃で残りのHPを吹き消す威力を持った魔剣グラムを持って突進する。

「キリト君ツ!!」

目が、湿る。

あんなにも強かったキリトがこんなにもあっさりと倒されるなんて、信じられない。

信じられるはずもない。

卑怯な手で圧倒したユージーンにトドメを刺されそうになっているキリトを見て、彼の名を叫んだリーファの耳に、  
一人の声が聞こえた。

「コイツを頼む」

「え？」

反応したのはリーファではなく、隣にいるティファだった。すると「そいつ」は、平然と何かを押し付けるようにティファの腕に置いた。

ずっしりとした重みが彼女の両腕を襲う。両腕の筋肉で支えなくてはいけないほどのものの正体は、

『紫髪の小さな女の子』だった。

「この子、は。」

眠っているのか、本人からの答えはない。一体この子は誰なのか疑問の言葉を口にした瞬間。

前方から凄まじい轟音が響き、地震のように空気が震えた。

◇◇◇◇◇

空気や物体を引き裂く極太の刃に身をさらし、その上で魔剣の威力に押し殺される。

圧倒的な剣の威力を見せつけて灰色の粉塵が舞い上がる中、

「ん？」

数秒後、その一撃は少年の疑問に満ちた声によって打ち消された。

ユージーンが放った威力は本物だった。

しかし、領主会談の周囲には単なる衝撃波の余波しか起こさず、今も変わらず何事もない風景が広がっていた。

「これ、は。どういふことだ!？」

ユージーンが不審そうに眉を歪める。  
すると。

『誇りのない剣』に本当の力は宿らない」

それに答えるように、魔剣の威力を打ち消した、冷たい声音が響いてきた。

「アンタは強くなった気ではいるが、今のアンタがあるのはただの空威張りだ。剣の効果に翻弄されて、その力に酔いすぎて油断したな」

「何者、だ？」

スプリガンに突っ込んだ際に何かに突き刺さった感触に違和感を覚えたが、次第にそれは命を削り取る『大剣』であることに気付く。ユージーンは脇腹に刺さった『大剣』を見て瞠をびくりと動かし、自ら飛び退いてこれ以上HPが削られるのを止める。

自分もやった、待ち構え。

突っ込んで来るのがわかっているのだから、待ち構えていれば勝手に突き刺さってくれた。

それが、奴の『傲り』の証明となる。

剣にばかり頼っていたせいで、本来避けれたはずの攻撃に素直に当たってくれた。必死に保ってきた全プレイヤー中最強プレイヤーという概念をいとも容易く打ち崩した瞬間だった。

そんなHPバーが減ったユージーンの他に、もう一人のHPバーが灰色の粉塵が舞う中で微かに見えた。

一度引き、ユージーンは魔剣を構え直す、『金色のツンツン頭』はこう言った。

？

「格好が少し違う気がするが、また会ったな、キリト」

「え」

「その姿を見た瞬間『アイツ』の面影を思い出して、つい受け売りの言葉を少し変えて使ったが、立ってるか？」

キリトもまた、違和感に眉をひそめた。

が。

空中を舞う粉塵が次第に晴れていき、その姿が完全に見えた時、彼は息を詰まらせた。

と、同時に。

歡喜の声を上げて、差し伸べられた手を取り、立ち上がる。

手を取った瞬間、彼の持っていた大剣に嵌められていた『翠玉色の水晶玉』が淡く光り出す。二つの穴にセットされて鏢に近い方の一つが光ると、その光は剣を通してツンツン頭の右手へと伝っていき、そして反対側でキリトと握り合っている左手へとそのまま流れて行く。

光はキリトへと受け継がれ、彼の体が翠玉色に包まれると、減っていたHPバーが一気に満タンまで回復した。

回復魔法マテリア『ケアルガ』

その祝福を受けたキリトは、全快になったことを確認して自身も大剣を構え直す。

ユージーンが言葉を失っていると、金髪のツンツン頭はその巨大な大剣を軽々と振り、ユージーンに向けて隣に立つキリトにこう語りかける。

「行くぞ」

「遅れてきておいて指図すんなよ、クラウド」

## 第12章

領主会談の戦場は、三つのツンツン頭によって支配されていた。アバター選択の際にコンピューターによって自動的に黒いツンツン頭にされた少年に、サラマンダーを選んだら炎を象徴するためか毛先の一本一本が燃えたように鋭く逆立った重剣士。

そして。

現実でもその髪型をしており、『チョコボ頭』『ツンツン頭』と周りから言われまくってる傭兵。本来、この世界に降り立てば世界観に合わせるために妖精のような姿になるはずなのに、人間体のまま、空を飛ぶための翹もない姿のまま、彼は少年と再び肩を合わせる。今ならばわかる。

ここは、闘う者達のために用意された舞台なのだ。キリトとクラウドが、この世界を覆す剣士達であるということを示しているのだと。

この戦いの元凶であるサラマンダー、ユージーンの気まぐれか心変わりか、目の前に起きた現象に対して何も言わない。

■ 跪いていた膝を立てて起き上がり、ご自慢の魔剣を構え直す。

■ 「ッ!!」

■ そんな世界と隔絶された空間の中で、ティファは目を見開いて息を詰まらせていた。身動きはおろか、身動き一つさえ許されない状態にされてしまっているのだから。

■ ずっと探していた人から預けられた『少女』は目を覚ます気配はない。

一度ティファはその子を地面にゆっくり下ろすため、地に膝をつき、寝かせるようにして右手で頭を支えてあげる。

もう、明らかに異様な光景だった。

ティファだけじゃない、いつも一緒に同行していたリーファも、領

主会談のためにここへやって来たサクヤとアリシャも、その護衛にやっけて来た両種族も。

そして、

攻めてきたサラマンダー軍でさえも。

それらが全て、全く同じ顔をしていた。

困惑。

そんな感情がよく現れた顔をする多くの者達は、その原因となっているものに目を奪われていた。

その中で、一番釘付けにして見ているのはティファだった。

いつもいつも宅配の帰りが遅く、帰ってきててもまたすぐ行ってしまい、一緒にいられる時間が少なくて、少し寂しさを感じていたところ、あのふざけた書き置きを見て、彼がいる場所を掴むため、徹底的に探し出した。

仲間達に聞いてもわからないとしか言ってくれず、近所の人に聞いても首を横に振り、最終手段として『神羅の汚れ仕事』を請け負っている奴の所に電話をかけてみたら、あっさり奴は話してくれた。

『アイツなら今頃チャドリから引き受けた仕事によって、ネット空間にいるはずだぞ、と・あ!?!』

と、何故か最後の方で彼は驚きの声を上げていたが、そんなことはどうでもよかった。これで居場所が掴めた。

急いでチャドリ、もしくは神羅がまだ所有している研究施設を探しだし、特定してドアを蹴り破ったところ、彼が目覚まさないという異常状態になっているということ、そこにいた研究者達から聞いた。

それを聞いて、彼女も仮想空間へと行くことを決心した。

無論、研究者達は必死にそんなことはできないと彼女を説得したが、壁に手形を付けたら快く承諾してくれた。

今頃、グーパンチの形をした壁は現代アートとして飾られていることだろう。

彼と同じように改造VRバトルシミュレーターを装着し、先にチャドリーが向かったという空間へとダイブした。

それから今日まで、ここで出来た仲間と共に彼を探していたのだが、まさかこんな形で再会できるなんて夢にも思わなかった。

そこにいたのは、間違いなく『彼』だ。

ソルジャー・クラス1stとして自分を認識していた頃の服装を纏って、尊敬できる友人から譲り受けた大剣を軽々と振り回しながら立っていたのである。

——懐かしい。

ティファの知識の中には、それ以外に抱く感情はなかった。

しかし、

もう一つだけ、彼に対して言葉では言い表せぬ感情がティファの全身を包み込んでいた。

いつも一人で抱えまくって、心配ばかりさせるような人が目の前に現れたかと思ったら、なんか『知らない女の子』を平然と預けてまた自分だけ突っ走ってッ!!

「」

拳を握りしめて爪を内側にめり込ませて眼光を鋭くさせていたが、しばらくしたら彼女は諦めたように笑ってみせた。

今視界に展開されたカオスな状況を見て、もう真っ先にどうでもいいと感じていた。

彼は、どこまで行っても彼という人間で出来ている。  
冷静に見えて、自分に正直に生きてる。

その背中を見て、皆が息を呑んで静まり返って声が出しづらい中、小さな声で囁くように、やっと会いたかった者の名を呼ぶ。

「クラウド」

◇◇◇◇◇

「何者だお前は？」

と、ようやく話し始めたユージーンは脇腹を押しえながら立ち上がる。ユージーン自らの突進による威力で大分ライフが削られてしまった。

しかし、それでも何の問題もないと思わせるように平然と立って、怪訝そうに眉を歪ませながら目の前にいるクラウドを睨む。

「邪魔をしないでくれるか？ 折角そのスプリガンの首を取れる直前だったというのに」

「そういうわけにはいかない」

右手に持つバスターソードを肩に担ぐようにしながら、クラウドは鼻を鳴らす。

「ずっとアンタ達の戦いを見ていた」

「!？」

「正確には、ここへ来る途中で闘う様子が目に入ってきたと言った方が正しいか。何にしても、アンタは少しやりすぎた。三十秒という制限を自ら設けておきながら気が変わったからやっぱり最後までやるってルールを途中で変更するなんて、アンタには誇りははないのか？」

ユージーンはクラウドの言葉がさぞ予想外で面白おかしかったのだろう。一瞬目を丸くしていたが、乾いた笑みを漏らすと、

「面白い奴だな、で、どうする気だ？ まさかお前もこの戦闘に参加するつもり？」

「そうなるな」

「それが何を意味するのかわかってるのか？ そもそも、この戦い



の真の意味を理解した上で介入してきたんだろうな？ そのスプリガンは、俺達の襲撃を止めるのと、全面戦争を食い止めるためたつた一人で俺に刃向かってきた。俺はそれを許し、他の者達には一時的に武器を収めてもらっている状態だ。お前一人の勝手な行動で、どれだけの者達に迷惑がかかるか——」

「興味ないね」

ユージーンが何やら複雑な事情を述べてきたが、大して反応もせず普通の声でそう遮った。

その言葉は意外と周囲に反響し、周りにいた者達の耳にも届いていた。四種族との全面戦争が起きてしまう可能性があるのに、それを興味がないだけで済ませるあの男に、皆言葉を失っていた。

彼は、なんてこともなく、ただ普通に至極当然な事を述べる。

「たかがゲームで起きた戦争なんて、どうでも良すぎて興味がない。下らない理由なんかでその全面戦争とやらを起こさそうとしているア・ンタラにも、馬鹿馬鹿しくて呆れるしかない」

「ほう」

その言葉に、楽しげに笑っていたユージーンの頬がぴくりと動いた。

この世界の本質を言っただけのクラウドは、肩に担いでいたバスターソードを前へと向けてこう告げる。

「御託を並べる暇があるならかかって来い。三十秒間、相手してやる」

クラウドが面倒そうに息を吐くと、眉間に皺を寄せてユージーンを睨め付ける。

ユージーンはその言葉に、全身を震わせる。

「上等だ。一瞬で終わらせてやろうッ!!」

喉を震わせながら足を縮め、勢いよく地面を蹴って跳躍しクラウドに迫り来る。

弾丸のように放たれるユージーンの体は、魔剣を大きく振りかぶって正確にクラウドの首もとを狙う。防ごうとしても透過能力で盾をすり抜けて重たい一撃を当てに来る。

「ふん」

クラウドは鬱陶しげに鼻を鳴らすと、構えていたバスターソードを案の定盾のように真横にして防ぐ態勢に入る。

「バカめッ!!」

それでは頭をかち割って下さいと言っているようなものだッ!!と首元から頭上へと剣を振る方向を変えたユージーンは剣真上に掲げ、そのまま勢いよく振り下ろす。

クラウドは一応頭上にバスターソードを向けるが、予想通り魔剣グラムは彼の剣を透過してくる。

このままだと、頭からかち割られて一刀両断される。すり抜け終わった魔剣グラムは実体化し、クラウドの眼前へと迫る。

取ったッ!!

と、ユージーンは口を歪ませて剣を振り下ろすが、

ぐしゃり、と何か鈍い感触が頬を直撃した。

「ッ!?!」

むしろ驚いたのは最初に攻撃を入れられたユージーンではなく、隣にいたキリトだったろう。

まさか、

振り下ろされる直前に体を横に動かしただけでこれを避けて、体を一回転させた勢いでクラウドの左足のかかどがユージーンの左頬に突き刺さった。

かかと上段裏回し蹴り、にも見えた攻撃を喰らったユージーンはぶつ飛んで砂まみれの地面の上に倒れ込み、一体自分に何があったのかと考えているのか硬直してしまっていた。

「グッ!!」

しかし、すぐに首を振ると立ち上がり、蹴りを喰らわした張本人を睨み付ける。

すると、クラウドが隣にいるキリトに内緒話でも聞かせるようにこう囁く。

「!?」

それを聞いた途端、キリトは本気かと問うような目をしてクラウドを見つめるが、すぐに切り替えて首を縦に振って了承する。

それを確認したクラウドは、ユージーンに向かってこう言う。

「あと、二十五秒あるぞ?」

「ッ!!」

挑発されたユージーンはクラウドの懐に飛び込んでくる。その透過する剣が、今度はまっすぐ彼の顔面を狙ってくる。

突き刺す攻撃をしても、クラウドは首を振っただけで避け、攻撃を外したユージーンへ、カウンターを決めるように踏み込んで、

「ふんッ!!」

左から右へと曲線を描く重たい一撃がユージーンの鎧を斬り剥がす。複雑な軌道を描くナイフの動きを連想させるクラウドの攻撃は、自然と宙に浮いてしまうかのように、斜め上へと吹き飛ばされる。

魔剣グラムをかくぐつたクラウドは、一度、二度、三度とバスターソードを振るって大層な鎧を身に纏ったユージーンを地面に叩きつける。

スラッシュブローウ。

クラウドは大きな剣を巧みに素早く操り、そして重量級の一撃で相手を斬り伏せるプレイヤー。

対して、目の前にいるユージーンは、システムの力によって自分は強いと勘違いしてるプレイヤー。

そう、結局両者の差はそこに集約していた。

ユージーンの戦いは『真剣勝負』ではなく、卑怯でしかない。ゲームだから、という理由で許されてるシステムに甘えて強いと過信したユージーンは、魔剣グラムの力に頼りすぎて、明確な戦闘方法を覚える必要すらなかった。

そう、たとえば。

『命を懸けて闘う方法』とか。

実際、ユージーンはいつも一撃を入れる際は大振りで、これからあなたの右肩を狙っていますと言わんばかりにわかりやすい曲線を描き、足運びも重心も大して全く考えてない。

振れば絶対当たるから、という自信から戦法を見誤ったユージーンは叩きつけられて、息を吐いて震える手で地面を掴んで立ち上がろうとしている。

それを見ていた全員が、驚愕に満ちた目をしていた。  
押ししてる、全プレイヤー中最強プレイヤーと言われたユージーンを。

その事実を目の当たりにして、皆が釘付けになっていた。そのたった数秒の戦闘を脳に焼き付けておくように、視線を固定させてしまっ

ている。  
すると、

「リーファ、ちよつと借りてくぜッ!!」  
「うわっ!?!」

世界が止まっていたかのような感覚に陥っていたリーファの耳元で、唐突に囁き声が聞こえた。

同時に、  
腰に付けてあった自分の得物が勝手に引き抜かれる音まで聞こえてきた。

「キリト君!?!」

慌てて振り向くが、もうそこには誰もいない。左右を見渡してどこに行ったのか探してみるも、その姿はない。  
見つかるわけではない。

何故ならば彼は今、遙か上空で待機しているのだから。  
クラウドが繋いでくれる、トドメの一撃を。

クラウドは立ち上がろうとするユーゾーンに向けて、「こう言う。  
バスターソードを肩で担いで、

「あと十秒、よく持ち堪えた方だな」  
「っ!?! な、に、ッ!?!」  
「でも俺も暇じゃない。ケリをつけさせてもらおう」

砂塵が舞う中でクラウドは一度バスターソードを真横に構えると、低い姿勢になって右手だけで持ち、彼の周りに赤い火の粉のようなものが舞う。

剣はそれに呼応するように、真っ赤に燃えるように赤いライトエフェクトが宿る。

「斬撃に踊れッ!!」

クラウドはそう言い剣を握る手に力を込めると、視線の先まで距離を殺す。

ツンツン頭とサラマンダー軍指揮官、両者の距離は何十メートルとあったのに、そんなものはたった一步でゼロまで縮められた。

砲弾のように突き進んだクラウドは、本当にユージーンの懐にその太い刀身を突き刺す。

「がはっ!？」

という嘆きの小声が漏れたが、クラウドの攻撃は終わらない。

突き刺した刃をそのまま抉るように左脇腹へと動かし、彼の体から刃を抉り抜くと、その勢いを殺さずに重みでさらにスピードが増した攻撃を一回転して、右肩から左脇腹に向けて再度振るわれる。

と、今度は掬い上げるようにバク宙をしながらまた一撃を入れて更にその強固な鎧を削ぎ落とす。

バク宙し終わったらすぐに前に向き直り、縦に一回転して左肩から右脇腹に向けて剣を振り下ろす。

止まない断末魔。

ユージーンは苦しみの連鎖で、もはや声も上げられない。

そして、

「てあッ!!」

ザシユッ!!

と、突き刺したバスターソードはユージーンの腹を抉り、その刀身を背中まで貫いた。

「いぼッ!？」

血を吐くように声を漏らしたユージーンは、クラウドを見る。

すると、クラウドの視線が真上に向けられていることに気付く。クラウドが素早すぎて世界中の時の流れが逆に遅くなっているように感じている中、ユージーンはつられて視線を上に向ける。

そこにあるものを見て、サラマンダーの顔色が変わった。

だが、今さら気付いた所でもう遅い。

すでにクラウドはユージーンをそこに導くように、バスターソードという『誇り』を受け継いだ巨剣によって容易く彼の体を真上へと吹き飛ばした。

持ち上げて、ロケットのように一直線に飛ばされたユージーンの跡を残すように、赤い亀裂のようなものが空間に残されていたが、次第に青く細くなっていって跡形もなく消えてしまう。

クライムハザード。

合計、八連撃。

剣で弄び、断末魔の連撃を喰らわすリミットスキル。

天へと打ち上げられたユージーンは翅を出す暇もなく、空高く飛ばされる。そもそも、翅を広げたところで空気抵抗に敵わずに良からぬ方向へと向いてしまう恐れがある。

それに、先程も述べたがもう遅い。

すでにユージーンの頭上には、まるでトドメを刺さんとばかりに待機している、『スプリガンの少年』がいたのだから。

地上から見ていたクラウドは微笑みながら、やれと合図を送る。

微笑み返した少年は頷き、飛び上がってくるユージーンに向かって風を切り、隕石すらも切り崩す烈風の槍と化す。

これまで両手で持たないと構えることすら出来なかった黒い大剣を右手一本で持ち、その反対側の手には先程仲間のリーファから勝手に借りた長刀が握られていた。





ボロボロになった鎧から飛び出た黒い刃と、キリトの隕石のような速度の突きによって、ダメージは凄まじい威力を持つことになった。HPバーがもう危険信号であるレッドゾーンに突入しているにも関わらず、彼はまだ攻撃を終わらせない。

一刀両断、そうするかのように右手に持つ大剣と、左手に持つリーファの長刀が真上に掲げられ、先程自分にやられた攻撃の仕返しとばかりに、その二つの得物を勢いよく振り落とした。

「があああああああああああああアツツツツ!!!??」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!

断末魔の声を上げたまま地面へと叩き落とされたユージーンのはその衝撃と共に、上半身と下半身は別々になり、その直後に死亡したことが確認できる真っ赤なエンドフレームが燃え上がり、アバターは消し炭となった。

瞬間。

落下の勢いを殺し切れなかったキリトはそのまま地面へと直撃した。

地面が丸ごと消し去られたかのように、領主会談の戦場は、所々がすり鉢状に削り取られていた。

あちこちに広がるクレーターの一つから出てきたスプリガン少年は、頭についた砂埃を払って立ち上がって目の前を見てみると。

「ふっ」

待ちくたびれたように地面に刺した大剣に少し寄りかかり、一息ついていたクラウドが笑って立っていた。



あれだけ激しかった短時間での戦闘は静寂の風に流されていた。あちこちの地面がへこみ、沈められて領主会談には不向きな地となった現状を見て、皆が皆ユージーンを倒した二人に対して注目していた。

二人の、華麗な剣舞。

魔剣グラムをもともせず、会話も通じない相手には肉体言語で話し合って、そして自分のターンが来たらその魔剣の何倍もの重さがありそうな大剣を軽々と素早く振り回し、目にも止まらぬ早さでユージーンを天空へと舞い上げたクラウド。そして。

上空で待ち構えて、空を引き裂く威力の攻撃を何連撃も繰り出し、最終的には大地をも打ち砕いたスプリガンの少年、キリト。

二人は勝利したことに無言で笑い、見つめ合い。

キリトはクラウドにいいねを送るように左手でグッドサインを送る。

そんな二人に、

「見事見事!! 素晴らしいツ!!」

良く通る声で、両手を叩きながら近付いてくる者達が二人。

「ホントスツゴイッ!! ナイスファイトだったヨツ!!」

サクヤとアリシヤ。

二つの種族の長が二人を称えると、それに続くように幹部らしき人たち合わせて十二人ほどの者達も彼らを祝福する。

その快哉を上げた瞬間、二人の見事な戦闘を祝うように全種族が、クラウド達を称えた。

ユージーンという指揮官がやられたというのに、サラマンダー族達までもが歓声を上げている。持っている武器でエールを送るように振っているのが見える。

あのユージョンとか言う指揮官、そんなに部下達に憎まれるほど嫌な上司だったのだろうか？

などとクラウドは思うが、彼はそんな祝福を素直に受け止められなかった。別に自分はそのまでの事をした覚えはない。戦闘に勝手に参加して、キリトの手助けをしただけだ。

貢献度的に、精々良くて百ギルほどの活躍しかしていないと思う。しかし、それとは対照的に、そんな褒め称えに照れたのかキリトは右手に持っている武器を上に向けて、勝ったぞという勝利ポーズを取りながら、どこか胡散臭く飄々とした態度で笑っている。

「いや、どうもどうも!!」

あれは恐らく、空気を読んでとりあえずやってみたという感じか。喜んでるのも束の間、キリトは剣を収めると周囲に向かって叫ぶ。

「誰かアイツに蘇生魔法をしてやってくれ!」

「わかった!!」

その声に反応したのはサクヤだった。

背中から翹を出し、和風の着物をはためかせ、地面にめり込んだユージョンの命の灯火とも言えるリメインライトまで最短で飛んでいく。

蘇生魔法を行うための複雑なワードを読み上げ、四行ほどの長い詠唱を吟くと、サクヤの両手から現れた青い光がユージョンの赤い炎を優しく包み込んだ。

炎は次第に人の形を取り戻していき、地面に倒れ込んだユージョンの姿が現れた。

「うっ!!」

瞼をゆっくり開けながら視界を確保して、周囲を見渡すと、状況を

理解したのかまた目を閉じて微笑んでいる。

蘇生されたことに対して礼を言い、サクヤと共にキリトの前にやって来て、口元にしか届かないくらいの音量の声で話す。

「見事な腕だった」

「！」

「俺が今まで見た中でも二つの剣を同時に振り回した奴は見たことがない。素晴らしい動きだった」

「そりやどうも」

キリトはその言葉に短く応じると、ユージーンはその横を通り過ぎ、なおも地面に刺した剣に寄りかかっているクラウドの前まで来ると、

「貴様もな」

「」

「大剣をあんなにも素早く動かし、重量級のダメージを目にも止まらぬ早さで与えられるプレイヤーは、恐らくお前くらいにしか出来ない芸当だろう。貴様のような剣士がこの世界にいたとはな。世界は広いということかな」

「興味ないね」

「」

褒められても何も嬉しくないぞというかのようにそっぽを向いて対応するクラウドに、思わず笑ってしまった。

そうは言っても、態度に出ているぞと言いたかったがやめておいた。どれだけクールなポーカーフェイスをしていても、彼はわかりやすい。

二人の剣士によって負けてしまった自分を悔やみつつ、自分はまだまだだということを再認識したユージーンは目を細め、数秒間沈黙する。

そして、軽い笑みを浮かべるとキリトの方に向き直り、両手を組んで言う。

「スプリガンとウンディーネ同盟の大使よ」

「!!」

「確かに現状でスプリガン、ウンディーネと事を構えるつもりはない。それに関しては領主とも話さねばならん話題になるしな。この場は、お前達二人の見事な戦闘に免じて引くことにする。だが貴様らとはいずれもう一度戦うぞ、特にその貴様」

「!?」

ユージーンはクラウドの方に向き、唐突に声をかけられたクラウドは瞬きをして応じる。

「どこの種族なのかわからんが、貴様のような剣士は俺が今まで見た中でも最強のプレイヤーだ。いつかお前ともう一度、今度は二人だけで剣を合わせてみたい。いつか手合わせ願うぞ」

「」

クラウドはそんなこと言われてもという顔をするが、すぐに切り替えて鼻を鳴らし、地面に刺したままだったバスターソードを背中に戻すと、

「報酬次第だな」

彼なりの返事。

まだ会ってそんなに時間も経っていないのに、その言葉を聞いてユージーンは野太い声を上げて笑っていた。

「望むところだ」

最高の報酬を用意して、また貴様と戦わせてもらおうとも言おうように宣言するユージーン。

それだけを言うと、ユージーンは皆に背を向け、翅を広げて空へと飛び立つ。

それに続いて飛び立っていくサラマンダー軍は、地の果てまで見えなくなるほどの距離まで飛んでいった。

それを見送ったリーファが、胸の中に溜まっていた不安を吐き出すように、大きくため息をついた。

「はあああああああ」

「サラマンダーにも話がわかる奴がいるじゃないか」

「あんたって本当にムチャクチャだわ」

「良く言われるよ」

いつの間にか隣に立っていたキリトに呆れ、彼から返してもらった愛刀を受け取ると顔を互いに見合わせて笑い合う。

そんな時、

「クラウドッ!!」

「!?!」

キリトとリーファの背後から、怒号に似た女の声が聞こえてきた。

二人は後ろに振り返ると、そこには修羅場が広がっていた。

何だか微妙にイライラした様子のティファが、クラウドの前まで距離を詰めていたのだ。

クラウドが微妙に汗だくになりながら固まっていると、また次なる展開が待ち受けていた。

「う、ん」

もぞもぞと地面の上で身動きすると、『ある少女』の呼吸が意識的な

ものになる。それから彼女は上半身だけ起き上がり、閉じていた瞼をパツチリと開いた。

「むにゃ？　　んん、どこ？」

「ごしごしと片手で目を擦りながら、ユウキは完全に起き上がる。

そして、視界に入れたクラウドを見ると、

「あ！　クラウドツ!!」

状況も録に把握せず近寄ってきて話しかけてくるユウキに、現場は更にカオスになっていく。

「一時間守ってくれてありがとう！　なんか知らないけどいつの間にか何処かに移動しちやってるみたいだけど、クラウドが運んでくれたの？」

「あ、ああ。」

「ふくんそっか。それでどうする？　ボクはもう用事済ませちゃったからこれから当分クラウドに付き合えるけど、一旦クラウドもログアウト——」

言いかけて、ユウキの口がピタリと止まった。

「どうした？　とクラウドが思っていると、何やらユウキは周囲のあちこちを見回して現状のチェックを始めた。

目の前にいる、息を飲むほど美しいスタイルをした美女というクラウド。あちこちが荒れている現場。

それらを見終えると、ユウキはティファに対してではなく、クラウドに質問する。

「えっと、クラウド。この人は誰なの？　知り合い？　どんな関係？」  
「え？」

そう言われて困惑するクラウド。  
そんな時、

「クラウド」

クラウドの両手から不自然な汗がぶわっと噴き出した。  
壮絶に嫌な予感が背後からする。

その予感を裏付けるように、後ろを向き直したクラウドの目の前には、綺麗な黒髪がゆらゆらとお怒りモードのように揺れている。  
だが勘違いしてはならない。

こちらにも事情があるのだから、それをちゃんと説明せねばならない。  
い。

「ティファ...これにはワケが」

二人はわずかに沈黙して、ちゃんとした話し合いをしようとした矢先、言い終わる前にクラウドの顔面に、

バゴオツ!! という轟音。

クラウドの体は斜め上方へと高く高く吹き上げられる。円形の小さな領主会談の周囲には川が囲むように流れているのだが、その中へ斜め上から落下するようにドボンツ!! と音を立てると、彼の体はそのまま沈み込み、数十秒経ってようやく浮かんできた。

それほど深さにまで叩き落とした威力を見た、ユウキにキリトとリーファは、思わず口元をピキツと凍らせるようにひきつらせた。

周囲も同様。

あのユージーンを打ち破った剣士を吹き飛ばした女性を見て、全身から冷や汗が噴き出している。  
そして。



混乱の輪の中央で右手を付き出したまま静止しているティファは、  
ゆっくりとした動作で姿勢を崩すと、

「あー スッキリしたッ!!」

もうどうでも良かったのだ。

彼がどんな言い訳をしようと元からそのつもりだったのだから、それをやり終えたティファは背筋を伸ばして達成感に浸かる。

全方向からやばいものを見たような目をしている人達がいてもお構いなしに、ティファは今まで溜め込んでいたものを吐き出すように、物理エネルギー変換して右手に乗せて、その想いを伝えた。

それでも満足だった。

リーファは口元に手を当てて目を真っ白にして、キリトは女を敵に回したら怖いということを再認識して、ナビゲーション・ピクシーのユイは彼女の放った技の戦闘データを解析した結果で出た異常な数値に驚き、ユウキは状況が全くわからずオロオロし始めていた。

そんなカオスな状況の中、サクヤがその混乱を打ち消すように咳払いしてこう問いかけてくる。

「一体、何が何やらどうなってるのか。すまんが状況を説明してもらえらるだろうか？」

「すみません、こっちも良くわかりません」

「ボ、ボクもです」

クラウド可哀想だとは思っているみたいだが、その混乱の原因と  
なっているものの解答を持つ者は今のところ誰もいないらしい。

◇◇◇◇◇

ちなみに。

いつもクラウドのポケットからナビゲーション・ピクシーとして彼

を支えていたチャドリーはというと、

「あ、危ないところでしたっ！」

予めプログラムされていた危機察知能力システムによつていち早く危険を検知し、クラウドのポケットから既に避難していたようだ。

## 第13章

全面戦争が勃発しそうになった原因は、シグルドと呼ばれるシルフ族の一人が裏切ったからだ。

彼の事を一言で現すならば、強さを求めすぎたプレイヤーだ。単純なプレイヤーだけの力じゃない、権力という目に見えない力まで求める、独裁者主義の思考を持っているプレイヤーだ。

故に、シルフという弱くも強くもない勢力の種族で要職に置かれ続け、雑用に似たことばかりやらされて不満ばかりが溜まっていつて、この世界で一番の勢力であるサラマンダーにすればよかったと悔いてしまった。

グランド・クエストを一番に達成するのはサラマンダー族だとも言われるほど、サラマンダー達は強く、そんな状態になることが許せなかった。無限に飛行できる翅を手に入れた奴らが自分達を見下して、自分達は悔やみながら空を見上げることになる。そんな光景になるくらいならということ、彼はサラマンダー側に寝返ったらしい。

「でも、だからってなんでサラマンダーのスパイなんかやったのかな？ シルフである以上、サラマンダー達に混じってグランド・クエストをクリアしても無限飛行できるようになるのはサラマンダー族だけなのに」

目覚めたばかりのユウキがサクヤにそう訊ねる。

彼女が一時間ログアウトしている間に何が起きていたのか、一体どうしてクラウドはその領主会談襲撃の場で大暴れしたのか、状況を把握するために、シルフ領主であるサクヤとケットシー領主であるアリスヤ・ルーに話を聞いていた。

ユウキの他にも、シルフ関係者のリーファも話に加わって聞いている。

「確かに、サラマンダーに寝返ったとしても、結局シグルドには何のメリットもないと思うけど」

「恐らくだが」

「?」

「もうすぐ導入される『アップデート五〇〇』の事を聞いているか?」

「」

二人は顔を合わせると互いに首を振って否定する。

「聞いた話では、そのアップデートでようやく『転生システム』が実装されるといふ噂がある」

「!!」

「だから、奴がサラマンダーに寝返った理由はそれだろうな。転生するにしても、巨額なユルドが必要らしいが、領主の首を差し出せば転生させてやるという話に釣られてスパイとなった、といったところか」

何とも言えない空気が周囲を満たす。

誰もが夢見る、飛行限界時間という枷から外れて自由に飛び回りたいという欲。それに今一番手が届きそうなのがサラマンダーだ。

だから、近々転生システムが導入されたらサラマンダーへとアバターを切り替え、種族の頂点『アルフ』に生まれ変わるといふ野望を抱えていたようだ。

リーファだって、そのためにシルフーの実力と言われていたそのシグルドという人のパーティーにも参加して熱心にクエストをこなして金を稼いだり、それら全てを彼が管理している執政部に上納している。

もしかしたら、そのお金を使って転生する予定だったのかもしれない。

一人の男が立てた転生計画。

そんなもののために、三つの種族間で戦争が起きようとしていた。

「プレイヤーの欲望を試すゲームなんだなあ、ALOって」

ユウキのその冗談混じりの言葉に、隣にいたリーファとキリト達がつられて笑いながら言った。

「ホント、デザイナーは嫌な性格してるに違いないぜ」

「これ考えた人ちよつと最低だね、ゲーム性はいいけど」

その様子に、サクヤ苦笑しつつも応じる。

「さて、そうと決まったら……ルー」

「ハイ？」

「確か前、闇魔法のスキルを上げて『月光鏡』という魔法を得たと言っていたな？」

「うん、言ったネ」

「じゃあ、それをシグルドに向けて頼む」

「え？ いいけど、まだ夜じゃないからあんまり長くはもたないヨ？」  
「構わない、すぐ終わる」

サクヤはそう言い放ち、アリシヤが一先ず両手を上げて詠唱を開始している最中、美貌の為政者は笑みを殺し、冷酷な声で独り言のようにこう呟く。

「部下の尻拭いをするのも、領主の務めだ」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

結局、そのシグルドさんとやらはどっかに放り出された。領主の権限によって領地から追い出され、今頃路頭に迷っていることだろう。

可哀想だが、自業自得だ。

そもそもそんな小物のことなど一々気にしてられない。この件はこれでもう良しとしよう。

「私の判断が間違っていたのかは次の領主投票でわかることになるだろう。とにかく、だ」

サクヤは左手を振って追放するための手順を終わらせるとシステムメニューを虚空へと消し去り、リーファに向けて笑みを浮かべた。

「礼を言わせてくれリーファ。執政部への参加を頑なに拒み続けた君が救援に来てくれたのはとても嬉しかった」

「あたしは何もしてないよ、お礼ならキリト君達にどうぞ」

「そうだ！ 君は一体」

領主二人が、今回の戦闘の主役であるキリトとクラウドの方を向くが、一先ずクラウドは置いといて改めて首を傾げながらキリトを見つめる。

アリシヤがまずキリトにこう尋ねた。

「ねエキミ。スプリガンとウンディーネの大使って。本当なの？」

その言葉に、キリトはニヤツと笑って左腕を腰に当てて、顔の前でワイパーのように右腕を振って答える。

「全然、大嘘。何もかもデタラメ」

一切悪びれずに放ったその一言に思わず絶句する領主二人。

「全く、無茶な男だな。あの場でそんな嘘を堂々と大声で叫ぶとは」  
「でも、そんな嘘つき君にしては随分強かったよネエ。あのユージー  
ン將軍にトドメを刺すなんて。そんなユージーン將軍を一方的に叩

きのめしてたあの人も凄いけど」

そう言つて、アリシャだけでなくキリト達全員が後ろを振り向く。そう、ユーゾーン将軍を打ち倒したのはキリトだけの力ではない。唐突に乱入してきた、あの金色のツンツン頭のクラウドの力もあつて勝利できた。

そんな当のクラウド。

必死に揺さぶっているティファの前で、魂が口から半分抜け出ている状態だ。いくら揺すつても反応がなく、冗談抜きで心臓が止まりかけている。

「クラウドごめんツ!! やり過ぎちゃったツ!! お願いだから目を覚ましてツ!!?!?!」

ぐったりと力が抜けてずぶ濡れになっているクラウドの手足。顔は真っ青に染まっていた。瞳は開いているとも閉じているとも取れず、少なくとも白目向いてるのだけはわかる。

ソルジャーの身体能力を持つてしても防げない彼女の攻撃力。

それを味わったクラウドの意識は本当に今何処にあるのかわからない状態だ。

仮想か、現実か、二次元か、異次元か。

何にしても全然目を覚まさないクラウドにため息をつく音が聞こえた。

シルフの領主のサクヤだ。

「すまないが、少しどいてくれるか?」

「え?」

クラウドの元まで近付き、寄り添うようにして彼の体を必死に揺さぶっていたティファの手を止めると、少し移動してもらい、サクヤは両手を掲げて詠唱を開始した。

聞き慣れない単語を唱えるように言うと、ぐったりと動かないクラウドの体から、薄く淡い光の玉がふわりと舞った。回復の祝福を彩るように緑色に光る玉は蛍の群れのようにも見える。それらの光は傷ついた部位に潜り込んでいき、クラウドの傷を癒す。

サクヤが詠唱を終えて一息つくくと、立ち上がって一歩下がる。

「これでもう、大丈夫なはずだ」

そう言った直後、

「うッ!!」

クラウドの意識は少しだけ断絶していた。

滲むように戻った意識は、次第に軽くなっていき、ハッキリとした景色を映し出す。

もはや見慣れた景色だ。

草の匂いを感じ取ってまだ屋外にいることを認識させる。自分はぶん殴られて、空中へと投げ出された際に意識を失ったからその後何があったのかよくは思い出せない。

そんなクラウドの耳元に、

「クラウドッ!!」

そう言ったのは、仮想空間で二年間も過ごしてきたためずっと会ってなかったティファだった。彼女はクラウドが目を覚ましたのを確認すると、思わず目尻に涙が浮かんできた。

「ティ、ファ」

起きたばかりだからか声は不安定で、横隔膜の制御ができず正確に彼女の名を呼べなかった。クラウドは起き上がろうとしたが、体が思



うように動かなかった。

傷が深いとか、そんな理由じゃない。

なんというかこれは、安堵したことによる疲れの芯のようなものが完全に全身から抜けきったような感覚である。

クラウドが慣れない感覚に戸惑っていると、

「ようやくお目覚めか、クラウド」

まるで旧知の仲のように自分の名を呼ぶ声が前から聞こえてきた。その隣には、見たこともない金髪の少女と、一緒に同行してきた仲間のユウキがいた。

二人を置いてクラウドに近付いてくる少年の名を、クラウドは知っている。

「キリト」

昔と全然違う姿でも、彼はすぐに誰なのかわかった。

全身漆黒の装備で、ボイスもそのまま、ほとんどあの時と変わっていない。良くて髪型と耳が尖ってるくらいだ。

彼のその容姿を見て『尊敬していた親友』を思い出して、どこか懐かしさを感じるクラウドに、キリトはニヤツとわざとらしく笑って、

からかうように、

試すように、

こう聞いてきた。

「具合はどうだ？ 自称元ソルジャー・クラス1st？」

◇◇◇◇◇

その夜、

領主との話し合いを終わらせた後、クラウド達は近くの宿屋でキリ

ト達と共に泊まり込み、話し合った。

一つの部屋に、五人。

ナビゲーシヨン・ピクシーを入れたら七人。

クラウドは、これまでの自分に起きたことを仲間達に語って聞かせた。

クラウドの生まれから、世界、歴史、経験、価値観、ありとあらゆるものを全て打ち明けた。

そして、何故ソードアート・オンラインに迷い込んだのか、何故今度はアルヴ・ヘイムオンラインに迷い込んだのかの経験を。

淡々と。

要所、要所のみをかいつまんで話したが、

その憎悪と復讐。

死と別れ。

絶望と後悔。

人間と化物。

精神と記憶。

自分とセフィロス。

キリト達には到底理解できない常識は、聞く者達全員を、絶句させた。

「これが、俺がソードアート・オンラインに参加した経緯だ」

「三三三」

「そして今、俺はこの世界から抜け出すために世界樹へと向かっていく」

自分達とは違う世界の住民だということは、既に茅場から聞いていたキリトであったが、クラウド本人から聞いて改めて驚愕する。

ティファにも聞いたが、何故クラウドがソードアート・オンラインに参加したのか、何故ALOにまでいるのかまではわからなかった。

しかし、彼のナビゲーシヨン・ピクシーであるチャドリが説明してくれた。

「このALOという世界は、『ソードアート・オンライン』のサーバーをコピーして作られた世界です。基幹プログラム群やグラフィック形式、その他諸々全て完全に同一で構成されており、ソードアート・オンラインのプログラムをそのまま持ってきたからクラウドさんまで連れてこられた、という仮説を立てました」

「それってつまりは、一種のバグということでしょうか？」

「恐らくそうだと思います。故にクラウドさんは現在、ソードアート・オンラインのプレイヤーデータを引き継いでここにいますから、SAO時代に組み込まれていたシステム、『ログアウト不可』が継続された状態なんです」

同じナビゲーション・ピクシーのユイの問いにそう答えるチャドリリーは、その解決策を語り始める。

「そんなクラウドさんをこの世界から脱出させるためにまず必要なのは、世界樹にある『データ閲覧室』という所にたどり着くことです。そこにたどり着ければ、クラウドさんのプレイヤーデータを見つけて、正常なデータに戻すことができます。今クラウドさんが人間体として存在しているのが、バグの証です。普通ならこの世界にやって来たら世界観に合わせるためにコンピュータが自動でアバターをセッティングしてくれますが、クラウドさんはSAO時代の姿のまま、そしてティファさんまでも人間の姿のままです。これは、明らかにイレギュラーな事が起きている証拠です。一刻も早く世界樹に向かうことを推奨します」

解決策を述べたチャドリリー。

しかし、その話についていけてないものも当然いるわけで。

？

「えっと、話の腰を折るようでなんだけど、クラウドさんとティファさんは別世界の人間で、クラウドさんは『星の力』と『わけのわ

かんない細胞』を埋め込まれて・・・なんやかんやあって・・・星を救った  
!?!?」  
「いろいろ衝撃の事実が山盛りで処理しきれないよツ!! ... どういうことクラウドッ!?!」

こうなるのは当然である。

リーファは頭に熱が籠るくらいに働かせてるが、目を渦巻き状に回転させているためほとんど理解できてないみたいだ。

ユウキも頭を抱えて重くなった頭脳を支えているが、状況を良く呑み込めていなかった。

だからあまり話したくなかったんだ、と改めて思うクラウド。

別世界の事を話すのは多分力オス理論的にまずいわけで、価値観の違いから予測不可能な事態が発生するかもしれないから出来ることなら話したくなかった。

しかし、どうやらティファがキリトに話してしまっただけらしい。

ある程度だから、クラウドが何故ソードアート・オンラインに参加したのかとか、どうやってその力を得たのかとか、これまで経験してきたことまでは聞いてなかったらしい。

二人が何者なのか、それだけを聞いてきたらしい。

良い機会だからこの際全て打ち明けようと思ったが、やはり現場は混乱しているご様子だった。全てを理解してほしいなんて思ってたかったが、まさかここまで混乱してしまうとは。

だが、

彼はどうしてもこれだけは言っておきたかった。

「まずは謝らせてほしい」

「「「「「?!」」」」」

「俺とティファ、チャドリーが異世界から来たことを隠していたことについて。何の確証もないから説明できずにいて、黙ってる形になっていたことに対して、本当にすまないと思ってる」

頭を下げるクラウドに、皆動揺する。

しかし、すぐに顔を戻したクラウドは改めて決意を語る。

「でも、俺が持っている情報は、使えるか使えないかは別問題としても、なるべく共有しておいた方がいいと思ったから、今ようやく、話すことが出来たんだ」

「「「「「」」」」」」

「結局、何が正しくて何がおかしいのか理解するのは難しいかもしれない。俺達自身も良くわかってないことばかりだし、この世界のことだけじゃなく、キリト達の世界のことも」

「確かに」

キリトが顎を擦りながら頷く。

「一つだけ確かなのは、価値観の違いからパワーバランスが崩壊しているのももうわかった」

「！」

「クラウドやティファ達の戦い方を見て確信したよ。『こいつらは俺達とは違う』って」

「!?!」

「誤解しないでほしいんだけど、だからと言って俺はクラウド達を差別とかそんなひどい扱いはしない。むしろ、仲間として迎え入れたい」

「「」」

「その上で、忠告しておきたい。余計なお節介かもしれないけど、クラウド達の『その力』、そして『異世界からやって来た』という事は、今後はどちらもあまり他者に口外しない方が賢明かもしれない」

キリトのその言葉に、沈黙が降りる。

彼は続ける。

「俺個人の意見だけど、強大な力や異質な技つてのは、どうしたって人の欲望を掻き立てるし招き寄せる。お前が望むと望まざるとに拘わらず、争いの元になってしまいう危険性がある。特に、『異世界』というのは俺達視点からすれば大好物な話題だ。周囲を危険に巻き込みたくないと思うなら、クラウドは自分をこれからも隠し続けるべきだと思う。今までのようにな！」

「!!」

「つまり、そのままのクラウドでいてくれってことだよ。これからもずっと、クラウドはクラウドらしくして、仲良くやっていこうぜ!!」

異世界からやって来た二人は呆然と、ただ呆然とキリトの言葉を聞いていた。突然降って湧いたこの展開に、どう反応して良いのかわからないのだろう。

クラウドは、もう受け入れてもらえないかもしれないという恐怖心で精神面がやられていたのだから。

そんなキリトの言葉に、クラウドは頭を掻いて、

「ありがとう、キリト」

「どういたしまして」

時間が止まってしまったクラウドに、キリトは獰猛なほどの笑みを浮かべて応えてあげる。

それに、とキリトは一拍置くと、

「俺も世界樹の上には用があるからな。このまま、一緒にパーティーを組んで世界樹を目指さないか？」

「!!」

「行き先は同じなんだから一緒に向かった方が早くつけそうだし、俺とクラウドがいれば辺境の地は恐いものなし!!」

一瞬。

絶句に塗り潰されていたクラウドの顔が、本当に何も考えていない、思考が停止したような表情になった。

有り体な言葉を使ってしまうえば、キョトンという表現が似合っていた。

「ふっ」

鼻を鳴らして、その提案を受け入れるように、クラウドは緩やかに伸ばした。まるで、これから背中を預ける戦友に握手でも求めるように。

そんなクラウドの手を見て、キリトは迷わなかった。

パシッ！

小気味の良い音が部屋に響く。

差し伸べられた手を取って、二人は力強く掴みながら

「よろしく」

「ああ！　こちらこそよろしく頼む！」

ようやく、異世界の剣士達は手を取り合った。

本当の意味で、繋いだ手が、かつて隣り合わせで戦ったもの同士が再び組むことを証明している。

そんな二人に、周囲にいる人は、

「ねえ、ボク達のこと忘れてない？」

「!?」

ユウキがそう言うと、リーファもそれに続いて言う。

「そうだよ！　キリト君もクラウドさんも、勝手に話を進めないでください!!　あたし達ももちろんついていくから!!」

「ログアウト出来ないなんて聞いてないよクラウド!!　そんな大事な

ことを黙ったまま一緒に行動してたなんて許せないけど、事情が事情だし、それに最後まで付き合うって決めてるんだから、ボクだけ置いてきぼりなんてさせないからね!! 絶対に最後まで一緒に行動させてもらおうよクラウドツ!!」

ユウキとリーファが二方向から迫ってきて、自分もついていく意思を提示する。

「クラウド」

そんな彼女達につられるように、ティファも話し出す。

「前にも言ったでしょ。目の前のことから逃げないで、一人で抱え込まないで、一緒に戦おうって」

「ティファ」

「みんなで助け合って、頑張ろうよ!!」

三人はキリトとクラウドの手に自分達の手を乗せる。ナビゲーション・ピクシーであるユイとチャドリーもその小さな体をそのまま乗つけるようにして、重なり合った手の上に二人は両手をつける。

円陣組んで手を重ね合わせて、これから気合いをいれるように、あとは誰が声を出すか、だ。

「「「「「」」」」」」

予想はしていたが、全員がクラウドの方を見つめてくる。ユウキなんか特にニヤニヤと笑みを浮かべている。

「」」」」

わずかに視線を逸らし、クラウドは小さな声で呟いた。



「世界樹に向けて、作戦会議を始めよう」

「「「おう（うん）（はい）ッ!!」」」」

重なり合った手の感触から、改めて世界樹攻略の覚悟を決める。

まだ終わりじゃない。

たった一本の天を貫く巨木を目指して、バラバラに動いていた彼らは一点へと集結する。

## 第14章

螺旋階段はやたら長かった。

神羅の潜入の時にエレベーターを使わず裏口の階段から六十階まで昇ったあの頃を思い出すくらい長かった。

皆が息を切らして、足を一段一段確実に昇らせて、足を付けてひたすら動かし、肩で呼吸する頃には時間も思考も全て真っ白にしたまま黙々と昇っていた。

そして。

そして。

昇りきった先に広がっていたのは、

積層都市の夜景。

古代文明の周囲に遺跡が残されており、そこを観光地にするかのよう  
うに石造りの建物が立ち並んでいる。

夜の街には街灯がなく、『光を放つ水晶』が封じられたランプを建物の輪郭が良く見えるような場所に設置して、その明かりを頼りに街を行き交うプレイヤー達。

もう夜だからなのか、あまり人が少ない。

夜景を見るのに邪魔が入らないから喜ぶべきだろうが、クラウドの顔は変わらない。

『世界樹』

アルヴヘイムの妖精王オベイロンの居城と言われている神聖なる巨木。

与えられた翅では限界飛行距離によって天高く飛べることはできず、アツプデートでそうはさせないように見えない壁を設置し、中心内部の守護騎士達が無限に現れるというランド・クエストを突破しなければ中には絶対に入ることが出来ない世界最硬のシエルターに、

「」

クラウドはバスターソードに手を伸ばして、抜くことなくそのまま見上げながら佇む。

彼は剣を背負いながら誓う。

必ず攻略して見せると。巻き込まれた世界から脱出すべく、上を見上げて濃紺の夜空を貫く枝葉を睨み付ける。

「世界樹」

キリトがそんなクラウドの隣に来て、無意識の内に呟いた。また、反対側にティファも来て、二人に視線を合わせるように見上げて言う。

「こうして見ると、神聖な場所なのに絶望的な気持ちになるね」

複雑な想いが重なりあった一同はその神聖な巨木を見ても、何も響かなかった。むしろ、邪魔なオブジェクトにしか見えなかったろう。

あそこに、『探し求めていた人がいる』

あそこに、『脱出する手がかりがある』

そんな想いを抱えていたものからすれば、目の前の夜景を楽しむ余裕なんてなかった。

悪が封じ込められた摩天楼。

ティファからすれば、大切な人をこの世界に留めさせている枷。キリトからすれば、最愛の人が囚われている牢獄。

クラウドからすれば、この仮想空間から脱出するために、断ち切るべき鎖。

それを美しく見せてカモフラージュさせている。人々の目を眩ませ、神聖な場所だと錯覚させる。真の実態も知らずに、ここが一体どういうところなのか知らずに、皆夢求めてここに集まってくる。

キリトやクラウド達とは違い、希望を抱いて。

「絶望は力になる。時には、な」

キリトがらしくないことを言う。

彼もそれなりの理不尽を味わってきたんだろう。世界樹を目指している理由の中に、その絶望が混じっているのかもしれない。

その絶望を怒りとし、力へと変換して、今日ここまで頑張ってきた感じか。

そんなキリトにクラウドは言った。

「まだ温存しておけ」

「ああ」

頷いたキリトを見ると、クラウドのポケットから顔を出したチャドリーが皆に聞こえる声で言う。

「目標地点に到着を確認。ここが、世界樹を中心とする世界最大の都市、『アルン』だと断言致します」

「私、こんなにたくさんの方がいる場所、初めてです!!」

「僕自身も興奮を検知。合計で九種族が行き交う光景はここぐらいでしか見られないでしょう!!」

ナビゲーション・ピクシー達は純粋に楽しんでいた。観光地に来た子供のようにはしやぎ、あちこちにあるものを見ては興味を示している。

リーファとユウキも同様。

「ホント、凄いな。ボク、アルヴヘイムの中心に来たの初めてだよ。こんなにも綺麗な場所なんだね!!」

「あたしも自分の領地からあまり離れたことなかったし、鉱物燈の光がまるで星屑みたいツ!!」

黄金のように煌めく街並みに感動する四人に、クラウド達三人は一

度抱え込んでいた感情を頭の隅に置き、高台のテラスの縁に座り込んで巨大都市の風景を楽しんでいるユウキ達の元へと近づいていく。

その時だった。

ゴーンッ!!

と、街全体に大音量で響かせる重厚な鐘のような音が、クラウド達の鼓膜どころか内蔵まで振動させる。

急な出来事に、皆興醒めたように周囲を見渡す。

すると、合成音声ソフトで元から用意された台本をナレーションするかのようになり、一つの声が響き渡った。

『本日、一月二十二日午前四時から、午後三時まで、定期メンテナンスのためサーバーがクローズされます。プレイヤーの皆様は、十分前までに、ログアウトをお願いします。繰り返します、本日、一月――』

唐突な運営からのアナウンス。

両者の世界線の時間は曖昧なので、良くわからない状態だが、キリト達の世界的にはもうそんなに遅い時間になっているらしい。

「今日はここまでだね。一応みんなで宿屋を探してそこに泊まってログアウトしよ」

「ああ」

テラスから立ち上がったリーファがそう告げると、キリトとクラウドの二人は元から練習でもしてたのかと疑うくらいタイミングが一緒で、冷たい息を吐くように応えた。

二人の目線はさつきから、上空にある世界樹の枝が四方八方に枝分かれています。光景を眺めている。

リーファはそんなキリトを見て思い出す。

彼の目的は、『世界樹の上にいる【誰か】に会う』こと。

それが誰なのかは教えられていないが、キリト的にはどうしても会

わなければならぬらしい。それが誰なのか分からない以上、聞いても良いのかもわからない。

よくわからないまま今日までずっと着いてきたわけだが、それを考える前にキリトが背伸びをして声を上げた。

「さ、宿屋を探そうぜ。俺もう素寒貧だから、出来れば金の掛からない場所がいいな」

「カツコつけてサクヤ達に全財産渡したりするから、そんなことになるのよ。宿泊代くらい残しときなさいよね！」

そう言われて苦笑しながら頬を掻くキリトに、

「金ならいくらでもあるぞ」

と、隣のツンツン頭からのいきなりの告白。

その発言に皆が振り向くと、

「これくらいあれば足りるか？」

左手を振るって出現させたウィンドウを手早く操り、かなり大きな革袋をオブジェクト化させて、掌に乗せて見せる。

掌に乗せられるほどの大きさじゃない袋の中には、全員が豪華なホテルに泊まれるくらいの青白いコインが大量にあった。それを見た途端、リーファどころか全員が思わず声を洩らした。

そしてそのまま横隔膜が硬直し、上手く話せないまま、なんとか掠れた声でこの金どこで手に入れたのかをユウキが訊ねる。

「こ、こんな大量のお金・どこで手に入れたのクラウドツ！」

「前のソードアート・オンライン時代にプレイヤー達から依頼を受けて貯めてた貯金がバグらないまま引き継がれてたらしくって、まだまだあるぞ」



んな大したことをしたつもりはないのだが。

S A O時代の金がまだ引き継がれてたから出してみたら何故か皆大騒ぎしだした。やはり、金というのはどの世界に置いても自らの欲望を叶える魔法の杖みたいなものなのだろう。

お金とは、心の安定剤。

あるだけで幸せを感じる。それが多ければ多いほど幸福感を与え、自信を幸せにできる物。それを狙ってくるものがいるかもしれないからということできリトに掴まれた手を見る。

・この手は誰かを幸せにしてあげてるのか、  
・ということを考えてしまうのは馬鹿げたことなのだろうか？  
なんてことを勝手に思っていると、ユウキが唐突に声を荒げて、

「つて、そっだよクラウドッ!?!」

「?」

「クラウド、ログアウトできないのにこの定期メンテナンスの最中どうしたらいいの!?!」

「!!?!」

ユウキが慌てたようにそう言うが、

「その辺は大丈夫だと思われませう」

「!!?!」

チャドリーがフォローを割り込ませ、クラウド達の騒ぎが和らぐ。静かになったことを確認し、チャドリーは説明する。

「定期メンテナンスの間サーバーがクローズすると先程アナウンスされてましたが、心配いりません。クラウドさんのアバターはそのままその場所に残りますから。この世界に留まっても何の影響もありません」

「定期メンテナンス中、本当に俺には何の影響もないのか?」



「あるとすれば、『一切動けなくなる』くらいでしょうか。メンテナン  
ス開始直前にフィールドを歩いていたらその場で硬直してメンテナ  
ンスが終わるまで固まった状態になります。だからそうなる前に入  
力経路を遮断しているように見えるんです」

「??？」

「つまり、『寝ればいい』だけの話ですよ。『寝る』という行為が、この  
世界でのログアウトプログラムらしいので、メンテナンス中クラウド  
さんはベッドで横になって寝ていればいいんです。そうすれば、クラ  
ウドさんの意識は睡眠状態に入り、何の影響もなく過ごせるはずで  
すよ」

「十分以内に寝れると思うか？」

「方法ならありますよ」

そう軽々と言ってチャドリーは懐から手慣れた手付きで小さな翠  
玉色の玉を取り出すと、クラウドの手の上に乗せる。

そして、その小さな翠玉色の玉は水晶玉サイズにまで大きくなっ  
た。それを見ていた者達で、ティファ以外は何が起きたのかよくわか  
らず息を洩らして啞然としていた。

あの水晶玉は何なのかとかそういういった疑問は、チャドリーが簡単に  
解説してくれる。

『ふうじる』のマテリアで、レベルは星一なので『スリプル』という  
魔法が使えます。戦闘面を考えると、重要度が一番低いマテリアだっ  
たので渡さなくても良いと判断して取っておいたんですが、それで今  
日はお休みになさってください」

「」

準備のいいチャドリーにクラウドは無言のまま、回復マテリアを取  
り外すとふうじるのマテリアを代わりにはめ込んだ。

あとは、宿屋を探すだけ。

難しい話をしていたようだが、何も心配ないということがわかつ

て、ユウキは胸を撫で下ろす。

「ま、まあつまりはなににも心配ないってことだね？」

「ティファさんは平気なの？ クラウドさんと同じく人間体のアバターだけど。」

そう言われてティファも左手を振るってウィンドウを開き、表示された項目を確認してみると、

「うん、私の方にはログアウトボタンがあるみたい」

笑みを浮かべてそう言うティファ。

そのままメインメニューウィンドウを閉じると、クラウドから預けられたお金を手に、宿屋を早く探すように提案する。

「キリトは激安の宿屋の方がいい？」

「いや、ここはクラウドに甘えて少し豪華なところに泊まらせて貰おうかな？」

「あ、ボクもボクも!!」

「もう、キリト君だけでなくユウキまで」

「うふふ」

リーファが呆れているが、ユウキは賛成とでも言うかのように手を上げて跳び跳ねている。ユウキはクラウドと過ごす内に、仲間意識が更に強まったようで、遠慮というものがなくなった気がする。

やはり、彼女の性格はどこか『彼女』に似ていると感じるティファだった。あの陽気さに活発さ、きつと『彼女』が生きていたら良い友達になってくれただろうに。

なんて思うティファは皆に微笑んで、

「それじゃあ宿屋を探しに行こっか。チャドリ、案内してくれる？」

「はい！ 一番近い場所ですと、あちらを登った先に寝心地の良いベッドや豪華な部屋が用意されている宿屋があるみたいです。宿泊料は少し高いですが、クラウドさんが渡してくれたお金で十分足りるはずです」

「わかった、じゃあそこにしよう。クラウド、早く行こー！」

「ああ」

クラウドもその後を追うようになっていくが、何だか肩身が狭い調子な気分に見えた。

皆気にせず先を急ぐが、そんなクラウドは再度世界樹を見上げる。彼の青と緑が入り交じった瞳が細められ、世界樹を睨み付ける。

「」

この巨木を見ていると、どうしてもあの『神羅の本拠地』を思い出して嫌になる。濃紺な夜空を貫くようにそこに生えている樹木は、クラウドを睥睨するかのように枝葉が揺れている。

この上に、脱出の糸口となるものがある。

すぐそこに、手が届く距離に。

なのに、

こんなにも落ち着かないのは何故だ？

その謎の胸騒ぎを胸に考えるのをやめたクラウドは体を前へと向き直し、皆の後を追うのだった。

◇◇◇◇◇

深夜。

正確な時間帯は不明。

暖かく、湿度の高い空気が冷えている。

早朝に霧が発生し始めているところを見ると、街はすっかり静まり返っている。どのプレイヤーもログアウトし、その依り代であるアバ

ター達も宿屋や高額な値段を出して自分だけの家を購入し、そこにあるベッドの中で丸まっていることだろう。

クラウドもその一人。

キリト達と共に少しお高い宿屋というかホテルに寝泊まりすることになり、男子グループと女子グループに別れて部屋を借りた。

ナビゲーション・ピクシーであるユイは、どうしてもキリトと離れるのは嫌らしく、子供だからいっかということでも男子側の部屋に泊まることとなった。

夜が更け、皆がログアウトし自分はこの世界から出られないから『寝る』というアクションをしてログアウトシステムのスキランを誤魔化すため、チャドリーに渡された『ふうじる』のマテリアを使用して『スリプル』の魔法を自身にかける。

クラウドのアバターは睡眠状態になり、意識は闇の中へと沈んでいった。

キリト達は今頃、彼らの現実世界で目を覚まし、二度寝をしていると思われる。ナレーション曰く、キリト達の世界は現在午前四時らしいので、起きるには早すぎる時間帯だ。

仮想空間で酷使続けた頭脳を休ませるため、現実世界で何の影響も与えず脳を眠らせている。

故に。

この世界に意識を持ったプレイヤーは誰もいない。

ただ一人を除いて。

「」

スウスウという、小さな吐息。

クラウドは横向きになりながら、ベッドで眠っている。

余談だが、いびき防止のための雑学をここで説明しておく、寝る姿勢に気を付けなければいびきをかかないと言われている。上向きの姿勢で寝ると、人にもよるが口が開いて舌が喉の奥へ落ち込んでしまうため、気道が圧迫されていびきが出てしまう。

しかし、クラウドみたいに横向きに寝ると、眠っている間は気道が押しつぶされず、呼吸した空気が気道をすんなりと通っていくため、いびきは発生しないとされる。

ごろんと横向きになって手足を開いたままの彼は、今までの疲れを癒すために、最大限に脱力している。

脳は一時的に休眠状態に入り、視覚も聴覚も機能を停止している。完全に眠っている、アルヴヘイム最高の治癒魔法が使える者がここにいたら彼に太鼓判を押し上げてても良いくらいだ。

だというのに。

不意に、

ギイ

という、木製の扉か何かが軋むような音が聞こえた瞬間、クラウドの規則的な寝息が止まった。

「」

おかしい。

最初に浮かんだ言葉はそれだった。

自分は今、定期メンテナンスのためサーバーがクローズしている最中、自分は寝ていなければ動けない状態になるはずではなかったか。だから眠っている状態であれば、長時間眠るといふ動作に固定されて定期メンテナンスが行われるはずだ。

しかし、

？物音が聞こえただけで彼の瞼は開き、呼吸も意識的なものになる。

「」

瞼を開けた瞬間、目に入ってきた光景はよくある光景。

クラウド達がいる街はとにかく明るかった。リーファが言ってい

だが、街のあちこちにある鉱物燈がまるで星屑みたいに光を放ち、街を照らしていた。

夜になってもその灯りは消えることはなく、サーバーをクローズしてても継続していた。

よって、真正面の窓の外に光る鉱物燈があれば、クラウド達が泊まっている部屋の中まで問答無用で入ってくるのだ。

遮光カーテンによって締め切っても、光は完全には消せない。

その僅かな光によって、眠っているキリト達の姿が薄く照らされている。薄暗闇の中、上向きに寝ているキリトの隣に、小妖精のユイが肩の上近くで寝転がっている。

チャドリーはというと、クラウドのベッドの枕元で座るように身を寄せて眠っている。サイボーグだからか、ロボットの感覚で眠らないという使命感でもあるのだろうか？

しかし、それよりもこの状況についてまず把握しよう。

自分は何故か定期メンテナンス中でサーバーがクローズしているはずなのに、目を開けている。

そして、謎の物音まで耳に聞こえてきた。

クラウドは自分の体が動くことを確認すると、壁に立て掛けていたバスターソードへと手を伸ばし、背中に背負う。薄暗闇の中でわずかに警戒しながら、部屋の外へと出ると、目の前にある階段の下側から足音が聞こえてきた。

これは昇ってくる音ではない、次第に小さくなっていることから、降りている最中ということだ。

クラウドはその音を辿って下の階を見渡せる柵の方まで近付いて覗き見ると、誰かがホテルから出ていく姿が見えた。

その姿には、見覚えがあった。

だってその人は、彼にとつての英雄なのだから。

「ッ!？」

クラウドはその姿を確認した瞬間自分の目を疑ったが、その前にそ

の後を追うように階段を駆け降りる。

定期メンテナンスとか、サーバークローズ中とか、そんなことすら凌駕する現象が起きていることだけは理解したクラウドは急いで『そいつ』の後を追う。

ホテルの出入口である、豪華なデザインをした両開きドアを乱暴な手付きで強く手を当てて押し開ける。

そこは霧の世界だった。

夜と朝、その境目の時間帯。

朝日が顔を覗かせる直前で、太陽の頭部分が地平線から現れ始めている。朝日がキラキラと光る鉱物燈を反射させて建物の輪郭をわずかに確かなものにさせる。

その中に、一人の人影が見えた気がした。

「ッ!? ま、待てッ!!」

この世界の中心都市、アルン市街の尖塔群の間をいくつも駆け抜け、その人影を追う。

延々と続く建物をいくら駆け抜けても人は一人もいない。なのに、その人影だけはハッキリとクラウドの瞳に映っては消えを繰り返し、姿を眩ませている。

どこ行った!?! と思った時には人影が物陰に隠れるように通り過ぎる姿が確認できる。それを確認したら即追う。それをどんどん繰り返していく内に、都市とはかけ離れた風景の場所にたどり着いた。

## 『世界樹』

### その『根元』

世界樹のもの凄く太い幹を倒れないように地面から支えている根元付近までやって来たクラウドは、

「どうして……!?」

疑問を投げ掛けた。  
根元というかもはや壁にしか見えない世界樹の一部分に、『そいつ』は立っていた。

クラウドの数十倍のかさの妖精騎士の彫像が二体並べられて、その二体の像の間に、派手な装飾品を施された大きな『門』が聳え立っている。

そして、その前に『そいつ』はいる。

クラウドは再度問いかけるように、『そいつ』に言葉を投げつける。

「『ザックス』……ッ!？」

◇◇◇◇◇

最初に感じたのは、むしろ驚きよりも戸惑いだった。

忘れるはずもない、尊敬していた親友の姿が目の前にある。横姿で、横顔しか見えなかったが、あの左頬にある『バツテン印の傷跡』は間違いなく本物のソルジャー・クラス1stの『ザックス』本人だ。

クラウドは一瞬、それを本人だと認識することが出来なかった。

一瞬前と一瞬後。

たったその間の時間だけでもあまりの現象に思考を混乱させた。

目の前に、死んだはずの、『親友』が、『英雄』が、いる。

彼は何も言わず、ただ硬直したように突っ立って、顔を上に上げたままにいる。クラウドがそこにいるにも拘わらず、彼は見向きもしない。

会いたかったとかそんな感動的な事を言おうとしたけど、言えない。

言えるはずもない。

だって、彼は、

……



「」

ある程度の時間が経った後、一つの事に気が付いた。

地平線から昇ってくる朝日が止まっていた。

周りも時間が止まったかのように静まり返っている。

元々この時間帯は、定期メンテナンスのためサーバーがクローズしていて、自分は今眠っている状態で一切動けないはず。

なのに、動いている。

それは、

つまり、

「夢、か」

『さあて、どうだろうか？』

霧にかかった大きな門の前に立っている彼の声が聞こえてきた。

その声の前に向いてみると、彼は変わらず上を見上げている。両手を腰に当てて、背筋を伸ばし、顎を上げてただ一直線に視線を固定させている。

クラウドもそれを追うように視線を上にするが、四方八方に向けて伸びている無数の世界樹の枝くらいしかない。

枝が短いものもあれば長いものもある。

葉が多く生えているものもあれば少ないものもある。

どこからどう見てもなんてことのない風景を見上げているザックスは、クラウドに言う。

『クラウド』

「？」

『頼みがあるんだ』

そう言う彼はそれでもクラウドの方を見ない。眉間に皺を寄せ、真剣な眼差しで世界樹を見上げながら彼は言う。

『あそこに、一人の【女の子】が閉じ込められてるんだ』

「!？」

『その子は、お前もよく知っている子。前の世界、剣の世界と一緒に戦った子だ』

何となくだ。

根拠なんて何もないけど、それが一体誰なのかクラウドにもわかってきた。

そして、全ての辻褄も。

あの世界、ソードアート・オンラインで共に戦った女の子と言えば、『彼女』しかいない。一度だけでなく二度までも復活したあの怪物と一緒に倒した、可憐ながらも頼りがいがある強い少女。

ザックスが何故そんなことを言ってきたのかはわからない。

何故『彼女』の存在を知っているのかさえもわからない。

そもそも何故ここに存在しているのかすら、わからない。

だから、

だからこそ、

青年はようやくこちらに顔を向けて、指を上を指してこう呟いていた。

『あの子。当たり前前の空の上で、今も泣いている』

「!」

『だからさ、クラウド』

彼はその為だけにここにやって来たに違いないと、確信を持てた。

暗い闇の中に覆われている少女を照らし出すような明るい声で、それでいて真剣な眼差しをしてクラウドに向けてこう言ったのだ。

『その子を救ってやってくれ。お前の仲間達と共に』

『俺の誇り、夢・全てを託したお前にしか、頼めない』

『頼んだぞ、クラウド』

◇◇◇◇◇

バチンツ!! と。

目の前で火花のようなものが散ったかと思ったら、何もかも全て元通りになっていた。

ベッドの上に寝転がり、そこで目を覚ました。飛び起きるように起き上がると、即座に周囲を見渡す。

一見してみると、何も変わってないように見えたが、一つだけさつきと違う部分があった。

横のベッドで寝ていたはずの、キリトがいないのだ。

「クラウドツ!!」

朝っぱら いや、おそらくもう昼か。

目が覚めた瞬間、寝泊まりしていたホテルの一室の扉が向こうから思い切り開かれる。

奥からやって来たのは、ティファとユウキだった。

二人ともどうも慌てたような様子だった。そのまま他の客のことなど気にせず二人は声を荒げてクラウドに言う。

「大変なの! キリトがツ!!」

「?」

ティファが声を詰まらせるが、ユウキが続けて言う。

「キリトがたった一人で、グランド・クエストに行っちゃったッ!!」  
「!?」

驚愕したクラウドは、先程の出来事を思い出した。

結局、夢だったのかどうかはわからないが、何にしてもキリトがたった一人でグランド・クエストに挑む理由は一つだけ。

彼の大切な人を救うためだ。

それを聞いたクラウドは壁に立て掛けておいたバスターソードを背負い、ダツ!! と勢いよく二人の間を追い抜いて階段を駆け降りていく。

「っ!? クラウド!?!」

「ちよつと待ってよクラウドッ!?!」

バスターソードのグリップを掴みながら駆け降りる様子を見たティファとユウキはその後を追うようになってくる。

背中に背負うというより、もはや掴み持っているバスターソードは、いつでも戦う準備が出来ているという意志が表れている。

剣を持ちながら駆けていく方角には、グランド・クエストの開始地点である門がある。何をしに行くのかは明白だった。想像するなどという方が難しかった。

前にユウキから聞いたからもう知っているが、グランド・クエストはクリア不可能とまで言われている難易度のダンジョンだ。そこにたった一人で挑むなんて無謀すぎる。

クラウドは、先程夢の中に出てきた親友の言葉を思い出しながら、目的地となるグランド・クエストの開始地点へひたすら駆ける。

同時に、手に持っているバスターソードを強く握りしめながら誓う。

（“俺がお前の生きた証”



約束は守るぞザツクスツ!!）

## 第15章

二部屋取る余裕があつた故に、寝心地のいいベッドもあつてかよく寝れた気がする。

アバター、は。

だが、現実の方はどうかと言われれば、そうでもない。

愛した人が二重の鎖により囚われている。

一つはこの世界に、もう一つは現実世界に。

そう思うと、眠ろうにも眠れなかった。

この世界では恐らく今は世界樹の上で鳥籠の中に拘束されているが、現実では頭をすっぽりと固定している殺人マシーン、『ナーヴギア』が未だに彼女の頭を覆っているので現実世界にまだ帰還できていない。

アスナ。

本名、結城明日奈。

現実世界における彼女の父の部下にあたる「須郷伸之」という、見た目はどこにでもいそうなサラリーマンだが、中身はクソ野郎だった。

奴のせいで、彼女はまだ帰還出来ていない。

恐らく奴が、SAOがクリアされログアウト処理が始まった途端、アスナを含む三百名近くのプレイヤーの意識を現実世界ではなくALOに移動させたのだと思われる。目的の詳細は具体的には聞いていないが、SAOを開発した『アーガス』は解散したが、そのサーバーを維持するため委託されたのが『レクト』のフルダイブ技術研究部門、つまり奴の部署だ。

今回の事件の裏には必ずアイツが関わっているに違いない。

そして奴の手によって、アスナの命は今や手玉に取られている。

アスナの意識が現実世界にない今、意思確認は取れない故に法的な入籍手段はないが、書類上は奴は結城家の養子に入ることになる。

この状況を利用し、須郷はアスナを手に入れ、そして今もアスナと

同じように昏睡状態の S A O プレイヤー達を使って何か良からぬことを企んでいるに違いない。

それを止めるために、ようやく世界樹のある街『アルン』までやって来たのだ。

スプリガンのキリトとして目覚めた彼は、隣にいるクラウドを見る。

「」

小さな寝息を立てて今も眠っている。

定期メンテナンスが終わっても、彼は眠りにつくと意外と起きない体質なのかもしれない。そこはほんの少しだけ自分と似ている気がする。

その枕元には、ユイと同じナビゲーション・ピクシーが座り込むようにして寝ていた。

話によると、彼は現実世界ではサイボーグらしく、意識だけこの世界にやって来たならナビゲーション・ピクシーの姿になれたとのこと。

こんなにも人間みたいに話せるサイボーグが現実世界の街をうろついているなんて、想像しにくいけど、

「クラウドの世界って、どんな所なんだろうな」

異世界、というものを知った茅場も、こんな気持ちだったんだろう。だから夢見た S A O を作り出し、更にリアルにするためにプレイヤー達に命を与えた。

そう考えると、なんとなくだが今なら茅場が抱いた夢がわかる気がする。

クラウドの世界に行ってみよう。

なんてことを考えているのは、ちよつとおかしいだろうか？

しかし、聞いた限りでは面白そうな世界であることは確かだ。

見た目や形は似ていても、『星の命』という概念があり、S A O に出

てくるようなモンスターまで生息している。そして、自分達よりも更に科学が進歩しており、生活が豊かになっている。

少し危険そうだが、近未来的なファンタジー世界であることは容易に想像できる。

そんな世界に行ってみよう。

って、思ったところでどうしようもないのだが。

それに、これ以上欲張ってはいけない。既にもう仮想空間という異世界を現代社会は開発したのだから、『本物の異世界』にまで手を出すわけにはいかない。

自分達には自分達の居場所がある。

クラウドはついうっかりそこに迷い込んでしまっただけ。

ならば、彼を元の世界に帰すまでの間、一緒にパーティーを組んで良い思い出を築いていけばそれで満足だ。

忘れられぬ思い出を作る。

それでクラウド達のことには忘れない。忘れることはない。

それでもう、充分だ。

「よし。」

キリトがいつもの表情で顔を戻すと、一足先に世界樹付近を散歩してみるかということ部屋を出ると、

「あ」

「？」

丁度隣の部屋から、一人の少女が出てきていた。

シルフ族の少女リーファ。

少し泣いていたのか、目が微かに赤くなっている。

「お、おはようリーファ」

「うん、おはよう」



「どうしたの。リーファ？」

元気がなさそうにしている彼女に、キリトは優しそうな微笑みを見せて柔らかな声で訊ねた。

それを見た途端、リーファはまた両目の目尻から涙が浮かび、頬を伝って地面へと滴っていった。そんなリーファにキリトはつい罪悪感が湧くが、リーファは微笑を浮かべながら言う。

「あのね、キリト君」

「うん？」

「あたし。あたし。ッ!!」

言葉を詰まらせて言うリーファは、何でこんなことを言おうとしているのか自分でもわからないという様子で、しかしどこか誰かにこの想いを聞いてほしいという気持ちが伝わってきた。

彼女はキリトの闇色に染まった瞳を見て、想いを告げる。

「失恋、しっちゃった」

「」

それを聞いたキリトはなんて答えを返せば良いのかわからなかった。

リーファ自身も、何故こんなことを打ち明けたのかわからず、それでもこれ以上は迷惑はかけられないという思いで、自分の素直な気持ちを、話したいという欲望を、ぐっと下唇を噛み締めて押し殺した。

「ご、ごめんね。会ったばかりの人に変なこと言っちゃって。ルール違反だよ、リアルの問題をこっちに持ち込むのは」

キリトはわかっていた。

自分の素直な気持ちを押し殺していることを。

笑みを絶やさず早口でさつき言った言葉をなかつたことにしようとしているが、キリトはそんな彼女を慰めるように、優しく頭に乗せた。

そのままゆっくりと撫でて、

「向こうでもこつちでも、辛い時は泣いていいさ。ゲームだから感情を出しちやいけないうんて決まりはないよ」

「キリト君」

「それに、俺達は仲間だろ？俺なんかが慰められるかどうかはわからないけど、辛いことがあったり、悲しいことがあったら、俺で良ければ話ぐらいは聞いてやれるからさ」

「」

そう言うと、リーファは目の前にいる少年の胸の中にそつと頭を埋めた。何故そうしてくるのかわからないが、少しでも慰められているのなら良かった。

人を慰めるのに正解なんてない。

それでも、辛い気持ちを聞いてあげるだけでも、効果はあるとされている。相手の話に相槌を打つなどして共感すると、脳の前頭葉が活性化して心がリラックスする。

全てを受け入れることは難しいが、仲間が悩みを抱えているのならば、できる限りのことをしたい。

だからキリトは、慣れないながらもキリトなりのやり方でリーファを慰めた。

二人は立ったまま、しばらくその格好を続けていたが、やがて遠くの方で時間経過を知らせる鐘の音が響いたのを機に、リーファはキリトから離れ、普段通りの笑顔を見せて言った。

「もう大丈夫。ありがとう、キリト君。優しいね君は」

「その反対のことなら随分と言われ続けてきたんだけどな。今日はどうする？何なら無理せずに付き合わなくても、俺とクラウド達だけ

で何とかなると思うし」

「ううん、ここまで来たんだから。それに言ったでしょ？ 最後までついていくって」

「あはは、そうだったな」

キリトは口角を上げて柔らかな笑みを浮かべると、

「あ、そうだった」

「？」

「ユイ、いるか？」

呼び掛けに応じるように、タイミング良く二人の間に光が凝縮すると、人の形を成していき、小さな女の子ピクシーの姿が現れた。

目を擦って大あくびをして二人に挨拶する。

「ふわああああく。おはようございます。パパ、リーファさん」

「おはようユイちゃん。あのね、昨日から気になってただけど」

「はい？」

「その、ナビゲーションピクシーも夜って寝るの？ クラウドさんについていたナビピクシーはなんかサイボーグだからログアウトしてたけど、ユイちゃんはどうなの？」

「まさか、そんなことはないですよ。チャドリーさんと違って私は現実世界で肉体を持ちませんし、完全なAIですから、疑似人格プログラムとしてここに存在してきます。でも、パパがいない間は入力経路を遮断して蓄積データの整理や検証をしますから、人間の睡眠に近い行為をしていると言ってもいいかもしれません」

「じゃあ、今のおくびも？」

「はい。疑似人格プログラムが用意したアクションの一つで、というよりも人間観察を元に再現したアクションなので、いつも近くにいるパパが平均八秒くらい起きたあとにあくびをするので——」

「余計なことと言わんでよろしい」

居眠りが趣味だということをバラされたくなかったキリトは人差し指で軽くこつんと頭を突付くと、女子グループの他のメンバーはどうしてるのか訊ねる。

「そういうえば、ティファとユウキは？」

「まだ二人ともログインしてないよ。寝る前に聞いた話だと、二人とも現実世界の方で事情があるとかで、定期メンテナンスが終わっても、その一時間後くらいに入ってくるって」

「そっか」

それだけを聞くと、キリトはウィンドウを広げて操作し、背中に大剣を背負うと、

「さてそれじゃ、三人が起きるまで散歩でもしようぜ」  
「うん！」

リーファはその提案に賛成し、腰に愛刀を吊るした。

二人はそのままホテルを出て、しばらくの間散歩を楽しむことにした。

◇◇◇◇◇

メデイキュボイド

フルダイブ型VR技術を転用した医療用のマシン。その試作一号機に初めて接続した日のことは良く覚えている。

自分は今、不治の病と言われている病気に侵されていて、自由に外には出歩けない身だ。

多剤耐性HIV感染によるAIDS発祥から二年、身体はまだ自由に動かせている。

「はあ」

病院には入院患者のためのお風呂場がある。

その中でも、特に特別な風呂が用意された部屋がある。

バイオクリーンルーム。

室内は細菌やウイルスが外部より遥かに少ないため、AIDS患者が何より恐れねばならない日和見感染のリスクを大幅に低減できるということになる。

その部屋にはとある条件を呑むことだったが、たった一つ。メデイキュボイド被験者となること。

一般病棟の個室に入院するよりも遥かに延命出来る時間が増えるため、ユウキはその条件に合意した。

彼女には姉がいたのだが、数ヶ月前に他界した。

そしてまだ、自分は生きている。

姉である藍子が、妹である自分を優先してクリーンルームを譲ってくれたため、自分は彼女よりも遥かに延命出来る結果となった。

結果、病状が悪化した姉は亡くなってしまった。

今もこうして、暖かいお湯に浸かることが出来るのは姉のおかげ。そして、奇跡的に彼女の病状は回復傾向にあるとのこと。

無理をせずに治療に専念すれば、いつかは治ると主治医に言われた。

ただ、

その「いつか」がどれくらいになるのかわからない。

推定でも、二十年。

それ以上は彼女はメデイキュボイドに接続していないといけない。

「治るか」

丸くて大きなお風呂の床は丸い縁に沿ったシンプルなデザインで、クリーンルーム故にお湯は温泉みたいに白く濁ったりもせず、底の底まですっけすけだった。

介護用のお風呂に浸かりながら呟くユウキは、一度シャワーを浴びると、淡い色のタオルで身体を拭いてもう一枚のタオルで体に巻き、殺菌消毒された患者衣に着替えて、抗ウイルスカーテンを開けると、そこには様々な機械が取り付けられたベッドがあった。

背の高いもの、低いもの、シンプルな四角形、複雑な形をしたものが混在している部屋の中央のジェルベッドに、ユウキは仰向けに寝転がる。

青いジェルに沈む感覚はもう慣れたものだ。やたらと消毒液の匂いが鼻につくのも、違和感を感じなくなるくらい慣れてしまっていた。

無菌室と言われても、目に見えないから本当にそんなものが存在するのかもわからない。

とにかくわかつているのは、自分はまだ生きているということだけだ。

姉から引き継いだ想い、『スリーピング・ナイツ』というパーティーのリーダーを引き受けて、『紺野木綿季』はユウキというアバターを持って今も仮想世界に降り立っている。

「」

現在、彼女には家族と呼べるものは誰もいない。  
天涯孤独。

故に寂しい想いをしていると思う人も多いかもしれない。

確かに、まだ病気が発生する前、小学校に通っていた頃は仲の良い友達がたくさんいた。教室で机をくっつけ合って、わいわい騒ぎながら食べる給食の時間が待ち遠しかった。

けれど、

ユウキがHIVキャリアであるという噂が広まった瞬間に、その賑やかな机は崩れ去った。

不治の病にかかった。

もう治らない。

生きている意味なんかない。

「昔はそんなことを思ったことがあったなあ」

生きている、意味。

一年半ほど前までは父親と母親を悲しませたくないからという理由だけでいくらでも生きる勇気が湧いてきた。どんなに辛いことがあっても、両親と姉の前では元気でいられた。

しかし、そんな両親も姉も、もういない。

たった一人ぼっちになってしまつて、この先に生き続ける価値はあるのか、機械に頼らないと生命を維持出来ない自分が生きていて良いことがあるのかと、思ったことはある。

何を残すこともなく、何かをやることもなく、生きている意味はあるのか、と。

だが、姉の残した『スリーピング・ナイツ』。

託された想いだけは無駄にはしたくなかつた。

『スリーピング・ナイツ』は、『セリン・ガーデン』というバーチャル・ホスピスで知り合った重病患者たちで結成したギルド。姉と共に立ち上げたギルドで、彼らと友情を深め合う内に、また生きる勇気が湧いてきた。

ALOでの冒険も凄く楽しいし、生きることが諦めてはいけないということも学んだ。

姉が他界して以降も、その想いだけは捨てずみんなで攻略し合つた。

そんな時だった。

妖精達が翅を広げて羽ばたく空から、

『人間の姿をした男性』が落ちてきたのは。

「本当、あの時は驚いたなあ」

いつもはパーティーで行動する中、たまたま一人でフィールドを出

歩いていたところ、突然目の前に何かが落下してきた。

あと一歩進んでいたら、自分も巻き込まれていたというくらいの距離に『それ』は落ちてきた。

謎だ。

意味不明だ。

『それ』は見た目はどっからどう見ても人間で、それでいて頭がやたらとツンツンと尖っている。しかし、顔は凄くイケメンだった。目を閉じていてもわかるくらいに整っていた。

そして服装は、見たこともないデザインだった。少なくともALOでは見たこともない。

何にせよ、落ちてきて無事であるはずがない。そう思ったユウキは必死に大丈夫かどうかの確認の声をかけていたら。

ピクン、と男性の手にはめられている軍用手袋の指先が動き、とても綺麗な青色の瞳が長い長い睫毛が生えた瞼の隙間から、カーテンでも開くように現れた。男性のその白い肌に青と緑を少し含ませたようなオーロラ色の瞳が、ユウキにはとても綺麗に映って、何だかお人形めいた印象があった。

目を見開いた瞬間にユウキを視界にいれた男性は慌てたように起き上がり、かつこいいけれど少し怯えてるのか震えた唇で誰なのか聞いてきた。

その姿を見て、ユウキはとにかくほっとけなかった。

一緒にいたら楽しいことがあるかも、と思ったのもあるが、その戸惑う姿にほっとけなかった自分がいたのだ。

そしたらまさか、

「異世界からやって来たなんて、今でも信じられないよ」

これだから生きること諦められない。

こんなにもこの世は楽しいことで満ち溢れているんだから。

クラウドについて行って良かったと思えた。

また生きる意味を与えてくれるかも、と思えたから。



「よー。」

そうしてユウキはメデイキュボイドをガコンツ！ と頭に装着し、  
今日も彼と新しい冒険を楽しむために、仮想世界に飛び立つ。

「リンク・スタート!!」

◇◇◇◇◇

ティファは一度店に戻っていた。

『エッジ』という、大都市ミッドガルがメテオにより破壊された際の被害が甚大だったため、ミッドガルに寄り添う形で新しくできた街。

そこにまた新しく、『セブンスヘブン』というバーを建てて、彼女とクラウドの住居兼拠点としている。元々はミッドガルの七番街スラムに存在していた店だったが、エッジでの経営を決めた際に新たな店として再開した。

彼女は一度店に戻ってくると、『close』という看板をかけてあるから勿論客は誰一人としていない。店の扉にも、しばらくの間お休み致しますという貼り紙を貼って客達に納得してもらっている。

しかし、店のドアを開けると。

「あ、ティファア！ お帰りなさい！」

この店には、もう二人ほど同居人がいる。

マリンとデンゼルだ。

マリンと呼ばれるバレットの娘。

昔は首もとまでしかなかった髪が、今では後ろでポニーテールを作れるくらいにまで伸ばしている。

彼女はセブンスヘブンのソファに座りながらテレビを見ていたらしく、ティファが帰ってきたとわかった途端にこっちに向かった来

た。

「クラウド、見つかった？」

最初に聞かれたのはそれだった。

ティファはなんて答えたら良いのかわからず戸惑ってしまった。

見つけたけど意識不明で仮想空間に閉じ込められています、なんて馬鹿正直に教えるという考えはなかった。

心配させたくないティファは首を振って、罪悪感を感じながらも嘘をついた。

「ごめんね、まだ見つかってない」

「そっかあ」

するとマリンは顔を俯かせてしまった。

彼女も、クラウドのことを心配しているのだろう。彼女にとってティファとクラウドは、保護者みたいなものだ。

時々、その立場が入れ替わったりする場面もあるが、基本的にマリンの面倒を見ているのはティファとクラウドだ。

仲間であり、マリンの父親であるバレットは、石油掘りにいつてるため、あまり一緒にはいられないので、マリンのことはティファに預けている。ライフストリームが使えなくなったため、不況ゆえに新たな資源を探し求める組織会社に参加し、日々地下に潜って働いているため仕方ない。

寂しい思いをさせてしまっている。

デンゼルという近い年代の友人がいても、幼い彼女には親が必要だ。

本当の親じゃなくても、寄り添ってくれるだけでいいのに、クラウド達は肝心な時にいなくなっている。

それに罪悪感を感じているティファは、悔しい気持ちを押し殺すように奥歯を噛み締めながら、苦笑いをする。

「ええと、ごめんねマリリン。実は私、もう一回クラウドを探しに行つてくるから。」

「うんわかってる」

即答。

言い切る前に返事をしたマリリンはつい背中を見せてバーの椅子に座り込んでしまう。

わかりきっていたことだった。ティファはそうやっていつもクラウドを探し回って、見つからなかったら帰ってきて一息つく。その後、また探しに行つてしまう。

店番をしようにも、マリリンは子供だから店長がいなければ店を経営することは出来ない。

出来ることがあるとすれば、配達の仕事をしているクラウドの手伝いとして伝票の整理をすることに、店に出す料理の食材の調達のためにスーパーに行つて買い物するくらいだ。

店の出入り口に残されたこの店の店長であるティファは、その冷たい空気を前にして頬をかいた。

まるで、涙が伝った跡を爪で搔いて消すように。

「ごめんねマリリン。代わりに今何か美味しいご飯準備するね」

言つてマリリンの頭を撫でると、ティファは台所に足を向けた。

「ええとエピオルニス卵と、ヒナドリスの肉があるから。」

ざつと冷蔵庫を見回して食材を確認すると、すぐにメニューを決めて必要な材料を取り出してからバーテーブルの方をちらりと見た。

「そういえば、デンゼルは？」

「まだ学校。わからない問題が解けるまで帰らないって」

「デンゼルらしいね」

二人はエッジに作られた小さな小学校に通っている。学費はバレットが払っている。だから彼は必死に地下で資源探しの仕事を頑張っている。

勿論、クラウドとティファも二人がちゃんと学校に行けるように僅かながらでも支援している。

送り迎えが出来そうな時は、ティファが車を使って送ってくれる。今回みたいには、どちらかが一人学校から帰るのが遅くなった場合、クラウドがフェンリルを使って迎えに行ったりする。

そんななんてことのない日々を送っていた彼女達だったが、ある日クラウドがあんな書き置きを残してから全部めちゃくちゃになった。

だから、ティファは何としてでも探し出して、クラウドに文句の一つや二つを言っただけでやろうと考えていた。

けれど、

事情を聞いて、納得してしまった彼女は、クラウドをこれ以上咎めることは出来なかった。

マリリンやデンゼルにはまだもう少し寂しい想いをしてしまうかもしれないが、あと一歩の所まで来ているのだ。

だから、もうちよつとだけ待っていてほしい。

水で割っためんつゆを熱し、そこに切り終えた玉ねぎとヒナドリスの鶏肉を投入した後、火をよく通した溶き卵を流し入れてかき混ぜる。

そして。

ゼクサム米という、特産品のお米を使ったライスにかき混ぜた卵を乗せて、完成。

「出来たよマリリン。セブンスヘブン特製『ふわとろ親子丼』!!」

言いながらティファは皿を持ってバーテーブルに置いた。スプーンとお水も用意し、召し上がれと言うと、マリリンは小さくいただきますま

すと手を合わせてスプーンを手に取り、そのふわとろ親子丼を一口、二口と、次々に運んでいく。

「やっぱり美味しいね、ティファの手料理って」

「うん」

「みんなで一緒に食べれたら、もっと美味しいだろうなあ」

「↓」

ティファは、美味しいけどスプーンを動かす手が段々と遅くなっていることに気付く。

震える手で、幼い少女は告げる。

「でも、仕方ないよね。二人とも忙しいし。何より、クラウドは配達屋だから、一緒にいられる時間もないし。こん、な、わがまま、言っ、ちや、ダメだよね？」

もう、涙声だった。

鼻を吸るようにして食事の手を止めてしまったマリんに、ティファは奥歯を噛み締めていた。

マリンはスラム育ちとはいえ、まだまだ子供だ。

保護者が近くにいないくて、友人がいても頼れる大人が寄り添ってあげなければならぬ。そうしないと、寂しいという感情が現れ出す。

それを耐えて、耐えて、ずっと耐えるのは一体どんな困難なことか。

「↓」

ティファはバーテーブルを迂回しマリンの隣に座ると、彼女の頭に優しく手を乗せてあげて、言う。

「そっだよ、会いたいよね」

「うん」

「なら、さっさと見つけて来なくっちゃね!!」

そう言つてティファは彼女の頭を撫でる。  
撫でながらこう尋ねる。

「ねえ? 会つたらどうしよつか?」

「みんなで一緒にご飯を食べる!!」

「その前に——」

ティファは笑つて、ウィンクして内緒話でもするかのような口調でマリんに提案する。

「帰つてきたらお説教だね!!」

「賛成ツ!! それに、溜まりに溜まった配達伝票の整理もしてもらわないとツ!!」

どんな選択をしてもクラウドに逃げ場はない状態を作り出して、お説教をする作戦を立てた二人は、互いに微笑み合つて手を合わせていた。

ティファは皿を片付け、マリンも手伝うように台所に立つて皿洗いをする。

二人はその間も微笑んでいた。

希望に満ち溢れたような風景に、どこか暖かさを感じる。

とりあえず、彼女と和解したティファは、皿洗いを終えて一通り店の掃除をして掻いた汗を流すためにシャワーを浴びると、乾いたモフモフのタオルで体を拭いて、いつもの黒服に着替えて支度を済ませると、

マリンがドアの前で待っていた。

彼女は何か言いたそうな目でティファの顔を見上げていた。

「ティファ、クラウドちゃんと帰ってくる?」

「うん。絶対に連れて帰ってくるッ!!」

ティファの言葉に、マリンはとても素直な笑みを浮かべた。ティファもその笑顔を見れて嬉しかったのか、元気のある声でマリンに言う。

「それじゃあ、また行ってくるね」

「うん!! 行ってらっしゃいッ!!」

マリンは笑みを浮かべてティファを見送った。

少女の微笑みに誓って、ティファは覚悟を決めた。

大切な仲間を、必ず救い出す。

◇◇◇◇◇

二人が目覚めたのは、ほぼ同時だった。

「あ!」

「え?」

女性グループに別れて三人で泊まったホテルの一室で、そんな声が二つ重なりあった。豪華な装飾に彩られた室内で目覚めたユウキとティファは、柔らかいベッドの上で互いに見つめ合う。

見たところ、一緒に泊まっていたリーファの姿が見えないようだが、どこかに出掛けているのだろうか。

なんにしても、あまり話して来なかった仲なので、彼女達の間に通の話題はないし、高級ホテルの一室には、何か妙な沈黙が下りていた。

しかしやがて、一人の少女がポツリと言った。

「おはようー!」

「え、あ、おはよう」

それに倣うようにティファが頷くと、ユウキがそれを機に会話を始める。

「そういうえば、ちゃんとした自己紹介がまだだったよね。ボクの名前はユウキ！ お姉さんは確かティファって呼ばれてたよね？」

「うん、ティファが私の名前だから」

「じゃあさ、これからはティファって呼んでもいい？」

「うんいいよ。その代わり、私もあなたのことをユウキって呼んでも大丈夫？」

「うん！ むしろ全然オツケー!! これからもよろしくねティファ!!」

「うん」

ティファがそこで流れを遮断してしまったため、またもや会話が止まってしまった。テンションが噛み合わなくてついていけないのだが、

一度会話をし出すと遠慮しなくなるのがユウキという人間な訳で、

「ねえねえ！ ティファって格闘家なの!？」

「え?」

「あの時クラウドをぶっ飛ばしたあれ、凄い威力だったなあ。どうやるのあれ!？」

「え、えつと、とりあえず右手に力を込めて、呼吸を整えて全身に巡っている覇気を一点に全集中させて、生命エネルギーを物理エネルギーに変換して、それを右手の指の付け根から爪先まで込めることを意識して、低い姿勢になって破壊力のある型を取って」

「うんごめん、全くわかんないや」

話を聞いている最中、ユウキの目が死んだように白く染まってい



る。複雑な技術であることはわかったが、どうも想像できそうにない。

ティファの説明に顔が歪んだようにゆらゆらとしているユウキだったが、  
バアンツ!! と。

唐突にホテルの一室の扉が勢いよく開けられる。

「ユウキ！ ティファさん!! いるツ!？」

「!？」

入ってきたのはリーファだった。

口振りからしてどうも焦っている様子だが、一体どうしたのだろうか。

リーファは口調を荒げて、

「大変なのツ!! キリト君が . . . キリト君が . . . ツ!!」

「落ちていてリーファ！ 何があったの？」

ティファが立ち上がってリーファの肩に両手を乗せると、落ち着かせるように言う。肩で呼吸してるのを見ると、相当急いで戻ってきたらしい。

少し息を整えたリーファは再度二人を見つめて、一度溜まった唾液を飲み下してから言う。

「キリト君が、一人でグランド・クエストに行っちゃったのツー!」

「!？」

その声に二人は驚愕したように目を見開き、頬に汗をひとすじ垂らした。

あの超難関のグランド・クエストに一人で挑みにいった。

何故？ 何しに？

という疑問を考える暇もなく、異常事態が起きたことだけはわかったが、あまりに信じられなくて、何か頭の後ろが痺れたようになって、上手く目の前の状況を処理できてない。

しかし、

ティファとユウキはすぐに切り替え、互いに顔を合わせると同時に頷く。

そしてそのまま部屋の外に出ていき、異常事態が発生したということを知らせるためにクラウドが眠る隣の部屋へ駆け込んで行く。

「リーファはキリトの後を追ってッ!! 私達もすぐに行くからッ!!」

「えッ!?!」

「キリト一人であそこをクリアするなんて無理だよッ!! ボク達は今からクラウドを起こしに行くから、先に行つてッ!!」

それだけを言い残し、二人は急いで隣の部屋へ駆け込むと、リーファよりも更に強力に部屋のドアをノックもせずにかけて、

「クラウドッ!!」

キリトが何故単体で挑みに行ったのかはわからないが、仲間が危険な状態になっていることだけは確かだ。

このままだと、キリトはグランド・クエストに現れるガーディアン達に串刺しにされる。

それだけはさせる訳にはいかない。

二人は何としても救うため、パーティーメンバーの中で一番頼れるクラウドに異常事態発生を知らせて。

仲間の救出に向かう。

## 第16章

「ママ」

それは突然だった。

街を歩き交う人々の合間を縫って観光を楽しんでいると、ある場所にたどり着いた。

『世界樹』

その『根本』

グラランド・クエストにいつか挑む際、場所は何処なのか確認するために様子見でやって来たわけだが、その瞬間、キリトの胸ポケットに入っていたナビゲーション・ピクシーのユイがいつになく真剣な顔をして飛び出した。

彼女は視線を固定したまま動かない。

「お、おい。どうしたんだユイ?」

意外と、グラランド・クエスト入口付近は人がいなく、誰もその異様な様子に気付いていなかった。

ナビピクシーなんてのはこの世界ではかなりレアらしく、それを連れて歩いている様子はあまり見られない。故に、ナビゲーション・ピクシーが一人で勝手に行動するような様子を見るのも当然レアだ。

キリトもリーファも突然のユイの行動に戸惑っていたが、彼女の視線につられるように上へと顔を上げる。

枝葉が揺れている。

何本も枝分かれしている世界樹の葉っぱが風に流されてサラサラとでかい音を立てている。

一見すれば普通の光景だ。

いや、世界樹なんて天を貫く樹木があること自体普通ではないのだが、この世界ではありふれた光景だろう。

三人は数秒間、何もしゃべることなく見続けていると、ユイが思わず口から溢すかのように言った。

「ママがママがいます」

「え？」

その言葉に、キリトは驚愕する。

顔を強張らせて、それは本当なのか問い詰める。

「本当かユイツ!?」

「はい！間違いないませんツ!! このプレイヤーIDは、ママのものですツ!! 座標は真っ直ぐこの上空ですツ!!」

「ツ!!」

それだけを聞くと、彼は力を込めるかのような体勢になり、勢いよくその背中から半透明な黒い翅を出現させる。

出現というより、突き生えてきたようにも見えた。

それを見た瞬間、ユイはキリトの胸ポケットに戻る。

翅を大きく広げ、次の瞬間には空気を破裂させる音と共に強風が辺りに吹き荒れた。

そして、彼の姿はそこにはなかった。

「ちょ... ちよつとキリト君!?!」

突然の行動にリーファは驚くも、彼は振り返らず凄まじい勢いで上昇していく。空気を叩きのめし、一メートル、二メートル、風圧を押し退けてどんどん飛距離を伸ばす毎にスピードが上がっていく。

まるでスペースシャトルのロケットみたいだった。点火したブースターエンジンは切れるまで飛距離を飛ばし続ける。

幹の周囲を包む厚雲を抜け、空どころか宇宙にまで飛び出しそうな勢いで上昇するキリトに、何とか追い付いてきたリーファが声を

かける。

「はあ、はあ……気を付けてキリト君ッ!! そこから先は——ッ!!」

その声が届く前に、キリトは衝撃に襲われた。  
ガントッ!! と。

突然目の前に虹色の壁が現れたかと思ったら、キリトの頭脳が激しく震える。

「ッ!?!」

「キリト君ッ!?!」

大丈夫!?! という声に返す余裕なんてなかった。

グワングワンと、揺れているのはアバターの作られた頭脳なので現実世界にはあまり影響はないが、脳が震えたキリトは頭に星が回っているようなふざけた感覚に怒りだし、突然現れた障壁を破ろうとするかのごとく、拳を何度も叩きつける。

だが、そんなアクションを起こしても、障壁はそんな彼を嘲笑うように虹色の綺麗なエフェクトを飛び散らせる。

「くそッ!! なんだよこれッ!?!」

「やめてキリト君ッ!! 無理だよ、アップデートでもうそこから先は行けなくされてるんだよッ!!」

いつの間にか同高度に達していたリーファがキリトの腕を掴んで止めながら叫んだ。

しかし彼はその腕を振り払うと、またその障壁に向かうために一度距離を取って突進していく。

「行かなきゃ・行かなきゃならないんだッ!!」

本当に彼は猪突猛進という言葉がよく似合う。

無理だと言っているのに、無駄だと言っているのに、それでも彼は力任せで何も考えず脳筋スタイルで突進していく。

その前を塞ぐものがいた。

リーファだ。

「もうやめてッ!!」

「そこをどいてくれリーファッ!!」

「嫌だッ!! どかないッ!!」

「ッ!!」

彼の身を案じての叫び。

彼女に危うく体当たりしそうな所で、キリトは正気を取り戻して急ブレーキをかける。そのまま彼女の腕に抱かれて、彼の気持ちを落ち着かせるように背中を擦る。

「キリト君がどうして焦ってるのかわからないけど、これ以上の無茶はやめて。アップデートされちゃった以上、もうこの先に行くにはグランド・クエストを挑戦する他ないんだよ」

「ッ!!」

奥歯を噛み締めながらも、肩を落とすように脱力するキリト。

そんな彼を落とさないように支えるリーファ。

その時、急上昇する前にキリトのポケットに戻っていたユイがまた飛び出してきた。

ナビゲーション・ピクシーという立場でも、その障壁は冷酷にも役目を果たし、行く手を阻む。

が、

彼女はそれよりもある可能性に気付いたかのように必死な面持ちになって虹色の障壁に両手を付き、大声で口を開いた。



半分ずつ分けたような少女が目の前に現れた時、愛する人と一緒に支えていこうと思えた女の子。

『ママッ!!』

幻聴なんかじゃない、確実にあの子の声だ。

あの時、ソードアート・オンライン時代にいなくなったはずなのに、形見だけ残して消えたはずなのに。

記憶の奥底から蘇ってくる思い出に、アスナは目尻から涙を流し、

「ユイちゃん？ ユイちゃん、なのッ!？」

掠れた声で鉄格子に近寄って下を見るも、そこにあるのは分厚い雲のみ。しかし、この先にあの少女がいると確信を持てた。

何故なら、彼女が呼び掛けてきてくれているからだ。

『ママ 私、ここにいますよ!!』

雲海の先に、いなくなったはずの愛娘がいると感じて、アスナは鉄格子をガシャンガシャンと鳴らしながら必死に自分もここにいることをアピールする。

「ユイちゃん！ 私は、私はここにだよ!!」

届くはずもない。

わかっけていても叫ばずにはいられなかった。

愛娘がいるということとは、その側には最愛の人もいるはず。

声が届いているかどうかはわからない。

なのに、

それでも声が聞こえた瞬間に希望が持てたアスナは、どうすれば彼らに自分がここにいるのか知らせられるか模索する。



「ッ!!」

せつかく目の前に、届く距離にいるのに、届かない。

悔しさに奥歯を噛み締めて、目を瞑ってしまおう。

何か、何でもいいから自分がここにいることを知らせないと。しかし、何の方法も思い付かず、焦燥に駆られてどうしたら良いのかわからないまま、更に強く奥歯を噛み締める。

そんな時だった。

また風が不意に吹いて、それに乗って見知らぬ人の声が混じって飛んできていた。

『... 想いを託せ』

「え?」

『アಂತアの誇りを、想いを、今こそ託すんだ...』

聞いたことのある声だった。

あの時、自分の誇りだけは手放すなど慰めてくれた男の人の声。その声が、今度はその誇りを託せと助言してくれていた。

今度は背後から聞こえた気がしたが、後ろを向いても勿論誰もいなかった。

しかし。

その言葉がヒントになった。

アスナはその言葉で何かを思い出し、誰にも見つからないように隠していた枕元の底にある小さな銀色のカードを手取る。

「これなら!!」

それを手に取って再び鉄格子の前まで行き、格子と格子の間から手を伸ばして、今まで希望となっていたそのカードキーを彼女は手放した。

いや、手放したのではない、託したのだ。

自分の抱いた希望を、引き継いでもらおうように、彼らのもとに届くことを信じて、何の躊躇いもなく、手に持っていたカードキーを離して雲海の底へと落とす。

「お願い、ユイちゃん。キリト君！　どうか、私の想いを受け取ってツ！！」

両手を合わせて神に祈るように、枝から溢れ落ちた葉のように宙に舞ったカードキーは、雲海の底へと落下していく。

それを見ながら、アスナはこう思った。

私の誇りや想い、どうか引き継いで、と。

◇◇◇◇◇

「くそッ!!」

相も変わらず。

リーファに言われても苛立ったように目の前の障壁を殴り付ける。破れようが破れまいが、本当は少しでも良かったのかもしれない。ただ、このどうにもならない怒りを鎮めるために、気休め程度でもいから精神を安定させるために八つ当たりをしているのだろう。

「くそ、くそッ!!」

「キリト君」

リーファは止めようにも止められなかった。

一応もうそんなことは無駄だということとは伝えた。それを理解した上であのような行動をしているのだ。

見えない障壁に自分の怒りをぶつけて、弾き返されても何度も何度も、相手が気絶するまで殴るのを止めない感覚で拳を振るい続け、し

かし虹色の障壁は水面に浮かぶ波紋のように広がっていくだけだった。

こんなところまで来たのに、くそみたいなアップデートによって阻まれて、アスナがいる牢獄に手が届かない。

この世界にやって来て二日。

たった二日に思えるが、キリトからすればもう二日経っているという感覚だった。あまりにも遅すぎる。こうしている間にも、あの須郷とかいうくそ野郎はアスナを手に入れるために縁談の話を進めていることだろう。

それだけじゃない。

今もなお意識不明のSAOプレイヤー達の意識を拉致し、良からぬことを企んでいると思うと、何とかしなければという使命感が彼の心を急かせる。

「ッ!!」

彼はついにもう我慢の限界に陥り、背中の剣で叩き斬るという、無駄でもやってみる価値はあるという希望を僅かに抱いて背中から抜き放つ。

前に。

憤怒の感情に支配されていたキリトの視界に、何か眩い光が反射して一瞬目を眩ませた。

「あれは」

いつの間にかキリトから怒りの感情は消え、頭が冷えたのか冷静にその光の正体が何なのか確かめるために、視力を少しでも良くするために目を細めて凝視する。

太陽の光に反射して、枝から溢れ落ちた葉のようにひらひらと舞い落ちてくる物の正体は、

「『カード』」

風に乗ったそれを掴まえるように、というより元から彼の手に運ばれるように、『カード』らしきものは彼の手に収まった。

それが何なのか二人も気になつたのか、ユイとリーファもキリトの隣から覗き込むようにして見てきた。

アイテム類のものだろうか、銀一色でコーティングされたカードは何の文字も彫られていない。

「クリックしても、なにもでないか」

アイテムをタップして何か表示されると思つたが、ただ指が触れる感触しかなく、何も起きなかつた。

キリト達はこれが何なのか頭を悩ませていると、ナビゲーション・ピクシーのユイが解析をするためにそのカードに触れて確かめる。

すると、彼女は目を見開いてこう言った。

「これは……パパ！　これはシステム管理用のアクセス・コードですッ

!!

!?

「ただ、これはそれだけのカードではありません。何か、『とある秘匿性の高い研究データを見るためのカードキー』であることも確認できます」

秘匿性の高い研究データというのに何か引つ掛かつたキリトだったが、それよりもそんなカードが上から落ちてきたということに焦点を当てる。

「じゃあ、これがあればGM権限が行使できるのか？」

「いえ、ゲーム内からシステムにアクセスするには、対応するコンソールが必要です。私でもシステムメニューは呼び出せません」

「でも、そんなものが理由もなく落ちてくるわけがない。これはおそらく——」

「はい。ママが私達の存在に気付いて、このカードを託したんだと思います」

そう言われて、キリトはそのカードを潰さない程度に握り締めた。握って、目を閉じて感覚を研ぎ澄ませるように胸の辺りに当てて何かを感じ取った。

（アスナ）

微かに、アスナの想いが伝わってきた気がした。

託された想い。

助けてほしいという願い。自分も希望を捨てていないという覚悟。彼女の想いを引き継いだ彼は、目を開いてリーファを見つめてこう言った。

「リーファ」

「な、なに？」

「教えてくれ、世界樹の中に通じてるっていうゲートはどこにあるんだ？」

「え!? えっと あれは、世界樹の根本にあるドームの中だけど」

「そうか」

それだけを聞くと、彼は彼女から引き継いだカードキーを胸ポケットに入れて、翅を羽ばたかせた。

その様子を見て、リーファは彼がこれから何をしようとしているのか察してすぐ止めようとする。

「で、でも無理だよ!? あそこは無限に現れてくるガーディアン達によって守られてて、今までどんな軍団でも突破できなかつたんだよ

!？」

「それでも――」

行かなきゃならないんだ。

そう言うように、彼はリーファの手を取った。

彼は心配してくれるリーファに、ここまで着いてきてくれたこと、知識を与えてくれたこと、励まされたこと、それらに対して全て感謝するよう、素直な笑顔を浮かべて言った。

「今までありがとうリーファ、ここから先は俺一人で行くよ」

「なッ!？」

「ここから先は俺の問題だ。リーファにはこれ以上迷惑はかけられない」

「な、何を言ってるの!？ それじゃクラウドさん達は!？ みんなで攻略しようって言ったのにッ!？」

「『ある人』が待っている以上、俺は急がないといけない」

「!？」  
「クラウド達には悪いけど、先に行くって伝えといてくれ。俺は何としても、『ある人』に会わなきゃならないんだ」

「キリト君」

● ● ●  
それだけを告げると、キリトはリーファの手を離し、ナビゲーション・ピクシーのユイを肩に乗せて後ろへと下がっていく。

ここでお別れだ、とでも言うかのように。

彼はまた翅を広げ、急降下するように下へと降りていく。

リーファはなにも言えず、そのまま見送ってしまったが、すぐに首を横に振り、ポニーテールを揺らして何もかもを否定する。

一人で行くなんて無茶だ。

キリトは確かに強い。

だが、どれだけ強くても、あの無限に現れるガーディアン達に太刀打ちできるわけがない。最悪、串刺しにされて終わりだ。

そんなことを思いだしたら、リーファいてもたつてもいられず、クラウド達が泊まっているホテルへと急いで引き返していく。

彼を失うわけにはいかない。

共に旅してきた仲間が無駄死にするなんて、なにも出来ないままいなくなっちゃうなんて、そんなの嫌だ。

彼女はすぐに救援を呼ぶべく、クラウド達に応援要請をしに、落下速度に合わせて勢いを乗せ、最短で真っ直ぐに高級ホテルへと目指す。

◇◇◇◇◇

二人のカップルは仲良く観光都市を楽しんでいた。

「それじゃあ、行こっか!!」

「ああ、そうだな」

どこを見渡しても幸せいっぱいの夢いっぱいのカップル、いや多分パーティーメンバーなのかもしれないが、男女二人でいるとカップルと間違われても仕方ない。

そんな中、

唐突に、

ズシン!! と。

衝撃音と共に大理石の砂塵が辺りに碎け散った。

「な、なんだ!?!」

「何かのイベント!?!」

愕然とするプレイヤー達。

しかし、落ちてきた当の本人はそんなことは一切気にせず、

「ユイ、グラウンド・クエストがあるドームへの道はわかるか?」

「はい、前方の階段を上がればすぐで——」

それを聞いた瞬間、キリトは目にも止まらぬ早さで街中を駆けていく。人々の間を縫って、助走をつけて翅を広げてグラランド・クエスト入り口まで飛んでいく。

「うわああああアツ!?!」

肩に乗っているユイは振り落とされないように必死にしがみつきながら、それでもキリトに問いかける。

「でも、いいんですかパパ?」

「今までの情報から類推すると、ゲートを突破するのはかなりの困難を伴うと思われます。リーファさんの言う通り、クラウドさん達と合流した方が」

飛びながら、キリトはユイに声だけかけて言う。

「わかってる。クラウド達には悪いとは思ってる」

「だったら——ツ!!」

「けどな、ユイ」

それを言う直前、キリトはグラランド・クエストの入り口がある階段前までやって来て、左手でユイの頭を撫でながら優しく、それでいて掠れた声で言った。

「もうあと一秒でもぐずぐずしてたら発狂しちまいそうだ。ユイだつて、早くママに会いたいだろう?」

そう言われて、迷っていたナビピクシーは真剣な表情になって、強



く頷いた。

「はい」

「だから、早く迎えに行つてやらないとな。ママもきつと、俺たちを待ってる」

「はい！」

頷くユイに、キリトは覚悟を決めてグラウンド・クエストの入り口がある場所へと目指すために、大きな階段を昇り始める。

大きな門の前に立つと、

ガシャン！ と。

門の間に立てられている騎士を象つた彫像が二体とも、手に持っている大きな剣を門へと掲げ、両者の剣をクロスさせて通せんぼするようにして、問いかけてくる。

『未だ天の高みを知らぬ者よ。王の城へ至らんと欲するか』

それは意思確認だった。

そう問われた直後、プレイヤーにその挑戦覚悟はあるのかどうかの最終チェックのためのウィンドウが開かれ、○かそれとも□かと思う以前に彼は迷いなくイエスの意思を示すボタンを押す。

意思は示された。

よつて、石像はこう語る。

『されば、そなたの双翼が天翔けるに足ることを示すが良い』

そう言った直後、門は地響きを鳴らしながら開かれていく。

その先には、闇が広がっていた。

暗くドームの形状すら掴めない。

入ってから明転するという演出なのか、その仕様はソードアート・オンラインのボス部屋を思い起こさせる。

「ユイ、行くぞ。しつかり頭を引っ込めてろよ」

「はいパパ、頑張って」

それだけを言い残し、少女はキリトの胸ポケットに身を隠す。

それを確認すると、彼はついにグランド・クエストへと足を踏み入れる。踏み入れた瞬間、予想していた通り、ドーム全体に眩い明かりが降り注ぎ、その眩しさに目を細める。

世界樹の内部だけあって、中は自然らしい根か蔦のようなものが絡み合って構成されたダンジョンだった。

周囲を見渡すと、『青い鏡』みたいなものがいくつもあつた。数えるだけでも五千はありそうだ。正確に計る余裕はないから適当にそう判断した。

そして。

その天上。

一番上に、円形の扉がキリトを見下ろしていた。形的には四枚の石板が十字を描くように分割されていて、まるで花開く寸前の蕾のようだった。

しかし、その扉が開く様子は見られない。

あそこまでたどり着かなければ、開くつもりはないということか。随分と遊ばれている気がする。

とにかく、やるべきことは決まっている。閉ざされたあのゲートの向こうに、愛する人がいるんだ。世界樹への本当の入り口。

そこを突破するために、彼は背中に背負った剣を抜き、両手で構えて大きく叫んで力を込めて飛び上がる。

「行くぞッ!!」

翅は風圧に逆らい、急上昇していく。

すると、そのタイミングを見計らったかのように。

一枚の青い鏡から、人の形をした何かが具現化した。

「ッ!？」

ドーム内に現れたのは、白い鎧を身に纏った人形。右手に武器を携え、キリトの行く手を阻むように目の前へと接近してくる。

恐らく、こいつがリーファの言っていたガーディアンだろう。

ガーディアンは世界樹を守るために、侵入してきた妖精を叩き潰すために剣を上に掲げて迫ってくる。

「どけええええええッ!!」

彼はなにも恐れなかった。

むしろ怒りを抱いて、自分の得物を振り下ろす。

両者の剣が鏝に近い所で拮抗する。

ガガガギギギ!!

と、火花を散らして互いの威力を押し合う。

そして、キリトはこのままじゃ時間を無駄にするだけだと判断し、一度力を抜いてわざと相手に剣を振り下ろさせ、キリトの持っている大剣で受け流しながら、彼の背後へと流されたガーディアンの頭を狙って、横薙ぎに一閃、薙ぎ払った。

ガーディアンの首は切り取られ、消えるのではなくその場で破裂した。

この世界の死を判断するためのエンドフレイム。それは敵も例外ではないらしい。薄紫の煙幕が舞い上がり、範囲は狭いが視界を奪われる。

「ッ!!」

その間に、新たなガーディアンが、今度は数百体現れた。

「なッ!？」

今までののはただの茶番だった、もしくは小手調べとして一体放出した、そう言われた気分だった。

「クソッ!!」

だが、負けない。

負けるわけにはいかない。

すぐそこに、愛する人が待っているんだ。

(アスナツ!!)

その人のことを思い浮かべながら、何百体もいるガーディアンに剣一本で挑んでいく。

(アスナツ!!)

翅を力いっぱい動かし、回避しては斬り、全身の重さを乗せて剣を叩き込む。鎧を引き剥がし、腕や足を切断して再起不能にさせて、どんどん上へと突き進んでいく。

(行けるッ!!)

振り下ろされる剣を回避しては斬り、回避が不可能な場合は剣で受け止めて、流して斬る。

無傷では済まなかった。

四方八方から攻めてくるガーディアン達は、問答無用でキリトの背後に回り込んで斬り込んでくる。背中を斬られた感触と共にHPバーが消費し、それでも諦めることなく突き進んでいく。

体を捻って回避し、剣で受け止められなかったらやむを得ず左手でダメージを負いながらも受け止める。奴らの攻撃力は案外小さい。

しかし、数の暴力で攻めてきているため、攻撃力が弱くても対処しきれない数に、キリトは苛立ち八つ当たりをしたいかのように破壊衝動が目覚め始めている。

「邪魔だああああッ!!」

いちいち現れてくる雑魚共に構っている暇なんてない。そう言うかのように彼は剣をぶんまわし、一気にキリトの近くにいたガーディアンどもを片付ける。

でもまだ終わらない。

空高く上がる度に数は更に増していき、キリトは更に頭に血を昇らせる。

一匹二匹と、切り崩して突き進み、ちょうど良く三匹が重なりあつた所を剣でまとめて貫き、絶命させる。

あと少しだ。

あと少しで、天上へと手が届く。

何体も現れる敵を無双し、手を伸ばしてリング型のゲートへと手を伸ばす。

その瞬間。

あと数メートルというところで、手を伸ばしていた左手に、何か黄色い細い線が突き刺さっていた。

「ッ!?!」

それは、『矢』だった。

光を纏った矢だった。

それに気付き振り返ると、獲物を仕留めるべく配置されたガーディアン達が、白銀の弓矢を構えてこちらに向けていた。

ガーディアン達は黄金の矢束を引き、空飛ぶ鳥を撃ち落とすかの如く、キリト目掛けて、

一斉に矢を放つ。

下全方向からの攻撃。

避けられない、とわかつていても、彼はゲートを目指して左手を伸ばす。突き刺された矢のことなど気にせず、あと数センチでゲートに触れられる。

だから必死に手を伸ばす。  
が、

「ガハッ!？」

一本の矢が背中を直撃した瞬間、体勢が崩れ、伸ばしていた左手も止まる。

HPバーを見ると、もうあとわずかしかない。  
次々に放たれる矢に射たれると感じた彼は、

（ごめん、アスナ）

愛する人を思い浮かべて、目を閉じてしまう。

あと少しだったのに、

手が届く距離まで来たのにッ!!

ここまでか。

「

大量の矢が迫ってくる。

そして、光が吹き荒れた。

キリトの五感が、消えてなくなろうと瞬間。

「てやああああッ!!」

光を飛ばすように、嵐が吹き荒れた。

五感が戻りつつあるキリトは、見に覚えのある光景に息を呑んだ。

かつて、アインクラッドで出会ったビーストテイマーの少女が持っていた、使い魔を復活させるアイテムを奪おうと企んでいた連中をたった一撃で吹き飛ばした技。

画竜点睛。

竜巻を引き起こし、敵全体が放った攻撃を相殺させる。

それを引き起こした青年が、キリトを守るように空中に立っていた。

「ク、クラウドッ?!」

「ッ!!」

キリトの呼び声に、彼は舌打ちして応える。

現在、命を刈り取ろうとするガーディアン達に囲まれている。上を見たら、壁のように固まっているガーディアンもいる。あれでは突破は不可能だ。

よって、クラウドの答えは決まっていた。

そのために、クラウドは短時間で位置を確認する。

クラウドを中心に、半径十メートル以内に、数十体ものガーディアンが取り囲んでいる。

入り口まで戻る距離は、なんとかなる。

それを確認した途端、彼の青い瞳孔が拡縮する。

そして、『ソルジャー』としての身体能力が発動する。

「一旦引くぞッ!!」

「え!?!」

返事を待つ余裕はない。

彼はキリトの襟を掴むと、片足の爪先を空気に押し付け、思いつ切り蹴る。風圧を操作し、方向転換を可能にし、ロケット並みの爆発力

を得た彼の体が音速の壁を突き抜け、恐るべき速度で地面に激突した。

膝を付いて、一度止まってしまった隙を逃さず、ガーディアン達は後を追うように剣や弓矢を構えて迫ってくる。

クラウドは膝を付いたまま、両手を使わず足だけ使ってクラウドチングスタートをするような体勢になると、

轟ッ!! と。

矢の雨すら蹴散らして、クラウドは砲弾のように出口に向かって駆け出した。出口まで何十メートルあっても、そんなものは彼には関係ない。

一蹴りであつという間に出口の外へと出たクラウドは、掴んでいたキリトを乱暴に降ろし、尻餅をつかせる。

「ッ!!」

尾てい骨が痛む。

痛みに関してはどうでも良かったが、なんでクラウドがあそこにしたのか聞こうとしたところに、

「クラウドッ!!」

「クラウドさん! キリト君ッ!!」

パーティーメンバーのティファとユウキ、そして先程分かれたリィファまでもやって来ていた。

痛みの悲鳴すら上げられず、地面に縫い止められた感覚のキリトの元に、クラウドは語る。

「先に謝っておく、すまない」

「は?」

バゴ! という鈍い音が響き渡った。



クラウドは鈍い感覚と共に、キリトの顔面を殴り飛ばしていた。

「え？」

むしろ、最初に驚いたのは殴られたキリト本人ではなく周囲にいたユウキ達だった。

クラウドの意外な行動に皆唾然としている。

まさか、クラウドがキリトを殴るとは思っていなかった。大剣ばかり振るっていた彼が、拳を握って顔面にダメージを与えるなんて、見たこともなかった。

ぶっ飛ばされてわけがわからないキリトは倒れ込み、呻き声を上げながら立ってクラウドを睨む。

「なにすんだよツ!？」

「勝手な行動をした罰だ」

冷静に、あっさりど。

クラウドはそう答えた。

「キリト」

そしてクラウドは続けてこう訊ねる。

まるで、初めから知っているにも拘わらず核心を突くように。

「気持ちわかるが、勝手な行動はするな。一人で挑むなんて無茶にも程がある」

「ツ!!」

キリトは血は出てないが唇を拭いながら立ち上がり、クラウドを睨み付けるとそのまま素通りし、背を向けたまま言う。

「確かにそうかもしれないけど、行かなきゃならないんだ」

背中で語り合う二人。

クラウドは断片的な言葉を整理しつつ、背中越しにキリトに向かって言い放つ。

それが合図だった。

パーティー全体の均衡が崩れてしまうのは。

「キリト、お前の会いたい人って、やっぱりアスナのことなのか？」

「え？」

言うと、反応したのはリーファだった。

それを聞いた瞬間、彼女は思考は真つ白に染まって、意識が手放しそうになって、キリトとクラウドの二人を見つめながら、主にキリトを見ながら、震えた声で言う。

「え？ うそ だって、その人はッ!？」

「リーファ？」

ユウキが様子がおかしいリーファを心配していると、彼女は息を呑んで両目を限界まで見開いて、口許を手で覆って後ずさっていた。

その様子に、キリトまで心配したように声をかける。

「どうしたんだ、リーファ？」

その声を聞いて、その顔を見て、リーファは消えそうになりながらも掠れた声を絞り出した。

「お兄ちゃん、なの」

「え？」

事態を飲み込めていないクラウド達には、キリトとリーファの関係性がよくわからない。

だが、唐突に理解した。

二人には、複雑な関係性があるのだと。

それを聞いたキリトは愕然とした表情で、彼女を見ていた。そして、彼は思い当たる人物の名前を呼ぶ。

「スグ？」

その声を聞いてもう耐えられなかった。

リーファは吐きそうな感じで口許を押さえながら顔をそむけ、ウィンドウを開くために右手で口を押さえながら左手を振るう。

そしてそのまま、パーティーメンバーの一人だったリーファは、ALOからログアウトした。

姿を消しても、キリトは搾り出すように、名前を呼んだ。

「リーファは直葉、だったのか」

それに気付いたキリトはクラウド達を置いて、自分もログアウトする。

後に残された三人は、ただ黙って見送ることしか出来なかった。後を追おうにも、ログアウトされてしまつては不可能だ。

「クラウド」

「」

ティファとユウキはクラウドを静かに見つめるが、彼はただため息だけをつく。クラウドは近くにあったベンチに腰掛け、夕空に浮かぶ雲を眺めながらぼんやりと呟く。

「もめ事がないなら、俺の出番はない」

それに、と一息つくように。

「いつ何があるかなんてわからないんだ。話せる内に、わかり合えるまで二人にさせておいた方がいい家族の言葉なら、必ず届くはずだ」

それだけだった。

だから彼は何も心配ないように、二人が戻ってくるのを待つ。

## 第17章

「クラウド」

クラウドの先程の妙に平坦な声に、ユウキは何か気にかかった。特にクラウドは特別な何かを言ったわけではない。ただ空を見て、遠くを見つめるその瞳が無垢な幼子のように澄み渡っていた。

だが、その言葉。

そこに込められた、得体の知れない感情の渦が、ユウキの心の芯を貫いた。

クラウドは彼女達を見た。

そこにはもう、ごく普通のクールなクラウドの顔しがなく、

「すまない。少し、その辺りを散歩してくる」

「え!? ちよつ! クラウド!?!」

唐突にそう言われて戸惑うユウキだが、そんな彼女達を置き去りにして、クラウドはバスターソードを背負いながら広い通りへと消えていく。

「クラウド、いや、気をつけてね。クラウド」

思わず引き止めようとしたティファだったが、やっぱりやめた。なんとなく察したのだろう。

キリトとリーファの複雑な関係性を知って、『家族』という、クラウドにはもうない幸せを見て、複雑な感情を抱いたんだろう。

今の二人には幸せを感じる余裕はないとは思いますが、『家族』がいると知って、クラウドは羨ましそうな雰囲気を出していた。

そして、そんな家族の問題に他人が干渉していいはずがない。

二人の関係性を修復してくれることを祈って、彼は暇潰しのために

観光都市へと去っていく。



残された二人はベンチに腰掛け、長い沈黙が続いていた。問題なんて何もなかったが、気まずい雰囲気だけが漂っている。

ユウキはベンチから見える世界樹を呆然と眺めていたが、突然彼女はティファにこう話しかけた。

「ねえ、ティファ」

「? なに?」

ティファは長い沈黙の中ようやく話しかけてきてくれたユウキに首を傾げるが、彼女は神妙な面持ちで、しかしどこか罪悪感を感じながらもこう質問する。

「現実のことを聞いちやうのはダメなことだけだし、クラウドってどういう人なの?」

本当に聞いてはいけないことだった。

仮想世界では本来の自分とは違ったアバターの姿を借りて動いている。その理由は、特定されなかったためだ。ネットが普及したこの情報社会、顔を晒すのはどれほどのリスクがあるか。そこに、個人情報のことを誰かに盗み聞きなんかでもされたりしたら、自分の家を特定されてしまう恐れがある。

だから皆、現実の自分とは程遠い自分を作り出す。

聞いた瞬間、空白染みた静寂が辺りを包む。

しかし、どうしても気になってしまった。あのクラウドが抱いていた複雑な感情の渦に引き込まれたユウキは、それが気になって仕方なかった。

それに、クラウドとティファは別世界の住人。

クラウド自身もキリト達の世界の住人が自分達の世界には干渉できないと判断して、自分の世界のことを自ら打ち明けた。

彼は別に、そういったことには特に気にしない性格なのだろう。しかし、

ユウキはそれでも罪悪感はもちろんあった。仲間が抱えている悩み。

それを少しでも払拭してあげたいという思いからつい違反行為をしてしまった自分に、正直腹が立っていた。

だが、

意外にもティファはそんなユウキに微笑んで、世界樹がある方向を見ながら語り出す。

「クラウドは昔は、全部自分で抱えちゃう所があったから、ほっとけなかつたの」

ティファはユウキにクラウドの幼少時代、何でも屋時代のことを話した。

クラウドの世界のことは要所のみしか聞いてないが大体は理解した。『星の命』のこと、『英雄と呼ばれた怪物』のこと、それらのことは全てクラウドが自ら全て打ち明けた。

だが、クラウド本人のことはあまり良くわかっていなかった。

歩んできた人生については聞いても、クラウド本人についてはまだわかっていない部分もある。

だから、ティファはユウキにクラウドのことについて語って聞かせる。本人の了承もなく語るなど、本当はいけないことだが、クラウドの一番の理解者である彼女は彼なら許してくれると思って話す。

「クラウドって、案外正直なんだよね。人見知りな所もあるけど、本当は仲間想いで、結構皆を心配しているところもあるんだよ」

一緒にブラック企業の卑劣な労働に革命を起こそうと思ってテロ

リスト的なことをしていた時、彼はとにかく金のことしか考えていなかった。

何でも屋、という個人事業を営む立場から、私情は挟まず、星の命だとか誰かを犠牲にするかとか、そんなことは一切気にしなかった。言い方は悪いが、その時の彼はまさに言われたことを聞くだけの口ポットのようにも見えた。ただ、それは何でも屋という立場からのやる気の見せ方だと思う。

金をもらった以上、依頼主の頼みは全て引き受ける。それ以上のことは何も聞かないし干渉致しません、というプロ意識で事業を営んでいた。

しかし、

「その時のクラウドは本当のクラウドじゃなくてね、人体実験によって埋め込まれた『細胞』の効果によって、自分にとって都合の良い人格を作り出したクラウドだったんだ」

クラウドは、元々ただの一般兵だった。

本当はソルジャーになりたかったのに、『メンタルが弱い』のと『ネガティブ思考』という欠点によってソルジャー適正がなく、ただの兵士として神羅に所属していた。

そんな自分が恥ずかしくて、誰にも言えず、いつもマスクを被って姿を隠していた。自分のみっともない姿を見せたくなくなっただろう、あれだけソルジャーになる、世間が褒め称える英雄になることを夢見て都会に行ったのに、ただの兵士にしかねれず、良い仕事も貰えなくて精神面もどんどん疲弊していった。

そんなある日、彼はある任務で故郷に帰ることになった。

無論、その時は彼は内心めちやくちや嫌だった。

だって、あれだけソルジャーになるってティファに宣言したのに、なれなかったなんて言えるはずもなかった。

所謂、皆に俳優などといった芸能人に絶対になってやるということ宣言して、そんな夢を目指して上京し、しかし夢破れて実家に帰っ



てきてしまった感覚だろう。

それから、尊敬していた人に故郷を燃やされて、全てが崩れ去ったような感覚に至ったクラウドは、復讐心に燃え、尊敬していた人物に敵わないとわかっていても故郷と自分の親を殺されて激昂した彼は、致命傷を負いながらもセフィロスを撃退した。

しかし、その後ブラック企業である神羅に捕らえられて、五年間人体実験に使われて精神が崩壊したクラウドは、『魔晄中毒』となつてしまい、ソルジャー適正のないものに敢えて『特殊な細胞』を植え付けるという非人道的な実験に使われてしまった。

奇跡的に回復はしたが、記憶が混雑し、辻褄が合わない状態になり、そんな彼をティファはほっとけなく、側で見守ろうと思った。

「そんな時にね、まだ自分が尊敬していた人が、自分の大切なものを奪った人が生きてるってわかった時、決着をつけるために旅に出ることにしたんだ」

でも、とティファは一拍置くと、

「追いかけているつもりが、本当はその特殊細胞によって『呼ばれていた』だけだったって知った時、クラウドは自分に絶望して何もかも諦めた感じになっちゃったんだ」

旅してきた時、彼はとにかくセフィロスにまた復讐してやるとしか考えてなかった。

だが、

『リユニオン』という、特殊細胞『ジェノバ細胞』が再結合する立証実験として、サンプルであるセフィロス・コピーにされたクラウドは、ただジェノバ本体を持っているセフィロスの元に呼ばれていたと知った時、何もかも諦めたかのような表情になっていた。

それに加えて、

セフィロスは嘘の情報をクラウドに教えて、精神的に弱っていた彼

はそれをつい信じ込んでしまった。精神的に追い詰めて、世界を滅亡させるための嘘だったが、メンタルが豆腐並みに弱かった彼は本当のことだと思い込んでしまった。

その時の彼は疲れ果て、死の足音に耳を澄ませる老人のように瞳を濁らせていた。

抱え込んできたものが重くなりすぎて、押し潰されてしまったんだろう。

セフィロスに世界を滅亡させるための鍵となる『黒マテリア』を渡してしまい、星の命ともいえるライフストリーム、魔晄へと落下してしばらくの間行方不明となっていた。

奇跡的に彼を見つけたものの、重度の魔晄エネルギーを浴びすぎて、元々メンタルが弱かったせいで耐えられず、魔晄中毒になってしまった。

絶望を味わった彼は、まるで壊れたおもちゃのような動きしかできなくなった。

つまりは植物状態に近い。

「あの時のクラウドは、自分が誰なのか、自分が何処にいるのかすらわからない状態になって、私の声も届いてなかったんだ」

「え？」

「車椅子に乗って、手どころか口も目もまともに動かせない重症状態になって、私達との旅の思い出すら忘れちゃってたんだ。必死に呼び掛けても応えてくれなくて、それでもいつかは私の声が届くと信じて、一緒に旅してきた仲間達と一旦離れてクラウドに付き添ってあげてたの」

「それって」

ユウキが何かを言おうとしたが、その前にティファが続けていた。けど、と震えた声でティファ言うと、

「それでも、全然ダメだった。何も変わらず、クラウドの意識は何処か

に行つたまま戻つてこなかったの」

「」

ユウキは言葉が出なかった。

クラウドの歩んできた人生は苦難すぎて、言葉を失つてしまつていた。

ティファは希望を捨てず、徐々に体が弱つていくことがわかつていながらもクラウドを見捨てず、少しずつ不安と恐怖の闇に呑み込まれた彼に、光を与えることができるかもしれない。

そう思っていた時、彼女は真実を知った。

クラウド、本人のことを。

「ある日ね、私とクラウドは『星の血』と言われてる『ライフストーリー』と一緒に落つこちて、そこでクラウドの精神世界に迷い込んだの。そこで、苦しんでいるクラウドを救うために、少しでも良いから本当のクラウドを見つげるために精神世界を彷徨つたんだ」

今でも覚えている。

夢か幻か、幻想かはわからないが、確実にクラウドの精神に入り込んだティファと一緒に『本当のクラウド』と『事件の真実』を探し出した。

クラウド自身は怖かったかもしれない。本当の自分の向き合うのは、受け入れるのは誰だつて怖い。本当の自分は弱かった、そんな事実を知つたらと思うと、目の前の現実から目を背けたくなくなる。

けれど、

それでは前に進めないと理解したから、それをなんとかしたいとティファは願つた。

結果、現実を受け止めた彼は本当の自分を取り戻し、『クラウド・ストライフ』という人格を取り戻した。

それで彼は、最終決戦の場へと向かった。

本当の自分を受け入れて、全てに決着をつけるために。

『希望』という強い気持ちを抱いて、星を救ったのだ。

「昔、星にいる皆を救うための最後の戦いの時には、確かにあった強い気持ち。たった少ししか経ってないのに、いつの間にか忘れてしまっていた『前に進む』という『希望』。それをクラウドは、この仮想世界に来てまた取り戻したんだと思う。別世界の住人であるキリト達と出会えたこと、それにユウキと関わっているうちに、その気持ちを思い出して、だから多分クラウドはキリトとリーファがログアウトした後、**「あんなこと」**を言ったんだと思う」

ティファは先程のクラウドの発言について考察する。

家族の言葉なら、必ず届くはず。

その言葉の意味を、ティファは理解していた。

家族との問題は、必ず解決できる。

確かに、わからないことがあるのなら、何度でも良い。わかり合えるまで話し合った方が良くと思う。いつ何処で何が起きるのかわからないのだ。話せるうちに、話した方がいい。

家族の言葉なら、希望があるうちは、本当に届かないなんてことはないはずだから。

失う前に、話し合えるなんて実に素晴らしいこと。

既に両親を亡くしたクラウドとティファは、例えどんなに複雑なご家庭であっても、話し合える機会があるだけ羨ましいと思った。

故に、先程のクラウドが感じた想いを代弁するかのよう、ティファはこう告げた。

「クラウドはね、大切にして欲しいんだよ。家族と。ううん、それだけじゃなくて、仲間達一緒にいられる幸せを。一人じゃないってことを、知って欲しいんだと思う」

「だからちよつと不器用な所もあってわかりにくいけど、本当は優しいんだよ、クラウドって」

「そうなんだ」

ユウキは、僅かに微笑んでいた。

クラウドの性格を知れて満足したユウキは嬉しかった。

クラウドという、一人の人間。

彼はどんな時でも一方的に動くのではなく、仲間を大切にできる人間だった。

昔はそうだったのかもしれない、だが今は一人じゃないと気付いて、仲間と一緒にいる大切さを学び、精神的にも成長した。

キリトを殴ったのは、仲間を失いたくないからだ。

自分がいる限り、パーティーメンバーは死なせはしない、それだけは絶対嫌だった。だから相応の罰を与えた。

命の大切さを思い知らせるために、仲間という存在を思い出させるために。

既にクラウド共に一緒に世界樹まで旅してきたユウキは、クラウドのその不器用な性格に笑いながら言う。

「まあ、クラウドらしいっちゃクラウドらしいね。それで結局、クラウドの『本当の強さの秘密』ってなんなのかな？」

何気ない疑問だった。

わかりきっているはずなのに、答え合わせをしたいかのようにティファの意見を聞く。『ソルジャー』とか、そんな科学による改造強化ではなく、クラウド自身がどうやってあらゆる苦難を乗り越えたのか、その強さをどうやって手に入れたのかユウキは気になっていた。

そんな簡単すぎる疑問に、ティファはユウキの言葉を確かめて、微笑んでこう答えた。

「もちろん。『仲間を守りたいっていう思い』だよ、きつと」

過去を背負いつつも、クラウドは未来に向かって歩いていく。

その先に、絶望が待っていていようが構わない。  
大切な仲間が、幸せな未来を歩めればそれで良いのだから。



兄妹喧嘩した、のかもしれない。

キリトこと、桐ヶ谷和人は妹である桐ヶ谷直葉の部屋の扉の前で佇んでいた。

彼女に言われた言葉が、頭の中を反芻する。

『あたし、自分の心を裏切った。お兄ちゃんの好きな気持ちを裏切った』

素直に言えば、衝撃の一言だった。

直葉は和人の目を真っ直ぐに見て、『好き』という想いを素直に伝えた。

だが、

その言葉に困惑した和人はそんなこと言われても、直葉とは妹だしと言おうとしたら、

『知ってるの』

『え?』

『あたし、もう知ってるんだよ!? あたしとお兄ちゃんは、ほんとの兄妹じゃないッ!! あたしはもう、そのことを二年も前から知ってるのッ!!』

そのことを告げるのはこのタイミングではなかったはずだ。母に頼んでその事実を知らされたことを和人に告げるのは、こんな感じで八つ当たり気味に言うはずではなかった。

『お兄ちゃんが剣道やめて、あたしを避けるようになったのはずっと

そのことを知ってたからなんですよ!? あたしが本当の妹じゃないから遠ざけてたんでしょ!？」

『ち、違ッ!!』

『違わないよッ!! ならなんで今更優しくするのよッ!』

止まらない。

胸に抱えていた思いが、吐き出す度に勝手に吐き出される。妹からの言葉に、和人はどんどん言葉を失って、もはや何も言えなくなってしまうた。

口を固く閉じてしまった和人に、言葉を詰まらせながらも直葉は語る。

『あたし、お兄ちゃんが無事に帰ってきてくれた時、すごく嬉しかったんだよ。子供の頃みたいに仲良くできて、ようやくあたしを見てくれた気がして、とても幸せだった』

『こんなことなら冷たくされてたままの方が良かった。それなら、お兄ちゃんを好きだって気付くこともアスナさんのこと知って悲しくなることもお兄ちゃんの代わりとしてキリト君という人を好きになることもなかったのにッ!!』

言葉が見つからない。

何て言っているのかかわからない。言われて、何を言い返すべきなのかはわかってるのに、彼女を傷つけないようにするための言葉がわからない。

奥歯を噛み締め、自分自身の身勝手な都合で振り回したことを悔やんだ和人は、やがて固く閉ざされていた口を開いて、目を背けながらただ一言だけ告げた。

『ごめん、な』

それだけだった。

出てきた言葉はたったそれだけで、それしかないのかと言うように俯かせる直葉は、小さく『もう放つといて』と言って部屋の中へと消えていった。

彼の顔を一切見ずに、目を背けて自室の扉を乱暴に閉めた。

直葉の指摘は大体は的を射ている。

実は和人の本当の両親は物心つく前に事故死してしまったので、直葉の母、和人的には叔母となる桐ヶ谷家の夫婦に引き取られ、養子となった。

生まれて間もなく実の両親は死んでしまったので、両親に関する記憶はもうなく、故に悲しいという感情はなかったが、人との距離がわからなくなってしまうた。

両親として接してくれても、叔母と叔父だという事実には変わりない。

桐ヶ谷家には実子である直葉と変わらない愛情を注いで育てて貰ったが、まだ十歳になったばかりの頃に自身の生い立ちを知ってしまったからというもの、幼い和人に大きなショックを与えた。

その影響で、彼は疑心暗鬼に陥ってしまった。

今日の前にいる人は誰なのか、親切な人なのか、それとも酷い人なのか、そんな考えを持つようになり、所謂コミュニケーション障という状態になってしまった。

だから、直葉を意図的に避けていたわけではない。

これは単に、自分自身のハートの問題だった。人を簡単には信じられない性格は、昔のクラウドに似ているかもしれない。

だが今は、そんなことを気にしている場合ではない。

自分は、知らなかったとはいえ直葉を傷つけていた。彼女の抱いている想いに気付かず、何度もアスナへの恋心の気持ちを露にし、そして無意識に心を深く傷つけてしまっていた。

その罪悪感を感じながらも、和人はキリトとして、ある決心をする。

罪滅ぼし、ではない。

気持ち的には、恩返し、が正しいかもしれない。



世界樹の根本まで、アスナを助ける一歩手前までやって来れたのは、直葉、リーファのおかげだ。今聞く耳を持っていないであろう彼女には、何を言っても響かないだろう。

だから、彼はこの二年間で学んだことを、直葉に教えてあげる。ソードアート・オンライン時代から学んだ、言葉で伝わらない時は、剣で語り合う。

否定してくれても構わない。

それでも、ぶつかりあってこちらの想いも伝えたい。

とにかく彼は、直葉に話を聞いてもらうために、力強くノックして、ドアの向こうにいる彼女に、短くこう告げた。

「スグアルンの北側のテラスで待っている」

◇◇◇◇◇

兄は強かった。

あんなにも、怒鳴ったのに、女に涙を流せてまでとんでもなく酷い言葉を浴びせたのに、彼は落ち着いた穏やかな声で、待っていると伝えてくれた。

ドアから離れていく足音がして、隣の部屋の扉が閉じられる音も聞こえてきた。

もう、待つ準備はできていると、それだけでわかった。

(あんなにも酷いこと言ったのに、強いなあ、お兄ちゃんは)

目尻に浮かんだ涙を拭う。

心の中でそう呟きながら、ベッドで丸まっていた姿勢を正して、天井を見上げるように仰向けになりながら、アミユスフィアを装着する。

彼の覚悟。

それを理解した直葉は、彼のその覚悟を確かめるために、また仮想

世界へと意識を転送する。

「リンク・スタート」

◇◇◇◇◇◇◇◇

ログインした場所は、ログアウトした場所。つまり、世界樹のグラウンド・クエスト入り口前だ。

そこにキリトの姿は何処にもなかった。

キリトは先程現実世界で、北側にあるテラスで待っていると書いていた。

「よし」

覚悟は決まった。

リーファは翅を広げ、テラスに行こうとした。

そんな時、

「リーファちゃん!!」

「うわ!?!」

いつ現れたんだとばかりに、目の前から頼りなさそうな、それでも元気のある声が飛んでくる。

リーファと同じシルフ族で、顔見知りの少年だった。

「レ、レコン!?!」

本当にいつ現れたんだ、というか、待ち伏せしてたのではないかと、いうくらいに早く知り合いに出会って戸惑うリーファ。

ログインして目の前に知り合いがいたらそりゃびっくりする。

なんでここにいるのか訊ねようとした時、まだ聞いてもないのに

言い訳っぽく彼は勝手に話し出す。

「いやー、地下水路からシングルドがいなくなったから隙を見てサラマ  
ンダー達を毒殺して脱出してきたんだ！」

「毒殺って、アンタ」

おっかないことを平然というレコンという少年。頼りなさそうに  
見えても、案外思考回路は冷酷らしい。

彼は呆れたように見つめてくるリーファを気にせず、それよりもと  
あることに疑問を抱いたようであった。

リーファの隣だけでなく、全方向に首を動かしながら、

「そーいや、あのスプリガンの人はどうしたの？ それとあの、テ、  
ティファさん、も。」

実は彼はティファと一度会っている。

シルフ領から出る際、展望台の中央から飛び立とうとする時に、レ  
コンが転がるようにやって来た。

その時に、ティファと会ったことがある。

ティファは人間体のため、その時から二人の手によって移動の際は  
羽交い締め形式で運ばされていた。だがその前にやって来たレコン  
は、ティファの姿を見て絶句していた。ティファの息を呑むほどのそ  
の美しさに目を奪われたレコンは、顔から火が出るくらい赤く染めて  
いた。

目当ては彼女なのか、それともリーファなのか。

何にしても、ログインした瞬間から目の前にいる時点でちよつと怪  
しい。

そんなレコンの質問に、リーファは答える。

「ティファさん達は、多分その辺りを散歩してるんじゃないかな」

「そう、なんだ」

「それで私、これから行かなきゃいけないところがあるから、またねレコン」

「え!? ちょ、待ってよリーファちゃんツ!!」

手を取ろうとしたレコンをすり抜けて、彼女は待ち合わせている『彼』がいる場所へと急ぐ。

なんか下から『ティファさんどこにいるのお!?』みたいな声が聞こえてきた気がしたがきつと気のせいだ。ただの空耳だ、絶対そうだ。

翅を羽ばたかせて世界樹を迂回するように飛んでいくと、ちよつとした小さめの劇場でも開けるくらいのテラスが見えてきた。

その中心に、『黒い影』が武器を背負って立っていた。

リーファは緊張を打ち消すように深く息を吸って、八秒くらいかけて息を吐き出すと、すつと足を地面につけて彼の前へと降り立った。

「来たか」

キリトは僅かに微笑を浮かべてそう言った。

「お待たせ、キリト君」

リーファも、真剣な顔をしながらも口角を上げてそう返事した。

「スグ俺は」

「待つで」

この世界で本名を呼ぶのはマナー違反だが、幸いにもこの辺りに人は誰もいない。それなのに、キリトが自分の妹の名前を呼ぶ前に、彼女はそれを手を上げて遮り、腰につけている剣に手を伸ばしてこう言った。

「勝負しよ、お兄ちゃん」

それだけを言うと、彼女は長刀を抜き、構える。  
キリトは何かを言おうとしたみたいだが、その妹の目を見て首を縦に振って、

「いいぜ。ただし、手加減はしないからな」

笑って、キリトも背中に背負う大剣を抜き、両手で真っ直ぐに持つようにして構える。

その姿を見て、リーファはクラウドを思い出す。

彼と同じ構え。

それを見て、キリトの心情を察したリーファは、微笑みから真剣な目になって、

「こっちも全力で行くよ!!」

それと同時に、二人は地を蹴って距離を詰めるべく迫っていく。

◇◇◇◇◇◇◇◇

クラウドはティファ達と別れた後、予定が狂ってしまったので観光都市に足を運んでいた。建物を覗くと、今日は回復アイテムが安いらしいので七つほど買い込んでおく。

（何をしているんだろうな、俺は）

自分の行動に疑問を抱き、首を捻りつつ散歩を続ける。

「」

だが、すぐにその足を止めた。

ついさつき夢見た、親友からの頼み。

世界樹の上にいる女の子は一体誰なのか、そしてキリトが会いたいという人は誰なのか。

そう考えた時に、一人だけ心当たりがある人がいた。

それが、アスナだ。

彼はそれを確認したくキリトに質問してみたら、リーファの様子がおかしくなり、彼らには何か複雑な家庭環境にあるということを感じた。クラウドは無意識にも、言っではならないことを口にしてしまったような気がした。

皆で一緒に世界樹をこれから攻略するっていう時に、混乱を生み出してしまったのだ。

クラウドは勿論、悪気があつてあんな質問をしたわけではない。

しかし、どうしても罪悪感を感じる。

パーティー全体をめちゃくちゃにしてしまった責任は重い。

(どうする)

クラウドは上空を流れる雲を眺めながら、歯を食い縛った。

(俺のせいで、皆に迷惑をかけた。わかつてはいるが、でもどう動けばいいんだ)

仲直りさせる方法が思い付かない。

二人がログインした後、仲介人として仲直りさせるのもありかもしれない。

しかし、ここまで問題が肥大化するなんて思ってもみなかったクラウドには、そんな役回りが出るわけがない。

あんな心配はないみたいなのを言っておきながら、内心は心を痛めているクラウド。どうにかして、二人の仲を修復したい。

(とにかく、二人が入ってきたら謝ろう)

そうやって、また上空を見上げる。

空に浮かぶ島や雲を眺めて、解決策を急いで探し出す。

と、

「ん？」

そこで、二つの影が重なりあつてのを発見してしまった。

二人は互いの背に手を回しながら何かを話し合っていた。二人とも剣は持つておらず、しばらく見上げていると、クラウドの目の前に二つの剣が交差するような形で地面に突き刺さった。

一つは大剣、一つは長刀。

どちらも見覚えがあつた。

これは、キリトとリーファの愛刀だ。

一体何が起きているのか、クラウドは落ちてきた武器から視線を外し、やや遠くの方にいる二人を見た。

青空に重なる二人は何かを話しているようで、ソルジャーとして五感まで強化されているクラウドは、無意識に二人の会話に耳を傾けていた。

『ごめんな、スグ』

『え？』

『俺、スグに謝ろうと思って。でも言葉が出なくてせめて剣だけでも受けようと思って』

そうやって彼は、リーファの背に回している両腕に力を入れて、

『本当に、ごめんなスグ。せっかく帰ってきたのに俺、お前をちやんと見てなかった。自分のことばかり考えて、お前の言葉を聞こうとしなかった。ごめんな』

『あたし、あたしの方こそッ!!』

そう言いながら、二人はゆつくりと翅を仕舞ってふわりと地面に降り立った。クラウドがいる場所の一〇〇メートルほど先の地点に。

『俺、本当の意味では、まだあの世界から帰ってきてないんだ。終わってないんだよ、まだ。アスナが目を醒まさないと、俺は何も始められない。だから——』  
『うん』

キリトが最後まで言い切る前に、リーファは頷いていた。

もう話さなくていい、代わりに言っておけるからとでも言うかのようにはやく。

『待つてる。お兄ちゃんが、ちゃんとあたし達の家に帰ってくるその時を。あたしも手伝うから。だから説明して、あの人のことを。なんでも、この世界に来たのか』

『ああ、わかってるさ』

「」

クラウドは黙って聞いていた。

まるで透明人間になったかのように存在感を消し、二人のやり取りを見守っていた。

何があつたのかは知らないが、どうやら自分の出番はなさそうだ。

二人は互いに理解しあい、幸いにも和解できたようだった。

ならば、もう自分はいらない。

その様子を見たクラウドは微笑み、そのまま無言で一八〇度回転すると、二人の邪魔をしないようにその場を離れることにした。

のだが。

「」

「もちろん、そこにいるクラウドにもちゃんと説明してやらなきゃな」「え？」



リーファはそう言われてキリトが声をかけた方向を見る。

さりげなく放ったキリトの一言にビクツ!? と肩を震わせて立ち止まってしまったクラウドは、恐る恐る、もう一度振り返ると、

そこには、いたずら小僧のように笑う笑顔一杯のキリトと、目を点にしてキョトンとした顔のリーファがこちらを見つめていた。

どうやら、最初からバレていたようだ。

しかしクラウドは、別に何も見てないというフリをして真顔を貫いていた。

が。

やがて、リーファはゆらゆらとした足取りで目の前に落とした自分の長刀を引き抜き、先程のやり取りを見られて恥ずかしかったのか、顔を赤くさせると共に。

のしのしと恐竜が闊歩してるんじゃないかというくらい重い足音を立てて、得物を構えて急接近してきた。

## 第18章

「えーと、どういふこと？　どうなってるのこれ？」

レコン、あまり頼りなさそうな少年はグラウンド・クエスト入り口の前に集まっている人達を見て、首を傾げながらそう言った。

「えっと、この人達は何リーファちゃん？　どういう組み合わせ？」

現在目の前には、リーファ、ティファ、キリトを除いて三人ほど人数が増えている。面識がなくいつの間にかパーティーメンバーが増えていることに困惑し、しかも独特な個性を持つ面子だったので更に戸惑っている。

目の前にいる人達は一体誰なのかレコンが訊ねると、一人一人格好つけるように肩書きで自己紹介する。

「何でも屋」

「バーの店長！」

「ギルド、『スリーピング・ナイツ』のリーダーツ!!」

「パパの娘!!」

「サイボーグ兼クラウドさんのナビゲーション・ピクシー!!」

キリトとリーファ以外が、そう名乗った。

ティファはすでに彼とは面識あるのに何故名乗ったのかわからなかったが、多分ノリだろう。

その変な名乗りに、レコンはただ『へ、へえ』と引き気味に強引に理解した。

つまり、何処からどう見てもまともなパーティーメンバーではない。人間体はティファだけだと思ってたのに、まさかもう一人いるなんて思ってもみなかった。

しかも、超絶イケメンだった。

勝てる見込みがないほどだった。

もう圧倒されるほど、おそろしいほど、今まで生きてきて見たこと  
もないほど整った顔立ちをしていて、レコンは思わず口に溜まった唾  
液を飲み込むと、クラウドに恐る恐るという感じで話しかける。

「あ・あのツ!!」

「？」

唐突に声をかけられて首を傾げているクラウドに、レコンは言葉を  
なめらかに言うことができず、吃り気味に何度も言葉を繰り返して自  
己紹介をする。

「ぼ、ぼぼ・僕。レ、レコンと、言います。その・リーファちゃんと  
テ、ティファさんの・と、友達ですツ!!」

「そんなのか？」

レコンではなく、ティファにそう問いかけるクラウドに、ティファ  
は『うくん』と首を捻りながらも、渋々といった感じでゆっくりと  
首を縦に振っていた。

そんなやり取りに気付かず、レコンは今度は頼りなさげな声で、し  
かし強気な口調で早口でこう訊ねる。

「はい！　それで、貴方に質問があるんですけど!!」

「？」

「その・テ、ティファさんと、貴方は・ど、どういう関係なんですかつ

!？」

「??？」

「とぼけたって無駄ですよ!!　ティファさんと同じように妖精姿では  
なく人間体である以上、無関係とは思えません!!」

「????？」

急な質問に、クラウドの頭の中は疑問符で一杯になる。

何故そんな質問をするのか、何故彼がそんなことを気にするのか、全くわからない。

が、

とりあえず質問に答えないとまずい気がするので、素直に本当のことを言ってみた。

「俺とティファは、幼馴染みだ。昔からの知り合いで、今リアルでは一緒に働いている仕事仲間だ」

「なッ!? お、お・お・お・お・おッ!! おさな、な染みいッ!」

レコンは顔面蒼白になって、あまりにショックを受けたのか足を一歩ずつ後ずさっていく。

その後、何故か肩を落としてぶつぶつと何かを呟いていたが、現実を受け止めたのか、音もなく頬に涙が伝っていく。

そして人生の世知辛さに打ちひしがれてるように、クラウドの顔を見てガツクリと落ち込んでいた。

一体どうしたのかと聞く前に、レコンはクラウドの手をガシッと強く握って、驚く彼の顔を見ながらこう言った。

「えっと・・・何でも屋さん!!」

「クラウドだ」

「あ、えっと・・・ク、クラウドさん！ お願いがあります!!」

「？」

至近距離で叫ぶレコンは、涙声になりながらもこう言葉を続ける。

「どうか、彼女を幸せにしてあげてください!! 僕、応援してますからクボエッ!」

最後まで言い切る前に、リーファが突然介入してレコンの鳩尾に鋭い一撃を入れた。

街区圏内であるため何のダメージは与えられないが、グラント・クエストの石扉まで吹き飛ばされたレコンは背中を強打し、腹部を両手で押さえつつその場に倒れ込み、苦悶の声を上げる。

「リ、リーファちゃん……いきなり、何を……ッ!？」

「クラウドさん、ティファさん。コイツの言うことは気にしなくていいから」

思い切りレコンの腹に拳をめり込ませて吹き飛ばしたリーファは、笑顔でそう言った。

だが目は笑ってない。

そのリーファの何か裏がありそうな笑顔に苦笑を浮かべたクラウドとティファは呆気にとられて、

「あ、ああ」

「う、うん」

短くそう返事した。

一体何がなんだかかわからないが、とにかくダンジョン攻略のメンバーが揃ったことを確認し、キリトは改めてユイの顔を見て聞く。

「ユイ、それでさっきのあの戦闘で何かわかったか？」

「はい！ チャドリーさんと共に解析した結果いくつかの情報を手に入れました」

チャドリーの隣に飛んで並んでいたユイは、チャドリーの方を向き一緒に説明するように促す。

「解析の結果、あのガーディアンという鎧を着込んだモンスター達は、

ステータス的にはさほどの強さではないことが明らかになりました」  
「ですが、湧き出てくる数が異常です。ゲートへの距離が近づくに比例して出現する量が多くなり、最接近時には秒間十二体にも達していました」

「キリトさんがゲート直前まで近付いた時、天井を覆い隠すほどの数が立ち塞がっていました。数的には約二千、もしかしたらそれ以上。僕の分析では、攻略不可能な難易度に設定されていると思われれます」

チャドリーが珍しく悄気るように顔を下に向けている。いろいろ解決策を見つけ出そうとして、あらゆる解析パターンを実行しても成功パターンが見つからず、落ち込んでいる様子を見せている。

「突破できる確率はゼロに近いのか」

「はい、クラウドさんの言う通り、成功確率はほぼゼロです。仮に成功できる可能性があったとしても、良くて一パーセントくらいです。奇跡でも起こらない限り、突破は難しいと判断します。天井に立ち塞がるように固まったガーディアンに穴を空けても、すぐに追加のガーディアンがポップしてその穴を塞ぎ、通れないようにするため、その僅かな時間で生じた隙を狙うしか方法はないでしょう」

「そうか」

その説明を聞いていたキリトは首肯しつつ分析する。

「二匹一匹は弱く設定されているが、総体で来られると絶対無敵の巨大ボスとほぼ同等になるってことだな。改めて聞くと、厄介だな」

「でも、異常なのはパパとクラウドさんのスキル熟練度も同じです。チャドリーさんが言っていたように、立ち塞がるように固まったガーディアンに二人の力を合わせて突っ込めば、瞬間的な突破力で穴が空いてゲートまでたどり着ける可能性があるかもしれません」

「二」

ユイがそう言うも、口調は困り果てているようだった。色々試行錯誤して教えてくれたのも、負い目のようなものをどこかで感じているのだろうか。

奇跡という可能性。

ゼロにも百にも、それ以外の数字にもなる曖昧なものに縋るほど、彼らは追い詰められている。

キリトとクラウドの二人の戦闘力を合わせればなんとかなるかもしれないと言われたにも拘わらず、しかしやはりこちらの方が劣性であるのは明らかだ。

こちらはチャドリーとユイを外したら五人。

レコンはなんかやる気なさそうな雰囲気出してるから今のところ除外。

それに、まだいくつか問題がある。

その問題点を、ユイが指摘する。

「それに、クラウドさんとティファさんは大丈夫なんですか？」

「?」

「お二人のアバターは人間体で、妖精の姿ではないので翅がありません。天井にあるゲートまでどうやって行くんですか？」

その言葉に、キリト達はハッ! としたように二人を見つめるが、クラウド達の代わりにユウキがフォローを入れる。

「大丈夫だよ」

唐突なフォローにクラウドまで驚いているが、彼女は構わず続ける。

「だってクラウド、『ソルジャー』としての力を使えば凄い跳躍力で跳んでたじゃん! 空気を蹴って空中まで歩いてたし、クラウドなら平気でしょ?」

「まあ、な」

「それに、ティファは空を飛べなかつたとしても、ボクがティファを抱えて飛ぶから」

「え!？」

「それでガーディアン達にあまり狙われないように距離を取って、もし仮に迫ってきたらボクがティファを敵がいる方に投げ飛ばして攻撃できるようにするから。それでどう?」

問いかけるように、ユウキは首をこてんと小さく傾げてティファを見つめた。

ユウキの考えはこうだった。

クラウドはソルジャーとしての力を使って並外れた身体能力で空中移動できるから問題ないだろうが、ティファはクラウドみたいな改造強化を受けてないから空中を歩くなんてのは無理だろうから翹を持っているユウキが彼女の体を抱えて飛ぶ、という作戦だ。

つまり、敵が近付いてきたらユウキがティファを投げ飛ばして、そして殴り飛ばして攻撃し、落下する前にユウキが拾いに行くという単純で超無茶苦茶な方法だ。

しかし、ティファはその提案に首を横に振らなかった。

むしろそれを理解したティファは、首を捻りながらしばらく考え込んでいたが、選択肢はそれしかないと判断して頷く。

「うん、それで行こう。よろしくねユウキ」

「うん!! 任せてよツ!!」

方針は決まった。

攻撃方法も戦略も立てたクラウド達はキリトを見る。

キリトは何かを考え込むように目を閉じながら集中していたが、やがて目を開けて、皆の耳に届くような声で言った。

「みんな、この前はすまない」



まずは、勝手な行動をしたことを謝罪して、

「俺の勝手な都合で勝手に突っ走って、みんなに迷惑をかけた。でも、それでももう一度だけ、俺の我儘に付き合ってくれないか？　ここで無理をするよりは、もつと人数を集めるか、別の選択肢を選ぶべきなのはわかる。でももうあまり時間の猶予がないような気がするんだ。だから――」

「わかった」

「!?」

キリトの熱弁に、あつさりと答えたクラウド。

それに驚愕するキリトだが、クラウドも自分の意見を語り出す。

「俺も、世界樹の上に行かなきゃいけない理由がある。そもそも、俺も一秒でも早くいかなきゃならない。でないと、店長に怒られるからな」

そう言つて、クラウドはティファの方をチラッと一瞬見て微笑んだ。その意図を理解したティファは、ふふっと笑って片目をつぶってウインクする。

店長の了承は得られた。

そんなクラウド達に続くようにリーファもはつきりとした口調で言う。

「そうだね、もう一度頑張ってみよ！」

「リーファ」

「あたしに出来ることなら何でもする！　それと、コイツもね!!」

そう言つてリーファはあの頼りなさそうなシルフの少年の肘を掴んで引つ張り、戦闘に強引に参加させる。

「え、ええく!?」

リーファのその強引さにレコンは肩を落として情けない声を出したものの、

「頑張ろうね、レコン」

「ッ!! は、はいッ!!」

ティファが声をかけてきた瞬間にやる気を見せるように姿勢を正しくし、力強く頷いた。頼りなさを隠して、男らしくみせようと威勢を張っているだけのように見えるが、それでも共に戦う意志を見せる。

そんな彼に、ティファは微笑んでいた。

ティファが浮かべるその笑みは、子供に対する慈愛の眼差しのようなもの。微笑ましそうに彼を見るその視線は、完全にお母さんそのものである。

おそらくティファ的には、レコンという少年は、マリンやデンゼルと同じ立場として見ているんだろう。

レコンがティファに対してどう思ってるのかは知らないが、少なくともティファはレコンのことをかわいい子供として見ている。

「」

クラウドはそれを、目を細めながら見つめていた。

別に大したことではないし、気にする必要性など何処にもないのだが。

どういうわけかその光景を目にした瞬間、心の中で蠢く何とも言えない謎の負の感情に胸が圧迫され、少し軽い吐き気と倦怠感のようなものを感じ取ったような気がした。



二度目の挑戦だ。

今度は、一人じゃない。だからだろうか、低音を轟かせつつ開かれる巨大な門を前にしても、緊張というものはなかった。

仲間達がいる。

背中を任せられる人達がいる。

門が開かれ、全員が得物を抜き放つ。

ティファはユウキの左側に立ち、剣を右手で構えて左手で彼女の腰を支えつつ、翅を広げた。

それに合わせるように、クラウドとキリトも、背中にあるそれぞれの大剣を構え、妖精アバターを持つ者達は翅を広げ、それと同時に敵が一体だけ出てきた。

小手調べ。

そう言うように生み出された鎧の人形は、侵入者を撃退すべく突進してくる。

が、

その敵の持つ武器がキリト達に届くことはなかった。

「はあッ!!」

と、覇気を纏ったバスターソードが、システムを無視していきなり本気の『破暁撃』を放ったからだ。

気合いと共に放たれた衝撃波は、雷光のような速度で三本に分かれて突き進むと、敵の体が三つに分断される。

首、胴体、下半身。

容赦のない遠距離攻撃を放ったクラウドを見て、レコンは口をポカーンと開けたまま啞然としてしまう。

「な、なに？ 今の？」

見たことがない者からしたら当然そんな反応になる。

面食らったレコンが小声で呻いたが、クラウドは振り返りもしない。左肩にある肩パッドからはピリピリとした本気度だけが伝わってくる。

そして。

一体を倒したら増援を呼ぶように、世界樹の守護騎士達は不気味な雄叫びを上げて迫ってくる。

それを見たクラウドは、全員に合図するように叫ぶ。

「行くぞ!!」

「!!」  
「!!」  
「!!」

「は、はいッ!!」

決定的な射程圏まで飛んでいったクラウド達は、呆然とするレコンを放ったらかしにして、世界樹に湧き出てくる邪魔な守護騎士達を一匹残らず殲滅する。

◇◇◇◇◇◇◇◇

ドーム状のダンジョンに、爆音がいくつも炸裂する。

攻撃担当はキリトとクラウドだ。

事前の打ち合わせ通り、二人は猛スピードでゲートまで飛んでいき、敵を蹴散らしていった。キリトは翅があって飛んでいるが、クラウドはソルジャーの身体能力によって空気を蹴って跳んでいる。

現実離れした技に、レコンはさつきから驚きっぱなしだ。

他にも、ユウキとティファのコンビ力も凄かった。考えたこともない発想を、そのままやって見せていた。

「行くよティファ!!」

「うん！ お願いッ!!」

そして投げ飛ばされたティファはまず目の前に迫ってきていたガーディアンに突っ込んだ。彼女の鍛え上げられた細い腕はそのまま銀色に染め上げられた兜へと吸い込まれる。人間で言うところの目にあたる部分に、ティファの正拳突きが硬い兜を突き破って、その格闘用手袋を後頭部まで貫通させる。

そして、幸いにも奴らには妖精と同じように翅がある。故に空中に浮いているため、上手く利用すれば足場にできる。

紫の閃光をまとったエンドフレイムに包まれて四散する前に、ガーディアンを足場にしてティファは別の守護騎士を倒すべく跳躍する。

「やあッ!!」

勢いのある跳び蹴りを放って壁まで吹き飛ばした後、そのガーディアンは壁に衝突した衝撃で背骨が折れて四散する。

その次に、背後から迫ってきていたガーディアンはティファの命を奪うべく剣を横薙ぎに振りかざして来ていた。

だが、彼女はまるで空中に固定されているかのようにしてその場でバク宙をすると、ガーディアンの刃は虚空を斬り、彼女には当たらず、ティファはそのままガーディアンを地面へと蹴り落とす。

まるでオリンピック競技の走り高跳びみたいに見えた。

真横に振るわれた剣は障害となるバーで、それを飛び越えるために背面跳びをして宙返りをしてオーバーヘッドキックを叩き込んだティファに、レコンは息を呑んだ。

「す、凄い...ティファさん」

翅がなくても、空中でアクロバティックな動きで敵を倒し続けるティファに、レコンはそれしか言えなかった。

その後、自然落下して地面に落ちてしまう前に、ユウキが手を伸ばし、その指先で格闘用の籠手を装備した彼女の左腕を掴み取る。

「ナイスタイミングユウキ！」

「ティファこそ凄いよ!!」

ナイスなコンビネーションだった。

敵を倒しすぎて足場を失ったことに気付いたユウキは、翅を羽ばたかせてティファを拾いにいった。

手を取り合って互いに笑い合う二人は、またその攻撃方法を繰り返す。腕一本でティファを支え、もう片方の腕で、手に持っている剣を振るって周囲にいるガーディアン達を蹴散らす。

その異様な二人のコンビネーションに驚いていたレコンだったが、自分の役割を思い出したかのか首を激しく横に振って切り替える。

「と、いけないいけないッ!!」

レコンは当初の打ち合わせを思い出し、リーファと共に底面に留まり、ヒールスペルを詠唱して回復を四人にかける。

そしてクラウドとキリトはというと、相変わらず大剣を振るって敵を薙ぎ倒していく。特殊な動きはいらぬ。

ただ迫ってきたら攻撃する。ただそれだけだ。

平行するように互いの背中を預けながら攻撃を繰り返していく二人は、時にはガーディアンを蹴飛ばして跳躍し、落ちそうになったらキリトの手助けで空中へと放り投げられる。

クラウドはそうやって空中を跳び回っている。

それを恐ろしい速度で繰り返していく。

しかし、それでも届かない。どれだけ素早く倒しても、それ以上のスピードで産み出される守護騎士達は、既に天井を覆い隠すほど密集していた。

そいつらはまだ襲ってこないが、近付いたら確実に蜂の巣にするように剣先を向けて突進して来るだろう。今はまず薄く伸ばした盾を分厚くすることに専念しているように見える。

しかし、他の奴らは別だ。

その盾を分厚くするまでの間、他の守護騎士達が命を削り取りに来る。

もちろんそれは、回復役をしているレコン達も例外ではない。

「ッ!? レコンッ!!」

「ッ!」

スペルを詠唱している途中、起きてはならないことが起きた。

後衛で回復役を必死にやっている中で、ガーディアンの一部隊が、二人を睨み付けた。

数は合わせて五、六匹。何とかなる数ではあるものの、回復スペルを唱えている途中で、キリトが今HPバーがかなり減少している状態だ。

クラウドがこれ以上キリトには攻撃を加えさせないとカバーをしているが、それでもかなりギリギリだ。急いで回復しなければならぬ。

たとえ敵に狙われてても、キリトがやられてしまうのだけは避けなければならぬ。

よって、ヒールスペルに集中していたレコンの背後に、赤い亀裂が刻まれる。

「ぐあッ!」

「レコン!」

一緒に回復役をしていたリーファがスペルを中断し、レコンの背後に迫ってきていたガーディアンを叩き斬る。

「大丈夫!」

「な、なんとかね。」

幸いにも、奴らの攻撃力は弱い。

数で攻められてきたらやばいが、一体一体の強さは弱く設定されている。たかが一匹の攻撃など、どうということもない。

しかし、このままではまずい。

敵に狙われないようにリーファとレコンの二人は後衛で攻撃以外の魔法を使うことを決めていたのに、襲われてしまうのでは意味がない。

通常、この世界のモンスターはプレイヤーの姿を視界に入れるか、もしくは遠距離からの攻撃でダメージを与えられない限り襲ってくることはない。

だが、世界樹を守る守護騎士達は例外みたいだ。

どうしても攻略させたくないのか、そんな雑魚どもとは違って、より悪意のあるプログラムを取り入れられているようだった。

このままでは、ヒーラー役の自分達までやられてしまう。

そうしたら、回復するものはいなくなり、パーティーは全滅する。

故に、リーファは抜刀したままレコンに向かって叫んだ。

「あたしが奴らを引き付けるから、アンタはキリト君達のサポートを続けてッ!!」

それだけを言って回復役を降りたリーファは翅を羽ばたかせて敵の殲滅に参加しようとするが、

「待って」

刀を持つ手に、ガタガタと震えている手が掴まれた。その手が誰の者なのか、目を動かして追っていくと、珍しく真剣な表情を浮かべているレコンがそこにいた。

「リーファちゃん、僕にはよく解らないけど、あの人達にとってこの戦いは大切なことなんだよね?」

「そうだよ。多分ゲームじゃないのよ、今だけは」





と、凄まじい音が炸裂する。

クラウド達は炎の渦のせいで昼間のように明るくなったダンジョン内で、その眩しい光に思わず目を閉じてしまう。

目を潰さないように瞳を守る瞼まで貫通するほどの眩い光。直視しないように目をつぶってもその強烈な光は僅かに瞼の裏の瞳に届いていた。

赤黒い影が瞼の裏から見える。何が起きてるのか確かめようとして僅かに目を開けようとするとそこには白一色が広がっている。

光が強すぎて、視界を白く飛ばしているのだ。

しばらくの間激しい光が続いていたが、次第に収まっていく。

そして上を、レコンが向かっていった場所を振り返る。

密集していた守護騎士の分厚い盾に、穴が空いていた。

その真ん中に、小さな緑色のエンドフレイムが漂っていた。

自爆魔法。

使えば恐ろしいほどの威力を放つ範囲攻撃魔法だが、解き放てば死ぬと同時に通常の数倍のデスペナルティを課せられる、禁術だった。

レコンは、元からそのつもりである大群へと突っ込んでいったのだ。自らを犠牲にして解き放つ威力は絶大で、その代償に見合う功績を彼は残していった。

いつも頼りなげな彼がここまでするなんて。

「レコンッ!!」

会ったばかりのやつにここまでする彼の勇敢さに言葉を失うティファ。

感謝してもしきれない。

ユウキに抱えられながら絶句するティファは上空を凝視する。あ

れだけ密集していたガーディアンの群れの一部に、一つの穴が出来上がっていた。

「ッ!!」

そして彼のことをよく知るリーファは小声で『あのバカ野郎』と呟き、力強く目をつぶって下唇を噛んだ。

ゲームじゃないのよ、その一言で、彼は覚悟を決めたのかもしれない。

彼の犠牲を無駄にしてはならない。

犠牲によって作られた、一筋の道。それが閉められる前に突破しなければならぬ。

だから、彼の意志を受け取ったクラウドは叫ぶ。

「今だッ!! 行くぞキリトッ!!」

「ああッ!!」

クラウドがキリトの名を呼んだ瞬間、彼らは動いた。せつかくやってきたチャンス。これを逃してはならない。

クラウドはキリトだけでなくユウキ達にも声をかける。

「ティファ!! ユウキッ!!」

「うん!!」

ユウキはティファを抱え、クラウドの後を追う。

クラウドは一匹のガーディアンを足場にして勢いよく跳躍し、キリトの上昇速度に合わせる。

そして。

そして。

ドームの天蓋がびっしりと蠢いて隙間を埋める前に、クラウドはキリトと手を取り合い、互いの大剣を合わせてロケットやスペースシャ

トルのような勢いで守護騎士達を蹴散らしていった。

あまりの威力に、何重にも重なったガーディアン達は束になって立ち塞がっても、圧倒的な加速で迫るクラウドのバスターソードとキリトの巨剣は、二つに合わせることで剣先を突き出す速度と威力を倍加させる。

「行って、キリト君。クラウドさん」

リーファはついていかなかった。

ただレコンによって開かれた突破口を目指して突き進む四人は、吸い寄せられるようにゲートへと飛び立っていく。

その背中を見て、彼女はドーム全体に響かせるように必死に叫んだ。

「行っけええええええええッ!!」

「ウオオオオオオオオオオッ!!」

裂帛とした咆哮と共に、二人が放つ一撃が爆走した。

ソルジャーとしての身体能力、S A O時代からのスキル熟練度の加護を受けた二人の体が、一気に加速しゲートまで突き進む。

守護騎士達はこれを止めようと、束になって襲いかかってきた。

しかしたとえ束になったとしても、一匹ずつの腕力は弱いため、それを振り払うためにクラウドとキリトの二人が持つ二つの得物を重ね合わせて、一斉に襲いかかってくるガーディアン達を、まとめて消し炭にしていった。

ドバア!! と。二人の手の中で剣が爆発した。

比喩でもなんでもなく、本当に二人の剣が雷光と化した。一直線に飛び出した鋭利な一撃が連続的にガーディアン達を容赦なく突き破り、青白い紫電が奴らの体から噴き出して、命の灯火を引き裂いた。

圧倒的な破壊力によって剣のグリップを掴んでいた彼らの手が、光の尾を引き、確実にゲートに向かって飛翔していく。

ユウキ達はその後をちゃんとついてきて、離れないように後ろにぴったりとくっついていてる。

轟音と共に、ガーディアンの体からいくつものエンドフレームが爆発する。

そして、ついに。

今まで誰も達したことのない、円形のゲートに。

ザシュツ!! と。

世界樹の本当の入り口、アルヴヘイムの最後の門がある場所。

十字に分かれた円形のゲートの中心に、二人の得物が突き刺さる。

攻略不可能と言われたグラント・クエストを越えるように圧倒的な力を見せつけたその光景は、端的に二人の凄まじさを示していた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

辿り着いた。

クラウドの魔晄を浴びた目から闘志が抜ける。

ソルジャーの力を持つクラウドと黒の剣士キリトが、限界を超えて力を合わせたことによって、無数のガーディアン達を音速の三倍で消し炭にしてやった。

「着いた?」

と、その時。

隣にいたユウキがとても弱々しく、まるで嘘みたいな光景を目の当たりにして唾然としているような声でそう言った。

攻略不可能とまで言われたクエストのゲートに辿り着いたことに、未だに信じられないのだろう。ユウキは開いた口が塞がらなくとも、手に掴んでいるティファの手を離さない。

「ああ、やったんだ」

「喜んでる場合じゃないぞキリト」

「!!」

ユウキの声にキリトが応えたが、クラウドは再び瞳に闘志を宿す。首でクイツと背後を指して、時間がないことを教える。

残りとなんたな守護騎士。

彼らの使命は、ゲートを守ること。

突破されてはならないのに突破されたことで怨嗟の声を轟かし、そうはさせまいと振り返ってクラウド達を撃破するために翅で空気を叩いた。

たしかにこのままだとまずい。

折角ここまで来てまた振り出しに戻るのだけは避けなければならぬ。幸いにもゲートには手をついている。

もう手を伸ばせばクエストクリアのための演出があるはずだ。

キリトは手を突き出して、ゲートを開けるようにノックしようとした時、

「待ってください!!」

唐突に。

キリトの手の前に小さな男の子が降り立った。あと数センチしてたら潰してしまっていた。

チャドリーは何かがおかしいと言うようにゲートを見渡し、何かを探っていた。まるで、何か異変を感じ取ったような様子だった。

その様子に疑問に思った同じナビピクシーのユイもゲートに触れる。

そして。

「ッ!? クラウドさん!!」

チャドリ―は悲痛な叫びでクラウドの名を呼ぶと、

「この扉は、僕らの手では開けられません」

「!?」

四人は絶句した。

何の説明もなく、唐突に放たれた絶望的な言葉。

一体どうということなのか説明するように皆がチャドリ―に目を向けると、彼は早口で言った。

「この扉は元から開けられないように設定されているようです」

「どうということだよ、それ!」

「ふざけたことに、システム管理者の手によって、世界樹の上に行くというのは初めから不可能なように設定されていたということですよ。おそらく、元からそんなクエストなんて用意してなかったんですよ。真の妖精に生まれ変わるといえるのは、単なるデマだったということです」

その残酷な言葉の意味がわからなかった。

凍りついた頭はしかしゆっくりと、氷を溶かすように思考を再開させる。

ゲートが開かない？

システム管理者は元からそんなクエストを用意してない？

つまりこういうことか、それが結論なのか？

希望だけを持たせておいて、プレイヤーの心を弄び、あと少しでゲートの奥に行けるといふのに、開かないその理由を、システム管理者の手によってというふざけた言葉になってしまふのか？

「ッ!!」

クラウドは八つ当たり気味に拳をゲートにぶち当てる。

キリトも同様。

全身から力が抜けるように剣を離した。

「クソツ!!」

これはもう、プレイヤー諸君がどうにかできることではない。与えられたスキルやステータスがまったく役に立たない己の力にキリトは歯噛みして、

「ッ!？」

ようは、システムさえどうにかすれば開けられるのか、と簡単な事に気が付いた。

「待ってる!!」

「!?!?!?!」

キリトは何かを思い出したようにポケットへ手をつ突っ込んだ。急ぐようにポケットをまさぐるキリトにクラウド達はどうしたのかという目を向けていたが、左ポケットからあるものを取り出した。

銀色のカード。

それをチャドリーとユイの目と鼻の先にまで押し付けてこう言った。

「ユイ! たしかこれは秘匿性の高い研究データが収められた『システムアクセス・コード』だって言ってたよな!？」

「ッ!? はいッ!!」

「二人ともこれを使え!! これでゲートが開くはずだ!!」

チャドリーとユイに力強く言ったキリトに、二人は顔を見合わせてそれを受け取る。二人でカードを持ち上げて、光の筋が二人の両腕へ



と流れ込んでいく。

「システムデータ。解明。コードデータ。解明!!」

「チャドリーさん!!」

「はい!! 皆さん僕らに掴まってください!! これより世界樹内部に転送されますッ!!」

「!!」

そう言うと、二人は光の筋が流れ込んだ両腕をゲートへと叩き込み、システムを起動させる。システム管理者の権限を有した二人に触れれば、世界樹へと入れるはずだ。

「急いでッ!!」

チャドリーがそう言うと、クラウドとキリトはチャドリーに、ユウキとティファはユイに。

差し伸べられた手をしっかりと掴んだ。

瞬間。

轟!!

という石造りのゲートが揺れ、十字に組み合わさった石板の隙間から眩い光が漏れた。

そして。

「!!」

それぞれの体が発光していき、全身が白く染まると、アバターは光の粒子となって、

クラウド達の姿は消失した。

◇◇◇◇◇

「クッククック!!」

世界樹の何処かで、そんな声があった。

優秀な頭脳ならこうはならなかったものの、こうも簡単に侵入されてしまつては『この体の頭脳』の科学的センスのなさを痛感させられる。

「クアックアックアツ!!」

にも拘らず、そんな出来事を楽しむように両手を広げたまま立ち上がり、笑い声を上げる。

『緑色の長衣』を纏つて愉快に笑つて、ハプニングをどう楽しもうか、美味しそうな料理に思わずよだれを滴らせるような欲望にまみれていく。

「科学者としての欲望に負けた。まずはこの二流科学者が考えていた『アップデート予定だった魔法』を試してみよう」

## 第19章

フォーカスの遠近が揺らぎ、ようやく風景を脳が認識する。

体がバラバラに分解されて再構築された感覚はなく、いつの間にか床に足をつけていた。目を開けると、そこにあるのは白で統一された廊下だった。

「……は？」

ユウキのその一声をきっかけに、皆が周囲を見渡した。

自然らしい音もなく、ただ無音だけが空間を支配している。先程までの激しい戦いが夢だったかのような感じだ。それほどまでに世界は静寂で満たされていた。

「ユイ、ここがどこだかわかるか？」

キリトがそう訊ねると、ユイは小さな首を振りながら周囲の構造を把握する。ユイはいつの間にか小さなピクシー態ではなく、本来の、十歳ほどの少女の姿に戻っていた。

チャドリーも同様。

着ているデザインは少々変わっているが、白衣を着て、その内側に青いボーイスカウトを着こんだチャドリーは眼鏡を直して周囲を見張る。

異様なまでにデザインがされていない。

上下左右全てが白く塗り潰されていて、しかしわずかな影によって輪郭はハッキリと見える。ゲートの入り口から入ってきたはずなのに、今いる場所は廊下の一部分。

世界樹の内部であることだけは確かだ。

それは間違いない。

故に、木の構造上円形になっているためか、湾曲した通路が奥まで

続いている。

この先には何があるのか、その先にはどのような物があるのか、ユイもわからないのか困惑した表情で言う。

「わかりません。どうやらここはナビゲート用のマップ情報がインプットされてないようです」

その話を聞いて、チャドリーが仮説を述べる。

「おそらく、秘匿性の高い場所なのでしょう。システム管理者がプレイヤーにはゲートを絶対に開けられないようにしたように、この場所には何か見られたくないものがあるのだと推測いたします」

第三者には見られたくないもの。

それは一体なんなのか、考えるまでもない。

「人体実験か」

クラウドがそう言うと、皆が彼に注目する。

確かに、可能性はある。ある程度キリト達の世界のことを聞いて状況を把握していたクラウドは、まだ目覚めていないプレイヤー達と、アスナの関係性から見て、非人道的な実験を行っていると悟った。

何にしても、世界樹内部には侵入できた。

あとはここから、自分達の目的を達成すればいいだけだ。

「二手に分かれよう」

「「「「「」」」」」」

「俺とティファとチャドリーはデータ閲覧室、キリトとユウキはアスナの救出に向かってくれ」

「え!?! ちょっと待ってよ!?!」

ユウキが途中で割り込んだ。  
キリトを通りすぎ、クラウドの前まで来ると声を荒げて言う。

「前にも言ったけど、クラウドに最後まで付き合おうって約束でしょ!?  
だったらボクも——ッ!!」

「確かに、そう言われた」

「だったらッ!!」

「だからこそ、お前にしか頼めないんだ」

「!? どういうこと?」

「まず俺達はこの場所すら把握出来ていない状態だ。そんな状況で、キリトとユイのたった二人だけだと何かが起きたとき、戦えるのはキリトだけだ。もしかしたら、あのガーディアンがこの通路を徘徊している可能性だってある。そんな時、キリト一人で対処するのは困難だろう。だから戦える人数を均等に分けて動くんだ。俺とティファ、キリトとユウキという感じでだ。キリトのために、護衛同行してくれ」

冷静に作戦の内容を述べたクラウドにユウキは言葉も出なかったが、彼はそこへさらに追加で頼りになる一言を、改めて告げる。

「お前にしか頼めない」

「!!」

「一度剣を合わせたことがあるからこそわかる。お前は、お前の『剣』は、生きて還った者の『剣』ではなく、この世界で今を生きる者が持つ『剣』だ」

「ッ!」

「俺達とはまた違った、『生きるための剣』。そのお前の腕に、俺は期待している」

「」

「頼めるか?」

腕を組んでそう訊ねると、ユウキは真っ直ぐ見つめていた彼の瞳に

笑いかけて、

「わかった、任せてよ！」

二人はそれぞれ言い合って、少しだけ黙った。  
やがて、キリトに目を向けて彼は言う。

「悪いな、本当なら俺もついていくべきなんだろうが」

「いや、お互い様だ。俺だってお前をログアウト出来るように手伝いたいし」

気軽に返したキリトと目を合わせる。二人はそのまま無言で近寄って、手を組んで、悪いと一言また謝ってから、

「気を付けろよ」

「ああ、互いにな」

手を離して、両者は背を向けて違う方向へと走り出す。

目的地はそれぞれただ一つ。

キリトはアスナの救出。世界樹内部のどこかにいる一人の少女を見つけて出せば良いだけ。

もう一つはデータ閲覧室でクラウドのデータを見つけること。  
チャドリーの言葉が正しいなら、この世界樹のどこかにそれはあるはずだ。

さあ。

ここからが正念場だ。

◇◇◇◇◇

どこまで行っても、ファンタジー世界をモチーフにしているはずの世界樹の中身は、『建物』として機能していた。

現実的な服装をしている自分達に違和感を感じないほど中の作りはシンプルで、しかし剣を背負っているせいか異彩を放っている。

リーファから聞いた話と随分と違う。

世界樹の頂上にたどり着いたものは上位妖精に生まれ変わるための神秘的な空中都市が広がっていると聞いていたのに、そこにあるのは白く、白く、白いただの長い通路。

階段もなく、目印もなく、どこに何があるのかさえわからない。

「本当にこの道で合ってるのか？」

「おそらく、僕にプログラミングされているソナー装置を使えば、建物内全体の構造がわかります」

音波によって物体を感知する装置まで埋め込まれているとは。なんだか、チャドリーの身体には一体どれほどの秘密道具が搭載されているのか逆に気になり始める。

「今いる場所は？」

「この建物は三層構造になっていて、上から順にフロアC、B、Aとなっているようで、僕らがいるのはその中間地点Bです。データ閲覧室はA、すぐ下です」

言われながら走り続けるクラウド達。

チャドリーに搭載されているシステムに頼ってしばらく走っていると、左側の内側方向の壁に四角い扉が見えてきた。

「ここから下へと移動できそうです」

立ち止まったチャドリーの言葉に頷いて、言われるままに上下に並んだ三角形の下のボタンをタッチした。

クラウドとティファは両サイドに隠れ、もしエレベーター内に敵がいたらいつでも奇襲できるように備えておく。

クラウドは右手をバスターソードへ、ティファはグローブを握りつぶし、ポーンという効果音が聞こえると同時に二人は顔を合わせる。互いに頷き、エレベーターの扉が両サイドにスライドしたのを見計らって物陰から飛び出す。

しかし、そこには誰もいなかった。

箱形の白い小部屋があるのみで、特に敵らしいものはない。

三人は中に入る。監視カメラとかそういった類いのものはないか確認したが、部屋全体が白くコーティングされていて、その心配はなさそうだった。

扉の方に向き直ると、ボタンの並んだパネルがあり、現在点滅しているボタンが今いる階層なのだとすれば、自分達は下のフロアに行くボタンを選べばいい。

ボタンを押し込み扉が閉まると、下降する感覚が三人を包む。

「二人とも下がってろ」

「」

二人は声も出さず、エレベーターの両壁に背中を預けた。

もしかしたら、扉が空いた瞬間に敵がいるかもしれない。そう思ったクラウドはまず自分が出て安全確認をすることにした。

エレベーターが停止し、開いた扉から勢いよく飛び出すクラウド。スライディングしながらバスターソードを引き抜き、すぐに左右を確認する。しかし、そこは先ほどまでと同じような歪曲した通路だけが伸びており、人の気配はない。

「クリア」

安全だと判断したクラウドはそう呟き、二人に出てくるように指示する。

通路は先ほどと同じで、上下左右のパネルに継ぎ目どころか傷一つなく、自分が一体どこにいるのか本当に分からなくなる。



侵入者用に作られた設計だとしても、これじゃあ職員すら迷いそう  
だ。目印となるものがなければ、ここで働くのは難しいだろう。

「みなさん、こちらです」

しかし、幸運なことにはこちらには優秀なナビゲーターがいる。たと  
えどれだけ道を歪ませても、サイボーグであるチャドリーにとって位  
置情報を探り出すのは朝飯前だ。

二人はチャドリーの後についていくと、ある扉の前に止まった。

「.....ここですね」

その扉は今まで見てきたやつと同じデザインだったが、チャドリー  
がその扉の前にあるパネルを慎重に操作し、ロックを解除してドアを  
スライドさせる。

そして、扉の奥から差し込んできた強烈な光りに、思わず目を細め  
た。

「!?!」

内部を見た途端、クラウド達は息を呑んだ。

途方もなく広大な施設。真っ白で遙か遠くまで白く、白く、白く、塗  
られている。光が反射して余計にその光は強くなっているのだが、そ  
の強さに目眩がする。

何より目が行くのは、いくつもの細い柱。整然と均等に並べられた  
柱型のオブジェクトは、床面からクラウド達の胸辺りまでの高さまで  
伸びている。太さは両手で抱えられるほど。その平滑な上面に、わず  
かな隙間をあけて何かが浮かんでいる。

それはどう見ても、人間の頭の中にある脳髓そのものだった。

「これ.....なに?」

ティファが震える声でそう言った。

サイズは実物大だが、色合いはリアルなものではない。青紫色の半透明素材で構成されている。つまりこれはホログラムだ。本物ではない。

しかし、脳髓の下側に表示された半透明のグラフを見た通りなら、これは誰かの脳を現在進行形でモニタリングされている。

確か、キリトは言っていた。

今もなお目覚めていないSAOプレイヤー達がいるということをも。もしそうなら、ここにいる奴らがそうなのかもしれない。ゲームクリアに伴って解放されるはずが、このゲームの管理者によってここに幽閉され、脳が発する思考や感情を操作する実験に付き合わされているのだと考えられる。

「これが、このゲームの裏の顔か」

「酷い、なんて酷いことを、ッ!!」

ティファが顔を青くして、口に手を当ててそう言った。

修羅場を潜り抜けてきた彼女とて、この現状には目も当てられないのだろう。非人道的な実験は、ティファ達にとっては許されないことだ。

非人道的な実験のせいで多くの者達が命を落としたり。

殺されたもの、化け物にされたもの、生け贄にされたもの、数えきれなくらいにクラウドとティファはその光景を見てきた。

手を伸ばせば届く以上、可能なら彼らを救いたいがどう救えばいいのかわからない。何よりもまずここから脱出することが最優先だ。その後で彼らをどう救助するか考えればいい。

クラウドはチャドリーに言う。

「このゲームから抜け出すにはどうしたらいい？」

「このゲームのシステムコンソールを使ってクラウドさんの設定を正

しく修正させます。その後で管理者権限でアクセスできれば、ここに  
いる人達をログアウトさせることも可能です」

「それはどこにあるの?」

「あれです」

ティファに聞かれてチャドリーはある方向に指を指す。遠く離れた  
白い壁面の手前に、ポツンと『翠玉色の水晶が浮かんでいる柱』が  
見えた。

三人はそこまで近付いていくと、あることに気が付いた。

「これって...ッ!!」

「『マテリア』、なのか?」

「そのようです。しかし、なんの魔法も封じ込められていません。見  
せかけか、もしくは僕でさえも知らない魔法が入っているのかもしれ  
ません」

見慣れたものに目を奪われた一同は、何故そんなものがここにある  
のかと疑問に思う。

チャドリーがマテリアに軽く触ると、ビー! という音を立てて薄  
青いウィンドウとホロキーボードが浮かび上がった。

ウィンドウにはびっしりと多種多様なメニューが表示されている  
が、チャドリーはある項目に目が行った。

「これは!?!」

「ど、どうしたのチャドリー?」

「あ、ありえませんが...こんなの、この世界にあるわけありませんッ!!」

酷く動揺しているチャドリーが見つめている項目。チャドリーは  
恐る恐るといった感じでそれを開いてみせると、ウィンドウに大きく  
文字が表示された。

本来、この世界では馴染みのない単語、

『JENNOVA project』

と。

「!?　なんで、こんなものがこの世界にあるッ!？」

「僕にもわかりません！　異世界のゲームにJENNOVAという名前があるなんて予想外です!!」

高性能な頭脳を埋め込まれたチャドリーでさえも困惑している。

目を見開き、何故こんなものがあるのか自分の頭の中の疑問を、自分の言葉で再確認するような作業ばかりを繰り返して、オーバーヒートしそうであった。

「一体、なんでこんなものがッ!？」

答えにたどり着かないことに多少の苛立ちを覚えるチャドリー。

演算を繰り返して一刻も早く答えを導きだそうとするも、何も浮かばない。

なのに。

『決まっているじゃないか、私の一部を埋め込んだお前をここに招くためだよ』

どこからともなく返答があった。

三人はハツとした様子で周囲を見渡してその音源を探る。前後左右ではなかった、少なくともこの部屋から出た言葉ではなかった。

声が出したのは、三人の頭の中だ。

『歓迎しよう』





達を嘲笑うように一人の男が暗闇から歩いてきた。

「須郷ツ!!」

キリトが立ち上がろうともがきながらも、その声の主に唸り声で叫んだ。

が、

叫ばれた男はそんなキリトのことなど気にもせず、むしろ虫を見るような目付きで呆れた声を出す。

「全く、私の一番気持ちのいい時間に水をささないでもらいたいな。君と遊んでいる時間などないのだよ」

「なに!？」

「君など単なるモルモットでしかない。邪魔だからしばらくの間口を閉じていてもらいたいね」

キリトに向かって何かを言う男。

毒々しい緑色の長衣を纏い、その上に作り物のように端正な顔が張り付いている。

「誰だ?」

両手に力を込め、舌打ちと共に立ち上がるとするクラウドは再度訪ねる。

?

「お前は、誰だ」

「オベイロン」となっているが、この際名前などどうでもいい。姿形や名前など単なる記号でしかないんだよ、セフィロス・コピー・インコンプリート・ナンバーリング無し」

「!？」

オベイロン、確かその名前は妖精王であったはずだ。世界樹にたどり着いてオベイロンという者に会えば最上級クラスの妖精へと転生させてくれるという重要キャラクター。

それにしてもそんな感じには見えない。薄汚く、妖精としての気品さもない。

何より、聞き捨てならないことをこいつは述べた。

何故その事を知っているのか問い詰めようとするが、それよりも先にオベイロンが話し始める。

「この世界で出来ることはやり尽くした、あとはこちら側とあちら側を繋げるだけだが、少々時間がかかりそうなんでねえ、ちよつとした暇潰しに最近開発した魔法を試してみたんだが、少し効果が弱すぎるみたいだなあ」

「[[[[[[:]]]]]]」

「時間稼ぎにはなるが、せめて人体をまるごと押し潰すくらいの威力でないと使い物にならない。やはり、二流科学者の脳ではこれが限界か」

気軽に淡々と話すオベイロンはクラウド達のことなど気にせず、独り言を呟く。

わけのわからない単語を並べて、クラウド達の間を歩き、ステップでも踏むような感覚で楽しそうにしている。

「オベイロン——いえ、須郷！」

そんな時、床に倒れ伏しながらも、気丈に顔を上げたアスナが鋭い声で叫んだ。

「あなたのこと全部この目で見たわ！ あんな酷いことを許されないわよ、絶対に!!」

「ふむ」



そう言うもオベイロンは何一つ気にしてない素振りを見せる。すると、何を思ったのかオベイロンはアスナに近付き、同時に彼女の腹を強く打ち付けた。

「ああ!？」

「アスナツ!？」

「全くもってうるさい娘だなあ、実験道具として親切に生かしておいてるのに。いざとなつたら現実の君に装着されているナーヴギアとやらの出力をいじることも可能なんだよ?」

「須郷オオオオオオオオツ!!」

「君もうるさいねえ。さつきから須郷須郷って、人の名前くらいちゃんと覚えてほしいものだねえ」

「ツ!？」

「光栄に思いたまえ、私の大いなる仮説の検証に、君達も貢献させてやろう」

なに!? とキリトが眉をひそめると、興味の対象を変えたように、今度はクラウドに話しかける。

「ふっ、しかし、クラウド・ストライフ。お前とはつくづく腐れ縁だな」

「なに?」

「ぐくくっ、わからんか?」

クラウドはその言葉に顔をしかめるが、オベイロンは手を広げてにやりと笑って語り出す。

「私は三年前、『セフィロス』を追いながら世界中のネットワークに自らの断片、そう、私の頭脳、知識と思考とデータをばら蒔いた」

「!？」

「そして、ネットワークに散らばり生き続けた私の断片は、『メテオ災



凶悪で。

どうしようもないほどマッドサイエンティストを表現する、その顔。

全ての元凶とも言える存在が、クラウド達の前に現れた。

## 第20章

？

「宝、条」

「須郷じや、ない？」

宝条。

キリト達からしたら聞き慣れない人名。

今までそうだと思っていた奴が違う奴だとわかった瞬間、キリトとアスナは疑問と共により一層の警戒を抱いた。

だが、別世界にいるクラウド達は宝条という男がどういう存在なのかを知っている。

一言で言ってしまうえば、科学と自身の頭脳を絶対としており、実験の成功の実現に向けた合法非合法を問わない研究に手を染めており、人体実験も厭わないマッドサイエンティストとして知られている。

人の命が研究のために失われることをなんとも思わず、クラウドでさえもこいつの手によって身体を改造された。

ジェノバ細胞とセフィロスの細胞を、敢えて精神支配が耐えられないものに植え付け、ジェノバの特性である体がバラバラにされても一箇所に集結する、『リユニオン』という仮説を証明するために、クラウドは五年間もの間人体実験の対象にされた。

そんな彼からしたら、目の前にいる奴は許せないわけ。  
なにより。

なぜそんな奴が現れたのか全くわからなかった。姿形さえも変えてまで、なぜ別の世界の仮想空間に現れたのか理解ができなかった。

「あんたが、何故ここに!？」

「ふむ、やはり自分から名乗らねば正しく認識されないようだな。姿形が変わって自分だと認識されないのは、なんだか小馬鹿にされているようで癪だ」

そう言うと、オベイロンの体から。  
ゆらり、と。

空気から浮かび上がるように、透き通る老人の体が生じた。白衣を着て、黒レンズの丸眼鏡をかけ、おそらくシャンプーもリンスもつけず手入れをしていないボサボサの長髪を後ろで纏めている。

重力を無視し、それはオベイロンと動きをシンクロさせながら語り出す。

声を合わせながら、彼は言う。

『私はねえ、実験に専念すべき貴重な時間を空費してしまうのは好きじゃないんだ』

「ッ!!」

『しかし、せつかく時空を越えて再会したんだ。ちよつとだけ世間話でもするとしよう。特に、そこにいる異世界人とはねえ。今後のための有益な情報が得られるかもしれないし、異文化交流は私の趣味でもあるしなあ』

不思議と、これまでであった異様な冷たさに熱が帯びたような顔色に変わった。

今まで興味も示さなかったキリト、アスナ、ユウキ達を見て。

ニヤリと笑って、乾いたしわがれ声で話しかける。

『あく、そのインプの君はあれだろ？ この失敗作クラウドのためにわざわざこんなところまでついて来た感じだろう？ 何の見返りも報酬もないのに、こんな奴のためについてくるなんて、私には理解できないよ』

「!？」

『そして、そっちのスプリガンは、この二流科学者が飼い慣らしていた女を探しに来たといったところかね？』

「ッ!!」

『で、やつと探し出したところで私の手によって拘束されてしまった

と・クツクツ。無駄骨だったなあ」』

「なに!?!」

『別に私自身、その女など特に興味はないが、せつかくのサンプルを未使用のまま廃棄するのは勿体ないのでね』』

すると宝条の意識とシンクロしているオベイロンの右手が上へと掲げられると、指をパチンと鳴らして漆黒の闇の中から、じやらじやらと複雑に絡み合う金属音が降りてきた。

降りてきたのは、二つの鎖。

その先端にはちょうど手首サイズの金属リングが輝いていた。オベイロンはニヤニヤと笑いながら特にその場から動かず、手を振るっただけで倒れたままのアスナの両手首にカチンと音を立てて嵌めさせた。

そして。

指揮棒を振るように上へと軽く振ると、闇の中から伸びている鎖が上へと引かれ、アスナの体が空中へと持っていられる。

「きやあッ!!」

「アスナ!?!」

吊り下げられたアスナはつま先が届くか届かないかの微妙のラインで固定される。

「お前、何をやる気だ!?!」

『いや、ね? 彼女が死んだら君はどんな顔をするのかなと思ってね』』

「?」』

「なにッ!?!」

『大切な存在が消えた瞬間、人は一体どのような感情を抱くのか、明確に知っておいた方が今後の研究のために参考となるからなあ。出来るだけわかりやすい反応を見せてくれよお?』』

宝条とオベイロンは身体の動きを合わせながら、思った以上につまらない玩具をてにしてしまったような顔でそう言った。

「ふぎけるなよ、アンタ。アスナに何かしたら、ただじゃおかないからなッ!!」

キリトは今までにないほど大きな声で叫んだが、半透明な宝条は両手を広げて肩をすくめた。

『その状態で？ 一体どうするとかね？ 動けもせず、ただ倒れ伏して見ていることしかできないというのに』

そう言うと宝条はオベイロンの体を操作してアスナの長い髪を一本だけ弄り、強く引っ張って引き抜いた。

「ああ!？」

「アスナッ!!」

『抵抗も何もできない。この女の髪の毛一本すら守れない。そんな状態なのにただじゃおかないと言われても、説得力に欠ける』

「きつさまあああああッ!!」

拳を握り、目の前にいるオベイロンを殴り飛ばすべく立ち上がろうとするキリト。

しかし、体にかかる負荷がそうはさせてくれない。重圧に押し潰され、剣すら握れない状態だ。

耐え難い怒りを吐き出せず、奥歯を噛み締めていると、一つの声が暗闇の中に響いた。

「はあああああッ!!」

『「あん?」』

ドッパアア!! と。

先ほどまでオベイロンが立っていたところに、勢い良く巨剣が突き刺さった。

「!?」

オベイロンに向かうためそれぞれが立ち上がろうとしていたキリト達の体が、爆風に押されて後ろへと転がる。そればかりか、ガキン!! と何か金属製のものを断ち切ったような音が響いてきた。

吊り下げられていた、アスナの鎖を断ち切った音だった。

爆風によって発生した砂塵が舞う瓦礫の中央の上には、誰かが立っていた。

その人影は、半透明となった宝条を睥睨しながらこう告げる。

「グラビテよりも弱い重圧なら、根性でなんとか抜けられるツ!!」

『ほう』

とっさに避けたオベイロンは重力魔法が展開されている中、唯一動いて攻撃を繰り出したクラウドに感心したように笑っている。

『素晴らしい! やはり失敗作とはいえ、セフィロスのコピーなだけあるな』

「アイツは今関係ないツ!! 動けたのは俺自身の力だツ!!」

否定の言葉を叫んだクラウドは、剣をオベイロンに向けながら離れたところにいるティファへ視線を投げた。

「」

その視線を受け取った瞬間、クラウドは首をわずかに動かしてアスナの方へと向けた。意図を理解したティファは重力魔法が解除され



たことを確認し、一気に駆け出してアスナの救出に向かう。

「大丈夫!？」

「は、はい!!」

「一旦退くよ、肩貸して!!」

そう言われてアスナはティファアに背負われながら宝条と距離を取る。後衛に控えたことを聞こえてきた会話だけで察したクラウドはそちらを見ず、ただ加勢してもらおうために、得物を携えている二人に確認を取る。

「行けるか、二人とも!？」

「ああ!!」

「もちろんだよ!!」

クラウドが一撃加えたことよって重力魔法が解除されたことをいいことに、キリトとユウキも抜刀し、交戦準備をする。

今、目の前にいる奴を叩き斬ることができる凶器を持つのはこの三人だけだ。相手が何をしでかすかわからない以上、素手で挑むのは危険だ。故にティファアとアスナには一時的に後衛に控えてもらい、そしてティファアはアスナの護衛にってもらおう。

戦闘準備は整った。

クラウド達の眼光が鋭くなったのを見たオベイロンは、この場で浮いているマッドサイエンティストと息を合わせると、

『「はあ、全く」』

宝条は息を吐きながら、取り囲むように剣を構えている三人に視線を向けた。どうやら彼自身、この程度の事態は何の問題もないらしい。何を企んでいるのか、天才的な頭脳を持っていたとしてもマッドサイエンティストな思考を持っているようでは他人には理解できない

い。

何もしないのであればこちらは大助かりだが、明らかにそういう雰囲気ではない。

クラウドはさつきから気になっていることを宝条に突きつける。

「何が目的だ宝条!？」

「はあくあ」

しかし、宝条は簡単にその質問を遮った。

『失敗作ごときが私の実験の邪魔をするなど 本当は自分が悲しくて泣きたくなる』

「名前くらい覚えろ!! 俺はクラウドだ!!」

『お前を見ると私は 自分の科学的センスのなさを痛感させられる』

宝条はオベイロンの体でため息を吐き、

『前にも言ったが、私はお前を失敗作だと判断した。なのに、セフィロス・コピーとして機能したのはお前だけ。故に、こんな二流科学者が作った重力魔法すらいとも簡単に抜け出してしまう 本当、自分がイヤになるよ』

「なんでもいいからさっさと説明しろ! 何が目的だ!？」

クラウドは怒号のように叫び、キリトとユウキの肩を震わせる。しかし、宝条だけは真顔を貫いている。

そして、またため息を一つ吐きながら簡単に口を開いた。

『私はねえ、もともと多重宇宙論など信じていなかったんだよ』  
「?」

『しかし今は違う。私たちとは違うもう一つの世界があることを

知って、私はそれにすごく興味湧いた!!」

「何を言っている!?!」

言っている意味がわからず質問を再度説いてみたが、宝条は取り合わず独り言を繰り返す。

『私は自らの肉体をジェノバによって、強化しようとしていた。だが、あれは失敗だった。まさか思考すら喰われ、あまつさえ貴様らに滅ぼされるとはな』

「!?!」

『まあ、あの状況を乗り越えられなかった時の保険として、我が断片をばら蒔いたんだがな。勿論あのサイボーグにも、一部だけ組み込んでおいた。いつか新天地を見つけた際に私の意識を別の肉体に移すために、予めプログラムしておいた』

「!?!」

『そして肉体を失った私は、セフィロスが開いてくれた新たな世界の扉をくぐり、この世界に目をつけた。セフィロスもいい仕事をしてくれたあゝ良い新天地を見つけ、そして最適な肉体すらも私は手に入れたのだからなあゝ頭脳は二流以下だったのが唯一の不満点だがね』

嘲弄するような宝条の言葉が続き、そして何故オベイロンとしてここに存在しているのかをようやく語り出す。

『しかし好都合だったよゝこの身体を持ち主はある実験を行ってね。思考・記憶操作技術、人の魂の直接制御という実験をね? だから、私はまず知識としてこいつのアバターデータに侵入し、知識を与えた。それをこいつは、自分の考えだと思い込み、完成させたい一心で研究を進めてくれた。私が、すでに頭の中を奪っているということに気付かずだね』

なに? と訝しむクラウド達をほとんど無視するように、宝条は軽

い調子でこう言った。

『宇宙を巡るシステムの一つとして、生まれ変わることが出来るかもしれぬという理論ゆえにネットワークに私の断片をばら蒔いた結果、その都合の良い実験をしているこの男の身体に目を付け、そして私の魂は、この人間の脳を奪った!!』

「『天才だ。私は、人類史上最高の天才！ 私こそが！ この仮想空間の支配者となり、異世界である『地球』へと飛び出すにふさわしい!!』」

。。。。  
どうして。

どうしてこうなるんだろう、とクラウドは思っていた。自分自身が存在している事実さえ、しばしの間気付いていなかった。

宝条の目的は、皮肉にもあの茅場晶彦と同じだった。

唯一の違いは、彼とは違って歪んだ欲望のために異世界を手に入れようとしているということ。奴の理論は凡人には到底理解できない、したくもない。

お星様からお星様へ飛び込んでひつつき、いつでも自由に動けるように虚空を移動することができるオカルト的な科学技術。相変わらぬの歪んだ科学で世界を滅ぼそうとする宝条に、バスターソードが光る。

「宝条、アンタの声は聞き飽きた」

根拠もなくクラウドはそう呟いていた。

『「あん？」』

親友から受け継いだバスターソードを掴んだ両手を目一杯に上へと掲げ、まるで剣道の面を打つかのような仕草を取る。

「はあッ!!」

巨剣がオベイロンの脳天に飛来する。

『クツクツ!!』

それでも、オベイロンと宝条は笑みを崩さなかった。無謀にも、二人の研究者は唇の端を歪め、

ガードなど考えず、むしろ両手を下げてクラウドの一撃を受け入れようとしたところで、

ドバツ!! と。

直後に原因不明の衝撃がクラウドの上半身をくの字に折り曲げた。

「!!?!」

そうして、キリトやユウキ、ティファにアスナのしている目の前で、恐るべき一撃が放たれた。

感覚としては、巨大な触手の薙ぎ払い。

色は黒に紫に赤。グロテスク要素が詰まった不釣り合いな組み合わせの色合いの触手が、クラウドを吹き飛ばしたのだ。

「!!クラウド!?!」

吹き飛ばされたクラウドの名を叫ぶ前に、目の前で変化が起きた。目の前にいたオベイロンに対して、かなりの警戒をしていたのに。

むしろ。

ぐちゃぐちゃという肉片的なものが混ざり合う音が響いてきた。破壊音とも咀嚼音とも取れない大音響。

「な!?!」

「なに、あれ!？」

キリトとユウキが立ちすくむ。

クラウドは倒れながらも無視してオベイロンがいた方を睨み付ける。そちらから、何やらでつかい人影が現れる。

「あれは!？」

ティファはその姿を見た瞬間息を飲む。

体感的にスローモーションとなった世界の中で、オベイロンの体が何か得体のしれないものへと変貌するのを見た。

骸骨のような顔面と、タコの触手にも見える赤黒い腕が多数。得体のしれない先端技術に基づいた次世代兵器でも装備してるのか、と思ったキリト達だったが、クラウドとティファだけはそれを否定する。!?

「まさか」

肉体の一部を改造し、『あの細胞』を埋め込んだ生々しいほど気色の悪い見た目をした存在。

『経過は、良好だな』

うつすらと。

骸骨のような顔のため本当に変わってるのか怪しかったオベイロンの顔色が、わずかに笑みの形を作る。

人間味も妖精味も薄れた笑みを。

『今度は、期待を裏切らんでくれよ?』

自分に言い聞かせるようにする宝条だけは半透明のまま浮いてい

た。変質したのはオベイロンの体だけだ。  
でかくな<sup>い</sup>った体質に、変化した見た目。

「またあれか。」

『ジェノバプロジェクト』、というプロジェクト名が存在する。星に衝突し、そのエネルギーを食らうことを繰り返す宇宙生物。自分を倒せるほど強力な生物がいた場合、適度に分離しつつ、それに怪しまれない姿に化け、油断させたところでウィルスを植え付けて滅ぼす。

モンスターというよりは、エイリアンのような見た目。

宝条が半生を捧げている存在とまで言われたものが、再びクラウド達の前に現れる。おそらくあれはデータの塊。本体ではない。データを元に再現されたものだ。

記憶の中で、ざっと思い浮かぶものは……

『「科学者としての欲望に負けて思考を喰われたあの時と違って、アバターとして再構築して操作の所有権を手に入れたこの「ジェノバ」の結果を、見せてやろう!!』』

宝条の叫びと同時に。

全ての空間を別の景色へと歪めるような、『ジェノバBeat』の猛攻が襲いかかる。

## 第21章

「はっ はわ!!」  
「うう ぐう」  
「が はっ」

クラウド、キリト、ユウキは、歪んだ空間の真つ黒な地面に仰向けに転がっていた。右目がチカチカと瞬く。両腕に力が入らない。鈍痛な感覚が三人の神経を駆け巡る電流を痺れさせる。

三人の手には、なんとか剣は握られている。  
しかし、それ以上の行動には移せない。  
なぜなら。

『ふむ。ペイン・アブソーバ、レベル5ほどでようやく現実の人体に影響が出始めるのか』

何もかもが一瞬だった。

オベイロン、宝条は迫り来るクラウド達を迎え撃つために、あるコマンドを入力した。

管理者権限によって、『ペイン・アブソーバ』という人の痛覚を遮断しているシステムのレベルを引き下げ、脳に実際の痛覚を体験させるという手段でこちらを無力化してきた。

◇◇◇◇◇

「はあ!!」

クラウドは猛然と突進して、強烈な斬撃の連続攻撃を何度も繰り返すが、宝条、『ジェノバBeat』の腕はことごとく生え変わる。

それだけじゃない。



本体以外からの場所、すなわち地面に自らの触手を這い巡らせ、あちこちに地雷のごとく埋め込んでその場に足を付けた瞬間に飛び出してくるといふ攻撃まで仕掛けてきた。

「うわ!?!」

「ッ!?!」

ユウキとキリトが思わず声を漏らす。

クラウドと同じように本体へと向かう最中、宝条の企み通り本体の足元から地面へと埋め込んだ触手がユウキとキリトの攻撃を遮断する。

「こんなもの!!」

「斬ればいいだけだ!!」

気合の声と共に、円を描くように剣を振り回すと、触手は切断された。血肉の代わりに、赤色に輝く電粒子類が飛び出してくる。

「ごっちは任せて!!」

「クラウドは本体に集中しろ!!」

素早く二人は背中合わせをし、死角のない陣営を作り出し、剣を一閃させた。蛇のように長く伸びてくる『ジェノバ Beat』の腕が寸断され、そうはさせまいと片方の持つ剣に巻き付いてくるも、キリトとユウキは互いをカバーし合うように地面に叩き落とす。

少しキリがないように思えるが、捌けない量ではない。一つ一つが大したことないし、何より二人とも優れた剣士だ。

この程度、何の驚異にもならない。

「いけるなー!」

「うん!! まだ会ったばかりで日が浅いのに、いいコンビネーション

「だよねボクたち!!」

ユウキが頷き、キリトはわずかに笑った。

「フ」

そのやり取りを見ていたクラウドも、思わず笑みを浮かべた。クラウドの一匹狼的な行動に合わせるように二人が雑草のように生えてくる触手を捌いてくれていておかげで、こちらは集中して本体へと近付ける。

ともあれ。

一刻も早く、このマッドサイエンティストを倒さなければならぬ。今のところはまだ奴の目的はよくはわからないが、今こうしている間にも時間の経過に従ってドンドン計画が進められてしまう。

奴はあらゆるプロジェクトを同時進行で進められるほど脳の働きが早い。戦っている最中でも、次の一手どころか、三十一手先でこちらの動きを詰ませる可能性だってある。

後衛に控えているティファとアスナの生存率も、それだけ減る。

それだけの奴が今回の相手だ。

油断してはならない状況だと改めて確認したクラウドは、バスターソードを握り締め、真正面から向かって叫ぶ。

「終わりだ!!」

言いながら、バスターソードを真上に向けてながら『ジェノバBe at』の脳天へ振り下ろす。

その時だった。

『「そうだなあ。この段階でまだこの程度の攻撃を仕掛けている時点で、もう終わりだな」』

わずか数秒。

即興で攻撃手段を思い付いたのだろう。

直後、触手が真下から飛び出した。ゴッ!! という空気を引き裂く轟音と共に、クラウドの胸元に突き刺さる攻撃。

しかし、

「はあッ!!」

冷静だったクラウドはバスターソードで跳ね返して事なきを得た。だが声は止まらなかった。

『「まだまだ序の口だ」』

宝条の言葉だけが続く。

うねうねと触手を動かし、三人を翻弄している中で、

『「システムコマンド。ペイン・アブソーバ、レベルを7に変更」』

直後だった。

ゴガッ!! と。

クラウドの脳が大きく揺さぶられた。

「があっ!?!」

一瞬で視界がぐらつく。何か重たいもので顔を殴られたらしい。いつの間にか地面の上に倒れていたクラウドはそこでようやく自分自身の頭に衝撃を与えたものの正体を知る。

特に変わりはない、さつきと同じ『ジェノバBeat』の触手だった。

下から生えてきた触手の軌道を曲げるために一度視線と共に体勢を下へと向けたことで、上部分の視野が狭くなっていた。

そこに。

長さだけで三から四〇キロはある凶太い巨大な触手が、死角から上から下へと振り下ろされただけだった。ということに、衝撃を實際に受けたクラウドには理解ができなかった。

何しろ。

威力というかダメージが半端なかったのだ。

今まで以上に鋭い痛みが頭に疾った。まるで瓦礫の塊を一六五km/hで投げ込まれたような感覚だった。頭から脳ミソの一部が漏れ出てもおかしくなくくらいの威力だった。

いや、単純にダメージの計算ができない。

自分の中に残されている力すら全く把握できない。

今までこんなことなかったのに、今まで以上のダメージを与えられたクラウドは地面に倒れ伏す。

「っぐっ」

呻き声を漏らすと、宝条は愉快そうに含み笑いを響かせる。

『どうしたあ、失敗作？ まだ始まったばかりだろう？』

「ツ!!」

『ハハハハハハハハハハハハハハハハツ!!』

愉快に高らかに笑う気軽な声。

戦慄するクラウドの前で、もう一度無造作に、岩を真つ二つにするほどの威力を叩き出した触手が持ち上げられていく。

ほぼ垂直、そこから一気にクラウドに向けて腕が振り下ろされる。

そして。

「クラウド!!」

名を叫ぶ声が二つ。

気付けばクラウドの前に、キリトとユウキが真上に剣をクロスさせる形で立っていた。交差させ、威力を殺しているのだ。

あの威力の攻撃を受け止めれば、二人は無事では済まないはずだが。

少年少女の何の変哲もない防御は、頭蓋骨を割る程の一撃を真正面から受け止めて寸断した。

（切り、落とした）

あれほどの威力があったのに、あっさりと防いで見せたキリト達。刃に当たった腕は自らの威力によって鋭い切れ味を作り出し、勝手に切断された。

威力は変わらない？

一体どういふことなのか自信すらないままのクラウドに、

『本来なら今の一撃で死んでいてもおかしくないと思うが、なるほど、この程度の威力では物足りないようだなあ。もう少し下げてみるもよさそうだ』

ニヤリと笑いながら宝条は腕を振るう。

クラウドの後ろの地面から。

その動きに合わせ、赤黒い触手は鞭のようになり、その激しい衝撃がクラウドの全身へと一直線に襲いかかる。

「ッ!!」

クラウドはどうか痛みを堪えて立ち上がって弾き飛ばす。重い一撃ではなかった。

だが痛みは残留しておりどうしても防御の体勢に集中してしまい足が鈍ってしまう。膝を付き、切り落とすことへ繋がられなかったクラウドだったが、そんな彼を守るように、剣を携えたユウキがやや身

を屈めた状態で本体へと走り抜けていく。

「ヤアッ!!」

『「ふん」』

宝条、『ジエノバBeat』の腕がユウキへと向けられる。しかし彼女は素早い動きで一直線に放たれた赤黒い腕を上半身を振るようにして避けた。

それでいて、彼女の足は止まらなかった。

二度、三度も放たれようと、的確に回避しながらマクアフィテルを構え直し、トンデモ物体の懐へ飛び込んでいく。

そして。

キラツ、と。

宝条の前で、刃に光が宿る。ユウキがソードスキルを放とうとしている証拠だ。そう思った時にはすでに二人の視線は交差し、空気を裂きながら凄まじい速度で攻撃が襲いかかる。

合計五連撃のソードスキル。

上半身から下半身まで均等に切断しようとするそのスキルを、宝条にどうにかできる余裕はなかった。腕で防げばその腕は寸断され、どのみち本体へと攻撃が当たる。拳銃の弾丸よりも素早い動きでソードスキルを放ったユウキの刃は本体へと狙いを定める。

しかし、

『「システムコマンド。オブジェクトID《マクアフィテル》の重さのレベルを変更」』

それだけで、ユウキの動きがガクンと落ちた。持っていた得物に体が持つていかれるように、右手から地面へと引きずり落ちる。

「え!?!」

宝条の全身に向かって放たれたはずの剣の穂先が、重力の鎖に絡め取られるように止まってしまった。

なんとか持ち上げようとしても、マクアファイテルはピクリとも動かない。よって、カウンターのようは無造作に放たれた触手がユウキに襲いかかる。

ある言葉と共に。

『システムコマンド。ペイン・アブソーバ、レベルを5に変更』

「しま——ッ!!」

地面に剣を密着させている今のユウキではこれを避ける事はできない。

だから、

「ユウキ!!」

キリトがユウキと宝条の間に割り込むように飛び込んだ。剣で防ぎ、なんとか凌ごうと考えた。だが、宝条の方が早い。その巨大な腕はキリトの右手をすり抜けて胴体を引き裂くようにして迫る。

ゴバツ!! と。

思考は途中で切断された。

まるでギロチンのような刃が皮膚を切り裂くことなく押しつけて体に食い込むような嫌な感触が伝わる。

激痛が爆発する。

触手はそのままキリトの体をくの字に折り曲げ、横合いの壁へと思い切り叩き付けた。丁度、ティファとアスナが避難しているところだ。

鈍い音が走る。

「はッ!!」

「キリト(君)!!」





ティファはキリトをアスナに預けておいて、ユウキの方へと駆け出す。地面に触れたままの唇を動かしてティファに無事だという意思を伝える。

「だ、大丈夫だよ、ティファ」

「大丈夫じゃないよ！今は喋らないでじっとしててユウキ!!」

弱々しく、ティファの腕に抱かれるユウキ。

クラウドはその光景を見て、奥歯を噛み締めて、

「宝条・ッ!!」

『ま、ぎつとこんな所か。ただのプレイヤーが高位のIDを持つ私に太刀打ちできると思っていることが、すでに間違っている』

宝条がうそぶいている間に、クラウドの体はゆっくりと、ぐらぐらとした足取りで何とか立ち上がっていく。クラウドは右手に、ゆっくりと、ゆっくりと力を加えていく。

バスターソードを握る手に、力が戻る。

しかし、そんな彼の姿を見ても、宝条の余裕は崩れない。

『なんだ、まだいたのか失敗作。存在が薄すぎてすっかり忘れていたよ』

「ッ!!」

『しかし、こちらとしてもがっかりだ。かつてセフィロスを打ち破ったというからには多少は苦戦すると思っていたが、まさかここまで弱体化しているとはな。ジェノバ細胞の性能が上手く機能していれば、少なくともセフィロス・コピーとして身体能力があいつ以上になつていたはずなのに』

「黙れ!!」

思わず自分の手足に力を込めて猛進してしまうクラウドを見て、宝

条はうつすらとした笑みを浮かべた。

『システムコマンド。魔法発動、「ストップ」』  
「!?」

『じかんのマテリアをレベル3まで強化しなければ使えない魔法を  
こうも簡単に発動できるとは、仮想空間の可能性は無限大だなあ』

「ッ!!」

宝条の言葉と共に、クラウドの身体が一瞬空中で停止されてしま  
う。その隙に、あらゆる方向から無数の触手達が地面から生え、クラ  
ウドに群がっていた。

「クラウド!!」

キリト達は声を上げる。

だが、どうしようもなかった。

キリトとユウキはクラウドを本体へと向かわせるために展開し、剣  
を振るっていたが——権限に差がありすぎた。

オベイロン、須郷の高位のID権限を手に行っている奴はこの世界の  
支配者。望めば望むほど好き勝手に世界を変えられる。よって、ダ  
メージの拘束具が解き放たれた瞬間に、もうクラウド達に為す術はな  
かった。

時間にして、三分も満たない出来事だった。

あの唯一完全に戦闘能力がこの中で一番高く、奴に対抗できるであ  
ろうクラウドが、権限によって無力化された瞬間、勝敗は決したよう  
なものだ。

「クラウド!!」

「キリト君! 動いちやダメ!!」

「けど、このままだとクラウドが——ッ!!」

ダメージに両腕を取られ、地面に倒れ伏しながら、キリトはなんとか言葉を発せられた。

「ク、クラウド」

「ユウキ！ 無理しないで!!」

近くには、自分達と同じように地面に倒れ伏している剣士がいる。身体に至る所に激痛が走り、苦しげに呼吸を漏らしていた。

キリトの位置からだ、クラウドの姿だけが確認できない。夥しい数の触手に絡まれて、球体状に巻き付かれ握り潰されようとしていたため、視界が遮られていたのだ。

『クツクツ・ハハハハハハハハハハッ!!』

そんな中、悠然と微笑みながらクラウドにトドメを刺そうとしていた宝条が告げる。

『無様だなあ、失敗作』

「ッ!!」

『はっ！ 腐れ縁だ。貴様はそのまま現実でもショック症状が発生するくらいのダメージを味わわせてから、ログアウトさせてやろう』  
「っ・ッ!!」

『どうした？ ずっとこの世界から出たかったんだろ？ なら、望み通りに私の権限でログアウトさせてやる。ただし、目が覚めた時には死ぬほどの激痛が貴様を襲うがな。ハハハハハハハハハハッ!!』

クラウドは何とか固定されてしまった身体を動かそうとして抗うが、その間にドンドン彼の胴体に触手が巻き付いて、絞り取るように細くなっていく。

『さて、終わらせよう』



ように遅くなった。

「はあ、はあ」

地面に這いつくばって、必死に手を伸ばす。

よろめいて、倒れる。

歪んだ空間の上を滑った大剣を、震える指先で掴み取る。

いつから時間がゆっくりになったのか、覚えてない。

自分がやったのか、誰がやったのかさえ。

しかし、クラウドと同じくらいの大剣を握り締めると何故か体の芯から力が湧き出るようだった。

剣一本さえあれば、何でも出来ると思っていたからだろうか。何故なら自分は、クラウドと共に本物の化物を打ち破った英雄だから。背中を合わせ、共に世界を救った英雄だから。

「ッ!!」

もう一度。

キリトは大剣を握り締め、それでもまた立ち上がる。

目で見ても耳で聞いたところで、頭に入ってこない。全ての景色が停止されてしまっている中、全身はくまなく激痛の塊で、まるで全身が燃え盛っているような錯覚に苛まれる。

『なあ』

だからこそ、か。

彼は時間が停止した世界の中、彼は彼自身の意識の内側に集中していた。

『わかるか？ 聞こえてるだろ黒の剣士さん？』

ぼつりと。

でも確実な呼び掛けがある。

『俺ならまだ諦めないぜ？ 例え絶望的な状況でもな!!』

ここには少年しかいない。停止された世界の中では、少年以外誰も返事をしない。だけど、誰も聞いていない訳じゃない。

わかっている。

キリトはそこに、『語り手』がいることを確実にわかっている。

「」

応じるのはきつと、空気を震わせる肉声ではなかった。

神経か、あるいは想像させるための脳細胞か。とにかく、一つの意思があった。

キリトとは全く別個の信念を持ち、諦めない意思を持った誰かの声。

『夢を抱き締めろ、そして、どんな時でも【ソルジャー】の誇りは手放すなま！ お前はソルジャーじゃないけど、ハートの問題だ！ ハートの!!』

「」

『胸に刻んだ生きる気持ち。お前は大切な人を救うために再び剣を手にするかを選んだ剣士のはずだ。なら、何をすべきかわかっているだろ?』

「」

『言ってみろよ。言ってみろよ。立ちあがれよ、少年！ つまらない戦いはもう終わりだ。もしも叶えたい望みがあるなら、手を貸してやる』

『そいつ』は、確かにキリトの体の内側から彼の心を本格的にしていた。するとすぐに、キリトの本音が溢れ落ちる。

「俺は」

苦悩、諦観、挫折。

そんなものを滲ませる、キリトの言葉。

「アスナを助けたい」でも、その前に

」

「俺が生きている間、パーティーメンバーだけは失いたくない。それだけは絶対に嫌だ!!」

生きた人間の声。

キリトはしつかりと、目に見えない何かに対して自分の思いを告げた。

ならば『それ』は、迷わず見据える。

少年の本質を奮い立たせる一言を、切り込む。

『だったらやろうぜ、キリト!!』

名前を呼んで、そばにいる誰かはキリトを起き上がらせる。

敵か味方か。

そんなもの今はどうでもいい。

ギチギチギチ!! という鈍い音が体内から響いてきた。

血管、神経、筋肉、骨格。そのどれかが壊れている音なのかわからない。

しかし。

それでも躊躇なく、『それ』は言った。

『お前のすべきことを言ってみろ』

」

『俺の誇りで、想いで!! それ全部叶えてやる。だから言えよ!! お

前の想いを!! やりたいことを全部言え!!」

「仲間を助けたい!! 俺達の世界で、これ以上好き勝手させない!!」

◇◇◇◇◇

「うお」

喉の奥から哽れた声が洩れた。

「お おお」

歯を食い縛り、瀕死の獣にも似た声で唸りながら、彼は立ち上がり、  
そして、

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

ズドツ!! という凄まじい音が空間に鳴り響く。

赤い血が舞った。

寸断された『ジェノバ Beat』の腕の蛇口から、ぬめった液体が  
ポタポタと垂れた。全触手をクラウドに集結させていたため、腕で防  
ぐこともできず、体は地面に固定されて避けることもできず、一直線  
に一撃を喰らった宝条の体から、静かに力が抜けていく。

『な』

息を呑む音。

あの、だ。

あの余裕そうにしていた宝条の眉が怪訝そうに動き、わずかでは  
あったが奴が予想していた展開の領域の外へと状況が動いたことで、  
勝利の前提を覆せた。



『何？』

頭上でトドメを刺そうとしていた腕が分散され、クラウドの身体が投げ出され、そして強固な触手は電子となつて消えていく。

『何だ？ 何が起こった？ 私の計算に狂いはない!! 大体今の動きができる奴は——ッ!!』

と、そこで宝条の表情はようやく変わった。

ギョツと顔を強張らせ、信じられないといったような声を洩らす。

『ソルジャーくらいしかッ!!』

宝条は自分が打ちのめしたはずのキリトの方を見る。

そこにはあの囚われていたアスナしかおらず、彼女もまた、驚愕の眼差しで何かを見ていた。ユウキとティファも同様、アスナと同じように宝条の後ろにいる何かを見つめている。

宝条もつられるようにそちらへ視線を持つていく。

そこにいたのは、黒の装備に身を包んだ少年だった。

今にも折れそうな足で懸命に立ち上がり、全身に走る激痛に泣き言一つも言わないで、無言で宝条を睨み付けるような、そんな少年がそこにいた。

そして、

そして、

投げ出されたクラウドを無事に掴まえ、自分の隣に降ろしたキリトは改めて巨剣を構える。

『何だ、今のふざけた身体能力は。そのアバターでは最低限の動きしかできないはず。何をしたモルモットごときが!? まさか、その身にジエノバ細胞を埋め込ん——』

『んなわけないだろ』

キリトは得物を強く握り締め、気軽そうな態度で答える。

『仮想空間の中ではないえ、いきなりジエノバ細胞を移植するなんて、そんな複雑で難しいこと俺に出来るわけないだろ。今のはそんなのとは関係ない。俺達自身の力だ』

キリトの口に合わせて、『別の声』が響いてくる。

その声には、聞き覚えがあった。それを聞いた途端、宝条の喉が砂漠のように干上がった。

常識的に考えれば、あの少年はもう戦えない。あそこまで深刻なダメージを負ったアバターなら、動くことすら出来ないはず。にも拘わらず。

奴は恐るべき身体能力を發揮して自分の腕を切断して見せた。

まるでその動きは、あの『ソルジャー・クラス1st』のようだ。少なくとも1stレベルでないと出せない動き。

宝条はその存在の正体に気が付き叫ぼうとするが、その前にキリトが動いた。驚愕に彩られた宝条の本体へ、まっすぐ狙いを定め、キリトの口からこのような声が飛んできた。

彼の心意を具現化させるように、瞳に『青緑色』を宿らせ、

『ソルジャー・クラス1st！　　“ザックス” 参上!!』

## 第22章

明確な二重攻撃だった。

それはかつて誇りを託して旅立った、夢の跡。

人々の夢と誇りを守る力。

一人の少年が大剣で全てを覆し、瞳に宿る『魔晄の目』から飛ばされる鋭い眼光によって化物の腕を消し飛ばした瞬間だった。

『「とっておきのお見舞いしてやる!!」』

キリトの大剣が、空気を引き裂いていく。

掛け声と共に爆音が耳打ち、破壊の嵐が巻き起こる。大剣は重たい岩を割るように振り下ろされる。刃に赤い灯火が灯ると、その光を放つ。地面が陥没し、いくつもの触手の腕が飛んでいく。

メテオショット

いくつもの赤い弾丸が空を切つて爆発を引き起こし、地面ごと破壊するソルジャーにしかできない技。

『「グッ!？」』

一時的にだが、宝条の動きが鈍った。爆発によって巻き起こった爆煙によって前が見えなくなったのか、必死に腕を振り回して吹き飛ばそうとしている。

そしてクラウドは倒れながらもようやくその技を放ったキリトの顔を見る。

そこに立っていたのは、確かにあのキリトだ。

だが、それとは別の人影が彼の内側にいることに気付いていたクラウドは少年の名を呼ばず、小さく笑った。

「来たのか」

そう言ったクラウドの言葉に、キリトは小さく頷いて答えた。視線をクラウドに向け、手を差し出してくる。

クラウドは震える手でキリトの手を強く取った。

彼の手を掴んで起き上がるクラウドに、キリトは言う。

『「良いタイミングだったろ？」』

「もう少し、早く来てくれてもよかったですけど。」

『「ハハッ！ それくらい我慢してくれよ。こっちだっていろいろ準備が必要だったんだ』』

同じ口から、二重の声が溢れ出る。

ユウキとアスナとティファが、キリトの瞳が変化しているのを確認する。その声は外にも聞こえる声で、キリトから発せられた言葉ではないことに気が付いた。

「ザックス？」

一度顔を会わせたことがあるティファは信じられないものを見たような目をする。

あの時、あれ以降姿を目にすることがなかった、本物のソルジャー・クラス1st。クラウドの親友で、クラウドを裏から支えてくれた、彼にとつてかけがえのない大切な存在。

しかし、そいつはもう、死んでいるはずだ。

それなのに、キリトの口を借りてそいつは自分のかつての称号と名を名乗った。

名を聞いた瞬間、ティファに湧いてきた感情は困惑だった。何故、あの時のソルジャーの名前がキリトの口から出てきたのだ？

わけもわからない展開に、ティファはユウキを抱えながらも手を口

に当てて驚愕に満ちた表情を隠せずにはいた。

「……」

ユウキは、ゆつくりと首を傾けるようにしながら、ティファの腕に抱かれて視界を確保した。

その時。

揺れる視界の中で、ある少年の姿が青年へと変化していた。キリトと同じように黒髪でツンツンとしていて、前髪を少し垂らして他の髪は全てオールバックにし、左頬にバツテン印の傷跡を残した剣士の残像が見えた気がした。

消耗しきった体力の中で見た幻影だったのかもしれないが、無意識にあれば敵ではなく味方だと判断できた。

ユウキはそのまま口角を上げながら目を閉じ、応援に来た青年に後を託しながら一時的に眠りにつく。

「キリト、君？」

アスナの声が聞こえてきたキリトはそちらを向き、首を横に振って否定する。

『「悪いな、今は違う。俺、ザックス。ちよつと今は訳あってこいつの体を借りてるけど、昔ソルジャーをやってたんだ」』

その声に猛烈な違和感を抱くアスナだったが、敵ではないということとはすぐにわかった。

理由は、まさにその声。

聞き覚えのある声に過去の記憶が呼び起こされ、キリトの中にいる奴の正体を知ったアスナは驚愕の表情を淨かべる。

「もしかして、あの時檻から出してくれた……」

『そ！でも結局助けられなくて、あの時は悪かったな。俺に実体があれば完璧に救ってやれたんだけど。』

少し後悔しているザックスは、キリトの鼻に人差し指を当てて擦ると切り替えるようにニヤツと笑い、

『けどもう違う、今なら助けられる。みんなを救える。その願いに答えて、俺はこいつの体を借りて今立っていられる。だから——ツ！！』

ザックスは無言で大剣を握り締めた。

しかしそれだけではない。

彼はそのまま剣を構え直すと、隣にいるクラウドに向けて叫ぶ。

『やれるよな！クラウド！！』

「ああ!!」

彼の戦意に応じるように、クラウドもまた誇りを受け継いだバスターソードを構える。

爆煙から逃れた宝条はこの展開を見て、笑って見せる。

『クツクツ、素晴らしい。やはりソルジャーというのは人智を越えた存在だ。さすがに予想外だったよ、あの時人体実験として屋敷の地下に閉じ込めた二人がよもやこのような形で集まるとは思いもよらなんだな。しかし。』

全ての元凶が笑っている。ただ一直線に研究に没頭し、今までにあった犠牲を全て無視して、自儘に事を進めてきたマッドサイエンティストが。

『せっかく面白くなってきたんだ。期待を裏切らんでくれよ』

二人に応じるように、再び腕を再生させる。グジュグジュと音を立てて骸骨のような顔面から黒い液体が垂れると同時に、天井からも融解させる真つ黒な雨が降りだす。

二人は一度下がって避けて、境目の外へと避難すると、宝条は笑って告げる。

『ジエノバの可能性をもつと見せてくれよお、モルモット!!』

◇◇◇◇◇

クラウド、ザックス、宝条。

最初に激突したのは、他人のアバターを借りて仮想世界に降り立った二人だった。

つまり、ザックスが音速以上の速度で激突する。

ゴツツ!! と。

距離など関係なかった。立った一歩踏み出しただけで目と鼻の先をゼロにし、彼の独特な口調がキリトの口を借りて叫ぶ。

『いらっしやいませええええええええええッ!!』

大剣が振り下ろされる瞬間、轟音が目で見える現象より遅れて炸裂した。真つ黒に染まっている異空間を一時的に白く染め上げるほどの衝撃。その余波が後ろに控えているティファ達にまで到達し、思わず腕で目を覆う。

キリトの体を借りたザックスは、彼の願いを受けてここに立っている。よって容赦はしない。私情は多少あるが、少女を泣かせたクソ野郎に対して怯むことなく切り込んでいく。

しかし、

『まだまだ足りんぞソルジャー!!』

そのふぎけた口が囁いた途端、右腕で衝撃を受け止めた宝条が空いていた左腕を伸ばして叩きのめすが、

「ハアッ!!」

テニスのラケットを返すような、気軽な弾き飛ばし。

たったそれだけの力でジェノバの腕は容赦なく切断される。たとえ切断されても、HPが残っている限りすぐに再生されるが、ならばそうなるまで斬り続ければいい。

二人で力を合わせれば、そんなのすぐに叶えられる。

下から抉り取るように、クラウドのバスターソードがその骸骨の顎を狙う。

「ハアアアッ!!」

あの時ユージーン將軍にも使った大技、クライムハザード。合計八連撃の赤い閃光が宝条の体から火花を散らせる。

『ツ!! チツ!!』

宝条の舌打ちが聞こえた。

いかに人智を越えた宇宙生物の細胞を取り込んだとしても、ダメージの蓄積をなかったことにはできない。

突然乱入してきたクラウドを警戒し、わずかに、ほんのわずかに敵意を変更した宝条に、ザックスが喰らいつく。

『「見逃すなよ!!」』

その巨大な刃に光を灯し、クラウドの方へと大きく突き刺すような



格好で宝条の体を捉える。クラウドは背後も見ずに気配だけで仲間の攻撃が来るところを察知し、左に体を反らしてザックスの刃を通過させる。

『とりやあッ!!』

『「ッ!?!」』

突き刺された刃はもはや自動車に突っ込まれたような衝撃だった。一瞬で肺の中の酸素を口からではなく腹から排出される感覚は異常な感触。

宝条はこの時になってやっと気付く。

正直、舐めていた。

たかが失敗作一人だけならどうにかなったかもしれない。しかし突然の乱入者に何もかもを崩されたせいでまた一から計算しなおさなければならなくなるという、面倒な手順が一つ追加されただけで隙を見せることになってしまった。

青緑色に光る眼球で、突き刺さしながら静止したザックスは宝条を見据える。

『「散々コケにして楽しむアンタに、これだけは言いたい」』

目を閉じ、瞑想するように静かになったかと思えば、その目蓋をゆっくりと開けて漆黒の瞳を見せつけ、

「俺達をあまり甘く見るなよ」

大きく一步踏み込み、引き抜いた剣を正面から撃ち下ろす。反射的に掲げた宝条の左腕を一撃で断ち切り、睥睨していた奴の目を驚愕に染めさせる。

今のは明らかに一人だけの声だ。

つまり、今のはザックスではない。

キリトがやったのだ。

見えないバトンを渡すように、途端に瞳の色が置き換わると体の主導権を変えられるらしい。フィジカルな動きに対しては、ザックスが対処するしかないと思われていたが、それをずっと続ければキリトの一番はなくなる。

それをわかつていたザックスは、こう思っていた。

奴を倒すのは自分じゃない。

キリトとクラウドだ。

自分は、ただの意識。そんな存在が元凶を倒すには相応しくない。ならば、自分は最大限にキリトをカバーし、おいしい所を持っていかせるのが最終的な目標だ。

それに、

(あまり時間はないぞ、キリト)

「ああ、わかってる」

仮想とはいえ、死人が現世に留まっていられることさえ奇跡に近い状態なのだ。キリトの体を依り代としても、内側にある熱い想いは薄れつつある。

(俺の身体能力でお前の体を操るには限界がある。少し時間を稼いで息を整えてやるつもりだったが、**・** どうやらあちらさんはこっちの事情なんてどうでもいいみたいだな **・**)

ヒュン!! と。

宝条の背後からいくつもの触手が襲いかかる。死角からの数の暴力。キリトの身体能力では捌き切れるかわからぬ数。

であれば、

「スイッチ!!」

(了々解々!!)

再びキリトの目に魔眼を浴びた者に宿る神秘的な光が戻る。上下左右から襲いかかる触手を連続で切り崩す。

ザックスは目にも止まらぬ速さで腕を捌いているが、これは防御であって攻撃ではない。ダメージを与えている実感がないため、これでは埒が明かない。

よって、ザックスは背中に向けて叫ぶ。

『頼むぜクラウド!!』

「任せろ!!」

意図を組み取ったクラウドは、即座に本体へと突撃する。

宙に残る捌かれた触手を掻き分けて現れたクラウドに、宝条は慌てて再生させた触手で顔を守るが、そこへザックスが隙を見せた奴の下腹部を狙った一撃が見舞う。

『ぐばあッ!?!』

鈍い音が炸裂し、二つの攻撃がほぼ同時に衝突すると、地面に固定されていた宝条の巨体が一気に吹き飛ばされる。

いくつもの柱を巻き込み、追加ダメージを与えると、宝条の巨体は見えない壁に激突して崩れてきた瓦礫の下敷きになる。

散々腕を振り回していた『ジェノバ Beat』はぐしゃぐしゃにひしゃげた瓦礫に半ばまで体を埋めるような格好で動きを止めていた。天井を突き破って襲いかかってきた瓦礫のシャワーが、巨体となった宝条の真上から降り注いだ。

怒涛の爆風を受けた宝条は瓦礫の下敷きになるが。

ググッと、瓦礫の中から起き上がった宝条は、元の姿のオベイロンへと戻っていた。

『ッ!! これほどまでとは...』

しかし、その顔から余裕が消えることはない。奴はまだこの状況になっても諦めていない様子だ。

『所詮は偽物の体、痛みなど元から感じんよ』

埃を払うように肩を叩いて、

『全ての権限を持っている私からすれば、お前達など敵ではない!!』

両腕を伸ばし、オベイロンの口から音声コマンドが放たれる。

『システムコマンド。魔法発動！「フレア」!!』

炎系統の魔法でも高位なものをいくつも放つ宝条。闇雲に放つ魔法は空間そのものを破壊し、まるで道連れにでもしようとするかのようにならざるに解き放っている。

『誰にも邪魔はさせん。私の研究は誰にも止められない!!』

高位のIDによって発動される魔法は無限で、魔力なんて概念は存在しない。自棄にもなったかのような攻撃をする宝条は最大級の悪あがきをする。

しかし、

「この時点でその程度の悪あがきしかできないんじゃ、もう勝負はついたんじゃないか？」

『なに？』

「だって」

漆黒に染まった瞳から青緑色に戻し、

『せつかくの高位のIDを持つてるのに世界をぶっ壊すほどの魔法を発動させないなんて、勿体なくないか?』  
『!?!』

その助言に宝条は慌てたように音声コマンドを言い放つが、もう遅い。

『システムコマンド!! オブジェクトID [エクスカリバー] を  
ジェネ——ツ!!』  
『遅えツ!!』

微細な数字の羅列が猛烈な勢いで流れてオベイロンの手に一本の剣が生成される前に、ザックスが駆け出した。

どんな形であれ、その動きよりも速く動いてしまえば全てが終わる。

剣が振るわれる前に懐に入ってしまったえば、途中どんなトラップであろうとソルジャーの身体能力を借りているキリトの体を止めるには至らない。

そして。

エクスカリバーという伝説の剣の威力を最大限に活かせる距離になってしまえば、もうキリトの大剣も届く。振るわれる黄金剣に合わせる形で刃を振り下ろし、その腕ごと断ち切ることができる。

つまり。

ザックスの足が、宝条の懐へと強く踏み込む。

全身の体重移動によって強く握り締めた大剣へ絶大な力が加わり、振り抜かれた刃は硬く強く。最大の重みを乗せて振り下ろされる。

『オラアアアアアアツ!!』

ザシュ!! と。

全ての元凶を逃がさぬように、翻弄され続けた二人の意志が宝条の右半身を捉えた。

◇◇◇◇◇

『はあ はあ ツ!!』

肩の所から剣を持つ腕が切断された。

攻撃の前兆を、ソルジャーとしての身体能力の発動を、全く関知できな一撃だった。真正面から放たれた攻撃が、容赦なく彼の五体を切り離す。

世界を滅ぼす、または塗り替えるほどの影響力を持つ伝説の剣を握った右腕が宙を舞い、闇の中へと沈んでいった。

利き手を失った宝条は、真つ黒な地面に赤い血を撒き散らしながら絶叫した。

『ググツ!!』

もう片方の手で傷口を押さえつけ、目の前にいるモルモットどもを睨み付ける。息を肩でしながら、擬似的な電気信号の痛みを耐え、それでも彼の表情から余裕は消えない。むしろ、限界以上の動きを見せたキリトの体を借りて疲弊しているザックスを蔑みの目で見下ろしている。

『はあ はあ ツ!!』

歯を食い縛り、筋肉痛にも似た感覚を強引にこらえて、ザックスは支えとしているキリトの大剣へ力を込める。その腕の力を使い、彼は目眩に教われながらもふらふらと体を起こしていく。

が、  
ガクン、と。

『ツ!!』

「ザックスツ!!」

彼はキリトの膝を地面に付かせ、ごほごほと短く咳き込んだ。

頭が痛いだけでなく、眼球が飛び出しそうだった。駆け寄ってきたクラウドが肩を貸し、ふらふらした動きで支えられて立ち上がるがそれ以上の動きは現時点では出来ない。

その目の前の光景に、宝条は嘲笑を注ぐ。

『時間切れとは無様な末路だなあ、ソルジャー・クラス1st?』

『ツ!!』

『望み通り今は消えてやる。しかし、私はまたいずれここへ戻ってくる!! 私の意識はネットワークにいくつも散らばっている! それを再集合させれば、また私という存在が仮想と現世、どちらにも蘇る事が出来る!!』

宝条は構えも取らなかった。残った左手を動かしてウインドウを開くと、オベイロンの権限でまた消えたはずのエクスキャリバーを掴み取る。パントマイムのような仕草の中に、キリトとザックスはおかしなものを知覚した。

エクスキャリバーが変質していくのだ。

ガキゴキと噛み合わない音が連続し、強引にその剣は別の形状へと変化させられる。本来、その剣はここに現れるはずがないのだ。にも拘らず奴は記憶とデータといった不確かな未分類情報で、それを形にして具現化させる。

アルテマウエポン

究極の星の守護者と称されたあのアルテマウエポンから手に入る、一本の大剣。

それを手にした宝条は、血反吐を吐きながら呟いた。







『もう、終わらせるぞ。クラウド』  
「ああ」

今まで支えられて休憩していたザックスは、静かにクラウドから離れる。

そして。

クラウドは今まで以上に硬く強く、剣を握り締めた。そのまま現在進行形で変わり果てている宝条に向けて、穂先を向けて睨み付ける。宝条は歪になった眼球で、近付いてくるクラウドとザックスをギョロリと見据えると、苦しみながらも笑顔絶やさず笑いかける。

『ひ、ひひッ!! ふぎけるな。失敗作であるお前達にまた倒されるだど?! ははっ、笑わせるな!! ありえない。そんな計算外のこと、あつて良いはずがない!!』

「宝条」

『あ?!?!』

「アンタのごたくは、もうたくさんだ」

『なにい』

「腐りきつた縁。これで終わりにして見せる!!」

遮るように、クラウドは言葉を重ねる。

青緑色に光る瞳に標的を映して、二人は目の前の敵を睨み付ける。

二つの得物が重なり合い、共に穂先を宝条に向けて背中同士をくっつけると、

『「合わせろ!」』

「ああ!!」

ゴッ!! と空気が震えた。

降り続ける瓦礫を蹴散らし、各々が駆ける。

宝条は強引にも歪になったオベイロンのアバターを動かし二人を

叩き潰そうとするが、その前にボゴン!! と。再びの爆発音と共に、歪になった腕が巨大な顎のように開いたのだ。まるで捕食しているようだった。目の前の敵ではなく、オベイロンのアバターを取り込むために。

その隙を二人は逃がさない。

クラウドやザックスは壁や天井を蹴っているのか、あるいは移動時の衝撃波が叩いているのか。あちらこちらから迫り来る打撃音にも似た硬い音が連続して響き渡る。

空間を切り裂いて近付いてきた二人は、息を合わせるようにして叫ぶ。

『行くぞ!』

「不運を恨めツ!!」

目で追うのも困難な速度で動く二人の言葉は、それを形にするように斬り込んでいく。

『オラオラオラアツ!!』

ザックスは剣に青いライトエフェクトを宿すと、目にも止まらぬ速さでまずクロス字に剣を振るい、縦横に一閃引くと、最後に縦一直線の最大の特技を決める。

クラウドもそれに合わせるように、縦に一閃、上から真横へと一閃、最後に真ん中にバツの字を残すような三連撃の技を放ち、ザックスと共に剣が導く運命を描き出す。

連続斬と凶斬り。

二人して凶の字を描くように斬りつけ、対象の運命を決定付ける。

規格外の一撃が放たれ、オベイロンの体に乗っ取った宝条の五体を綺麗に分裂させ、その法則を切り崩し、マッドサイエンティストが頭

の中で思い描いていた理想図を一ミリでも狂わせる。

『ギニャアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!』』

四肢を切断されて上半身のみとなった宝条は重い音を立てて床に転がり、直後に残っていた歪な形の右腕と左腕、そして両足が白い炎に包まれて燃え崩れた。

二人の意識が重なり合う。

双方の全身に、得体のしれない力が満たされる。

床に転がっている元凶を見て、クラウドはつまらなそうな口調で隣にいる彼に言う。

「終わらせろ、キリト」

「ああ」

吐き捨てるように。

瞳を戻したキリトは語る。

「お前は真の意味での偽物の王だ。盗まれた世界を上から更に盗み取り、そのこの住人を、世界を、その全てを奪おうとした泥棒の王だ」  
「ひ、ヒヒッ!! どの口で貴様、偉大な科学者である私に向かってッ  
!!」

宝条はまるで須郷の想いを代弁するかのように叫び出す。

『全ては何もせず、現実の世界にあるものだけに甘んじて、ただ他人が作ったゲームに勝手に入り込んで楽しんでいただけの凡人のお前が、偉大なる私の研究の邪魔をするというのか!』』

「邪魔なのはお前だ。科学者なら、なぜ人を苦しめて笑う? 知性は特権じゃなくて授かり物だ。それを他人のために使わずに自分を満たすためだけに使っている。ゲスな願いや身勝手な欲望のために、多





## 第23章

全て終わった。

しかし根本的なことを忘れてはならない。

『はあくあ。なんか疲れた〜!!』

「ザックス」

『久しぶりだな、クラウド。つて、この姿で言ったら違和感ありまくりか!!』

「?」  
『わかってるよ、聞きたいこととか沢山あるんだろ?』

ツンツン頭がツンツン頭の少年を見て困惑するのも無理はない。何しろ自分をこんな身体にした奴が違う姿になって別世界に現れたと思つたら、今度はどういうわけか前の世界から一緒に戦ってきた少年の身体に死んだはずの親友の意識が憑依しているのだから。

ザックスの意識を具現化させるために少年の瞳が『魔晄』を浴びた者の目である青緑色ではあるが、基本的に姿はキリトのままである。

しかも途中で意識を交代させるといふ芸当までしているため、今どっちなのか判断がしづらい。

一応目を見れば判別可能だが、遠目からだとはわかりにくい。

ザックス、だということとはひとまず確定。

今、誰もが思っている謎。

何故ここにいるのか、どうしてキリトの身体に憑依しているのか、それがどうしても知りたかったクラウドはキリトの身体の中にいるザックスに話しかける。

「あのさ、ザックス」

『「悪いクラウド」』

「?」

「その前に、彼女を元の世界に返したい」

瞳の色が変わったのと、声の一つに戻った。

キリトはボロボロになってしまった初期装備の大剣を手放すように落とすと、そのまま膝について先程までの闘いを見ていたアスナの方へと歩き出す。

彼女と視線を合わせるようにして、キリトも床に膝を付く。

「キリト君だね」

「うん」

「ッ!!」

静かに、少年は頷いた。

彼女は溢れ出てくる涙を止められず、感情のままにそのまま手が届く距離にまで近付いてきてくれたキリトの首に両腕を回して抱きつく。

涙を流して腕の中に飛び込んできたアスナに、言葉では説明できないほどの喜びが涙へと形を変えて少年の頬を伝う。

彼はもう二度と離さないと誓うように、彼女のその細い体を優しく抱きしめ、目一杯泣いた。

ただ一言も発することなく、彼らは泣き続けていた。

クラウドとティファはその様子を、温かく見守っていた。

「信じてた」

ようやく、少女は震える唇を動かして囁いた。

「ううん、信じてる。これまでも、これからも。君は私のヒーローいつでもどこでも、助けに来てくれるって」



アスナの手が少年の頬を撫でる。  
彼はその手を優しく握る。  
が。

それと同時に静かに息を呑んだ。

（違う。俺は俺には、本当は何の力もなくて　　ツ!!）

（そんなことないぞキリト!!）

（!?)

唐突に、頭に声が響いた。

彼のその考えを否定するように、少年の中に宿る『英雄』が語り出す。

（さつきも言っただろ？　夢を持って、そしてどんな時も誇りを手放す  
なって）

（　　ああ）

（お前にはそれがある。たとえ世界中の誰もがお前を誇り、疑っても、  
その夢と誇りは手放さなかつた。信じて貫き通せる強さを、お前は  
持っている）

（　　）

（ま！　初対面の相手にこんなこと言われても戸惑うだけかもしれない  
いけどさ、これだけは確かだ。現にお前は、大切な人を守るためにま  
た剣を握って立ち上がった。お前は強いよ、キリト）

彼の言葉に、キリトは最後まで耳を傾け続けた。

それが礼節だと思ったから。

その言葉を聞いて、キリトはわずかに口角を上げて目を閉じ、内側  
にいる彼に自分の意思を伝えると、最愛の人に優しく告げる。

「そうなるように頑張るよ　　さあ、帰ろう」

キリトはまるで初めからわかっているかのように手慣れた作業で左手を振る。すると、通常のプレイヤーの前に現れるウィンドウとは違って、複雑な文字が並べられた特殊なシステムウィンドウが姿を現す。

その時、彼の瞳は青緑色だった。

彼は迷うことなく指をスライドさせてスクロールを移動させ、転送関連メニューバーがある場所を見つけて押そうとすると、不意に指が止まった。

視線を感じたのだ。

何かと思つて手を止めたキリトは、自分の顔を見てくるアスナに思わずギョツとした。

『「な、何？」』

「綺麗」

『「ん？ 顔？ こいつの顔なら見慣れてるだろ？」』

「ううん、あなたの、瞳。クラウドさんと同じ」

『「お！ 気に入った!? だったらもつと見てよ!!」』

(おい!?)

いつの間にか入れ替わっていたらしい。

そのことに気付いていたアスナは彼の瞳を見て魅力を感じ、つい言葉が出てしまった。瞳を褒められて嬉しくなったザックスは口説こうとするかのように顔を近付けてもつと褒めるように言うが、意識となつたキリトに止められてしまった。

『「空みたいな色だろ？ 【魔晄】を浴びた者の瞳、ソルジャーの証だ。クラウドもな！」』

そう言つてクラウドの方を向くが、彼は困ったように難しい顔をして頭を掻いていた。

自分はただの元一般兵。

ソルジャーとしての措置を強引にさせられて奇跡的に正気を取り戻しただけの存在。理屈で言えば彼はソルジャーと同等の力を得ているが、階級的に言えば彼は一般兵である。だから自分は違うと思っっていると、

『クラウド!!』

「!」

『ハートの問題だ! ハートの!!』

胸を叩き、ただそう言うザックス。

前にも幻想の中で聞いた彼の励ましを思い出し、クラウドはただ笑って頷く。

ザックスは前へと向き直すと、アスナが話しかける。

「ありがとうございます」

『うん?』

「私だけじゃなくて、キリト君を、みんなを助けてくれて」

『気にすんなって! それが、ソルジャーとしての務めだからな!!』

「ふふっ」

『ん? なんかおかしいこと言ったか? 俺?』

「うん。なんか、変な感じがして。あのキリト君がものすごく明るく話してくるから、ちよつと面白くてッ!!」

(なッ!?)

彼女はクスツと笑っていた。

そりやあもう純粹に、面白そうに。

『あはは! こいつそんなに普段からテンション低いのか!』

(おい! 笑うなよ!?)

『ハハハツ!! 悪い悪い!!』

ひとしきりキリトの体で笑ったザックスは瞳を閉じる。すると、その瞳の色は少年の漆黒色へと戻っていた。

指先には、ログアウトボタンがある。

あとはお前のタイミングで押せ、という意味だろう。

ザックスの意図を悟ったキリトは、こちらを見つめてくるアスナに視線を合わせ、

「現実世界は、たぶんもう夜だ。でも、すぐに君に会いに行くよ」

「うん、待ってる。最初に会うのは、キリト君がいいもの」

そうして、キリトはログアウトボタン指を触れ、青い発光が指先に灯る。彼はその指先で、泣いている彼女の頬に伝う雫を拭う。

すると、ログアウトのターゲットが選ばれたことで彼女の身体は鮮やかなブルーの光に身を包まれ、クリスタルのように透き通っていく。

「とうとう終わるんだね。帰れるんだね、あの世界に」

「そうだよ。色々変わってきつと驚くと思うよ」

「楽しみだなあ。いっぱいいろんな所に行つて、いろんなことしようね」

「ああ、きつと」

「待ってるね、キリト君！」

そうして、彼女の言葉が終わった直後、アスナというアバターは光となって消えた。

光の粒が宙を舞い、空へと登っていくのを最後まで見送ったキリトは静かに立ち上がると、今度はティファの方へと歩いていく。

彼女の腕の中で眠っている、ユウキをログアウトさせるためだ。バトンタッチするように、彼の瞳は変わる。

『「この子も、凄く頑張ってくれたからな。少し休ませてやらないと」』

ザックスは先程と同じ手順で、ユウキをログアウトさせるための作業を開始する。その間、ティファが話しかけてくる。

「ザックス、なんだよね？」

『「ティファ、だったよな。会うのは、あの時」以来か』

『あの時』。

全ての始まりであり、全てが崩壊した日。

今から七年ほど前、魔晄炉の調査のためニブルヘイムを訪れた際に起こった災害。

### ニブルヘイム事件。

クラウドとティファの故郷、ニブルヘイムにある魔晄炉の異常動作。そして、凶暴なモンスターが発生している原因の調査及び解決を目的とし、ザックスとセフィロス、当時一般兵だったクラウドと他人が参加した。

その魔晄炉までのガイドをしてくれたのが、ティファだった。

道中、危険な目に遭ったが、ソルジャー・クラス1stであるザックスとセフィロスがボディーガード役として動いてくれたおかげで無事に魔晄炉に辿り着けたが、その後、全てが変わった。

魔晄炉の中にあつた、大量の培養カプセル。

その中には高密度の魔晄を浴びせられ続ける異形な存在が眠っており、凶暴なモンスターが暴れまわっていたのはこれが原因だった。

つまり、ザックス達が所属していた『神羅』がモンスターを生み出していたのだ。

ということをセフィロスから聞かされ、ソルジャーも魔晄を浴びて生み出されるが、『それでも普通の人間』である、というワードに引っかけたザックスの何気ない「ある一言」によって、全てが始まった。

“普通のソルジャーって、アンタは違うのか？”

それが、英雄セフィロスを狂わせる呪いの呪文になるとは思っても見なかった。セフィロスはその一言で自分自身に疑念を抱き、暴走してしまった。

彼は、死んでもそのことを悔やんでいた。

自分のその一言さえなければ、あの事件は起きなかったかも知れない。クラウド達に、重荷を背負わせることもなかったかもしれない。そのことを未練に感じていたザックスは、死んでも精神となってライフストリームを彷徨い続け、そして今回、奇跡的に仮想空間で実態を得ることに成功した。

どうやって入ってきたのか、それを説明するためにまずはユウキをログアウトさせる。

『ゆっくり、休めよ』

ログアウトボタンを押し、対象を決めるための青い発光が指先に灯つたのを確認すると、彼女の頭に触れる。

ユウキの身体が鮮やかなブルーに包まれて、光の粒子となって空へと登っていく。

それを確認したザックスは立ち上がって、二人が登っていった暗闇の天井を見上げながら、残ったクラウドとティファに話しかける。

『なんか、変な感じだよな。死んだはずの人間がこういう形で現れるなんて』

その言葉に反応したのはクラウドだった。

彼は首を横に振り、

「いや、会いたかったよザックス」



唐突だった。

男の声、のようなものを耳にして思わずそちらに目をやってみれば、白衣を着た男性がザックスの隣に立っていた。

一瞬、新手の敵か何かかと思つて表情を強張らせるクラウドとティファだったが、

『私を忘れたか。仮想世界を創造した製作者において何者なのかすぐにわかると思つたのだがね』

「茅場？」

キリトはそう呟く。

少年と並行して立っているクラウド達はまだ怪訝な顔のままだ。

ザックスと同じくその半透明な身体を操つて、電子の声で言葉を紡ぐ。

『状況は大体把握している。私はもはや実態を持たない存在だからね。データとなった私には仮想空間の至るところに存在している。彼、ザックス君と同じようにネットワークに溶け込んだ意識は様々な空間を行き来し、この世界を見守っていた』

「世界を、見守る？」

ごくりと喉を鳴らしてキリトは訊ねる。

『異界の人物にこれ以上好き勝手に暴れられては困るのでね。我々の世界を汚すのだけはどうしても我慢ならない。だからこそ、私は“彼”に頼った。クラウド君の力源になつていいる存在をこの世界に呼び出し、解決させるためにキリト君のAvatarに憑依させ、須郷よりも高位のIDを付与させた』

『ま、そういうわけで俺は今ここにいてわけだ。難しいことは実は俺もよくわかってないんだけど、つまりはこのおっさんの権限のお



かげで、最適なアバターを見つけ出したことで実体を手に入れて、それであいつよりも高位なIDを貰ったことであの子達をログアウトさせることが出来たってわけだ!』

「「」」

その言葉を聞いて。

永遠の疑問のループに閉じ込められた気がして、ふわりと三人の全身から力が抜けた。

つまり、アスナとユウキをログアウトさせることが出来たのは茅場がザックスに高位のIDを託したからなのか。それでキリトというアバターを依り代にしたことによってシステムウィンドウを開くことが出来たのか。

アスナが先程言っていた鳥籠の檻から出してくれたというのも、その権限があったからなのだろうか。

正直無茶苦茶な理由な気がする。

しかし、ようやくと安堵の息を吐く。

ほんのわずかな、それでいて確実な休息。

直後の出来事だった。

茅場はふつと笑うと、三人に向けてこう語った。

『とはいえ、君達と私は無償の善意など通用する仲ではないだろう。もちろん、手助けをした代償は必要だよ、常にね』

その言葉に、三人は顔を合わせる。

茅場が一体何を望んでいるのか、大体予想できたからだ。

キリトが前に出て何を望んでいるのか訊ねる。

「何をさせたいんだ?」

『贖罪だ』

そう言うと、茅場の手元に銀色に輝く結晶が瞬いた。とても幻想的

で水晶のようにも見える物体。

茅場はその光の結晶をキリトへと手渡した。

「これは？」

『世界の種子だ』

「種子？」

『芽吹けばいずれどういふものなのかわかる。その後の判断は君に任せよう。消去し、忘れるもよし。だが、もし君があの世界に憎しみ以外に別の感情があるとしたら』

そう言つて茅場はクラウドとティファを見る。微笑んで、嬉しそうに。

そして意味深なことを述べた。

『真の意味で異世界といふものに行ける日が来るかもしれない』

それだけを言い残し、茅場は背を向けてキリト達に語りかける。

『もし異世界に行くとなるのなら、【それ】はきつと役に立つはずだ。捨てるのも良いが、私的には大切に保管することをおすすめるよ。彼らにもう一度会いたければね』

その瞬間、茅場は一瞬だけクラウドの方を見た。しかしすぐに視線を戻し、キリトの顔を見ると無言のまま背を向けた。

『では、私はもう行くよ。いずれまた会うことになるだろう。キリト君、クラウド君。次に会えるのを楽しみにしているよ』

その言葉を最後に、茅場という人物は虚空へと消え去った。



『ま、そういうわけで、俺はあの茅場っていうやつのおかげで一時的にキリトのアバターを依り代にしてたってわけだ』

「理屈がよくわからないんだが」

『ま、そうなるのも無理はないよな。でもさ、俺たちの世界ではライフ・ストーリーっていう死んだら精神はそこに還るって言われてるじゃん？俺もセフィロスと同じように魔晄が使われているネットワークに迷い込んで、そこでたまたま会ったあの茅場って人の力によってこの世界に降り立つことが出来たわけ』

「」

『まあ、とにかく俺っていう記憶を構築するネットワークは今も存在し続けていて、死んでいる俺の情報がライフ・ストーリーに蓄えられている状態なんだ。つまり死んでいるけど記憶と精神だけは生きているって感じだな』

「」

『なあ、聞いてるクラウド？ いや確かに難しい話だけどさ、それでも無言でいられるとさすがに傷つくぞ俺だつて〜！』

クラウドはとにかくザックスのわかりにくい説明と話し方に頭を悩ませている。そもそも、半透明の幽霊らしき姿をした親友に話しかけている時点でおかしい。

暗闇の中で行われる話し合いに、キリトとティファは首を傾げているが、聞き手であるクラウドでさえも理解できていない。

今ある状況は、きつとクラウドにとっても予想外の事態に間違いない。

それでもザックスは続ける。

『ま、なんにしてもこうやってまた会えたんだ！俺は嬉しいぜ!!』

「ああ、俺も嬉しいよザックス」

久々の再会。

思ってもみななかった、二度と会えないと思っていた奴が目の前にいる。それだけで、クラウドの瞳を麗せるのには十分だった。

彼は涙を見せないように必死に堪えているが、ザックスにはお見通しだった。

『全く、相変わらずだなくクラウド』

「すまない」

『でも、ちよつと安心した』

「？」

『結局俺は英雄にはならなかったけど、その夢と誇りをちゃんと受け継いでくれている。それだけで、俺は救われた気がするよ』

クラウドは。

しばらくの間、立ったまま動けなかった。

きつと、彼にとつてザックスの想いを引き継ぐのは本音を言えば重すぎたのかもしれない。ソルジャーではなくただの一般兵が背負えるものではないことだけはわかつている。

だからクラウドは不安だった。

彼から譲り受けたバスターソード、あんなに重いもの自分の手におえるわけないと感じていた。

だが。

やがて青年は呟いた。

誇りを譲ったザックスはそれを聞いていた。

「なあ、ザックス」

「ん？」

「俺は、アンタの生きた証になれたかな？」

『ああ、なれてるよ』

笑顔で、彼は即答した。

『さつきも言ったけど、お前は俺の夢を引き継いでくれている。それだけでも俺は嬉しい。二人で頑張ってきた努力を無駄にせず、確実にお前は前を向いて歩いている。だからクラウド——』

区切るようにして、彼はニツコリと笑ってこう言った。

『ありがとな、生きててくれて!!』

そう言った直後だった。

彼の身体はバラバラバラと、借り物の肉体から剥がされるように、白い花弁のようなものが真っ暗な部屋へ散らばっていく。

『どうやら、時間みたいだな』

間もなく、ソルジャー・クラス1stは塗り潰される。ある意味において、それは単純に死んでしまう事よりもはるかにおぞましく感じられた。

冗談抜きに、いくつもの修羅場を潜り抜けてきたザックスだからこそ、消える前に言いたいことをキリトに告げる。

『キリト!!』

『!!』

『どうか、クラウドを頼んだぜ！ お前になら、クラウドを任せられる!!』

ニツ！ と笑って親指を立てるザックスにキリトは驚愕しながらもすぐに笑顔になって『ああ』と呟いた。

そしてザックスはティファに顔を向けると、

『ティファ!』

『!』

『違う世界つつつても、久しぶりに会えて嬉しかったぜ!』

純粋な笑顔を向けてそう言ったザックスは、いよいよ姿が見えなくなるどころにまで身体が薄くなつていつていた。

一時だが、この世界に別れを告げよう。

最後の言葉はどうするべきなのか、答えは決まっている。

『クラウド』

「!」

ザックスはクラウドの顔を見て、ニツコリと満面の笑顔を向けてこう言った。

『さようなら、なんて言わないぜ』

笑つて。

安心させるように。

『またな!! クラウド!!』

◇◇◇◇◇

全てを見届けた英雄は、空へと消えていった。三人は最後までその光景を目に焼き付け、一生忘れることのない思い出として残り続けるだろう。

「クラウド」

すると、すぐ隣から声が聞こえてきた。

終わったのに、もう全てが終焉を迎えたというのに。

「もしかしたら、もう会えないかもしれないからさ」

キリトは俯きながらも、喉に力を入れて、言いたかったことを全て吐き出す。

「あの時は、悪かったな」

「？」

「その、S A O 時代にお前を、スパイかなんかだと疑ったりして敵意を向けて、許されることじゃないのはわかってる。けど、どうしても謝りたかったんだ」

彼のその言葉に、クラウドは表情を変えなかった。

今更そんなことか、と。

まるで気にしていないかのように、彼はザックスがよく使っていた言葉を借りてキリトを慰める。

「別に気にしてない。それに、もう二度と会えないと決まったわけじゃないだろう」

「え？」

「友達」。。。「だろう？」

それだけだった。

たったそれだけで、キリトは救われた気がした。

クラウドは笑って、彼を許した。

それと同時に、彼はキリトのことを仲間として認めた。仲間である以上、想いは繋がっている。心に染み付いてしまっているものは簡単には切れない。

仲間が自分達のことを覚えている限り、もう二度と会えないなんてことはない。

その一言に救われたキリトは、ありがとうとだけ告げて、茅場から受け取った輝く結晶をしまうと、顔を上げて少女の名を呼ぶ。

「ユイ、いるか？ 大丈夫か!？」

そう叫んだ途端、暗闇の世界が一直線に割れた。暗闇空間そのものが光を放ち漆黒の闇を払って景色を映し出す。

世界樹の枝の上。

地平線の彼方では夕日が沈み始めている。

それと同時に、三人の眼前の空間に光が二つ凝縮し、ぽんと音を立てて黒髪の少女と、金髪の少年が姿を現した。

黒髪の少女はキリトを見るなりパパと呼んで駆け寄り、少年はクラウド達の元に駆け寄っていく。

「クラウドさん！ こ無事で何よりです!!」

「無事だったか、よかった」

「はい。突然のバグによりデータが破損しそうになったので一時的にクラウドさんのVRバトルシミュレーターに避難させていただきました。全て見ていました。まさか、あの宝条が蘇るなんて」

「もう終わったことだ、別に良いだろう」

「いえ、そうとも限りません」

チャドリーは首を横に振って否定すると、

「彼はいくつものプロジェクトを同時進行するほど用意周到な男です。保険のために他にも彼のデータが仮想空間に散らばっている可能性があります。それがあある限り、彼は何度でも蘇るでしょう」

「」

その発言を聞いてもクラウドの表情は変わらなかった。むしろ、楽しそうな目をしてこう語る。

「問題ない。俺が全てを終わらせる」



それを聞いたチャドリーは、ふふっと笑っていた。クラウドらしい解答が面白おかしかったのだろう。

そんなやり取りが続いていると、後ろにいたキリトがクラウド達に声をかけてくる。

「クラウド、ティファア！」

「！」

「俺たちは先に行くよ、アスナを迎えに行かなきゃいけないからな」

「そうか。またな、キリト」

「ああ、また会おうぜ！ クラウド!!」

キリトはそう言うと、左手の指を振ってメインメニューウィンドウを開いてログアウトボタンを押し、放射状の光が包み込み、この世界から完全に消え去った。

◇◇◇◇◇

三人だけ残されたクラウド達は、当初の目的であるログアウトできるようにするためにデータ閲覧室へと向かう。

チャドリーが先導し、閲覧室へと向かう最中、ティファアが急にクラウドの名を呼んだ。

「ねえ。クラウド」

「?。なんだ？」

「」

その次の瞬間だった。

そこでティファアの方から首の後ろに左手を回されて、そのまま鳩尾に鋭い一撃をお見舞いした。

たった数秒の出来事が、クラウドの思考を粉々に破壊した。

「ッ!? いきなりなにを!？」

「心配したんだからね!!」

「ッ!？」

「だからこれは勝手に出ていった罰」

クラウドの言葉を遮るように、ティファは叫んだ。意地になった子供みたいなきび声に、クラウドは思わず息を呑んだ。

「いつもいつも、一人で抱え込んで」

もう一度、ティファは重ねて言った。

「残される人達の気持ちも考えてよ。クラウドは一人じゃないんだよ？ 仲間に頼ることも大切だってわかってるでしょ？」

「」

クラウドは少しだけ考えた。

確かに、立場が逆だったらどう思っていただろう。クラウドの知らないところでティファが一人無茶して大怪我でもしたりしたら、相談もされず一人のうのと平和の中にいた自分をどれだけ責めるだろうかと。

ティファの想いを感じたクラウドは、ただ一言、

「ごめん」

とだけ言った。

「ようやく言ってくれたね」

そうしてティファは良いんだよと言い、彼女はクラウドの首の後ろ

に両手を回して優しく抱き締めながら笑って許した。

クラウドとティファの違い。

彼女はここで一方的に怒るのではなく、家族を心配できる人間だった。

「結局、クラウドは今回も一人で問題を抱えたんだね。今回は特別に許すけど、今度からは少しは相談してくれないといい加減本気で説教しなくちやならなくなるからね！」

「ああ」

「まずは帰ったらまりに溜まった配達伝票の整理にお店の手伝い!!」

「わかった!?!」

「ああ」

「うん！ よろしい!!」

ティファはそんな苦笑しているクラウドの胸へ飛び込み、クラウドは恐る恐る彼女の背中に手を回して、彼女の体を抱き締めた。

「クラウドさん！ ティファさん！ 早くしないと置いていってしまいますよ!!」

「ああ、今行く」

それから数秒後、二人は手を繋ぎながらチャドリーの後を追いかけて、互いに笑い合う。

その時、彼は夕日が沈む空へと視線を向けた。親友から受け継いだバスターソードを背負ったツンツン頭の青年がこちらを見ている気がした。

彼は微笑み、そのまま天へと昇るように消えていった。そしていつの間にか、彼の手にはバスターソードがなかった。

背中にも、右手にも、受け継いだ剣の姿はどこにもなかった。あったのは、左手に掴んでいるティファの右手だけ。

それで気が付いた。

(この世界での俺の役目は、もう終わったんだな)

ようやく、一つの戦いが終わった。

彼の手の中には、大切な仲間がいる。

◇◇◇◇◇

調査結果を説明させていただきます。

かねてより捜索中だった調査に向かった者の意識を発見しました。

別紙に添付した調査報告書の通り、責任者と彼の協力者の活躍により、無事にクラウド・ストライフのログアウトに成功致しました。

そして、ここで新たな問題が発覚。

クラウド氏の証言によると、ミッドガルネットワークに突如として発生した未知の空間は複数あり、その世界のどこかにあの『セフィロス』の精神が生き続けているということが判明しました。

『SAO』ですでに肉体を破壊した事は明らかになっています。にも拘わらずセフィロスは未だに精神だけとなって生き続け、別世界の住人達の多くの命を巻き込む懸念が出てきました。

迅速かつ確実にセフィロスの精神を破壊するため、引き続き別世界の調査を行います。

まずはリーブ氏が入手した仮想空間への座標の解析から始めようと思います。

解析結果が出次第、新たに調査を行う予定です。

なお、本作戦の最優先事項はセフィロスの討伐です。全力を尽くすのは当然ですが、その結果として死傷者を出すことだけは避けてください。

## 第24章

解析結果の内容と、今後の計画内容を詳しく説明させていただきます。

ミッドガル元神羅カンパニー科学部門の総括、宝条が行っていた研究の中に『多重宇宙論』と『ジェノバのリユニオン能力』の証明のための実験として、脳のデータ断片化というものがありません。

彼はセフィロスを探して世界各地を回っている時にミッドガルネットワークに自分の断片をばら蒔いていただけでなく、僕自身の身体にもデータを残していたもよう。その身が滅びようとも研究へと没頭するために自分の魂をデータ化するその熱意は尊敬には値しますが、結果は失敗に終わりました。

不完全な上に強引な意識の乗っ取りにより、依り代となっていた別次元の人間である「須郷伸之」の身が保たず、自我崩壊したのと同時に、「データで復元及び再現した『ジェノバ』の精神汚染に耐えきれず、アバターは飲み込まれて完全消滅致しました。

しかし。

彼の脅威は過ぎ去ったわけではありません。

全ての実験を同時進行で進めるほどの彼が、そう簡単に消滅するとは思えません。またどこかで、リユニオンの証明のためにネットワークを通じて復活する可能性があります。

そうしたトラブルが発生する前に、彼を制圧する手段を早急に考える必要があると思われます。

なお、そのための策として『ある機器の設計図』と『仮想空間への座標』を入手致しました。その機器を利用して仮想空間にある彼の意識を一つずつ破壊していくことを推奨致します。

しかし現状の情報では彼の意識の断片がどこにあるのかは不明。今日明日復活するということはないでしょうが、この件は長期プロジェクトとして登録し、一つずつ確実に探しだして破壊していく方針で進めます。

さらに。

彼の意識を探すために仮想空間へと再びダイブすることも重要ですが、本来その世界はゲームであり、楽しむための世界であるため、それを利用するというのも一つの手です。

『クエスト』として全プレイヤーに協力して頂くだけでなく、多額の報酬もご用意する方針です。

まだ『二台』しか完成していませんが、後々量産化させて、こちら側の世界の人々にもフルダイブ型のゲームを楽しみつつ我々が出したクエストを達成してもらう、という方向で計画を進めてまいります。

そして。

一番最初にその機器を手にするべき人は『彼と彼女』以外おりません。最後に。

宝条だけでなく、セフィロスの意識も未だに行方不明です。彼とは違って拡散することなく仮想世界の中を巡っており、もし仮に接触したとしても手は出さないようお願い致します。

死んだとはいえ、彼の異常な戦闘能力は健在であり、そして不明確な状態にいるもようで、こちらの攻撃が通用しない可能性があります。

先日も報告した通り、本作戦の最優先事項はセフィロスの討伐ですが、死傷者を出すことだけは避けてください。

細心の注意と共に、引き続き彼らの搜索及び討伐作戦に臨んでください。



「旨い！ これ旨いよアスナ！」

「よかった。結構再現するのに苦労したんだからね？」

円形の小さな庭園。

ふんだんに花壇に配されたその外周部には白木のベンチが設置さ

れ、そのうちの一つに二人の男女が腰掛けて座っていた。

女性の膝の上にはバスケットが置かれており、中には丸いキッチンペーパーで包まれたハンバーガーが入っている。

その香ばしい香りに目を見開いたキリトは急いで口へと放り込んでいく。

「すごいな、あの七十四層の安地で食べたハンバーガーを現実で再現するなんて」

「本当、大変だったんだよ。特にソースの再現が難しくて。おかしな話だね、現実の味を真似しようと向こうの世界で苦労して、今度はその味を再現するのにこっちで苦労するなんてさ」

「あはは」

キリトは手渡されたハンバーガーをじつと見る。あの時の記憶が呼び起こされる味につい懐かしさを覚え、微笑んでしまう。

二人は今、特殊な学校に通っている。

ここに通っている生徒は全て、SAO事件に巻き込まれたプレイヤー達である。中学生、高校生と、二年間仮想空間に閉じ込められていた子供達は、救済措置として統廃合で空いた校舎を再利用し、失われた学生生活を取り戻している。

二人は鼻にくつつこうとするマヨネーズと格闘しながらハンバーガーをかじりつつ、話し合いを始めた。

「そういえばキリト君」

「アスナ」一応ここではキャラネームを出すのはマナー違反だぞ？

ここでは和人って呼んでもらわないと」

「あ、そうだった。って、それだと私はどうなるのよ？ バレバレじゃないの！」

「本名をキャラネームにしたりするからだよ」と言っても、俺もなんかバレてるみたいけど」

ここは一応S A O事件に巻き込まれた子供達が集う学校である。

よつて、誰が誰なのかキャラネームが知られてしまえば正体が大体わかってしまう。何より、あの世界では創造者の手によって、プレイヤー達のアバターは現実と同じ顔にされてしまった。

故に、最前線で戦っていたプレイヤーや有名プレイヤーは入学直後に即バレしてしまった。

通り名があったプレイヤー達は今では学校のアイドル的存在になりつつある。

それは置いといて、アスナはキリトに話したいことを話し始める。

「それでキリト君は、あの話聞いた？」

「あの話？」

「須郷さんが、亡くなったって話」

「ああ、聞いたよ」

須郷伸之。

アスナの父、結城彰三が娘の夫にと見込んだ男。

総合電子機器メーカー『レクト』のフルダイブ技術研究部門研究員で、その子会社であるA L O運営体『レクト・プログレス』のスタッフだった人間。

奴は人間の感情や思考を意のままにコントロールする方法の研究をするために非人道的な行動をし、自らの野望の達成のために会社を掌握すべきと考え、結城家の財産目当てに明日奈と結婚することを企んでいたクソ野郎であった。

そんなアイツがつい先日亡くなったのだ。

詳しいことはあまり知らされていないが、死因は出血性脳血管疾患というものらしい。

脳の血管が破れて出血することから起こるもので、出血した血液は血腫という血の塊をつくり、血腫のできた部分の脳細胞が破壊されたことが原因で死亡したとのこと。

脳血管疾患は突然死を招く恐ろしいものであり、誘因となる危険因



子がいくつもわかっているが、恐らく今回は特別な例だ。それも、前例がない。

解剖の結果、奴に出血性脳血管疾患の要因となるものはなかったらしい。過去の彼のカルテを見れば、それはわかる。

なのに、脳の血管が破れていた。

その理由は、奴を遥かに上回る『科学者』が原因だろう。

奴が研究していた、人間の感情や思考を意のままにコントロールする方法。それを、〃先にやった者〃の手によって奴は命を落とした。

あの時現れた謎の科学者、〃宝条〃という人間。

奴の正体は詳しくは知らないが、少なくとも須郷よりも天才で、厄介なマッドサイエンティストだろう。そんな奴に脳を奪われたことよって、須郷の頭脳に異常なほどの負担がかかり、血圧が上がって小さなこぶができ、血管が破裂してしまったのだろう。

あくまでも、詳しく聞いてないから推論だが。

しかし、そう考えると何故キリトは無事だったのだろうか？

これも推論だが、臓器移植をする場合と似ていると思われる。ドナーと受け手が適合しなければならぬ。

キリトとザックスという青年は上手く適合できたから、脳にあまり負担がかからなかったのだと思われる。しかし、長時間共生していれば、キリトも須郷と同じ目に遭っていた可能性もある。

上手く適合できたからといって、完全に安全ではなかった。短期決戦で終わらなかつたらどうなっていたか。

キリトは思わず酷い傷口を見るような顔になった。

「キリト君」

「」

「キリト君！」

「!? な、なに？」

「大丈夫？ ずっとぼーっとしてたけど、話し聞いてた？」

「ああ、ごめん。ぼんやりしちゃってた」

「もう！」

「ごめんごめん。で、なんの話だっけ？」

思考が別の次元へと行っていたキリトは正気を取り戻すと、アスナが何の話をしていたのか再度訊ねる。

「キリト君が団長からもらった『世界の種子』だけどき、あれって結局どういうものだったの？」

アスナにそう聞かれたキリトは、こう告げる。

「今日のオフ会で詳しく説明するつもりだけどき——」

ニコツと小さく笑って、

「クラウド達への招待状だよ」

◇◇◇◇◇

そうして。

和人達は今夜のイベントであるオフ会に参加である。

SAO時代世話になった頼れる兄貴分であるエギルのお店、『ダイシー・カフェ』へと足を運んでいた。学校が終わって、指定された通りの時間帯に台東区御徒町のごみごみした表通りにある、煤けたような黒い木造で、店を強調するために設置されている金属製の二つのサイコロを模った看板の扉の前にいる和人は、後ろにいる女性二人に声をかける。

「スグはエギルと会ったことあったっけ？」

「うん、向こうで二回くらい一緒に狩りしたよ。大きい人だよねえ」

「言つとくけど、本物もあのまんまだからな。心の準備しとけよ？」

「そうなの!?!」

「ふふつ、私も初めてここに来た時はビックリしたよー。本当にあの姿のままなんだもん」

「ああ、正直俺もビビった。ま、あんまり緊張すんなスグ。悪い奴じゃないのは知ってるだろ？」

「う、うん」

巨体であるエギルの現実の姿を想像して驚愕している直葉に、和人は口角を上げて掌で優しく頭の上をポンと叩くと、そのまま一気に店の扉を押す。

カラン、と店の扉が開けられた音を告げるベル。

それと同時に、中にいた奴ら全員の視線が一斉にこちらへと向けられる。中にいた奴らのほとんどが全員知り合いだ。見たことのない顔もいたが、自分と同じ学生服を着ている連中がいるため会場はここであるとともに確信を持てた。  
が。

どういうわけか、店内の様子を見た瞬間に和人の顔に冷や汗が浮かぶ。店の奥でこの店長であろうエギルがピザをどンドン焼いており、各テーブルの上ですでに並べられて置いてある。

そこでさらに気付く。

シリカ達、参加者の皆の手の中には飲み物が入ったグラスや食事が握られていることに。

始まっている。

そう思ったのは入って数秒後のことだった。

そして自分達の姿を確認したオフ会の参加者達全員が、和人達に拍手喝采を送る。

お世辞にもあまり広くない店内なので、その音は店の外にまで響いていた。体の奥にまで響く大音量に、和人は苦笑してすぐに二人を入ると店の扉を閉める。

状況がいまいち呑み込めていない和人は目を細めて、

「おいおい、俺達遅刻はしてないぞ」

「へっへ、主役は最後に登場するものですからね。あんた達には少しずらした時間帯で伝えたのよん。さ、こつちに来て!!」

そうやってこちらへ近づいてきて背中を押す茶髪のふわふわしたショートヘアな女性。

この子の名前は「篠崎里香」。

SAO時代、四十八層の主従区である『リンダース』で武具屋を開いていた少女だ。その頃使っていたプレイヤー名は「リズベツト」。ウエイトレスのような服装の装備を着込んで鍛冶屋としても活躍していた。

そんな彼女に押されて店の奥の小さなステージ台へと強引に登らされた和人は、皆からの注目を集めるために彼の頭の上にある一つの照明だけを残して店内全ての明かりを消すと、彼女はマイクを手に取り、コホンと喉の調子確かめて、

「えー、それでは皆さん、ご唱和ください。せーのー!」

その一声の合図に、全員が口を揃えてこう言った。

「!!!キリト! SAOクリアおめでとー!!!」

啞然とする和人を置いて、全方向からパンツパンツと火薬の音と共に無数の紙吹雪に紙テープが舞い散った。



そんなこんなで今夜はオフ会である。

同じ学校の生徒+妹+社会人という面子で、エギルが運営する店で盛大なパーティーが開催される。

和人もドリンクの入ったグラスを手に取り、全員と乾杯した後、全員に簡単な自己紹介をし、聞かされてなかった公開スピーチをやらさ

れ、疲弊した彼はふらふらとした足取りでカウンター席へと歩いていく。

と、店の雰囲気を押されてか、和人は冗談混じりにカツコ良く気障にオーダーを告げる。

「マスター、バーボン。ロックで」

昔見た映画で覚えた台詞をそのまま言ってみたところ、ロックアイスに琥珀色の液体が注がれたタンブラーが真横から滑り出てくる。

ガチで出てきた注文に驚愕した和人は、カウンターの奥でグラスを磨いている巨漢な男性を見る。彼はニヤリとした笑みを浮かべて、まるで飲めるものなら飲んでみると言ってきたにみえた。だった。

注文した後に言うのもなんだが、冗談が通じないというのはいかなものか。

和人は勇敢にもその飲み物へと口付ける。が、未成年なので慎重に恐る恐るといった感じで舌を伸ばし、液体をちびりと舐めてみれば、

「……烏龍茶じゃないか」

「そりゃさすがにな」

さすがは、この店のマスターなだけあって一応空気は読んでくれていたみたいだった。無駄な心配にさらに疲れた和人はカウンターに頭を沈み込ませると、隣のスツールにスーツを着込んだ男性が座った。

額にバンダナを巻いて、和人を横目に笑いながらエギルにオーダーを告げる。

「エギル、俺には本物をくれ」

「おいおい、いいのかよライン。この後会社に戻るんだろ？」

「へっ！ 残業なんて飲まずにやってられるかっての！ それにしても、いいねえ」

刀使いだったクラインは店内にいる美少女達に鼻の下を伸ばして見つめている。

ここにいる女性陣は、確かに顔面偏差値が高い。彼がだらしない顔になってしまうのも無理はない。しかし、彼女であるアスナにそんな目を向けているクラインに和人はいい気はしないわけで、しかし暴力とかそんな乱暴なことはこんなめでたい場ではしたくないので、行き先のない怒りを吐き出すように大きなため息をつく。

すると、クラインとは反対側のスツールに、もう一人の男が座ってきた。

「やあ、キリト君!!」  
「？」

元気良く、その声をかけてきた。

顔の両側にウェーブしながら流れる長髪は黒髪に染まり、クラインとは違って高級そうなスーツを着ている。きつちりとしたネクタイを締めて話しかけてくる男性の姿を見た和人は、目を見開いて思わず立ち上がってしまった。

「もしかして、ディアベル!？」  
「久しぶりだね、キリト君」

ディアベル。

第一層の攻略時に、ゲーム攻略のリーダーシップを担っていたプレイヤー。

自身のことを『ナイト』と自称し、第一層の攻略プレイヤー全員に笑いを起こさせるほどのカリスマ性を秘めた男性。

そんな彼がわざわざ和人に近付いてきて声をかけてきてくれた。

「君に会えて光栄だよ、キリト君」

「そんな、光栄だなんて。」

「いや、君はあのゲームをクリアしたんだ。誇りに思うべきだよ。あのデスゲームから解放した君は、俺達にとっては英雄と呼ぶべき存在なんだ。実際、俺達が無事に生きて帰って来られたのは君のおかげだ。正直、俺達だけではあの世界から脱出するのは不可能だったはずだ。そんなところに最前線プレイヤーである、あの『黒の剣士』がいたおかげでいくつものフロアを突破できた。ソロな上にいくつもの功績を残している君にはそれだけの価値がある。だから、こうやって現実でも君に会えて本当に嬉しいよ。キリト君」

「。」  
「。」  
「。」  
そんな言葉を並べられて照れるように頬を赤く染める和人は顔を附せる。スツールにストンと落ちるように座り直すと、顔面を誰にも見せないようにして視線をただずつと下に向けている。

彼はあまり、誉められ慣れていない。  
ディアベルの素直なその言葉を聞いて、素直に照れている和人にクラインは大笑いだった。

「アツハツハ!! 顔が赤くなってんぞキリト!! 烏龍茶で酔ったんじゃないのか!」  
「う、うるさいな。ツ!!」

和人が小学生みたいな反応をした。

照れて顔を附せたままの和人はどういう顔をしたらいいのかかわからず、様々な感情が入り乱れて、なんとも言えない表情をしている。色々話をしたいのだが、この様子じゃ真面に顔すら合わせられないだろう。

そんな彼に対して、ディアベルは和人達にこう聞いてきた。

「そういえば、『彼』は来てないのか?」

「? 彼?」

応えたのはエギルだった。

真面に話せる状況ではない和人に代わって話を聞くエギルに、ディアベルはあるプレイヤーの名前を告げる。

「ああ。あの時、第一層のフロアボスに単体で挑んで勝ったプレイヤーである、"クラウド"さんだよ」

「!?!」

その名前が出てきて、和人達は目を見開いていた。そんな彼らなどお構いなしに、ディアベルは続ける。

「今日はSAOクリア記念のパーティーだと聞いたから、てつきり彼も参加してると思ったんだが、連絡がつかなかったのか?」

「あ、ああ。アイツはどうも現実でも人とは関わりたくない体質らしくてな。連絡をしようにも居場所とかわからなかった」

「ハハッ、彼らしいね。出来れば今日会えたら一言お礼を告げたかったんだが、連絡がつかなかったんならしようがないね」

そう言つて肩を落とすディアベルだったが、和人がここでようやく顔を上げて話し出す。

「いや、会えると思うぞ?」

「え?」

「今夜の十一時、『イグドラル・シティ』で行われる二次会に、アイツは姿を現すはずだ」

「!? 本当か!?!」

「ああ、約束したからな。また会おうって」

強い意志の籠った声で、きつぱりと告げる和人。そんな彼に、エギルとクラインはどういいうわけか驚いている。



そんな顔をしている二人には気付かず、ディアベルは快哉を上げるようにして叫ぶ。

「そうか！　じゃあ俺もその二次会には絶対に参加するよ！！　彼とは話したいことが山ほどあるんだ！！」

「ああ、そうしてやってくれ」

「ああー！　ありがとうキリト君！！　必ず今夜行くよ！！」

そう言つて、ディアベルは喜びの表情のままスツールから立ち上がって店の奥へと去っていく。

彼が店内溢れる人混みの中へと消えていくのを確認し終わると、エギルとクラインは声を潜めて聞いてきた。

「おいキリト、いいのかよ。あんなこと言つちまつて」

「俺達以外の皆には内緒にしてるけど、アイツ本当はこの世界の住人じゃないんだろ？」

「ああ」

和人はゆつくりと頷いた。

クラウドのことは、信用に値する人物達にだけ真実を話している。他人には口外しない、絶対に他人には打ち明けないと予め約束させた上で真実を話した。

真実を話したと言つても、『クラウドは別世界の住人である』という、一点のこのみしか話していない。それ以上のことは彼のプライバシーの侵害へと繋がる。彼がどういう経緯でSAOに参加したのかとか、彼は一体どういう存在なのかとか、アスナ以外には話していない。

あくまでも、『別世界の住人』ということだけだ。

それ以上のことは誰にも話していない。

「未だに信じられないが、アイツの居場所が掴めない以上、すぐに納得

したよ。けど、そんな信じられないことが本当にあるんだな」  
「俺だってまだ信じられねえよ。まさかアイツがそんなおとぎ話の中でしか聞いたことのない存在だったなんてよ」

二人は視線をわずかに上げ、腕を組んで困惑している。

あり得ない話に強引に納得している二人だったが、本音を言えば未だに信じることができていない。

異世界という、非現実的な物を持ち出されて理解してくれというのがそもそも無理な話だ。現代社会の概念を歪めてしまうほどスケールのでかい話なのだ。夢物語でしか聞かない話に、納得できる奴の方が少ないだろう。

彼らからしてみれば、作り話の世界の住人が現れたような感じなのだろう。予め聞かされていたとはいえ、改めてその話を思い出すと凄い話だ。

そんな彼にまた会えるなどと言った和人は笑みを浮かべ、エギルにこう訊ねる。

「だから別世界にいるアイツを呼ぶために、あの『世界の種子』が必要なんだ。その後、調子はどうなんだエギル？」

「え？ ああ、すげえもんさ。今、ミラーサーバーがおよそ五十。ダウンロード総数は十万。その中で実際に稼働している大規模サーバーが三百つてとこだな」

データ化されて今ではもう思考模倣されただけの偶像となった茅場晶彦から手渡された『種子』。

その正体は、彼が開発したフルダイブ・システムによる全感覚VR環境を動かすためのプログラム・パッケージだった。

『ザ・シード』

VRゲームワールドを創るための開発支援プログラム。仮想空間を創りたいと思えば、これをダウンロードして回線の太いサーバを用意し、3Dオブジェクトを設計して配置して、プログラムを走らせれ

ばそれで一つの仮想世界が誕生する。

この種子があつたことにより、危険視されていたVRゲームは生き続けることになった。

SAO事件だけでなく、今回起こつたALOでの傷害略取監禁事件及び責任者の死。SAOでの未帰還者三百人の意識が拉致され、非人道的実験に供されていることが露見されたことにより、『レクト・プログレス』の主任スタッフで、『アルヴヘイム・オンライン』のプロデューサー兼ディレクターでもあつた須郷伸之は即逮捕されるはずだった。しかし。

警察が到着した頃には、須郷は脳血管疾患によつて既に死亡していった。

これでは逮捕して公判しようにも死人に口なしだ。何も聞けないし、何もわからない。

真実は闇へと葬られかけたが、須郷が裏でレクトプログラムのスタッフの何人かを率いて行つていた非道な実験だけは和人と明日奈の証言で明らかになり、その会社が運営していたアルヴヘイム・オンラインは大打撃を受けた。

いや。

もはやそれだけでは収まらず、VRMMOというジャンルのゲームそのものが危険視されるようになった。

SAO事件だけでもかなりの社会不安を醸成していた。そこに更に今回の事件。今度こそ安全と銘打って展開したALOを含む全てのVRMMOが犯罪に利用される可能性がある、目されることとなつてしまった。

運営中止にまで追い込まれたVRMMOだったが、茅場がキリトに託した『ザ・シード』のおかげでそれら全てを根こそぎひっくり返した。

完全権利フリーを謳うコンパクトな制御システムを預かつたキリトは徹底的に検証し、いかなる危険も存在しないことを証明した。

エギルのコネクションを駆使して『ザ・シード』を全世界のサーバーにアップロードしてもらい、個人、企業に関わらず誰でも落とせるよ

うにした。

完全解放された制御システムによって死に絶えるはずだったVR MMOを救ったのは、ALOのプレイヤーでもあったいくつかのベンチャー企業関係者だった。彼らの共同出資によって立ち上げられた会社によって、ALOの全データがレクトから引き継がれた。

消え行くはずだったアルヴヘイムは彼らの活躍によって、問題だらけだった旧ALOは再構築されることになり、今では『新生ALO』と呼ばれている。

何が変わったのか、まずグランドクエストは廃止になった。

基本的には純粹に冒険を楽しむゲームとなり、詳しく説明すれば、アルヴヘイムのベースをより北欧神話の世界観に近づけた。プレイヤーは妖精となって北欧神話の世界を冒険する。というコンセプトのゲームとなったらしい。

何にしても、これでVRゲームは消えることはなくなった。

日々新たなゲームが誕生し、そしてザ・シードが生み出す可能性によってゲームだけには留まらず、新たなカテゴリーのサーバも誕生していくことだろう。

世界は大きく、可能性は無限。

現実世界が仮想世界に置換される日も、近いかもしれない。

そこまですを聞いて、和人は声を小さくして、

「エギル。アレは、どうなってる？」

「アレって。ああ、『例の城』のことか？ 新しいサーバ群をまるまる一つ使ったらしいからな。何せ『伝説の城』だ。ユーザーもがつつんがつつん増えて、資金も予想よりも遥かに越えて——」

「いや、そっちじゃくて。」

「？」

「『ビフレスト』の方だよ」

和人は眉を顰めてそう聞いてきた。

今まで使われていた旧SAOサーバは完全初期化となり、廃棄さ

れた。

そこで。

新たなALO運営者が引き継いだアーガスの開発データの中に、人々の常識を覆すほどの予想も出来ない代物が存在していた。

それは、『二つ』ほどあった。

一つは後にわかるものだが、もう一つはアーガスも開発した覚えのない謎のデータだった。

解析した結果、それは“ある空間”へと行くための『座標』だった。

和人はそれを『ビフレスト』と名付けた。

“ビフレスト”。

北欧神話で、空の上にあると言われている神々の国『アースガルド』から地上に向かって架けられているという『虹の橋』のことだ。

神話だと『ビフレスト』は神々の国『アースガルド』と、

人間の国——『ミッドガルド』を繋いでいる。

疑問に思った和人はその座標に従って解析をユイに任せたところ、『とある世界』へと繋がっていることが判明した。

何故そんなものが存在するのか、ユイにもわからないというが、和人にとってそんなことは正直どうでも良かった。

これで、また彼らに会える。

思わぬ収穫に歓喜した和人はユイに依頼し、その座標をザ・シードの力によってサーバ化して繋げた。

エギルはそつちかという顔をしながらも、その話題を持ち出されて、どこか納得したような表情になった。

和人がなんで「また会える」なんて言ったのか、ようやく理解したからだ。

「おうよ、バツチリ繋がってるぜ。しかし、なるほどな。アレはアイツに会うための架け橋だったのか」

「俺もさすがに予想してなかったけどな。それに、『世界の種子』がなかったら実現不可能だったろうさ。さすがは天才科学者、茅場晶彦だな。俺達が理解できないものを簡単に開発してしまうなんて」

「本人も自覚して開発したのかどうかも、怪しいけどな」

そう言われ和人はタンブラーグラスの中に入っている烏龍茶を一気に飲み干し、虚空を見つめるように空っぽになったグラスへと視線を落とす。

中央の囲い。

その中に彼は何を見るのか。

空間となったグラスの中にあるもの、それは――

「お〜いキリト〜！ こつちこ〜い!!」

少し呂律が回っていない少女の声が和人の耳に入ってきて来る。そちらへと振り向くと、勢い良く手を左右に振ってこちらへ来るように促しているリスベットの姿があった。

彼女の手には、ピンク色の液体を湛えたグラスが握られている。

「アイツ、酔ってるんじゃないだろうな？」

どう見てもジュースとは思えない色をしている飲み物に和人が呟くと、それを出したであろう店主は澄まし顔で、

「パーセント以下しかないから大丈夫だ。明日は休日だしな」

あまりにも呆れたような顔で見つめる和人だが、やれやれと首を横に振ると、その辺でナンパしているクラインを無視して、肩を落としながら立ち上がって呼ばれた声へと歩いていく。

その後、公開スピーチによって疲弊している和人に更なる疲労が襲いかかった事は言うまでもない。

◇◇◇◇◇◇◇◇

あれからもう、八月と経っていた。  
爆走。

クラウドは野原が広がる大自然の中を疾走する。

彼が乗っているのは普通のバイクではない。

フエンリル。

駆動音から内燃機関のある動力源を使用していそうではある。戦闘の時は、バイクの脇のふたが開き、何本もの剣が出てくる、いわゆる戦闘用バイクである。

普段はそれを仕事道具として乗り回しており、今回も宅配の仕事としてブンブンとエンジンを鳴らし、華麗に操縦するツンツン頭の青年。

彼はヘルメットもつけずにゴーグルだけをかけ、車が一台も走っていない獣道を進んでいた。

アクセルを回してハンドルに集中しているクラウドは宅配を終え、急いで家へと帰る。

理由はただ一つ。

チャドリーから『贈り物』が届いたという連絡が入ったのだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇

結局、帰ってきたのは夜の十一時頃だった。

ミッドガルがメテオにより破壊された後、ミッドガルに寄り添う形でその周縁部に新しくできた街『エツヂ』。壊滅したミッドガルの廃材を多く利用してもう二年。今でも建設ラッシュが続いている。

高速道路も建設中でミッドガルとも繋がっている。植物がなく街も人の服装もモノトーンでどこか生気が感じられない。人の姿もまばらで、残業から帰ってきているサラリーマンや、深夜のジョギングを楽しんでいる大人ぐらいしかない時間帯。

特に特徴がない高い建物によって起きるビル風によって、深い森の中のような冷気をかき回している。

そして。

そんな殺風景な街中を、クラウドはバイクで徐行しながらセブンスへブンへと向かっていた。

店についてバイクを止めると、クラウドは疲労と睡眠不足で若干ふらふらになりながら体を引きずるように建物に入り、扉を開けた。

瞬間、部屋の奥から女性の声が飛んでくる。

「あ、おかえりクラウドー！」

「ただいまティファ」

この店の店長、ティファは皿洗いをしながら帰ってきたクラウドを出迎えてくれる。

まるで実家に帰ってきた安心感。それを感じ取ったクラウドは今までの疲労感が全て吹っ飛んだ気がした。笑顔でクラウドの帰還を出迎えるティファはまさにお母さんのようであった。

クラウドはティファの笑顔を見てバーのカウンター席に座ると、彼女は皿洗いの手を止め、濡れた手をタオルで拭きながら言う。

「そういえばクラウド、もうメールで送られてきてるだろうから聞いてると思うけど、クラウドにチャドリーから贈り物が届いてるよ」

「ああ、聞いたよ。それで、その荷物は一体何なんだ？」



「これだよ」

クラウドがそう聞くと、ティファはカウンターの下にある棚から一つの小包を取り出した。長方形のパッケージでダンボールで包装された小包のため、中身が何なのかわからない。

クラウドは先ずティファから荷物を受け取ると、ビリビリッ！ガサガサッ！と、躊躇なく目の前の小包に手をかけ、綺麗に中の何かを包む茶色の紙を無作法に破いていくと、その中に入っている何かを見るなり驚愕の表情を浮かべた。

「これは……ッ！」

その中に入っていたのは、一つのソフトとゴーグルだった。

彼が小包の中から手に取った『Alfheim Online』と表記されたそれは、通称『ALO』と呼ばれる、VRMMO型のゲームソフトだった。

ソフトのパッケージの表紙に描かれているイラストには、深い森の中から見上げる巨大な満月があった。

黄金の円盤を背景に、少年少女達が剣を携え飛翔している。格好はオーソドックスなファンタジー風の衣装だが、二人の背中からは大きな透明の翅が伸びている。

あの時、キリトやユウキ達が見せた翅と同じだ。

つまりこのソフトは、あの世界へと行くための通行証みたいなものだ。

それが何故ここにあるのか？

「それに、これは……」

そして、もう一つのゴーグル。

ALOのソフトを取り出してもなお、小包の中にはなにやら直方体の形をした箱が残されていた。

二つのリングが並んだ円冠にGoogleを組み合わせたマシン。

『Amusphere』と表記されているそれは、VRバトルシミュレーターに酷似しており、使用した者を仮想世界へと誘う次世代型ゲーム機だと直感的にだが理解した。

よくわからず困惑しているクラウドに、ティファが話す。

「そういえばクラウド、チャドリリーから手紙を預かってるよ」

「？」

「ほらこれ」

そう言うとティファは、一枚の茶色の封筒らしきものを手渡してきた。

クラウドはティファから封筒を受け取ると、中に入っている紙を取り出した。封筒の中に入れられていた一枚の白い紙を取り出すと、その紙に書かれている文に目を通す。

【拝啓、クラウド様。八月の残暑厳しき折、いかがお過ごしでしょうか？ 今回、このような形でご挨拶をさせてもらうことになって大変申し訳ございません。クラウドさんにはミッドガルのネットワークを救った英雄に対し、金品を以って報酬とするには功績が大きすぎると判断したため、この度あるものをご用意致しました。それが、『アミュスフィア』と呼ばれるVRゲーム機です。宝条が進めていたあちら側とこちら側の世界をネット空間によって繋げる実験を引き継ぎ、いつでもどこでもあの世界へと行ける機器を開発致しました。このVRゴーグルは、キリトさんとユイさんのご協力によってあちら側の世界のゲーム機を僕が再現したものであり、現段階では世界にまだ二台しかありません。時間をかけて量産させる次第ではございますが、まずはクラウドさんとティファさんには是非プレイしていただきたい、VRバトルシミュレーターの後継機であるアミュスフィアと異世界への座標のデータが入っている『Alfheim Online』のソフトを同封させていただきました。どうぞ有意義にご利用下さい。ま

たあの世界であなたと冒険できることを楽しみにしております」

「——チャドリーより」

何かの詐欺かな？

と思つてしまったのは被害妄想が過ぎるからだろうか。

こちらの的には金品で十分なのに、わざわざゲーム機をよこすなんて、何かの嫌がらせにしか思えなかった。後で高額料金を要求してくるんじゃないかとさえ考へてしまった。

何より長い、長すぎる。

必死に文字を追いついで目が痛くなるほどの長文に、クラウドは思わずため息を吐いた。  
が。

それでもクラウドは悪い気はしなかった。

理由は自分でもよくわからない。もしかしたら、クラウド自身もあの世界が恋しかったのかもしれない。

ともかく、手紙の内容に目を通し終わるなり、クラウドはチャドリーから送られてきた箱を抱えて二階に上がろうとする。

「早速使つてみるの？ クラウド？」

「ああ、これが本当にあの世界に繋がっているのか確かめてみたい」

チャドリーが折角用意してくれたのだ。使わないと勿体ない。

「ティファももう貰つてるのか？」

「うん。もうすぐ閉店時間だから、お店の掃除が終わったら使ってみるつもり」

「手伝うか？」

「ううん、大丈夫。先に向こうに行つていいよクラウド」

わかった、と静かに頷くクラウド。

そうしてクラウドはアミュスフィアという機械の箱に手をかける

と自室へと持っていく。

当然、この店にだってWi-Fiくらいある。

ネットに繋げて店のホームページを作成し多くの人達に客として来てもらうために、わざわざ大金を払ってパソコンや有線LANルーターなど、ネットを使うのに必要な周辺機器を買い揃えた。

クラウドは自室のドアを開けて作業用の机に荷物を置くと、梱包された銀色のゴーグルのような機械を乱雑に取り出し、説明書を読みながらベットの近くのコンセントにそのプラグを差し込み、ALOのソフトをセットした。

「後は、このワードを。」

そしてクラウドはおもむろに銀色のゴーグルをその頭部に装着すると、そのままベットに寝転んだ。

そしてクラウドはオレンジ色のグラス越しにゆっくりと目を閉じると、再びあの世界へと意識を落とすため、説明書に描かれていた『あの世界へと行く開始コマンド』を唱える。

「リンク・スタート」

◇◇◇◇◇

不慣れな呪文を唱えた瞬間、一気にあらゆるノイズが遠ざかって視界が暗闇に包まれる。

そして。

真っ白な空間に放り出されたと思ったら、奥から『虹色のリング』がいくつも押し寄せてくる。それらがクラウドの体を通過すると、彼の意識はデジタルデータで構築されたアバターへと転送された。

よって、クラウドの体は自然豊かなあのALOに飛ばされた。

「？」

仮想世界へと意識をダイブしたクラウドはその目をゆっくり開け、辺りを見回した。

知らない景色だった。

A L O の中にはあるのだろう。あの時の世界は既に月夜に照らされており、クラウドは見知らぬ丘の上に立っていた。

「……は」

戻ってきたのか、それともA L Oとは別のところに来たのか、情報不足のため未だに自信が持てなくて全くわからなかった。アルヴヘイムの世界をあまり見て回らなかったのもあり、見慣れない景色に不安になる。

冷たい風が頬を撫で、後ろに生えている茂みも風に揺られているところに、

「案外、早く来たな」

「!」

クラウドは人の気配を感じ取り、すぐさま振り向くと、そこには「あの少年」がいた。

背後の野原に降り立った少年は半透明な翅を仕舞うと、ニツと笑いかけてくる。

「待ってたぜ、クラウド」

「キリト」

ここ、アルヴヘイムは妖精の種族的特徴は付加されたものの基本的には現実の姿に限りなく近い外見を持っている。

S A O 時代、外見を現実の姿に戻された時のように。

だから、目の前にいる少年がたとえA L Oで使っていたアバターか

ら姿を変えたとしてもすぐにわかった。

新しいアカウントで、新しいアバター。

全てのステータスを初期化したことで、あの頃のキリトはもういない。

それは、クラウドも同じだった。

「見た目あまり変わってないな」

「？ 見た目？」

全然変わってないならそう言うはず。なのにキリトは曖昧な言い方でそう言った。その事にいまいちよくわかってないクラウドは首を傾げる。

自分の姿に気付いてないのか？ とキリトまで首を傾げると、メイ  
ンメニューウィンドウを開いて、アイテム欄のボタンを押して指をス  
ライドさせてページを進めていくと、とあるアイテムを選択してオブ  
ジェクト化させる。

それは手鏡だった。

あの時、赤いローブを着込んだ茅場晶彦に渡されたのと同じ。

これが何だ、と思う前にキリトは見てみなという顔でニヤニヤと笑っている。

クラウドは鏡を受け取ると、反射する自分の顔を覗き込む。

「!？」

それを見て目を見開く。

自分の耳が、長く尖っていた。

それだけじゃない、服装も少し変わっていた。

全体的にはあのソルジャー服を着込んでいてあまり変わってないが、その上に赤いマントを着ていた。マントの先は燃やされたかのよう  
に破れていて、ボロボロだった。手袋も変化しており、左手の手袋  
には爪先に金色に輝く鉤爪のようなものが付けられている。

なんか、誰かさんを彷彿とさせるような格好だ。銃使いで汚れ仕事を請け負っていた彼のトレードマークであるマントを身に付けているみたいで、落ち着かない。

瞳も、ライフストリートのようにより碧色が強調されている。

背中には何やら大剣を背負っているようだが、それはバスターソードではない。

自分もメインメニューウィンドウを開いて装備一覧を確認したところ、その武器は『アイアンブレード』というらしい。

厳選された鉄鉱石から製錬された鉄製の太剣という設定のようだ。正直、武器に関してはどうでもよろしい。

姿が変わっていることに驚いているクラウドに、キリトはこう話します。

「普通はALLOに限らずVRMMOを始める時はアバター設定とかチュートリアルがあるはずなんだけど、悪いな。チャドリーに頼んでクラウドとテイファのアバターにだけは、それはナシにさせてもらった。」

「なに?」

「『ミッドガル』」

「!」

その名前がキリトから出てきたことに驚愕するクラウド。確かに異世界からやって来たと話したが、街の名前は言っていなかったはずだ。具体的な所は省いて淡々と説明したのだから。

キリトは説明を続ける。

自分達の世界の常識を教え込むように。

「俺達の世界じゃ、それは北欧神話に出てくる『人間の国』のことなんだけど、ちよつと名前が違うな」

「違う?」

「俺達の世界では、『ミッドガル』と呼んでいる。俺の仮説だけど、ク

クラウドがあの時人間体だったのは、クラウドが人間の国からやって来たっていう設定だったからだと思っている。旧ソードアート・オンラインのキャラクターデータがそのまま引き継がれたこともあるだろうけど、北欧神話がモチーフにされたこの世界ではクラウドはそういう役割を担ってたんだと思う」

無茶苦茶な話だ。

それで納得しろというのか。

「意味がわからないな」

「何言ってるんだよ、そもそもお前自体俺達からしたら意味不明な存在なんだからな？ 異世界の住人だなんて、普通信じられないぜ？」

「ま、確かにな」

「けど、そういう設定だったから人間の姿だったっていう方が、なんかファンタジーチックで面白くないか？」

クラウドは面倒くさそうにため息をつく。

首を横に振って馬鹿馬鹿しくて呆れるというかのように両腕の肘関節部分を曲げて、

「興味ないね」

「久しぶりに聞いたな、その口癖」

もはや彼にとつての一種のシンボルとなってしまうているその台詞を聞いて、キリトは思わず笑ってしまった。

「ま、そんな理屈は置いておいて。クラウド達は別世界から来たわけだろ？ それで人間の姿のままだったら他の奴らに知られる危険性があるわけだからさ、チャドリーに頼んでそっちの世界でもアカウントを作成する場合はアバターデータを妖精姿になるように設定してもらったんだ」



「身バレ防止だけじゃなく、秩序を保つために、この世界に沿った姿になつたわけか」  
「そういうこと」

彼らはそもそも、自分たちが住む現実の世界以外に他の世界が存在することを知らない。知るべきではない。

異世界なんていう人々の常識を覆す情報が知れ渡ること、世界秩序が乱れるのを防ぐために、こつちに訪れる際には別の世界から来たことをキリト達の世界の住人に気づかれないように、その仮想世界の世界観に合わせた姿になってもらうことが、個人情報だけでなく、世界の秩序を守ることに繋がる。

だから今回は人間の姿ではない。

「とはいえ人間の姿のVRゲームも存在するから、他のゲームにコンバートしたらまたその世界の雰囲気に合わせて姿になる。だから人間が出てくるゲームにそのアバターを移動させてしまえば人間の姿になってしまうわけだけど、世界観に合ってるわけだから身バレする心配はないだろ?」

「ああ」

「それにクラウド達の世界にはまだALOしかないし、それもクラウドとティファしか持ってない。いずれチャドリーは量産する予定らしいけど、まだどうなるかわからないからな。クラウド達にはβテストターとして、このゲームに参加してもらった」

「. . . そうか」

「. . . そして——」  
「?」

キリトは一拍置くと、自分の右拳を緩く握りしめて、

「クラウドとは、対等な立場でゲームをしたいからな。あの時はクラウドは『ナーヴギア』じゃなかったから死ぬ心配もなかった。何より、

お前にはソルジャーとしての身体能力とチート並の武器に技があったからな。だから本気を出してなかったはずだ、最後のアイツの時以外は」

「ああ」

「だから今回はステータスも武器も初期化して、俺達の世界の秩序に合わせた数値から始めてもらうことにしたんだ。クラウド、お前は一度本気で剣を合わせてみたかったからな」

強い意志の籠った声で、きっぱりと告げる。

ある意味で、剣の業界の先輩たるクラウドに対して。

「キリト」

クラウドは何かを言おうとして、しかし呑み込んだ。

彼はキリトと違い、プロの剣士だ。『ゲームでは済まない世界』をキリトよりも深く知る人物だ。その彼が言い淀むほど、キリトの口調からは確固たる決意があった。

そこまで言って、キリトは再び視線をクラウドに向ける。

「だから悪いな、勝手にアバターを設定しちゃって」

「別に気にしてない。髪色もそんなに変わってないしな」

ステータス値がわかるメニューを見れば、クラウドの種族は『シルフ』となっていた。リーファと同じ種族で、確か飛行速度と聴力に長けて風属性魔法が得意という設定だったはずだ。

よく見れば、クラウドの髪は緑がかかった金髪だった。

種族がシルフなら、装備も緑がかかった服装になるはずなのだが、そこはAIがランダムで生成してるからなんとも言えない、とキリトが言ってきた。

「まあ、別にシルフだから緑色の装備を着ないといけないなんて決ま

りはないからな。クラウドの髪色で何の種族なのか一応判別はできるよ」

「俺がシルフなら、ティファは——」

「うん、俺と同じスプリガン」

スプリガンは黒味がかった容姿を持っており、綺麗な黒髪を持つ彼女にはピッタリだった。

戦闘面においては他種族より抜き出ているところがないため、あまり人気のない妖精らしいが、世界の秩序に合わせたらティファはスプリガンが妥当だと思われる。

どんな姿なのか、これからやって来る予定なので少し楽しみではある。

しかし、

「髪色で種族を決めるといふのはどうなんだ？」

「なんか、クラウドとティファが他の髪色になるなんて想像できなくてさ。それっぽい種族をこっちで選んでみたんだ」

事実、キリトもそういう理由でスプリガンを選んだ身なわけ。そこは彼の性格と性質による価値観で決めたのだろう。

ま、クラウドもティファも恐らくその事に関しては気にしてないだろう。

種族が選べなかったのは少々残念ではあるが、こっちの世界で正式にサービスが開始された時にまた別のアカウントでも作れば良い。

どちらにしても、またキリト達の世界に来れた。

それだけで充分だった。

「さらに、とっておきのオマケ付きだ。そろそろ来るぞ」

「？」

急に言われたその台詞の意味がわからず、クラウドは首を傾げる。

すると彼はいたずらつ子みたいに笑ってウインクをすると、クラウドの斜め後ろを指差した。

そこにあるのは夜空だけだと思うが、クラウドは疑問に思いながら振り向いて空を見上げた。

すると、

ゴーン！　ゴーン！！　と。

重々しい鐘の音が響き渡った。

それと同時に。

月明かりに照らされていたアルヴヘイムに、『一つの影』が落とされた。月蝕、に近い現象に目を細めていると、月の中に何か巨大なものが侵食しているのが見えた。

円形ではない、三角形の楔がどんどん月明かりを呑み込んでいく。

そして。

そして。

影は月明かりを完全に遮り、しかし奥から降り注ぐ月光によって、その三角形の影の輪郭を浮き彫りにさせる。

円錐形の物体。

その巨大な黒い影にクラウドは眉を顰める。もっとその姿を見ようと目を擦り、再び視界に影を捉える。

その時だった。

月明かりとは違う、全く別の光がアルヴヘイム全体を包み込む。

光が広がる。

世界を覆う。

輝きに思わず目をやられたクラウドは一瞬目を閉じてしまった。フォーカスの遠近が揺らぎ、元に戻って景色の輪郭が浮き上がってくると、それは『でっかい城』だった。

いくつもの薄い層を積み重ねて作られているのか、光はその層と層の間から洩れ、城の先端から先端まで眩く光を放っている。

そこでようやく気付いた。

何階層も積み重ねて建てられた、鋼鉄の城。

その城に見覚えのあるクラウドが戸惑っていると、キリトが隣まで

やって来て告げる。

「そう、アレ」がオマケだ。俺達がかつて立っていたSAOの象徴『浮遊城アインクラッド』だ!!」

そういうキリトにクラウドは驚愕する。

あり得ない。

あの世界は消えたはずだ。

夜空に浮かぶアインクラッドはアルヴヘイムの空の一部へと化し、世界樹の上部の枝と隣接する形で浮遊している。

アレがここにあるということは、つまり

「また登れ、と?」

「ああ、決着をつけるんだ。前は七十五層で終わったからな」

少年は大きく頷いた。

そしてまたクラウドを見る。

「クラウド」

「?」

「俺、弱くなっちゃったからさ、力を貸してくれないか?」

言葉は必要なかった。

クラウドは静かに目を閉じ背中に意識を集中させる。肩甲骨の少し上の付近から半透明でコウモリ模様の翅が現れ、それを見たキリトも翅を広げる。

そして、クラウドは口を覆い隠していたマントを捲ると、フツと笑

「俺は安くないぞ、キリト」

「金いんのかよ。出世払いな。ツケとけ!!」

◇◇◇◇◇

アルヴヘイムとインクラッドに光が戻ってきた。

それに合わせて、今まで世界中に散り散りになっていたプレイヤー達も再び集まってくる。

あの絶望はどこにもない。

死を恐れるべき場所と呼ばれた浮遊城だが、それでも、仮想空間の象徴とも呼べるあの城に魅力を感じ、どうしても捨てられなかった人達がまた挑もうと帰ってきたのだ。

「おーい!! 遅えぞキリト! クラウド!!」

「おーい! その男子二人! 置いてくわよー!」

「一緒に行きましょう! キリトさん! クラウドさん!!」

「待つてたぜクラウド!!」

「全く。いつまでたっても世話が焼けるナ。クラウドとキー坊にハ」

浮遊城インクラッドがある方角に向けて飛んでいくと、そこにはクラウドのよく知る仲間たちが夜空に輝く星のように、妖精の双翼の鱗粉を広げながら飛んで来ていた。

赤い髪を黄色と黒のバンダナを巻いて、どこか通常よりも長い刀を腰に差したサラマンダー、クライン。

その隣にはレプラコーンのリスベット。

猫のような耳と尻尾を伸ばして、腰に短剣を差して肩に小さなドラゴンを乗せているシリカ。

巨大なバトルアックスを背負った屈強な男のエギル。

それはネズミ意識してなのか、少し小汚ない格好を敢えてしている情報屋兼何でも屋クラウドの仲介人であったアルゴ。

さらに。

「クラウド!!」

「クラウドさん!!」

あの時、ALOに迷い込んでしまつて一緒に冒険してきた者達までこちらへやって来ていた。

スプリガンの黒髪のロングストレートに、上下に黒い装備を着込んで拳に格闘用グローブを着けて翅を広げているティファ。

ティファと同じく長く伸びたストレートの髪はインプを象徴とするパープルブラックに、黒曜石の装備を身に付けているユウキ。

クラウドと違ってシルフらしい緑色の服装に身を包んだ長刀使いのリーファ。

そして。

白銀のレイピアを腰に吊り下げ、肩に小さなナビゲーション・ピクシーを乗せた青髪ウンディーネのアスナ。

全員が集まった。

皆の前まで飛んできたクラウドの前に、キリトが先に出て身を翻し、彼の前に手を差し伸べる。

「さ、行こうぜクラウド!」

二つの世界。

アインクラッドとアルヴヘイム。

そして。

キリトとクラウドの世界。

双方の世界に激震が走る。

各々の世界から集まった者達は、すでにこの先を見据えている。

だから、彼はその手を取る。

とても楽しそうに。

手に取って、覚悟を決めたように笑みを浮かべて皆の目を見て告げる。





かつん、と。

硬い足音が響いたのは今回追加された鋼鉄の城の最上層。

想定されていたフロアボス、ではない。最後のボスは少なくともそんな小さな足音では収まらないほどデカイ存在だったからだ。

しかし。

ある意味では、それは本来のボスよりも大きな存在だった。

『フツ』

顔を出したのは銀髪の怪物。

ノイズまみれのアバターで不安定な存在ながらも確かに奴はそこに存在している。

空気が変わる。

主導権を奪った、そんな感じな雰囲気漂っている。

広々とした空間の奥に用意された、縦軸に置かれた玉座。

最上級の玉座に腰を下ろすと、怪物は足を組んで頬杖をつく。

あまりにも場違いな存在に誰も気付くことなく、奴は我が物顔で笑みを消さずに城のてっぺんの階層で静かに目を閉じる。

まるで眠りにつくように。

『私は、思い出にはならない』

一向に口調を変えず、笑いながら奴はこう告げた。

『私を倒せなかった時点で、お前が行き着く先にあるのは絶望しかないぞ。クラウド』

## GGO編 第1章

『演習ナンバー二十七、開始します』

録音された女性のアナウンスと共に、五つの的が動く。

「フン」

ボサボサの黒髪で赤いマントに身を包んだ男はリボルバー型の拳銃を構え、人の影がプリントされた的に正確に撃ち込んでいく。

広い射撃演習場空間に銃声が連続する。ただでさえ大きな音はより一層圧力を増して鼓膜へ跳ね返ってくる。

急所を外さず、見事な射撃を見せた男性は射撃演習場のテーブルに銃を置き、振り返らずに言う。

「今度は何の用だリーブ」

「やはり、気配でわかりますか」

すると、わざとらしい足音が一つ後ろから響いてきた。高級革靴を履いて一流サラリーマンが着てそうなスーツを着込んでいる。

リーブ・トウエステイ。

神羅カンパニー、ミッドガル都市開発部門元総括。優れたエンジニアでもあり、ミッドガルの魔晄炉の設計なども手がけていた人物。

現在は、『世界再生機構』こと通称『WRO』の局長として活動しているかなりの大物。

そんな大物が何故ここにいるのか、彼はふっと微笑んで、

「相変わらず、射撃が上手いですね。さすがは元タークスなだけありますね」

「用件を早く言え。お世辞とかそういういたものは必要ない」

その言葉を聞いて、リーブはやれやれと首を振って一拍おくと、

「解析結果が出ました。以前貴方に回収して貰ったUSBドライブの中身が何なのか判明したので報告に来ました」

「」

「貴方の言う通り、確かに神羅が極秘計画のため使う予定だった『仮想空間』でした。超人兵士、つまりはソルジャーとなるものを生み出すための演習場のようです。結局使われなかったようですけどね」

「そうか」

「……なんだか、興味がなさそうな反応ですね」

「用件はそれだけか？」

「いえ、本題はここからです」

リーブはコホンと一回咳をすると、

「解析した結果、その仮想空間の名は『ガンゲイル・オンライン』。通称『GGO』と呼ばれる別世界に存在する仮想空間であることがわかりました」

「そうか」

「貴方にはその仮想空間に入って調査して貰いたいのです」

「断る」

「……言うと思いました」

しかしリーブは諦めず、首を横に振って切り替える。

「貴方の方が詳しいかもしれませんが、その世界を作ったのはグリモア博士です」

「！」

いつも無表情だったヴァインセントの顔色が急に変わり、冷静ではないものの目を鋭くしている。

「貴方にはまだ知らされていないかもしれませんが、数ヶ月前に神羅が開発したネットワークに未知の空間が発生したので、その調査のためにクラウドさんが赴きました。そこで判明したのが、我々とは異なる世界で開発された仮想空間のゲームが何の因果かこちらのネットワークに紛れ込み、ネットに障害が発生していました」

「旧式のネットワークを使っていたので、そのネット環境には魔晄が使用されており、そこにあの『セフィロス』の残留思念が紛れ込んでいたという事実も発覚しました」

「!？」

その言葉に、ヴァインセントの顔が強張る。リーブは何気ない感じの柔らかい口調で言うが、彼はどこか冷静ではない。

実のところ彼もその事実を聞かされて驚愕していた。まさかあのセフィロスの残留思念がこのような形で復活するとは思っても見なかったからだ。

改めてヴァインセントが後ろを振り向くと、リーブは続けた。

「そして、今回その事件を担当していたチャドリーから依頼が入りました」

「現在、セフィロスの残留思念は未だに健在であり、ネットワークを通じて仮想空間に留まりつつあります。彼を完全に消し去るまでは安心できません。それで今回は、貴方が新しく発見した仮想空間にセフィロスがいなかを調査して欲しいのです」

「ふっ」

ヴァインセントはそれを聞いて思わず鼻で笑った。

「何故私に頼る？ 散々クラウドに調査させておいて、急に私に変更したのか？」

彼の赤い瞳が楽しそうに細くなつて、そして睨むように鋭くしてリーブを見つめる。

しかし、リーブは見抜いていた。

厳しい目付きを向けられたというのに、彼はサラリとしていた。口元にはゆつたりとした笑みがある。

「しかし、貴方のその様子では既に引き受ける気のように見えますが？ やはり、貴方の父親が関係しているとなれば黙ってはいられませんか？」

「それに、何も貴方だけに依頼したとは限りませんよ？」

いきなりな言葉に、ヴィンセントは眉をひそめた。

リーブは姿勢を正して言う。

「セフィロスという強大な相手関わっているかもしれないのに、貴方だけに頼むのは少し心許ないので」

「つまり」

「はい、もちろん『彼』にも頼んでいます。凄腕を要求されましたけどね」

そこまできて、ようやくリーブは表情を暗くした。

大層な額を要求されたんだろう。

「既にグリモア博士が開発したと見られるマップデータへ移動するための準備は整えております。そして、貴方への報酬も既にご用意して

「お・り・ま・す。今すぐ行けますか？」

「。」

射撃演習場のテーブルに置いた自慢の拳銃をズボンのベルトに挟むとこちらに目をやって、

「私を動かすために、それだけのために『親父』名を出すとは。回りくどいにもほどがあるな」

ヴインセント・ヴァレンタインは、別に高名な人物ではない。

なのに、わざわざ彼にまで頼むほど追い詰められている状況でもあるようだ。まだそこにセフィロスがいる可能性があるかどうかさえも確かめていないというのに。

彼は呆れたように首を振る。

「説明は後にしてくれ、時間が勿体ない」

ヴインセントはそう言った。

リーブはその言葉に頷く。

「では、我々が手配した施設へと向かいます。そこに仮想空間へ入るための機器を用意しています。まだ二台しかないと言われている『アミュスフィア』を、チャドリーさんの力を使って今回特別に作っていただきました。それで調査に向かってもらいます」

「。フン」

ヴインセントはリーブの後に続いて射撃演習場の外に出ながら、興味なさそうに鼻で笑った。

射撃演習場には、感覚を取り戻すために無数に撃った薬莖だけが取り残される。

また彼は、人のために銃を握る。



仕事の関係上、仮想空間へログインしない日々が続いていた。宅配という仕事柄、遠くへ行つては届けてを繰り返すため、不定期でしかログイン出来ないのだ。

キリト達とも、しばらく合っていない。

たまにログインしては合っているが、一ヶ月ほどの期間を空けてしまった。別世界であるため電話やメールでの連絡手段も取れず、今回はログイン出来ないなどと伝えられないのは少々申し訳ない気がする。

しかし仕方ない。

こつちも仕事があるのだから、そつちを優先しなければ食っていないのだ。

と、そんな日々で。

彼らの拠点でもあるセブンスへブンの電話がプルルルと着信音を発した。

ちように仕事から帰ってきていた彼は、皿洗いをしているティファの代わりに受話器を掴む。

電話の相手はチャドリーからだった。

また厄介事かと思つたら、案の定そうだった。

まあ、やむにやまれぬ事情があるのか、多額の報酬を用意するからどうかお願いしますと言われたのでついまた引き受けてしまった。

一先ず手短に頼むと言つたら、依頼内容はまた仮想空間の調査。

新しい仮想空間への座標が見つかったから向かってくれと、そのマップデータを既に彼の持つアミユスフィアに送りつけた後、チャドリーはこう言い残した。

『あちら側の世界の協力者がその世界で待っています』

とだけ言つて電話が切れた。

確かに手短かに頼むとは言ったが、もっと具体的に言って欲しかった。

なんだか便利屋として使われている気分だが、実際今も裏メニューとして何でも屋をしているから仕方ない。そういう事情もあり、報酬を払われた身として、クラウド・ストライフの何でも屋としての仕事が決定的だ。

なんでこんなことになってるのかなあ、という疑問を今更抱きつつ、クラウドは自室へと戻ってアミューズフィアをネットに接続し、チャドリーから送られてきたマップデータをダウンロードし終わると、頭に被って電源を入れた。

目を閉じ、コマンドを唱える。

「リンク・スタート」

瞬間、奥から虹色のリングが大量に押し寄せてきて、見慣れた白い放射光が視界を塗り潰した。

◇◇◇◇◇

気付いたら荒廃した世界が広がっていた。鋼の世界の上へと足を踏み込んでいたのだ。

「ちよつと今回は色々展開が省略すぎないか」

何だか妙に重たい頭を振って起き上がると、カサリとした感触が。手元にいるの間にか小さなメモが握られている。

それによると、

『クラウドさんへ、既に協力者にはクラウドさんのお名前を伝えておられます。アバターはランダムで生成されると思いますが、ほとんど現実の姿と変わらないと思いますので、金髪のツンツン頭が特徴の男性



がクラウドさんだと伝えておきました。故に、相手はすぐにクラウドさんだとわかると思われます。それでは調査の方をよろしくお願い致します』

「」

あの小僧。

やはり今回は明らかに省略しすぎてる。いつそのこと報酬は既に貰ったし、このままログアウトしてしまおうかとも思ったが、一度引き受けた以上引き下がるわけにはいかない。

何でも屋としてのプライドがあるのだ。

彼は自らの両手を握りしめ、アバターに意識が移ったことを確認すると、次に自分の姿を確認する。コンバート機能によつて、彼のステータスはALLOほどの強さが引き継がれているはずだが、アバターはランダムでまた生成されるということを知っていた。

よつて、自分の姿を確認するために、何か自分の姿を確認するための鏡的な物はないか探す。

周囲を見渡し、ちょうど近くにドーム外壁を飾るミラーガラスがあったのでそこへ歩み寄つて行こうとすると、

「あ！ あの一！」

歩みかけたクラウドの足が、途中で止まった。

彼の近くに、小さな人影が現れたからだ。

桃色のサイドテールに碧眼の少女。

黒のインナーの上に、全体的に桃色のジャケットを纏っていて、肩周りやミニスカートの一部が白くなっている。

「アンタは？」

桃色のサイドテールの少女の顔を見て、クラウドは思わず呟いた。すると彼女はこう聞いてきた。

「えつと聞いてた話だと男性って聞いてたんだけど、お姉さんがクラウド？」

「は？」

いきなりの謎発言に、クラウドは思わず聞き返した。少女は首を傾げているが、こっちもそれに合わせて首を傾げてしまう。

どうにも嫌な予感がする。

それはまるで、あの違法行為が認められて自由が許された街と言われた『ウォールマーケット』にある『コルネオの館』に侵入する時と同じような悪寒がした。

それは何故か。

少女の口から、『お姉さん』という言葉が飛んできたからだ。

クラウドは恐る恐るといった感じで、ミラーガラスに反射する自分の姿を覗き込む。

そして、

「ツツツ??  
!!!」

愕然として目を見開いた。

ガラスに映っていたのは、まさに『あの時の姿』だった。

背丈やツンツン頭そのままだったが、何故か現実の自分よりも髪が長く、そして『三つ編み』に髪が結ばれていた。

それに、元々白かった肌の色が更に白く滑らかで、睫毛も長かった。そう、その姿はまさしく。

あの時の『女装クラウド』そのものだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はあ」

数分後、何とか協力者と接触できた少女はちよつと重たい息を吐くと、今も顔を真っ青にしてベンチに座り込んでいるクラウドを見つめる。

指定された場所へと赴いたところ、何やら美しい金髪のお姉さんがいたから声をかけたところ、自分の姿を確認した途端に膝をつき、ズーンという効果音が聞こえてきそうなくらいに落ち込んでしまった。

どうして落ち込んでいるのか聞いたところ、自分は男だと聞かされて驚愕した。

確かに、声は男の声色だった。女性にしては低すぎるし、違和感があった。

服装はノースリーブのハイネックシャツと紫紺の服を身に纏っているから男性でも女性でも着こなせるような見た目だが、髪型が三つ編みだから骨太なおなごにしか見えない。

そうして現在に至るわけだが、

「あ、あのクラウド、さん？」

「」

「き、気にすることないと、あの、思いますよ！ 私でもびつくりするほどすつこくかわいい——」

「ヤメテクレ」

「え、でも——」

「感想ハイライナイ、何も言ウナ」

真っ白に燃え尽きたようにベンチに座っているが、表情はひどく真っ暗に落ち込んでいる。

あまりの事態に口をパクパクと開閉させてあたふたしている少女

だったが、数分また経った後、クラウドは固く閉ざしていた口を開いた。

「まだ名前を聞いてなかったな」

「え？ あ、はい！ 私はえつと——」

「敬語は必要ない。アンタの様子を見るとあまりその口調は慣れてないようだし、普段通りに話してくれて構わない」

「あれ？ そう？ じゃあ、そうさせてもらわね。ここでの私の名前は『グレハ』。今回のイベント大会の協力者よ！」

「？ イベント？」

「あれ？ 聞いてないの？ 今この『ガンゲイル・オンライン』、通称『GGO』の世界では、『バレット・オブ・バレッツ』っていうバトルロワイヤル式の大会が開催されるから大盛り上がりなの。初心者にあんたと一緒に参加すればすごいレアアイテムを報酬として渡されるからって、ネットに掲示されてたからすぐに応募したの」

「」

十中八九その情報をネットに上げたのはチャドリーだろう。この子とは初対面だが、詐欺とかそういうのは考えなかったのだろうか。

それにしても、聞いていない情報がたくさんあった。

イベント大会に参加するなんて聞いていない。今回はこの世界の調査だったはずだ。なのに、何故かは知らないが勝手にエントリーする前提で話が進んでいる。

そのことに対して口を挟もうとしたクラウドはクレハという少女に話しかけようとする。

「待ってくれ、俺の目的は——」

「そういうわけで！ 早速総督府にエントリーしに行くわよ！ 三時で締め切っちゃうれしいから早く!!」

「お、おい!?!」

有無を言わず立ち上がりながら手を引つ張られるクラウド。クレハは『走りながら戦闘の基本とか説明するわね!』と言うだけで取り合ってくれない。

説明不足な中で進んでいく展開の中、クラウドは内心不安でいっぱいだった。

## 第2章

現場には一瞬で到着した。

ヴインセントはボヤけた視界を明確にすると、初めての感覚に違和感を覚えた。

だが、さすがは元汚れ仕事を専門にしてきたプロフェッショナル。数秒後には事態を把握し、中央都市にある初期キヤラクター出現位置に設定してあるドーム状の建物から前へ一步踏み出す。

「」

頭上を見ると、空が一面赤味を帯びて若干黄色が混じっているのが見える。黄昏時の輝きの中で無機質なビルとビルの間立つヴインセントは、この景色を見るとどうしてもミッドガルを思い出してしまふ。

無理もない。

この世界は世紀末な世界観を元にした仮想空間。スラムが多くあつたミッドガルとどこか似ている。行き交う人々は迷彩のミリタリージャケットやボディアーマーを纏い、肩や腰に無骨な銃器を背負い、そしてほとんどの奴らの目つきが剣呑としている。

街全体が負を中心とした、誰も寄せ付けない圧迫感に包まれている。

「懐かしい空気だな」

それでも、ヴインセントはその空気に思わず口元を緩めた。

目の前に広がる暗い空気は、ミッドガルのスラムのように見放された無法地帯。つまり何が起きても不思議ではない、誰の目にも留まらない。

戦い。

殺し。

奪う。

それらが先鋭化された世界だ。

「さて」

目的を果たそう、と思つてまた一歩歩き出そうとしたところで通信端末が鳴った。

鬱陶しそうな顔でポケットから端末を取り出すと、表示されているのは『リーブ』という名前。

「なんだ？」

『そろそろ仮想空間に降り立った頃だと思ひましてね。セフィロスの残留思念があるかどうかの調査のサポートをするために連絡しました』

「」

『それで、調査のために行つてほしい所があるのですがよろしいですか？』

ヴァインセントはため息を一つ吐きながら聞く。

「どこに行けばいい？」

『総督府という場所でバトルロイヤルイベントというのがあるので、そこを中心に調査してください』

リーブは平然と言い切った。

ヴァインセントは首を傾げながら訊ねる。

「何故そこなんだ？」

『バトルロイヤルイベントには、あらゆるプレイヤーが集結するはず。一筋縄では行かないような雰囲気を持った多くの強者達が参

加するでしょう。無闇矢鱈に探し回るより、ほとんどのプレイヤー達が集まる場所であれば見つかる可能性が高いと判断致しました』

「私にそのイベントに参加しろということか？」

『そこまでは望んでいませんが、それもありません。イベントに参加して目立てば、他のプレイヤー達から称賛されて多くの情報が入りやすくなる可能性もありますから』

「」

ヴインセントはほんのわずかに黙る。

個人的にはそういったことはしない主義だ。タークスに所属していた以上、任務遂行のために隠密に行動することを強いられていたからだ。

しかし、ヴインセントはもうタークスではない。

目的達成のために、一度その考えは全て封じた。

「用件はそれで終わりか？」

『はい。それだけです。彼もそつちでそろそろ動き始めた頃でしょうし、こつちも早いところ調査を始めましょう』

『彼』という言葉聞いて眉をひそめたヴインセントは無言で通話を切った。

通信端末をポケットにしまうと、腰にある銃をチェックする。

クイツクシルバー。

扱いやすさを優先したオートマチックの拳銃。外観のモデルはアメリカ軍のかつての正式銃であった名銃『コルトM1911A1』。

初期装備という概念を知らないヴインセントは、何故自分の腰に既に武器があるのかわからなかった。しかし、これで武器の確保の心配はなくなったので特に気にしないことにした。

ヴインセントは銃をしまうと、総督府という所に向かうために進行方向をわずかに変えた。仮想空間の雑多な光景を作る街灯に惹かれるように総督府に向かおうとした所で、気付いた。



（総督府とはどこにあるんだ？）

右も左もわからない場所にいて、総督府に向かえとだけ言われたためそれがどこにあるのかわからなかった。

どうしたものか、と途方に暮れたように腕を組んで上を見上げていると。

「総督府？ 何しに行くの？」

「あの、もうすぐあるっていう、バトルロイヤルイベントのエントリーに――」

ふと、横合いから聞き覚えのある単語が聞こえた。

◇◇◇◇◇

「え？」

あまりにも唐突な質問だったせいか、ペールブルーのショートヘアの少女はそんな声を出した。

質問したのは、長い睫毛に頭頂部から肩甲骨まで伸びている鮮やかな黒髪に白い肌の女性的な印象を持つ少年だ。

彼はどういふつもりなのか知らないが、自分の声を変声させるために喉を締めて話している。

よって、額の両側で結わえた細い房がアクセントになっている少女は少年が男だと気付かずに聞き直す。

「え、えっと、あなた、このゲーム初めて？」

「あ、はい。初めてです。だからまずどこか安い武器屋さんにも行きたいんですけど」

「ええと、その、別に初心者がイベントに出ちゃいけないなんてこと

は全然ないけど、ちょっと参加するにはステータスが足りないと思うよ。参加する人達は皆このゲームのベテランばかりだし」

「あ、初期キャラってわけじゃないんです。コンバートして他のゲームから引き継いでますから」

「ああ、そうなんだ。だったら大丈夫か」

それを聞いて一安心したかのように胸を撫で下ろした少女は笑みを浮かべて楽しそうに話しかける。

「一つ聞いてもいい？ 何でこんな埃っぽくてオイル臭いゲームに来ようと思ったの？」

「え？ えっと、それは……」

少年は一瞬言葉を詰まらせるが、なんとか素早く頭を回転させて良い言い訳を述べる。

「い、今までずっとファンタジーなゲームばかりやっていたんですけど、たまにはサイバーっぽいのも遊んでみたいなあ、って思ってた。あと、銃の戦闘とかも興味あったし」

「そっかー。それでいきなりB・O・Bに出ようだなんて、根性あるね」

なんとか通じたようだ。

実際少年は嘘をついてはいない。本来の目的は別にあるが、ずっと剣での近接戦闘ばかりしていた彼が銃の世界ではどこまで通用するのか試してみたいというのもある。

少年の言葉に少女は笑みを浮かべて、

「わかった、いいよ。私もちやうど総督府に行くところだったんだ。その前にガンショップで武器を買い揃えるんだったね。色々揃って大きいマーケットに案内してあげるからついてきて——」

と、そこまで言った少女の背後から、カッンという足音が聞こえた。少年少女の二人が何か思う前に、彼女の肩が何者かに叩かれた。



少女の肩を叩いたのは、ボサボサの黒髪で赤いマントに身を包んだ男だった。

身長は二人よりも高く、深紅のバンダナで髪を束ねており、左腕に身に付けた金属製のガントレットが少女の肩に置かれている。

急に叩かれた少女は目を見開いて驚いているが、その前に男性が話し出す。

「すまない、総督府にはどうやって行けばいい？」

「え？」

「総督府にはどうやって行けばいい？」

ボソボソした声で言われて、男性が少年と同じく総督府に向かいたいからどうやって行けばいいのか尋ねてきていることによく気が付く。

その事に少女は困ったように首を傾げると、

「えっと、その前に、あなた一体誰？」

「ヴィンセント・ヴァレンタインだ。総督府までの行き方を知りたい」

もはや彼は自分のことしか考えていないようだった。こちらの事情などお構いなしに話に介入し、少年よりも強引に道案内を頼んできている。

ポカーンと二人は突然の急展開に唾然としていたが、三秒後には正気に戻って聞き返す。

「えっと、もしかしてあなたもB O Bに出ようとしているの？ この

子と同じく?」

「まあそんなところだ、お前達が総督府に向かうという話が聞こえてきたからな。私もそこに行きたい」

「一応聞くけど、あなたこのゲームは初めて?」

「ああ」

「あの、この子にも言ったけど、初心者だしたら大会に参加するにはステータスが足りないかも」

「心配はいらない。戦いには慣れてる」

そういうことじゃないんだけどな、と少女は眉を寄せて困った顔になる。

今日一日で二人もニュービーに出会い、それでしかも大会に参加するときは、ここで押しが強クツツコミに慣れている人間だったなら、『やめとけ』の一言で済ませられただろう。が、どうにも少女は心許ない視線をさまよわせて、

「えつと...じゃあ、あなたも、来る?」

返答に困って、なんとも曖昧な言葉を返してしまった。あれこれ考えた結果、少女は諦めて彼もつれていこうという気になったらしい。

それにヴァインセントは無表情のまま感謝を告げる。

「助かる」

「ちなみに、ニュービーだしたらまだ武器も持ってないよね。あなた武器はどうするの?」

「いや、持っている。武器の調達の心配はない」

「そう。でもこの子は持ってないようだから、ついてくるようならまずガンショップについてきてもらおうわよ。いい?」

ヴァインセントは無言で頷く。

表情筋が死んでいるのか、それとも喜怒哀楽の感情を知らないの

か、なんにしても初めてその人のことを見たときに抱いた印象は胡散臭いだった。

しかし、ボサボサヘアの下から見える綺麗な赤い瞳に更に透き通る肌、筋の通った鼻、マントで見えにくい小さくて形のいい唇。整っている顔つきをしている彼に対して目が釘付けになるのは当然の事だった。

無表情だからこそカッコよく見える。

そんな彼の様子を黙って見ていた少年は、心の中で静かに思う。

(なんかこの人.....どこか「クラウド」に似てるな)

見た目はどう見ても「彼」より歳上だが、妙にあの金髪のツンツンヘアの事が頭にちらつく。

少年の知り合い、クラウド・ストライフ。

最近リアルの方が忙しいらしくて一ヶ月くらい会えていないが、彼は元気なのだろうか。彼がいるのは自分達の世界とは違って別の世界のため、連絡する手段がないから待ち合わせも出来ない。

久々に会いたいなど思っていると、ヴァインセントが催促するように二人の前を歩き出す。

「武器屋に行くのなら早くしよう、大会のエントリーに間に合わなくなる」

と、二人の前を歩き出すも、武器屋とは反対側の方向へと進んでしまふヴァインセント。間違った方向に向かっていることに気付いた少女はすぐにその足を止めるために彼の肩を叩く。

元タークスで現在は改造人間であっても一人の人間であり、欠点的なもの一つはあるようだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「クレハ、って言ったか？ 聞きたいことがあるんだがいいか？」  
「うん、どうかしたの？」

クラウドはクレハという少女と共に総督府に向かっている最中、どうしても何とかしておきたいことがあるため一つ質問をする。

「見た目を何とかしたい。アバターを変更する手段はないか？」  
「え？」

そう質問されて目を丸くするクレハ。

折角綺麗なアバターを手に入れたのに変更したいと言われて何故と思っっているのだ。クレハはどうして変更したいのか訊ねる。

「え？ どうして？ 折角レアなアバターを手に入れたのよ？ そのアバター、おそろくめったに出ないって言われているM九〇〇〇番系だよ？ 噂じゃその手のレアアバターはコンバート前のアカウントを使い込んでるほど出やすいらしいんだよね。それなのに変えるつもりなの？」

「女である自分が望んでもないのに屈強な男になって、その姿を知り合いに見られてしまった時のことを想像してみろ」

「ちよつと、無理だね」  
「そうだろう」

クレハは自分が男の姿になってしまったことを考えると悪寒がした。女性として生まれてきた彼女は男性の姿になることに対し、少し抵抗があるみたいだった。

クラウドの立場になって理解したクレハは、仕方なく見た目の変更方法を教える。

「といつても、変えられるのは髪型くらいだよ？ 顔や体つきを変更するにはこのゲームの設定上リアルマネーがかかるから」

「それでいい。知り合いとかに俺だと悟られなければそれで構わない」  
「ネームカードが表示された時にわかつちやうと思うけど、まあいいや、じゃあメニューウィンドウを開いて？ それで髪型を変更する項目があるはずだから、それを押して好きな髪型に設定し直して」

クレハに言われた通り、メニューウィンドウを開いたクラウドは髪型変更のボタンがあったため、髪型を変更するためにヘアカタログの中から現在の自分とはかなりかけ離れたものを選ぶ。

『ロングウルフヘア』という髪型に決めたクラウドは、その髪型に変更する。

普段のツンツン頭より綺麗な髪型だが、女性的な印象はまだ拭えない。もともと中性的なアバターだからという理由もあるのだろう。しかし、これで自分がクラウド・ストライフだということはわかりずらくなっただけだ。

金髪という部分は変わらないが、髪上部は丸みをつけたマツシユルームカット、前髪部分にメッシュが入り、襟足の部分を長く伸ばして下部にレイヤーを入れて軽く仕上げている。首筋に沿った毛流れが美しく、長く残した毛先の表情や動きによって色々アレンジが楽しめるのが魅力的な髪型だ。

しかし、もともとクラウドが比較的にな顔だったのも手伝ってか、より一層もはや元が男などとは言われなければわからなくなった見た目になった。否、人によつては言われても冗談と笑う者もいるかもしれない。

少なくとも、ツンツン頭ではなくなったおかげで一目でクラウドと見抜ける者はそういないだろう。

「わあ、すっごーい。やっぱりクラウドって女装がすっごく似合うね!!」

クレハが目丸くしながら言ってくる。クラウドはその事に対し

て恨みがましい視線を返した。

「モウ見タ目ニ関シテハ何モ言ウナ。ソレト、オレノ名前ヲ言ウノモ禁止ダ。身バレシタクナイ」

「もう、せつかく女の子の姿なんだから、そんな言葉遣いをしちや駄目だよ。あ、そうだ！ このアイテムつけてみてよ!!」

「?」

クラウドは眉をひそめながら、クレハからチョコカーのようなものを受け取った。

「それを喉に巻いてみて」

「??？」

クラウドは言われるがままにチョコカーを首に巻きつける。すると、

「これが一体なんだって、なんだこの声は!？」

チョコカーを喉元に巻いた瞬間、声を発しようとしたら自動的に女の声に変声されたのだ。線の細い、しかしどこか低い声。女軍曹のような声質になったことに戸惑っていると、クレハが説明する。

「最近のアップデートで追加されたアイテムの高性能変声機、モデル『ライトニングボイス』よ。これであなただけが誰もクラウドだってわかりづらくなつたわね。あ、名前言っちゃいけないんだったね。じゃあ音声モデルから取って『ライトニング』でいいかな？」

「女声にまでなりたいとは言っていない！ 外させてもら——ッ!!」

「自分がクラウドだってバレてもいいのかしら?」  
「ッ!？」



「まあ、なんにしても上出来よ！ これなら少なくともクラウド・ライトニングを男だと思える人はそういないでしょう」

.....

クラウドがフンと鼻を鳴らす。確かに敬語は必要ないと言ったが、ここまで遠慮がなくなってきたと逆でクラウドはむしろ歳上には敬意を払ってほしいとさえ思えてしまった。

しかも、本当の名前を捨てて勝手に偽名までつけてきてしまう始末。ライトニングってなんだ、と疑問を持つことさえ馬鹿馬鹿しくなってきた。

しかし、敬語は必要ないと言ったのは自分。今さら取り消せない。

故に、名前についての文句も言えない。

クラウドはバツと身を翻すと、クラウドに手をかざした。

「それじゃあ改めて、バレット・オブ・バレッツのエントリーに向かうわよ！ 目指すは優勝!! レアアイテムを手に入れるのはあたしなんだから!!」

そして高らかに宣言する。

クラウド改め、ライトニングという名前になってしまった彼はため息を吐いてから了解とボソツと呟くように返事した。

### 第3章

少女は未だに名を名のらず、二人のプレイヤーをガンシヨップへと引きずっていた。

荒廃した世界というのがコンセプトというのもあつてか、綺麗な店もあれば壊れて使い物にならなくなっている店舗まである。恐らくあれはただのオブジェクトで実際の店ではなさそうだが、そこまで精密に作られていることにヴァインセントは素直に驚いていた。

たかが仮想空間。  
偽物の世界。

それなのにここまで世界観に合わせて街が作られている。

例えば喫茶店のような店。喫茶店のウインドウなどはバキバキに割られており、中は複数の土足の足跡だらけで、まるで強盗にでもあつたかのような外観だった。

壁紙も床板も引き剥がされ、天井にぶら下げられているライトまで床に落ち、バチバチと火花を散らしている。

客席のソファもひっくり返され、中の綿が飛び出している。

銃の世界であるからか、バックグラウンドストーリー的なものがある。ちこちに存在しているようだ。

まさに、テーマパークに来たみたいでテンションが上がる。

ヴァインセントは周囲を見渡して、

「始めて入ったが、中々に作り込まれているな」

「あら、あなたVRMMOはここが始めてなの？」

「ああ、やる機会がなかったからな」

「ふくん」

少女はてくてくと前を歩きながら、

「あつたあつた。こつちよ」

彼女は細い指で店舗の一つを指差す。

この舞台は人類が宇宙に進出し、その後大規模な宇宙戦争が勃発、文明が衰退し残った人々は大戦で滅びた地球に宇宙移民船団で戻り過去の技術遺産に頼って過ごしているという未来の世界らしい。

故に、この街はその宇宙移民船の残骸を使って再利用し、一つの街に作り変えた。

宇宙から出戻った人類は移民船で使われていた光学銃や発掘、復元した過去の実銃を手に、遺跡と化した過去の巨大都市で暴走した機械兵器や遺伝子操作で生み出された生体兵器、そして同じ人間同士で戦いを繰り広げるといのがこのゲームのコンセプトだ。

よって、その店に置かれている武器は銃しかない。

だからだろうか、ヴァインセントの隣にいる黒髪ロングストレートの少年は息を呑んでいた。

それを見たヴァインセントが声をかける。

「どうした?」

「いや、今までやってきたゲームと世界観が違ってまだ頭が追いついてなくてさ。ちょっと緊張してる」

「そうか」

「何やってるの、早く行くわよ」

そう言って先頭に立っていた少女がすいすいと人波を縫って店へと向かった。

二人も店内に入っていく。

『ただいま【M14・EBR】入荷中!!』

『中距離タイプの打撃力UPに最適! 予備弾倉も多数ご用意!!』

『スコープ&バイポッドセット購入でさらにお得です!!』

NPC店員らしき美女らが露出の大きいコスチュームを身に纏っ

てプレイヤー達に売り出しをしている。

ショーケースの中に多種多様な銃が展示されており、その他にも手榴弾や弾丸パックに防具などが取り揃えられている。

すると、ここで二人の前を歩いていた少女がある事に気づいた。少女は少年の方を振り返って訊ねる。

「そう言えば、コンバートしたって言ってたけどお金はあるの?」  
「え?」

そう言えばといった表情を作った少年がメニューウィンドウを開いて所持金を確認する。

コンバートする際、他のゲームの所持品は引き継ぐ事が出来ず、ALOの装備や所持金は全て彼の人生のパートナーのストレージに保管されている。もちろん、このGGOでの所持金も他の初心者と同じく一〇〇〇クレジットしかない。ガンショップに来てお金が足りない事態に陥ってしまった少年に少女が気まずそうに提案を持ちかけた。

「お金が足りないなら、少し出してあげようか?」  
「!? い、いえッ!! だ、大丈夫ですッ!!」

ただでさえ少女には自分の事を騙している手前、罪悪感と良心がそれを許さなかった。

とは言え、お金がなければ装備を買う事も出来ず、BOBには裸も同然で出なくてはならない。  
そんな途方に暮れていると、

「あれは何だ?」

ヴィンセントの声に振り返る二人。

ヴィンセントの視線の奥から賑やかな笑い声が聞こえ、そこへ視線

を向けてみると数人のプレイヤーがミニゲームに夢中になっていた。

幅三メートル、長さは二十メートルはありそうな距離にある西部劇のガンマンめいた格好のNPCが、雄叫びを上げて数歩ダッシュしている寒冷迷彩服を着込んだ男に向かって銃口を向けているのが見えた。

そして。

ホルスターから抜かれたリボルバーが火を噴いた。

一発、二発、三発と、放たれるごとに男はまるで不思議な踊りをするかのようには上体を右に傾けたり、左手、左足を上げたりと、少し間抜けなポーズを取る。

が、それでよかった。

そのポーズをとっていたおかげで男の頭の十センチのところと左脇の下と左膝の下を弾丸が通過していった。

まるで、どこに弾が飛んでくるかわかっているかのような動きだった。

「やっきののは？」

ヴァインセントが少女に訊ねる。

少女は解説する。

「今のは【弾道予測線】による攻撃回避。このゲームは撃たれそうになった際に赤い線のようなものが見えるの。例えば眉間に撃ち込まれそうになったら、そこにレーザーサイトを当てられてるような感じ」

つまり、予め撃たれる場所の判断がつくということか。お優しい設定だとヴァインセントは感じた。

弾を避けたプレイヤーは再び前に足を踏み出し、撃つ体勢にNPCがなったらまたすぐに変なポーズを取って停止する。

「視認したプレイヤーの弾道がシステマ的に見えるようになってるの。それさえ体に触れなければ被弾する心配はないけど」

少女が説明する傍らで男は少女が警告した七メートル地点を通過した。あと三メートルで今までのプレイヤーが落としていった金全部が手に入る。

瞬間、ガンマンが先程とは比べ物にならない程の早撃ちで男に牙を向いた。

「ッ!」

男も回避するだけで精一杯のようで徐々に態勢を崩し、ガンマンもその隙について早撃ちで一気に勝負をかけた。あれだけの弾道が見えてしまったてはバランスを崩して被弾するのが末だろう。

案の定男は二発被弾してしまい、ガンマンは口汚い台詞を吐き捨てて、男が投資した五百クレジットが軽やかな金属音と共に額が上昇していく。

結局クリアできなかったプレイヤーは肩を落とし、ふらふらになりながらミニゲームのゲートから外に出た。

「なるほどな」

ヴィンセントは真顔でミニゲームのルールを理解した。要は放たれる弾丸に当たらずにあのガンマンに近付きタッチすれば良いのか。なんて簡単なルールなんだろう。

と、思っていたところで少女が横から言う。

「言っておくけど、あれは普通のプレイヤーにはクリア出来ないわよ?」

「何故だ?」

「さっきの見たでしょ? あのガンマン、八メートルラインから急に

インチキな早撃ちになるから弾道予測線が見えた頃には蜂の巣になつてゐるつて訳。どんなプレイヤーも、まずあのガンマンには近付けないわ」

「左右に動けるならともかく、ほとんど一直線に突っ込まなきゃならないんだから、どうしたつてあの辺が限界なのよ」

「予測線が見えたときには遅いか」

ヴインセントが呟くと、彼は二人より前に出てゲートに向かって歩き出した。

「え？ ちょっと、あなた!？」

「要は、当たらなければいいのだろうか？」

唐突な行動に驚愕する少女だったが、ヴインセントは躊躇いなくキヤツシャーに右手を押し当てて金を投入する。

初期金額全額失つたヴインセントは、賑やかなファンファーレが響き渡ると同時にゲート前に立つ。

また誰か挑戦するのか、とあちこちからギャラリイが集まつてきて、ガンマンは英語で『I, m gonna kick your ass from here to the moon』とかなんとか喚びていた。

「ハハッ！ おっさん！ 頑張れよー！」

「体細えからイイトコまで行けるんじゃないやねえかあつ？」

などと皮肉めいた台詞が飛んできたがヴインセントは無視した。ゲートが開いたら走る、という準備だけをし、あとはリラックスしているのか無表情のままにいる。

銃を収めたホルスターに右手を添えたガンマンを合図に、ヴインセントの前にホログラムが表示される。

『3』の数字が表示され、2、1と減っていった、ゼロになったと同時にゲートのバーが開かれた。

瞬間、

ドンツ!! と。

彼の軸足が思い切り地面を踏みつけた。固い地盤が下から突き上げられたように震動する。

ダゴン!! という爆音。砕けたアスファルトをさらに踏み潰し、ヴィンセントの体がロケットのように空間を突き抜けた。

「「「!?」」」」

周囲の人々からすれば、人がその場から消えたように見えただろう。

改造人間である彼は、人間の常識には留まらない。遥かに強化され、ソルジャーとも互角に戦える身体能力を持つ。脚力に力を入れたヴィンセントは赤いマントを羽ばたかせ、ガンマンへと急接近する。

『ッ!』

ガンマンは予想外な表情を見せている。

ガンマンのNPCの目には、それは奇しくも、狼に見えた。獲物を睨み、どこまでも腹を空かせた強欲な狼が、その喉笛を噛み千切ろうとするような。

ヴィンセントは途中にある音速の壁を食い破り、バゴオという壮絶な音と共に空間を弾き飛ばし、空気抵抗ももろともせず突破する。ヴィンセントは距離を一気にゼロにするために真っ直ぐにガンマンの元へと砲弾の如き速度で跳躍した。

ホルスターから一度も銃を抜く暇もなく、ガンマンはヴィンセント



のガントレットによって右肩を叩かれる。

『オーマイ、ガアアアアアッ!!!』

負け犬の遠吠えのごとく膝を崩したガンマンは大袈裟に両手で頭を抱えている。

ガンマンの絶叫と共にジャンクポットの中に貯められていたクレジットが雨のようにヴィンセントの頭上に降ってくる。

まるで黄金の滝。

ネオン看板の下ではキャリーオーバー額の数字が目まぐるしく減少し、それらが全てなくなると黄金の滝は途絶えた。

出てきたお金は全てヴィンセントのストレージに収まり、それと同時にガンマンは元気を取り戻したかのように立ち上がって、『Hey chicken! Come on』とプログラムされた台詞を繰り返していた。

ヴィンセントはウィンドウを開いて自らのストレージに金が入ったことを確認し、少女達の元へ戻る。

すると、少年も少女もギャラリイも、ヴィンセントを見て開いた口を閉じようとはしなかった。

「?」

黙ったまま自分を見ている少年と少女とプレイヤー達を前に、ヴィンセントは首を傾げている。

そんな中、少女が開いたままだった口を一旦閉じ、口内を唾液で湿らめせて再度口を開いた。

「あ、あなた...今の一体何?」

「??」

「一体、どんな身体能力してんのよ!? 弾を撃たせる暇もなく接近す

「なんて、チートとしか思えないわッ!!」

周囲の奴らも、そんな少女の言葉に賛同したのか、そうだそうだ、一体どんなインチキを使ったんだなどと喚いている。

罵声が飛び交う中でも、ヴィンセントの表情は変わらない。

ただ、これ以上ここにいたら他の奴らに迷惑だと考えたヴィンセントは少年の方に向かって歩いて行き、ウィンドウを開いてお金を具現化させて手渡す。

「これで武器を買え」

「え?」

「どうやら今のはルール違反だったらしい。私的には弾に当たらなければいいとしか考えてなかったからな。普段通りの動きで接近しただけだったんだが、どうやらそれは反則として扱われるようだ。よって、この金は私が持つていいような物じゃない。皆に配るなり、アイテムを買うなり、好きに使ってくれ。私は別の人に総督府への行き方を聞く。お前たちとはここでお別れだ、すまない」

そう言ってお金を少年に預けると、ヴィンセントはそのまま店の出入り口へと歩いていく。

「お、おいッ!! ちょッ!!」

「ちよつと、待ちなさいよッ!!」

という黒髪の少年と碧色の少女に呼び止められるも、ヴィンセントの足は止まらない。

何の感情も抱いていないヴィンセントは、静かに目を細めて。

「私は何をやっても許されないのかもしれないな」

一体何故今そんなことを言うのか、本人にもわからなかった。誰ともなしに言った台詞は風に流され、彼はまた道行く人に総督府への行き方を尋ねてこの街の中心へと向かっていった。



総督府、通称ブリッジ。

初心者達が降り立つ開始地点のちょうど反対側に位置する場所にあるタワー。イベントのエントリーとか、ゲームに関する手続きは全てここで行われる。

そんな総督府の一階のエントランスを通り抜けたヴィンセント。

道案内をされ、途中迷ったがなんとかたどり着いた。

近未来的なデザインの建物の中に、イベントを告知するための大画面のパネルモニタがいくつも設置されている。

そんな中で一番目立つのは、『第三回バレット・オブ・バレッツ』のプロモーション映像。

ヴィンセントはそれらを無視し、大会にエントリーするために右奥の一角に設置されている縦長の機械へと歩いていく。

数十台が並んでいる中で、彼はエントリーをするための操作を開始する。

画面をタッチし、指先をスライドさせてメニューを辿っていくと、『第三回バレット・オブ・バレッツ予選エントリー』の項目へとたどり着いた。

彼は何の迷いもなくそのボタンを押す。

そしたら画面は名前や職業など各種データの入力フォームへと移行するのだが、ここで気になる但し書きが目に入る。

『以下のフォームには、現実世界におけるプレイヤー本人の氏名や住所などを入力してください。空欄や虚偽データでもイベントへの参加は可能ですが、上位入賞プライズを受け取ることはできません』と書かれていた。

賞品とかどうでもいい。

目的は、新しい仮想空間の調査。

「アイツ」の痕跡を探すのが本来の目的であるため、全フォームをすっ飛ばしたヴィンセントは一番下のSUBMITボタンを押そうとしたが、

「ッ!？」

真後ろから、視線を感じた。

「ッ!!」

「バツ!!」とヴィンセントはズボンのベルトに挟んであった初期装備である『クイツクシルバー』を引き抜きつつ振り返ったが、そこには誰もいない。

「」

辺りを見渡しても、自分を見ていたようなプレイヤーは誰一人として見つからなかった。行き交うプレイヤー達は、次どこのフィールドに行こうかとか、大会楽しみだよなというような平然とした会話をしている。

「気のせいか。」

と、自分の中で勝手に解決させたヴィンセントは再び画面に戻り、エントリー完了ボタンを今度こそ押す。

ボタンを押すと画面が切り替わって、エントリー完了を受け付けた旨の文章と、予選トーナメント一回戦の時間が表示されている。

日付は今日で、時間は一時間後だ。

「 .....  
」  
ガシャン、と。オートマチックのスライド部分を手でおさえて引く。

直後。

己の役目を再確認した彼の瞳が、  
「獣」のように鋭くなった。

## 第4章

暇だった。

ヴァインセントは壁に寄りかかりながら大会が始まるのを待っていた。大会に参加するであろうプレイヤー達が広場に集う中、一人だけにいるのは暇すぎてかなり退屈だ。

話し相手の一人でもいれば良いのだが、生憎と現在はそういう存在はいない。

特にやることもないので壁際に寄りかかって腕を組んで眠るように目を閉じるヴァインセントは先程あった出来事を振り返る。

「何が悪かったんだろうな」

と呟いた。

脳裏にあるのは、もちろんあのガンマンから弾を避けるミニゲームについてだ。

（一瞬で近付いて触るのはルール違反だなんて言われなかったからついそうしてしまっただが、あいつらは納得いつていないようだった。弾の一発でも撃たせるべきだったか？）

基本的にこの男の身体能力はもはや陣地を越えていて、改造されているが故に人間時でも驚異的な回復力と身体能力を持つ。『変身能力』を使用すれば怪物らしく命令は聞かず、相手が戦闘不能になるまで攻撃し続けるほどの化物となる。

そんなヴァインセントだからこそ、常日頃から戦い続けている彼の身体能力は半端ではないのだ。

そんな風に、普通の人間視点から見ればすぐに気づくことに気付かないまま『弾を何発か撃たせるべきだったか』などと延々と考え事をしながら冷たい壁際に背をつける。

広いドームに満ちる敵手達から外れて、一人ポツンと隅で大人しくしているヴァインセントだったが、

「いたいた!! こんなところにいたのねツ!!」

この世界に知り合いは誰もいないはずなのだが、という思考を持ちつついきなり飛び掛かってきた台詞にヴァインセントは瞳をゆっくりと開ける。

ヴァインセントがそちらを見ると、デザートカラーのミリタリージャケットに同系色の耐弾アーマー、コンバットブーツという姿に変わっているあの碧色の髪の少女が、ズシンズシンと重い音を鳴らして接近してくるところだった。

あの時総督府まで案内を頼んだ少女だ。

肩まである碧い髪に、ヴァインセントよりも三十センチほど低い背丈の少女。あの時別れた時の服装と違い、今は戦闘用に特化した服装に変わっていた。

唯一変わってないのはマフラーくらいだ。

その隣にはあの少年がいるが、何やら動揺しているのか額から汗が噴き出している。見た感じ少女に恐怖感を抱いているようにも見えた。前後に何があつたのか知らないが、おそらく喧嘩でもしたのだろう。

よって少女は怒りの感情を抱いたままこちらへとやってきていた。

八つ当たりされないことを祈るばかりだ。

「さつきぶりだな」

「馴れ馴れしく挨拶してんじゃないわよ!!」

ぎゃああ! と騒ぐ少女。

やはり前後で彼女が怒りを抱くほどの何かがあつたようだ。何気ない言葉を発してみても、彼女には不快極まりないノイズにしかならないようである。

と、  
ヴィンセントは冷静な態度で、両手を組んだまま再び目を閉じる

「私に何か用か？　もう私達が集まる理由はないと思うが」

「ただでさえムカつく対応により一層の拍車がかかってさらにイラつかせるわね。」

少女はわずかに首を横に傾けて、こめかみに青筋を浮かべつつ、

「アンタに言いたいことがあるのよ」「ん？」

平べったい少女の言葉に何やら闘気らしきものを感じ取ったヴィンセントは、目を開けて彼女を見る。

見ると彼女の全身から赤いオーラのようなものが見えた気がしたが、彼女は指を一本ヴィンセントに向けて銃を撃つような動作を一言、

「アンタは必ず私が倒す。強い奴らを全員殺してやるのが、私の使命だから」

ヴィンセントの眉がピクリと動く。

何故そんなことをいきなり言われなきやいけなのか全くわからないが、その台詞はほとんど実際のボリウムを伴わず発せられ、微少な震動として隣にいる少年の鼓膜にも響いていた。

見ると、少女の唇は邪悪に歪みつつ、獰猛な笑みを浮かべている。並の人間なら背筋を凍らせるほどの戦慄を感じさせただろうが、ヴィンセントは無表情のまま少女と向き合っている。

視線を交差させ、確固たる決意を目の当たりにしたヴィンセントは表情を崩さないままこう告げる。



「そうか。楽しみだな」

それだけを言ってまた目を閉じるヴァインセント。

ビキツ！ と少女のこめかみから変な音が聞こえる。俯き気味のヴァインセントのその軽い返事に、少女はより一層怒りゲージを上昇させていく。

それでもなんとか冷静を保とうと荒い息を吐きつつ、少女はこう言った。

「こうして会えるのは今日が最後だろうから、ここで名乗っておくわ

「シノン」それが、いつかあなたを倒すものの名前」

「負けたら承知しないから」

ヴァインセントに名を告げた少女、シノンはそれだけを言う満足し、そのまま振り返ってどこかへ歩いていってしまう。

それを追いかけるように後をついていく黒髪ロン毛の少年。

それを目を閉じたまま見送ったヴァインセントは、わずかに口角を上げていた。



少女達がいなくなった後、ヴァインセントは大会が始まる時間を確認するためにモニタが見えるドーム天頂へと視線を上げる。

残り五分。

それまでの間またもうしばらくリラックスするために眠りにつこうとするヴァインセントの耳に、

「あの人スタイル良すぎないか？」

「背え高っ、モデルみてえ」

「でもなんか妙に腕とかガッチリしてないか？」

「骨太のおなごってやつだろ。そんなことどうでもいいくらい美人すぎるッ!!」

何やらドーム中心が騒がしい。

ヴァインセントが何事かと瞼を開けると、人混みの動きがピタリと止まっていた。彼らは誰かに注目しながらヒソヒソと言葉を交わす。

一体何なんだ、と皆が注目しているものを目で追った時、ヴァインセントは気付いた。

「あいつは」

ノースリーブのハイネックシャツと紫紺の服を身に纏った金髪のロングウルフヘアーの女性。

その前にピンクを基調とした少女が歩いているが、皆その後ろにいる女性に注目している。ヴァインセントもつられるようにその女性に目を向ける。

そして、

「何をやっているんだ？」

見覚えがあったのか、今まで壁に寄りかかっていたヴァインセントは壁から離れ、その女性の元まで歩き出す。

人混みをかき分け、女性の近くまで来ると、ヴァインセントは声をかけようとする。

前に。

女性の方が先にヴァインセントの方に気づき、彼の姿を目にした瞬間、目を丸くする。

そんな彼女を置いといて、確信を持っているヴァインセントは女性の名前を口にする。

「何をしているク——」

「ッ!!」

女性は慌ててヴィンセントの口を勢い良く塞ぐと、周囲の人達、そして目の前にいるピンク色の少女に聞こえないような小さな声でヴィンセントの耳元に話しかけた。

展開をすっ飛ばして、

「悪いヴィンセントちよつと訳ありで初対面のふりをしてくれないか？」

「? 何故——」

「頼む」

「わかった」

鋭い眼光に素早い早口にヴィンセントは小さくうなずくと、女性は変声された声で自己紹介をする。

「は、はじめましてだな。お前も、大会参加者なの、か?」

「ああ」

「そ、そうか。お互いに、健闘を祈ろう。な、名前、名乗って、なかったな。ラ、ライトニング、だ。よろしく頼む」

「」

何やら吃音気味でイントネーションや挙動がおかしかった気がしたが、ライトニングと名乗った女装男子は握手を求めるかのように頬に汗を垂らしながら右手を差し出してくる。

空気を読んだヴィンセントはその手を掴み握手を交わす。

ピンク色の少女は少しだけ訝しげな顔をしたものの、まあ初対面の人なんだろうということで納得したのか、ライトニングという偽名を名乗った彼に声をかける。

「ほら行くよライトニング。大会が始まっちゃう」

「あ、ああ。それじゃあ、な」  
「ああ」

どうも気まずいやり取りが繰り広げられた。周囲の人々もわけがわからず目を白黒とさせていると、一人のプレイヤーが肩を叩いて何故かこう言ってきた。

「てめえ抜け駆けしやがって！」

「？」

「俺達だって、あの子」に声をかけようとしてたんだよ。それなのに、それなのに、ッ!!」

「」  
「」  
なるほど。

だからあいつはあんなにも自身の名を口にさせなかったのか。ヴィンセントの姿を見た瞬間に彼の顔から血が引いていくのがわかったが、こういうことか。

男性だとバレた時、おそらく彼はこいつらに蜂の巣にされる。

よってヴィンセントは空気を読むことにし、彼女とは初対面で何の関わりもないという設定を自分の中で作った。

と、謎の誓いを立てた時のことだった。

突然ドーム内に流れていたBGMが小さくなっていき、それに代わって荒々しいエレキギターによる盛り上がりのBGMが轟いた。

それに続くように、ドリームボイスに寄せて作られた合成音声の声が大量のプレイヤー達に聞こえるように響き渡った。

『大変長らくお待たせいたしました。ただ今より、第三回バレット・オブ・バレット予選トーナメントを開始いたします。エントリーされたプレイヤーの皆様は、カウントダウン終了後に、予選第一回戦のフィールドマップに自動転送されます。幸運をお祈りします』

そのアナウンスが終わると、ドーム内に拍手喝采が沸き起こる。テンションを上げている野郎共はコントロールが効かず「うおおおおお」と雄叫びを上げている。

喧騒の中、ヴァインセントはモニタに表示されているカウントダウンを見る。

残り二十秒。

カウントダウンがゼロになる前にヴァインセントはクイツクシルバーを取り出して転送されるのに備えようとする。

すると、

「お前何者だ？」

「ッ!？」

突然、男の声が響いた。

聞き覚えのない、低く乾いた声色。それでいて金属質な響きのある声が直接聴覚にぶち込まれたようだった。

音源は後ろだ。

ヴァインセントは慌てて振り返り、拳銃を引き抜いた。だが、そこには誰もいなかった。

「その動きといいあの時も俺の気配に気付いていたな」

謎の言葉だけが続く。

ヴァインセントは辺りを見渡すが、声を発しているらしき人物はどこにも見当たらない。

「お前は——」

そんなヴァインセントを無視して、謎の声はこう告げた。

「この俺 “死銃” が、必ず、殺す」

その後だった。

言葉を聞き終えたヴィンセントの体を青い光の柱が包み込み、強制的に予選一回戦のバトルフィールドへと転送させられた。

## 第5章

転送の間、彼は瞳を閉じたまま思考していたため、対戦相手の名前など知る由もなかった。

(さっきの奴は一体?)

先程の声の主。

自分を倒すと言ってきた、『死銃』<sup>デス・ガン</sup>と名乗った謎の人物。三秒で考えたような名を名乗った奴の姿を捉えきれなかったヴェインセントはずっとその事ばかり気にしていた。

何故自分を倒すだなんて言ってきたのか、一体何が目的でそんなことを言ったのか。

考えても考えても答えにはたどり着けない。情報不足の状態は何を考えても、結論が出るわけでもない。

ヴェインセントは何度も過るあの台詞を一分間も思い出していると、甲高い笛のような音が聞こえてきた。

空は黄昏。

黄砂でひどく乾いた、骸の果てにまで滅んだ終末の姿。灼熱の太陽に砂は焼け、自然という手の出しようもない敵が死へと誘う。

そこに立つ人々は、肥料となる。

花は咲くことはないが死んでいった者達の残された遺体が微塵に砕け、積もって、幾重にも積もって、荒廃した大地を覆い尽くす。

ここにあるのは、見渡す限りの死。

骸の大地。

空は黄色の雲で覆われている。

目を凝らせば、フィールドは草や樹皮の一つもない砂漠地帯だった。

砂漠はまさに死へと誘う地獄への入り口。灼熱の日差しに燃え上がった砂から発せられる熱によって、焼けついたフィルムの映像のよ

うに視界が溶け崩れていくのがわかる。

黄昏時でも、余熱を残した砂から暑さを感じ、厚着をしているヴィンセントは汗を拭う。

この光景を見て、彼は思った。

(タークス時代を思い出すな)

タークスとは、神羅カンパニー特殊工作部隊。諜報、調査、勧誘、誘拐、暗殺や要人護衛など会社の暗部を司る精鋭組織だ。

故に、いつ死んでも文句は言えないし、死んだ事実も消える。

正確には忘れ去られるといった方が正しいか。汚れ仕事を生業としているためか、入れ替りの激しいタークスは、死んだり抜けたりすればすぐに次の人材を確保する。

そう、タークスというのは砂のように死に、幾重の砂に紛れ、流砂に吞まれて消えていく。

砂を蹴散らすかのように殺し、砂のように吹き散らされて消える。暗部を司る精鋭組織という以上、ソルジャー並みに危険な任務に就かされ、最悪な場合は死に至る。

皆等しく無意味に、砂の中へ消える。

( )

ヴィンセントはガントレットを着けた左手で足元の砂を掬う。

ただ、笑うしかない。

大企業神羅カンパニーは世界一の会社ため、人材も十分に足りている。人が足りなくなったなら、足せばよい。武器が足りなくなったなら、調達すればよい。

簡単に入れ替わる業界なのだ。

よって、前の従業員なんてすぐに忘れ去られる。

それが、神羅社員だ。

掌に掴んだ砂を、指の隙間から溢れ落ちるのを感じて、自分は社会



からドロップアウトした存在なんだと理解する。

もう全ては過ぎ去った過去のはずなのに、あの時の思い出が頭から離れない。今もなお、あの時過ごしたタークス時代の日々を思い出す。

だからだろうか。

必然的に、『彼女』のことまで思い出してしまふのは。

タークスという、暗部のプロフェッショナルの位置にいなから助けられなかった女性。今でもあの時のことを悔いている。だからこそ、その罪を今でも背負い続ける。

それが、報いになると思つたから。

自分の残酷なる運命に、せめてもの報いを希う。

と、そんなことを考えていた時割り込むような銃声があさつての方向から聞こえた。

「！」

ヴァインセントがそちらを見る前に気配で感じ取り、前転して空を切る弾丸を避ける。

ヴァインセントはそのまま砂まみれになって、ベルトから拳銃を引き抜くと遊底を引いて弾を発射出来るようにする。

大きく深呼吸して、頭をスツキリさせるために振りながら起き上がったヴァインセントは、そこでバン！バン！と銃声が立て続けに鳴り響いた。

このままこの場に留まっていれば、狙い撃ちにされるのがオチだ。

幸いにも、この砂漠地帯のフィールドには遮蔽物となり得る遺跡が残されている。砂に埋もれていて出入口は塞がれており、柱も半分まで埋められた状態ではあるが、銃弾から身を隠すには十分だった。

砂煙が舞う中、ヴァインセントは走り抜ける。

彼は瓦礫や柱の陰へ次々と位置を変えていき、細かい移動を繰り返すことで対戦相手の追撃から逃げていく。可能な限り遮蔽物によって射線から逃れる動きをとっているものの、それでも断続的に発砲音

が炸裂する。

どうやら、相手も撃ちながら追いかけてきているようだった。こちらが手を出さずに逃げているのをいいことに、確実に仕留めるためにゼロ距離にまで迫って撃ち抜こうという作戦か。

できるだけ平坦な地面は避け、廃墟となった遺跡の柱が倒れて横倒しになっていたり、いくつものブロックが重ねて積み上げられた壁が風化して崩壊した場所などを選んで進んでいくが、

(相手の武器は恐らくスナイパーライフル。それなのにこうも素早く追ってこれるのか)

体勢と状態を固定して放つ狙撃銃を持っていると読んでいたが、相手の挙動には少しの狂いもない。相当の手練れだと思われる。

チエックメイトは時間の問題だった。

ヴィンセントは砂漠の真ん中で立ち止まる。左右にある背の高い遺跡が大きく崩れ、土砂崩れのように道を塞いでいた。

どうやら、ここまでがマップの限界のようだった。

ゲームのバトルフィールドには限界地点がある。遠くに逃げられないように決められたエリアの内側に見えない壁だったり、強制的に引き戻されたりするように、ゲームはプレイヤーに進んではいけない場所をシステムによって伝えなくてはならない。

フィールドは一キロ四方の正方形、地形やタイプや天候、時間はラウンドだ。

今回の場合は瓦礫と砂嵐。

瓦礫はかなり大きなものなので、破片の突起を掴みながらよじ登ることもできなくはないが、その場合はおそらくゲームシステム側はヴィンセントを負け扱いにするだろう。

何より、たとえ壁に張り付きよじ登ろうとしても、その間に背中を撃たれるのがオチだ。

「仕方ない」

ヴェンセントは諦めたように肩を竦めて敵がいる方向へと振り返る。

前方からキララン！ とした輝きが網膜に焼き付く。

スナイパーライフルに取り付けられたスコープから反射した光だろうと判断するのも束の間、敵が構える銃から伸びる一本の赤いライオンが、ヴェンセントの眉間を貫いていた。

（来る！）

引き金が引かれる瞬間を勘で感じ取ったヴェンセントは真横へ全力で跳ぶ。弾丸は空を切り、今まで行き先を封じていた土砂崩れの瓦礫の山へと貫通する。

一発の衝撃は相当なもので、十二mmほどの円形の風穴が開いていた。当たれば致命傷だっただろう。

だが、敵の居場所がわかったヴェンセントはジロリと眼球を動かして敵のいる位置を確認する。

「あそこか」

それがわかった瞬間、砂嵐の中でヴェンセントの体が低く沈む。

轟！！ と黄砂すら蹴散らして、赤いマントは砲弾のように敵へ向かって駆け出した。両者の距離は何メートルとあったのに、そんなものは関係ないというかのようにゼロまで一気に縮められた。

まるで水面を跳ねる飛び石のような動きで、ヴェンセントは敵の懐へと潜り込む。

「なッ!？」

敵だった男の胃袋から喉の先まで、ぞわりとした緊張が一気に這い

上がる。

そこで、彼の意識は途切れた。

ドン！ という一発の銃声が周囲を震わせた。

ヴァインセントの持つクイックシルバーから放たれた弾丸は敵の肩間を突き進み、そして男の顔面が消失した。

ぼちより、という生々しい音が地面に落ちる。

引きちぎれたパーツは縁の欠けた井のようだった。脳を収めただけの、皮膚と髪の毛のついた粗雑な入れ物に。

ヴァインセントはたった一発の銃弾で勝利を勝ち取った。

それを証明するように、敵の身体は無数のポリゴン片に変えて四散し、黄昏の空の下にcongratulationの表示が浮かび上がっている。

一回戦は突破した。

呆気なく終わってしまった試合に物足りなさを感じながら転送エフェクトの青い光に導かれて、待機エリアへと戻されていった。



場所は転送時と同じく壁際の付近だった。

クラウドがいらないかどうか確かめるために左右に首を振るが、それらしい姿は見当たらない。あの女性的な格好をしたクラウドの姿はどこにもいない。

何故あんな格好をしているのか、正直気になるところではあるが、初対面のフリをしてほしいと頼まれている以上、そう簡単にその話題を出してはならない。

クラウドがここにいないということ、まだ戦闘中だということ。ヴァインセントはライブ映像が映し出されている天井のマルチモニタを見上げてクラウドらしき人を探す。

ジャングルや砂漠、あるいは都会の廃墟に拳銃やライフル、もしくはマシンガンなどからいくつもの火を噴き、戦争映画さながらの世紀末さを感じられる。

と、そこで丸みを帯びた髪型をした金髪の女性的なプレイヤーが戦う姿が映像で確認できた。おそらく、あれがクラウドだろう。

画面上では、『ライトニングVSスノウマン』と表示されており、彼らは今雪原地帯のフィールドで予選を行っていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇

火花の弾ける音が、雪の中で炸裂した。

予選第一回戦。

相手の手の中には全長一二七・〇cm程度の長いスナイパーライフルが躍っていた。時折、乾いた音と共に、弾丸が音速以上の速度で射出されてくる。

だが、

(ルーファウスと比べたら全然遅いな)

状況に追い詰められ混乱しかかった頭を必死に動かし、クラウドは分析を行う。

そうしながら脚力の筋力を操作し、小刻みな超高速移動を使って敵の照準から逸れるための回避行動を取っている。

ルーファウスが放つコインによる超電磁砲なんかよりもずっと遅く、クラウドの目には止まって見えてしまう。よって簡単に避けられ、すぐに安全地帯である瓦礫の陰に身を隠すことができた。

身を隠しながら、クラウドはチャドリーが用意したであろう新装備に目をやる。

いくつものギミックが取り付けられた、普段はコンパクトに折りたたんで携帯することが出来る武器。使いようによつては銃にもなるし、剣にもなる。

まだ使ったことはないが、剣にも変形する以上、勝機が見える。

故に、躊躇わなかった。

「ッ!!」

彼は無言で陰から飛び出すと共に思い切り雪の地面を蹴飛ばし、敵の潜む位置へと一直線に走っていった。

雪原地帯、雪が降り注ぐ中で匍匐の体勢でいれば雪に埋もれて自分の位置を把握しづらいと思っっているようだが、クラウドは敵の位置を察知するのが得意だ。

何の迷いもなく、こちらに向かってくるクラウドを目にしたスノウマンという名を持つ男は驚愕しながら身体を起こし、片膝を地面につけて膝立ち体勢でスナイパーライフルを構えるようになった。

奴の持つスナイパーライフルから伸びる一本の着弾予測線が表示された。それを見て、大雑把な予測はできた。

つまり、前兆の感知。

今までは反射的に逃げてしまっていたが、今度はこちらが仕掛ける番だ。クラウドは走り抜ける。音速の壁を越え、一気に敵が潜む雪原地帯へと向かっていく。

「ッ!？」

敵は明らかに動揺し、幾度も弾を放つが、クラウドは予測線を感じて右左へと首を動かすだけでそれを避ける。

スノウマンは、ゴクリと喉を鳴らす。

(この至近距離で俺の照準を予測したってのか!?)

目と鼻の先にまでやって来ているのに、クラウドは簡単に避けた。

故にスノウマンは恐怖を抱く。

避けられたから、ではない。

そんなことなど関係ない。

恐怖の根底は、些細な理屈などではない。

今ここで重要なのは、銃では手に負えないほどの恐ろしい敵が、こ

れから自分の命を狩り取ろうと間近に迫っているということ。

クラウドは形状が拳銃状態の初期武器を構え、男の肩辺りに照準を定めた。

引き金に指が振れた途端に、敵の肩部分を中心に薄い緑色の円が表示されて驚かされるが、構わずクラウドは威嚇射撃を幾度も放ち、そのうちの一本が敵の肩に命中する。

当たった衝撃で敵は銃を手放し、丸腰状態になったところで、クラウドは自らの手に持つ拳銃のスイッチを親指でスライドさせる。

彼の持つ拳銃がガチャガチャと音を立てて大きく形を変形し、剣へと形状を変えた武器は対象を殺す用意ができた合図である。

クラウドはどちらかというと接近戦の方が得意。銃は単なる時の音、これからお前に刃を突き刺すという宣言でしかない。

クラウドもというライトニングの手で解き放たれた一撃は過たず対象の心臓へと貫通し、数瞬後に体が大きく膨れ上がって内側からポリゴン片となって弾け飛んだ。

断末魔すら残らぬ無慈悲なトドメ。

クラウドは特に何も思わなかった。

彼はただ、手の中にある銃や剣に変形する武器を両手で握り締めたまま、誇りを思い出すように剣となった武器の刃の腹におでこを押し付ける。

まるで、信者が神に祈りでも捧げているかのような格好だった。



クラウドは勝利を勝ち取った。

実はクラウドとヴェインセントは同じブロックである。

このまま順当にいけば、ヴェインセントは予選の決勝戦へと勝ち上ることが出来る。そして、クラウドも順調に勝ち進めば、彼らは決勝戦で戦うことになるだろう。

そして、ヴェインセントは次の対戦相手は誰なのか、天井のマルチモニタに表示されているトーナメント表の名前を見る。

ヴィンセントの次の対戦相手は、

クレハ。

◇◇◇◇◇◇◇◇

初戦を数分程度で終わらせ、待機ドームへと戻って仲間のクラウドの戦いを見届けたヴィンセントは次の戦いに備えるためにまた壁の隅に行こうとする。

途中で、

ベンチシートに、あのシノンと名乗った少女と一緒にいた少年が、まるで怯える子猫のようにきつく膝を抱えて座り、俯いた状態で寒さに耐えるかのように小刻みにその身体を震わせていた。

一体どうしたのか、ヴィンセントは無意識のうちに左手を伸ばし、彼の震える肩をそっと叩いてこう言った。

「大丈夫か？」

「!？」

その途端、少年はビクツ!! と全身を一瞬硬直させてから、恐る恐るとした挙動で俯いていた頭を持ち上げてヴィンセントの顔を見る。

「あ、あんたはたしか。」

「ヴィンセント・ヴァレンタインだ。お前と二人で話すのは初めてだったな。お前の名は？」

「キリト、だ」

結論から言うと、少年は変わらなかった。

少年はヴィンセントを見た瞬間に安堵したような表情を一瞬見せたが、すぐにまた絶望に染まったような顔になった。

まるで、深い恐怖に彩られているかのような。



「何があった」

「べ、別に」

反応が返ってくるまで、三秒以上も間が空いていた。

それでいて、少年は笑っていた。まるで熱病に浮かされたように大量の汗を噴き出し、それでも作り笑いとはいえ笑いかけてくれた。

ヴェンセントの顔から、感情が欠落していくように表情が失われていく。

彼に何があったのか知らないが、こんな場面に出くわしたって自分でできることなど何もない。彼にあるのはタークスで培った汚れ仕事のやり方くらいだ。

そんなものじゃ、何も役に立てない。

助けを求められても惨めツたらしくいるしかないのだから、少年に何をしてやれるわけでもない。

「そうか」

ヴェンセントは黙ってそのまま立ち去ろうとする。少年は黙ったまま、しかし視線だけを彼に向ける。  
そして、

「ッ!!」

唐突に、少年の手がヴェンセントの左手を掴んだ。そのまま強引に引き寄せられ、引き剥がそうにもそれ以上の力で手を離さまいとヴェンセントの手を抱き続けていた。

「どうした?」

ヴェンセントがそう訊ねるも、少年は答えない。

尋常ではないことだけは読みとれたが、情報不足で彼の前後に何があつたのかは全くわからない。震えたまま、口を一切動かさず、ヴィンセントの左手を静かに掴んでいる。

そして。

そして。

ヴィンセントを掴んでいた少年の身体が淡い光に包まれると、そのまま消え去っていった。予選二回戦の相手が決まったのだろう。二回戦のフィールドに転送されたようだ。

先ほどの様子ではまともに戦えそうにないだろうが、ヴィンセントは気付いていた。

（死に急がなければいいな）

ヴィンセントは冷めた表情のまま、掴まれていた手を振り払って二回戦の準備に取りかかった。

消えた少年のことなど、もはや気にしていなかった。

ただ、無事に生き残ることを祈るばかりだ。